別記様式第２号（その１の１）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

基　本　計　画　書

基　本　計　画

事　項	記　入　欄	備　考
計画の区分	学部の設置	
フリガナ 設置者	ｺｸﾘﾂﾀﾞｲｶﾞｸﾎｳｼﾞﾝ ｷｭｳｼｭｳﾀﾞｲｶﾞｸ 国立大学法人　九州大学	
フリガナ 大学の名称	ｷｭｳｼｭｳﾀﾞｲｶﾞｸ 九州大学　　(Kyushu University)	
大学本部の位置	福岡県福岡市東区箱崎６丁目１０番１号	
大学の目的	九州大学は、教育基本法（平成18年法律第120号）の精神に則り、学術の中心として広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を享受研究し、知的、道徳的及び応用的能力を展開させることを目的とする。	
新設学部等の目的	原理追求の学問を主眼とする既存の学部と異なり、課題追求の学問に重きを置き、様々な諸要素間のグローバルな関係の、予想を超えた変化の中から生み出される現実社会の課題に、学問領域を超えた様々な視点から取り組み、科学コミュニティの枠を超えた人々と協力して課題解決に立ち向かう能力をもった学生を養成することを目的とする。	

新設学部等の概要

新設学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	開設時期及び開設年次	所在地
	年	人	年次 人	人			
共創学部 (School of Interdisciplinary Science and Innovation) 共創学科 (Department of Interdisciplinary Science and Innovation)	4	105	―	420	学士 (学術)	平成30年4月 第1年次	福岡県福岡市西区 大字元岡744番地
計		105	―	420			

同一設置者内における変更状況（定員の移行，名称の変更等）

文学部
　人文学科　〔入学定員減〕　(△9)　(平成３０年４月)
教育学部　〔入学定員減〕　(△4)　(平成３０年４月)
法学部　〔入学定員減〕　(△11)　(平成３０年４月)
経済学部
　経済・経営学科　〔入学定員減〕　(△9)　(平成３０年４月)
　経済工学科　〔入学定員減〕　(△5)　(平成３０年４月)
理学部
　物理学科　〔入学定員減〕　(△4)　(平成３０年４月)
　化学科　〔入学定員減〕　(△5)　(平成３０年４月)
　地球惑星科学科　〔入学定員減〕　(△3)　(平成３０年４月)
　数学科　〔入学定員減〕　(△4)　(平成３０年４月)
　生物学科　〔入学定員減〕　(△3)　(平成３０年４月)
医学部
　保健学科　〔入学定員減〕　(△3)　(平成３０年４月)
薬学部
　創薬科学科　〔入学定員減〕　(△1)　(平成３０年４月)
工学部
　建築学科　〔入学定員減〕　(△2)　(平成３０年４月)
　電気情報工学科　〔入学定員減〕　(△5)　(平成３０年４月)
　物質科学工学科　〔入学定員減〕　(△5)　(平成３０年４月)
　地球環境工学科　〔入学定員減〕　(△5)　(平成３０年４月)
　エネルギー科学科　〔入学定員減〕　(△4)　(平成３０年４月)
　機械航空工学科　〔入学定員減〕　(△5)　(平成３０年４月)
芸術工学部
　環境設計学科　〔入学定員減〕　(△3)　(平成３０年４月)
　工業設計学科　〔入学定員減〕　(△3)　(平成３０年４月)
　画像設計学科　〔入学定員減〕　(△3)　(平成３０年４月)
　音響設計学科　〔入学定員減〕　(△3)　(平成３０年４月)
　芸術情報設計学科　〔入学定員減〕　(△3)　(平成３０年４月)
農学部
　生物資源環境学科　〔入学定員減〕　(△3)　(平成３０年４月)

教育課程	新設学部等の名称	開設する授業科目の総数				卒業要件単位数
		講義	演習	実験・実習	計	
	共創学部共創学科	264　科目	64　科目	12　科目	340　科目	124　単位

教員組織の設	学部等の名称		専任教員等						兼任教員等
			教授	准教授	講師	助教	計	助手	
	新設分	共創学部	18 人 (18)	19 人 (19)	5 人 (5)	4 人 (4)	46 人 (46)	0 人 (0)	175人 (175)
		計	18 人 (18)	19 人 (19)	5 人 (5)	4 人 (4)	46 人 (46)	0 人 0	175人 (175)
	既設	文学部　人文学科	26人 (26)	20人 (20)	3人 (3)	0人 (0)	49人 (47)	0人 (0)	93人 (93)
		教育学部	13 (13)	10 (10)	1 (1)	3 (3)	27 (27)	0人 (0)	64 (64)
		法学部	21 (21)	19 (19)	0 (0)	2 (2)	42 (42)	0人 (0)	19 (19)
		経済学部　経済・経営学科	12 (12)	8 (8)	2 (2)	1 (1)	23 (23)	0人 (0)	7 (7)
		経済工学科	9 (9)	8 (8)	1 (1)	3 (3)	21 (21)	0人 (0)	10 (10)
		理学部　物理学科	18 (18)	17 (17)	1 (1)	14 (14)	50 (50)	0人 (0)	1 (1)
		化学科	14 (14)	14 (14)	3 (3)	12 (12)	43 (43)	0人 (0)	5 (5)
		地球惑星科学科	13 (13)	18 (18)	0 (0)	6 (6)	37 (37)	0人 (0)	2 (2)
		数学科	31 (31)	27 (27)	0 (0)	12 (12)	70 (70)	1人 (1)	4 (4)
		生物学科	12 (12)	11 (11)	2 (2)	16 (16)	41 (41)	0人 (0)	3 (3)
		医学部　医学科	38 (38)	40 (40)	45 (45)	221 (221)	344 (344)	0人 (0)	187 (187)
		生命科学科	5 (5)	2 (2)	1 (1)	4 (4)	12 (12)	0人 (0)	6 (6)
		保健学科	15 (15)	11 (11)	11 (11)	16 (16)	53 (53)	0人 (0)	49 (49)
		歯学部　歯学科	19 (19)	13 (13)	14 (14)	51 (51)	97 (97)	2人 (2)	97 (97)
		薬学部　創薬科学科	6 (6)	2 (2)	1 (1)	6 (6)	22 (22)	0人 (0)	3 (3)
		臨床薬学科	10 (10)	10 (10)	1 (1)	10 (10)	31 (31)	0人 (0)	31 (31)
		工学部　建築学科	7 (7)	11 (11)	0 (0)	6 (6)	24 (24)	0人 (0)	12 (12)
		電気情報工学科	32 (32)	26 (26)	0 (0)	33 (33)	92 (92)	1人 (1)	26 (26)
		物質科学工学科	31 (31)	31 (31)	0 (0)	27 (27)	89 (89)	2人 (2)	19 (19)
		地球環境工学科	27 (27)	26 (26)	0 (0)	15 (15)	68 (68)	0人 (0)	20 (20)
		エネルギー科学科	20 (20)	20 (20)	0 (0)	17 (17)	57 (57)	0人 (0)	12 (12)
		機械航空工学科	41 (41)	23 (23)	0 (0)	25 (25)	89 (89)	1人 (1)	24 (24)
		芸術工学部　環境設計学科	7 (7)	9 (9)	1 (1)	4 (4)	21 (21)	0人 (0)	25 (25)

概要									
	分	工業設計学科	7 (7)	7 (7)	0 (0)	4 (4)	18 (18)	0人 (0)	16 (16)
		画像設計学科	5 (5)	8 (8)	0 (0)	4 (4)	17 (17)	0人 (0)	9 (9)
		音響設計学科	7 (7)	7 (7)	0 (0)	4 (4)	18 (18)	0人 (0)	20 (20)
		芸術情報設計学科	5 (5)	5 (5)	0 (0)	4 (4)	14 (14)	0人 (0)	23 (23)
		農学部　生物資源環境学科	53 (53)	63 (63)	2 (2)	46 (46)	164 (164)	0人 (0)	18 (18)
		計	504 (504)	466 (466)	89 (89)	566 (566)	1625 (1625)	7 (7)	－ －
	合　　計		522 (522)	485 (485)	94 (94)	570 (570)	1671 (1671)	7 (7)	－ －

教員以外の職員の概要	職　　種	専　任	兼　任	計	
	事　務　職　員	981人 (981)	0人 (0)	981人 (981)	九州大学全体
	技　術　職　員	1905人 (1905)	0人 (0)	1905人 (1905)	
	図　書　館　専　門　職　員	72人 (72)	0人 (0)	72人 (72)	
	そ　の　他　の　職　員	43人 (43)	0人 (0)	43人 (43)	
	計	3001人 (3001)	0人 (0)	3001人 (3001)	

校地等	区　　分	専　用	共　用	共用する他の学校等の専用	計	
	校　舎　敷　地	2,229,076㎡	0　㎡	0　㎡	2,229,076㎡	九州大学全体
	運　動　場　用　地	251,955㎡	0　㎡	0　㎡	251,955㎡	
	小　　計	2,481,031㎡	0　㎡	0　㎡	2,481,031㎡	
	そ　の　他	72,886,204㎡	0　㎡	0　㎡	72,886,204㎡	
	合　　計	75,367,204㎡	0　㎡	0　㎡	75,367,204㎡	

校　舎	専　用	共　用	共用する他の学校等の専用	計	
	614,216㎡ (610,020㎡)	0　㎡ (　0　㎡)	0　㎡ (　0　㎡)	614,216㎡ (610,020㎡)	九州大学全体

教室等	講義室	演習室	実験実習室	情報処理学習施設	語学学習施設	
	296室	164室	138室	10室 （補助職員44人）	1室 （補助職員1人）	九州大学全体

専任教員研究室	新設学部等の名称	室　数	
	共創学部	46　室	

図書・設備	新設学部等の名称	図書 〔うち外国書〕 冊	学術雑誌 〔うち外国書〕 種	電子ジャーナル 〔うち外国書〕	視聴覚資料 点	機械・器具 点	標本 点	学部単位での特定不能なため、大学全体の数
	共創学部	4,289,906〔1,846,396〕 (4,289,906〔1,846,396〕)	92,437〔38,572〕 (92,437〔38,572〕)	66,706〔64,735〕 (66,706〔64,735〕)	52,698 (52,698)	94 (　94　)	7,426,346 (7,426,346)	
	計	4,289,906〔1,846,396〕 (4,289,906〔1,846,396〕)	92,437〔38,572〕 (92,437〔38,572〕)	66,706〔64,735〕 (66,706〔64,735〕)	52,698 (　52,698　)	94 (　94　)	7,426,346 (7,426,346)	

図書館	面積	閲覧座席数	収　納　可　能　冊　数	九州大学全体
	46,365　㎡	2,945　席	5,510,500　冊	

体育館	面積	体育館以外のスポーツ施設の概要	九州大学全体
	10,580㎡	・野球場２面　・400ﾒｰﾄﾙﾄﾗｯｸ２面　・一般運動場	

経費の見積及び維持方法の概要	区分	開設前年度	第１年次	第２年次	第３年次	第４年次	第５年次	第６年次	国費による
経費の見積り	教員１人当り研究費等		—	—	—	—	—	—	
	共同研究費等		—	—	—	—	—	—	
	図書購入費		—	—	—	—	—	—	
	設備購入費		—	—	—	—	—	—	

学生１人当り納付金	第１年次	第２年次	第３年次	第４年次	第５年次	第６年次
	— 千円	— 千円	— 千円	— 千円	— 千円	— 千円

学生納付金以外の維持方法の概要

既設大学等の状況

大学の名称：九州大学

学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地
	年	人	年次人	人		倍		
【学部】								
文学部						1.05		福岡県福岡市東区
人文学科	4	160		640	学士（文学） 学士（学術）	1.05	平成12年度	箱崎6丁目19番1号
教育学部	4	50		200	学士（教育学） 学士（学術）	1.09	昭和24年度	福岡県福岡市東区 箱崎6丁目19番1号
法学部	4	200		800	学士（法学） 学士（学術）	1.02	昭和24年度	福岡県福岡市東区 箱崎6丁目19番1号
経済学部			３年次		学士（経済学）	0.99		福岡県福岡市東区
経済・経営学科	4	150	10	620	学士（学術）	0.98	平成12年度	箱崎6丁目19番1号
			３年次					
経済工学科	4	90	10	380		1.01	昭和52年度	
理学部					学士（理学）	1.05		福岡県福岡市西区
物理学科	4	59		236	学士（学術）	1.06	昭和24年度	大字元岡744番地
化学科	4	67		268		1.04	昭和24年度	
地球惑星科学科	4	48	３年次	192		1.03	平成2年度	
数科学科	4	54	5	226		1.04	昭和24年度	
生物学科	4	49		196		1.08	昭和24年度	
医学部						1.02		福岡県福岡市東区
医学科	6	111		666	学士（医学）	1.01	昭和24年度	馬出3丁目1番1号
生命科学科	4	12		48	学士（生命医科学）	1.06	平成19年度	
保健学科	4	137		548	学士（保健学） 学士（学術）	1.02	平成14年度	
歯学部						1.00		福岡県福岡市東区
歯学科	6	53		318	学士（歯学）	1.00	昭和42年度	馬出3丁目1番1号
薬学部						1.01		福岡県福岡市東区
創薬科学科	4	50		200	学士（創薬科学）	1.01	平成18年度	馬出3丁目1番1号
臨床薬学科	6	30		180	学士（薬学） 学士（学術）	1.01	平成18年度	
工学部					学士（工学）	1.06		福岡県福岡市西区
建築学科	4	60		240	学士（学術）	1.05	昭和29年度	大字元岡744番地
電気情報工学科	4	158		632		1.06	平成8年度	
物質科学工学科	4	168		672		1.07	平成9年度	
地球環境工学科	4	150		600		1.05	平成10年度	
エネルギー科学科	4	99		396		1.05	平成10年度	
機械航空工学科	4	169		676		1.08	平成11年度	
芸術工学部					学士（芸術工学）	1.05		福岡県福岡市南区
環境設計学科	4	38		152	学士（学術）	1.06	平成15年度	塩原4丁目9番1号
工業設計学科	4	48		192		1.06	平成15年度	
画像設計学科	4	38		152		1.05	平成15年度	
音響設計学科	4	38		152		1.05	平成15年度	
芸術情報設計学科	4	40		160		1.02	平成15年度	
農学部						1.06		福岡県福岡市東区
生物資源環境学科	4	229		916	学士（農学） 学士（学術）	1.06	平成10年度	箱崎6丁目10番1号
【大学院】								福岡県福岡市東区
人文科学府					修士（文学）			箱崎6丁目19番1号
人文基礎専攻					博士（文学）		平成12年度	

	修士課程	2	16		32		0.43			
	博士後期課程	3	7		21		0.71			
	歴史空間論専攻							平成12年度		
	修士課程	2	20		40		0.55			
	博士後期課程	3	9		27		0.62			
	言語・文学専攻							平成12年度		
	修士課程	2	20		40		1.00			
	博士後期課程	3	9		27		0.51			
	比較社会文化学府								福岡県福岡市西区	
	日本社会文化専攻							平成12年度	大字元岡744番地	平成26年から学生募集停止
	修士課程	2	－		－		－			
	博士後期課程	3	－		－		－			
	国際社会文化専攻							平成12年度		平成26年から学生募集停止
	修士課程	2	－		－		－			
	博士後期課程	3	－		－		－			
	地球社会統合科学府								福岡県福岡市西区	
	地球社会統合科学専攻					修士（学術）		平成26年度	大字元岡744番地	
	修士課程	2	60		120	修士（理学）	0.91			
	博士後期課程	3	35		105	博士（学術）	0.73			
						博士（理学）				
	人間環境学府					修士（人間環境学）			福岡県福岡市東区	
	都市共生デザイン専攻					修士（文学）		平成12年度	箱崎6丁目19番1号	
	修士課程	2	20		40	修士（教育学）	1.17			
	博士後期課程	3	5		15	修士（心理学）	0.60			
	人間共生システム専攻					修士（工学）		平成12年度		
	修士課程	2	11		22	博士（人間環境学）	0.90			
	博士後期課程	3	9		27	博士（文学）	0.96			
	行動システム専攻					博士（教育学）		平成12年度		
	修士課程	2	17		34	博士（心理学）	1.05			
	博士後期課程	3	10		30	博士（工学）	0.66			
	教育システム専攻							平成17年度		
	修士課程	2	19		38		0.89			
	博士後期課程	3	9		27		0.77			
	空間システム専攻							平成12年度		
	修士課程	2	28		56		1.46			
	博士後期課程	3	7		21		0.61			
	実践臨床心理学専攻							平成17年度		
	専門職学位課程	2	30		60		1.01			
	法学府					修士（法学）			福岡県福岡市東区	
	法政理論専攻					博士（法学）		平成22年度	箱崎6丁目19番1号	
	修士課程	2	72		134		0.60			
	博士後期課程	3	17		51		0.31			
	法務学府					法務博士（専門職）			福岡県福岡市東区	
	実務法学専攻							平成16年度	箱崎6丁目19番1号	
	専門職学位課程	3	45		125		0.81			
	経済学府					修士（経済学）			福岡県福岡市東区	
	経済工学専攻					博士（経済学）		平成12年度	箱崎6丁目19番1号	
	修士課程	2	20		40	経営修士（専門職）	1.07			
	博士後期課程	3	10		30		0.50			
	経済システム専攻							平成15年度		
	修士課程	2	27		54		0.97			
	博士後期課程	3	14		42		0.47			
	産業マネジメント専攻							平成15年度		
	専門職学位課程	2	45		90		1.06			
	理学府					修士（理学）			福岡県福岡市西区	
	物理学専攻					博士（理学）		平成20年度	大字元岡744番地	
	修士課程	2	41		82		1.02			
	博士後期課程	3	14		42		0.37			
	化学専攻							平成20年度		
	修士課程	2	62		124		1.03			

博士後期課程	3	19		57		0.57			
地球惑星科学専攻							平成12年度		
修士課程	2	41		82		1.09			
博士後期課程	3	14		42		0.51			
数理学府					修士（数理学）			福岡県福岡市西区	
数理学専攻					修士（技術数理学）		平成12年度	大字元岡744番地	
修士課程	2	54		108	博士（数理学）	1.02			
博士後期課程	3	20		60	博士（機能数理学）	0.75			
システム生命科学府					修士（システム生命科学）			福岡県福岡市西区	
システム生命科学専攻					修士（理学）		平成15年度	大字元岡744番地	
博士課程	5	54		270	修士（工学）	1.56			
					修士（情報科学）				
					博士（システム生命科学）				
					博士（理学）				
					博士（工学）				
					博士（情報科学）				
医学系学府					修士（医科学）			福岡県福岡市東区	
医学専攻					修士（看護学）		平成20年度	馬出3丁目1番1号	
博士課程	4	107		428	修士（保健学）	1.21			
医科学専攻					博士（医学）		平成15年度		
修士課程	2	20		40	博士（看護学）	0.97			
保健学専攻					博士（保健学）				
修士課程	2	27		54	医療経営・管理学修士（専門職）	1.27	平成19年度		
博士後期課程	3	10		30		1.00	平成21年度		
臓器機能医学専攻									平成18年より学生募集停止
博士課程	4	－		－		－			
医療経営・管理学専攻							平成13年度		
専門職学位課程	2	20		40		0.80			
歯学府					博士（歯学）			福岡県福岡市東区	
歯学専攻					博士（臨床歯学）		平成12年度	馬出3丁目1番1号	
博士課程	4	43		172	博士（学術）	0.75			
薬学府					修士（創薬科学）			福岡県福岡市東区	
創薬科学専攻					博士（創薬科学）			馬出3丁目1番1号	
修士課程	2	55		110	博士（臨床薬学）	0.88	平成22年度		
博士後期課程	3	12		36		1.63	平成24年度		
臨床薬学専攻									
博士課程	4	5		20		1.65	平成24年度		
工学府					修士（工学）			福岡県福岡市西区	
物質創造工学専攻					博士（工学）		平成12年度	大字元岡744番地	
修士課程	2	38		76		1.32			
博士後期課程	3	10		30		2.06			
物質プロセス工学専攻							平成12年度		
修士課程	2	30		60		1.18			
博士後期課程	3	9		27		0.66			
材料物性工学専攻							平成12年度		
修士課程	2	33		66		0.92			
博士後期課程	3	7		21		1.23			
化学システム工学専攻							平成12年度		
修士課程	2	35		70		1.18			
博士後期課程	3	10		30		1.00			
建設システム工学専攻							平成12年度		
修士課程	2	24		48		1.22			
博士後期課程	3	8		24		1.12			
都市環境システム工学専攻							平成12年度		
修士課程	2	28		56		1.32			
博士後期課程	3	8		24		1.12			
海洋システム工学専攻							平成12年度		
修士課程	2	21		42		1.42			
博士後期課程	3	8		24		0.45			
地球資源システム工学専攻							平成12年度		

	修士課程	2	20		40		1.75			
	博士後期課程	3	8		24		1.37			
	共同資源工学専攻							平成29年度		
	修士課程	2	10		20		1.10			
	エネルギー量子工学専攻							平成12年度		
	修士課程	2	28		56		1.08			
	博士後期課程	3	12		36		0.72			
	機械工学専攻							平成22年度		
	修士課程	2	62		124		1.31			
	博士後期課程	3	19		57		0.53			
	水素エネルギーシステム専攻							平成22年度		
	修士課程	2	30		60		1.29			
	博士後期課程	3	9		27		1.33			
	航空宇宙工学専攻							平成12年度		
	修士課程	2	30		60		1.29			
	博士後期課程	3	12		24		0.60			
	知能機械システム専攻									平成22年より学生募集停止
	博士後期課程	3	－		－		－			
	芸術工学府					修士（芸術工学）			福岡県福岡市南区	
	芸術工学専攻					修士（デザインストラテジー）		平成15年度	塩原4丁目9番1号	
	修士課程	2	92		184	博士（芸術工学）	1.07			
	博士後期課程	3	25		75	博士（工学）	0.62			
	デザインストラテジー専攻									
	修士課程	2	28		56		1.33	平成18年度		
	博士後期課程	3	5		15		1.33	平成20年度		
	システム情報科学府					修士（情報科学）			福岡県福岡市西区	
	情報学専攻					修士（理学）		平成21年度	大字元岡744番地	
	修士課程	2	40		80	修士（工学）	0.97			
	博士後期課程	3	14		42	修士（学術）	0.30			
	情報知能工学専攻					博士（情報科学）		平成21年度		
	修士課程	2	45		90	博士（理学）	1.10			
	博士後期課程	3	15		45	博士（工学）	0.68			
	電気電子工学専攻					博士（学術）		平成21年度		
	修士課程	2	55		110		1.44			
	博士後期課程	3	16		48		0.78			
	総合理工学府					修士（理学）			福岡県春日市春日	
	量子プロセス理工学専攻					修士（工学）		平成12年度	公園6丁目1番地	
	修士課程	2	37		74	修士（学術）	1.62			
	博士後期課程	3	14		42	博士（理学）	1.09			
	物質理工学専攻					博士（工学）		平成12年度		
	修士課程	2	37		74	博士（学術）	1.50			
	博士後期課程	3	14		42		0.54			
	先端エネルギー理工学専攻							平成12年度		
	修士課程	2	34		68		1.07			
	博士後期課程	3	12		36		0.38			
	環境エネルギー工学専攻							平成12年度		
	修士課程	2	26		52		1.34			
	博士後期課程	3	9		27		0.55			
	大気海洋環境システム学専攻							平成12年度		
	修士課程	2	30		60		1.31			
	博士後期課程	3	11		33		0.33			
	生物資源環境科学府					修士（農学）			福岡県福岡市東区	
	資源生物科学専攻					博士（農学）		平成22年度	箱崎6丁目10番1号	
	修士課程	2	50		100		0.96			
	博士後期課程	3	19		57		0.57			
	環境農学専攻							平成22年度		
	修士課程	2	75		150		0.64			
	博士後期課程	3	27		81		0.53			
	農業資源経済学専攻							平成22年度		
	修士課程	2	13		26		0.99			

	博士後期課程	3	5		15		0.46			
	生命機能科学専攻							平成22年度		
	修士課程	2	106		212		0.86			
	博士後期課程	3	12		36		0.74			
	生物産業創成専攻							平成22年度		
	博士後期課程	3	14		42		0.61			
	統合新領域学府					修士（感性学）			福岡県福岡市東区	
	ユーザー感性学専攻					修士（芸術工学）			箱崎6丁目10番1号	
	修士課程	2	30		60	修士（工学）	0.99	平成21年度		
	博士後期課程	3	4		12	修士（オートモーティブサイエンス）	0.66	平成23年度		
	オートモーティブサイエンス専攻					修士（ライブラリーサイエンス）		平成21年度	福岡県福岡市西区	
	修士課程	2	21		42	修士（学術）	0.85		大字元岡744番地	
	博士後期課程	3	7		21	博士（感性学）	0.80			
	ライブラリーサイエンス専攻					博士（芸術工学）			福岡県福岡市東区	
	修士課程	2	10		20	博士（工学）	0.45	平成23年度	箱崎6丁目10番1号	
	博士後期課程	3	3		9	博士（オートモーティブサイエンス）	0.99	平成25年度		
						博士（ライブラリーサイエンス）				
						博士（学術）				

	名称	目的	所在地	設置年月	規模等（延面積）	
附属施設の概要	－	－	－	－	－	

別記様式第２号（その２の１）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

教　育　課　程　等　の　概　要

（共創学部共創学科）

科目区分			授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考
					必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手	
基幹教育科目	基幹教育セミナー		基幹教育セミナー	１前②	1				○		4	3	2	1		兼42
			小計（1科目）	－	1	0	0	－			4	3	2	1	0	兼42
	課題協学科目		課題協学	１後③～④	2.5				○			1				兼17
			小計（1科目）	－	2.5	0	0	－			0	1	0	0	0	兼17
	言語文化科目	言語文化基礎科目	第１外国語（英語インテンシブコース）	英語	Intensive English: Global Issues RW 1	１前①	1		○							兼4
					Intensive English: Global Issues RW 2	１前②	1		○							兼4
					Intensive English: Global Issues LS 1	１前①	1		○		1					兼3
					Intensive English: Global Issues LS 2	１前②	1		○		1					兼3
					Intensive English: Japanese Issues 1	１後③	1		○		1					兼5
					Intensive English: Japanese Issues 2	１後④	1		○		1					兼5
					Intensive English: Academic Issues 1	１前①	1		○		1	1				兼2
					Intensive English: Academic Issues 2	１前②	1		○		1	1				兼2
					Intensive English: Academic Issues 3	１後③	1		○		1	1				兼2
					Intensive English: Academic Issues 4	１後④	1		○		1	1				兼2
					学術英語ゼミ・リーディング・リスニング	２前①～②		2	○							兼1
					学術英語ゼミ・ライティング・スピーキング	２前①～②		2	○							兼2
					学術英語ゼミ・オーラル・コミュニケーション	２前①～②		2	○		1					兼1
				日本語	Integrated Courses：Beginners A	1・2前①・後③		1	○							兼1
					Integrated Courses：Beginners B	1・2前②・後④		1	○							兼1
					Integrated Courses：Elementary 1A	1・2前①・後③		1	○							兼1
					Integrated Courses：Elementary 1B	1・2前②・後④		1	○							兼1
					Integrated Courses：Elementary 2A	1・2前①・後③		1	○							兼1
					Integrated Courses：Elementary 2B	1・2前②・後④		1	○							兼1
					Integrated Courses：Pre-Intermediate A	1・2前①・後③		1	○							兼1
					Integrated Courses：Pre-Intermediate B	1・2前②・後④		1	○							兼1
					Integrated Courses：Intermediate 1A	1・2前①・後③		1	○							兼1

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手	
	Integrated Courses : Intermediate 1B	1・2前②・後④		1		○								兼1
	Integrated Courses : Intermediate 2A	1・2前①・後③		1		○								兼1
	Integrated Courses : Intermediate 2B	1・2前②・後④		1		○								兼1
	Integrated Courses : Pre-Advanced A	1・2前①・後③		1		○								兼1
	Integrated Courses : Pre-Advanced B	1・2前②・後④		1		○								兼1
	Integrated Courses : Advanced A	1・2前①・後③		1		○								兼1
	Integrated Courses : Advanced B	1・2前②・後④		1		○								兼1
	Kanji Courses : Elementary 1A	1・2前①・後③		1		○								兼1
	Kanji Courses : Elementary 1B	1・2前②・後④		1		○								兼1
	Kanji Courses : Elementary 2A	1・2前①・後③		1		○			1					
	Kanji Courses : Elementary 2B	1・2前②・後④		1		○			1					
	Kanji Courses : Pre-Intermediate A	1・2前①・後③		1		○				1				
	Kanji Courses : Pre-Intermediate B	1・2前②・後④		1		○				1				
	Kanji Courses : Intermediate 1A	1・2前①・後③		1		○				1				
	Kanji Courses : Intermediate 1B	1・2前②・後④		1		○				1				
	Kanji Courses : Intermediate 2A	1・2前①・後③		1		○				1				
	Kanji Courses : Intermediate 2B	1・2前②・後④		1		○				1				
	Kanji Courses : Pre-Advanced A	1・2前①・後③		1		○				1				
	Kanji Courses : Pre-Advanced B	1・2前②・後④		1		○				1				
	Kanji Courses : Advanced A	1・2前①・後③		1		○				1				
	Kanji Courses : Advanced B	1・2前②・後④		1		○				1				
	Speaking Courses : Elementary 2A	1・2前①・後③		1		○								兼1
	Speaking Courses : Elementary 2B	1・2前②・後④		1		○								兼1
	Speaking Courses : Pre-Intermediate A	1・2前①・後③		1		○								兼1
	Speaking Courses : Pre-Intermediate B	1・2前②・後④		1		○								兼1
	Speaking Courses : Intermediate 1A	1・2前①・後③		1		○								兼1
	Speaking Courses : Intermediate 1B	1・2前②・後④		1		○								兼1
	Speaking Courses : Intermediate 2A	1・2前①・後③		1		○								兼1
	Speaking Courses : Intermediate 2B	1・2前②・後④		1		○								兼1

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手	
	Speaking Courses：Pre-Advanced A	1・2前①・後③		1		○								兼1
	Speaking Courses：Pre-Advanced B	1・2前②・後④		1		○								兼1
	Speaking Courses：Advanced A	1・2前①・後③		1		○								兼1
	Speaking Courses：Advanced B	1・2前②・後④		1		○								兼1
	Writing Courses：Intermediate 1A	1・2前①・後③		1		○			1					
	Writing Courses：Intermediate 1B	1・2前②・後④		1		○			1					
	Writing Courses：Intermediate 2A	1・2前①・後③		1		○			1					
	Writing Courses：Intermediate 2B	1・2前②・後④		1		○			1					
	Writing Courses：Pre-Advanced A	1・2前①・後③		1		○			1					
	Writing Courses：Pre-Advanced B	1・2前②・後④		1		○			1					
	Writing Courses：Advanced A	1・2前①・後③		1		○			1					
	Writing Courses：Advanced B	1・2前②・後④		1		○			1					
第2外国語	ドイツ語Ⅰ	1前①～②		2		○								兼1
	ドイツ語Ⅱ	1後③～④		2		○								兼1
	フランス語Ⅰ	1前①～②		2		○								兼2
	フランス語Ⅱ	1後③～④		2		○								兼2
	中国語Ⅰ	1前①～②		2		○								兼2
	中国語Ⅱ	1後③～④		2		○								兼2
	ロシア語Ⅰ	1前①～②		2		○								兼1
	ロシア語Ⅱ	1後③～④		2		○								兼1
	韓国語Ⅰ	1前①～②		2		○								兼2
	韓国語Ⅱ	1後③～④		2		○								兼2
	スペイン語Ⅰ	1前①～②		2		○								兼1
	スペイン語Ⅱ	1後③～④		2		○								兼1
	小計（50科目）	－	10	80	0	－			3	2	0	0	0	兼20
文系ディシプリン科目	哲学・思想入門	1前①～②		2		○								兼1
	先史学入門	1前①～②・後③～④		2		○			1					
	歴史学入門	1前①～②		2		○								兼1
	文学・言語学入門	1前①～②		2		○								兼1
	芸術学入門	1前①～②・後③～④		2		○								兼1
	地理学入門	1後③～④		2		○			1					
	社会学入門	1前①～②・後③～④		2		○								兼1
	心理学入門	1前①～②・後③～④		2		○								兼1
	現代教育学入門	1前①		1		○								兼1
	教育基礎学入門	1前②		1		○								兼1
	法学入門	1前①～②		2		○								兼1
	政治学入門	1前①～②		2		○				1				

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手	
	経済学入門	1前①～②・後③～④		2		○								兼1
	経済史入門	1前①～②・後③～④		2		○								兼1
	The Law and Politics of International Society	1後③～④		2		○								兼1
	小計（15科目）	－	0	28	0	－			2	1	0	0	0	兼11
理系ディシプリン科目	デザイン思考	1前①～②・後③～④	1			○								兼1
	情報科学	1後③～④	1.5			○			1					兼1
	プログラミング演習	1後③～④	1				○							兼2
	社会と数理科学	1前②・後③		1		○								兼1
	微分積分学	1後③～④		1.5		○								兼1
	微分積分学・同演習A	1前①～②		1.5			○							兼1
	微分積分学・同演習B	1後③～④		1.5			○							兼1
	微分積分学・同演習Ⅰ	1前①～②		1.5			○							兼1
	微分積分学・同演習Ⅱ	1後③～④		1.5			○							兼2
	線形代数	1前①～②		1.5		○								兼1
	線形代数学・同演習A	1前①～②		1.5			○							兼1
	線形代数学・同演習B	1後③～④		1.5			○							兼1
	数学演習ＩA	1前①～②		1			○							兼1
	数学演習ＩB	1後③～④		1			○							兼1
	数学演習Ⅱ	2前①～②		1			○							兼1
	数理統計学	1前①～②		1.5		○								兼1
	身の回りの物理学A	1前①・後④		1		○								兼1
	身の回りの物理学B	1前②・後④		1		○								兼1
	物理学概論A	1前①～②		1.5		○								兼1
	物理学概論B	1後③～④		1.5		○			1					
	物理学概論A演習	1前①～②		1			○							兼1
	物理学概論B演習	1後③～④		1			○							兼1
	基幹物理学ＩA	1前①～②		1.5		○								兼1
	基幹物理学ＩB	1後③～④		1.5		○								兼1
	基幹物理学ＩA演習	1前①～②		1			○							兼1
	基幹物理学ＩB演習	1後③～④		1			○							兼1
	物理学の進展	2前①～②		1.5		○								兼1
	基幹物理学Ⅱ	2前①～②		1.5		○								兼1
	電気電子工学入門	2前①～②		2		○								兼1
	原子核物理学	2後③～④		2		○								兼1
	身の回りの化学	1前①～②		1		○								兼1
	基礎化学	1前①～②		1.5		○								兼1
	無機物質化学	1後③～④		1.5		○								兼1
	有機物質化学	1後③～④		1.5		○								兼1
	基礎化学結合論	1後③～④		1.5		○								兼1
	基礎化学熱力学	1後③～④		1.5		○								兼1
	現代化学	2前①～②		1.5		○								兼1
	基礎生化学	2前①～②		1.5		○								兼1
	機器分析学	2後④		2		○								兼1

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手	
	生命の科学A	1後④		1		○								兼1
	生命の科学B	1前②		1		○								兼1
	基礎生物学概要	1前①～②		1.5		○								兼1
	細胞生物学	1前①～②		1.5		○								兼1
	集団生物学	1前①～②		1.5		○								兼1
	分子生物学	2前①～②		1.5		○								兼1
	生態系の科学	2前①～②		1.5		○								兼1
	地球と宇宙の科学	1前①～②・後③～④		1		○								兼1
	地球科学	1後③		1		○								兼1
	最先端地球科学	2前①～②		1		○								兼1
	宇宙科学概論	2前①～②		1.5		○								兼1
	図形科学	1前①～②		1.5		○								兼1
	空間表現実習Ⅰ	1前①～②		2			○							兼1
	世界建築史	2前①		2		○								兼1
	日本建築史	2前②		2		○								兼1
	建築デザイン	2後③～④		2		○								兼1
	コンピュータープログラミング入門	2後③		1		○								兼1
	自然科学総合実験（基礎）	1前①～②		1				○						兼1
	自然科学総合実験（発展）	1前①～②		1				○						兼1
	小計（58科目）	－	3.5	76.5	0	－			2	0	0	0	0	兼48
サイバーセキュリティ科目	サイバーセキュリティ基礎論	1前①・②	1			○								兼1
	小計（1科目）	－	1	0	0	－			0	0	0	0	0	兼1
健康・スポーツ科目	健康・スポーツ科学演習	1前①～②	1				○							兼2
	小計（1科目）	－	1	0	0	－			0	0	0	0	0	兼2

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手	
総合科目	アカデミック・フロンティアⅠ	1前①		1		○								兼1
	アカデミック・フロンティアⅡ	1前②		1		○								兼1
	女性学・男性学Ⅰ	1前①		1		○								兼1
	女性学・男性学Ⅱ	1前②		1		○								兼1
	日本事情	1前①～②		2		○								兼1
	社会連携活動論：ボランティア	1前①		1		○								兼1
	社会連携活動論：インターンシップ	1前②		1		○								兼1
	Law in Everyday Life B	1後④		1		○								兼1
	バリアフリー支援入門	1前①～②		1		○								兼1
	ユニバーサルデザイン研究	1前①～②		1		○								兼1
	アクセシビリティ入門	1後③～④		1		○								兼1
	人と人をつなぐ技法	1後③～④		1		○								兼1
	コミュニケーション入門	1前①		1		○								兼1
	体験してわかる自然科学	1後③・④		1		○								兼1
	健康疫学・内科学から見たキャンパスライフ	1後③		1		○								兼1
	心理学・精神医学から見たキャンパスライフ	1後③		1		○								兼1
	アジア埋蔵文化財学A	1前①		1		○				1				
	アジア埋蔵文化財学B	1前②		1		○				1				
	韓国・朝鮮研究の最前線Ⅰ	1後③		1		○			1					
	韓国・朝鮮研究の最前線Ⅱ	1後④		1		○			1					
	グローバル社会を生きるⅠ	1後④		1		○								兼1
	グローバル社会を生きるⅡ	1後④		1		○								兼1
	社会参加のための日本語教育Ⅰ	1前①		1		○								兼1
	社会参加のための日本語教育Ⅱ	1後③		1		○								兼1
	フィールドに学ぶA	1後③		1				○		1				
	現代企業分析	1後③・④		1		○								兼1
	現代経済事情	1後③・④		1		○								兼1
	ことばの科学	1前①		1		○								兼1
	水の科学	1後③		2		○								兼1
	数理医学	1後③		1		○								兼1
	医療倫理学Ⅰ	1後③		1		○								兼1
	医療倫理学Ⅱ	1後④		1		○								兼1
	科学の進歩と女性科学者Ⅰ	1後③		1		○								兼1
	科学の進歩と女性科学者Ⅱ	1後④		1		○								兼1
	糸島の水と土と緑Ⅰ	1前①		1		○								兼1
	糸島の水と土と緑Ⅱ	1前②		1		○								兼1
	命のあり方・尊さと食の連関	1前①～②		2		○								兼1
	食肉加工の理論と実践　-食への理解を深める-	1後③～④		2		○								兼1
	先進的植物生産システム概論Ⅰ	1後③		1		○								兼1
	先進的植物生産システム概論Ⅱ	1後④		1		○								兼1
	体験的農業生産学入門	1後③～④		1				○						兼1
	農のための植物-環境系輸送現象論	1後③		1		○								兼1
	サイバーセキュリティ演習	1前②・後③・④		1			○							兼1

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手	
	セキュリティエンジニアリング演習（サーバー構築編）	1前②		1			○							兼1
	セキュリティエンジニアリング演習（ハードウェア設計編）	1後③		1			○							兼1
	セキュリティエンジニアリング演習（IoTセキュリティ編）	1後④		1			○							兼1
	分子の科学	1後③～④		2		○								兼1
	Contemporary American Society:A Sociological Introduction	1後④		1		○								兼1
	アイデア・ラボⅠ	1前①		2		○								兼1
	アントレプレナーシップ入門	1前①・後③		2		○								兼1
	小計（50科目）	－	0	57	0	－			1	1	0	0	0	兼29
高年次基幹教育科目	共創発想法	2後③		2			○		1					
	機械学習と人工知能	2後③		1		○				1				
	データマイニングと情報可視化	2後④		1			○			1				
	動的現象の科学	3前①		2		○				1				
	誘導現象の科学	3前②		2		○			1					
	科学の歴史A	2前①		1		○				1				
	科学の歴史B	2前②		1		○				1				
	科学の基礎（哲学的考察）	2後③		1		○				1				
	脳情報科学入門	3前①		1		○								兼1
	認知心理学	2後④		1		○								兼1
	Brain and Mind	2後③		2		○			1					
	現代社会Ⅰ	2前①～②		2		○								兼1
	現代社会Ⅱ	2後③～④		2		○				1				
	現代社会Ⅲ	2前①～②		2		○								兼1
	現代史Ⅰ	2前①～②		2		○			1					
	現代史Ⅱ	2後③～④		2		○								兼1
	現代史Ⅲ	2前①～②		2		○								兼1
	EU論基礎―制度と経済―	2前①～②		2		○								兼1
	金融と経済	2後③～④		2		○								兼1
	サイバー空間デザイン	2前①～②		2		○								兼1
	芸術学概論	3前①～②		1		○								兼1
	音楽・音響論	2後③～④		2		○								兼1
	デザインと観察	2前①～②		2		○								兼1
	環境問題と自然科学	2後③～④		2		○								兼1
	環境調和型社会の構築	2前①～②		2		○								兼1
	グリーンケミストリー	2後③～④		2		○								兼1
	自然災害と防災	2後③～④		2		○								兼1
	生態系の構造と機能Ⅰ	2後③		1		○								兼1
	生態系の構造と機能Ⅱ	2後④		1		○								兼1
	男女共同参画	2後③～④		2		○								兼1
	ボランティア活動Ⅰ	2通		1				○						兼1 集中
	ボランティア活動Ⅱ	2通		1				○						兼1 集中
	インターンシップⅠ	2通		1				○						兼1 集中
	インターンシップⅡ	2通		1				○						兼1 集中
	漢方医薬学	3前①～②		1		○								兼1

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手	
	チーム医療演習	３後③～④		1			○							兼1
	バイオインフォマティックス	３後③～④		2		○								兼1
	臨床イメージング	２前①		1		○								兼1
	社会と健康	３前①～②		2		○								兼1
	アクセシビリティマネジメント研究	２前①～②		2		○								兼1
	地球の進化と環境	２後③～④		2		○				1				
	生物多様性と人間文化	２前①・②		1		○			1					兼1
	遺伝子組換え生物の利用と制御	２後③～④		2		○								兼1
	バイオテクノロジー詳論	２後③～④		2		○								兼1
	平和と安全の構築学	２前①		1		○								兼1
	文化と社会の理論	２前①～②		2		○								兼1
	東アジアと日本ーその歴史と現在ー	２前①～②		2		○								兼1
	法文化学入門	２前①～②		2		○								兼1
	プレゼンテーション基礎	２前②		1			○							兼1
	レトリック基礎	２前①		1			○							兼1
	技術と倫理	２後③		1		○								兼1
	医療における倫理	２前①～②		2		○								兼1
	研究と倫理	３前①		1		○								兼1
	社会と倫理	２後④		1		○					1			
	インフォームドコンセント	３前①～②		1		○								兼1
	薬害	３後③～④		1		○								兼1
	臨床倫理	３後③～④		1		○								兼1
	研究企画・産学官連携特論Ⅰ	２前①		1		○								兼1
	研究企画・産学官連携特論Ⅱ	２前②		1		○								兼1
	リスクマネジメント	２後③～④		2		○								兼1
	ビジネス統計学	２前②		1			○							兼1
	社会統計学A	３後③		1			○							兼1
	社会統計学B	３後④		1			○							兼1
	社会調査法ⅠA	２前①		1			○							兼1
	社会調査法ⅠB	２前②		1			○							兼1
	社会調査法ⅡA	２後③		1			○							兼1
	社会調査法ⅡB	２後④		1			○							兼1
	日本国憲法	３前①～②・後③～④		2		○								兼3
	小計（68科目）	－	0	100	0	－			5	6	1	0	0	兼44

科目区分			授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考
					必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手	
専攻教育科目	共通基礎科目		共創デザイン思考発想法	2前①・②	1				○		1					
			フィールド調査法	2前①・②	1			○			1	3	3			オムニバス方式・共同（一部）
			科学論	2前①・②	1			○				1				
			データサイエンス基礎	2前①・②	1				○		1					
			複雑系科学入門	2前①～②	2			○				1				
			グローバル・ヒストリー	1後③・④	1			○								兼1
			グローバル・エシクス	1後③・④	1			○			1		1			
			小計（7科目）	－	8	0	0	－			4	5	4	0	0	0	
	構想科目	エリア横断科目	デザイン思考プログラミング演習	2後③・3前①		1			○							兼1
			デザイン思考プロセス演習	2後③・3前①		1			○							兼2
			ビッグデータ処理	2後④・3前②		1			○		1					
			実データ解析技法	2後③・3前①		1			○							兼1
			物理学の歴史と哲学	2後④・3前②		1		○				1				
			地学と生物学の歴史と哲学	2後③・3前①		1		○				1				
			科学技術社会論	2後④・3前②		1		○								兼1
			複雑系科学論	2後③～④		2		○				1				
			Thermo-Dynamical Properties	2後③		2		○				1				
			量子現象科学論	2後④		2		○			1					
			Python Programing for Analysis	2後③～④		2		○				1				
			小計（11科目）	－	0	15	0	－			2	4	0	0	0	兼4	
		エリア基礎科目 人間・生命エリア	遺伝学と進化	2前①・後③		1		○				1				
			Molecular & Cell Biology	2前②・後④		1		○			1	1				オムニバス方式
			Brain & Information	2前①・②		1		○			2					オムニバス方式
			人と社会エリア 社会哲学論	2前②・後④		1		○			1		1			
			言語コミュニケーション論	2前①・②		1		○			1	1		1		共同
			社会共生論	2前②・後④		1		○			2	2	1			オムニバス方式・共同（一部）
			国家と地域エリア 地域研究基礎論	2前①・後③		1		○				2				共同
			政治・経済基礎論	2前②・後④		1		○				1	1			オムニバス方式
			歴史基礎論	2前①・後③		1		○			1	2				オムニバス方式・共同（一部）
			地球・環境エリア 地球の理解	2後③・④		1		○			2	2	1			オムニバス方式・共同（一部）
			自然環境と社会	2前①・後③		1		○			2		1			オムニバス方式・共同（一部）
			自然災害・資源	2前①・後④		1		○			1					
			地球環境実習	2前②・後③		1			○		5	2	2			オムニバス方式・共同（一部）
			レクチャーシリーズ	2・3通	2			○			1					
			小計（14科目）	－	2	13	0	－			13	12	5	1	0	0	

科目区分			授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
					必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
	協働科目		共創基礎プロジェクト 1	2前①	2				○		18	19	5	4	0		
			共創基礎プロジェクト 2	2前②	2				○		18	19	5	4	0		
			共創プロジェクト 1	3前①	2				○		18	19	5	4	0		
			共創プロジェクト 2	3後③	2				○		18	19	5	4	0		
			小計（4科目）	－	8	0	0	－			18	19	5	4	0	0	
	経験科目		異文化対応 1	1前②	1			○				1					集中
			異文化対応 2	1・2・3・4通	1				○		1						集中
			海外活動A 1	1・2・3・4通		1				○	1						集中
			海外活動A 2	1・2・3・4通		1				○	1						集中
			海外活動B 1	1・2・3・4通		2				○	1						集中
			海外活動B 2	1・2・3・4通		2				○	1						集中
			小計（6科目）	－	2	6	0	－			1	1	0	0	0	0	
	共創科目	エリア発展科目	人間・生命エリア	進化生物学	3前①		1		○							兼1	
				発生生物学	3前②		1		○			1					
				Physiology and Behavior	3後③		1		○			1					
				Stress and Nutrition	3前①		1		○			1					
				Biochemistry	3前②		1		○		1						
				Advanced Molecular Biology	3後③		1		○		1						
				病態生理	3前①		1		○							兼1	
				健康の科学	3前②		1		○							兼1	
				Cognitive science	3後③		1		○		1						
				Bioethics	3前①		1		○		1						
				生命情報科学	3前②		1		○		1						
				システム神経科学	3後③		1		○							兼1	
			人と社会エリア	多文化共生の世界秩序	3前①		1		○		1					兼1	
				教育倫理学	3前②		1			○			1				
				人間社会研究法	3後③		1		○							兼2	※演習
				言語とコミュニケーションA	3前①		1		○							兼1	
				言語とコミュニケーションB	3前②		1		○			1					
				議論と創造のコミュニケーションA	3前①		1			○	1			1			共同
				議論と創造のコミュニケーションB	3前②		1			○	1			1			共同
				異文化とコミュニケーション	3後③		1			○						兼1	※講義
				メディアとコミュニケーション	3前①		1		○		1					兼1	
				先史社会を知るA	3前②		1		○		1						

科目区分				授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
						必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
				先史社会を知るB	3後③		1		○					1				
				国際福祉論	3後③		1		○			1						※演習
				生き方の人類学	3前①		1		○				1					
				国際政治学	3前①②		2		○				1					
			国家と地域エリア	比較地域研究	3後③		1			○			2					
				東アジア地域研究	3前①		1			○		1					兼1	
				地域生態論	3前②		1			○		1					兼1	共同
				開発経済学	3後③		1			○				1			兼1	共同
				国際関係論	3前①		1			○			1				兼1	
				国家と政治	3前②		1			○		1	1				兼2	共同
				日本経済史	3後③		1		○								兼1	
				埋蔵文化財から見える世界	3前①		1			○			1					
				地域史	3前②		1		○				1				兼1	
				比較史	3後③		1			○							兼2	
			地球・環境エリア	地球物質科学	3前①		1		○			1		1				オムニバス方式・共同（一部）
				大気海洋科学	3前②		1		○								兼1	
				地球の変動	3後③		1		○			1	1					オムニバス方式
				社会の中の地球科学	3前①		1		○				1		1			オムニバス方式
				地盤学と災害	3前②		2		○			1						
				生物多様性科学	3前①		1			○		1			1			共同
				保全遺伝学	3前②		1		○								兼1	
				環境保全・再生	3後③		1		○								兼1	※演習
				流域環境学	3前①		1		○								兼1	
				環境地理学	3前②		1			○		1		1				オムニバス方式
				環境都市政策	3後③		1			○							兼1	※講義
				東アジアの経済地理学	3前①		1		○								兼1	
				環境ガバナンス	3前②		1		○				1				兼１	オムニバス方式
				小計（50科目）	－	0	52	0	－			14	12	5	3	0	兼24	

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手	
ディグリープロジェクト科目	ディグリープロジェクト１	３後④	2				○		18	19	5	4		
	ディグリープロジェクト２	４通	5				○		18	19	5	4		
	ディグリープロジェクト３	４後④	2				○		18	19	5	4		
	小計（3科目）	－	9	0					18	19	5	4	0	0
合計（340科目）		－	48.0	427.5	0.0	－			18	19	5	4	0	兼175

学位又は称号	学士（学術）	学位又は学科の分野	文学関係、理学関係、社会学・社会福祉学関係、法学関係

卒業要件及び履修方法	授業期間等	
１．基幹教育科目　48単位 (a)基幹教育セミナー　１単位必修 ＜必修科目＞基幹教育セミナー (b)課題協学科目　２.5単位必修 ＜必修科目＞課題協学 (c)言語文化科目　16単位修得 ＜必修科目＞英語又は日本語　12単位 (d)文系ディシプリン科目　８単位修得 (e)理系ディシプリン科目　８単位修得 (f)サイバーセキュリティ科目　１単位必修 ＜必修科目＞サイバーセキュリティ基礎論 (g)健康・スポーツ科目　１単位必修 ＜必修科目＞健康・スポーツ科学演習 (h)高年次基幹教育科目　５単位修得 (i)その他　５.5単位修得 基幹教育科目として開講される言語文化科目、文系ディシプリン科目、理系ディシプリン科目、総合科目、高年次基幹教育科目の中から選択 ２．専攻教育科目　76単位 (a)共通基礎科目　８単位必修 ＜必修科目＞共創デザイン思考発想法、フィールド調査法、科学論、データサイエンス基礎、複雑系科学入門、グローバル・ヒストリー、グローバル・エシクス (b)構想科目　18単位修得 ＜必修科目＞レクチャーシリーズ エリア基礎科目の４つのエリア（人間・生命、人と社会、国家と地域、地球・環境）より最低各１科目選択 (c)協働科目　８単位必修 ＜必修科目＞共創基礎プロジェクト１、共創基礎プロジェクト２、共創プロジェクト１、共創プロジェクト２ (d)経験科目　２単位必修 ＜必修科目＞異文化対応１、異文化対応２ (e)共創科目　29単位修得 ＜必修科目＞ディグリープロジェクト１、ディグリープロジェクト２、ディグリープロジェクト３ (f)その他　11単位修得 以下の科目区分から選択 基幹教育科目（総合科目、高年次基幹教育科目、言語文化科目[日本語のみ。留学生に限る]） 専攻教育科目（構想科目［エリア横断科目、エリア基礎科目］、共創科目［エリア発展科目］） 本学部が指定した科目以外(他学部開講科目を含む)を履修した場合は、本区分に算入 (g)４つのエリアのうち、２年次終了時に少なくとも一つのエリアを選択し（基盤エリア）、選択したエリアの「エリア基礎科目」については、その全ての科目を必修とする。 卒業単位　１２４単位 （履修科目の登録上限　２４単位（半期）） １学年の学期区分 １学期の授業期間 １時限の授業時間	４学期 ８週 ９０分	

別記様式第２号（その３の１）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

授　業　科　目　の　概　要

（共創学部共創学科）

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
基幹教育科目	基幹教育セミナー		基幹教育セミナー	この授業のテーマは，『自分が大学で学ぼう（または，取り組もう）と考えていること・ものについて，その内容や楽しさ（やりがい），大学で学ぶことの意義など』です。そのテーマに基づいて、皆さんが授業で行う活動の大きな柱は，次の３つです。①クラスの仲間や教員との対話（自分自身と対話も＝省察），②パワーポイントソフトによる発表資料の作成とプレゼンテーション（発表者に対するフィードバックも行います），③自己の変化や成長への振り返りと文章化。 　異なる専門分野を目指しているクラスの仲間や教員を前にしてプレゼンテーションする機会は，自らの大学における学び（発表内容そのもの）について深く考えることへつながります。発表の本番は緊張するかもしれませんが，仲間からの貴重なフィードバックももたらされます。それらは，自分一人では気づくことの難しかった（異なる専門分野を目指す学生が交流するからこその）新たな見方や考え方，これから過ごす大学生活におけるヒントです。 　互恵的なクラス環境のなかで，自らの大学における学びについて，仲間との対話や省察、表現と応答が新たな気づきや発見を生むことについて，学生一人ひとりがそのプロセスを体験する場として本科目は開設されています。	
基幹教育科目	課題協学科目		課題協学	この科目では文理混合した150名の学生によってクラスを編成し，クラス毎にテーマ（教室テーマ）を設定しています。専門分野の異なる３名の教員が一つのクラスを担当し，各々異なった視点から，教室テーマに沿い，かつ，グループ学習に適した題材（協学課題）を提供します。授業では皆さんが協学課題を考えるために必要となる講義を実施しますが，教員は講義形式の学びだけでなく，個人演習による自らの学び，そしてグループ作業等による学生同士の学びを重視しています。 この科目の目的は，グループ作業や個人演習を通して，幅広い視野をもって問題を発見する姿勢，問題の解決を目指して学び続ける態度と技能，専門を異にする他者と協働できる能力を養うことです。	
基幹教育科目	言語文化科目	言語文化基礎科目	Intensive English: Global Issues RW1	この授業では、世界の時事問題に関する英語のニュースを読む能力を涵養し、それらに関する内容の要約を英語で書くことを目標とする。英語で発信されるニュースの内容は多岐に渡るが、その情報を理解するためには語彙や表現などについて一定の訓練が必要である。この授業ではインターネット上に掲載される英語の記事や英字新聞などに現れる語彙および英語表現を学び、それらを使って的確に内容を要約する力を涵養する。また、英語で発信されたニュースを通して現代社会の重要な課題についての情報を収集する訓練を行う。【Reading（500語），要約力、情報収集力】 This course aims to develop the ability to read and summarize English news on current affairs from around the world. English news covers various topics; this implies reading news articles requires knowledge of special vocabulary and expressions on a wide range of issues. In this course, students will learn English words and expressions frequently used in online articles and newspapers, and will learn how to summarize the news content. Students will also learn how to gather information on issues important in modern society through news on global issues.	
基幹教育科目	言語文化科目	言語文化基礎科目	Intensive English: Global Issues RW2	この授業は、世界の時事問題に関する英語のニュースを読む能力を涵養するための上級レベルのコースで、インターネットなどを通じて収集した情報を基に自分の考えを英語で書くことを目標とする。学生は英語ニュースの読解に必要な語彙や表現を継続的に学び、関心のあるテーマを掘り下げて情報を収集する。また、グループ活動等で意見交換をしながら自分の考えをまとめ、500語程度のエッセイを提出する。【Reading（800語），Writing（意見：500語）】 This class is an advanced course to develop the ability to read English news on current global issues. The goal of this course is to write an opinion essay in English based on the information gathered through Internet research. Students will learn the vocabulary and expressions necessary for reading English news and will be required to compile information on topics covering their own interests. Also, students will exchange opinions through group discussion and finally submit an essay on global issues of about 500 words.	

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
基幹教育科目	言語文化科目	言語文化基礎科目	Intensive English: Global Issues LS1	この授業では、世界の時事問題に関する英語のニュースを聞く能力を涵養し、それらに関して自分で調べたことや考えたことを口頭で意見交換する力を身につけることを目標とする。特に、耳から英語をインプットする訓練を集中的に行い、ある程度の長さ（5分程度）のある英文を、メモなどを取りながら理解するための基礎を身につける。また、意見交換を行う際の口語表現を学び、ディスカッションやディベートを行う基礎力を養う。【listening（5分）, spoken interaction】 This course aims to develop the ability to listen to English news on current affairs around the world and to develop the ability to exchange opinions about the given topic through conversation in English. Specifically, intensive training will be conducted to enhance the ability to listen to and understand English news broadcast (about 5 minutes) while taking notes. Students will also learn colloquial expressions frequently used when expressing opinions to build the foundation for discussion and debate.	
基幹教育科目	言語文化科目	言語文化基礎科目	Intensive English: Global Issues LS2	この授業では、世界の時事問題に関する英語のニュースを聞く能力を涵養するための上級の授業で、英語による学術的な授業を受けるための基礎力を身につけることを目指す。また、特定のテーマについて自分で調べたことや考えたことを発表する力を身につけることを目標とし、世界的に広く視聴されているプレゼンテーションなどを題材として、効果的なプレゼンテーションの技法の習得を目指す。【listening（8分), presentation】 This is an advanced course for listening to and speaking about global issues in English aiming to build the foundation for understanding academic lectures in English. Students will also learn how to make an effective presentation on a given topic through watching online presentations widely shared around the world.	
基幹教育科目	言語文化科目	言語文化基礎科目	Intensive English: Japanese Issues 1	この授業は、日本の時事問題についての英語のニュースを読み聞きし、日本についての客観的な視座を得ることを目標とし、その詳細や背景などについての追加的な説明ができるようになることを目指す。また、日本国内の報道と国外の報道を比較し、批判的思考力を涵養する。さらにグループ内でのディスカッションなどを通して意見を交換し、集団で討論する手法を身につける。【Listening（10分)、ディスカッション】 This course aims to develop an objective perspective toward Japanese current affairs by reading and listening to English news on that topic and to develop the ability to elaborate on the details and the background of the news. Students will consider the differences of the news covered inside and outside of Japan to improve the ability to think critically. Students will also learn how to participate in or lead a discussion in groups using the topics of Japanese issues.	
基幹教育科目	言語文化科目	言語文化基礎科目	Intensive English: Japanese Issues 2	この授業は日本の時事問題についての英語のニュースを読み聞きし、意見交換をするための上級レベルのコースで、一定の立場に立って英語で意見を述べたり、対立する意見を調整したりする力を養うことを目指す。英語のニュースを読んだり聞いたりする習慣を身につけ、それらについて日常的に英語で考えをまとめる。また、グループでの意見交換などを通してディベートを行うための基礎力を身につける。【Listening（15分)、ディベート】 This is an advanced course on reading and listening to news on Japanese current issues aiming to develop the ability to express and coordinate opinions on controversial issues. Students will be required to read and listen to English news on Japanese issues and to write their opinions on daily basis. Students will also learn how to debate on controversial issues through group activities.	

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
基幹教育科目	言語文化科目	言語文化基礎科目	Intensive English: Academic Issues 1	この授業は学術的な英文を読むための語彙や表現を身につけることを目標とし、それらを使って学術的な内容を英語で作文する力を育成することを目指す。学術英語の修得のための一つのポイントは、各分野の専門語彙や学術的な表現を学ぶことである。この授業では入門的な学術英文を通してそれらを学び、学術的な英文を書く基礎となるパラグラフライティングについて学ぶ。また、ライテイングのaccuracyを高めるために必要な文法の指導などを行う。 【Reading(500語)、Writing基礎、語彙文法】 This course aims to acquire vocabulary and expressions for reading academic English passages and to nurture the ability to write English sentences appropriate for academic purposes. One of the keys to acquiring academic English is to learn specialized vocabulary and academic expressions in each field. In this course, students will learn these through introductory academic English essays while learning the basics of paragraph writing. Grammar training will be also conducted to raise the accuracy of students' writing.	
基幹教育科目	言語文化科目	言語文化基礎科目	Intensive English: Academic Issues 2	この授業は、学術的な英文を読み解く力を涵養することを目標とし、同時に学術英語特有のスタイルを学ぶことを目指す。学術英語の読解を継続的に実施し、自分の関心のある分野の入門文献が読めるようになることを目指す。また、学術雑誌等に投稿するためのスタイルを学び、適切な引用の仕方や参考文献の作成の方法など形式的な面についても学習し、適切にフォーマットされた500語程度の英文を書くことを目指す。【Reading (800語) Writing (スタイルの学習、500語) 】 This course aims to develop the ability to read English academic articles and to learn the academic styles for quotations and references. Students will be required to read academic articles each week and will develop the ability to read introductory books and articles of their own interest. Also, students will learn how to quote and how to make a reference list using an academic style and will be required to submit an essay that is appropriately formatted for academic purposes of about 500 words.	
基幹教育科目	言語文化科目	言語文化基礎科目	Intensive English: Academic Issues 3	この授業は学術的な英文を読み書きするための上級レベルのコースで、より高度な読解力の涵養と800語程度の長さのリサーチペーパーを書くことを目標とする。幅広い分野の論文を読むための基礎となるよう、様々な分野の入門書を読む訓練を行う。また、論拠となる統計情報やデータを収集するための知識と技術を身につけることを目指し、それらの外部の情報を適切に英文に組み込むための訓練を行う。【Reading (1000語), Writing (800語)】 This is an advanced course for reading and writing academic English aiming to develop advanced reading skills and the ability to write a research paper in about 800 words. To be able to read papers on various topics, students will be required to read introductory chapters on various fields. Students will also learn how to collect statistical information and data, and how to incorporate these data into their research paper.	
基幹教育科目	言語文化科目	言語文化基礎科目	Intensive English: Academic Issues 4	この授業は学術英語に関する上級授業で、専門分野に入るための高度な英語力を身につけることを目指す。関心のある分野の代表的な論文を読みこなせるようになることを目指し、継続的な読解の訓練を行う。また、自分の考えをまとめた英文を、資料などを示しながらクラスで発表することを目標とし、口頭での質疑応答に対応するための基礎力を養う。【Reading (1500語), 質疑応答を含む発表】 This is an advanced course on Academic English aiming to develop advanced English skills for academic fields. Students will continue to read and learn academic articles to be able to read representative papers in each field. Students will also learn how to present their research using graphical materials and to conduct simple question and answer sessions.	
基幹教育科目	言語文化科目	言語文化基礎科目	学術英語ゼミ・リーディング・リスニング	将来の学術研究の実施につながる上級学術英語技能を，リーディング，及びリスニング活動を通して強化するゼミ形式の科目である。具体的なテーマについて自身で問いを立て，その問いに答えるために，様々な文献をリサーチし，問いに適切に答えるための情報収集・分析・評価・考察方法を習得する。学生グループによる自主的学習などを含め，教室内外で90時間の学習時間を必要とする。副題が異なれば重複履修可。	

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
基幹教育科目	言語文化科目	言語文化基礎科目	学術英語ゼミ・ライティング・スピーキング	将来の学術研究の実施につながる上級学術英語技能を，ライティング，及びスピーキング活動を通して強化するゼミ形式の科目である。具体的なテーマについて調査・分析し，その結果をリサーチペーパー，アナリティカルペーパー，ブックレビュー，新聞記事等，様々なジャンルの規範に応じて執筆・発表する訓練を行う。学生グループによる自主的学習などを含め，教室内外で90時間の学習時間を必要とする。副題が異なれば重複履修可。	
基幹教育科目	言語文化科目	言語文化基礎科目	学術英語ゼミ・オーラル・コミュニケーション	将来の学術研究の実施につながる上級学術英語技能を，オーラル・コミュニケーション活動を通して強化するゼミ形式の科目である。具体的なテーマについて調査・分析し，その結果をプレゼンテーション，ディベート，ディスカッション，スピーチ等，様々なジャンルの規範に応じて発信する訓練を行う。学生グループによる自主的学習などを含め，教室内外で90時間の学習時間を必要とする。副題が異なれば重複履修可。	
基幹教育科目	言語文化科目	言語文化基礎科目	Integrated Courses：Beginners A	日本語学習経験の無い学習者を対象に、初歩的な文法や語彙を勉強し、簡単な日常会話ができるようになることを目指す。動詞、形容詞の過去、非過去の活用を学び、ひらがなやカタカナ、日常生活で使用される基本的な漢字で書かれた語句や文を理解できるようにする。	
基幹教育科目	言語文化科目	言語文化基礎科目	Integrated Courses：Beginners B	日本語を少し学習したことのある学習者を対象に、初歩的な文法や語彙を勉強し、簡単な日常会話ができるようになることを目指す。動詞、形容詞の過去・非過去以外の活用を学び、日常生活の場面で使用されるやや複雑な語句や文を理解し表現できるようにする。	
基幹教育科目	言語文化科目	言語文化基礎科目	Integrated Courses：Elementary 1A	動詞、形容詞の過去、非過去の活用がわかる人を対象とする。動詞、形容詞の普通形・過去形、形容詞の比較級、動詞の可能形・意志形、授受表現など日常会話に必要な基本的文法や語彙を学び、身近な話題で会話ができる日本語能力を養成する。	
基幹教育科目	言語文化科目	言語文化基礎科目	Integrated Courses：Elementary 1B	動詞、形容詞の普通形・過去形、形容詞の比較級、動詞の可能形・意志形などがわかる人を対象とする。既習の動詞、形容詞の各種の活用を復習しながら、授受表現やモダリティなど日常会話に必要な文法や語彙を学び、幅の広い話題で会話ができる日本語能力を養成する。	
基幹教育科目	言語文化科目	言語文化基礎科目	Integrated Courses：Elementary 2A	初級前半の文法、語彙を学習した人を対象とする。初級後半の文法、語彙及びその使い方を勉強し、いろいろな場面で使えるようになることを目指す。また、初級レベルの文法知識、語彙の学習を終え、基本的な日本語を理解することができるようにする。	
基幹教育科目	言語文化科目	言語文化基礎科目	Integrated Courses：Elementary 2B	初級後半の文法、語彙及びその使い方を学習した人を対象とする。初級レベルの文法、語彙及びその使い方を練習し、使役、受身及び使役受身など日常生活に必要なやや難しい文法や語彙を学ぶ。また、初級レベルの文法知識、語彙などを整理し、基本的な日本語を理解し応用することができるようにする。	

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
基幹教育科目	言語文化科目	言語文化基礎科目	Integrated Courses：Pre-Intermediate A	初級文法を終了し、漢字も300 字程度書ける人を対象とする。初級文法を復習・応用しながら様々なトピックのディスカッションを通して語彙を増やす。そして、文型に応じて正しい接続のしかたを学び、文法の運用能力を高め、日本語での表現能力を伸ばす。	
基幹教育科目	言語文化科目	言語文化基礎科目	Integrated Courses：Pre-Intermediate B	初級文法を終了し、中級に入った人を対象とする。初級文法と関連付けながら名詞相当句や、接続詞、待遇表現といったやや複雑な複文や文法形式を学ぶ。場面に応じて微妙な気持ちや態度を表現できる日本語の運用能力をつけていく。	
基幹教育科目	言語文化科目	言語文化基礎科目	Integrated Courses：Intermediate 1A	初級文法を終了し、中級レベルの学習を半ばまで進めている人を対象とする。基本的な文法練習、短い読み物の読解を通して文法力をつけていく。中級初期の文法を使いながら、やや抽象的なことがらについて会話ができる。また、少し長めの文を読んだり、自分の意見を書いたりすることができるようにする。	
基幹教育科目	言語文化科目	言語文化基礎科目	Integrated Courses：Intermediate 1B	中級レベルの学習を半ばまで進めている人を対象とする。既習の語彙・文法を整理しつつ派生的な語彙・文法を学んでいく。ややまとまりのある文章を読んだり書いたり、書き言葉と話し言葉の違いに注意しながら、一般的な事柄や抽象的なテーマについて会話が出来ることを目指す。	
基幹教育科目	言語文化科目	言語文化基礎科目	Integrated Courses：Intermediate 2A	初級文法を十分に理解している学習者を対象に、読解や聴解の訓練を中心に中級文法を学んで行く。語彙量を増やし聴解力を高めると同時に短い文章をまとめたり大意を読み取る読解力を養成する。また、中級文法を使って、自分の意見を書いたり、話したりする練習も行う。	
基幹教育科目	言語文化科目	言語文化基礎科目	Integrated Courses：Intermediate 2B	中級中期レベルの学習者を対象に、読解や聴解の訓練を中心に四技能の力をバランス良く統合的に伸ばしていく。語彙量を増やしながら、文章の段落の展開を読み取り大意をまとめる総合的な読解力を身につける。また、既習の語彙や文法を使って、具体的なテーマで事実を述べたり自分の感想や意見を話したりする、コミュニケーション力をつける。	
基幹教育科目	言語文化科目	言語文化基礎科目	Integrated Courses：Pre-Advanced A	中級前半の文法・語彙を終了した人を対象とする。中上級レベルの文法、語彙、表現を学習しながら、バランスの取れた4 技能（聞く・話す・読む・書く）の力をつけ、大学の講義が受講できることを目指す。クラスでは、やや抽象的な話題の文章を読み、内容を理解できる練習をする。「書く」「話す」の表現練習を中心に、自分の意見を論理的に述べ、物事を詳しく説明する力を養う。	
基幹教育科目	言語文化科目	言語文化基礎科目	Integrated Courses：Pre-Advanced B	中級から上級へ進む人を対象とする。引き続き中上級レベルの文法、語彙、表現を復習しながら、バランスの取れた4 技能を強化し、大学の専門課目の授業が受講できることを目標とする。社会科学・自然科学など専門に関する文章を読み内容を理解でき、ややまとまりのあるアカデミックな文章を要約できる。また、一般的な話題について論理的に意見を述べたりすることができるようにする。	

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
基幹教育科目	言語文化科目	言語文化基礎科目	Integrated Courses：Advanced A	外国語としての日本語を学ぶのではなく日本語を使って多様な「日本」を学ぶ。内容に焦点を当てた授業である。第一に、日本社会や日本文化に関する様々な文献を読んだり視聴覚教材を見たりすることにより日本社会や文化を理解し自分なりに分析できるようになることを目指す。第二に、ディスカッションやレポート作成を通して、正確に理解し自分の考えを適切に表現するスキルを磨くことで大学の講義理解能力を身につける。	
基幹教育科目	言語文化科目	言語文化基礎科目	Integrated Courses：Advanced B	上級レベルの学習を半ばまで進めている人を対象とする。幅広い話題について深みのある文章を理解し表現意図を把握することができる。また専門分野の論文を読解し、要点をまとめたり論理的に自分の意見を主張（書く、話す）したりすることができる、高度な日本語応用力をつけることを目指す。	
基幹教育科目	言語文化科目	言語文化基礎科目	Kanji Courses：Elementary 1A	日本語学習経験の無い学習者を対象に、基礎的な漢字（漢字語彙）を勉強し、基礎的な漢字と日常生活で使用される語彙の読み書きができるようになることを目指す。授業では漢字の筆順、画数、音読み・訓読みといった基礎知識を確認するとともに学習漢字を含んだ語彙を学習する。特に読み方、書き方、意味、語彙の使い方を重点的に学ぶ。	
基幹教育科目	言語文化科目	言語文化基礎科目	Kanji Courses：Elementary 1B	Kanji Courses：Elementary 1 A終了程度のレベルの学習者を対象に、基礎的な漢字（漢字語彙）を勉強し、基礎的な漢字と日常生活で使用される語彙の読み書きができるようになることを目指す。授業では漢字の筆順、画数、音読み・訓読みといった基礎知識を確認するとともに、Kanji Courses：Elementary 1 Aより更に複雑な学習漢字を含んだ語彙を学習する。特に読み方、書き方、意味、語彙の使い方を包括的に学ぶ。	
基幹教育科目	言語文化科目	言語文化基礎科目	Kanji Courses：Elementary 2A	基礎漢字と日常的で基礎的な語彙を身につけた学習者を対象に、広く日常場面で使用される漢字および語彙を学習する。授業では、まず、漢字の筆順、画数、音読み・訓読み等の基礎知識を確認する。更に漢字の字源、部首、送り仮名、品詞、意味など漢字・語彙を正確に理解し使用するための知識を学び、運用力養成を目指した練習を行う。	
基幹教育科目	言語文化科目	言語文化基礎科目	Kanji Courses：Elementary 2B	Kanji Courses：Elementary 2 A終了程度のレベルの学習者を対象に、より広い日常場面で使用される漢字および語彙を学習する。授業では、まず、漢字の筆順、画数、音読み・訓読み等の基礎知識を確認する。次に漢字の字源、部首、送り仮名、品詞、意味など漢字・語彙を正確に理解し使用するための知識を学ぶとともに、ことばの使い方を学ぶことで漢字および語彙の運用力を養成する。	
基幹教育科目	言語文化科目	言語文化基礎科目	Kanji Courses：Pre-Intermediate A	初級終了程度の学習者を対象に、日常的な場面で書かれた具体的な内容を表す漢字および語彙を学習する。授業では画数、筆順、音訓、漢字の意味などの基礎知識を確認するとともに、学習漢字を含む語彙、語彙の意味、語彙を使用するために求められる文法や語彙の使用環境などを学ぶ。漢字、語彙、文法を体系的に整理しそれらの運用能力を高めることを目指す。	
基幹教育科目	言語文化科目	言語文化基礎科目	Kanji Courses：Pre-Intermediate B	「Kanji Courses：Pre-Intermediate A」終了程度のレベルの学習者を対象に、日常的な場面で書かれた具体的な内容を表す漢字および語彙を学習する。授業では画数、筆順、音訓、漢字の意味などの基礎知識を確認するとともに、学習漢字を含む語彙、語彙の意味、語彙を使用するために求められる文法や語彙の使用環境などを学ぶ。「Kanji Courses：Pre-Intermediate A」よりさらに高度な漢字、語彙、文法を学習しそれらの運用能力を高めることを目指す。	

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
基幹教育科目	言語文化科目	言語文化基礎科目	Kanji Courses：Intermediate 1A	中級日本語の学習を開始した程度の学習者を対象に、日常的であるが幅広い内容について書かれた漢字・語彙、および新聞等の簡易な文章で使用される漢字・語彙を練習する。授業では、音訓、部首、意味などの基礎知識を学習するとともに、文脈からの語彙意味類推、複合漢字の意味構造分析、漢字語の意味からの文意の理解などを通して、漢字と語彙の運用能力養成を目指す。また、漢字の覚え方・整理法などについて自分に適した学習法を見つける。	
基幹教育科目	言語文化科目	言語文化基礎科目	Kanji Courses：Intermediate 1B	「Kanji Courses：Intermediate 1 A」終了程度のレベルの学習者を対象に、日常的であるが幅広い内容について書かれた漢字・語彙、および新聞等の簡易な文章で使用される漢字・語彙を練習する。授業では、音訓、部首、意味などの基礎知識を学習するとともに、文脈からの語彙意味類推、複合漢字の意味構造分析、漢字語の意味からの文意の理解などを通して、「Kanji Courses：Intermediate 1 A」よりも難易度が高い漢字を学び、より高度な語彙の運用能力養成を目指す。また、漢字の覚え方・整理法などについて自分に適した学習法を見つける。	
基幹教育科目	言語文化科目	言語文化基礎科目	Kanji Courses：Intermediate 2A	中級前半程度の日本語を学ぶ学習者を対象とし、日常的な場面で使用される難易度の高い漢字・語彙、および一般教養的な内容等で使用される漢字・語彙を学習する。特に語彙についての分析力を高め語と語のネットワークを広げるために、語構造、漢語と和語の関係、自動詞と他動詞の語彙、語が使用される適切な文脈など幅広い角度から語彙を学ぶ。 また、漢字の覚え方・整理法などについて自分に適した学習法を見つける。	
基幹教育科目	言語文化科目	言語文化基礎科目	Kanji Courses：Intermediate 2B	「Kanji Courses：Intermediate 2 A」終了程度のレベルの学習者を対象とし、日常的な場面で使用される難易度の高い漢字・語彙、および一般教養的な内容等で使用される漢字・語彙を学習する。 「Kanji Courses：Intermediate 2 A」でみにつけた知識およびストラテジーを活用し、語彙についての分析力を高め語と語のネットワークを広げる。また、語構造、漢語と和語の関係、自動詞と他動詞の語彙、語が使用される適切な文脈など幅広い角度から語彙を学ぶ。 漢字の覚え方・整理法などについて自分に適した学習法を見つける。	
基幹教育科目	言語文化科目	言語文化基礎科目	Kanji Courses：Pre-Advanced A	中級後半程度の学習者を対象とし、新聞や雑誌の平易な記事・解説・評論などで使用される漢字と語彙を学習する。そのため、単なる「読み書き」の練習を行うのではなく、漢字・語彙を「語義」「音韻」「書字」「用法」の４要素に分解し、その中でも「語義」「音韻」「用法」を更にカテゴライズ化し分析的に学んでいく。例えば「語義」については「類義語」「反義語」等、「用法」については「語と語のコロケーション（連語）」「和語と漢語の対応」といったカテゴリーに分け、語彙の意味や機能を構造的に分析することで学習を進める。留学生は自ら調べ発表することが求められる。	
基幹教育科目	言語文化科目	言語文化基礎科目	Kanji Courses：Pre-Advanced B	「Kanji Courses：Pre-Advanced A」終了程度のレベルの学習者を対象とし、解説・評論などで使用される漢字と語彙を学習する。そのため、漢字・語彙を「語義」「音韻」「書字」「用法」の４要素に分解し、その中でも「語義」「音韻」「用法」を更にカテゴライズ化し分析的に学んでいく。例えば「語義」については「類義語」「反義語」等、「用法」については「語と語のコロケーション（連語）」「和語と漢語の対応」といったカテゴリーに分け、語彙の意味や機能を構造的に分析することで学習を進める。留学生は「Kanji Courses：Pre-Advanced A」よりも難易度の高い課題について調べ発表することが求められる。	
基幹教育科目	言語文化科目	言語文化基礎科目	Kanji Courses：Advanced A	新聞の論評や一般教養的な内容の文章を読むことができるレベルの学生を対象に様々な専門である程度共通して使用される漢字と語彙を学習する。授業では「環境」「インターネット」「火山」「景気」といった幅広いトピックを題材にそれらで使用される漢字と語彙を学ぶ。最終的には、学生が自分の専門分野や興味の対象に応じて漢字力と語彙力を伸ばしていくことことで大学の講義理解能力を身につける。	
基幹教育科目	言語文化科目	言語文化基礎科目	Kanji Courses：Advanced B	「Kanji Courses：Advanced　A」終了程度のレベルの学生を対象に様々な専門である程度共通して使用される漢字と語彙を学習する。授業では「環境問題」「歴史」「エネルギーと栄養素」「議院内閣制」といった幅広いトピックを題材にそれらで使用される漢字と語彙を学ぶ。最終的には、学生が自分の専門分野や興味の対象に応じて漢字力と語彙力を伸ばしていくことことで大学の講義理解能力を身につける。	

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
基幹教育科目	言語文化科目	言語文化基礎科目	Spreaking Courses：Elementary 2A	初級の文法知識がある学習者を対象とする。さまざまな場面や状況での会話練習を通して、以下のことができるようになることを目指す。 (1)場面や状況で、会話の目的や相手との関係にあった適切な会話表現や談話構成がわかる。 (2)語彙・表現を増やし、発話の内容を豊かにする。 (3)自然な会話を聞く練習を通して、聞く力を伸ばす。 (4)自分の発音や話し方の癖がわかる。 授業では主にロールプレイとスピーチを行う。	
基幹教育科目	言語文化科目	言語文化基礎科目	Spreaking Courses：Elementary 2B	Speaking Courses：Elementary 2 A終了程度のレベルの学習者を対象とする。さまざまな場面や状況での会話練習を通して、以下のことができるようになることを目指す。 (1)多様な場面や状況で、会話の目的や相手との関係にあった適切な会話表現や談話構成が理解できる。 (2)日常会話で求められる語彙や表現を身につけ、発話の内容を豊かにする。 (3)自然な会話を聞く練習を通して、聞く力を伸ばす。 (4)自分の発音や話し方の癖がわかる。 授業では主にロールプレイとスピーチを行う。	
基幹教育科目	言語文化科目	言語文化基礎科目	Speaking Courses：Pre-Intermediate A	初級後半の文法知識がある学習者を対象とする。さまざまな場面や状況での会話練習を通して、中上級話者になるために必要な技術を身につけることを目指す。 (1)場面や状況で、会話の目的や相手との関係にあった適切な表現を使い、適切な談話構成で話せる。 (2)ある程度詳しく具体的な事柄の説明などができる。 (3)フォーマルなスタイルで意見が言える。 授業では主に、ロールプレイを行う。クラスのレベルに応じて、スピーチや簡単なディスカッション、簡単なディベートなどの活動も行う。活動を通して、自分の発音や話し方の癖に気づき意識しながら練習する。	
基幹教育科目	言語文化科目	言語文化基礎科目	Speaking Courses：Pre-Intermediate B	Speaking Courses：Pre-Intermediate A終了程度のレベルの学習者を対象とする。Speaking Courses：Pre-Intermediate Aよりもさらに複雑な場面や状況での会話練習を通して、中上級話者になるために必要な技術を身につけることを目指す。 (1)場面や状況によって、会話の目的や相手との関係にあった適切な表現を使い分け、適切な談話構成で話せる。 (2)ある程度詳しく具体的な事柄の説明などができる。 (3)フォーマルな表現・語彙を用いて意見が言える。 授業では主に、ロールプレイを行う。クラスのレベルに応じて、スピーチや簡単なディスカッション、簡単なディベートなどの活動も行う。活動を通して、自分の発音や話し方の癖に気づき意識しながら練習する。	
基幹教育科目	言語文化科目	言語文化基礎科目	Speaking Courses：Intermediate 1A	中級前半レベルの文法と漢字の知識がある学習者を対象とする。 クラスでは、ロールプレイ、ディスカッション、スピーチなど様々な活動を行う。クラスの目標は、上級話者になるために必要な話す技術を身につけること。具体的には、詳しい説明ができ、段落で話せるようになること、待遇表現を意識した自然な会話ができるようになること、語彙を増やすこと。授業では、個々の学習者の発話における悪い癖も直していく。	
基幹教育科目	言語文化科目	言語文化基礎科目	Speaking Courses：Intermediate 1B	Speaking Courses：Intermediate 1 A終了程度の文法と漢字の知識がある学習者を対象とする。 クラスでは、会話技能を上達させるためにロールプレイ、ディスカッション、スピーチなど様々な活動を行う。クラスの目標は、上級レベルに達するために必要となる会話技術を身につけることである。具体的には、具体的な物事に対して詳しい説明ができ、段落で話せるようになること、待遇表現を意識した自然な会話ができるようになること、語彙を増やすことである。授業では、個々の学習者の発話における悪い癖も直し分かりやすい発話ができるようになることを目指す。	
基幹教育科目	言語文化科目	言語文化基礎科目	Speaking Courses：Intermediate 2A	中級後半の文法知識がある学習者を対象とする。授業では「音読」と「スピーチ」を行う。「音読」練習により日本語らしい発音や聞き手に伝わる話し方を身につけるようにするのが目標。「スピーチ」では、社会的な話題を論理的に聞き手に伝わるように話せる力を身につけるようにするのが目標。最終日はディベートをする。	

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
基幹教育科目	言語文化科目	言語文化基礎科目	Speaking Courses：Intermediate 2B	Speaking Courses：Intermediate 2 A終了程度のレベルの文法知識がある学習者を対象とする。授業ではSpeaking Courses：Intermediate 2 Aレベルよりもさらに難易度の高い「音読」と「スピーチ」を行う。「音読」練習により、自然で分かりやすい発音や聞き手に伝わる話し方を身につけるようにするのが目標である。「スピーチ」では、社会的な話題を論理的に聞き手に伝わるように話せる力を身につけるようにするのが目標。最終日はディベートを行う。	
基幹教育科目	言語文化科目	言語文化基礎科目	Speaking Courses：Pre-Advanced A	初級、中級の基本的な文法が正確に運用でき、新聞記事を読んで大意が取れるレベルの学習者を対象とする。クラスでは、スピーチ、ディスカッション、ディベート、プレゼンなど様々な形で、社会的なトピックから、日常的なトピックまで話し合う。どんなトピックに対しても、自分の意見をきちんと相手に伝え、相手の考えも理解しながらより深い議論ができる力の習得を目指す。毎回聴解練習も行い、会話力に結びつく聴解力の向上を図る。そのうえで、いかに聞き手をひきつける話し方ができるかも考えたい。	
基幹教育科目	言語文化科目	言語文化基礎科目	Speaking Courses：Pre-Advanced B	Speaking Courses：Pre-Advanced　A終了程度のレベルの学習者を対象とする。クラスでは、スピーチ、ディスカッション、ディベート、プレゼンなど様々な形で、Speaking Courses：Pre-Advanced　Aレベルよりもさらに複雑な専門的なトピック、時事問題、および日常的なトピックを話し合う。どんなトピックに対しても、自分の意見を明確に相手に伝え、相手の考えも理解しながらより深い議論ができる力の習得を目指す。毎回聴解練習も行い、会話力に結びつく聴解力の向上を図る。そのうえで、いかに聞き手をひきつける話し方ができるかも考えたい。	
基幹教育科目	言語文化科目	言語文化基礎科目	Speaking Courses：Advanced A	中級文法が正確に運用でき、新聞記事や一般教養的な文章が理解できるレベルの学習者を対象とする。クラスでは、スピーチ、ディスカッション、ディベート、プレゼンテーションなど様々な形で、専門的な内容から、時事問題や日常的な話題まで話し合う。どのような内容に対しても、自分の意見を的確に相手に伝え、相手の考えも理解しながらより深い議論ができる力の習得を目指す。また、会話力に結びつく聴解力の向上を図る。	
基幹教育科目	言語文化科目	言語文化基礎科目	Speaking Courses：Advanced B	Speaking Courses：Advanced A終了程度のレベルの文法が正確に運用でき、新聞記事や一般教養的な文章が理解できるレベルの学習者を対象とする。クラスでは、スピーチ、ディスカッション、ディベート、プレゼンテーションなど様々な形で、専門的な内容から、時事問題や日常的な話題まで話し合う。どのような内容に対しても、自分の意見を的確に相手に伝え、相手の考えも理解しながらより深い議論ができる力の習得を目指す。また、大学の講義やゼミで発表したり議論したりするための能力養成を目指す。	
基幹教育科目	言語文化科目	言語文化基礎科目	Writing Courses：Intermediate 1A	このクラスは初級終了程度の、書き言葉で文章を書いたことがない学習者を対象とする。Intermediate 1Aでは、「です・ます」体の文章から始め、話し言葉と書き言葉とのスタイルの違いの違いに気づき、句読法やいろいろな記号（括弧、ダッシュ等）及び原稿用紙の使い方を身につけ、「書く」ことに慣れていくことを目標とする。授業では作文を含んだ小クイズがあり、短作文の宿題もある。	
基幹教育科目	言語文化科目	言語文化基礎科目	Writing Courses：Intermediate 1B	このクラスは中級初期レベルの学習者を対象とする。作文を書き慣れていない学習者が文法の基礎学習とともに書き言葉としての日本語の作文の基礎知識を学び、レポートなどのフォーマルな文章を書くための準備をする。 Intermediate 1Bでは、Intermediate 1Aでならった句読法、記号（括弧、ダッシュ等）及び原稿用紙の使い方を練習しながらいろいろな種類の文（意見を述べる文や、物事の手順・推移・因果関係及び行為の理由・目的を表す文など）に慣れ、「書く」ことの技術を身につけることを目標とする。学期末には400～600 字の作文を課す。	
基幹教育科目	言語文化科目	言語文化基礎科目	Writing Courses：Intermediate 2A	このクラスは中級中期レベルの学習者を対象とする。中級レベルの文法を確認しながら、いろいろな種類の文を書いていく。フォーマルな文体で長い文章を書いた経験の少ない学習者が簡単なレポートが書けるようになることを目標とする。Intermediate 2Aでは、レポート文に相応しい的確な語彙・表現を使うこと、正しい構造の文や構成がしっかりした段落を書くことを通じて、レポートや小論文を書くための基礎的な表現技術を身につける。	

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
基幹教育科目	言語文化科目	言語文化基礎科目	Writing Courses：Intermediate 2B	このクラスは中級後半レベルの学習者を対象とする。中級レベルの文法を確認しながら、いろいろな種類の文を書いていく。フォーマルな文体で長い文章を書いた経験の少ない学習者が簡単なレポートが書けるようになることを目標とする。Intermediate 2Bでは、説明文や論説文を分かりやすく要約し、事実と意見をはっきり区別し、事実に基づいて客観的な論説文を書くことを学ぶ。学期末には800-1000字程度のレポートを提出する。	
基幹教育科目	言語文化科目	言語文化基礎科目	Writing Courses：Pre-Advanced A	このクラスは中級終了程度の学習者を対象とする。いろいろな種類の文章や論理的な文章の組み立て方を学び、論文作成に必要な基礎的な語彙や表現を身につけることを目標とする。Pre-Advanced Aでは、 与えられたテーマについて、理由や根拠を示しながら自己の主張や意見が論理的に書ける。また、読み手を意識しつつ、何をどのような手順で書いていけばよいかというように、分かりやすい文章を書くスキルを身につける。	
基幹教育科目	言語文化科目	言語文化基礎科目	Writing Courses：Pre-Advanced B	このクラスは上級初期の学習者を対象とする。いろいろな種類の文章や論理的な文章の組み立て方を学び、論文作成に必要な基礎的な語彙や表現を身につけることを目標とする。Pre-Advanced Bでは、論文の構成（序論、本論、結論）ごとに、順をおって語彙や表現等を学習する。題材として、医療、福祉、教育、環境、エネルギーなど現代の社会で問題となっていることを取り上げる。また、学生の専門分野の論文を練習の材料として加えることもある。学期末には論文形式に沿った2000字のレポートを提出する。	
基幹教育科目	言語文化科目	言語文化基礎科目	Writing Courses：Advanced A	この授業は上級中期の日本語学習を対象とする。レポート、研究発表、学術論文などの論理的な文章を書く際に注意すべき点を学び、日本語で論理的な文章を書く総合力の向上を図ることを目標とする。 Advanced 1では、一回ごとに異なるテーマを扱う。予習課題としてさまざまな短い論述文の読解・要約を課し、クラスでは学生が提出した要約文の問題点を適宜取り上げ、目的や伝達手段等に応じて、内容が簡潔にまとめ、表現が適切に言い換えられるように演習を行う。また、教室活動の一環として、「読む」、「書く」、グループディスカッションを行うので、学生の積極的な教室活動を期待する。学期末には2500字程度の小論文を提出する。	
基幹教育科目	言語文化科目	言語文化基礎科目	Writing Courses：Advanced B	この授業は上級中期以上の日本語学習を対象とする。日本語でレポート、研究発表要旨、学術論文などを書く力をつけることを目標とする。 人文科学、社会科学、自然科学及び理工学などさまざまな研究分野の学術論文を読み、レポートや学術論文の構成要素（背景説明、問題提起、論証、考察など）およびそれぞれの構成要素に用いられる文・表現・文章のパターンを学び、日本語による学術的文書の書き方を練習する。学生は各自テーマを決め、学期末に5000字程度の論文を提出する。	
基幹教育科目	言語文化科目	言語文化基礎科目	ドイツ語Ⅰ	アルファベートの発音，綴り字の読み方の第一歩から始め，基本的な文法事項及び文型を学びます。リスニングや会話の練習を通して，ドイツ語を「読み・書き・話し・聞く」，初歩的な運用能力を身につけることが目標です。また，ドイツ語圏の社会や文化についても学習し，その理解を深めます。	
基幹教育科目	言語文化科目	言語文化基礎科目	ドイツ語Ⅱ	ドイツ語Ⅰで培った基礎知識，初歩的な運用能力をもとに，一歩進んだ文法事項及び文型を学びます。リスニングや会話の練習を通して，ドイツ語を「読み・書き・話し・聞く」，やや高度な運用能力を身につけることが目標です。ドイツ語圏の社会や文化についても引き続き学習します。	
基幹教育科目	言語文化科目	言語文化基礎科目	フランス語Ⅰ	基礎的な日常的フランス語を「読み，聞き，話し，書く」能力を習得します。フランス語の音体系を理解し，発音ならびに綴り字の読み方に習熟すると同時に，基礎的な単文の構成と文意の理解，基礎的な対話の理解を行えることを目標とします。動詞としては，直説法現在，近接未来，近接過去，命令法そして複合過去を学習します。	

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
基幹教育科目	言語文化科目	言語文化基礎科目	フランス語Ⅱ	フランス語Ⅰで学んだ基礎知識をもとに，文法体系の学習を完了し，比較的複雑な表現で「読む・話す・聞く・書く」能力を習得します。また，正しい発音方法を身につけて語彙や表現力の幅を広げ，さらにフランス語圏の社会や文化，歴史についての知識を深めます。動詞としては，フランス語Ⅰで学習した時制に加えて，直説法の他の時制を学習します。条件法と接続法等も学びます。 全体として，フランス語の文構成についての基本的な学習を一通り終了し，日常使用される会話表現をおおむね理解し運用することを目標とします。	
基幹教育科目	言語文化科目	言語文化基礎科目	中国語Ⅰ	中国語の発音を習得します。この段階での学習のポイントは，声調とピンイン（ローマ字による中国語表記法）です。あわせて，基本的な表現と文法を学びます。	
基幹教育科目	言語文化科目	言語文化基礎科目	中国語Ⅱ	中国語の基本的な文法を学び，平易な中国語を聞き，話すことができるようにします。引き続き，発音練習にも力を入れます。	
基幹教育科目	言語文化科目	言語文化基礎科目	ロシア語Ⅰ	ロシア語をはじめて学ぶ学生を対象としたロシア語入門の授業です。ロシア語の文字の読み方・書き方からはじめて，文法の基礎を学びます。また，簡単な会話の表現を勉強し，音声教材を用いた聞き取り，発音練習を繰り返し行います。	
基幹教育科目	言語文化科目	言語文化基礎科目	ロシア語Ⅱ	ロシア語Ⅰに引き続いて基本的な文法を修得するとともに，より本格的な会話表現の聞き取り，発音練習を行います。また簡単なテクストの読解にも挑戦します。	
基幹教育科目	言語文化科目	言語文化基礎科目	韓国語Ⅰ	韓国語の文字や発音，基本文法について学びます。韓国語の文を正確に発音し，聞き取れるようになると，動詞の活用形及び様々な文型を学習していきます。	
基幹教育科目	言語文化科目	言語文化基礎科目	韓国語Ⅱ	韓国語Ⅰで培った韓国語の基礎知識を利用して様々な文型を学習しながら基礎会話をマスターする段階です。より高度な運用能力を身につけるために多様な文型を集中的に学習します。	
基幹教育科目	言語文化科目	言語文化基礎科目	スペイン語Ⅰ	本科目を履修後，学生は，①スペイン語の単語また文を正しく発音できる，②直説法現在形を用いながら簡単な自己紹介ができる，③簡単なスペイン語文を辞書を頼りに読むことができるようになります。	
基幹教育科目	言語文化科目	言語文化基礎科目	スペイン語Ⅱ	「文法」を主体に学習するクラスと「聴解・会話」を主体にするクラスとに分かれます。「文法」クラスでは，いま一歩進んだ文法知識を修得した上で，より高度なスペイン語の「読む・書く」能力を身につけることを目指します。一方，「聴解・会話」クラスでは，スペイン語Ⅰで学習した内容を基に，視聴覚教材を積極的に活用し，スペイン語の「聞く・話す」能力の基礎づくりを行います。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
基幹教育科目	文系ディシプリン科目	哲学・思想入門	この授業は，世界各地域・時代の哲学・思想について，九州大学の教員がそれぞれの西洋哲学・倫理学・インド哲学史・中国哲学史・宗教学等の専門を踏まえて行う講義である。哲学・思想研究は，世界や人生の原理を探求し，世界にありとあらゆる物事(モノ・コト)をその原理から体系的に理解しようとする学問である。一見難解でとっつきにくいが，第一線の研究者である担当教員が高度な内容を平易に講義する。この授業を通して，世界や人生についてより深く思索するヒントを数多く得られるであろう。	
基幹教育科目	文系ディシプリン科目	先史学入門	この授業では，古今東西さまざまな時代と地域に根ざした考古学および人類学の研究について，九州大学が誇る学界第一線の教員がそれぞれの専門領域に基づいて講義をすすめてゆく。それは単なる趣味的な段階の考古学・人類学への関心を，本格的な研究として開花させてゆくためのレクチャーと言える。履修する学部1年の皆さんには，時にはなかなかに咀嚼できないような難解な資料を目にする機会となるであろうが，私たちにとって人類が残した物質文化から人類の歴史を，その根源に立って考えることは，文系・理系の専攻を超えて，人間そのものを考え続けてゆく最も有効な経験となるであろう。	
基幹教育科目	文系ディシプリン科目	歴史学入門	この授業では，高校までに学んだ日本史，世界史とはまったく異なる「大学で学ぶ歴史学」とは，どのようなものか，九州大学の教員が，日本古代史から近代史，また西洋史，東洋史，朝鮮史，イスラーム史など様々な専門分野を踏まえて，入門講義を行うものである。過去の人間の営為は，単なる人名や出来事の集積ではない。一見無味乾燥な個々の歴史的事実をわずかな手がかりからいかに明らかにするか。そして，明らかになった事実から，いかに人間社会の豊かな多様性を再構成するか。それらを学ぶなかで，現代の我々が過去の積み重ねの中に生きていることの意味と，その重要性を知ることができるだろう。	
基幹教育科目	文系ディシプリン科目	文学・言語学入門	この授業では，古今東西さまざまな時代と地域に根ざした文学および言語現象の研究について，九州大学が誇る学界第一線の教員がそれぞれの専門領域に基づいて講義をすすめてゆく。それは単なる趣味的な段階の文学・言語学への関心を，本格的な研究として開花させてゆくためのレクチャーと言える。履修する学部１年の皆さんには，時にはなかなかに咀嚼できないような難解な資料を目にする機会となるであろうが，私たちにとって文学とは何か，そしてコトバとは何であるのかを，その根源に立って考えることは，文系・理系の専攻を超えて，人間そのものを考え続けてゆく最も有効な経験となるであろう。	
基幹教育科目	文系ディシプリン科目	芸術学入門	この授業は，古今東西さまざまな時代と地域に生まれ，育まれた芸術を対象に，九州大学に所属する教員が，それぞれの専門領域に基づいて，その研究成果を示しつつ，その鑑賞と理解，学問の対象としての意義について講義する。芸術というとどこか趣味的な世界を連想しがちであるが，人類文化の豊かな果実としての芸術の世界を，人がどのように生み出し，また享受してきたのかについて，深いところで考察していく。芸術は人間の営みにとって不可欠のものであり，優れた芸術に心を動かし，その意味を深く考えていくことは，さまざまな時代と地域の価値観を理解し，多様な学問世界へと関心を広げていくための基礎を提供することになる。	
基幹教育科目	文系ディシプリン科目	地理学入門	地理的思考の出発点には，生活のために身近な環境をよく知るという必要性とともに，山の稜線や地平線の彼方に，どんな世界があるのかを知りたいと思う好奇心があったといえるかもしれません。人類は，複雑な生業技術の開発を通じて，世界の多様な自然環境に対応し，独自の地域文化を発達させてきました。また，それと同時に各地域で営まれる経済，政治，文化，社会の諸活動は，交通・通信技術の発達など，世界規模に拡大した空間関係の動態のなかに組み込まれてきました。地理学とは，以上のような人間集団と自然環境，地域，空間，場所のかかわりに着目して，地球上の諸現象を探究する学問といえるでしょう。本講義では，さまざまな地域研究を事例としながら，地理学の基本概念や視点，方法を紹介し，地球上の人間と社会の多様性と普遍性を理解する方法や，人間と自然との関わりを理解する方法について考えます。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
基幹教育科目	文系ディシプリン科目	社会学入門	社会学（sociology）は，社会の（socio-）論理（-logy）を解き明かそうとする学問である。その研究主題は，具体的な社会集団や社会的場面であることもあれば，様々な社会現象であることもあり，あるいは，社会を分析する方法や視角であることもある。家族，近隣コミュニティ，農村，都市，階層，階級，市民社会，近代化，情報化，管理社会，格差社会，大衆文化・メディア，逸脱，福祉，社会統計・社会調査，数理モデル構築，権力論，社会哲学的考察など，多様な課題が研究主題となる。人が複数集まる時，そこには個人の思惑を超えた，“社会”の動きが発生する。講義では，担当教員が取り上げた主題において，どのような社会の論理（法則）が働いているのかを考えて行くことによって，社会学的なものの見方を学んで行く。	
基幹教育科目	文系ディシプリン科目	心理学入門	この授業では，私たちの日常の行為や思考に関わる心理学の研究について，担当教員がそれぞれの専門領域に基づいて講義をすすめてゆく。誰しも人の心がどのように働くかについては関心を有するであろう。これを単なる趣味的な段階からとき放ち，本格的な研究として開花させてゆくために，順序だてた講義を行う。心理学の成りたちを，その根源にたち返って考えることは，文系・理系の区別を超えて，人間とは何かを考え続けてゆく力を受講者に与えるであろう。	
基幹教育科目	文系ディシプリン科目	現代教育学入門	社会科学としての教育学は今日，多様な広がりと深化を見せてきている。それぞれに専門化してきた諸領域は，その射程によって実践から理論までを大きく包み込み，目的や対象を多彩にずらしながら学問研究を多様化させてきたと言える。いまやその広がりは学際的な人間諸科学の様相をなしていると言えよう。本講義では，このような今日の教育学が研究対象とする社会システムや制度、メディア、地域、思想、文化、歴史などの多様なテーマを取り上げることで，その広がりと深化を学問の言葉と視線をもって経験することを目指すこととする。	
基幹教育科目	文系ディシプリン科目	教育基礎学入門	教育は真空のなかで行われる無機質な営為ではない。それは歴史的・文化的・社会的空間で営まれると同時に，極めて複雑で歴史的な存在としての「人間」の生のなかに深く織り込まれ，かつ，「人間」そのものを歴史的・文化的・社会的存在として形成していく当のものである。この意味で教育学とは，様々に生起する教育という事象を巡りながら，「人間とは何か」という問いそのものを陰に陽に問い続ける学問だと言えるだろう。本講義では，こうした教育と教育学とを基礎的視点から描き出すことを目指していくこととする。	
基幹教育科目	文系ディシプリン科目	法学入門	法学の多様な分野のうち，とくに法概念論，憲法学，民法学，刑法学の考え方を順に紹介しつつ，受講者を法学の広く奥深い世界へと誘うことを目指す。 【キーワード】 法学，リーガルマインド，裁判	
基幹教育科目	文系ディシプリン科目	政治学入門	政治学の基礎理論を学習するとともに，それらの理論を適用して現代政治の動態を分析する。加えて，政治学や現代政治が直面する諸問題についても考察する。 【キーワード】 政治学，現代政治，政治学・現代政治の諸問題	
基幹教育科目	文系ディシプリン科目	経済学入門	私たちは，衣食住のすべてを自分の力だけで満たすことはできない。しかし，市場を通じた交換によって，必要なものを国内ばかりか外国からも手に入れることができる。この一見当たり前に思える現象を効率的に行う市場メカニズムとは，どのような原理で動いているのか，また，それを経済社会全体としてどのように把握し理解すればよいかなど，ミクロ経済学，マクロ経済学，国際経済学の基本概念を学びながら経済学の大枠について理解を深める。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
基幹教育科目	文系ディシプリン科目	経済史入門	21世紀となった現在の世界は，20世紀後半に見られた東西対立といった問題から，それを完全には解決しないまま，南北問題という新たな課題に直面するようになった。豊かな国や地域がある一方で，貧しいまま発展から取り残されたような国や地域がある。しかもその「南北格差」は，今や一つの先進国の中にも持ち込まれるようになってきている。そのことも無視することはできない。なぜこのようなことが起こったのだろうか。実は答えは簡単ではない。経済史入門というこの授業では，西洋経済史を中心とした講義と，日本経済史を中心とした講義とに分けて開講されるが，いずれも，「歴史＝暗記科目」という高校までの勉学で作り上げられたかも知れない固定観念を相対化することを目標としつつ，我々が抱える様々な現代的問題を，経済の歴史的歩みを辿ることで考察していく。	
基幹教育科目	文系ディシプリン科目	The Law and Politics of International Society	環境問題，消費者保護問題，欧州連合，子の奪取，国際結婚，国際犯罪，人道的干渉，核兵器問題など，グローバル社会の様々な問題を法及び政治の観点から英語で紹介する。 【キーワード】　グローバル社会，国際社会，法と政治	
基幹教育科目	理系ディシプリン科目	デザイン思考	デザイン思考とは，これまでのような技術的な課題解決ではなく，人間（Desirability）を中心に，ビジネス（Viability），技術（Feasibility）の３つを統合するデザインアプローチである（出典:IDEO）。またデザイン思考は，多様な専門性を持つ参加者が，これまでデザイン学の世界で培われてきた可視化やプロトタイプなどのデザイン手法を用いながら，共同して課題発見と解決を行うところに特徴がある。それは，デザイナーの発想法やデザインメソッドを，見た目のスタイリングや色合いではなく，「未知の課題を発見し解決する」ために用いることである。ここでいうデザインとは，社会のしくみのデザインなど，幅広いデザインを意味する。本授業では，今日，地球規模で起きている課題が人類共通の社会的課題となっていること，社会の変化とともにデザインの役割が変化してきたことを，先進的なケーススタディー事例から理解する。その理解をもとに実践的方法論としてデザイン思考プロセスにトライし，経験を通じて学ぶ。最後に成果をまとめレポートを作成する。	
基幹教育科目	理系ディシプリン科目	情報科学	現代社会における情報通信機器の浸透は著しく，人々は好むと好まざるに関わらず，社会インフラとしての情報通信技術に強く依存している。したがって，複雑化する社会情報基盤を支える情報通信技術の基本原理について正しい理解を得ることは，次世代情報化社会を生きる大学生諸君にとって極めて重要である。この授業では，普段はブラックボックスとして使っている身の回りの情報通信機器の動作原理に関心をもたせ科学的に理解させることを目的に，情報科学の基本的な事項について講義する。	
基幹教育科目	理系ディシプリン科目	プログラミング演習	主として，プログラミング演習を行う。「計算機の動作原理」「情報の効率的表現」「効率的な計算手順」といった，情報科学の基本的概念についても簡単に講義する。この演習は，特定のプログラミング言語の修得が目的ではなく，自ら作成したプログラムにより計算機にデータを処理させる体験等を通じて，情報処理の基本原理について理解を深めさせることを目的とする。	
基幹教育科目	理系ディシプリン科目	社会と数理科学	数学的な考え方と素養を現実社会の話題にも触れながら学ぶ。演習を通じて実際に応用方法にも触れる。 【キーワード】 グラフ・組み合わせ，確率の考え方，最適化問題，統計学初歩，現象数理初歩（微分方程式，初等整数論）など	
基幹教育科目	理系ディシプリン科目	微分積分学	１変数および２変数関数の微積分学の基本事項を学ぶ。 【キーワード】 極限とその性質（数列の極限，等比級数，関数の極限），微分の定義と計算，積分法（微分積分学の基本定理，部分積分，置換積分，有理・無理関数の積分），２変数の偏微分，２重積分と累次積分	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
基幹教育科目	理系ディシプリン科目	微分積分学・同演習Ａ	微分積分学・同演習ＡとＢを通して学習することにより，１変数および多変数の函数の微積分学を体系的に理解し使えるようになる。 微分積分学・同演習Ａでは，主に１変数函数の微積分を扱う。 【キーワード】 極限操作（数列，級数），関数と連続性，微分の定義，連鎖律，高階導関数，テイラー展開，積分の定義と微分積分学の基本定理，積分の計算（部分積分，変数変換，広義積分），初等的常微分方程式（変数分離型）	
基幹教育科目	理系ディシプリン科目	微分積分学・同演習Ｂ	微分積分学・同演習ＡとＢを通して学習することにより，１変数および多変数の函数の微積分学を体系的に理解し使えるようになる。 微分積分学・同演習Ｂでは，多変数関数（主に２変数函数）の微分積分学を扱う。 【キーワード】 多変数関数の連続性と微分（偏微分，全微分，連鎖律），多変数関数のテイラー展開と極値問題，陰関数定理，逆関数定理とその応用，多重積分の定義，多重積分の計算（累次積分，変数変換）	
基幹教育科目	理系ディシプリン科目	微分積分学・同演習Ⅰ	微分積分学・同演習Ⅰ，　Ⅱ，　Ⅲ を通して学習することにより，１変数および多変数の函数の微積分学を体系的に深く理解し使えるようになる。 微分積分学・同演習Ⅰでは主に１変数関数の微積分学を体系的に理解し使えるようになる。 【キーワード】 極限操作（数列，級数），関数と連続性，微分の定義，連鎖律，高階導関数，テーラー展開，積分の定義と微分積分学の基本定理，積分の計算（部分積分，変数変換，広義積分），初等的常微分方程式（変数分離型）	
基幹教育科目	理系ディシプリン科目	微分積分学・同演習Ⅱ	微分積分学・同演習Ⅰ，　Ⅱ，　Ⅲ を通して学習することにより，１変数および多変数の函数の微積分学を体系的に深く理解し使えるようになる。 微分積分学・同演習Ⅱでは主に多変数関数の微分と関連する話題を学ぶ。 【キーワード】 多変数関数の連続性と微分（偏微分，全微分，連鎖律），多変数合成関数の微分法，多変数関数テーラー展開と極値問題，陰関数定理，逆関数定理と応用	
基幹教育科目	理系ディシプリン科目	線形代数	ベクトルと行列に関する基本的な性質を学ぶ。 【キーワード】 ３次元空間，平面の方程式，複素平面，連立一次方程式と行列の演算，行列と線形写像，逆行列，行列式，固有値と固有ベクトル	
基幹教育科目	理系ディシプリン科目	線形代数学・同演習Ａ	線形代数学・同演習ＡとＢを通して学ぶことにより，線形代数の基礎概念を体系的に学修する。 線形代数学・同演習Ａでは，主に行列，行列式の計算手法，およびベクトルの独立・従属などの概念を学習する。 【キーワード】 3次元空間，平面の方程式，複素平面，行列と線形写像（具体例による），連立一次方程式と行列の演算（掃き出し法，基本変形），ベクトルの一次独立と一次従属，行列式，逆行列・余因子行列	
基幹教育科目	理系ディシプリン科目	線形代数学・同演習Ｂ	線形代数学・同演習ＡとＢを通して学ぶことにより，線形代数の基礎概念を体系的に学修する。 線形代数学・同演習Ｂでは，主に線形空間，線形写像の概念を修得する。また，行列の対角化が使えるようになる。 【キーワード】 線形空間，線形部分空間の次元と基底 線形写像の定義，性質，核と像 固有値と固有ベクトル 行列の対角化 内積をもつベクトル空間，正規直交基底 エルミート行列（実対称行列）の対角化	
基幹教育科目	理系ディシプリン科目	数学演習ＩＡ	将来，数学のより高度な知識とより深い理解を必要とする学生を対象に，線形代数・微分積分の演習を通して，数学の基礎力・応用力をつけることをめざす. 【キーワード】 集合と論理，数列・級数の収束，関数の連続， 微分法及びその応用（テーラー展開，極値等），行列に関する基本事項，行列式の基本事項，各種行列式の計算	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
基幹教育科目	理系ディシプリン科目	数学演習ＩＢ	積分，関数列，多変数の微分，線形性，固有値，固有ベクトル，行列の対角化 【キーワード】 積分法とその応用，関数列とその極限，多変数の微分法とその応用，線形性(線形空間，線形写像)の具体例による理解，行列の標準化（固有値と固有ベクトル，固有空間，行列の対角化等）	
基幹教育科目	理系ディシプリン科目	数学演習Ⅱ	将来必要とされる高度な数学知識と深い理解の基礎となる能力を，微分積分・線形代数の演習を通じて修得する。 内容は履修するクラスの習熟度，必要度に応じて調整する。 【キーワード】 （以下は一例で，必要に応じて取捨選択，追加する） 集合と論理，極限の厳密な取り扱い（epsilon-delta論法），数列・級数の収束，関数列とその極限，１変数及び多変数函数の微分法及びその応用，１変数及び多変数函数の積分法とその応用，線形性（線形空間，線形写像）の（具体例を用いた）深い理解，行列の標準化（固有値と固有ベクトル，固有空間，対角化）	
基幹教育科目	理系ディシプリン科目	数理統計学	統計的推測の基本的考え方を身に付け，データ構造を解析する手法について学修する。 【キーワード】 確率（離散型確率変数，連続型確率変数），モデル（母集団，母平均，母分散），統計的推定（標本平均，標本分散，点推定，区間推定，最尤推定），統計的仮説検定（平均の検定，分散の検定，比率の検定），分散分析，回帰分析	
基幹教育科目	理系ディシプリン科目	身の回りの物理学Ａ	例えば，「晴天の空は青く，夕焼けは赤い」という身の回りの物理現象などについて，可能な限り数式を用いない分りやすい講義を通して，自然のしくみを理解する学問としての物理学を学ぶ。日常経験していることを物理の視点から考察することで物理の面白さと重要性を再認識し，物理に対する興味を醸成する。	
基幹教育科目	理系ディシプリン科目	身の回りの物理学Ｂ	例えば，「晴天の空は青く，夕焼けは赤い」という身の回りの物理現象などについて，可能な限り数式を用いない分りやすい講義を通して，自然のしくみを理解する学問としての物理学を学ぶ。日常経験していることを物理の視点から考察することで物理の面白さと重要性を再認識し，物理に対する興味を醸成する。	
基幹教育科目	理系ディシプリン科目	物理学概論Ａ	自然界を理解する学問としての物理学において，基幹教育の物理学は主として，力学，電磁気学，熱力学からなる古典物理学の理解を目指している。そのため，物理学概論Ａ，Ｂの両者を一緒に選択することを強く推奨する。 物理学概論Ａ演習の履修は内容をよりよく理解する上で有益であるが，必ずしも前提としない。 基幹物理学ＩＡの内容を高校物理未履修者あるいは文系学生にも理解できるように設けたもの。力学を初めて学ぶ際に必要な初歩的な知識や数学的準備などの基本的なことから始め，段階的に知識・概念や方法を獲得し，初等的な力学を理解する。	
基幹教育科目	理系ディシプリン科目	物理学概論Ｂ	自然界を理解する学問としての物理学において，基幹教育の物理学は主として，力学，電磁気学，熱力学からなる古典物理学の理解を目指している。そのため，物理学概論Ａ，Ｂの両者を一緒に選択することを強く推奨する。 物理学概論Ｂ演習の履修は内容をよりよく理解する上で有益であるが，必ずしも前提としない。 基幹物理学ＩＢの内容を高校物理未履修者あるいは文系学生にも理解できるように設けたもの。電磁気学と熱力学を初めて学ぶ際に必要な初歩的な知識や数学的準備などの基本的なことから始め，段階的に知識・概念や方法を獲得し，初等的な電磁気学と熱力学を理解する。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
基幹教育科目	理系ディシプリン科目	物理学概論Ａ演習	物理学概論Ａに対応した演習科目。 簡単な現象に応じた運動方程式（微分方程式）が設定でき，それを解くのに必要な力を養成する。また，エネルギーや運動量などの保存則も活用できるようにする。	
基幹教育科目	理系ディシプリン科目	物理学概論Ｂ演習	物理学概論Ｂに対応した演習科目。 電場と磁場および熱力学の概念を理解し，簡単な電気・磁気現象および熱力学に関する各種問題を解くのに必要な力を養成する。	
基幹教育科目	理系ディシプリン科目	基幹物理学ＩＡ	自然界を理解する学問としての物理学において，基幹教育の物理学は主として，力学，電磁気学，熱力学からなる古典物理学の理解を目指している。そのため，基幹物理学ＩＡ，ＩＢの両者を一緒に選択することを強く推奨する。 基幹物理学ＩＡ演習の履修は内容をよりよく理解する上で有益であるが，必ずしも前提としない。 物理学は自然界を理解する学問であり，その自然界は様々な階層・分野やそれらを貫徹した視点に応じた基礎的原理・法則に従っている。ここではその１例としての古典力学を対象として，ニュートンの運動の３法則を基本法則として力学現象を論理的に整理し，運動を記述すること，運動方程式を解くこと，エネルギー・運動量・角運動量の保存則などの物理的概念を身につけることを目標に，質点，質点系，および剛体に関する力学の基本的事項を学ぶ。また，それらを具体的な現象に応用して理解する。	
基幹教育科目	理系ディシプリン科目	基幹物理学ＩＢ	自然界を理解する学問としての物理学において，基幹教育の物理学は主として，力学，電磁気学，熱力学からなる古典物理学の理解を目指している。そのため，基幹物理学ＩＡ，ＩＢの両者を一緒に選択することを強く推奨する。 基幹物理学ＩＢ演習の履修は内容をよりよく理解する上で有益であるが，必ずしも前提としない。 物理学は自然界を理解する学問であり，その自然界は様々な階層・分野やそれらを貫徹した視点に応じた基礎的原理・法則に従っている。ここではその具体例としての電磁気学と熱力学を学ぶ。前半では，場という考え方を中心に電気・磁気現象の基本的事項を学ぶ。後半では，熱現象や熱力学の基礎を学ぶ。それらの基本概念や基本法則を，具体的な現象に応用して理解する。	
基幹教育科目	理系ディシプリン科目	基幹物理学ＩＡ演習	基幹物理学ＩＡに対応した演習科目。 力学の法則をより深く理解し，現象に応じた運動方程式（微分方程式）が設定でき，それを解ける十分な力を養成する。また，エネルギーや運動量などの保存則を十分に活用できるようにする。	
基幹教育科目	理系ディシプリン科目	基幹物理学ＩＢ演習	基幹物理学ＩＢに対応した演習科目。 電場と磁場の概念および熱力学の概念をより深く理解し，電気・磁気現象および熱力学に関する各種問題が解ける十分な力を養成する。	
基幹教育科目	理系ディシプリン科目	物理学の進展	現代の物理学は高度に発達・進展し続けているので，「基幹物理学Ｉ」で学ぶ基礎的な事柄だけでは，研究の最前線の成果を理解することは難しい。そのギャップを埋めるため，物性物理，非線形物理，素粒子物理，宇宙論などの最新の話題に関し，それらを専門とする複数の教員が分かりやすく紹介する。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
基幹教育科目	理系ディシプリン科目	基幹物理学Ⅱ	「基幹物理学Ⅰ」では古典物理学の基礎を学ぶが，ミクロな世界は古典物理学とは異なる量子力学の法則に従っている。また，時空概念の変革をもたらした相対性理論は現代物理学の基礎となっている。この科目では，現代物理学への入門として，量子力学の基礎と特殊相対性理論について講義する。	
基幹教育科目	理系ディシプリン科目	電気電子工学入門	本講義では電気電子機器類の動作原理を理解するために、電気工学の基礎的事項を習得する。	
基幹教育科目	理系ディシプリン科目	原子核物理学	原子核物理学では，放射線による診断・治療に必要となる物理関連の事項を取り扱う。特に原子核から放出される核放射線(α線，β線，γ線，中性子線)および原子核反応についての理解を深めることに重点を置く。その為に，原子核の基本的な性質について学び，放射性壊変(α壊変，β壊変)，核の殻構造(shell model)，原子核反応の理論，原子核の統計的性質などについて理解を深める。	
基幹教育科目	理系ディシプリン科目	身の回りの化学	化学に関する新聞記事や報道番組の内容を化学の基本的な考え方で理解できるようになるために必要な化学の基本概念を高校レベルから解説する。その後，身の回りの化学製品，化学的事象や環境問題を取り上げ，それらに対する化学的な理解の方法を解説する。	
基幹教育科目	理系ディシプリン科目	基礎化学	化学の基本概念に基づいて，物質の構造，性質や反応をどのように理解するかを講義する。化学の基礎を高校レベルから復習し，大学での専門教育を理解するのに必要な知識や理解力を鍛える。	
基幹教育科目	理系ディシプリン科目	無機物質化学	無機物質化学では，まず元素の周期表に基づき原子の電子構造と周期律との関係を理解，次に原子同士を結びつける化学結合についての基礎を学び，代表的な無機化合物の性質との関係を修得する。さらに，現代社会を支える重要な無機化合物を紹介し，構造や物性について概観する。この科目を修得後，有機物質化学を履修することで化学の幅広い知識が得られるように計画されている。	
基幹教育科目	理系ディシプリン科目	有機物質化学	この科目では，有機化合物の構造と反応性について系統的に理解するための基礎知識の修得を目的とする。はじめに身の回りの有機化合物の特徴について概観した後，有機化合物の官能基別の分類法と基本的な化合物命名法について説明する。次に，異性体の分類法や表示法の概要と，分子構造を立体的に考えることの重要性について学ぶ。そして，いくつかの代表的な反応について，電子移動の方向とその起こりやすさがどのような要因に基づいているのかを考え，反応の基本的な原理を理解する。最後に，それぞれの官能基に特徴的な反応と合成法について代表的な例を見ていく。	
基幹教育科目	理系ディシプリン科目	基礎化学結合論	化学の基本概念の１つである量子化学的なものの見方・考え方の定量的理解（数学を用いる）を目的とする。すべての物質の化学的性質は，その物質の構成単位である微視的な粒子（原子・分子）の性質によって決まる。そこで，原子の電子構造，元素の周期的性質，分子の生成と化学結合の種類，分子の形等について，電子軌道，分子軌道を基盤として学ぶ。	
基幹教育科目	理系ディシプリン科目	基礎化学熱力学	物質の状態とその変化を理解するのに，微視的観点から単独の原子・分子を取り扱う量子化学と並んで，アボガドロ数程度の原子・分子の集団が示す性質を巨視的観点から取り扱う化学熱力学を用いることが可能である。この講義では熱力学の基本法則に基づき，分子の集合状態やその変化，化学反応などの現象を自由エネルギー変化の観点から捉え，平衡状態の考え方や変化の方向がどのように決まるかを，演習を交えながら学ぶ。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
基幹教育科目	理系ディシプリン科目	現代化学	無機化学，有機化学，生物化学，物理化学，分析化学や理論化学などの中から２１世紀の社会を支えるさまざまな分野の化学を，化学の基本原理に基づいて概観する。また，最先端の研究事例を大学，企業の研究者から学び，化学研究の未来，社会と化学の関わりを知る。	
基幹教育科目	理系ディシプリン科目	基礎生化学	タンパク質，糖，脂質の構造および各生体分子の機能について概説し，生化学の基礎である生体分子の構造と機能に対する理解を深める。	
基幹教育科目	理系ディシプリン科目	機器分析学	機器分析法は物質の同定，化学構造，存在量の決定などには必須の方法である。広く用いられている機器分析法の中から，各種分光学的分析法を中心に，それらの基礎原理と応用を講義する。	
基幹教育科目	理系ディシプリン科目	生命の科学Ａ	授業担当者の専門分野から題材をとり，一般向けの解説を通して生物に共通した自己複製・代謝・複雑な構造と機能などの特徴を理解できるようになることを目的に講義を行う。個々の講義内容は，次のような項目に関連したものからなる。 ・生物に共通した特徴：代謝（呼吸・光合成，恒常性など） ・自己複製（DNA複製，細胞分裂，生殖，遺伝など） ・生物の複雑な構造と機能（生体を構成する分子，細胞の構造と機能，組織・器官・個体の構造と機能，各種生理現象，免疫現象など）	
基幹教育科目	理系ディシプリン科目	生命の科学Ｂ	授業担当者の専門分野から題材をとり，一般向けの解説を通して個体レベル以上で示される生物の多様性，生物と環境との関係などを中心とした特徴を理解できるようになること，生物多様性の保全や生態系サービスの持続的な利用に関して考察できるようになること等を目的に講義を行う。個々の講義内容は，次のような項目に関連したものからなる。 ・生物の多様性と生物相互の関係・生物と環境との関係 ・生物相互の関係（繁殖行動など） ・生物相互の関係（食物連鎖など） ・生態系における物質循環 ・生物の進化 ・生物多様性の保全と生態系サービスの持続的な利用	
基幹教育科目	理系ディシプリン科目	基礎生物学概要	細胞生物学と集団生物学の内容をコンパクトにしたものとする。高校時に生物学未履修の学生も対象にし，生物に対する基礎的な理解を得ることを目的とする。具体的には，生物に共通した自己複製・代謝・複雑な構造と機能などの特徴と生物の多様性について，以下のような項目に関連した講義を行う。 ・生物に共通する特徴と生物の示す多様性 ・生物の最小単位としての細胞の構造と機能 ・生体分子の特徴（生体低分子，生体高分子） ・生物のエネルギー代謝（呼吸） ・生物のエネルギー代謝（光合成） ・遺伝情報の発現と伝達（DNAの構造と複製） ・遺伝情報の発現と伝達（遺伝情報の発現） ・遺伝（減数分裂，メンデル遺伝の基礎） ・多細胞生物（動物・植物）の成り立ち（個体発生） ・生物の環境への応答と適応（個体レベルの生理学，感覚・神経生理） ・生物相互の関係（繁殖行動など） ・生物相互の関係（食物連鎖など） ・生態系における物質循環など ・生物の進化	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
基幹教育科目	理系ディシプリン科目	細胞生物学	生物に共通した特徴（自己複製・代謝・複雑な構造と機能）を示す基本単位である細胞の構造と機能についての基本的な理解を得ることを目的とする。具体的には以下のような項目についての講義を行う。 ・細胞の微細構造とその機能（生体膜，細胞内小器官，細胞骨格など） ・細胞を構成する生体分子（タンパク質，核酸，脂質，糖など） ・細胞によるエネルギーの獲得とその利用（呼吸，光合成，物質輸送，運動） ・細胞レベルでの遺伝情報の発現と伝達（遺伝情報の複製と発現，体細胞分裂・減数分裂，メンデル遺伝の基礎） ・細胞による情報処理（細胞間の情報伝達，細胞内情報伝達系） ・細胞の多様性（細胞分化と形態形成）	
基幹教育科目	理系ディシプリン科目	集団生物学	主として個体以上のレベルにおいて，生物相互・生物と環境の関係性，生物の多様性についての基本的な理解を得ることを目的とする。具体的には以下のような項目についての講義を行う。 ・地球上の多様な生物の概観 ・種・遺伝子プール・遺伝的多様性 ・個体の行動と生物の適応 ・種間の相互作用・生物集団の動態・生態系 ・生物の進化 ・生態系における物質循環	
基幹教育科目	理系ディシプリン科目	分子生物学	遺伝子の実体であるDNA，ゲノムを中心とした分子生物学の基礎を理解し，遺伝子工学・バイオテクノロジーと言った言葉に表されるようなその応用面での基礎も理解することを目指す。具体的には以下のような項目についての講義を行う。 ・遺伝子・ゲノムの概念とその実体 ・遺伝子の構造と機能（DNA，RNAの構造，DNA複製，転写・翻訳） ・遺伝子発現の調節（転写調節，翻訳調節） ・遺伝子操作の基礎（PCR法の原理，遺伝子クローニング・遺伝子組換え技術の基礎）	
基幹教育科目	理系ディシプリン科目	生態系の科学	増加し続ける世界の人口に対応するためには，効率的で安定した生物生産技術を確立する一方で，生物資源の利用形態を環境保全型で持続可能な形態に変えていく必要があり，これは人類にとっての大きな課題である。この問題を理解していくためには，個体以上のレベルでの生命現象を科学する生態学が不可欠である。しかし，生態学の全体像を理解するには，個体レベルから生態系レベルまでの総てのレベルでの，生物と環境との相互関係の法則性を理解する必要がある。 具体的な内容は以下のような項目からなる。 ・環境に対する生物の個体レベルでの反応を科学する生理生態学 ・環境に対する生物の個体間レベルでの行動生態学，個体群生態学，群集生態学 ・生態系レベルでの生物の挙動を総合的に科学する景観生態学や環境生態学 生態学を全体的に理解するために必要な基本概念についても総合的に解説する。	
基幹教育科目	理系ディシプリン科目	地球と宇宙の科学	現在の太陽系では，地球だけが，表面に液体の水を安定に保持し，生命をはぐくんでいる惑星である。この授業では，まず，太陽系の惑星・衛星の特徴をみていきながら，地球の特徴を認識してもらう。そのうえで，地球がどのようにして現在見られるような惑星になったかを学んでもらう。	
基幹教育科目	理系ディシプリン科目	地球科学	現在の地球を構成する物質と環境は，個体地球と大気・海洋および生命の46億年にわたる相互作用によって形成されてきた。地球科学では，地球の表層，地球の実質，化石等による生命起源の探索という３つの主要なテーマを通して，私たちが生まれ生活している惑星「地球」の進化と実態について学び，理解を深める。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
基幹教育科目	理系ディシプリン科目	最先端地球科学	宇宙，太陽活動と電磁圏，大気や海洋，生物と地球表層環境，地球惑星の物質科学や力学，地球や惑星の形成や進化	
基幹教育科目	理系ディシプリン科目	宇宙科学概論	高等学校での地学の履修率がほとんど０％に近いことを踏まえた上で，太陽地球系科学と宇宙に関する基礎的な概念を理解させることを目的とし，太陽地球系科学の最新の成果および天文学の基礎を学ぶ。	
基幹教育科目	理系ディシプリン科目	図形科学	私たちを取り巻く大小さまざまの三次元の対象物（例えば機械や建物，土木構造物など）は，いずれも二次元平面上の図情報である設計図を基につくられています。また，ディスプレイやスライドをはじめとする表示メディアには，三次元の対象物が二次元の映像・図として表現されます。三次元対象物を二次元平面上に図形として表現する能力，逆に描かれた図形から対象物を三次元的に理解し解析する能力は，対象物の情報を伝達し受容するための基礎能力といえます。本科目を学ぶ目的は，講義と演習を通じて，これらの能力を身につける事にあります。学期の前半は，図形の表現・解析の基礎である投影の概念と正投影法の規則を，点や直線・平面・立体を例に修得します。後半では，立体の切断や相貫・展開など前半の応用に加え，正投影法以外の投影法（軸測投影・斜投影・標高投影・透視投影・陰影）の中から，受講対象者に必要と考えられる投影法を併せて修得します。	
基幹教育科目	理系ディシプリン科目	空間表現実習Ⅰ	図法の基礎理論を学んだ後，機械装置やその部品，土木構造物やイメージした建築空間とその付随施設などを，二次元平面上の図形として表現できることでしょう。しかし，これらを実際につくるには，この図形に対象物のサイズや配置，用いる材料や加工方法・表面性状などの情報を付加し，設計者と制作者の間の情報伝達手段として活用できる“図面”を作製する必要があります。本科目では，図面を理解し作製するために必要な基礎知識を，講義と実習を通じて修得します。すなわち，工業系設計・製図が重要な場合は，図面に関する国際的な取り決め事項（ISO・JIS製図関連規格）や図面に特有の慣用的表現法・作図技法などを中心とした講義項目，建築系設計・製図に重みを置く場合は，建築物の生産プロセスにおける各種図面の役割と建築製図法の基礎に関する講義項目，また環境系設計・製図に重みを置く場合は，コンセプト・イメージスクラップ・エスキース・外部空間の構成や建築物の構成要素・植栽・造園に関わる講義項目が準備されています。 これらの講義内容をより確実に身につけるため，文字・線の練習，ねじや継手など機械要素部品の写図・スケッチ及び製図，建築図面や造園図面のコピー，イメージスクラップの作製，外部空間の改造提案に関するプレゼンテーション用図書・模型の作製・製作と発表，実在する建築物の実測と製図など多くの実習課題の中から，各専門の最適課題について主に製図器械やパソコン（CADソフト）を用いて製図実習を行います。	
基幹教育科目	理系ディシプリン科目	世界建築史	世界の建築の歴史的な成り立ちを，社会，文化，芸術の様相，また技術の進歩と関連付けて理解し，建築の歴史・意匠に対する認識を深める。	
基幹教育科目	理系ディシプリン科目	日本建築史	日本建築・都市の構造・技術・意匠の創出とその変遷を，大陸の建築文化を加味しながら当時の社会構造（権力，政治，経済，軍事，文化など）との関係で捉え，概説する。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
基幹教育科目	理系ディシプリン科目	建築デザイン	建築のデザインを論理的に理解するために，デザイン理論の基礎，現代建築の事例を学ぶ。	
基幹教育科目	理系ディシプリン科目	コンピュータープログラミング入門	放射線医学関係の医療技術者（診療放射線技師，医学物理士など）は，最先端の医用画像処理技術に基づく医療機器を操作する必要がある。そのためには医用画像処理技術の基礎となるソフトウエアを知る必要がある。そこで，この講義では，医用画像処理のプログラミングに必要なコンピュータプログラミング（C言語）の基礎を演習する。主に，C言語の基本，数値演算のアルゴリズムとプログラミングを学習する。	
基幹教育科目	理系ディシプリン科目	自然科学総合実験（基礎）	自然科学総合実験は，全理系学部に共通した内容で，物理学・地球科学・化学・生物科学の各分野にわたるそれぞれのテーマに沿った観察・実験を行い，結果をレポートとしてまとめることを通して実験の基本的手法を学びます。 自然科学総合実験_基礎では，全理系学部に共通した内容で，物理学・地球科学・化学・生物科学の各分野にわたる基礎的な６テーマの観察・実験を行い，結果をレポートとしてまとめることを通して実験の基本的手法を学ぶ。	
基幹教育科目	理系ディシプリン科目	自然科学総合実験（発展）	自然科学総合実験_発展では，全理系学部に共通した内容で，物理学・化学・生物科学の各分野にわたる発展的な６テーマの実験を行い，結果をレポートとしてまとめることを通して実験の基本的手法を学ぶ。	
基幹教育科目	サイバーセキュリティ科目	サイバーセキュリティ基礎論	インターネットや ICT 技術の普及によって，サイバーセキュリティに対する重要性が日に日に高まっています。また，考慮すべき領域は，コンピュータをインターネットに接続している空間だけに留まらず，パソコンを持ち運んでいる時，あるいは銀行オンラインシステムを利用している時などを含めた，サイバー空間全体に広がっています。このような状況で我が国ではサイバーセキュリティ基本法が施行され，大学におけるセキュリティの教育に加え，国民個人のセキュリティへの対応能力の向上が求められています。本講義では，学年，理系・文系を問わず，今後 ICT 国際社会で生き抜くためのサイバーセキュリティ力を向上させることを目的として，セキュリティに関する基礎的な技術から法律，倫理まで幅広く学びます。	
基幹教育科目	健康・スポーツ科目	健康・スポーツ科学演習	健康・スポーツ科学演習では，身体運動やスポーツが心身の健康に及ぼす効果を身体的，心理的，社会的な観点から理解するとともに，健康的で充実した学生生活および社会生活を送るために必要な身体的および心理社会的能力の基礎を身につけることを目的とします。具体的には，学修活動・社会活動の基盤となる健康・体力を向上させるための身体運動あるいは心身トレーニングの原理と実践方法を学習するとともに，自律的セルフケアスキルであるライフスキル（ストレス対処スキル，目標設定スキル，リーダーシップスキル，コミュニケーションスキルなど）の習得を目指します。 ＊アダプテッドコース 病気やけが，障害などの理由により，通常の健康・スポーツ科学演習の授業を受講することが困難な学生のために，アダプテッドコースが開講されています。アダプテッドコースの授業内容は，受講学生の健康状態などを勘案して決定します。	
基幹教育科目	総合科目	アカデミック・フロンティアⅠ	九州大学で現在遂行されている，または，九州大学卒業者が社会の様々な現場で携わっているフロンティア研究について，それに関わるリーダー研究者が，課題の歴史的背景から現在の研究状況，そして将来の展望や研究のもたらす未来について語る。学内から19名の講師を選抜し，研究内容の偏りがないようにI，II，IIIに配分する。学生はI，II，IIIのうち，興味のある授業を受講することで，九州大学で現在進行中の最先端研究を目の当たりにすることとなる。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
基幹教育科目	総合科目	アカデミック・フロンティアⅡ	九州大学で現在遂行されている，または，九州大学卒業者が社会の様々な現場で携わっているフロンティア研究について，それに関わるリーダー研究者が，課題の歴史的背景から現在の研究状況，そして将来の展望や研究のもたらす未来について語る。学内から19名の講師を選抜し，研究内容の偏りがないようにI，II，IIIに配分する。学生はI，II，IIIのうち，興味のある授業を受講することで，九州大学で現在進行中の最先端研究を目の当たりにすることとなる。	
基幹教育科目	総合科目	女性学・男性学Ⅰ	本講義は，両性がよりよく共生しうる社会を担うために，既存の社会や学問に遍在するさまざまな性差にかかわる既成概念や課題についての洞察力を養うことを目的とする。労働や雇用の場，学びの場，また私生活における問題，そうした課題に対する女性の意識や行動の歴史，逆に男性の生き方の問題，さらに文化や表現と性差，あるいは，性差の論拠とされてきたが故に多くの問題を孕んでいる看護や医療，保健，福祉等の身体をめぐる社会的・政治的状況など，様々な視角から性差の問題をとらえる。	
基幹教育科目	総合科目	女性学・男性学Ⅱ	本講義は，両性がよりよく共生しうる社会を担うために，既存の社会や学問に遍在するさまざまな性差にかかわる既成概念や課題についての洞察力を養うことを目的とする。労働や雇用の場，学びの場，また私生活における問題，そうした課題に対する女性の意識や行動の歴史，逆に男性の生き方の問題，さらに文化や表現と性差，あるいは，性差の論拠とされてきたが故に多くの問題を孕んでいる看護や医療，保健，福祉等の身体をめぐる社会的・政治的状況など，様々な視角から性差の問題をとらえる。	
基幹教育科目	総合科目	日本事情	この授業は留学生のために開講されるが，異文化に興味がある日本の学生にもぜひ参加して欲しい。以前から「留学生と日本の学生は友達になりにくい」という話はよく聞く。それは出会うチャンスがないこと，一緒に何かをする時間や場所がないこと，などが原因であると指摘されている。この授業では，コミュニケーションゲームなどを用いて，留学生と日本の学生が直接話をし，お互いに学んでいく。	
基幹教育科目	総合科目	社会連携活動論：ボランティア	大学生活では授業やサークル活動のみならず，現実の社会に出て活動を行う機会があり，それは個人と社会をつなぐ重要な働きを担っています。そういった活動の中から，この授業ではボランティアを取りあげます。近年，広い範囲にわたり多様なボランティアが行われていますが，どのような背景の下，この広がりが生まれてきたのか，さらに企業や行政と異なり，どういった役割を担っているか等を授業で扱います。同時に，グループディスカッションに加え，ゲストスピーカーをお呼びして，ボランティアの実践例や取り組む観点を紹介していただき，自身の社会への関わりを考察することで，社会連携活動への姿勢を培うことをねらいとします。	
基幹教育科目	総合科目	社会連携活動論：インターンシップ	大学生活では授業やサークル活動のみならず，現実の社会に出て活動を行う機会があり，それは個人と社会をつなぐ重要な働きを担っています。そういった活動の中から，この授業ではインターンシップを取りあげます。インターンシップは平成9年以降に本格的に取り組まれ始めた新しい活動であり，企業の現場で共に働くことで職業経験を積み，働くことの意義や自身の今後の生き方を展望する機会を提供する活動です。そこで，授業では講義だけではなくグループディスカッションに加え，ゲストスピーカーをお呼びして，インターンシップの実践例や取り組む際の注意点等を紹介していただき，自身の社会への関わりを考察することで，社会連携活動への姿勢を培うことをねらいとします。	
基幹教育科目	総合科目	Law in Everyday Life B	In this class, based on the topics learned in "Law in Everyday Life A", students will deepen their understandings on how law and life interact, and will focus on additional countries' laws. 「Law in Everyday Life A」で学んだことを踏まえて，さらに，法と生活の関わりについて理解を深め，各国の法について検討を行います。	
基幹教育科目	総合科目	バリアフリー支援入門	本講義では，社会参加や活動が制限されている，様々な障害を持つ人への理解を深めるために疑似体験（体験機器，グループワーク）や，自伝（本・映画）の鑑賞をおこないます。その後，自分たちの理解をもとに，障害のある人の体験を他の人たちに伝える企画（ショートフィルム制作，展示会企画など），大学内のバリア（社会的障壁）を軽減するための取り組み（バリアフリーマップ作成など）を行います。これらの実習を通し，障害学生とサポートスタッフがお互い理解し合い学び合える自律的成長をし，この場で得た成果をコミュニティに還元させる態度を養います。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
基幹教育科目	総合科目	ユニバーサルデザイン研究	本講義はオムニバス形式で，アクセシビリティ研究やバリアフリー研究に関連する様々な分野の専門家（医学，教育学，心理学，脳科学，建築学，社会福祉学，法学，リハビリテーション学，障害者スポーツ学など）を学内外から招き，ユニバーサルデザイン社会の構築に必要な知識的理解と体験的理解の両方を深めることを目的とします。授業を通して，障害の有無等に関わらず多様な人々の社会参加を進めるための理解を深め，柔軟な知識と発想を背景としたグローバルな視野を持つことをめざします。	
基幹教育科目	総合科目	アクセシビリティ入門	本講義では，障害の有無や身体特性などの違いに関係なく，多様な利用者のアクセシビリティ（利用しやすさ，参加しやすさ）を推進できる人材の育成を目的とします。前半では支援技術の習得（テキストデータ作成，ノートテイク，ガイドヘルプ，ICT技術など），社会資源見学（支援機器の企業，就労移行支援事業所等）を行い，後半では現場での実習に臨みます。これらの実習を通して，誰もが学びやすい修学環境の構築に貢献するとともに，支援活動に関する経験を積み重ねながら，支援ニーズや支援方法への理解を深めます。	
基幹教育科目	総合科目	人と人をつなぐ技法	この授業は、人々をつなぎチームで動くときに必要とされる観点や能力について、ファシリテーションという技法を踏まえながら学ぶことを目的とする。講義形式、ワークショップ、ゲームなど多様な手法を使いながら、ファシリテーションの技法を身につけ、柔軟なコミュニケーション能力と、チーム活動を円滑に進めるための技法の習得を目指す。	
基幹教育科目	総合科目	コミュニケーション入門	コミュニケーションを様々な角度から見つめ直すことで、相手を意識したコミュニケーションとは何かを考える機会を提供します。	
基幹教育科目	総合科目	体験してわかる自然科学	実験を通して身近な現象の科学を体験的に学ぶ授業です。「自然科学総合実験」を履修していない学生を対象として開講します。実験科目なので、希望者が多い場合は受講者数を２０名までとします。自然科学は「理系」のひとだけのものではありません。苦手意識を捨てて、自分の体験を通して自然の仕組みを理解すれば、楽しく学ぶことができます。実験テーマは科学の広い分野から選ばれています。	
基幹教育科目	総合科目	健康疫学・内科学から見たキャンパスライフ	大学生は入学後の生活環境がそれまでと激変して，その対応の不備によっては心身の健康問題を抱えることがあります。加えて大学時代は社会人になってからの健康生活を確立するための重要な時期でもあります。本科目では主に内科学や身体運動疫学の観点から健康という概念を概説し，健康科学を日常生活に取り入れて健全な大学生活をサポートするための具体的な行動指針を説明します。	
基幹教育科目	総合科目	心理学・精神医学から見たキャンパスライフ	学生期は，多様な経験を通じて心理的に変化・成長する時期ですが，それに伴って悩みや葛藤を抱えることも少なくありません。本講義では，キャンパスライフ・健康支援センターに所属する学生相談カウンセラーおよび精神科医が，学生期における心理的な課題や心の危機について講義を行います。受講学生が自分自身の大学生活について振り返る時間も設けます。	
基幹教育科目	総合科目	アジア埋蔵文化財学A	最新の考古学，人類学，地球科学などの様々な関連学問分野を融合した，あらたな埋蔵文化財学を九州大学アジア埋蔵文化財センターが提供する。センターの研究で得られた最新研究の成果を提示しながら，既存の学問分野では導くことのできないフロンティア研究への挑戦を涵養する。九州大学がすすめる文理融合研究の一端を学生に提示し，幅広く学び研究する楽しさを身につける。主に考古学と地球科学に関連した講義を予定している。	
基幹教育科目	総合科目	アジア埋蔵文化財学B	最新の考古学，人類学，地球科学などの様々な関連学問分野を融合した，あらたな埋蔵文化財学を九州大学アジア埋蔵文化財センターが提供する。センターの研究で得られた最新研究の成果を提示しながら，既存の学問分野では導くことのできないフロンティア研究への挑戦を涵養する。九州大学がすすめる文理融合研究の一端を学生に提示し，幅広く学び研究する楽しさを身につける。主に考古学と人類学や歴史学に関連した講義を予定している。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
基幹教育科目	総合科目	韓国・朝鮮研究の最前線Ⅰ	九州大学に学ぶ学生諸君が、その所属学部・専攻分野の如何を問わず、知っておくべき隣邦に関する学術的な営為・研究動向について、最新の情報を伝えるとともに、それが現在の日韓関係でどのような意味を有するのかについて一緒に考える。	
基幹教育科目	総合科目	韓国・朝鮮研究の最前線Ⅱ	「韓国・朝鮮研究の最前線I」に引き続き、「韓国・朝鮮研究の最前線II」はさらに自らも取材した韓国・朝鮮研究の実情についてプレゼンテーションを行うとともに、その内容を受講者全員で討議する。	
基幹教育科目	総合科目	グローバル社会を生きるⅠ	私たちの生活はグローバル化の直中にあり、日頃接している情報や商品、また様々な社会活動等を通して、あらゆるところでその影響を受けています。その影響は、すぐには気がつかないようなものも多くあり、場合によっては生命に関わるようなリスクにつながることもあります。この講義では、そうしたグローバル社会の成り立ちやその影響をみる多角的な視点から論じ、その理解に必要なと理論と方法に関する基礎知識を学びます。それをふまえて、グローバル社会の意味を生活に結びつく形で考えます。「グローバル社会を生きる ＩＩ」を合わせて履修し、諸問題の把握と分析をさらに学ばれることをお勧めします。	
基幹教育科目	総合科目	グローバル社会を生きるⅡ	私たちの生活はグローバル化の直中にあり、日頃接している情報や商品、また様々な社会活動等を通して、あらゆるところでその影響を受けています。その影響は、すぐには気がつかないようなものも多くあり、場合によっては生命に関わるようなリスクにつながることもあります。この講義では、そうしたグローバル化が生み出す多様な問題を論じ、その問題の分析に必要な理論と方法を学びます。それをふまえて、問題解決の方法を皆さんと一緒に考えます。「グローバル社会を生きる Ⅰ」を履修し、グローバル社会への基礎的な視点を習得していることが望まれます。	
基幹教育科目	総合科目	社会参加のための日本語教育Ⅰ	「人をつなぎ、社会をつくる」という課題が現代の日本語教育に課せられた大きな課題となっています。本授業では、日本語母語話者、日本語学習者双方の観点から社会参加のための日本語教育を検討します。その際、特に社会的・文化的な観点から現実の日本語コミュニケーション、社会への参画、自己実現といった課題を捉え直すことが重要ではないかと考えます。コトバと社会と人との橋渡しができるよう、日本語教育をめぐる問題を一緒に考え、行動してみませんか。	
基幹教育科目	総合科目	社会参加のための日本語教育Ⅱ	「人をつなぎ、社会をつくる」という課題が現代の日本語教育に課せられた大きな課題となっています。本授業では、日本語指導が必要な児童生徒、生活者としての外国人の視点から社会参加のための日本語教育を検討します。その際、特に社会文化的な規範や価値観といった観点から「聞く」「話す」「読む」「書く」といった日本語コミュニケーションを捉え直すことが必要ではないかと考えます。コトバと社会と人との橋渡しができるよう、日本語教育をめぐる問題を一緒に考え、行動してみませんか。	
基幹教育科目	総合科目	フィールドに学ぶA	私たちをとりまく情報環境は大きく変わってきていますが、現場に立って物事をみることの大切さは変わっていません。フィールドに学ぶ姿勢は、分野を問わず学問の基礎として、また、人生における様々な選択や決断をより適切に行うために、重要です。この講義は一定の学問分野を足場としながらできるだけ一般的な形で、フィールドへの入り方、歩き方、学び方、およびそこで必要な倫理・安全性への配慮について学びます。それをふまえて生涯役立つフィールド感覚を養います。AとBでは異なる学問分野を足場にした講義を行いますので、多角的なフィールド感覚を養うために「フィールドに学ぶ B」を合わせて履修することが望まれます。	
基幹教育科目	総合科目	現代企業分析	本講義では、投資家の立場にたち、財務・株価データを用いた企業の分析方法について学習する。具体的には、企業の収益性や安全性(倒産可能性)をどのように測定・評価するのか、さらには投資対象として魅力的な株式とはどのような属性を有するのか、などについて教員による講義と学生によるグループワークを通じて学習する。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
基幹教育科目	総合科目	現代経済事情	本講義では、財政・社会福祉・金融・企業など現代経済の諸側面の一つに焦点を当て、直近の動向や問題を紹介するとともに、関連する研究成果を分かりやすく説明する。	
基幹教育科目	総合科目	ことばの科学	ことばの音韻・語彙・文法の構造やそれらの歴史的発達のあり方，意味伝達・メッセージ理解のメカニズム，言語習得のプロセスなどのさまざまな観点について，英語，日本語を始めとするアジアやヨーロッパの言語の具体例を検討しながら多面的に分析します。一連の講義を通じて，「ことば」という私たちにとってごく身近な事象に対し，科学的にアプローチする視点を身につけます。	
基幹教育科目	総合科目	水の科学	異なる専門分野の教員がそれぞれの立場から「水」についての科学的な話題を提供します。 (1) 太陽系における水，(2) 地球表層での水の挙動，(3) 身近な水環境と資源としての水，(4) 水の基礎化学と生物との関わり　など	
基幹教育科目	総合科目	数理医学	医学への数学の応用は未だに萌芽期にあります。本講義では，この分野の将来展望を，日本のトップ研究者８人のリレー講義形式で紹介します。	
基幹教育科目	総合科目	医療倫理学Ⅰ	バイオエシックスという言葉は、単に倫理学と生命科学が交差する人間的探求の特定の分野というだけではなく、学問上の一領域、つまり医学、生物学そして環境研究における政治的権力、さらにその結果に対する文化的な見方をも指す。狭義に理解すれば、生命倫理は重大な科学的そして技術的変化に直面して生じた一分野とも言える。生命倫理学における歴史、基本原理・原則を学び、医療を取り巻くさまざまな倫理問題やグルーバルな視点から環境倫理問題について考究する。医療倫理学Ⅰは、医療倫理学Ⅱ（応用編）の基礎学習となる。	
基幹教育科目	総合科目	医療倫理学Ⅱ	米国で発祥した患者の権利を基盤に規成の価値観への懐疑や先端科学技術への批判について、医療倫理という観点のみならず、生命倫理の観点から広く学習する。脳死・体外受精・臓器移植・ターミナルケア等、先端医療技術を背景とした生命観の変容と受容について理解し、問い直されている生命の意味を考察する。また、多様な価値観と患者・被験者の自己決定権を尊重するようになった過程とその概念について学ぶ。	
基幹教育科目	総合科目	科学の進歩と女性科学者Ⅰ	科学史において、男性科学者に比較し、女性科学者として生きていくことは、より狭き門であった。そこで史実・様々な文献を通し、女性科学者たちが『如何に困難を乗り越え、輝かしい功績を残せたのか』『その功績は科学の進歩にどのような役割を果たしたのか』等について学び、彼女たちの強い意志・当時の時代背景を学習する。主に、20世紀に活躍した女性科学者を取り上げる。また、関連した他の研究者たちや大学、研究所についても紹介する。	
基幹教育科目	総合科目	科学の進歩と女性科学者Ⅱ	『科学の進歩と女性科学者 II』では『科学の進歩と女性科学者 I』で紹介した以外の女性科学者を取り上げるとともに、その礎となった昔の女性科学者たちにも焦点をあてる。そして『もし、自分だったらどう対処するか』『現在の私達にできることは何か』等について考察し、『生きるヒント』を模索する。	
基幹教育科目	総合科目	糸島の水と土と緑Ⅰ	水・土・緑は人にとって必要不可欠な環境資源であり，これらの保全と合理的活用が健全な地域創りや地域社会の持続的発展に繋がります。本講義では，伊都キャンパスの拠点である糸島地域を対象に，水・土・緑が環境資源としていかに生活・生産基盤を支えているかを学びます。とくに，糸島地域が抱える農業農村環境問題の理解を通じて，環境保全の大切さ，さらには人と自然環境の持続的共生の大切さを学びます。本講義は，農学系教員が，生物資源環境に関わる基礎的な内容を中心に，水，土，緑の順番で授業を行います。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
基幹教育科目	総合科目	糸島の水と土と緑Ⅱ	水・土・緑は人にとって必要不可欠な環境資源であり，これらの保全と合理的活用が健全な地域創りや地域社会の持続的発展に繋がります。本講義では，伊都キャンパスの拠点である糸島地域を対象に，水・土・緑が環境資源としていかに生活・生産基盤を支えているかを学びます。とくに，糸島地域が抱える農業農村環境問題の理解を通じて，環境保全の大切さ，さらには人と自然環境の持続的共生の大切さを学びます。本講義は，農学系教員が，生物資源環境に関わる応用的な内容を中心に，水，土，緑の順番で授業を行います。	
基幹教育科目	総合科目	命のあり方・尊さと食の連関	授業前半では，地産地消につながる世界的社会問題や風土の文化的背景について学び，命のあり方に向き合って，未来につづく社会デザインを共に探るため，「農と命」に関する講義やアート・ワークショップ「未来につづく道」を行う。後半では，家畜と人間の関わりを学び，加工・調理を実践して，人間が家畜の命をいただくことによって得ている食料と食文化を考える。命のあり方・尊さと食の連関を根源から学ぶ。	
基幹教育科目	総合科目	食肉加工の理論と実践 −食への理解を深める−	食肉の加工に関する理論を学び，さらに農学部附属農場（糟屋郡粕屋町）の加工設備を使って燻煙製品であるベーコンやソーセージ作りを行います。冷蔵設備のない時代に培われた「乾燥・塩漬・燻煙」による肉の保存技術など，日本の「農耕社会」にはなかった食肉の文化を学び，現在の我々の食に対する理解を深めていきます。	
基幹教育科目	総合科目	先進的植物生産システム概論Ⅰ	「植物工場」と称される先進的植物生産システムは，農業に関する知識と技術だけでなく様々な領域の学術情報と産業技術を加味し，植物の栽培条件を人為的にコントロールして高品質・高付加価値の農産物を得ようとするものである。授業では，生物環境利用推進センターの研究成果を踏まえ，植物工場基盤技術の開発について概説する。受講生はこれを理解したうえで知識を普遍化し，「専門的に深化した学術的探求と，広範な一般的知識を融和させることによって，新たに有用な技術が創造される」というプロセスについて思索を深める。	
基幹教育科目	総合科目	先進的植物生産システム概論Ⅱ	「植物工場」と称される先進的植物生産システムは，産業技術として改善され，発展することにより，その普及・拡大が進んでいる。授業では，その波及効果について概説する。受講生はこれを理解したうえで知識を普遍化し，「専門的に深化した学術的探求と，広範な一般的知識を融和させることによって，新たに有用な技術が創造される」というプロセスについて思索を深める。	
基幹教育科目	総合科目	体験的農業生産学入門	本授業では、作物（イネや園芸作物）や家畜（牛やニワトリ）などを対象に農業生産の実際を体験すると共に、その基盤となる理論、農業生産と環境との関係や食物の安全性などについて学習し、、社会における知識の役割を学ぶ。実習作業における創意工夫、対象作物や家畜への配慮、指導にあたる教職員や受講生相互の交流を通し、実感としての知識を身につける。さらに、農業の持つ地域性と伝統や文化形成の関係について学習し、幅広く知識を身につけることの楽しさと重要性を学ぶ。夏休み期間中に農学部附属農場（福岡県糟屋郡粕屋町および篠栗町）において、2泊3日の宿泊集中実習・講義を実施する。	
基幹教育科目	総合科目	農のための植物−環境系輸送現象論	人類は「農の営み」として、生物学的一次生産者である植物とその環境への働きかけを持続・発展させてきた。本授業では、農作物の生産性と品質を支える基礎となる植物と環境間のエネルギーと物質の輸送現象（光合成、蒸散、根の養水分吸収、光合成産物の転流、呼吸、熱収支等）に関して、輸送の場、メカニズム、環境応答、および調節法の概要について講義し、「農の営み」の基本的事項への理解を促す。	
基幹教育科目	総合科目	サイバーセキュリティ演習	サイバー演習装置を用いたハンズオン形式でサイバーセキュリティについて学ぶ。サイバー演習では、典型的なサイバー攻撃についてeラーニングによる座学により技術的な用語や概念を学び、仮想環境によって実機と同じ感覚で学習、体験を行う。さらに、テクニカルチャレンジという機能を用いて、サーバやネットワークのサイバー攻撃を受けやすい脆弱性を自らで探し出し、本演習でえられたセキュリティ対策のための知識、技術の確認を行う。本サイバー演習によって、ネットワークやサーバの実際の管理に携わらなくても、サイバー攻撃を体験し、それを防ぐ技術を習得することができる。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
基幹教育科目	総合科目	セキュリティエンジニアリング演習（サーバー構築編）	本講義では，セキュリティを考慮したネットワークやサーバーサイドのエンジニアリングを行うための知識と技術を演習形式で学習する．各講義は，座学と演習で構成されます．座学では，初めにウェブアプリケーションの構成やネットワークの構築の方法などを学びます．システムの構成や動作原理を学習したのちに，サイバー攻撃の具体的な手法を学び，システムのどのような場所が攻撃されて，どのように防御策を施して行けば良いのかを学んでいきます．演習では，システムにサイバー攻撃を行い対策の重要性を体験してもらった上で，防御策を施す手法を学びます．最終的な課題として，セキュリティを考慮したウェブサービスを開発してもらいます．	
基幹教育科目	総合科目	セキュリティエンジニアリング演習（ハードウェア設計編）	本講義では，セキュリティを考慮したハードウェアの設計や製作などのエンジニアリングを行うための知識と技術を演習形式で学習します．各講義は，座学と演習で構成されます．座学では，初めに電子デバイスで使用する電子部品の役割などの知識を学びながら，電子回路を設計する手法を学びます．電子回路の基礎的な知識を学習したのちに，ハードウェアに対するサイバー攻撃の具体的な手法を学び，ハードウェアのどのような場所が攻撃されて，どのように防御策を施していけば良いのかを学んでいきます．演習では，ハードウェアに対するサイバー攻撃を行い，対策の重要性を経験してもらった上で，防御策を施す手法を体験します．最終課題として，セキュリティ対策を行ったハードウェア作品を提出してもらいます．	
基幹教育科目	総合科目	セキュリティエンジニアリング演習（IoTセキュリティ編）	セキュリティを考慮したIoT機器のエンジニアリングを行うための知識と技術を演習形式で学習します．各講義は，座学と演習で構成されます．座学では，初めにIoT機器の構成や知識を学びながら，IoTサービスを設計する手法を学びます．IoTに関する基礎的な知識を学習したのちに，ネットワークやウェブサービスやハードウェア等に対するサイバー攻撃の具体的な手法を学び，IoTサービスのどのような場所が攻撃されて，どのように防御策を施していけば良いのかを学んでいきます．演習では，IoTサービスに対するサイバー攻撃を行い，対策の重要性を経験してもらった上で，防御策を施す手法を体験します．最終課題として，セキュリティ対策を行ったIoTサービスを開発して提出してもらいます．	
基幹教育科目	総合科目	分子の科学	物質の究極の構成要素である分子の性質・化学反応性や合成法など分子科学の研究の現状を，3日間の集中講義形式で紹介します。1日目は，二人の講師が分子科学の最先端の研究成果をそれぞれ90分ずつ分かりやすく講義します。2日目と3日目は，受講した学生が実際に研究室に入り，先端設備に触れて動かし，先端分子科学の発展の内容を体験的に学びます。本講義では，無機化学から有機化学まで様々な専門を有する先導物質化学研究所の９研究室から一つの研究室を選び実験を行います。	
基幹教育科目	総合科目	Contemporary American Society: A Sociological Introduction	This course overviews, in an introductory manner, major issues in contemporary American society from a sociological perspective. Main subjects include contemporary perspectives and key concepts in sociology and issues related to social stratification, poverty, gender, ethnicity, the family, socialization processes, formal organizations, and other selected social institutions. Upon completion of this course, students will gain basic understanding of foundational principles of sociology as a discipline and of various aspects of American social lives today. As its overarching goal, this course aims to help students develop, and/or further strengthen their critical perspective that is significant to examine current challenges and future prospects of American society from a cross-national comparative perspective. There is no prerequisite-also encouraged to enroll in this course are those students who have no prior experience of learning sociology or contemporary American society. このコースでは、現代アメリカ社会の主要な問題を社会学的観点から紹介する。主要テーマには、社会学における現代的な視点と重要な概念、社会階層化、貧困、ジェンダー、民族、家族、社会化プロセス、公式組織、その他いくつかの社会制度に関する問題を含みます。このコースを修了すると、社会学の基本原則とともに、今日のアメリカ社会生活の様々な側面について基本的な理解を得ることができます。このコースは、国境を越えた比較の視点からアメリカの社会の現在の課題と将来の展望を検討するために重要な批評的視点を涵養し、さらに強化することを目的としています。履修条件はありません。社会学や現代アメリカを学んだことのない学生がこのコースを受講することを推奨します。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
基幹教育科目	総合科目	アイデア・ラボⅠ	多くのアイデアの中から，精査，選択の過程を経て実際に実行できるものは1つだけ。そうであれば，最初に出来るだけ多くを創出できなければ成果は得られません。本講義では身近な材料を用いながら，発散的技法を使い短時間で多くのアイデアを創出した上で，収束手法により最適なアイデアを選択する演習を行います。アイデア創出をグループ単位で行うことで，より良い解決策を発案するために，どのようにグループを刺激し活性化するかグループ・ダイナミクスのスキル向上の機会を合わせて提供します。一部の講義ではゲストによる講義も計画しています。	
基幹教育科目	総合科目	アントレプレナーシップ入門	本講義では，アントレプレナーシップの基礎を学びます。アントレプレナーシップとは「変化を探し，変化に対応し，変化を機会として活用する」ことである(Drucker,1993)。起業機会を発見あるいは創造し，それを創造性に富むアイデアで翻訳あるいは拡充強化することで具体化していくプロセスです。本講義では，このプロセスに沿いながら，起業機会の発見やアイデア創出，具体化の方法論の基礎を学びます。講義では必要な知識の伝達に加えて，ワークショップやグループワーク等を組み合わせた学生参加型の体験的な学習を重視します。	
基幹教育科目	高年次基幹教育科目	共創発想法	デザイン思考（Design Thinking）とは、これまでデザイナーが培ってきたスキル（人間中心デザインに基いた製品開発手法）を、より幅広い問題に適用して、イノベーションを起こすために、主として経営者やエンジニアなど非デザイナーを対象として用いる発想法である。非デザイン系の多くの人は、文字で考える思考法に慣れており、スケッチを描くことをしない。しかし、”描きながら考える”ことで、文字だけで考えていたのでは思いつかなかったアイデアが生まれる。この講義では、企業が商品開発の際に使用している具体的な課題や、自治体や地域コミュニティが市民参加型デザインによる地域づくりの課題をデザイン思考により解決する発想法を学ぶ。課題の発見のための観察調査、立場や専門分野の異なる人との課題解決のためのワークショップ、そしてスケッチによる解決策の提示とその検証方法をグループで実施する。	
基幹教育科目	高年次基幹教育科目	機械学習と人工知能	本講義では，何らかの方法で収集・蓄積されたデータに潜むパターンや構造を見つけ出す手法を与える機械学習を学習する．まず，機械学習と人工知能の全体像を概観する．そして，機械学習手法で解く回帰問題や分類問題などの問題を定式化したうえで，代表的な手法である決定木やサポート・ベクター・マシン，ニューラル・ネットワーク等を１つ１つ取り上げ，これらの基本的仕組み（アルゴリズム）を理解し，その応用例を概観する．	
基幹教育科目	高年次基幹教育科目	データマイニングと情報可視化	本講義では、大量のデータから、有用なパターンや知識を発見する、データマイニングの手法や、データを視覚に分かりやすく表示する、情報可視化の手法を習得する。近年、コンピュータやインターネットの発達により、インターネット上の商取引や購買履歴、銀行口座の管理などで、大量のデータを利用することが可能となっている。データマイニングでは、これらの膨大なデータを解析し、特徴的なパターンや傾向を抽出することで、マーケティングや経営戦略に役立つ予測を行う。膨大なデータを扱ううえで、直感的に解析結果を理解する手法の開発は欠かせない。情報可視化では、解析結果を効果的に可視化し、その有用性を伝達する手法を学ぶ。また、データ間の関連性をネットワーク構造で捉えて分析を行う、社会ネットワーク分析や、データを地図上に表示する、地理情報システムなどについて学ぶ。	
基幹教育科目	高年次基幹教育科目	動的現象の科学 （Dynamical Phenomenon）	時々刻々とその状態や位置，状況や姿が変化する動的現象をどのように記述し，過去から現在へ，そして未来への変化を追跡する手法を修得する．自然現象におけるこれらの変化は，物体の運動に関する物理法則に支配されているものや，確率的な物理現象に基づくものであり，これらを支配している物理法則を微分方程式で正確に記述することができる．一方，人為的な要因が絡む社会現象や，複数の決定的な要因が複雑に作用して支配する現象は，それらを記述し理解するためには，モデル化と呼ばれる近似や仮定を導入する必要がある．この講義では，いろいろな変化を微分方程式で記述する手法を学修し，その解法を修得することによって，変化を遂げる物理現象の理解に迫る．	
基幹教育科目	高年次基幹教育科目	誘導現象の科学 （Inductive Phenomenon）	連続的な流れ（流体）を記述する数学的な取り扱い手法であるベクトル解析の技法を修得し、この応用として電磁気現象への適用を行いながら、特に、電磁誘導現象を自然界の物理法則として理解する。これをもとに我々の身の回りの電磁気現象に再度注目し、これらを利用した日常的な生活に目を向け、電磁気現象（電磁誘導現象）の基本的な理解を得る。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
基幹教育科目	高年次基幹教育科目	科学の歴史A	古代ギリシアの自然学の発生から、ニュートンによる近代科学の完成までを講義する。各理論の詳細には立ち入らず、「世界観」がどのように変遷していったかに注目しつつ講義する。特に、古代から「空虚」の存在の有無を巡ってどのような議論が交わされてきたかに焦点を当てる。空虚の存在は、空間が無限か有限か、物質は無限分割可能かなど「世界がいかにあるか」にもかかわる重要な問題である。また、いかに、目的論的世界観から機械論的世界観への移行したかにも注意を払う。	
基幹教育科目	高年次基幹教育科目	科学の歴史B	近代科学が生まれて以降の歴史，特に熱力学，量子力学，宇宙論の歴史について講義する。これらの講義の中で，現在，自然科学が抱えている哲学的問題点についても述べる。	
基幹教育科目	高年次基幹教育科目	科学の基礎（哲学的考察）	科学的知識の正当化の問題，科学で用いられる因果，説明，法則などの概念の分析について講義する。科学批判が目的ではなく，科学的知識の正当性の難しさ，科学で用いられている概念の分析の難しさを知り，自明のものとして捉えてきたこれらの問題について問い直すことを学ぶ。また，量子力学の哲学や生物学の哲学についても，ごく簡単に触れる。	
基幹教育科目	高年次基幹教育科目	脳情報科学入門	本科目では，脳の情報表現や情報処理について理解するために基礎となる事項について講義，議論，演習を行う。①脳神経生理の基礎。②神経細胞および神経ネットワークの情報表現，数理モデル。③脳機能イメージングの計測法と解析法。④脳波の解析プログラムの作成，など。	
基幹教育科目	高年次基幹教育科目	認知心理学	本科目では，人間の内部でどのような処理が行われているのかという問題について学ぶ。知覚，意識，記憶，感情，推論，意思決定，注意，ならびに時間と空間の認識などのトピックについて，従来の理論とともに最新の知見を知り，そしてそれらをどのように利用して未解決の問題に取り組むのかを考える。授業は講義と演習を織り交ぜた形式にて行う。	
基幹教育科目	高年次基幹教育科目	Brain and Mind	What is consciousness? How does the brain process information for perception, memory, et cetera? These questions can be looked at from many angles: psychology, philosophy, neuroscience, and medicine. The goal of this course is to address these questions in an open-minded and creative way, using scientific methods. We will focus on the basic principles of brain structure and function, the current trends in research, and the importance of this field for society and well-being. 意識とは何だろうか？知覚、記憶などを脳はどのように情報を処理しているのだろうか？これらの疑問は、心理学、哲学、神経科学、医学など、様々な角度から見ることができる。本科目の目的は、科学的な方法を用いて、オープン且つ創造的な方法でこれらの問題に取り組むことである。授業では、脳の構造と機能の基本原理、研究の現状、そして社会と福祉のためのこの分野の重要性に焦点を当てる。	
基幹教育科目	高年次基幹教育科目	現代社会Ⅰ	近現代の歴史と社会に関する認識を深めることは，すべての学問にとって重要である。本科目は，そのなかでも社会と文化の観点から，現代社会に関する認識を深める。そのために，最新の人文社会科学の理論と認識方法を用いて，現代社会の仕組み，文化の交流と摩擦，日本や国際社会が直面する社会問題等について講義する。	
基幹教育科目	高年次基幹教育科目	現代社会Ⅱ	近現代の歴史と社会に関する認識を深めることは，すべての学問にとって重要である。本科目は，そのなかでも政治と国際社会の観点から，現代社会に関する認識を深める。そのために，最新の社会科学の理論と認識方法を用いて，現代政治の問題，国民国家のあり方，グローバル社会における国際関係等について講義する。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
基幹教育科目	高年次基幹教育科目	現代社会Ⅲ	近現代の歴史と社会に関する認識を深めることは，すべての学問にとって重要である。本科目は，そのなかでも社会・文化・市民の観点から，現代社会に関する認識を深める。そのために，最新の人文・社会科学の理論と方法を用いて，現代社会の仕組み，市民的公共性にもとづく社会制度のあり方，多文化共生社会を生きる技法等について講義する。	隔年
基幹教育科目	高年次基幹教育科目	現代史Ⅰ	近現代の歴史と社会に関する認識を深めることは，すべての学問にとって重要である。本科目は，そのなかでも社会と文化の観点から，近現代の歴史に関する認識を深める。そのために，歴史学や思想史研究による資史料の分析をふまえて，近代化と社会変容，異文化交流の歴史，社会思想の歴史的展開等について講義する。	
基幹教育科目	高年次基幹教育科目	現代史Ⅱ	近現代の歴史と社会に関する認識を深めることは，すべての学問にとって重要である。本科目は，そのなかでも政治と国際社会の観点から，近現代の歴史に関する認識を深める。そのために，社会科学による資史料の分析をふまえて，政治思想と国家体制の歴史的展開，国際紛争と国際協調の歴史等について講義する。	
基幹教育科目	高年次基幹教育科目	現代史Ⅲ	近現代の歴史と社会に関する認識を深めることは，すべての学問にとって重要である。本科目は，そのなかでも法と政治の観点から，近現代の歴史に関する認識を深める。そのために，憲政史及び司法制度史研究による資史料の分析をふまえて，立憲主義や法治国家の歴史的展開と意義，近現代における「不法国家」の歴史等について講義する。	隔年
基幹教育科目	高年次基幹教育科目	ＥＵ論基礎―制度と経済―	EU(欧州連合)は，1951年のECSC設立条約調印以降60余年の歴史の中で，域内市場や単一通貨を実現し，構成国数も当初の6カ国から 28カ国になるなど，いまや世界の中で際立った存在となっています。この講義では，EUの基本的なことがらについて，政治学・経済学の視点から総合的に 学びます。制度編では，EU進展の歴史，組織と制度の展開，加盟国との関係，主要な政策分野などを，また経済編では，EU経済統合の展開や EU経済の現状などを，それぞれ学びます。講義を通じて受講生は，EUに関する基礎的な知識を幅広く習得することができるでしょう。	
基幹教育科目	高年次基幹教育科目	金融と経済	我々は，金融に関するビッグニュースを頻繁に耳にする。このことは，金融が円滑に機能しないと，実物経済や日常生活も円滑に機能しないことを意味している。本講義では，金融は経済においてどのような役割を担っているのか，どのような金融取引が行われているのか，金融政策や規制のあり方，日本の金融の特徴と変化等のテーマについて，基本的な仕組みと考え方を解説する。	
基幹教育科目	高年次基幹教育科目	サイバー空間デザイン	近年，Webとスマートデバイスの発展と普及により，サイバー空間は社会のインフラストラクチャとして重要な役割を果たすようになった。この授業では，サイバー空間の歴史とそこで利用されている基礎的な技術について説明する。また，最新のサイバー空間に於ける様々なサービスと，それに関連する先端技術の動向を紹介し，これからのサイバー空間をデザインしていくための方向性について考えていく。	
基幹教育科目	高年次基幹教育科目	芸術学概論	芸術の歴史は，常にそれを語る言葉とともにあった。あるモノや現象を前に，それを豊かに感受し，批判的に分析することは，それにふさわしい記述によってはじめてかたちを成す。本講義では，芸術学や美術批評など，芸術や美，創造力をめぐる多様な言説のあり方について具体的テクストを参照しつつ学んでゆく。それによって，自分なりの考察を育み表現する術を身に付けて欲しい。	
基幹教育科目	高年次基幹教育科目	音楽・音響論	この授業では，19世紀から現代に至るまでの音楽と音響の歴史を，音を記録・再生するメディアの成立という観点から，具体的な事例を確認し通覧する。 音の文化と技術との密接な関わりを，実演と音源の視聴を通じて確認すると共に，グループでのディスカッションにより考察する。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
基幹教育科目	高年次基幹教育科目	デザインと観察	観察という手法は科学的根拠や芸術的創造を生む重要な方法です。社会や人間に対するものづくりの感性・工学・科学のアプローチから，すべての学部に向けて演習も含め「観察」を講義します。	
基幹教育科目	高年次基幹教育科目	環境問題と自然科学	我々の周りを見まわしてみると，実に多くの物質が存在します。それらは，天然のものばかりでなく，人工的に創り出されたものもたくさんあります。これらのほとんどは，我々の生活を豊かにするために大きく貢献しましたが，その反面，環境問題を引き起こしたものや起こしつつあるものもあります。ここでは，科学の発展に伴って生じた環境問題に焦点をあて，環境問題に対する科学的な捉え方，その定量的計測法，問題解決にむけたさまざまな取り組みを紹介します。	
基幹教育科目	高年次基幹教育科目	環境調和型社会の構築	エネルギーや物質を大量に消費することにより高度成長を遂げてきた現代社会が，地球環境保全やエネルギー資源問題で最大の難局に直面していることは現在広く認識されている。地球環境を破壊すること無く現代社会を維持して行くための科学技術や社会システムは如何なるものであろうか。本講義ではこれらの問題についての現状把握と将来展望について解説する。	
基幹教育科目	高年次基幹教育科目	グリーンケミストリー	現代の社会では，膨大なエネルギー消費と資源消費によって，エネルギー不足や資源枯渇が，深刻な問題となっている。グリーンケミストリーは，従来のエネルギー消費型の工業プロセスに対して，環境への負荷がより小さな化学技術であり，今後の持続社会の構築にとって，不可欠な化学技術である。本講義では，このような最新のグリーンケミストリーを理解するために，ナノテクノロジーやバイオテクノロジー等の最先端化学技術について，リレー講義方式で講義を行う。	
基幹教育科目	高年次基幹教育科目	自然災害と防災	私たちが住んでいる日本は，地震，火山活動が活発な環太平洋変動帯に位置し，地理的，地形的，気象的諸条件から，台風，豪雨，豪雪等の自然災害が発生しやすい国土となっています。自然災害を未然に防ぎ，災害による被害を最小限に抑えるための法・組織体系，国や県による防災計画，災害・防災情報の収集・伝達システム，住民および企業ができる防災活動など私たちが安心・安全な暮らしをするのに不可欠な防災・減災に関する総合的な社会システムについて学習します。	
基幹教育科目	高年次基幹教育科目	生態系の構造と機能Ⅰ	生態系の規模は地球上の全生物を対象とする巨大生態系から個体を対象とする比較的単純なものまで様々ですが，具体例を見ながら，この多様性を理解していきます。また，我々人間の生活する場である都市，あるいは農林業水産業における生産の場も，それぞれの生態系として考えることが可能であることを学習します。そうすることで環境や公害といった問題を生態系という視点から理解できるようにもなるでしょう。 生態系（エコシステム）を理解する上で必要な基礎事項を本講義では学びます。生態系の規模は地球上の全生物を対象とする巨大生態系から個体を対象とする比較的単純なものまで様々ですが，具体例を見ながら，まずこのことを理解してもらいます。続いて，生態系レベルで見た場合のその基本構造と機能について解説しながら，陸上と海洋生態系の共通点と違いについて講義します。また，我々人間の生活する場である都市，あるいは農林業水産業における生産の場も，それぞれの生態系として考えることが可能であることを学習します。そうすることで環境や公害といった問題を生態系という視点から理解できるようにもなるでしょう.	
基幹教育科目	高年次基幹教育科目	生態系の構造と機能Ⅱ	生態系を理解する上で必要な基礎事項を講義します。生態系の構造と機能 I では，主に生態系レベルでの構造と機能に注目しますが，本講義ではよりミクロなレベルでの生物間の繋がりと相互作用について焦点を当てます。まず生物間の繋がりはそれぞれの立場から見た場合の利害関係によって簡単に記述できることを学習してもらいます。そして具体的な例を多数提示することで，多様な生物間相互作用を概観していきます。さらに，生物多様性についても講義し，生物間の相互作用が生物多様性を決定することについても解説します。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
基幹教育科目	高年次基幹教育科目	男女共同参画	私たちは性とそれによる差異をいろいろな形で受けとめながら社会をつくっています。性を組み込んだ制度や文化はつねに身近にあり，しかもそれらは時として抑圧的にまた差別的に，私たちに迫ります。この問題はジェンダーとして議論されてきました。この科目では，文芸，メディア，社会制度などを通じてジェンダーが形成されてきた歴史や，職業や家族などの諸領域におけるジェンダーの現状を分析しながら，よりよい性と社会のつきあい方，その中でのよりよい職業・社会生活を探ります。	
基幹教育科目	高年次基幹教育科目	ボランティア活動Ⅰ	社会における市民としての社会連携活動の意義を理解し，社会への関心を高め自己の社会的位置づけを認識することにより，大学における修学活動の重要性を再認識するとともに，学問と社会との関わりについての知見を深め，学生であることの目的意識を確立することを目標とします。このために，教育的要素と教育的効果が認められるボランティア活動を学外における学修活動の成果として単位を認定します。	
基幹教育科目	高年次基幹教育科目	ボランティア活動Ⅱ	社会における市民としての社会連携活動の意義を理解し，社会への関心を高め自己の社会的位置づけを認識することにより，大学における修学活動の重要性を再認識するとともに，学問と社会との関わりについての知見を深め，学生であることの目的意識を確立することを目標とします。このために，教育的要素と教育的効果が認められるボランティア活動を学外における学修活動の成果として単位を認定します。	
基幹教育科目	高年次基幹教育科目	インターンシップⅠ	社会における市民としての社会連携活動の意義を理解し，社会への関心を高め自己の社会的位置づけを認識することにより，大学における修学活動の重要性を再認識するとともに，学問と社会との関わりについての知見を深め，学生であることの目的意識を確立することを目標とします。このために，教育的要素と教育的効果が認められるインターンシップを学外における学修活動の成果として単位を認定します。	
基幹教育科目	高年次基幹教育科目	インターンシップⅡ	社会における市民としての社会連携活動の意義を理解し，社会への関心を高め自己の社会的位置づけを認識することにより，大学における修学活動の重要性を再認識するとともに，学問と社会との関わりについての知見を深め，学生であることの目的意識を確立することを目標とします。このために，教育的要素と教育的効果が認められるインターンシップを学外における学修活動の成果として単位を認定します。	
基幹教育科目	高年次基幹教育科目	漢方医薬学	漢方医学の思想，診断法，治療法や特徴を学ぶことにより，現代医学における漢方医学の重要性を理解する。	
基幹教育科目	高年次基幹教育科目	チーム医療演習	医療従事者間の連携を主題とし，それぞれの職種を目指す学生が，将来，より効果的なチーム医療を実施するようになるために，互いの役割と特性を理解し合い，活かし合うことを学ぶ。	
基幹教育科目	高年次基幹教育科目	バイオインフォマティックス	遺伝子やタンパク質等に関する生命知識情報の解析に，パターン認識・機械学習法が積極的に導入されており，本講義ではそれらの数理的手法について学ぶ。また，遺伝情報解析や発現解析の理論を学び，実習を交えながらバイオインフォマティクスの基礎事項を習得する。	
基幹教育科目	高年次基幹教育科目	臨床イメージング	MRI検査および超音波検査の画像の成り立ちを原理から学び，アーチファクトの成因やその改善法を習得する。MRI検査に関しては，検査の安全性や注意点などを概説し，検査目的と各種撮像法と対象臓器・疾患との関係を理解する。またアーチファクトの成因とその改善法を習得する。超音波検査に関しては，その特性を理解し，検査対象となる臓器とその基本的な走査法での画像を理解する。また，超音波検査が特に有用な代表的疾患に関しては，その病態を理解し，画像的特徴を説明できるようになる。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
基幹教育科目	高年次基幹教育科目	社会と健康	保健統計の基本的指標と我が国における動向，疫学の基本，および主な疾患の現状と推移，並びにそれらに対する予防的対策について理解する。後半の講義では，化学物質による事故や犯罪を究明するための領域である「裁判化学」の基礎を修得する。	
基幹教育科目	高年次基幹教育科目	アクセシビリティマネジメント研究	本講義では、平成28年度からの大学における合理的配慮の義務化を念頭において、学生の相互援助力を高める支援マネジメント力を身につけた人材を養成することを目的とします。具体的には、大学で求められるコーディネート業務や支援学生の養成等について学びます。また、障害のある人の権利を尊重し、これを侵害するバリア（社会的障壁）を除去し、その個性と能力が発揮できる環境整備のあり方について考えます。	
基幹教育科目	高年次基幹教育科目	地球の進化と環境	数秒から数十億年の時間スケール，数ミクロンから数十億キロメートルの空間スケールにわたる多様な地球科学的現象を紹介しながら，46億年におよぶ地球の進化の歴史をひも解くとともに，人類存立の基盤である現在の地球環境について講義する。	
基幹教育科目	高年次基幹教育科目	生物多様性と人間文化	生物多様性と，人間と環境との関わりの地域的・文化的多様性，および，環境，食料，資源エネルギーに関わる複合的諸問題を軸にした，生物環境科学の学際探求を論じる。	
基幹教育科目	高年次基幹教育科目	遺伝子組換え生物の利用と制御	様々な生物の遺伝子を組み替える分子基盤と基本的な技術を、その発展の歴史を含めて概説する。さらに、様々な微生物、植物、動物における遺伝子組換え体の具体的作製法とその産業利用の可能性を紹介し、遺伝子組換え生物に関する俯瞰的な知識を身につけさせる。また、医食の安全性および環境問題等と遺伝子組換え生物との関連にも触れ、遺伝子組換え生物を人類の福祉に適正に応用する方策に関する理解を深める。	
基幹教育科目	高年次基幹教育科目	バイオテクノロジー詳論	今日のバイオテクノロジーの基礎である分子生物学やバイオサイエンスを背景とした最新の生命操作技術や実験手法を解説する。特に、酵素利用技術，バイオリアクター，分離工学などの分野からヒトゲノム計画やポストゲノム時代の研究の基礎と応用などの最新分野にわたる幅広い研究の現状を紹介し、バイオテクノロジーが人間社会与えるインパクトについて多面的な理解を促す。	
基幹教育科目	高年次基幹教育科目	平和と安全の構築学	自由で民主的かつ公正な政治秩序のあり方，平和構築や国家建設支援のあり方，リスク社会の安全管理，地域経済のあり方を軸にした国際協調と安全構築の学際探求を論じる。	
基幹教育科目	高年次基幹教育科目	文化と社会の理論	文化と社会の変容や動態を説明する理論，それらの問題を実証的に論じる社会科学方法論について，文化と社会の理論の構築に大きな役割を果たした理論家とその基本概念に重点を置きながら講義する。それにより社会共生の学際探究を論じる。	
基幹教育科目	高年次基幹教育科目	東アジアと日本－その歴史と現在－	考古学を中心とした人類史研究，広域東アジアとして歴史過程を探求する歴史学，現代アジアの広域秩序のダイナミズムをとらえる人文社会科学を軸にした東アジアと日本の学際探究を論じる。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
基幹教育科目	高年次基幹教育科目	法文化学入門	いわゆる法律学・法解釈学とは異なる手法を用いて，現代法システムを理論的に分析する方法論＝アプローチには，さまざまなタイプのものが存在する。本科目は社会システム理論に軸足を置きながら，そうした多様な法理論／現代社会理論の諸潮流を概観し，それらが現代社会を生きる私たちにとって現実にいかなる意味を持ちうるのかを，具体的事例を手掛かりにしつつ考察する。	
基幹教育科目	高年次基幹教育科目	プレゼンテーション基礎	本講義では，基礎的・汎用的能力の一つとしてプレゼンテーション能力を捉え，講師が開発した並行反復学習法によるプレゼンテーション教育をおこないます。並行反復学習法では， A「知識領域」（テーマ）においてB「発表技術」とC「マネジメント」を並行して学習し，AからCを1セットとして2セット反復することで，様々な場面で応用可能なスキルを確実に身に付けます。講義はどちらかというと人前で話すのは苦手だという学生さんに照準を合わせて，和やかな雰囲気で進めますので，関心のある方は気軽に受講してください。プレゼンテーションの活動の中で，自己理解，グループディスカッション，リフレクションについても学びを深めます。	
基幹教育科目	高年次基幹教育科目	レトリック基礎	レトリックは修辞技法ともいわれ、弁論や文章の表現技法を指します。この「レトリック基礎」では、文章表現に焦点を絞り、言語を用いていかに学術分野にふさわしく効果的な表現をするかを学びます。授業は集中講義形式で、前半では日本語、後半では英語による文章の書き方を学びます。前半の和文の技法では、卒論を含む学術論文の論理展開や、研究予算の申請書を作成する際のポイントなどを扱います。また後半の英文の技法では、英語論文を書く際の即戦力になるように、英語論文の基礎以外に、日本人に多い英語表現の誤りや文法のミスなども扱います。まだ英語論文を書いたことのない学部生はもちろん、実際に執筆中の大学院生にも役立つような講義を予定しています。	
基幹教育科目	高年次基幹教育科目	技術と倫理	私たちの社会における人間と技術の関係が，現在どうなっているか，これからどうあるべきかについて考察する。大規模事故のリスク評価，医療における生命倫理，サイバー法・知的財産権とイノベーションの関係，等の具体的事例も手がかりにしながら，「技術とは何か」を哲学・倫理学的に捉え直すことを目指す。毎回参加者からの意見を取り入れながら授業を進めていく。	
基幹教育科目	高年次基幹教育科目	医療における倫理	体や薬にまつわる様々な話題を提供し，生命の倫理について学ぶ。また，西洋医学だけではなく，東洋医学についても講義する。	
基幹教育科目	高年次基幹教育科目	研究と倫理	現代社会の様々な問題に関して，各受講者が学びつつある専門分野での知見をいかに活用して，その問題をより正確に捉え解決の方策を探れるのか議論する。異なる専門同士の受講生が文理問わず各自の知見を持ち寄り，互いの視野を広める機会とするとともに，自分の研究が社会とどのような関係を持ちうるのかを改めて考え直してみる場所としたい。議論するトピックに関しても，受講者からの積極的な提案を歓迎する。	
基幹教育科目	高年次基幹教育科目	社会と倫理	学生は倫理学の理論（例えば、和辻哲郎、あるいはレヴィナスの倫理学）を詳細に学び、それをもって、現代国際社会の問題を考察する。	
基幹教育科目	高年次基幹教育科目	インフォームドコンセント	日常医療および臨床研究におけるインフォームド・コンセント（以下ＩＣ）について，患者側，医療者側からの視点や法的な側面に関する講義，ＩＣの場面のロールプレイ，個人または学部学科の枠を超えたグループによる考察や討論などを通して，ＩＣを得ることの大切さ，難しさを実感し，今後の医療活動に役立てる。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
基幹教育科目	高年次基幹教育科目	薬害	薬害問題に関し，将来医療人となる学生に対して医療倫理や社会的・人権学習的な観点からの理解を深め，医療人としての薬害防止に対する意識や姿勢を育む。	
基幹教育科目	高年次基幹教育科目	臨床倫理	ロールプレイ主体の授業を実施し，実地医療における倫理的課題について，事例を題材にした学部混成の小グループ学習を行うことにより，医療者としての対応の難しさを実感するとともに，チーム医療の基盤について学ぶ。	
基幹教育科目	高年次基幹教育科目	研究企画・産学官連携特論Ⅰ	本授業は講義と演習により構成される。講義は知的財産管理と産学連携マネージメントを適切に行う上での必要な知識をを学ぶことができる。また，講義で学んだ知識を具体的な産学連携課題を題材とする演習で使うことにり，知的財産管理と産学連携マネージメントについて深い理解を得ることができる。 本講義は研究企画・産学官連携特論Ⅰ，Ⅱの2部で構成される。研究企画及び産学官連携について深い理解を得るために両授業の受講を推奨する。 研究企画・産学官連携特論Ⅰにおいては，研究企画及び産学官連携を進める上で必須となる知的財産権，研究契約等に関する基礎知識を学ぶことができる。研究企画・産学官連携特論Ⅱにおいては，実際に研究企画・産学官連携業務に携わっている講師の方々による各ステージでの具体的な業務内容・事例紹介及び質疑を通じて，研究企画及び産学官連携に関する幅広い知識及び知見を得ることができる。	
基幹教育科目	高年次基幹教育科目	研究企画・産学官連携特論Ⅱ	本講義は研究企画・産学官連携特論Ⅰ，Ⅱの2部で構成される。研究企画及び産学官連携について深い理解を得るために両授業の受講を推奨する。 研究企画・産学官連携特論Ⅰにおいては，研究企画及び産学官連携を進める上で必須となる知的財産権，研究契約等に関する基礎知識を学ぶことができる。研究企画・産学官連携特論Ⅱにおいては，実際に研究企画・産学官連携業務に携わっている講師の方々による各ステージでの具体的な業務内容・事例紹介及び質疑を通じて，研究企画及び産学官連携に関する幅広い知識及び知見を得ることができる。	
基幹教育科目	高年次基幹教育科目	リスクマネジメント	環境リスク，災害リスクなどのリスク関連の言葉はよく耳にし，日常の生活にも常にリスクが伴っている。リスクマネジメントは様々な分野で脚光を浴びており，意思決定を行う際は，その実施が求められている。本科目では，リスクとは何か，正確に評価できるか，低減策やコントロール方法などのマネジメント方法があるか等について考え，リスクアセスメントやリスクの低減に関する技術について講義を行う。グループ討論を通じ様々なテーマにおけるリスク評価を行い，リスクマネジメント方法を提案できるようになることを目標にしている。	
基幹教育科目	高年次基幹教育科目	ビジネス統計学	ビジネスモデルの構築，ビジネスデータの解析において必要となる分散分析，単回帰分析，重回帰分析，時系列解析，予測，ノンパラメトリックス検定，カイ二乗検定などについて，具体例に基づきつつ理論と応用の両面から学ぶ。	
基幹教育科目	高年次基幹教育科目	社会統計学A	社会調査に必要な記述統計，推測統計，多変量解析法について修得する科目。確率論の基礎，基本統計量，検定・推定理論とその応用(平均や比率の差の検定，独立性の検定)，クロス表の統計量，相関係数，偏相関係数， 回帰分析の基礎などを講義し，重回帰分析，分散分析，パス解析，対数線形モデル，因子分析などの計量モデルの基本的な考え方解説を行う。	
基幹教育科目	高年次基幹教育科目	社会統計学B	社会調査に必要な記述統計，推測統計，多変量解析法について修得する科目。確率論の基礎，基本統計量，検定・推定理論とその応用(平均や比率の差の検定，独立性の検定)，クロス表の統計量，相関係数，偏相関係数， 回帰分析の基礎などを講義し，重回帰分析，分散分析，パス解析，対数線形モデル，因子分析などの計量モデルの基本的な考え方解説を行う。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
基幹教育科目	高年次基幹教育科目	社会調査法ⅠA	質問紙調査の際，統計的データをまとめたり分析したりするのに必要な，基礎的な統計学的知識を教授する科目。確率論の基礎，基本統計量，検定・推定理論とその応用（平均や比率の差の検定，独立性の検定），クロス表の統計量，相関係数，偏相関係数，回帰分析の基礎などを講義し，統計ソフトRを用い，実際に計算をする演習を行う。 量的調査として，社会調査法や心理測定法を中心に，これらの歴史的背景，知識，意義，問題点等について講義する。また，調査データを分析する際に必要となる統計学の基本的事項を学習する。具体的には，分布に関する記述，2変数間の関連について講義を行う。	
基幹教育科目	高年次基幹教育科目	社会調査法ⅠB	社会調査法や心理測定法の知識に基づいて，調査票を設計・作成し，その調査票を実施する。また，調査データを分析する際に必要となる統計学の基本的事項を学習する。 具体的には，統計的検定の理論，2群の平均値に関する分析，多群の平均値に関する分析について講義を行う。	
基幹教育科目	高年次基幹教育科目	社会調査法ⅡA	質的データの収集と分析について講義と演習でもって修得する科目。質的調査に関する概要を解説したのち，さまざまな収集・分析法(フィールドワーク，聞き取り調査，参与観察，ドキュメント分析，ライフヒストリー分析など)を紹介し，実際に演習をおこなう。社会学における「社会」のとらえ方と，質的／量的社会調査法について概説する。	
基幹教育科目	高年次基幹教育科目	社会調査法ⅡB	フィールドワークなどの質的社会調査の手法や調査過程について，国内外での実施例をもとに解説する。	
基幹教育科目	高年次基幹教育科目	日本国憲法	日本という社会の最高法規であり続けている「日本国憲法」について，ここ数年，その改正も含めて様々な議論が展開されている。文系・理系を問わず，これからの日本社会を背負っていく九大生にとって，いま憲法について学んでおくことは極めて重要な課題の一つであるだろう。この講義では，日本国憲法をめぐる多様な問題についてわかりやすく解説を行う。	
専攻教育科目	共通基礎科目	共創デザイン思考発想法（Design Thinking for Interdisciplinary Science and Innovation)	この授業では、国際社会が抱える課題をテーマに、デザイン思考で解決する演習を実施する。具体的には、障害者や高齢者など、より多くの人に暮らしやすい環境を創造すること、すなわち、ユニバーサルデザインの考え方に基づいたデザイン手法ついて学ぶ。デザインの仕様によって障害者や高齢者などが、施設や商品、サービスを利用できないケースがある。ユーザーのニーズに応えていないデザインを改善するためには、まずは、学術的な調査などによりユーザーのニーズを捉え直す必要があり、その上で、それを利用するユーザーと共にプロトタイプを制作し検証する工程が重要である。そのため、プロトタイプ提案を含めたデザインプロセスを具体的に学ぶ。国連が提唱する持続可能な社会づくりのためのゴール、Sustainable Development Goal(SDG'S)のテーマでもある「世界の貧困の解決」をテーマとした演習も実施する。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専攻教育科目	共通基礎科目	フィールド調査法 (Field Research)	課題を解決するためには、実際に現場におもむき、そこでしか得られないデータを手に入れることが欠かせない。しかし、闇雲に現場に出かけても、現場に迷惑をかけたり、危険な目にあったりするだけで、必要なデータは得られない。この授業ではフィールドでの調査方法、調査研究上の倫理と安全管理、調査結果の社会的還元方法などの基礎を幅広く習得し、多様なフィールドにおける情報収集手法～課題発見方法～課題解決方法に関する基礎的能力を養う。 （オムニバス方式／全8回） （25 長谷千代子　1回） 文化人類学的な視点からフィールド調査における課題を見つけ出し解決する方法を学ぶ。 （38 舟橋京子　1回） 形質人類学的な視点からフィールド調査における課題を見つけ出し解決する方法を学ぶ。 （30 田尻義了　1回） 考古学的な視点からフィールド調査における課題を見つけ出し解決する方法を学ぶ。 （36 山尾大　1回） 政治学的な視点からフィールド調査における課題を見つけ出し解決する方法を学ぶ。 （12 荒谷邦雄　1回） 自然科学的な視点からフィールド調査における課題を見つけ出し解決する方法を学ぶ。 （39 中野伸彦　1回） 自然科学的な視点からフィールド調査における課題を見つけ出し解決する方法を学ぶ。 （42 藤岡悠一郎　1回） 生態人類学的な視点からフィールド調査における課題を見つけ出し解決する方法を学ぶ。 （30 田尻義了・39 中野伸彦　1回） 初回ガイダンスを実施しフィールド調査法の基礎を担当する。	オムニバス方式・共同（一部）
専攻教育科目	共通基礎科目	科学論 (Philosophy of Science)	科学一般にまつわる哲学的諸問題について入門的に講義する。取り上げる問題は、「科学とは何か」「科学は合理的に発展するのか」「理論的対象は実在するのか」などである。科学とそれ以外を明確に分けること、科学理論の優劣を決める合理的基準があること、理論的対象が論理的に実在すると言えること、のそれぞれが非常に難しいことを見ていくが、そのことによって科学批判をするのが目的ではなく、科学に携わる者として、科学的方法論に対してより内省的になってもらうことが目的である。	
専攻教育科目	共通基礎科目	データサイエンス基礎 (Fundamentals of Data Science)	データは、様々な視点から議論するための根拠を示す上で、非常に重要である。特に近年は、情報通信技術の発展により、多種多様な大量のデータを扱うことが可能となり、データサイエンスは、益々重要となってきている。本講義では、データサイエンスの基礎的な概念を習得し、簡単な演習を通じて、データ分析・可視化などの基本的な方法を習得する。	
専攻教育科目	共通基礎科目	複雑系科学入門 (Introduction to Complex Systems)	複雑系の考え方を紹介する。複雑系では個々の要素のふるまいから予想できないふるまいを示すことがあり創発性とも呼ばれている。生命現象や社会現象に見られる複雑系の例を紹介し、システム論的な考え方を学ぶ。カオス、べき則、経済物理、社会物理、人工生命などいくつかの複雑系の考え方を紹介する。複雑系科学では数理モデルが重要になるが、この講義では数学的解析よりその結果を図などを用いて説明することに重点を置く。	
専攻教育科目	共通基礎科目	グローバル・ヒストリー (Global History)	我々が暮らす現代世界は、どのような歴史的プロセスを経て形作られてきたのであろうか。また、我々が現在直面している、領土や民族、資源や宗教などをめぐる紛争や、加速度的に進むグローバル化、テクノロジーの進歩が引き起こす政治や経済、社会の諸変化などは、果たして現代に特有な課題なのであろうか。本講義はこれらの問いに対して、主に現代に直接つながる近現代の歴史を学びながら、歴史的にアプローチする視座を提供する。	

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
専攻教育科目	共通基礎科目		グローバル・エシクス (Global Ethics)	グローバル化する世界においては、様々な倫理や信念が出会い、衝突し、困難な問題を引き起こしている。テロ、貧困、環境問題などのグローバル社会の諸課題にアプローチするためには、このような問題の背景にある、異なる倫理や宗教に注目する必要がある。本授業では、古代ギリシアやキリスト教などの西洋の倫理思想と、儒教、仏教、イスラム教などの東洋の宗教における倫理観を学ぶことを通して、世界の人びとを理解するために必要となる幅広い視野を身につける。また、異なる人びとが共存するために求められる市民的倫理に関する現代倫理学のエッセンスを学び、グローバルな課題を考えるための倫理的思考力を養う。	
専攻教育科目	構想科目	エリア横断科目	デザイン思考プログラミング演習 (Design Thinking Programming)	本授業ではプログラミング演習を通し，ビット（デジタル）をアトム（アナログ）に変換する手法を 学ぶことで，論理的思考に基づく問題発見と解決策の提案の新たな表現方法の習得を目指す. 具体的にはボードコンピュータを用いセンサーやアクチュエーターを動かすソフトウェアとハードウェアの仕組みを演習方式で学習し，課題に対する解決策を示すプロトタイプを制作・発表する.	
専攻教育科目	構想科目	エリア横断科目	デザイン思考プロセス演習 (Design Thinking Process)	本授業では広義のデザイン思考による幅広い分野に応用可能な価値創造能力を身につける 。 課題定義、立案、プロトタイピング、適切な解決策の提案とデジタルメディア利用したコミュニケーションなどを含むデザインプロセスを体験する。同時に高年次において複雑な社会的問題を含む共創にて重要となる、他者との共感（empathy)やチームによる協働作業など社会性を育む。	
専攻教育科目	構想科目	エリア横断科目	ビッグデータ処理 （Big Data Processing)	データサイエンスおいて、データの管理は極めて重要である。本講義では、データベースの基礎を習得し、大規模データベースの構築手法、並びにそれを用いたデータ分析プログラミングについて習得する。	
専攻教育科目	構想科目	エリア横断科目	実データ解析技法 (Methodologies for practical data analysis)	近年、個人や企業、自治体等が所有する、気象情報や地図などの様々なデータを、インターネット等に公開して、誰でも自由に利用をでき、再配布できるようにする、オープンデータの動きが広まってきた。本講義では、グループごとに課題を決めて、その課題に関連するオープンデータを入手し、データの分析によって解決策を検討し、他のグループと討論することによって、データの活用・説明能力を習得する。	
専攻教育科目	構想科目	エリア横断科目	物理学の歴史と哲学 （History and Philosophy of Physics)	ニュートン力学以降の物理学の歴史と、物理学にまつわる哲学的諸問題について講義する。隔年で、量子力学と相対性理論（宇宙論）を交互に講義する。量子力学の講義では、とくに、確率的な考えかたが生まれてきた過程に注目していく。また、アインシュタインが考案した数々の思考実験を通して量子力学の概念的側面の理解を深める。相対性理論の講義では、相対性理論によって刷新された時間と空間の本質について、どのような解釈がありうるかを検討する。	
専攻教育科目	構想科目	エリア横断科目	地学と生物学の歴史と哲学 （Hisotry and Philosophy of Geoscience and Biology)	地学の発展と生物学の発展には深い関わりがある。なぜなら、地学の発展により地球の年齢が従来考えられてきたよりも長いことがわかり、そのことによって長い年月を必要とする生物の進化が実際に可能であることが認められたからだ。それゆえ、本講義では、近代以降の地学と生物学の歴史、生物学にまつわる哲学的諸問題について講義する。ダーウィンの進化論がどのような経緯を経て生まれたのか、また、現代にまでにどのように発展を遂げたのかを見ていく。	
専攻教育科目	構想科目	エリア横断科目	科学技術社会論 （Science, Technology and Society)	20世紀に科学技術は社会に大きな影響を及ぼすようになった。例えば原子物理学の研究成果は核兵器による人類滅亡の危機をもたらした。新しい産業技術は経済成長の原動力となり豊かな社会を実現した一方で、地球環境問題や資源エネルギー問題をも生み出した。 「科学技術社会論」は、こうした科学技術と社会の相互作用を研究対象とする。そして科学技術研究の現場と社会を結ぶ科学技術コミュニケーション活動を活発に推進する実践的な学問分野でもある。本科目では、こうした科学技術社会論の理論と実践手法を学ぶ。	

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
専攻教育科目	構想科目	エリア横断科目	複雑系科学論 (Complex Systems)	「複雑系」の中のキーワードであるカオス、フラクタル、ニューラルネットワークの考え方を理解することを目的にする。共通基礎科目の「複雑系」の発展科目として、前半でカオス、フラクタルなど非線形ダイナミクスの紹介をし、後半では脳の数理モデルであるニューラルネットワークを解説する。	
専攻教育科目	構想科目	エリア横断科目	Thermo-Dynamical Properties (熱動的現象科学論)	At first, macroscopic quantities of state; “volume”, “pressure”, “absolute temperature” and the state equation among them are simply introduced based on the microscopic view of ideal molecular motion in monoatomic perfect gas. Useful applications of the equation are exemplified featuring Avogadro number, universal gas constant and gas mixture formation. Second, basic explanation about partial differential, exact differential and path integral is given to clarify the meaning of the state quantities and two path functions; “work” and “heat”. In the process, “entropy” is introduced as a state quantity to trace the heat into or out of a system and practical calculation examples are picked up for better understanding. The entropy is derived again through consideration of Carnot cycle of idealistic reversible changes, and the second law of thermodynamics and its meaning are carefully discussed. Finally, eight thermodynamic functions including Gibbs energy are quickly reviewed to examine direction and equilibrium of a phase change. Entropic issues like death from heat wave and garbage treatments in industrial production are also shortly introduced. 先ず，巨視的状態量である，“体積”，“圧力”，“絶対温度”およびそれらを関係付ける状態方程式を，単原子分子から成る理想気体の分子運動という単純化された微視的考察に基づいて導入する．状態方程式について実用的な視点から理解を深めるため，アヴォガドロ数，一般ガス定数，混合ガス調合などを，例題を通じて学習する．次に，熱力学関数の理解に不可欠である，偏微分，完全微分，径路積分などの基礎を説明し，状態量や経路関数である“仕事”や“熱”の意味を明確にする．その過程において，熱が系への出入を追跡するための状態量として，エントロピーを導入する．エントロピーに対する理解を深めるため，実用的な例題を用いた演習を実施する．その上で，カルノーサイクルを利用した準静的可逆変化に基づくエントロピーの再導入を行い，熱力学の第2法則について理解する．最後に，相変化を伴う系で使用するギブスエネルギーなどの8種の熱力学関数を簡単に説明し，エントロピーに基づく視点から，熱波による死亡，ごみ問題などを考察する．	
専攻教育科目	構想科目	エリア横断科目	量子現象科学論 (Quantum Properties)	19世紀末から20世紀初頭における物理学の諸課題を認識し、その解決へ向けた前期量子論誕生過程を把握し、古典物理学から現代物理学への歴史的な変遷の必要性、古典物理学 (macroscopic)にかわる量子力学(microscopic)の概念とその必要性を理解する。具体的には、簡単なポテンシャルにおけるSchödinger方程式とその物理的意味を理解することによって水素原子の構造を物理現象として理解し、量子力学的な物質観を獲得する。	
専攻教育科目	構想科目	エリア横断科目	Python Programing for Analysis (パイソン言語論)	Students will learn basic techniques of programming and data analysis. We will use the Python programming language for this course. Students will learn how to ″think like a computer scientist,″ meaning that they will learn to solve problems using a computer. Mainly we will be concerned with things like organizing, sorting, verifying, modelling, or transforming data. この授業では、パイソン言語を用いたプログラミングとデータ分析の基本を修得する。コンピュータによる課題解決行うコンピューター学者のような思考法を学修し、主に、データの組織化、序列化、実証化、モデル化、および、データ変換についてのスキルを修得する。	

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
専攻教育科目	構想科目	エリア基礎科目	遺伝学と進化 (Genetics & Evolution)	生命現象を細胞レベルで理解し、さらに遺伝情報がどのように組み込まれているのか、どのように必要な遺伝情報が伝えられていくのかを植物、動物、微生物それぞれの共通点、相違点をフォーカスしながら講義を進める。進化の過程における遺伝情報についても理解を深める。授業内において、学生にも遺伝学、進化学にまつわるトピックスについて調査し、発表を行うミニプロジェクトも行う。授業初回ではオリエンテーションと授業概要説明を行う。原核生物、真核生物のDNAの違いやその進化について歴史を学習後、遺伝情報の伝達について種を越えて保存されているもの、種により特異性があるものについて学ぶ。授業の後半では学生自らがトピックスを選定して調査を行いスライドを作成し授業においてプレゼンテーションを行う。	
専攻教育科目	構想科目	エリア基礎科目	Molecular & Cell Biology （分子生物学と細胞生物学）	The course is designed to introduce basic molecular and cell biology to the students who did not study biology at high schools. It covers history of development of the techniques for molecular biology and uses vertebrate and invertebrate models for the technology. Cell biology is a vast subject, and it has links with almost every other branch of science. However, as the science advances, it becomes increasing easy to become lost in detail, distracted by an overloaded information and technical terminologies. This course will therefore focus on providing digestible and straightforward fundamental aspects of biology, namely fundamental units of life, cell structure and function, protein synthesis, and energy formation in cells. Special emphasis will be given to train the student’s mind to think on various aspects of cell biology. 細胞生物学の範囲は莫大であり、あらゆる科学と関連を持つ重要な学問である。 しかしながら、科学の進歩により、技術的専門用語や些細な情報にとらわれ、包括的な情報を体系的に身に付けることが困難になっている。この講義ではわかりやすく簡単な知識を身に着けることに焦点をあてる。 （26 スルチョードリ・ビシュワジット　4回） 生命の基本単位、タンパク質の構造と機能タンパク質合成、細胞でのエネルギー合成について講義する。細胞生物学の様々な側面について、学生自身が思考できるようにすることを重視する。 （4 Douglus Drummond　4回） DNAと染色体、DNA複製について講義を行う。細胞生物学の様々な側面について、学生自身が思考できるようにすることを重視する。	オムニバス方式
専攻教育科目	構想科目	エリア基礎科目	Brain & Information （脳と情報）	This paper is designed to introduce students to basic brain functions and the mechanisms by which the brain controls behavior, as well as the basic issues in information science for research in the life sciences. The paper is divided into two main sections. Part 1 will provide an overview of basic neuroanatomy, neurophysiology and pharmacology. In this section we will examine how nerve cells communicate and how drugs might affect this communication. Part 2 will examine how the brain processes information coming from the outside world (through sensation and perception) to exert influences on the environment (through motor control). We will look at processes that contribute to attention, motivation, learning, memory and decision-making. この講義は脳の基本的な機能とそのメカニズムについて、生命科学の研究のための情報科学の基礎的な内容と脳に制御される行動の点から学ぶものである。講義は主に2つの部分に分けられる。 （8 伊良皆啓治　4回） 基礎神経解剖学および薬理学と神経生理学についての概観を与えるものである。神経細胞がどのように情報を伝達し、薬物がいかにしてこの情報伝達過程に影響するかを検討する。 （16 Lauwereyns.　4回） （運動制御を通して）環境に働きかけるよう（感覚と知覚を通した）外界から来た情報を、脳がどのように処理するかを扱う。注意や動機、学習に記憶、そして意思決定へと繋がる情報処理過程について検討する。	オムニバス方式

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
専攻教育科目	構想科目	エリア基礎科目	社会哲学論 (Approaches to Social Philosophies)	社会的動物である人間は、社会なしには生きられない。ところが、その社会には人間の手では容易に解決し難い根本的な問題が存在してきた。例えば、共生、教育、平和、正義などに係る問題は、歴史のはじめから存在した課題である。人間はいかにして共に生きることができるのだろうか。いかにして教育されるべきだろうか。国内や国家間における平和と正義をいかにして維持することができるのだろうか。この授業では、以上の根本的な問題を深く理解するために、「社会」の考え方の形成に大きく関わった思想家（ルソー、スミス、マルクス、デュルケーム、デューイ、ハーバーマスなど）の理論の基礎を学習し、上の課題を解決する方法を共に模索していく。	
専攻教育科目	構想科目	エリア基礎科目	言語コミュニケーション論 (Approaches to Language and Communication)	私たちの日常のコミュニケーションは主に言語を介して行われている。しかしながら、ごく当たり前に行われているがゆえにことばやコミュニケーションの仕組みや機能について考える機会は限られている。この授業では、「言語」とそれを用いて行われる「コミュニケーション」を客観的に捉え、その仕組みを理解し、効果的な言語伝達の方法を身につけることを目標とする。具体的には意味論、語用論などの言語理論の基礎的な概念を学び、さらにコミュニケーション学の基礎を複数の視点（対人、異文化、公共、メディア等）から学ぶ。	共同
専攻教育科目	構想科目	エリア基礎科目	社会共生論 (Approaches to Social Collaboration)	この授業では、人種、民族、宗教、文化、伝統、ジェンダーなど多様な価値観が混在する現代社会における、多文化共生と幸福な生き方（well-being）の追求について、人類の誕生から今日にいたる展望と広い視野からこれからの社会のあり方を考察する。健康、福祉、社会開発、包摂／排除、人権、価値観、宗教、多文化共存、国際協力などをキーワードとして基礎的知識を習得するとともに、事例研究、インタビュー、アンケート、参与観察、言説分析、物質文化研究など、実証的かつ具体的な調査手法と、それに基づく論理的思考方法についても学ぶ。授業形態は、講義、演習、ディスカッション、プレゼンテーション、グループワークなども取り入れる。 （オムニバス方式／全8回） （18 稲葉美由紀　2回） 健康、福祉、社会開発等について講義する。 （35 大賀哲　2回） 国際協力、人権等について講義する。 （25 長谷千代子　2回） 主に文化人類学的な視点から価値観、宗教、多文化共存等について講義する。 （9 溝口孝司、38 舟橋京子　2回） 先史時代の社会における共生のありかたを、さまざまな知のツールを参照しつつ講義する。	オムニバス方式・共同（一部）
専攻教育科目	構想科目	エリア基礎科目	地域研究基礎論 (Introduction to Area Studies)	我々は普段から「東アジア」や「東南アジア」、「中東」、「ヨーロッパ」といった地域呼称を何気なく使用している。しかし例えば「東アジア」地域にはどのような国が含まれ、そしてどのような特徴があるのかと問われると、その答えは時代や場所、政治的立場等によって異なるであろう。本講義は、このように極めて多義的な「地域」を理解するためにはどのようなアプローチが必要とされるのかについて、地域研究の歴史と方法を学びながら考えることを目的とする。	共同
専攻教育科目	構想科目	エリア基礎科目	政治・経済基礎論 (Introduction to Political Science and Economics)	人の営みとしての政治活動と経済活動は、人類の歴史と同じぐらい古い。そのため古典古代以来、洋の東西を問わず、政治と経済を理解するために様々な理論や考え方が提示されている。本講義は、現代世界が直面する諸課題に対して、政治学や国際関係論、経済学の立場からどのようにアプローチできるのかについて、これまでこれらの学問領域で提示されてきた基本的な理論や考え方を紹介したり、具体的な事例から考えたりすることで学ぶ。 （オムニバス方式／全８回） （32 益尾知佐子　４回） 政治学や国際関係論の立場から現在の国際秩序が抱える問題について講義する。 （41 Mendez Guerra Carlos Alberto　４回） 経済学の立場から現在の国際秩序が抱える問題について講義する。	オムニバス方式

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
専攻教育科目	構想科目	エリア基礎科目	歴史基礎論 (Introduction to History and Archeology)	現代が直面する様々な課題の根本的な原因を捉え、課題を解決に導く上で、歴史的な視座は不可欠である。それではこの歴史的な視座はどのようにすれば身につくのであろうか。本講義は、先史時代から現代までを対象に、史資料や埋蔵資料から明らかにされた、歴史的に生じた様々な事象を例にとりながら、歴史学と考古学の基本的な方法論を学ぶことを通じて、歴史的な視座を身につける上で必要となる方法論的基礎を身につけることを目的とする。 （オムニバス方式／全８回） （23 アンドリュー=ホール　２回） 近代史研究の成果と課題及び現代史の対象範囲とその研究法について講義する。 （30 田尻義了　２回） 先史学の対象範囲とその研究法及び古代史研究の成果と課題について講義する。 （17 永島広紀　２回） 中世史研究及び近世史研究の成果と課題について講義する。 （23 アンドリュー=ホール、30 田尻義了、17 永島広紀　２回） 初回ガイダンス及び最終回まとめ・ディスカッションについて共同で担当する。	オムニバス方式・共同（一部）
専攻教育科目	構想科目	エリア基礎科目	地球の理解 (Understanding the Earth)	（概要）地球は46億年前の誕生以降、ゆっくりとまた時に劇的な変化を繰り返しながら、現在の姿となっている。地球上ではその変化に順応した生物種が繁栄してきたが、一方で多くの生物がその変化に適応できずに絶滅してきた。人類はいうまでもなく現在の地球環境に最も順応している生命体であるが、今後の地球環境の変化の中では、地球の長い歴史に刻まれてきた多様な絶滅生物種と比較して例外ではない。本講義では、惑星地球が誕生して以降46億年間の地球の表層・内部変動や環境変化を学ぶとともに、現在の地球の構造や運動を理解し、人類の脅威となりうる近未来の地球の変化予測についても学習する。 （オムニバス方式／全8回） （1 小山内康人・6 大野正夫・21 桑原義博・39 中野伸彦・31仙田量子　2回） 初回のガイダンスおよび最終回のまとめと期末試験を担当する。 （1 小山内康人　１回） 惑星地球について講義する。 （6 大野正夫　１回） 地球の構造について講義する。 （21 桑原義博　１回） 地球環境について講義する。 （39 中野伸彦　１.5回） 地殻について講義する。 （31 仙田量子　１.5回） マントルについて講義する。	オムニバス方式・共同（一部）
専攻教育科目	構想科目	エリア基礎科目	自然環境と社会 (Natural Environments and Societies)	我々は地球環境問題から地域で発生する環境問題や文化社会的問題など，様々なスケールの問題群に直面している。本講義では自然環境および人間生活を総合的に理解するための基礎を，自然地理学・生物多様性科学・文化地理学をつなぐ学際的視点から学ぶ。まず，全球スケールの環境多様性，そしてその中で日本および東アジアの自然環境の特徴を，地形・海洋・気候の成り立ちを基に学ぶ。 （オムニバス方式／全８回） （10 菅　浩伸　２回） 全球スケールの環境多様性，そしてその中で日本および東アジアの自然環境の特徴を，地形・海洋・気候の成り立ちについて講義する。 （12 荒谷邦雄　２回） 地球上に成立する生態系および風土に立脚した人類の生活や文化の多様性について講義する。 （42 藤岡悠一郎　２回） 生業と文化、社会構造の多様性とそれらの東アジアの特徴について講義する。 （10 菅　浩伸・12 荒谷邦雄・42 藤岡悠一郎　２回） 初回のイントロダクションと最終回のまとめについて、担当教員全員が共同で行う。	オムニバス方式・共同（一部）

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
専攻教育科目	構想科目	エリア基礎科目	自然災害・資源 (Natural Disaster and Resources)	社会基盤施設の安全確保のため、これらを自然災害から守ることが重要である。本講義で様々な自然災害を紹介し、それらの設計・建設・維持・管理などに必要な基礎的知識を身につける。	
専攻教育科目	構想科目	エリア基礎科目	地球環境実習 (Practices in Earth Environments)	本講義では、多様な研究対象について、実際のフィールドでの野外調査や実際の岩石・生物を用いた実験などの実習を通して、総合的に理解する方法を学び、地球・環境に関する諸問題を見出し、解決するための方法を習得する。 調査・実験計画の立案と実施方法、試料・文献収集・管理，調査・実験データ収集・管理、調査研究上の倫理、リスクマネジメントなど、調査・実験を実施するための基本を学ぶ。 （オムニバス方式／全８回） （1 小山内康人・6 大野正夫・21 桑原義博・31 仙田量子・39 中野伸彦・10 菅 浩伸・12 荒谷邦雄・42 藤岡悠一郎・15 Hazarika Hemanta　2回） 初回のガイダンスと最終回のまとめを、担当教員全員が共同で担当する。 （1 小山内康人・6 大野正夫・21 桑原義博・31 仙田量子・39 中野伸彦　3回） 地球科学についての実習を担当する。 （10 菅 浩伸・12 荒谷邦雄・42 藤岡悠一郎　2回） 地理学・生物学についての実習を担当する。 （15 Hazarika Hemanta　1回） 防災・資源についての実習を担当する。	オムニバス方式・共同（一部）
専攻教育科目	構想科目	レクチャーシリーズ	レクチャーシリーズ	現在我々が直面しているさまざまな問題にはどのようなものがあり、それらを解決するためにどのような実践的な取り組みが行われているのかについて、具体的な知識を得ることを目的とする。このために、現実の社会で起こっている問題の解決を目指して、研究活動を展開している研究者、実社会活動に携わる活動家、先導的見解を展開するオピニオンリーダーなど、第一線で活動する学内外の講師を招へいし、講師による講演、学生間及び学生と講師間の討論を主体としたセミナー形式のレクチャーを行う。基本テーマとして“倫理”、“文化”、“現代社会”、“環境技術”を掲げ、テーマに沿って平均的に月1回程度のイブニングレクチャー（19:00－20:30）として開講する。聴講したセミナーについてはレポートを提出する必要がある。	
専攻教育科目	協働科目		共創基礎プロジェクト 1 (Basic Project for Interdisciplinary Science and Innovation 1)	「課題協学科目」で培った、問題を発見し解決を目指して学び続ける態度と学習スキルを向上させることを目的として、問題基盤型学習法（Problem-Based Learning, PBL※）により、５～６人のグループでさまざまな領域の複合した課題２テーマ（４回で１テーマ）に順次取り組む。５グループで１クラスを編成し、担当教員がグループ討論と全体討論をファシリテートする。テーマごとに成果発表と総括（担当教員との質疑応答）を行う。※配布資料を題材としてグループ討論により解決すべき課題を発見し、必要な知識や情報源を学習者が個々に収集・修得して共有し合う協働学習法。	
専攻教育科目	協働科目		共創基礎プロジェクト 2 (Basic Project for Interdisciplinary Science and Innovation 2)	「共創基礎プロジェクト１」に引き続き、問題を発見し解決を目指して学び続ける態度と学習スキルを向上させることを目的として、問題基盤型学習法（PBL）により、５～６人のグループでさまざまな領域の複合した課題２テーマ（４回で１テーマ）に順次取り組む。５グループで１クラスを編成し、担当教員がグループ討論と全体討論をファシリテートする。多様な視点からのグループ討論ができるよう、テーマごとにグループを組み替える。取り上げるテーマは、「共創基礎プロジェクト１」よりも複雑なものを用いる。テーマごとに成果発表と総括（担当教員との質疑応答）を行う。	
専攻教育科目	協働科目		共創プロジェクト 1 (Project for Interdisciplinary Science and Innovation 1)	「共創基礎プロジェクト１・２」で培った、メンバーと協働して課題を発見し解決する基本的な学習スキルを深化させることを目的として、５～６人のグループでさまざまな領域の複合した課題２テーマ（４回で１テーマ）に順次取り組む。５グループで１クラスを編成し、担当教員がグループ討論と全体討論をファシリテートする。後半で取り上げるテーマは、「共創基礎プロジェクト」より複雑かつ発展的なものを用いる。テーマごとに成果発表と総括（担当教員との質疑応答）を行う。	

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
専攻教育科目	協働科目		共創プロジェクト 2 (Project for Interdisciplinary Science and Innovation 2)	「共創プロジェクト１」に引き続き、メンバーと協働して課題を発見し解決する基本的な学習スキルを深化させることを目的として、５～６人のグループでさまざまな領域の複合した課題２テーマ（４回で１テーマ）に順次取り組む。５グループで１クラスを編成し、担当教員がグループ討論と全体討論をファシリテートする。多様な視点からのグループ討論ができるよう、４回ごとにグループを組み替える。取り上げるテーマは、「共創プロジェクト１」よりも複合度が高く発展的な内容のものを用いる。テーマごとに成果発表と総括（担当教員との質疑応答）を行う。	
専攻教育科目	経験科目		異文化対応1 (Cross-Cultural Adjustment 1)	日本人学生の中には，自分には遠い世界のことだと思っている人も少なくないでしょう。また，留学を考えている学生でも，海外での生活や帰国後の就職などについて不安を抱いている人がいるのではないでしょうか。 本講義では，異文化間コミュニケーション，多文化教育，グローバリゼーション，留学と就職といった様々な角度から留学を捉えその意義を考えるとともに，日本人論や海外から見た日本なども紹介することで，自分の国を見つめなおし多様な文化や価値観を客観的に考える視点を養います。また，授業では留学生活の実際や問題解決の方法などについて積極的に話し合います。この授業を通して，日本人学生各には「外」に飛び出していくことについて考えるきっかけをつかんでほしい。留学生には，海外で学ぶことを客観的に見つめなおし自分の立ち位置を再確認するきっかけにしてほしい。	
専攻教育科目	経験科目		異文化対応2 (Cross-Cultural Adjustment 2)	経験科目として体験する海外留学（海外活動A・B)またはインターンシップ（グローバル・国内）の学修内容を、学術的なレベルでのプレゼンテーション及びレポートとして完結する。学生のプレゼンテーションを通した相互の体験内容共有化と情報交換を行うとともに、異文化対応に関する議論を深め、異文化理解に関する姿勢を獲得することを目的とする。発表学生による１５分のプレゼンテーションと学生間の１５分の討論から構成し、聴講者はプレゼンテーション聴講と討論を総括した聴講レポートを作成して発表学生へのフィードバックを行い、聴講による異文化理解の方法論を実践的に修得する。第2クオータ終了直後（8月）の連続した４日間、第4クオータ終了直後（2月）の連続した４日間の集中講義として開講する。	
専攻教育科目	経験科目		海外活動A 1 (International Experience A 1)	課題解決を考えていく上で必要な知識・技能の獲得を目的とする滞在等について、学内での事前学修、留学後の事後学修を含め、その学修全体が１単位に相当する学修に対して単位認定を行う。	
専攻教育科目	経験科目		海外活動A 2 (International Experience A 2)	課題解決を考えていく上で必要な調査活動等を目的とする滞在等について、学内での事前学修、留学後の事後学修を含め、その活動全体が１単位に相当する活動に対して単位認定を行う。	
専攻教育科目	経験科目		海外活動B 1 (International Experience B 1)	課題解決を考えていく上で必要な知識・技能の獲得を目的とする滞在等について、学内での事前学修、留学後の事後学修を含め、その学修全体が２単位に相当する学修に対して単位認定を行う。	
専攻教育科目	経験科目		海外活動B 2 (International Experience B 2)	課題解決を考えていく上で必要な調査活動等を目的とする滞在等について、学内での事前学修、留学後の事後学修を含め、その活動全体が２単位に相当する活動に対して単位認定を行う。	
専攻教育科目	共創科目	エリア発展科目	進化生物学 (Evolutionary Biology)	生物の多様性は、生物が歴史の中で様々な環境に適応して進化した結果である。進化学は、分子レベルから生態学に至る、生物学のすべての階層の事象を対象とする。本コースでは、進化史上の重要なイベント、進化の原動力、進化論の展開など、進化の基本原理について学ぶとともに、生命の多様性を導いた生物進化のシナリオについて、進化生物学、生態学、環境科学分野からの統合的理解を目指す。さらに、近年の進化生物学の医学、農学分野などへの貢献についても、最新の知見を紹介する。	

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
専攻教育科目	共創科目	エリア発展科目	発生生物学 (Developmental Biology)	発生生物学の歴史を学び、生命の成り立ち方や生命を維持するための体内の器官、組織の役割や機能を理解する。４年次における研究テーマ設定へリンクするように、授業の後半では学生自らが仮説をたて、調査し発表を行う。 講義の初回ではオリエンテーションと授業概要を説明し異なるバックグランウドを持つ受講生の基礎学力を測る。その後発生生物学の歴史と無脊椎動物および脊椎動物の発生の概要を説明する。講義の中で各学生がトピックスを選定しインターネットや図書館の蔵書を用いてトピックスについて調査および解析を行いプレゼンテーションを行う。	
専攻教育科目	共創科目	エリア発展科目	Physiology and Behavior （生理学と行動）	Physiology is the study of normal functions within living organisms. It is a sub-section of biology, covering a varieties of topics including organs, anatomy, cells, biological compounds and how they interact together to make life possible. Study on physiology and behavior is truly an interdisciplinary effort. Students will learn on endocrine systems, nervous systems, immune systems, male and female reproductive behavior, hormones and social behaviour, and homeostasis and behaviour. Lectures and active-learning processes will be conducted to accomplish the knowledge in this course. 生理学は生体の通常の機能について学ぶ学問である。生物学の一分野であり、器官、解剖学、細胞、生物的構成やその生物として存在を可能にする相互作用について学ぶ。生理学と行動学の両方を学ぶことは非常に学際的である。内容としては内分泌系、神経系、免疫系、男女の生殖行動、ホルモンと特異的行動、恒常性と行動である。この講義での知識を身に着けるには講義と積極的な学習が必要である。	
専攻教育科目	共創科目	エリア発展科目	Stress and Nutrition （ストレスと栄養）	Life is challenging, so a varieties of stress could be found in our society. A stress response is a suite of physiological and behavioral responses that help to reestablish homeostasis. Animals and humans undergo profound changes in physiology, morphology, and behavior across their lifecycles, and the both neuronal and hormonal systems play fundamental roles integrating external and internal signals and orchestrating adequate responses aimed at maximizing individual fitness. Moreover, access to sufficient nutrition to maintain normal body composition and function throughout the life-cycle is fundamental to maintaining health. Thus, proper nutrition is one of the vital factors to minimize stress. This course will focus the issues of a variety of stress and how nutrition could support to minimize the stress. Lectures and active-learning processes will be conducted to accomplish the knowledge in this course. 人生は挑戦の連続である。様々なストレスが社会には溢れている。それゆえストレス応答は恒常性を維持するための生理学的および行動的応答である。動物やヒトはその生活環で生理的、形態的、行動的変化の影響を受ける。 神経系およびホルモン系は外的および内的シグナルを統合し、個体の健康を維持するために応答を統合する基本的な役割を果たしている。さらに、通常の身体の構成と機能を維持するために十分な栄養を摂取することは健康の維持に重要である。それゆえ、ストレスを最小化するためには適切な栄養素が必要である。この講義では様々なストレスとそれらを最小化する栄養素について着目する。この講義での知識を身に着けるには講義と積極的な学習が必要である。	

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
専攻教育科目	共創科目	エリア発展科目	Biochemistry （生化学）	This course will introduce students to the main types of molecules found in all living organisms. The molecular structure and chemical properties of these groups, comprising the carbohydrates, fats and lipids, nucleic acids and proteins, will be described. The metabolic pathways that govern their formation and breakdown will be examined describing how energy is released in the breakdown of food or consumed in the synthesis of more complex molecules. The role of enzymes in catalysing these complex reactions will be introduced. The relationships between different pathways will be emphasised leading to an overview of the complex web of metabolic interactions within cells. このコースでは、生きているすべての生物に存在する主要な分子タイプを紹介する。 授業では炭水化物、脂肪および脂質、核酸およびタンパク質の分子構造および化学的性質について説明を行う。 各分子の合成および分解を支配する代謝経路は、エネルギーが食物の分解においてどのように放出されるか、またはより複雑な分子の合成において消費されるかを調べることで明らかにされるため、これらの複雑な反応を触媒する酵素の役割を紹介する。 特に異なる経路間の関係に重点を置き、細胞内代謝相互作用の複雑な経路を明らかにしていく。	
専攻教育科目	共創科目	エリア発展科目	Advanced Molecular Biology （先端分子生物学）	This course introduces students to more advanced topics in molecular biology. It focuses on the molecular structure of genes and their regulation and expression in the cell. This includes the regulation of RNA transcription from DNA, post-transcriptional regulation of protein expression by RNAi and regulation of protein activity by post-translational modifications. The molecular basis of human diseases including cancer will be examined. The course will also introduce the recent developments in the tools of molecular biology used for analysis of the genome and its expression. This includes next generation DNA sequencing of whole genomes, microarray technology for gene expression and mass spectroscopy for protein analysis, together with recent methods of genome modification. The application of these technologies to cloning of animals, modification of embryos and synthetic biology will be discussed. このコースでは、生きているすべての生物に存在する主要な分子タイプを紹介する。 授業では炭水化物、脂肪および脂質、核酸およびタンパク質の分子構造および化学的性質について説明を行う。 各分子の合成および分解を支配する代謝経路は、エネルギーが食物の分解においてどのように放出されるか、またはより複雑な分子の合成において消費されるかを調べることで明らかにされるため、これらの複雑な反応を触媒する酵素の役割を紹介する。 特に異なる経路間の関係に重点を置き、細胞内代謝相互作用の複雑な経路を明らかにしていく。	
専攻教育科目	共創科目	エリア発展科目	病態生理 (Pathophysiology)	病態生理学とは、生理学的な機能が異常になったり、あるいは正常な機能が働かないために、特殊な症状や病気になることを研究する学問です。病気を治したり、特効薬を開発するには、病気のメカニズムを理解しなければなりません。現代に多く見られる病気は、糖尿病、がん、アルツハイマー病やパーキンソン病などの神経変性疾患と認知症です。精神疾患や心身症にも多くの関心が寄せられています。このコースは、これらの病気がどのように遺伝的、環境的因子によって起こる酸化ストレスが病気の原因になるかという点に焦点をおきます。さらに、これらの病気を防いだり、症状を最小限にとどめるにはどうすればいいか、講義やアクティブ・ラーニングを通して知識を得ると共に、解決手段を見つけるための議論を重ねることを目指します。	
専攻教育科目	共創科目	エリア発展科目	健康の科学 (Science and Health)	誕生から成長し成人となり老いるまで、人の一生のそれぞれの段階における体と心の問題について理解を深めることは、私達の人生を豊かにする上でも、あるいは今後の人類の課題を見出す上でも、貴重な一助になるであろう。本授業では、健康に関する各分野での専門家である医学研究院の教員が、オムニバス形式で、基礎からパースペクティブ（将来の見通し）まで多角的な講義を行なう。きちんとした理解とそれをより深めるためには、それなりの知識と経験を有することが極めて重要と考えられるため、3年次あるいは4年次の学生の受講が適切である。	

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
専攻教育科目	共創科目	エリア発展科目	Cognitive Science （認知科学）	What is consciousness? How do humans process information for perception, memory, the control of action, et cetera? These questions can be looked at from many angles: psychology, philosophy, neuroscience, engineering, and medicine. The goal of this course is to address these questions in an open-minded and creative way, using scientific methods. We will focus on the basic principles of cognitive processing, the current trends in research, and the importance of this field for society and well-being. 意識とは何か？いかにして人は知覚や記憶、行為の制御などのための情報を処理しているのだろうか？これらの問いは、心理学、哲学、神経科学、工学、医学といったさまざまな観点でみられる。本講義の目的は、これらの疑問を科学的な方法を用いた自由で独創的な手法の中で検討することである。講義では認知処理過程の基本的原理と研究における近年の動向、そして社会と幸福に対するこの分野の重要性に焦点を当てる。	
専攻教育科目	共創科目	エリア発展科目	Bioethics （生命倫理）	This paper is designed to introduce students to the basic concepts of bioethics and principles for appropriate conduct in research in the life sciences. The paper begins with an introduction on the general topic of ethics, applied to life, health, and work in the life sciences. Emphasis is placed on the notion of a multicultural society with various perspectives and values to be taken into account when engaging in research in the life sciences, through consultation and working on the basis of informed consent. The paper discusses sensitive topics such as genetic engineering, stem cells, cloning, the so-called boundaries of life (abortion, euthanasia), and animal welfare. この講義は生命科学の研究を適切に運営、実施するための生命倫理と原理についての基本的な概念を学ぶものである。講義ではまず倫理学の一般的な話題から生命への適応、健康、そして生命科学における役割を紹介する。生命科学の研究に従事する際は、インフォームド・コンセントの原則への取り組みと協議を通した、考慮されるべき多様な視点と価値観の伴う異文化共存社会の理解に重点が置かれる。講義では遺伝子工学や幹細胞、クローニング、世間一般に言われる命の境界線（妊娠中絶、安楽死）、そして動物福祉といった繊細な話題について議論する。	
専攻教育科目	共創科目	エリア発展科目	生命情報科学 (Biological Information Science)	生命医用工学は、医学、生命科学の分野において、工学や情報学を応用して、生命現象の解明多医療に役立てようというものであり、極めて学際的で幅広い学問分野である。本講義では、この分野の基礎となる数学、物理、工学的知識を身に付けるとともに、生命医工学分野の中の生体情報工学、神経工学、生体計測・イメージング工学、生体機械工学、生体モデル・シミュレーション技術の概要を理解する。	
専攻教育科目	共創科目	エリア発展科目	システム神経科学 (Systems Neuroscience)	私たちの感覚の全ては、脳の中の神経相互作用によって創り出されている。このコースでは、ヒトや哺乳類の感覚系の基本的な仕組みについて学び、脳の構造と機能との関係について理解を深める。外界の物理的および化学的刺激は、一旦感覚器で電気信号に変換された後は、脳の中で情報として扱われる。その情報が、神経ネットワークにより処理・加工されて、私たちの感覚となる。その情報処理の基本原理を、神経生理学や計算論的神経科学の基礎知識と最新の研究結果を紹介しながら概観する。	
専攻教育科目	共創科目	エリア発展科目	多文化共生の世界秩序 (Cultural pluralism and the world order)	20世紀末から急激に進行したグローバル化は世界に大きな亀裂と葛藤、格差をもたらし、新たな世界秩序のあり方が模索されるようになっている。本授業は、このような現代的な動向を見据えつつ、異なる民族や文化が公正に共存できる世界秩序をいかに構築するかという課題に挑む。具体的にはリベラリズムやナショナリズム、政治と宗教との関係に係る課題を共に考えることを通じて、多文化共生の世界秩序を構想するための基礎的な知識や発想力、思考力を養うことを目指す。	
専攻教育科目	共創科目	エリア発展科目	教育倫理学 (Ethics of Education)	現在、「より効果的な教育」を模索する研究は盛んであるが、その前に「どんな教育が善い教育か」を問う必要があるだろう。教育は何を目指すべきであろうか。この問に答えようとするのは「教育倫理学」である。二つのアプローチがあるが、一つは課題に基づくのである。例えば、学校内暴力、教師の権威、テストと学歴社会、民主主義的教育、道徳教育などの倫理的な側面を明確化し、議論する。もう一つは理論的なアプローチである。教育倫理学者（プラトン、デューイ、ノディングズなど）の著作を詳細に講読し、教育の問題をどう考えるべきかを学習する。	

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
専攻教育科目	共創科目	エリア発展科目	人間社会研究法 (Research Methods for Human Societies)	個人の心理と行動が、社会全体の現象（文化や政治、経済や教育等）の変化を作り出す一方で、社会変化の影響を受けて個人の心理や行動が変化するダイナミクスについて社会心理学および社会学を基盤に検討し、自己の行動が社会変革につながる可能性を科学的に理解することを目的とする。また、そうした科学的理解のための研究法を、計量的なアプローチと定性的なアプローチの両面から学び、社会の基礎的研究法とともに、物事を客観的にみるセンスを養うことを目的とする。講義とグループディスカッションを組み合わせて授業を進める。また、実際にデータの収集や分析を体験する演習も取り入れる。	講義　8時間 演習　7時間
専攻教育科目	共創科目	エリア発展科目	言語とコミュニケーションA (Language & Communication A)	言語コミュニケーションを、言語表現、コンテクスト、語用論的認知能力の側面から、英語や日本語のコーパスや会話データ、映画のスクリプトなどを用いて実証的に考えます。授業では、文の意味と会話の含意の区別、意味の拡充と語用論的推論、ことばの認知の効率性、談話標識やフィラーの使用に見られる話し手の心的態度と対人機能、配慮表現とポライトネスなどについて学び、関連する英語論文を読みながら簡単なグループ討論も行ないます。言語コミュニケーションの多くは言われていないこと(what is not said)により成り立っていることがわかります。	
専攻教育科目	共創科目	エリア発展科目	言語とコミュニケーションB (Language & Communication B)	コミュニケーションを支える言語には様々な側面がある。言語は単語に分解でき、単語（あるいは形態素）はそれぞれ一定の意味を持つ（意味的な側面）。単語が集まると文になり、文を組み立てるには一定のルール（文法）に従う必要がある（統語的な側面）。また、言語は社会や文化と密接な関わりを持つ。国や地域などの社会的・地理的な要因だけではなく、性別や年齢といった人に関わる要素も言語使用に影響を与える（語用論的・社会言語学的な側面）。この授業では、このような言語の様々な側面を取り上げて議論し、データ分析や言語調査を通して、言語とコミュニケーションの実態に迫っていく。	
専攻教育科目	共創科目	エリア発展科目	議論と創造のコミュニケーションA (Communication for Argumentation and Knowledge Creation A)	「議論と創造のコミュニケーションA, B」では、人がコミュニケーションによってこの世界とつながろうとし、議論を重ね知識の蓄積生産を繰り返しながら環境の変化に対応していくプロセスを学ぶ。同時に、コミュニケーションスキル（ディスカッション、ディベート、プレゼンテーション等）の向上も図る。「A」では、「知はいかに創造・共有・活用されるのか」を問う知識科学の観点から、多文化共生社会における言語・文化・コミュニケーションの関係を見直し、日常的なテーマを取り上げながら議論を行い、知識創造の過程を学生と討議しながら学ぶ。	共同
専攻教育科目	共創科目	エリア発展科目	議論と創造のコミュニケーションB (Communication for Argumentation and Knowledge Creation B)	「議論と創造のコミュニケーションA, B」では、人がコミュニケーションによってこの世界とつながろうとし、議論を重ね知識の蓄積生産を繰り返しながら環境の変化に対応していくプロセスを学ぶ。同時に、コミュニケーションスキル（ディスカッション、ディベート、プレゼンテーション等）の向上も図る。「B」では、議論法、すなわち「探求と弁論の過程」を通じて、現代社会の論争を分析し、必要な情報を収集検証し、問題の解決策を探っていく過程を学ぶ。さらに、特定された解決策をディベートという形式を用いてより厳密に検証し、意思決定を行う過程を学ぶ。	共同
専攻教育科目	共創科目	エリア発展科目	異文化とコミュニケーション (Multiculture & Communication)	本授業では、多文化共生という課題をとりまく背景とその議論、多文化理解のための方法論について単に講義やテキストの読解、文献調査、情報検索等によって知識を得るのみならず、課題解決に向けて取り組む姿勢や態度を身に付ける。そのために授業ではディスカッション、プロジェクトワーク等の協働の活動が重視される。その際、言語・文化や価値観がぶつかり合う日本の事例を欧米や他のアジアの同様の事例と三角測量的に比較し考察することを通して、文化や価値観を相対化するに必要なアカデミックスキルや多文化リテラシーを学ぶ。	講義:5時間 演習：10時間

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
専攻教育科目	共創科目	エリア発展科目	メディアとコミュニケーション (Media and communication)	この講義では、主に、広告メディアとコミュニケーションを中心としたテーマとする。広告メディアは、テレビや新聞広告だけでなく、大きな広がりをみせており、最近ではネット上での映像配信で広告コンテンツが一瞬にして世界中に広がるなど大きく変容している。これからのメディアとコミュニケーションの役割を学びつつ、世界の最前線の広告作品を鑑賞しながら、環境や貧困などの世界的な社会課題を解決するクリエイティブコンテンツの制作ワークショップを実施することで、クリエイティブを生み出すスキルも学ぶ。メディアがパーソナル化している時代に自らのコミュニケーション力も磨く。	
専攻教育科目	共創科目	エリア発展科目	先史社会を知るＡ	人類はその誕生以来社会を形成し、相互の思考・行動を調整しながら自然的・社会的環境とその変化に対応しつつ生活してきました。どのような環境下でどのような社会組織や構造が形成され、環境の変動に対してどのような対応がなされたのか？そのような対応はどのような帰結を社会と人々に導いたのか？文字のない先史時代について、おもに考古学の方法を用いてあきらかにすることは、現代の社会を生きる私たちにも、多くの示唆を与えてくれます。本科目では、先史社会の研究の方法、理論、そして先史社会のありさまとその変容の具体について学ぶことを通じて、現代社会において先史社会について学ぶことの意味・意義を考えます。	
専攻教育科目	共創科目	エリア発展科目	先史社会を知るＢ	人類はその誕生以来社会を形成し、相互の思考・行動を調整しながら自然的・社会的環境とその変化に対応しつつ生活してきました。どのような環境下でどのような社会組織や構造が形成され、環境の変動に対してどのような対応がなされたのか？そのような対応はどのような帰結を社会と人々に導いたのか？文字のない先史時代について、おもに考古学の方法を用いてあきらかにすることは、現代の社会を生きる私たちにも、多くの示唆を与えてくれます。本科目では、遺跡出土人骨を用いた先史社会の学際的研究の方法、理論、そして先史社会のありさまとその変容の具体について学ぶことを通じて、現代社会において先史社会について学ぶことの意味・意義を考えます。	
専攻教育科目	共創科目	エリア発展科目	国際福祉論 (Global Social Welfare)	社会福祉の本来の目的は、社会的に不利な立場に置かれている個人やコミュニティにとどまらず、すべての人々の福祉（Well-being）を高めることである。この授業では、グローバル化および少子高齢化によって日本社会や国際社会が抱えている多様化・複雑化する福祉課題について、社会福祉学と社会開発分野の主な理論と実践方法を学ぶ。また、広い視野から問題を分析することを通して、従来の社会福祉の枠を超えた新しい枠組み、アプローチ、解決策について考察する。授業は講義、演習、ディスカッション、発表などを取り入れる。	講義　10時間 演習　5時間
専攻教育科目	共創科目	エリア発展科目	生き方の人類学 (Anthropology on Life Style)	この授業では、多様な価値観が共存し、時にはぶつかり合う現代世界にあって、できるかぎり相互理解を深めながら問題解決のために交渉し続けられるような身構えや心構えを学ぶ。人間の生き方は、個人が自由に選択して変えていける側面もあるが、無意識のうちに国家や民族、宗教、地理的環境、歴史などに縛られ、容易に変えがたい側面もある。その両面に目配りしながら、安易に理想を追い求めるのでもなく、諦めて現状に迎合するのでもない生き方の模索を目指す。授業は講義、演習、ディスカッション、発表などを取り入れる。	
専攻教育科目	共創科目	エリア発展科目	国際政治学 (International Politics)	この授業では、国際政治学の理論と方法を通じて国際社会の課題を学ぶ。理論（リアリズム・リベラリズム・マルクス主義・構成主義等）と方法論（数理分析・計量分析・事例研究・内容分析・計量テキスト分析・言説分析・参与観察・インタビュー調査等）を学び、その上で具体的な課題（安全保障、環境問題、国際協力、公共財の管理、対外政策、ソフトパワー、世論、民主主義、人権・人道問題、政府開発援助、メディア報道、社会政策、社会運動、平和学習）を分析・考察し、国際社会における共生の方法を探る。授業は講義形式とし、国際政治学の「理論」と「方法」を修得し、分析や考察ができることを目標とする。	
専攻教育科目	共創科目	エリア発展科目	比較地域研究 (Comparative Area Studies)	世界の様々な地域で現在、領土や民族、宗教、資源などをめぐる紛争、越境犯罪やテロ、新興・再興感染症などに代表される越境問題、グローバル化の進展に伴うヒトやモノ、カネ、情報の流動化と情報通信テクノロジーの進歩が引き起こす政治・経済・社会の変化などが生じている。本演習はこれらの諸課題について、政治学や歴史学、経済学、社会学、人類学、生態学、疫学など関連する様々な方法論を駆使し、比較研究をおこなうことで、現場で実際に生じている問題の根源的な原因を把握し、解決するための視座を養うことを目的とする。	

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
専攻教育科目	共創科目	エリア発展科目	東アジア地域研究 (East Asian Area Studies)	冷戦終結後、東アジア地域は日本や韓国、台湾、そして経済的に急速に台頭してきた中国などの間で経済面では一体化が進みつつある。また音楽や映画、アニメ、漫画などポップカルチャーなど、文化の面でも相互に関係が深まっている。しかし、北朝鮮の存在や、中国と日本、韓国の間で領土や歴史などの問題を巡った対立が続くなど、政治や外交の面では緊張が続いている。本演習ではこのような東アジア地域の経済、文化、政治の動態を、歴史や文学、政治や経済、社会など様々な側面から議論することを通じて、学ぶ。	
専攻教育科目	共創科目	エリア発展科目	地域生態論 (Global and Regional Ecology)	グローバル化の進展や、新興国や発展途上国の急速な経済発展に伴い、現在、世界の生態環境は急速に悪化しつつある。生物多様性条約やアジア森林パートナシップなど、この急速に進みつつある生態環境破壊に歯止めをかける取り組みが存在しているが、これらの取り組みが実効性を持つためには、各地域の生態環境の実態を知り、それに即した対策を立てる必要がある。本演習では、生物学や生態学、森林科学などの知識を身につけ、実際にフィールド調査をおこないながら、世界の各地域の生態環境の実態を解明し、それを保全する力を身につける。	共同
専攻教育科目	共創科目	エリア発展科目	開発経済学 (Development Economics)	経済発展は政府にとっても社会にとっても重要な政策目標である。その一方で、多くの開発途上国や中進国、さらには共産主義・社会主義経済から市場経済への移行を経験した国家が、グローバル化の波にさらされるだけではなく、人材や資源の不足、インフラの未整備、行政や市場の機能不全などの問題に直面し、経済が停滞する状態に陥っている。本演習は、上記の問題を解決し、これらの国々が持続可能な発展を遂げるためには何が必要とされているのかについて学ぶ。開発経済学や応用経済学の立場から考えることを目的とする。	共同
専攻教育科目	共創科目	エリア発展科目	国際関係論 (International Relations)	21世紀に入り、グローバル化の進展や、中国やインド、ブラジルなどの新興国の台頭により、世界の富と力のバランスは急速に変化しつつある。その結果、グローバル・ガバナンスの在り方や、既存の国際規範、地域秩序などが揺らぎ、今後の世界がどのような方向に進むのか、予測が難しくなってきている。本演習では、国際関係や外交、グローバル・ガバナンスにかかわる諸問題を具体的に取り上げながら、これからの規範や秩序がどうあるべきかについて考える。	
専攻教育科目	共創科目	エリア発展科目	国家と政治 (State and Politics)	現在、世界の国々は様々な政治上、もしくは国家そのものに関する問題に直面している。例えば、経済や社会の変化に伴い生じた諸課題に対して政治が有効な手立てを見つけられないなどの政治の機能不全、破綻国家や失敗国家、紛争後の国家における国家建設・再建、民主化や地方分権化といった政治体制の移行、既存の政治体制に対する様々な異議申し立てなど、国家や政治に関する諸問題が山積している。本演習では比較政治学や国際政治学、政治史、政治思想研究などのアプローチから、これらの問題を考える。	共同
専攻教育科目	共創科目	エリア発展科目	日本経済史 (Japanese Economic History)	幕末・維新期～高度経済成長期における日本経済史について概説する。その際、資本主義システムによる経済社会の膨張と、構造的変化を探求することを基本的なテーマとする。具体的には、対象時期における日本の経済成長について、産業化の進展（および、そのひずみ）を軸としつつ、考察していく。同時に、その空間的な拡がりにも着目し、日本と東アジア諸地域の経済社会、さらには世界経済との関係について、貿易・外交などを中心に、その変化をあとづける。	
専攻教育科目	共創科目	エリア発展科目	埋蔵文化財から見える世界 (Regional Perspective from Archeology)	考古学が対象とするのは遠い昔だけではない。中世や近世、さらには近現代の人々の暮らしや街の在り方、政治や経済、社会などを、発掘された埋蔵文化財から丁寧に読み解くこともまた、考古学は対象としている。本演習は、教室での演習や野外での実習などを通じて、埋蔵文化財の発掘、調査、保存、そして埋蔵文化財が語るその時代時代の様々な情報を読み解く力を身につけ、史資料の分析だけでは見えてこない、歴史の姿を捉えることを目的とする。	
専攻教育科目	共創科目	エリア発展科目	地域史 (Regional History)	これまでの歴史学は、「日本史」や「中国史」、「イギリス史」といった現在の国家の枠組みを所与のものとしたいわゆる「一国史」を分析のフレームにしてきた。本演習は、海域史や交易史、国際関係史、グローバル・ヒストリーなどの成果を取り入れながら、地域の枠組みで歴史を捉えなおすことにより、境界を超えたヒトの交流や、モノや情報、カネの流れの動態を描き出し、「一国史」の枠組みを相対化する視点を手に入れることを目指す。	

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
専攻教育科目	共創科目	エリア発展科目	比較史 (Comparative History)	今ある国や地域はどのように出来上がってきたのか。グローバル化、紛争、権力や支配にまつわる問題、経済や社会の変化など、現代のわれわれが直面している様々な課題は果たして現代特有なものなのであろうか。本演習は、歴史学の基本である史資料を丁寧に読み込む力を身につけたうえで、様々な国や地域の歴史を相互に、また時間を超えて比較することにより、それぞれの国や地域、そして時代の固有性と、国や地域、時代を超えて共通する特徴を明らかにし、現代を見通す上で不可欠な歴史的視座を養う。	
専攻教育科目	共創科目	エリア発展科目	地球物質科学 (Earth Material Science)	この授業では、講義・観察・実習を通して、基礎的な地球の構造や運動メカニズムを理解し、人類生活に密接に関わる地球表層部（地殻および上部マントル）構成物質ついて学習する。特に、それぞれの地球構成物質がどのような条件で形成されるか、その物理的・化学的条件を理解し、地球の運動システムにおいて、それぞれの構成物質の形成メカニズムついて学習する。講義では、日々進展する最新の分析手法や先端研究事例を紹介するほか、地球構成物質については担当教員の最新の研究成果を織り交ぜて講義する。 （オムニバス方式／全８回） （1 小山内康人、39 中野伸彦　２回） 初回にガイダンスおよび講義内容の説明、最終回にまとめと試験を実施する。残りの6回は以下の担当とする。 （1 小山内康人　３回） 地球の運動やテクトニクス、地球史について講義する。また、最新の地球科学のトピックと研究成果を紹介する。 （39 中野伸彦　３回） 地球の内部構造、構成物質、実際の岩石の解析手法や解析例について講義する。講義の過程で実際の岩石の観察や簡単な実習を行う。	オムニバス方式・共同（一部）
専攻教育科目	共創科目	エリア発展科目	大気海洋科学 (Oceanic and Atmospheric Sciences)	毎日吸っている空気や海岸に押し寄せられる海水はいったいどこからきて、どこへ運ばれていくのか、大気海洋科学ではこの何気なく享受する地球上の気候システムの成り立ちを学ぶ。天気予報はスマホを通じて、より身近な存在となってきており、同様のことが海流についても実施され始めている。天気の移り変わり・海流・エルニーニョ・温暖化などの現象を支配する大気と海洋循環の基本原理を紹介しながら、日々の生活・経済活動・環境問題と深く結びつく気候システムへの理解を深める。	
専攻教育科目	共創科目	エリア発展科目	地球の変動 (Earth Dynamics)	（概要）本講義は，変動する惑星地球を内部と表面の両方から捉え，それらのシステムを理解し，現在，過去，未来の地球の変動について考察する．地球内部については，主に地球物理学的手法によって求められる内部構造とその変動，地球の表面からは，現在の地球の気候システムとその変動を学習する． （オムニバス方式／全8回） （6 大野正夫／4回） 地震波、重力、電気・磁気、熱といった物理観測の手法は、地球内部の情報を得る方法として、非常に有効である。これらの手法を用いた研究によって得られた惑星地球の構造と、地震・火山活動など固体地球の様々な変動について学ぶ。 （21 桑原義博／4回） 地球の気候変動は我々の関心と疑問を掻き立てるトピックの一つである。地球の気候は、地球の長い歴史の間に、明らかに何度も変動しており、これからもそうであると思われる。この講義では、現在の地球の気候システムを理解するとともに、異なる時間スケールの観点から、過去に起きた気候変動の現象と原因について学ぶ。	オムニバス方式

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
専攻教育科目	共創科目	エリア発展科目	社会の中の地球科学 (Earth Sciences in Global Society)	本講義では，我々人類が営む社会生活とその基盤をなす生活環境としての地球との深い関わり合いについて学び，地球科学や環境に関する諸問題が人類の社会活動に与える影響とその解決策を考える基盤を構築することを目的とする．地質学，岩石学，地球化学，同位体化学などを用いた地球科学的な手法や時間軸を加えた四次元的な視点から，産業・経済，学術・文化，科学・技術などの人類社会活動をグローバルに読み解き，これからの社会に対して地球科学がどのように貢献することができるかを考えていく． (オムニバス方式/全8回) (31 仙田量子/4回) 人類社会の進化を読み解くツールとして同位体地球科学の考え方を学び、実際の社会の中での応用例について考古学や環境問題を絡めて紹介することを担当する。 （45 足立達朗/4回) 人類活動，特に歴史，経済分野と地質学・地形学との関わりに関する考え方を学び、実際の社会で起きている問題の地球科学的観点に基づく解説を担当する。	オムニバス方式
専攻教育科目	共創科目	エリア発展科目	地盤学と災害 (Geotechnics and Disaster)	社会基盤施設の設計・施工上，その基礎を支える地盤の変形および破壊，地盤内の応力，地盤の調査，地震、豪雨など自然災害による地盤と構造物の相互作用およびそれらの安全性の確保についての基本的な考え方を適切に理解することが重要である。この講義では，地盤を構成する土要素のせん断強さの一般法則を理解し，地盤の破壊現象の解釈ならびに土圧，斜面安定、地震被害および土砂災害に関する基礎的知識を身につけ，これらを工学問題に適用するための素養を取得する。	
専攻教育科目	共創科目	エリア発展科目	生物多様性科学 (Biodiversity Science)	この演習では、主として種、および生態系レベルの生物多様性を対象に、生物多様性の創出や維持機構に関する基本理論と、実践的な生物多様性の調査・研究法、保全と持続的利用に関して学ぶ。本講義を機会に身近な生物の営みや生物同士の関わりに目を向けるとともに、我々の生活を支える様々な生態系サービスの源である生物多様性についての理解を深め、環境負荷を抑えた、しかも豊かな生活を実現する未来可能性について考えてほしい。	共同
専攻教育科目	共創科目	エリア発展科目	保全遺伝学 (Conservation Genetics)	本講義では、種の絶滅を回避するうえで、いかに遺伝的多様性が重要かを理解するために必要な理論的基盤を学ぶ。具体的には、遺伝学、集団遺伝学、量的遺伝学等を中心に一般的な進化理論について解説する。また、実際に遺伝的データを自ら解析することを通じて、遺伝的多様性の評価に必要な解析方法とパラメータについて学ぶ。生息地の消失や個体数の激減によりもたらされうる絶滅のリスクを遺伝的側面から捉え、遺伝的多様性の減少を最小限にするための実践的なアプローチについて考察できるようになることを目標とする。	
専攻教育科目	共創科目	エリア発展科目	環境保全・再生 (Environmental Conservation and Restoration)	自然資源の持続可能な利用のためには、現状把握や原因究明を進める必要がある。特に、生物多様性の保全策や生物生息地の自然再生は重要な解決手段である。授業では、特に生態学の基礎、生物多様性の考え方、生態工学的視点による自然再生について学ぶ。特に、基本的には座学が中心だが、キャンパス内や近隣での、干潟、砂浜、森などの管理を実際に行ったり、エクスカーションを行う。	講義10時間 演習６時間
専攻教育科目	共創科目	エリア発展科目	流域環境学 (Watershed Hydrology and Ecology)	水は、私たちの生活に欠かせない貴重な資源であり、その豊かさは、人間を含む多くの生物の活動の原動力となる。私たちの生活の場は流域にあり、流域内での様々な活動は、水資源の量や質に大きく影響を及ぼす。水資源問題は世界の重要課題であり、適切な管理を行うには、流域での水循環や物質循環を理解することが大切である。本講義では、流域単位での水文学的過程や栄養塩を中心とした物質循環を近年の研究結果も交えて学び、渓流や河川の生態的特徴も理解することで、水資源管理を念頭に総合的な流域環境管理を議論できる土台を培う。	

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
専攻教育科目	共創科目	エリア発展科目	環境地理学 (Environmental Geography)	この授業では，様々なスケールから現象を捉え，自然環境および社会環境を学際的視点から総合的に理解する地理学的思考を基にして，学術研究の展開過程を学ぶ。扱う内容は自然地理学から文化地理学に至る広い範囲とし，防災に関する分野も含む。授業は主に受講者の発表や討論などで構成する。まず，受講者が対象とする地理学のテーマを選び，研究事例となる文献を探る。その上で論理構成・研究方法・考察の進め方等を学び，発表を行う。これらを通して地理学的研究方法の習得を目指す。 （オムニバス方式　全８回） （10 菅　浩伸　４回） 自然地理学の視点・研究対象・研究方法と研究事例 （42 藤岡悠一郎　４回） 文化地理学の視点・研究対象・研究方法と研究事例	オムニバス方式
専攻教育科目	共創科目	エリア発展科目	環境都市政策 (Environmental Urban Policy)	人口の大半が都市に居住し、このような人口学的な傾向は先進国で顕著である。このような都市への人口の集中ばかりでなく、産業やその他の機能の集積にともなって、種々の環境問題が引き起こされている。この授業で受講者は、まずこのような環境問題の現状を把握した上で、これらの問題を解消するための様々な環境思想や環境理論を学ぶ。さらに受講者は、これらの思想や理論を基礎として、都市をより持続的にするための環境政策手法も習得する。本授業は、講義と演習ならびに受講者の発表や討論などで構成される。	講義5時間 演習10時間
専攻教育科目	共創科目	エリア発展科目	東アジアの経済地理学 (Economic Geography in East Asia)	東アジアを中心とした地域の発展や地域間格差について、特に産業の形成要因、経済発展の促進・阻害要因、人々の移動のあり方を中心に考察する。経済学や地理学分野での理論の検討に加え、複数の国・地域の比較を通して経済発展の差異とその要因についても検討する。具体的には、経済的側面だけでなく、環境、防災、社会福祉、公共政策、地域問題等、関連する課題について総合的にアプローチする。また、これらの現象を対象として研究する際に、どのような観点や切り口から分析すべきか、どのような手法で分析していくのかという点も考えていく。	
専攻教育科目	共創科目	エリア発展科目	環境ガバナンス (Environmental Governance)	この授業では環境問題についての事例を学び、文理融合的な視角から問題解決のための政策や社会的実践について検討する。授業はセミナー形式で行い、各回の授業では、(1)グローバル・ガバナンス、(2)政策形成、(3)人権、(4)社会正義・社会運動、(5)市民社会、(6)企業の社会的責任（CSR）、(7)教育・文化保全、(8)合意形成を取り上げる。また実務家をゲストスピーカーとして招聘しての特別講義やフィールドワーク等を予定している。各テーマについて、問題の所在、ステイクホルダー（利害関係者）、具体的な解決策などを整理し、現状分析と問題解決の方法についてリサーチ・ペーパーを執筆できることが本授業の目標である。 （オムニバス方式／全８回） （大賀哲　４回） 上記(1)(3)(5)(6)について担当する。 （清野聡子　４回） 上記(2)(4)(7)(8)について担当する。	オムニバス方式
専攻教育科目	ディグリープロジェクト科目		ディグリープロジェクト１	本プロジェクトは卒業研究の第一段階として、指導教員から助言と指導を受けながら、卒業研究に取り上げる課題を選定し、その上で研究計画の策定、研究方法の検討をおこなうことを目的とする。指導教員は、研究課題に取り組むうえで有益だと学生が考える、異なる方法論を専門とする教員から二人、選定する。そして、それぞれから演習や実習、実験の形式で、課題選定へのアドバイスを受け、さらには実際に研究を実施するうえで必要となる手法などについて学ぶ。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専攻教育科目	ディグリープロジェクト科目	ディグリープロジェクト２	本プロジェクトは指導教員から指導と助言を受けながら、卒業研究を計画・実施することを目的とする。学生は自らの卒業研究の課題を解決する上で、最も有益だと考える方法論から主指導教員を一人、そしてこの方法論を補完する別の方法論から副指導教員を一人選定する。そして、この二人の指導教員から演習や実習、実験などの形式でアドバイスと指導を受けながら、卒業研究を完成させるうえで不可欠な方法論的アプローチや実験手法、考え方などを磨き、卒業研究を遂行する。	
専攻教育科目	ディグリープロジェクト科目	ディグリープロジェクト３	本プロジェクトは、ディグリープロジェクト１、２を通じて遂行した卒業研究の成果を取りまとめ、その成果を公開の審査会において英語で発表することを目的とする。成果物としては学術論文だけではなく、制作物(映像作品や小説など)、政策提言、企業やNGOなどでの自らの実践活動に関するレポートなど、研究課題の解決に結びつく多様な様式を認める。成果の審査は、「能動的学習能力」、「課題構想力」、「協働実践力」、「国際コミュニケーション力」の４つの力を獲得し、「共創的課題解決力」を備えるに至ったかを、成果物と審査会での報告、質疑応答などから判定することで実施する。	

交通アクセス

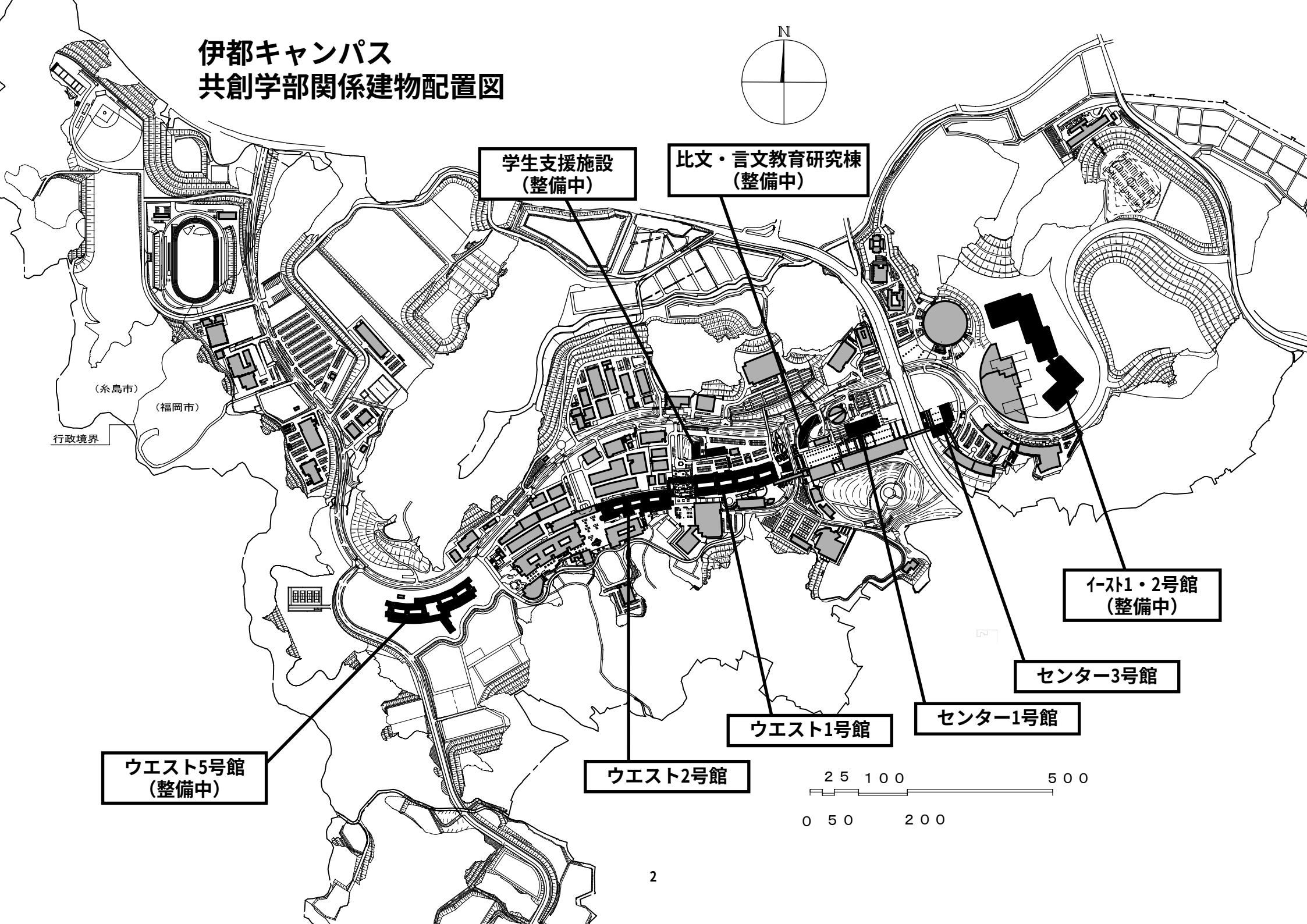
福　岡　空　港

地下鉄空港線 JR筑肥線 (姪浜駅接続) [32分]	地下鉄空港線 [9分]		地下鉄空港線 [5分]	地下鉄空港線 [11分]
	地下鉄中洲川端駅		JR 博多駅	地下鉄天神駅
	[8分] 地下鉄箱崎線 [5分]		JR鹿児島本線 [15分]	乗り換え
JR 九大学研都市駅	地下鉄 箱崎九大前駅	地下鉄 馬出九大病院前駅	JR 大野城駅	西鉄福岡(天神)駅
				[7分]
				西鉄大橋駅
昭和バス [15分]	徒歩 [1分]	徒歩 [2分]	徒歩 [1分]	徒歩[5分]
伊都キャンパス	箱崎キャンパス	病院キャンパス	筑紫キャンパス	大橋キャンパス

※所要時間はおおよその時間。
※伊都キャンパスへは，博多，天神からの直行バスも運行。
※その他のアクセス方法は http://www.kyushu-u.ac.jp/ja/campus/access/ito/ でご確認ください。

歴代総長／
運営組織
役員等／
経営協議会委員
教育研究
評議会評議員
沿革
伊都キャンパス
への移転
学府・研究院
制度について
大学の組織
部局長等
教育研究組織
学生定員及び
在籍学生数
入学状況
学位取得者数等
学部卒業・
大学院修了後
の進路状況
教職員数等
社会との連携
国際交流
収入・支出
研究プログラム
及び教育プログラム
の採択状況
キャンパスマップ
土地・建物
諸施設
案内図

伊都キャンパス
共創学部関係建物配置図



九州大学学則（案）

平成１６年度九大規則第１号
制　　定：平成１６年　４月　１日
最終改正：平成　　年　　月　　日
（平成２９年度九大規則第　　号）

目次

第１章　総則（第１条～第２条の２）
第２章　組織等（第３条～第１７条）
第３章　役員、職員等（第１８条～第２６条）
第４章　役員会、経営協議会、教育研究評議会及び総長選考会議（第２７条～第３０条）
第５章　部局長会議（第３１条～第３７条）
第６章　教授会（第３８条）
第７章　雑則（第３９条）
附則

第１章　総則

（目的等）

第１条　九州大学（以下「本学」という。）は、教育基本法（平成１８年法律第１２０号）の精神に則り、学術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を展開させることを目的とする。【学教法第８３条】

２　本学は、前項の目的を実現するための教育研究を行い、その成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与するものとする。

（自己評価等）

第２条　本学は、その教育研究水準の向上を図り、本学の目的及び社会的使命を達成するため、本学における教育研究活動等の状況について自ら点検及び評価を行い、その結果を公表するものとする。【学教法第１０９条】

２　本学は、前項の自己点検・評価及び第三者評価等多様な評価の結果を本学の目標・計画に反映させ、不断の改革に努めるものとする。

（教育研究活動状況の公表）

第２条の２　本学は、教育研究の成果の普及及び活用の促進に資するため、その教育研究活動の状況を公表するものとする。【学教法第１１３条】

第２章　組織等

（学部）

第３条　本学に、次の表に掲げるとおり、学部及び学科を置く。【学教法第８５条】【大学設置基準第４条】

学　部	学　　科
文学部	人文学科
教育学部	
法学部	
経済学部	経済・経営学科、経済工学科
理学部	物理学科、化学科、地球惑星科学科、数学科、生物学科
医学部	医学科、生命科学科、保健学科

歯学部	歯学科
薬学部	創薬科学科、臨床薬学科
工学部	建築学科、電気情報工学科、物質科学工学科、地球環境工学科、エネルギー科学科、機械航空工学科
芸術工学部	環境設計学科、工業設計学科、画像設計学科、音響設計学科、芸術情報設計学科
農学部	生物資源環境学科
共創学部	共創学科

２　学部又は学科ごとの人材の養成に関する目的その他の教育研究上の目的は、別に規則で定める。　【大学設置基準第２条】

３　学部又は学科ごとの卒業認定に関する方針、教育課程の編成及び実施に関する方針並びに入学者の受入れに関する方針は、別に定める。

４　各学部の教員組織の編制その他必要な事項は、別に規則で定める。

５　学部の修業年限、教育課程、学生の入学、退学、卒業その他の学生の修学上必要な事項は、九州大学学部通則（平成１６年度九大規則第２号）で定める。

（大学院）

第４条　本学に、九州大学大学院（以下「本大学院」という。）を置く。　【学教法第９７条】

２　本大学院は、本学の目的に則り、学術の理論及び応用を教授研究し、その深奥をきわめ、又は高度の専門性が求められる職業を担うための深い学識及び卓越した能力を培い、文化の進展に寄与することを目的とする。　【学教法第９９条】

３　本大学院のうち、学術の理論及び応用を教授研究し、高度の専門性が求められる職業を担うための深い学識及び卓越した能力を培うことを目的とするものは、専門職大学院とする。　【学教法第９９条】

第５条　本大学院に、学校教育法（昭和２２年法律第２６号）第１００条ただし書に規定する研究科以外の教育研究上の基本となる組織として、教育上の目的に応じて組織する学府及び研究上の目的に応じ、かつ、教育上の必要性を考慮して組織する研究院を置く。　【学教法第１００条】

第６条　前条の本大学院に置く学府は、次の表の左欄に掲げるとおりとし、当該学府にそれぞれ同表の右欄に掲げる専攻を置く。　【大学院設置基準第６条】

学　　府	専　　攻
人文科学府	人文基礎専攻、歴史空間論専攻、言語・文学専攻
地球社会統合科学府	地球社会統合科学専攻
人間環境学府	都市共生デザイン専攻、人間共生システム専攻、行動システム専攻、教育システム専攻、空間システム専攻、実践臨床心理学専攻
法学府	法政理論専攻
法務学府	実務法学専攻
経済学府	経済工学専攻、経済システム専攻、産業マネジメント専攻

理学府	物理学専攻、化学専攻、地球惑星科学専攻
数理学府	数理学専攻
システム生命科学府	システム生命科学専攻
医学系学府	医学専攻、医科学専攻、保健学専攻、医療経営・管理学専攻
歯学府	歯学専攻
薬学府	創薬科学専攻、臨床薬学専攻
工学府	物質創造工学専攻、物質プロセス工学専攻、材料物性工学専攻、化学システム工学専攻、建設システム工学専攻、都市環境システム工学専攻、海洋システム工学専攻、地球資源システム工学専攻、共同資源工学専攻、エネルギー量子工学専攻、機械工学専攻、水素エネルギーシステム専攻、航空宇宙工学専攻
芸術工学府	芸術工学専攻、デザインストラテジー専攻
システム情報科学府	情報学専攻、情報知能工学専攻、電気電子工学専攻
総合理工学府	量子プロセス理工学専攻、物質理工学専攻、先端エネルギー理工学専攻、環境エネルギー工学専攻、大気海洋環境システム学専攻
生物資源環境科学府	資源生物科学専攻、環境農学専攻、農業資源経済学専攻、生命機能科学専攻、生物産業創成専攻
統合新領域学府	ユーザー感性学専攻、オートモーティブサイエンス専攻、ライブラリーサイエンス専攻
備考 　各学府は、博士課程とする。ただし、医学系学府医科学専攻は修士課程、生物資源環境科学府生物産業創成専攻は後期３年のみの博士課程、人間環境学府実践臨床心理学専攻、法務学府実務法学専攻、経済学府産業マネジメント専攻及び医学系学府医療経営・管理学専攻は専門職学位課程（第４条第３項の専門職大学院の課程をいう。以下同じ。）とし、そのうち法務学府実務法学専攻は法科大学院とする。	

２　学府又は専攻ごとの人材の養成に関する目的その他の教育研究上の目的は、別に規則で定める。　【大学院設置基準第１条の２】

３　学府又は専攻ごとの修了認定に関する方針、教育課程の編成及び実施に関する方針並びに入学者の受入れに関する方針は、別に定める。

４　博士課程は、専攻分野について、研究者として自立して研究活動を行い、又はその他の高度に専門的な業務に従事するために必要な高度の研究能力及びその基礎となる豊かな学識を養うことを目的とする。　【大学院設置基準第４条第１項】

５　修士課程は、広い視野に立って精深な学識を授け、専攻分野における研究能力又はこれに加えて高度の専門性が求められる職業を担うための卓越した能力を培うことを目的とする。　【大学院設置基準第３条第１項】

６　専門職学位課程は、高度の専門性が求められる職業を担うための深い学識及び卓越した能力を培うことを目的とし、そのうち法科大学院にあっては、専ら法曹養成のための教育を行うことをその目的とする。【専門職大学院設置基準第２条第１項、第１８条】

７　各学府の教員組織の編制その他必要な事項は、別に規則で定める。

８　学府の修業年限、教育方法、学生の入学、退学、修了その他の学生の修学上必要な事項は、九州大学大学院通則（平成１６年度九大規則第３号）で定める。

第７条　第５条の本大学院に置く研究院は、次に掲げるとおりとする。

(1)　人文科学研究院
(2)　比較社会文化研究院
(3)　人間環境学研究院
(4)　法学研究院
(5)　経済学研究院
(6)　言語文化研究院
(7)　理学研究院
(8)　数理学研究院
(9)　医学研究院
(10)　歯学研究院
(11)　薬学研究院
(12)　工学研究院
(13)　芸術工学研究院
(14)　システム情報科学研究院
(15)　総合理工学研究院
(16)　農学研究院

（基幹教育院）

第７条の２　本学に、本学の学生として共通に期待される学びの基幹を育成するための全学組織として、基幹教育院を置く。

２　基幹教育院の内部組織その他必要な事項は、別に定める。

（高等研究院）

第７条の３　本学に、高度な研究活動を推進するための全学的組織として、高等研究院を置く。

２　高等研究院は、本学が世界的研究教育拠点として、学界をリードする卓越した研究成果を上げるために、分野を問わず、本学の誇る優れた研究者のうち、その専門分野において極めて高い研究業績を有する者、ポスト・プロフェッサー及び本学の次世代を担う若手研究者が実質的かつ高度な研究活動を展開する場として、全学的な協力体制のもとに設置するとともに、これらの活動を通じて人材を育成し、その研究成果を広く社会に還元することを目的とする。

３　高等研究院の内部組織その他必要な事項は、別に定める。

（附置研究所）

第８条　本学に、研究所を附置する。

２　前項の研究所（以下「附置研究所」という。）は、次の表の左欄に掲げるとおりとし、当該附置研究所の目的は、それぞれ同表の右欄に定めるとおりとする。【学教法第９６条】

附置研究所	目　　的
生体防御医学研究所	生体防御医学に関する学理及びその応用の研究
応用力学研究所	力学に関する学理及びその応用の研究
先導物質化学研究所	物質化学に関する先導的な総合研究
マス・フォア・イン	数学の産業応用及びその学理研究

ダストリ研究所	

３　各附置研究所の内部組織その他必要な事項は、別に規則で定める。

（国際研究所）

第８条の２　本学に、カーボンニュートラル・エネルギー国際研究所を置く。

２　カーボンニュートラル・エネルギー国際研究所は、カーボンニュートラル・エネルギー研究に関する基礎科学を創出するとともに、環境調和型で持続可能な社会の実現に向けた課題の解決に貢献することを目的とする。

３　カーボンニュートラル・エネルギー国際研究所の内部組織その他必要な事項は、別に規則で定める。

（病院）

第９条　医学部及び歯学部に、これらに附属する共用の教育研究施設として、医学部・歯学部附属病院を置き、九州大学病院（以下「病院」という。）と称する。　【大学設置基準第３９条】

２　病院の内部組織その他必要な事項は、別に規則で定める。

（附属図書館）

第１０条　本学に、附属図書館を置く。　【大学設置基準第３６条】

２　附属図書館の内部組織その他必要な事項は、別に規則で定める。

第１１条　削除

（情報基盤研究開発センター）

第１２条　本学に、研究、教育等に係る情報化を推進するための実践的調査研究、基盤となる設備等の整備及び提供その他専門的業務を行う全国共同利用施設として、情報基盤研究開発センターを置く。

２　情報基盤研究開発センターは、前項の業務のほか、本学における情報基盤に係るシステム開発を行う。

３　情報基盤研究開発センターの内部組織その他必要な事項は、別に規則で定める。

（教育関係共同利用拠点）

第１２条の２　第７条の２に規定する基幹教育院は、学校教育法施行規則（昭和２２年文部省令第１１号。以下「学教法施行規則」という。）第１４３条の２第２項の規定により、文部科学大臣の認定を受けた教育関係共同利用拠点として他大学の利用に供するものとする。

（共同利用・共同研究拠点）

第１２条の３　次の表に掲げる附置研究所等は、学教法施行規則第１４３条の３第２項の規定により、文部科学大臣の認定を受けた共同利用・共同研究拠点としてそれぞれ学術研究の発展に資するものとする。

附置研究所等	共同利用・共同研究拠点
生体防御医学研究所	多階層生体防御システム研究拠点
応用力学研究所	応用力学共同研究拠点
先導物質化学研究所	物質・デバイス領域共同研究拠点
マス・フォア・インダストリ研究所	産業数学の先進的・基礎的共同研究拠点
情報基盤研究開発センター	学際大規模情報基盤共同利用・共同研究拠点

（エネルギー研究教育機構）

第１２条の４　本学に、エネルギー分野における高度な研究及び教育活動を推進するための全学的組織として、エネルギー研究教育機構を置く。

２　エネルギー研究教育機構の内部組織その他必要な事項は、別に定める。

（学内共同教育研究センター）

第１３条　本学に、本学の教員その他の者が共同して教育若しくは研究を行う組織又は教育若しくは研究のため共用する組織として、次表左欄に掲げる学内共同教育研究センターを置き、そのうち設置期間を定める学内共同教育研究センターの当該設置期間の満了する日は、それぞれ同表右欄のとおりとする。【学教法第９６条】

学内共同教育研究センター	設置期間の満了する日
生物環境利用推進センター	
熱帯農学研究センター	
アイソトープ統合安全管理センター	
中央分析センター	
留学生センター	
総合研究博物館	
システムＬＳＩ研究センター	平成３３年３月３１日
国際宇宙天気科学・教育センター	平成３４年３月３１日
韓国研究センター	
医療系統合教育研究センター	
超伝導システム科学研究センター	平成３５年３月３１日
未来デザイン学センター	
グローバルイノベーションセンター	
超顕微解析研究センター	
環境安全センター	
西部地区自然災害資料センター	
大学文書館	
ロバート・ファン／アントレプレナーシップ・センター	
アドミッションセンター	
水素エネルギー国際研究センター	

未来化学創造センター	平成３２年３月３１日
鉄鋼リサーチセンター	平成３２年３月３１日
低温センター	
加速器・ビーム応用科学センター	
稲盛フロンティア研究センター	平成３０年３月３１日
炭素資源国際教育研究センター	平成３０年３月３１日
シンクロトロン光利用研究センター	
先端融合医療創成センター	平成３４年３月３１日
極限プラズマ研究連携センター	平成３６年３月３１日
有体物管理センター	
分子システム科学センター	平成３０年３月３１日
日本エジプト科学技術連携センター	平成３１年３月３１日
プラズマナノ界面工学センター	平成３１年３月３１日
先端医療イノベーションセンター	平成３２年３月３１日
ＥＵセンター	平成３３年５月３１日
環境発達医学研究センター	平成３３年３月３１日
ユヌス＆椎木ソーシャル・ビジネス研究センター	平成３３年９月３０日
バイオメカニクス研究センター	平成３３年３月３１日
次世代燃料電池産学連携研究センター	平成３４年３月３１日
科学技術イノベーション政策教育研究センター	平成３８年３月３１日
先端素粒子物理研究センター	平成３０年３月３１日
グリーンアジア国際リーダー教育センター	
分子システムデバイス国際リーダー教育センター	平成３１年３月３１日
オルガネラホメオスタシス研究センター	平成３０年３月３１日
水素材料先端科学研究センター	平成３５年３月３１日

アジア埋蔵文化財研究センター	平成３５年３月３１日
エネルギー基盤技術国際教育研究センター	平成３１年３月３１日
キャンパスライフ・健康支援センター	
味覚・嗅覚センサ研究開発センター	平成３０年１０月３１日
持続可能な社会のための決断科学センター	
アジア太平洋未来研究センター	平成３６年３月３１日
循環器病未来医療研究センター	平成３２年３月３１日
サイバーセキュリティセンター	

２　各学内共同教育研究センターの内部組織その他必要な事項は、別に規則で定める。

（先導的学術研究センター）

第１３条の２　本学に、先導的に学術研究を行う拠点として、先導的学術研究センターを置く。

２　先導的学術研究センターは、次の表の左欄に掲げるとおりとし、各先導的学術研究センターの設置期間の満了する日は、それぞれ同表右欄のとおりとする。

先導的学術研究センター	設置期間の満了する日
免疫機構研究センター	平成３２年３月３１日
エピゲノムネットワーク研究センター	平成３０年３月３１日
アジア保全生態学センター	平成３１年３月３１日
ヒトプロテオーム研究センター	平成３０年３月３１日
最先端有機光エレクトロニクス研究センター	平成３１年３月３１日
次世代蓄電デバイス研究センター	平成３３年３月３１日
次世代経皮吸収研究センター	平成３３年３月３１日
大気環境統合研究センター	平成３０年３月３１日
量子ナノスピン物性研究センター	平成３０年３月３１日
小分子エネルギーセンター	平成３１年３月３１日
第三段階教育研究センター	平成３０年３月３１日
モデル生物研究センター	平成３１年３月３１日

巨大ひずみマテリアル国際研究センター	平成３１年３月３１日
動的構造生命科学研究センター	平成３１年３月３１日
都市研究センター	平成３１年３月３１日
スマートモビリティ研究開発センター	平成３２年３月３１日
惑星微量有機化合物研究センター	平成３２年３月３１日
磁気ナノバイオセンシング研究開発センター	平成３１年３月３１日
材料強化機構基盤研究センター	平成３０年３月３１日
多元計算解剖学国際研究センター	平成３０年３月３１日
浅海底フロンティア研究センター	平成３３年３月３１日
確率解析研究センター	平成３３年３月３１日
多重ゼータ研究センター	平成３３年３月３１日
がん幹細胞研究センター	平成３３年３月３１日

３　各先導的学術研究センターの内部組織その他必要な事項は、別に規則で定める。

（学部等の附属施設）

第１４条　次の表の左欄に掲げる学部、学府、研究院、基幹教育院及び附置研究所等に、それぞれ同表の右欄に掲げる附属の教育施設又は研究施設を置く。　【大学設置基準第３９条】

学　部　等	附　　属　　施　　設
理学部	天草臨海実験所
農学部	農場、演習林
人間環境学府	総合臨床心理センター
工学府	ものづくり工学教育研究センター
システム情報科学府	電気エネルギーシステム教育研究センター、高度ＩＣＴ人材教育開発センター
薬学府	薬用植物園
生物資源環境科学府	水産実験所
理学研究院	地震火山観測研究センター
医学研究院	胸部疾患研究施設、心臓血管研究施設、脳神経病研究施設、ヒト疾患

	モデル研究センター、総合コホートセンター
歯学研究院	オーラルヘルス・ブレインヘルス・トータルヘルス研究センター
薬学研究院	産学官連携創薬育薬センター
工学研究院	循環型社会システム工学研究センター、アジア防災研究センター、国際教育支援センター
芸術工学研究院	応用知覚科学研究センター、応用生理人類学研究センター、ソーシャルアートラボ、環境設計グローバル・ハブ
農学研究院	生物的防除研究施設、遺伝子資源開発研究センター、国際農業教育・研究推進センター、イノベーティブバイオアーキテクチャーセンター
基幹教育院	学生支援センター
生体防御医学研究所	トランスオミクス医学研究センター、生体多階層システム研究センター、感染ネットワーク研究センター
応用力学研究所	大気海洋環境研究センター、高温プラズマ理工学研究センター、自然エネルギー統合利用センター
カーボンニュートラル・エネルギー国際研究所	次世代冷媒物性評価研究センター

２　各附属施設の内部組織その他必要な事項は、当該学部等の長が、別に定める。

（国際交流推進機構）

第１５条　本学に、次に掲げる特定の重要事項に関し、企画、実施又は推進する組織として、国際交流推進機構を置く。

(1)　学術の国際交流の推進

(2)　学生の海外留学及び外国人留学生受入れ等の推進

(3)　アジアの総合研究等の推進

２　国際交流推進機構の構成その他必要な事項は、別に規則で定める。

（情報統括本部）

第１５条の２　本学に、全学的な情報支援を行うための組織として、情報統括本部を置く。

２　情報統括本部の目的は、次に掲げるとおりとする。

(1)　全学的な情報基盤の整備

(2) 情報技術を用いた教育研究及び大学運営に関わる業務の総合的な支援

３　情報統括本部の構成その他必要な事項は、別に規則で定める。

（統合移転推進本部）

第１５条の３　本学に、統合移転事業及び伊都キャンパスの整備計画を推進するための組織として、統合移転推進本部を置く。

２　統合移転推進本部の構成その他必要な事項は、別に規則で定める。

（基金本部）

第１５条の４　本学に、九州大学基金による支援助成事業及び基金強化事業（以下「基金事業」という。）を推進するための組織として、基金本部を置く。

２　基金本部の構成その他必要な事項は、別に規則で定める。
（広報本部）
第１５条の５　本学に、広報戦略の策定及び広報活動の推進を図るための組織として、広報本部を置く。
２　広報本部の構成その他必要な事項は、別に規則で定める。
（グローバル化推進本部）
第１５条の６　本学に、全学的なグローバル化を推進するための組織として、グローバル化推進本部を置く。
２　グローバル化推進本部の構成その他必要な事項は、別に規則で定める。
（学術研究・産学官連携本部）
第１５条の７　本学に、全学の学術研究及び産学官連携を推進するための組織として、学術研究・産学官連携本部を置く。
２　学術研究・産学官連携本部の構成その他必要な事項は、別に定める。
（推進室等）
第１６条　本学に、特定の重要事項を企画、推進又は支援する組織として、推進室等を置く。
２　前項の推進室等は、次の表の左欄に掲げるとおりとし、当該推進室等の目的は、それぞれ同表の右欄に定めるとおりとする。

推進室等	目　　的
教育改革企画支援室	教育改革に関する事項を企画及び支援すること。
社会連携推進室	社会連携（産学官連携を除く。）の推進を支援すること。
国際交流推進室	国際交流の推進を支援すること。
ＳＨＡＲＥオフィス	全学的なグローバル化の推進を支援すること。
インスティテューショナル・リサーチ室	大学運営の基礎となる情報の調査・収集・分析及び提供により、大学の意思決定を支援すること。
キャンパス計画室	キャンパス計画の推進を支援すること。
環境安全衛生推進室	安全衛生の推進を支援すること。
男女共同参画推進室	男女共同参画の推進を支援すること。
情報環境整備推進室	情報環境整備の推進を支援すること。
統合移転事業推進室	統合移転事業及び伊都キャンパスの整備計画に係る企画・立案を行うこと。
国際法務室	外国の諸機関等との交渉及び契約を支援すること。
基金事業推進室	基金事業の実施に係る企画・立案を行うこと。
同窓生連携推進室	同窓生との連携に関すること。
広報戦略推進室	広報戦略に基づく広報活動の推進を支援すること。

百年史編集室	九州大学百年史の編集に関すること。
エネルギー研究教育推進室	エネルギー分野の研究教育の推進を支援すること。

３　前項の各推進室等の内部組織その他必要な事項は、別に定める。

（事務組織）

第１７条　本学に、庶務、会計、施設及び学生の厚生補導等に関する事務を処理させるため事務局を置く。

２　本学の学部、学府等に、その事務を処理させるため事務部を置く。ただし、必要がある場合は、数個の学部等の事務を併せて処理する事務部を置く。

３　前２項に規定する事務組織のほか、本学に、内部監査を実施させるとともに、監事監査の事務を補助させるため監査室を置く。

４　前３項の事務組織の内部組織その他必要な事項は、別に規則で定める。

【大学設置基準第４１条、第４２条】

第３章　役員、職員等

（役員）

第１８条　国立大学法人法（平成１５年法律第１１２号。以下「法人法」という。）第１０条の規定に基づき、本学に、役員として、学長（「総長」と称する。）、理事８人以内及び監事２人を置く。【法人法第１０条】

第１９条　総長は、校務をつかさどり、所属職員を統督するとともに、本学を代表し、その業務を総理する。【学教法第９２条】【法人法第１１条】

２　総長は、この規則その他の総長が定める規則等において理事又は職員に委任する業務について報告を求め、必要な措置を命じ、又はその措置を自ら行うことができる。

第２０条　理事は、総長の定めるところにより、総長を補佐して本学の業務を掌理し、総長に事故があるときはその職務を代理し、総長が欠員のときはその職務を行う。【法人法第１１条】

第２１条　監事は、本学の業務を監査する。この場合において、監事は、監査報告を作成しなければならない。

２　監事は、いつでも、役員（監事を除く。）及び職員に対して事務及び事業の報告を求め、又は本学の業務及び財産の状況を調査することができる。【法人法第１１条】

（職員）

第２２条　本学に、教員、事務職員、技術職員、高度専門職員その他必要な職員を置く。

２　前項の教員は、教授、准教授、講師、助教、准助教及び助手（「教務助手」と称する。）とする。

３　教授、准教授、講師、助教及び教務助手の職務は学校教育法（昭和２２年法律第２６号）第９２条の定めるところによるものとし、准助教の職務は教授及び准教授の職務を助けることとする。【学教法第９２条】

（副学長）

第２３条　本学に、総長の定めるところにより、総長を助け、命を受けて校務をつかさどるため、副学長若干人を置く。

２　副学長は、理事のうちから総長が指名する者が兼ねる。

３　前項の規定にかかわらず、総長が特に必要と認めた場合は、職員のうちから総長が指名する者が副学長を兼ねることができるものとする。【学教法第９２条】

（副理事）

第２４条　本学に、総長の定めるところにより、理事の職務を助けるため、副理事若干人を置く。

２　副理事は、教授その他の職員のうちから総長が指名する。

（部局長等）

第２５条　学部、学府、研究院、基幹教育院、附置研究所、カーボンニュートラル・エネルギー国際研究所、病院、附属図書館及び情報基盤研究開発センター（以下「部局」という。）に長（以下「部局長」という。）を置く。
２　部局長は、当該部局の業務を掌理する。
３　各部局に、副部局長を置くことができる。
４　副部局長は、部局長の定めるところにより、部局長を補佐して部局の業務を処理し、部局長に事故があるときはその職務を代理し、部局長が欠員のときはその職務を行う。
５　部局長及び副部局長の任命手続その他必要な事項は、別に規則で定める。
６　学科及び専攻に、それぞれ学科長又は専攻長を置くことができる。
７　学科長及び専攻長の任命手続その他必要な事項は、別に定めるものとする。
（センター長等）
第２６条　学内共同教育研究センターに長（以下「センター長」という。）を置く。
２　センター長は、当該学内共同教育研究センターの業務を掌理する。
３　各学内共同教育研究センターに、副センター長を置くことができる。
４　副センター長は、センター長の定めるところにより、センター長を補佐して当該学内共同教育研究センターの業務を処理し、センター長に事故があるときはその職務を代理し、センター長が欠員のときはその職務を行う。
５　センター長及び副センター長の任命手続その他必要な事項は、別に規則で定める。
第２６条の２　先導的学術研究センターに長（以下「センター長」という。）を置く。
２　センター長は、当該先導的学術研究センターの業務を掌理する。
３　各先導的学術研究センターに、副センター長を置くことができる。
４　副センター長は、センター長の定めるところにより、センター長を補佐して当該先導的学術研究センターの業務を処理し、センター長に事故があるときはその職務を代理する。
５　センター長及び副センター長の任命手続その他必要な事項は、別に規則で定める。
第４章　役員会、経営協議会、教育研究評議会及び総長選考会議
（役員会）
第２７条　本学に、法人法第１１条第２項各号に規定する事項を審議するため、総長及び理事で構成する役員会を置く。【法人法第１１条】
２　役員会の議事の手続その他必要な事項は、別に規則で定める。
（経営協議会）
第２８条　本学に、法人法第２０条の規定に基づき、本学の経営に関する重要事項を審議する機関として、経営協議会を置く。【法人法第２０条】
２　経営協議会の議事の手続その他必要な事項は、別に規則で定める。
（教育研究評議会）
第２９条　本学に、法人法第２１条の規定に基づき、本学の教育研究に関する重要事項を審議する機関として、教育研究評議会を置く。【法人法第２１条】
２　教育研究評議会の議事の手続その他必要な事項は、別に規則で定める。
（総長選考会議）
第３０条　本学に、法人法第１２条第２項から第６項までの規定に基づき、総長選考会議（以下「選考会議」という。）を置く。【法人法第１２条】
２　選考会議の組織に関し必要な事項は、別に規則で定める。
第５章　部局長会議
（部局長会議）
第３１条　本学に、今後の総合計画の企画立案等に関する基本的事項について審議するため、将来計画委員会を置く。
第３２条　本学に、予算管理に関する重要事項を審議するため、財務委員会を置く。
第３３条　本学に、大学評価に関する重要事項を審議するため、大学評価委員会を置く。
第３４条　本学に、ハラスメントの防止に関する事項を審議するため、ハラスメント委員会を置く。

第３５条　本学に、男女共同参画の推進に関する事項を審議するために、男女共同参画推進委員会を置く。
第３６条　本学に、大学運営上の課題に係る総合的な人事制度、人員管理及び人件費計画等に関する重要事項を審議するために、人事委員会を置く。
第３６条の２　本学に、基金事業に関する事項を審議するために、基金委員会を置く。
第３６条の３　本学に、障害者差別の解消の推進に関する事項を審議するために、障害者支援推進委員会を置く。
第３７条　第３１条から前条までに規定する委員会（「部局長会議」と総称する。）の組織、議事の手続その他必要な事項は、別に規則で定める。

第６章　教授会

第３８条　部局（病院及び附属図書館を除く。）に、教授会を置く。　【学教法第９３条】
２　教授会の組織、審議事項、議事の手続その他必要な事項は、九州大学教授会通則（平成１６年度九大規則第８号）で定める。

第７章　雑則

（雑則）
第３９条　この規則に定めるもののほか、本学の目的を達成するために必要な事項は、別に規則で定める。

附　則

１　この規則は、平成１６年４月１日から施行する。
２　法人法附則第１６条第１項の規定に基づき本学に置かれる九州大学医療技術短期大学部（以下「短期大学部」という。）は、平成１６年４月１日に短期大学部に在学する学生が短期大学部に在学しなくなる日において、廃止する。
３　前項の短期大学部に在学する学生の教育課程の履修その他当該学生の教育に必要な事項については、九州大学医療技術短期大学部学則（昭和４６年４月８日施行）等の規定によるものとする。
４　法人法附則第１７条の規定に基づき、平成１５年９月３０日に当該大学に在学する者が在学しなくなる日までの間存続するものとされた九州芸術工科大学に在学する者（以下「在学者」という。）の卒業又は大学院の課程修了のため必要となる教育は、九州大学芸術工学部（以下「芸術工学部」という。）又は九州大学大学院芸術工学府（以下「芸術工学府」という。）において行うものとする。
５　前項の在学者の教育課程の履修その他当該学生の教育に必要な事項については、九州芸術工科大学学則（平成５年４月１日施行）等の規定によるものとする。ただし、これによることができない事項については、総長又は芸術工学部若しくは芸術工学府の教授会が定めるところによる。
６　第１２条の３に規定する附置研究所等は、文部科学大臣の認定期間である平成３４年３月３１日までの間存続するものとする。
７　第１３条第１項に規定する宙空環境研究センターは、平成２４年３月３１日まで存続するものとする。
８　第１４条第１項に規定する工学研究院附属の環境システム科学研究センターは平成２０年３月３１日まで、生体防御医学研究所附属の感染防御研究センターは平成２３年３月３１日まで、応用力学研究所附属の力学シミュレーション研究センター及び炉心理工学研究センターは平成１９年３月３１日まで存続するものとする。
９　法人法等関係法令又はこの学則等に基づき定める諸規則等のほか、承継的、定型的又は簡易な事項で総長が必要と認めるものについては、当分の間、総長が定めるところにより、廃止前の国立学校設置法（昭和２４年法律第１５０号）に基づき設置された九州大学の諸規則等の規定を適用又は準用するものとする。

附　則（平成１６年度九大規則第１９３号）

１　この規則は、平成１７年４月１日から施行する。
２　人間環境学府発達・社会システム専攻は、改正後の第６条第１項の規定にかかわらず、平成

１７年３月３１日に当該専攻に在学する者が在学しなくなる日までの間､存続するものとする。

附　則（平成１７年度九大規則第４号）

1　この規則は、平成１７年７月１５日から施行し、平成１７年７月１日から適用する。

2　改正後の第１３条第１項に規定するデジタルメディシン・イニシアティブ及びアジア総合政策センターは、平成２２年６月３０日まで存続するものとする。

附　則（平成１７年度九大規則第２３号）

この規則は、平成１７年１１月７日から施行する。

附　則（平成１７年度九大規則第３０号）

1　この規則は、平成１８年４月１日から施行する。

2　薬学部総合薬学科は、改正後の第３条第１項の規定にかかわらず、平成１８年３月３１日に当該学科に在学する者が在学しなくなる日までの間、存続するものとする。

附　則（平成１８年度九大規則第２号）

この規則は、平成１８年６月１日から施行する。

附　則（平成１８年度九大規則第２５号）

この規則は、平成１８年１０月１日から施行する。

附　則（平成１８年度九大規則第３７号）

1　この規則は、平成１９年４月１日から施行する。

2　改正後の第１４条第１項に規定する応用力学研究所附属の東アジア海洋大気環境研究センター及び高温プラズマ力学研究センターは、平成２９年３月３１日まで存続するものとする。

3　改正後の第２２条第２項に規定する准助教の職種は、平成１９年４月１日に当該職に在職する者が在職しなくなる日において、廃止する。

附　則（平成１９年度九大規則第２７号）

この規則は、平成１９年１１月１日から施行する。

附　則（平成１９年度九大規則第３１号）

この規則は、平成１９年１２月２６日から施行する。

附　則（平成１９年度九大規則第５８号）

1　この規則は、平成２０年４月１日から施行する。

2　理学府基礎粒子系科学専攻、分子科学専攻、凝縮系科学専攻及び生物科学専攻並びに医学系学府機能制御医学専攻、生殖発達医学専攻、病態医学専攻、臓器機能医学専攻、分子常態医学専攻及び環境社会医学専攻は、改正後の九州大学学則（以下「新規則」という。）第６条第１項の規定にかかわらず、平成２０年３月３１日に当該専攻に在学する者が在学しなくなる日までの間、存続するものとする。

3　新規則第１４条第１項に規定する工学研究院附属の循環型社会システム工学研究センターは、平成３０年３月３１日まで存続するものとする。

附　則（平成２０年度九大規則第１号）

この規則は、平成２０年４月１７日から施行し、平成２０年４月１日から適用する。

附　則（平成２０年度九大規則第９号）

この規則は、平成２０年１０月１日から施行する。

附　則（平成２０年度九大規則第３７号）

1　この規則は、平成２１年４月１日から施行する。

2　システム情報科学府情報理学専攻、知能システム学専攻、情報工学専攻、電気電子システム工学専攻及び電子デバイス工学専攻は、この規則による改正後の九州大学学則（以下「新学則」という。）第６条第１項の規定にかかわらず、平成２１年３月３１日に当該専攻に在学する者が在学しなくなる日までの間、存続するものとする。

3　新学則第１４条第１項に規定する生体防御医学研究所附属の感染ネットワーク研究センターは、平成３１年３月３１日まで存続するものとする。

附　則（平成２１年度九大規則第１号）

この規則は、平成２１年５月１日から施行する。

附　則（平成２１年度九大規則第５号）

この規則は、平成２１年６月１日から施行する。

附　則（平成２１年度九大規則第１２号）

この規則は、平成２１年８月１日から施行し、第１３条第１項にシンクロトロン光利用研究センターを加える改正規定は、平成２１年７月１日から適用する。

附　則（平成２１年度九大規則第２０号）

１　この規則は、平成２１年１０月１日から施行する。

２　この規則による改正後の九州大学学則第３６条の６の規定は、平成２１年９月１日から適用する。

附　則（平成２１年度九大規則第３３号）

この規則は、平成２１年１１月１日から施行する。

附　則（平成２１年度九大規則第４９号）

１　この規則は、平成２２年４月１日から施行する。

２　法学府基礎法学専攻、公法・社会法学専攻、民刑事法学専攻、国際関係法学専攻及び政治学専攻並びに薬学府医療薬科学専攻（修士課程）及び創薬科学専攻（修士課程）並びに工学府機械科学専攻及び知能機械システム専攻並びに生物資源環境科学府生物資源開発管理学専攻、植物資源科学専攻、生物機能科学専攻、動物資源科学専攻、農業資源経済学専攻、生産環境科学専攻、森林資源科学専攻及び遺伝子資源工学専攻は、この規則による改正後の九州大学学則（以下「新規則」という。）第６条第１項の規定にかかわらず、平成２２年３月３１日に当該専攻に在学する者が在学しなくなる日までの間、存続するものとする。

３　新規則第１４条第１項に規定する生体防御医学研究所附属の生体多階層システム研究センターは、平成３２年３月３１日まで存続するものとする。

４　九州大学学則（平成１６年度九大規則第１号）附則第６項の規定にかかわらず、生体防御医学研究所附属の感染防御研究センターは、廃止する。

附　則（平成２２年度九大規則第１号）

この規則は、平成２２年４月２８日から施行し、平成２２年４月１日から適用する。

附　則（平成２２年度九大規則第６号）

この規則は、平成２２年７月１日から施行する。

附　則（平成２２年度九大規則第１２号）

１　この規則は、平成２２年８月１日から施行する。ただし、第１３条第１項に応用知覚研究センターを加える改正規定は同年９月１日から施行する。

２　この規則による改正後の九州大学学則第１３条第１項に規定する応用知覚研究センターは、平成２４年３月３１日まで存続するものとする。

附　則（平成２２年度九大規則第３０号）

この規則は、平成２２年１０月１日から施行する。

附　則（平成２２年度九大規則第４５号）

この規則は、平成２２年１２月１日から施行する。

附　則（平成２２年度九大規則第４７号）

この規則は、平成２２年１２月１日から施行する。

附　則（平成２２年度九大規則第７４号）

この規則は、平成２３年１月１日から施行する。

附　則（平成２２年度九大規則第７８号）

この規則は、平成２３年２月１日から施行する。

附　則（平成２２年度九大規則第８１号）

この規則は、平成２３年４月１日から施行する。

附　則（平成２３年度九大規則第１号）

この規則は、平成２３年５月１日から施行する。

附　則（平成２３年度九大規則第４号）

この規則は、平成２３年６月１日から施行する。

附　則（平成２３年度九大規則第８号）

１　この規則は、平成２３年７月１日から施行する。
２　この規則による改正後の九州大学学則第１４条第１項に規定するシステム情報科学府附属の高度ＩＣＴ人材教育開発センターは、平成３２年３月３１日まで存続するものとする。

附　則（平成２３年度九大規則第１０号）

この規則は、平成２３年８月１日から施行する。

附　則（平成２３年度九大規則第１２号）

この規則は、平成２３年１０月１日から施行する。

附　則（平成２３年度九大規則第６８号）

この規則は、平成２３年１１月１日から施行する。

附　則（平成２３年度九大規則第７２号）

この規則は、平成２４年１月１日から施行する。

附　則（平成２３年度九大規則第８０号）

１　この規則は、平成２４年４月１日から施行する。
２　この規則の施行前に設置された薬学府医療薬科学専攻（博士後期課程）及び創薬科学専攻（博士後期課程）は、この規則による改正後の九州大学学則第６条第１項の規定にかかわらず、平成２４年３月３１日に当該専攻に在学する者が在学しなくなる日までの間、存続するものとする。

附　則（平成２４年度九大規則第１１号）

この規則は、平成２４年１０月１日から施行する。

附　則（平成２４年度九大規則第２９号）

この規則は、平成２４年１２月１日から施行する。ただし、第２５条に係る改正規定は、平成２５年４月１日から施行する。

附　則（平成２４年度九大規則第３６号）

この規則は、平成２５年１月１日から施行する。

附　則（平成２４年度九大規則第３７号）

この規則は、平成２５年２月１日から施行する。

附　則（平成２４年度九大規則第４２号）

この規則は、平成２５年３月１日から施行する。

附　則（平成２４年度九大規則第４５号）

１　この規則は、平成２５年４月１日から施行する。
２　この規則による改正後の九州大学学則第１４条第１項に規定する自然エネルギー統合利用センターは、平成３５年３月３１日まで存続するものとする。

附　則（平成２５年度九大規則第２号）

この規則は、平成２５年５月１日から施行する。

附　則（平成２５年度九大規則第８号）

この規則は、平成２５年６月３日から施行し、平成２５年４月１日から適用する。

附　則（平成２５年度九大規則第１０号）

この規則は、平成２５年７月１日から施行する。

附　則（平成２５年度九大規則第１６号）

この規則は、平成２５年８月１日から施行する。ただし、知的財産本部の名称及び目的に係る改正規定は、平成２５年９月１日から施行する。

附　則（平成２５年度九大規則第４０号）

この規則は、平成２５年１１月１日から施行する。

附　則（平成２５年度九大規則第４７号）

この規則は、平成２５年１２月１日から施行する。ただし、第１４条第１項の表に薬学研究院の項を加える改正規定は、平成２６年１月１日から施行する。

附　則（平成２５年度九大規則第５１号）

この規則は、平成２６年１月１日から施行する。

附　則（平成２５年度九大規則第７６号）

この規則は、平成２６年１月２７日から施行する。

附　則（平成２５年度九大規則第７８号）

この規則は、平成２６年３月１日から施行する。

附　則（平成２５年度九大規則第８３号）

１　この規則は、平成２６年４月１日から施行する。

２　比較社会文化学府は、この規則による改正後の九州大学学則第６条第１項の規定にかかわらず、平成２６年３月３１日に当該学府に在学する者が在学しなくなる日までの間、存続するものとする。

附　則（平成２６年度九大規則第２号）

この規則は、平成２６年４月３０日から施行し、この規則による改正後の九州大学学則の規定は、平成２６年４月１日から適用する。

附　則（平成２６年度九大規則第６号）

この規則は、平成２６年８月１日から施行する。

附　則（平成２６年度九大規則第１１号）

この規則は、平成２６年１０月１日から施行する。ただし、第１３条第１項の表に係る改正規定は、平成２７年４月１日から施行する。

附　則（平成２６年度九大規則第６０号）

この規則は、平成２６年１２月１日から施行する。

附　則（平成２６年度九大規則第７０号）

この規則は、平成２７年１月２２日から施行する。

附　則（平成２６年度九大規則第７６号）

１　この規則は、平成２７年４月１日から施行する。

２　九州大学高等教育機構規則（平成１８年度九大規則第３号）は、廃止する。

附　則（平成２６年度九大規則第７７号）

この規則は、平成２７年４月１日から施行する。

附　則（平成２６年度九大規則第１２０号）

この規則は、平成２７年４月１日から施行する。

附　則（平成２７年度九大規則第２号）

この規則は、平成２７年６月１日から施行する。

附　則（平成２７年度九大規則第９号）

この規則は、平成２７年１０月１日から施行する。

附　則（平成２７年度九大規則第２１号）

この規則は、平成２７年１２月１日から施行する。

附　則（平成２７年度九大規則第２３号）

この規則は、平成２８年１月１日から施行する。

附　則（平成２７年度九大規則第２６号）

この規則は、平成２８年２月１日から施行する。

附　則（平成２７年度九大規則第３１号）

この規則は、平成２８年３月１日から施行する。

附　則（平成２７年度九大規則第３４号）

１　この規則は、平成２８年４月１日から施行する。

２　この規則による改正後の九州大学学則第１４条第１項に規定する次世代冷媒物性評価研究センターは、平成３３年３月３１日まで存続するものとする。

附　則（平成２８年度九大規則第３号）

この規則は、平成２８年６月１日から施行する。

附　則（平成２８年度九大規則第８号）

この規則は、平成２８年７月１日から施行する。

附　則（平成２８年度九大規則第１４号）

この規則は、平成２８年７月２９日から施行する。

附　則（平成２８年度九大規則第２０号）

この規則は、平成２８年１０月１日から施行する。

附　則（平成２８年度九大規則第６５号）

この規則は、平成２８年１２月１日から施行する。

附　則（平成２８年度九大規則第６９号）

この規則は、平成２９年１月１日から施行する。

附　則（平成２８年度九大規則第７６号）

この規則は、平成２９年２月１日から施行する。

附　則（平成２８年度九大規則第８１号）

この規則は、平成２９年３月１日から施行する。

附　則（平成２８年度九大規則第８３号）

この規則は、平成２９年４月１日から施行する。ただし、第１４条第１項の表中のオーラルヘルス・ブレインヘルス・トータルヘルス研究センターを加える規定は、平成２８年４月１日から適用する。

附　則（平成２９年度九大規則第　　号）

この規則は、平成　　年　　月　　日から施行する。

九州大学学則の一部を改正する規則（案）

平成２９年度九大規則第　　号
制　　定：平成　　年　　月　　日

九州大学学則（平成１６年度九大規則第１号）の一部を次のように改正する。

（新）

（略）

（学部）

第３条　本学に、次の表に掲げるとおり、学部及び学科を置く。

学部	学科
文学部	人文学科
教育学部	
法学部	
経済学部	経済・経営学科、経済工学科
理学部	物理学科、化学科、地球惑星科学科、数学科、生物学科
医学部	医学科、生命科学科、保健学科
歯学部	歯学科
薬学部	創薬科学科、臨床薬学科
工学部	建築学科、電気情報工学科、物質科学工学科、地球環境工学科、エネルギー科学科、機械航空工学科
芸術工学部	環境設計学科、工業設計学科、画像設計学科、音響設計学科、芸術情報設計学科
農学部	生物資源環境学科
共創学部	共創学科

２～４　（略）

（略）

（旧）

（略）

（学部）

第３条　（同左）

学部	学科
文学部	人文学科
教育学部	
法学部	
経済学部	経済・経営学科、経済工学科
理学部	物理学科、化学科、地球惑星科学科、数学科、生物学科
医学部	医学科、生命科学科、保健学科
歯学部	歯学科
薬学部	創薬科学科、臨床薬学科
工学部	建築学科、電気情報工学科、物質科学工学科、地球環境工学科、エネルギー科学科、機械航空工学科
芸術工学部	環境設計学科、工業設計学科、画像設計学科、音響設計学科、芸術情報設計学科
農学部	生物資源環境学科

２～４　（略）

（略）

附　則

この規則は、平成　　年　　月　　日から施行する。

九州大学学部通則（案）

平成１６年度九大規則第２号
制　　定：平成１６年　４月　１日
最終改正：平成　　年　　月　　日
（平成２９年度九大規則第　　号）

目次

第１章　総則（第１条～第６条）
第２章　入学、再入学、転学部、転入学及び編入学（第７条～第１４条）
第３章　教育課程、卒業の認定等（第１５条～第２５条）
第４章　退学、転学、留学及び休学（第２６条～第３３条）
第５章　表彰、除籍及び懲戒（第３４条～第３７条）
第６章　検定料、入学料、授業料及び寄宿料（第３８条～第４２条）
第７章　科目等履修生、聴講生、特別聴講学生、研究生及び専修生（第４３条～第４７条）
附則

第１章　総則

（趣旨）

第１条　この規則は、九州大学学則（平成１６年度九大規則第１号）第３条第４項の規定に基づき、学部の修業年限、教育課程、学生の入学、退学、卒業その他の学生の修学上必要な事項を定めるものとする。

（修業年限等）

第２条　修業年限は、４年とする。

２　前項の規定にかかわらず、医学部医学科、歯学部及び薬学部臨床薬学科の修業年限は、６年とする。　【学教法第８７条】

３　九州大学（以下「本学」という。）の科目等履修生として一定の単位を修得した者が本学に入学する場合において、当該単位の修得により教育課程の一部を履修したと認められるときは、その単位数に応じて相当期間を修業年限の２分の１を超えない範囲で修業年限に通算することができる。

４　前項の修業年限の通算は、学部教授会の議を経て各学部長が定める。

（在学期間の限度）

第３条　在学期間の限度は、８年とする。

２　前項の規定にかかわらず、医学部医学科、歯学部及び薬学部臨床薬学科の在学期間の限度は、１２年とする。

（定員）

第４条　各学部・学科の学生定員は、別表のとおりとする。

（学年及び学期）

第５条　学年は、４月１日に始まり、翌年３月３１日に終る。　【学教法規則第１６３条】

２　学期の区分は、各学部規則において定める。　【大学設置基準第２３条】

３　前項に定める各学期は、２つの授業期間に区分することができる。

（休業日）

第６条　休業日（授業を行わない日）は、次のとおりとする。

日曜日及び土曜日
国民の祝日に関する法律（昭和２３年法律第１７８号）に規定する休日
本学記念日　５月１１日
別に定める春季、夏季及び冬季の各休業日　【大学設置基準第２２条】

２　臨時の休業日は、その都度定める。

３　前２項の休業日において、特に必要がある場合には、授業を行うことがある。

第２章　入学、再入学、転学部、転入学及び編入学

（入学の時期）

第７条　学生の入学の時期は、学年の始めとする。ただし、特に必要があり、かつ、教育上支障がないと認めるときは、学期の始めに入学させることができる。

【学教法規則第１６３条】

（入学資格）

第８条　本学に入学することのできる者は、次の各号のいずれかに該当する者とする。

(1)　高等学校又は中等教育学校を卒業した者

(2)　通常の課程による１２年の学校教育を修了した者又は通常の課程以外の課程により、これに相当する学校教育を修了した者

(3)　外国において学校教育における１２年の課程を修了した者又はこれに準ずる者で文部科学大臣の指定したもの

(4)　文部科学大臣が高等学校の課程と同等の課程を有するものとして認定した在外教育施設の当該課程を修了した者

(5)　専修学校の高等課程（修業年限が３年以上であることその他の文部科学大臣が定める基準を満たすものに限る。）で文部科学大臣が指定するものを文部科学大臣が定める日以後に修了した者

(6)　文部科学大臣の指定した者

(7)　高等学校卒業程度認定試験規則（平成１７年文部科学省令第１号）による高等学校卒業程度認定試験に合格した者（同規則附則第２条の規定による廃止前の大学入学資格検定規程（昭和２６年文部省令第１３号。以下この条において「旧規程」という。）による大学入学資格検定（以下この条において「旧検定」という。）に合格した者を含む。）

(8)　学校教育法（昭和２２年法律第２６号）第９０条第２項の規定により大学に入学した者であって、本学において、本学における教育を受けるにふさわしい学力があると認めたもの

(9)　本学において、個別の入学資格審査により、高等学校を卒業した者と同等以上の学力があると認めた者で、１８歳に達したもの　【学教法第９０条、学教法規則第１５０条】

２　前項の規定にかかわらず、次の各号のいずれかに該当する者であって、本学の定める分野において特に優れた資質を有すると認めるものを、本学に入学させることができる。

(1)　高等学校に２年以上在学した者

(2)　中等教育学校の後期課程、高等専門学校又は特別支援学校の高等部に２年以上在学した者

(3)　外国において、学校教育における９年の課程に引き続く学校教育の課程に２年以上在学した者

(4)　文部科学大臣が高等学校の課程と同等の課程を有するものとして認定した在外教育施設（高等学校の課程に相当する課程を有するものとして指定したものを含む。）の当該課程に２年以上在学した者

(5)　前項第５号に規定する専修学校の高等課程に同号に規定する文部科学大臣が定める日以後において２年以上在学した者

(6)　文部科学大臣が指定した者

(7)　高等学校卒業程度認定試験規則第４条に定める試験科目の全部（試験の免除を受けた試験科目を除く。）について合格点を得た者（旧規程第４条に規定する受験科目の全部（旧検定の一部免除を受けた者については、その免除を受けた科目を除く。）について合格点を得た者を含む。）で１７歳に達したもの

【学教法第９０条、学教法規則第１５３条、第１５４条】

（入学の出願）

第９条　入学を志願する者は、所定の期日までに、入学志願票に、所定の入学検定料その他別に定める書類を添えて願い出なければならない。

（入学者選抜）

第１０条　前条の入学を志願する者については、入学者選抜を行う。　【学教法規則第１４４条】

（入学の手続及び許可）

第１０条の２　総長は、前条の入学者選抜の結果合格した者で、所定の期日までに入学料の納付（入学料の全部若しくは一部の免除又は徴収猶予を受けようとする者にあっては、当該免除又は徴収猶予に係る申請）及び所定の書類の提出を完了したものに入学を許可する。

（再入学）

第１１条　第２６条の規定により退学した後、再び同一学部に入学を志願する者については、選

考の上、再入学を許可することがある。
（転入学又は編入学）
第１２条　次の各号のいずれかに該当する者については、選考の上、転入学又は編入学を許可することができる。
(1)　他の大学の学生で、本学に転入学を志願する者
(2)　我が国において、外国の大学の課程を有するものとして当該外国の学校教育制度において位置付けられた教育施設であって、文部科学大臣が別に指定するものの当該課程に在学した者（学校教育法第９０条第１項に規定する者に限る。）で、本学に転入学を志願するもの
(3)　大学において単位（科目等履修生として修得した単位を除く。）を修得した者で、編入学を志願するもの
(4)　大学を卒業し、又は学校教育法第１０４条第４項の規定により学士の学位を授与された者で、編入学を志願するもの
(5)　短期大学又は高等専門学校を卒業した者で、編入学を志願するもの
(6)　外国の短期大学を卒業した者及び外国の短期大学の課程を有するものとして当該外国の学校教育制度において位置付けられた教育施設であって、文部科学大臣が別に指定するものの当該課程を我が国において修了した者（学校教育法第９０条第１項に規定する者に限る。）で、本学に編入学を志願するもの
(7)　専修学校の専門課程（修業年限が２年以上であることその他の文部科学大臣の定める基準を満たすものに限る。）を修了した者（学校教育法第９０条第１項に規定する者に限る。）で、編入学を志願するもの
(8)　高等学校の専攻科の課程（修業年限が２年以上であることその他の文部科学大臣の定める基準を満たすものに限る。）を修了した者（学校教育法第９０条第１項に規定する者に限る。）で、編入学を志願するもの
（転学部）
第１２条の２　学部長は、本学の学生で転学部を志願する者について、学部教授会の議を経て選考の上、転学部を許可することができる。
（再入学、転入学及び編入学の手続及び許可）
第１３条　第１１条及び第１２条に規定する再入学、転入学及び編入学に係る手続及び許可については、第１０条の２の規定を準用する。
（再入学等における修業年限等の取扱い）
第１４条　第１１条から第１２条の２までの規定により再入学、転学部、転入学及び編入学（以下「再入学等」という。）を許可された者の修業年限及び既修得単位の認定については、学部教授会の議を経て各学部長が別に定める。
２　前項の規定により修業年限を定められた者の在学期間の限度は、当該修業年限の２倍とする。

第３章　教育課程、卒業の認定等

（教育課程）
第１５条　各学部の教育課程は、基幹教育科目及び専攻教育科目により編成するものとする。
２　前項の基幹教育科目の履修については、別に定める。
３　第１項の教育課程及び卒業の認定については、各学部規則において定める。
（２１世紀プログラム）
第１６条　各学部（医学部医学科、歯学部及び薬学部臨床薬学科を除く。）に、学部横断型の教育を行うための教育課程として、九州大学２１世紀プログラムを置く。
２　九州大学２１世紀プログラム及び当該プログラムの教育を受ける学生の卒業の認定については、前条第３項の規定にかかわらず、九州大学２１世紀プログラムに関する規則（平成１６年度九大規則第８９号）により定める。
（チャレンジ２１）
第１６条の２　本学に、学部ごとに編成する教育課程のほか、学部共通の課程を置く。
２　前項の課程をチャレンジ２１と称し、当該課程について必要な事項は、別に定める。
（授業の方法）
第１６条の３　授業は、講義、演習、実験、実習若しくは実技のいずれかにより又はこれらの併

用により行うものとする。
２　各学部は、文部科学大臣が定めるところにより、前項の授業を、多様なメディアを高度に利用して、当該授業を行う教室等以外の場所で履修させることができる。
３　各学部は、第１項の授業を、外国において履修させることができる。第２項の規定により、多様なメディアを高度に利用して、当該授業を行う教室等以外の場所で履修させる場合についても、同様とする。【大学設置基準第２５条】

（単位の計算方法）
第１７条　各授業科目（基幹教育科目を除く。）の単位数は、１単位の授業科目を４５時間の学修を必要とする内容をもって構成することを標準とし、授業の方法に応じ、当該授業による教育効果、授業時間外に必要な学修等を考慮して、次の基準により単位数を計算するものとする。
(1)　講義及び演習については、１５時間から３０時間までの範囲で各学部規則に定める時間の授業をもって１単位とする。
(2)　実験、実習及び実技については、３０時間から４５時間までの範囲で各学部規則に定める時間の授業をもって１単位とする。ただし、芸術等の分野における個人指導による実技の授業については、当該学部規則に定める時間の授業をもって１単位とすることができる。
(3)　一の授業科目について、講義、演習、実験、実習又は実技のうち２以上の方法の併用により行う場合については、その組み合わせに応じ、前２号に規定する基準を考慮して当該学部規則に定める時間の授業をもって１単位とする。【大学設置基準第２１条】
２　前項の規定にかかわらず、卒業論文、卒業研究、卒業制作等の授業科目について、これらの学修の成果を評価して単位を授与することが適切と認める場合には、これらに必要な学修等を考慮して、単位数を定めることができる。【大学設置基準第２１条】
３　基幹教育科目の各授業科目の単位の計算方法は、別に定める。

（成績評価基準等の明示等）
第１７条の２　学部長は、学生に対して、授業科目の授業の方法及び内容並びに１年間の授業の計画をあらかじめ明示するものとする。
２　学部長は、学修の成果に係る評価及び卒業の認定に当たっては、客観性及び厳格性を確保するため、学生に対してその基準をあらかじめ明示するとともに、当該基準にしたがって適切に行うものとする。【大学設置基準第２５条の２】

（成績評価）
第１７条の３　学生が履修した授業科目について、試験により成績評価を行う。ただし、平素の成績をもって、試験の成績に代えることができる。
２　各授業科目の成績は、A、B、C、D及びFの５種の評語をもってあらわし、A、B、C及びDを合格とし、Fを不合格とする。
A　基準を大きく超えて優秀である。
B　基準を超えて優秀である。
C　望ましい基準に達している。
D　単位を認める最低限の基準には達している。
F　基準を大きく下回る。
３　前項の規定にかかわらず、演習、実験、実習等の合否等により判定する授業科目は、R又はFの評語をもってあらわすことができるものとし、Rを合格とする。
４　前３項に定めるもののほか成績評価に関し必要な事項は、別に定める。

（教育内容等の改善のための組織的な研修等）
第１７条の４　学部長は、当該学部の授業の内容及び方法の改善を図るための組織的な研修及び研究を実施するものとする。【大学設置基準第２５条の３】

（他の大学又は短期大学における授業科目の履修）
第１８条　学部長は、教育上有益と認めるときは、学生が他の大学又は短期大学において履修した授業科目について修得した単位を、当該学部における授業科目の履修により修得したものとみなすことができる。【大学設置基準第２８条】
２　前項の規定は、学生が、外国の大学又は短期大学に留学する場合、外国の大学又は短期大学が行う通信教育における授業科目を我が国において履修する場合及び外国の大学又は短期大学

の教育課程を有するものとして当該外国の学校教育制度において位置付けられた教育施設であって、文部科学大臣が別に指定するものの当該教育課程における授業科目を我が国において履修する場合について準用する。【大学設置基準第２８条】

（休学期間中の外国の大学又は短期大学における授業科目の履修）

第１９条　学部長は、教育上有益と認めるときは、学生が休学期間中に外国の大学又は短期大学において履修した授業科目について修得した単位を、本学における授業科目の履修により修得したものとみなすことができる。

（大学以外の教育施設における学修）

第２０条　学部長は、教育上有益と認めるときは、学生が行う短期大学又は高等専門学校の専攻科における学修その他文部科学大臣が定める学修を、本学における授業科目の履修とみなし、学部教授会の議を経て各学部長が定めるところにより単位を与えることができる。

【大学設置基準第２９条】

（入学前の既修得単位等の認定）

第２１条　学部長は、教育上有益と認めるときは、学生が本学に入学する前に大学又は短期大学において履修した授業科目について修得した単位（大学設置基準（昭和３１年文部省令第２８号）第３１条の規定により科目等履修生として修得した単位を含む。）を、本学に入学した後の本学の授業科目の履修により修得したものとみなすことができる。外国の大学又は短期大学において履修した授業科目について修得した単位についても同様とする。

【大学設置基準第３０条】

２　学部長は、教育上有益と認めるときは、学生が本学に入学する前に行った前条に規定する学修を、本学における授業科目の履修とみなし、学部教授会の議を経て各学部長が定めるところにより単位を与えることができる。【大学設置基準第３０条】

（本学において修得したものとみなし、又は与えることのできる単位数の限度）

第２２条　第１８条から前条までの規定により本学において修得したものとみなし、又は与えることのできる単位数は、第１１条及び第１２条に規定する再入学等の場合を除き、合わせて６０単位を超えないものとする。この場合において、入学前の既修得単位等で第１５条第１項に規定する基幹教育科目の授業科目の履修により修得したものとみなし、又は与えることのできる単位数は、３０単位を超えないものとする。

【大学設置基準第２８条、第２９条、第３０条】

（長期にわたる教育課程の履修）

第２３条　学生が、職業を有している等の事情により、修業年限を超えて一定の期間にわたり計画的に教育課程を履修し卒業することを希望する旨を学部長に申し出たときは、学部教授会の議を経て各学部長が定めるところにより、その計画的な履修を認めることができる。

【大学設置基準第３０条の２】

（卒業）

第２４条　第２条に規定する期間在学し、所定の授業科目及び単位数を履修修得した者は、卒業者とし、これに卒業証書を授与する。【大学設置基準第３２条】

２　前項の規定にかかわらず、本学の各学部(医学部医学科、歯学部及び薬学部臨床薬学科を除く。)に３年以上在学した者で、各学部規則の定めるところにより、所定の授業科目及び単位数を優秀な成績で履修修得したものは、卒業者とし、卒業証書を授与することができる。

３　第１項の規定による卒業に必要な単位のうち、第１６条の３第２項及び第３項に規定する授業の方法により修得する単位数は、６０単位を超えないものとする。ただし、卒業に必要な単位が１２４単位（医学部医学科及び歯学部歯学科にあっては１８８単位、薬学部臨床薬学科にあっては１８６単位）を超える学部にあっては、その超える部分の単位数を６０単位に加えることができる。【学教法第８９条】

（学位の授与）

第２５条　卒業者には、九州大学学位規則(平成１６年度九大規則第８６号)の定めるところにより、学士の学位を授与するものとする。【学教法第１０４条】【学位規則第２条】

第４章　退学、転学、留学及び休学

（退学）

第２６条　学生が退学しようとするときは、学部長を経て総長に退学許可願を提出し、その許可を受けなければならない。

（転学）

第２７条　他の大学に転学を志望する学生は、学部長を経て総長に転学許可願を提出し、その許可を受けなければならない。

（留学）

第２８条　外国の大学又は短期大学に留学を志望する学生は、学部長に留学許可願を提出し、その許可を受けなければならない。

２　前項の許可を得て留学した期間は、第２条の修業年限に通算することができる。

（休学）

第２９条　疾病又は経済的理由のため２月以上修学できない学生は、学部長の許可を得て、その学年の終りまで休学することができる。

２　前項のほか、特別の事情があると認められたときは、学部長は、休学を許可することができる。

第３０条　疾病のため修学が不適当と認められる学生に対しては、学部長は、休学を命ずることができる。

第３１条　休学期間中に、その事由が消滅したときは、学部長の許可を得て、復学することができる。

第３２条　休学した期間は、在学期間に算入しない。

第３３条　休学期間は、第２条に規定する修業年限の年数を超えることはできない。ただし、第１１条又は第１２条の規定により再入学等をした者の休学期間は、第１４条第１項に規定する修業年限の年数を超えることができない。

第５章　表彰、除籍及び懲戒

（表彰）

第３４条　学生に表彰に価する行為があったときは、総長が表彰することがある。

２　表彰に関し必要な事項は、別に定める。

（除籍）

第３５条　総長は、学部長の報告により学生が次の各号のいずれかに該当すると認めるときは、当該学生を除籍することができる。

(1)　欠席が長期にわたるとき。

(2)　成業の見込みがないとき。

(3)　長期間にわたり行方不明のとき。

(4)　第３条又は第１４条第２項に規定する在学期間の限度を超えたとき。

(5)　第３３条に規定する休学期間を超えてなお復学できないとき。

第３６条　総長は、学生が、次の各号のいずれかに該当するときは、当該学生を除籍する。

(1)　入学料の一部を免除された者若しくは免除を不許可とされた者又は入学料の徴収を猶予された者若しくは徴収の猶予を不許可とされた者が、所定の期日までに入学料を納付しないとき。

(2)　授業料の納付を怠り、督促を受けてなお納付しないとき。

（懲戒）

第３７条　総長は、学生が本学の規則に違反し、又はその本分に反する行為があったときは、当該学生を懲戒する。

２　前項の場合における懲戒は、訓告、停学及び退学とする。

３　懲戒の手続その他懲戒に関し必要な事項は、別に定める。

第６章　検定料、入学料、授業料及び寄宿料

（検定料）

第３８条　入学（再入学、転入学又は編入学を含む。次条において同じ。）を志願する者は、検定料を納付しなければならない。

（入学料）

第３９条　入学に当たっては、入学料を納付しなければならない。

２　入学料の納付が困難な者に対し、その全部若しくは一部を免除し、又は徴収猶予することができる。
３　前項の入学料の免除及び徴収猶予に関し必要な事項は、別に定める。
（授業料）
第４０条　各年度に係る授業料は、次の表に掲げる納付区分ごとに、それぞれ授業料の年額の２分の１に相当する額を同表に掲げる納期に納付しなければならない。ただし、当該期の授業料の免除、徴収猶予又は月割分納を申請した者の納期については、この限りでない。

納　付　区　分	納　期
前期（４月１日から９月３０日まで）	４月３０日まで
後期（１０月１日から３月３１日まで）	１０月３１日まで

２　休学が前項に定めた授業料納付区分の全期間である場合は、その期間分の授業料を免除する。
３　経済的理由により授業料を納付することが困難であると認められ、かつ、学業が優秀と認められる者その他やむを得ない特別の事情があると認められる者については、授業料の全部若しくは一部を免除し、徴収猶予し、又は月割分納を許可することができる。
４　前項の授業料の免除、徴収猶予及び月割分納に関し必要な事項は、別に定める。
（寄宿料）
第４１条　寄宿舎に入居した者は、所定の期日までに、寄宿料を納付しなければならない。
２　前項の規定にかかわらず、特別の事情があると認められる者については、寄宿料を免除することができる。
（検定料、入学料、授業料及び寄宿料の額等）
第４２条　検定料、入学料、授業料及び寄宿料の額、徴収方法その他の必要な事項については、国立大学法人九州大学における授業料その他の費用に関する規程（平成１６年度九大会規第１２号。以下「費用規程」という。）に定める。

第７章　科目等履修生、聴講生、特別聴講学生、研究生及び専修生

（科目等履修生）
第４３条　本学の学生以外の者で、学部の授業科目のうち一又は複数の授業科目を履修することを志願する者があるときは、科目等履修生として入学を許可することがある。
【大学設置基準第３１条】
２　科目等履修生に関し必要な事項は、別に定める。
（聴講生）
第４４条　本学において、学部で開講する特定の授業科目を聴講することを志願する者があるときは、当該学部の教育研究上支障がない場合に限り、選考の上、聴講生として入学を許可することがある。
２　聴講生に関し必要な事項は、別に定める。
（特別聴講学生）
第４５条　他の大学又は外国の大学の学生で、本学において、学部で開講する特定の授業科目を履修することを志願する者があるときは、当該他の大学又は外国の大学との協議に基づき、特別聴講学生として入学を許可することがある。
２　特別聴講学生に関し必要な事項は、別に定める。
（研究生及び専修生）
第４６条　学部において、特定の専門事項について研究することを志願する者があるときは、当該学部の教育研究上支障がない場合に限り、選考の上、研究生又は専修生として入学を許可することがある。
２　研究生及び専修生に関し必要な事項は、別に定める。
（授業料等）

第４７条　科目等履修生、聴講生、特別聴講学生、研究生及び専修生の検定料、入学料及び授業料の額、徴収方法その他の必要な事項については、費用規程に定める。

附　則

１　この規則は、平成１６年４月１日から施行する。

２　平成１６年３月３１日に本学に在学し、平成１６年４月１日以降も引き続き在学する者の教育課程の履修その他当該学生の教育に必要な事項については、九州大学通則（昭和２４年６月　１日施行）等の規定によるものとする。

附　則（平成１６年度九大規則第１９４号）

この規則は、平成１７年４月１日から施行する。

附　則（平成１７年度九大規則第３１号）

この規則は、平成１８年４月１日から施行する。

附　則（平成１８年度九大規則第３８号）

この規則は、平成１９年４月１日から施行する。

附　則（平成１９年度九大規則第３２号）

この規則は、平成１９年１２月２６日から施行する。

附　則（平成１９年度九大規則第５９号）

１　この規則は、平成２０年４月１日から施行する。

２　改正後の九州大学学部通則第１６条の２の規定は、平成２０年度に九州大学に入学する者から適用する。

附　則（平成２０年度九大規則第３８号）

この規則は、平成２１年４月１日から施行する。

附　則（平成２１年度九大規則第５０号）

この規則は、平成２２年４月１日から施行する。

附　則（平成２２年度九大規則第８３号）

この規則は、平成２３年４月１日から施行する。

附　則（平成２３年度九大規則第８１号）

この規則は、平成２４年４月１日から施行する。

附　則（平成２４年度九大規則第４７号）

この規則は、平成２５年４月１日から施行する。

附　則（平成２５年度九大規則第８４号）

１　この規則は、平成２６年４月１日から施行する。

２　この規則による改正後の九州大学学部通則第１５条及び第２２条の規定は、平成２６年度に九州大学に入学する者から適用し、平成２６年３月３１日に九州大学に在学し、同年４月１日以降も引き続き在学する者については、なお従前の例による。

附　則（平成２６年度九大規則第７８号）

この規則は、平成２７年４月１日から施行する。

附　則（平成２７年度九大規則第３６号）

この規則は、平成２８年４月１日から施行する。

附　則（平成２８年度九大規則第８４号）

この規則は、平成２９年４月１日から施行する。

附　則（平成２９年度九大規則第　　号）

この規則は、平成　　年　　月　　日から施行する。

別表（第４条関係）

学部名	学科名	学生定員						収容定員
		１年次	２年次	３年次	４年次	５年次	６年次	
文学部	人文学科	151	160	160	160	－	－	631
教育学部		46	50	50	50	－	－	196
法学部		189	200	200	200	－	－	789
経済学部	経済・経営学科	141	150	150 (10)	150 (10)	－	－	591 (20)
	経済工学科	85	90	90 (10)	90 (10)	－	－	355 (20)
	計	226	240	240 (20)	240 (20)	－	－	946 (40)
理学部	物理学科	55	59	59	59	－	－	232
	化学科	62	67	67	67	－	－	263
	地球惑星科学科	45	48	48	48	－	－	189
	数学科	50	54	54 (5)	54 (5)	－	－	212 (10)
	生物学科	46	49	49	49	－	－	193
	計	258	277	277 (5)	277 (5)	－	－	1,089 (10)
医学部	医学科	111	111	111	111	111	111	666
	生命科学科	12	12	12	12	－	－	48
	保健学科	134	137	137	137	－	－	545
	計	257	260	260	260	111	111	1,259
歯学部	歯学科	53	53	53	53	53	53	318
薬学部	創薬科学科	49	50	50	50	－	－	199

	臨床薬学科	30	30	30	30	30	30	180
	計	79	80	80	80	30	30	379
工学部	建築学科	58	60	60	60	－	－	238
	電気情報工学科	153	158	158	158	－	－	627
	物質科学工学科	163	168	168	168	－	－	667
	地球環境工学科	145	150	150	150	－	－	595
	エネルギー科学科	95	99	99	99	－	－	392
	機械航空工学科	164	169	169	169	－	－	671
	計	778	804	804	804	－	－	3,190
芸術工学部	環境設計学科	35	38	38	38	－	－	149
	工業設計学科	45	48	48	48	－	－	189
	画像設計学科	35	38	38	38	－	－	149
	音響設計学科	35	38	38	38	－	－	149
	芸術情報設計学科	37	40	40	40	－	－	157
	計	187	202	202	202	－	－	793
農学部	生物資源環境学科	226	229	229	229	－	－	913
共創学部	共創学科	105	－	－	－	－	－	105
総計		2,555	2,555	2,555 (25)	2,555 (25)	194	194	10,608 (50)

(備考)

1　学生定員の（　）を付したものは３年次編入学定員で外数

2　（　）を付した学科は、学部の改組により、学生募集を停止したものである。

3　外国人である学生は、定員外とすることができる。

九州大学学部通則の一部を改正する規則（案）

平成２９年度九大規則第　　号
制　　定：平成　　年　　月　　日

九州大学学部通則（平成１６年度九大規則第２号）の一部を次のように改正する。

（新）	（旧）
（略） （定員） 第４条　各学部・学科の学生定員は、別表のとおりとする。 （略） 別表　（別紙のとおり）	（略） （定員） 第４条　（同左） （略） 別表　（別紙のとおり）

附　則

この規則は、平成　　年　　月　　日から施行する。

新

別表（第４条関係）

学部名	学科名	学生定員						収容定員
		１年次	２年次	３年次	４年次	５年次	６年次	
文学部	人文学科	151	160	160	160	－	－	631
教育学部		46	50	50	50	－	－	196
法学部		189	200	200	200	－	－	789
経済学部	経済・経営学科	141	150	150 (10)	150 (10)	－	－	591 (20)
	経済工学科	85	90	90 (10)	90 (10)	－	－	355 (20)
	計	226	240	240 (20)	240 (20)	－	－	946 (40)
理学部	物理学科	55	59	59	59	－	－	232
	化学科	62	67	67	67	－	－	263
	地球惑星科学科	45	48	48	48	－	－	189
	数学科	50	54	54 (5)	54 (5)	－	－	212 (10)
	生物学科	46	49	49	49	－	－	193
	計	258	277	277 (5)	277 (5)	－	－	1,089 (10)
医学部	医学科	111	111	111	111	111	111	666
	生命科学科	12	12	12	12	－	－	48
	保健学科	134	137	137	137	－	－	545
	計	257	260	260	260	111	111	1,259
歯学部	歯学科	53	53	53	53	53	53	318
薬学部	創薬科学科	49	50	50	50	－	－	199

	臨床薬学科	30	30	30	30	30	30	180
	計	79	80	80	80	30	30	379
工学部	建築学科	58	60	60	60	－	－	238
	電気情報工学科	153	158	158	158	－	－	627
	物質科学工学科	163	168	168	168	－	－	667
	地球環境工学科	145	150	150	150	－	－	595
	エネルギー科学科	95	99	99	99	－	－	392
	機械航空工学科	164	169	169	169	－	－	671
	計	778	804	804	804	－	－	3,190
芸術工学部	環境設計学科	35	38	38	38	－	－	149
	工業設計学科	45	48	48	48	－	－	189
	画像設計学科	35	38	38	38	－	－	149
	音響設計学科	35	38	38	38	－	－	149
	芸術情報設計学科	37	40	40	40	－	－	157
	計	187	202	202	202	－	－	793
農学部	生物資源環境学科	226	229	229	229	－	－	913
共創学部	共創学科	105	－	－	－	－	－	105
総計		2,555	2,555	2,555 (25)	2,555 (25)	194	194	10,608 (50)

(備考)

1　学生定員の（　）を付したものは３年次編入学定員で外数

2　（　）を付した学科は、学部の改組により、学生募集を停止したものである。

3　外国人である学生は、定員外とすることができる。

旧

別表（第４条関係）

学部名	学科名	学生定員						収容定員
		１年次	２年次	３年次	４年次	５年次	６年次	
文学部	人文学科	160	160	160	160	－	－	640
教育学部		50	50	50	50	－	－	200
法学部		200	200	200	200	－	－	800
経済学部	経済・経営学科	150	150	150 (10)	150 (10)	－	－	600 (20)
	経済工学科	90	90	90 (10)	90 (10)	－	－	360 (20)
	計	240	240	240 (20)	240 (20)	－	－	960 (40)
理学部	物理学科	59	59	59	59	－	－	236
	化学科	67	67	67	67	－	－	268
	地球惑星科学科	48	48	48	48	－	－	192
	数学科	54	54	54 (5)	54 (5)	－	－	216 (10)
	生物学科	49	49	49	49	－	－	196
	計	277	277	277 (5)	277 (5)	－	－	1,108 (10)
医学部	医学科	111	111	111	111	111	111	666
	生命科学科	12	12	12	12	－	－	48
	保健学科	137	137	137	137	－	－	548
	計	260	260	260	260	111	111	1,262
歯学部	歯学科	53	53	53	53	53	53	318
薬学部	創薬科学科	50	50	50	50	－	－	200

	臨床薬学科	30	30	30	30	30	30	180
	計	80	80	80	80	30	30	380
工学部	建築学科	60	60	60	60	－	－	240
	電気情報工学科	158	158	158	158	－	－	632
	物質科学工学科	168	168	168	168	－	－	672
	地球環境工学科	150	150	150	150	－	－	600
	エネルギー科学科	99	99	99	99	－	－	396
	機械航空工学科	169	169	169	169	－	－	676
	計	804	804	804	804	－	－	3, 216
芸術工学部	環境設計学科	38	38	38	38	－	－	152
	工業設計学科	48	48	48	48	－	－	192
	画像設計学科	38	38	38	38	－	－	152
	音響設計学科	38	38	38	38	－	－	152
	芸術情報設計学科	40	40	40	40	－	－	160
	計	202	202	202	202	－	－	808
農学部	生物資源環境学科	229	229	229	229	－	－	916
総計		2, 555	2, 555	2, 555 (25)	2, 555 (25)	194	194	10, 608 (50)

(備考)

1　学生定員の（　）を付したものは３年次編入学定員で外数

2　（　）を付した学科は、学部の改組により、学生募集を停止したものである。

3　外国人である学生は、定員外とすることができる。

九州大学学位規則（案）

平成１６年度九大規則第８６号
施　　行：平成１６年　４月　１日
最終改正：平成　　年　　月　　日
（平成２９年度九大規則第　　号）

（趣旨）
第１条　この規則は、学位規則（昭和２８年文部省令第９号）により定めるように規定されている事項その他九州大学（以下「本学」という。）が授与する学位について必要な事項を定めるものとする。
（学位）
第２条　本学が授与する学位は、学士、修士及び博士とする。
２　本学が授与する専門職学位は、修士（専門職）及び法務博士（専門職）とする。
（学士の学位授与の要件）
第３条　学士の学位授与は、本学の課程を修了し、卒業を認定された者に対し行うものとする。
（修士の学位授与の要件）
第４条　修士の学位授与は、本学大学院の学府の修士課程を修了した者に対し行うものとする。
２　前項に定めるもののほか、修士の学位は、九州大学大学院通則（平成１６年度九大規則第３号。以下「大学院通則」という。）第２条第５項に定める一貫制博士課程（以下「一貫制博士課程」という。）において、大学院通則第２７条及び第２７条の２に規定する修了要件を満たした者に対し授与することができる。
（博士の学位授与の要件）
第５条　博士の学位授与は、本学大学院の学府の博士課程を修了した者に対し行うものとする。
（専門職学位の授与の要件）
第６条　専門職学位の授与は、本学大学院の学府の専門職大学院の課程を修了した者に対し行うものとする。
（修士の学位授与）
第７条　修士の学位授与に関して必要な事項は、各学府規則で定める。
（博士論文の提出）
第８条　博士論文（以下「論文」という。）は、博士後期課程にあっては２年以上（法科大学院の課程を修了した者が博士後期課程に入学した場合にあっては１年以上）、医学系学府医学専攻、歯学府及び薬学府臨床薬学専攻の博士課程（以下「医学系、歯学及び薬学の博士課程」という。）にあっては３年以上、一貫制博士課程にあっては４年以上在学し、各学府規則に定める所要の授業科目の単位を修得し、かつ、必要な研究指導を受けなければ、提出することができない。
２　前項の規定にかかわらず、優れた研究業績を上げた者については、在学期間が博士後期課程にあっては２年、医学系、歯学及び薬学の博士課程にあっては３年、一貫制博士課程にあっては４年に満たなくても論文を提出させることができる。
３　論文は、在学期間中に提出するものとし、その期日は、各学府規則で定める。ただし、博士後期課程、医学系、歯学及び薬学の博士課程又は一貫制博士課程に所定の年限在学し、各学府規則に定める所要の授業科目の単位を修得し、かつ、必要な研究指導を受けた者は、退学の上、別に定める期間内に論文を提出することができる。
４　論文は、論文審査願に、論文目録、論文要旨及び履歴書各１通を添え、当該学府長を経て総長に提出するものとする。
第９条　論文は、１編とし、２通を提出するものとする。ただし、参考として、他の論文を添付することができる。
２　総長は、審査のため必要があるときは、論文の副本又は訳文、模型、標本等の提出を求めることがある。
３　受理した論文は、返還しない。
（論文の審査）
第１０条　総長は、論文を受理したときは、学府教授会にその審査を付託するものとする。
２　前項の審査は、論文を受理した後１年以内に終了するものとする。

第１１条　学府教授会は、前条第１項により付託された論文を審査するため、論文調査委員（以下「調査委員」という。）を定めて、その論文の調査及び最終試験を行わせる。
２　調査委員は、３名以上とし、必要に応じ、他の大学院又は研究所等の教員等を加えることができる。
第１２条　最終試験は、論文を中心とし、これに関連のある授業科目について、口頭又は筆答により行うものとする。
第１３条　調査委員は、論文調査及び最終試験を終了したときは、調査及び最終試験の結果の要旨を、文書をもって、学府教授会に報告しなければならない。
第１４条　学府教授会は、前条の報告に基づき、学位を授与すべきか否かを審査する。
２　前項の審査は、構成員の３分の２以上が出席し、出席者の３分の２以上の賛成があることを必要とする。
（審査結果の報告）
第１５条　学府教授会は、前条の審査の結果を文書をもって、総長に報告しなければならない。
（論文提出による博士）
第１６条　第５条に定めるもののほか、博士の学位授与は、本学大学院の学府の行う論文の審査に合格し、かつ、本学大学院の学府の博士課程を修了した者と同等以上の学力を有することの確認（以下「学力の確認」という。）をされた者に対し行うことができる。
２　第８条第３項ただし書に規定する者が、退学の上、同項ただし書に定める期間を経過した後に論文を提出した場合も、前項の例による。
３　前２項により博士の学位を請求しようとする者は、学位申請書に、学位論文２通、同目録、論文要旨及び履歴書各１通並びに総長が定める審査手数料を添え、関係学府を経て、総長に提出しなければならない。
４　既納の審査手数料は、返還しない。
５　第９条の規定は、第３項の規定による学位の請求に準用する。
第１７条　総長は、前条による論文を受理したときは、学府教授会にその審査を付託するものとする。
２　学府教授会は、調査委員を定めて、その論文の調査及び学力の確認を行わせる。
３　第１０条第２項及び第１１条第２項の規定は、前２項の場合に準用する。
第１８条　論文の調査にあたっては、原則として試験を行う。
２　試験は、論文を中心とし、これに関連のある授業科目について、口頭又は筆答により行うものとする。
第１９条　学力の確認は、試問による。
２　試問は、口頭又は筆答によるものとし、専攻分野に関し本学大学院の学府の博士課程を修了した者と同等以上の学力を有し、かつ、研究者として自立して研究活動を行うに必要な高度の研究能力を有するか否かについて行う。この場合、外国語を課すものとし、その種類は、各学府教授会において定める。
３　第１項の規定にかかわらず、充分な研究歴と顕著な研究業績を有する者については、試問以外の方法により学力の確認を行うことができる。
第２０条　前２条の規定による論文の調査及び学力の確認の結果の取扱いについては、第１３条から第１５条までの規定を準用する。
（専門職学位の授与）
第２１条　専門職学位の授与に関して必要な事項は、専門職大学院の課程を置く学府の各学府規則で定める。
（学位記の授与）
第２２条　総長は、第１５条（第２０条において準用する場合を含む。）の報告を踏まえ、学位を授与すべきか否かを決定し、博士の学位を授与すべき者に学位記を授与し、学位を授与できない者にはその旨を通知する。
２　総長は、卒業並びに修士課程及び専門職大学院の課程修了の審査結果の報告を踏まえ、学位を授与すべきか否かを決定し、学士若しくは修士の学位又は専門職学位を授与すべき者に学位記を授与する。
（学位授与の報告等）

第２３条　総長は、前条第１項により博士の学位を授与したときは、当該学位を授与した日から３月以内に、所定の様式による学位授与報告書を文部科学大臣に提出するとともに、その論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨をインターネットの利用により公表するものとする。

（学位論文の公表）

第２４条　博士の学位を授与された者は、当該博士の学位を授与された日から１年以内に、当該博士の学位の授与に係る論文の全文を公表しなければならない。ただし、当該博士の学位を授与される前に既に公表したときは、この限りでない。

２　前項の規定にかかわらず、博士の学位を授与された者は、やむを得ない事由がある場合には、学府の承認を得て、当該博士の学位の授与に係る論文の全文に代えて、その内容を要約したものを公表することができる。この場合において、当該学府は、その論文の全文を求めに応じて閲覧に供するものとする。

３　博士の学位を授与された者が行う前２項の規定による公表は、インターネットの利用により行うものとする。

４　第１項及び第２項により論文を公表する場合には、本学において審査を受けた学位論文であることを、明記しなければならない。

第２５条　本学の学位を授与された者が、学位の名称を用いるときは、「九州大学」と付記しなければならない。

（学位の名称）

第２６条　第２条の学位（法務博士（専門職）を除く。）を授与するに当たっては、専攻分野の名称を付記するものとし、学位の名称は、学士にあっては別表第１のとおりとし、修士の学位及び博士の学位にあっては別表第２のとおりとし、専門職学位にあっては、別表第３のとおりとする。

（学位授与の取消）

第２７条　本学において博士の学位を授与された者が不正な方法により学位の授与を受けた事実が判明したとき、又は学位の栄誉を汚辱する行為があったときは、総長は、教育研究評議会の議を経て、既に与えた学位を取り消し、学位記を返納させ、かつ、その旨を公表するものとする。

２　教育研究評議会において前項の決定を行うには、構成員の３分の２以上が出席し、出席者の４分の３以上の賛成があることを必要とする。

（学位記等の様式）

第２８条　学位記及び学位申請関係書類の様式は、別記様式のとおりとする。

附　則

１　この規則は、平成１６年４月１日から施行する。

２　平成１６年３月３１日に本学に在学し、平成１６年４月１日以降も引き続き在学する者（２１世紀プログラムの教育を受ける学生を除く。）については、九州大学学位規則（昭和３２年１１月１９日施行）の規定によるものとする。

３　九州大学学則（平成１６年度九大規則第１号）附則第４項に規定する者に授与する学位記については、第２８条の規定にかかわらず、次の様式によるものとする。

(1) 九州芸術工科大学芸術工学部の課程を修めて卒業した者に授与する学位記の様式

学　位　記

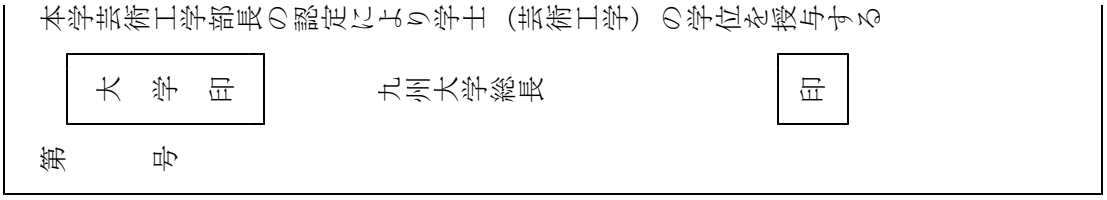
学部印

氏名
年　月　日生

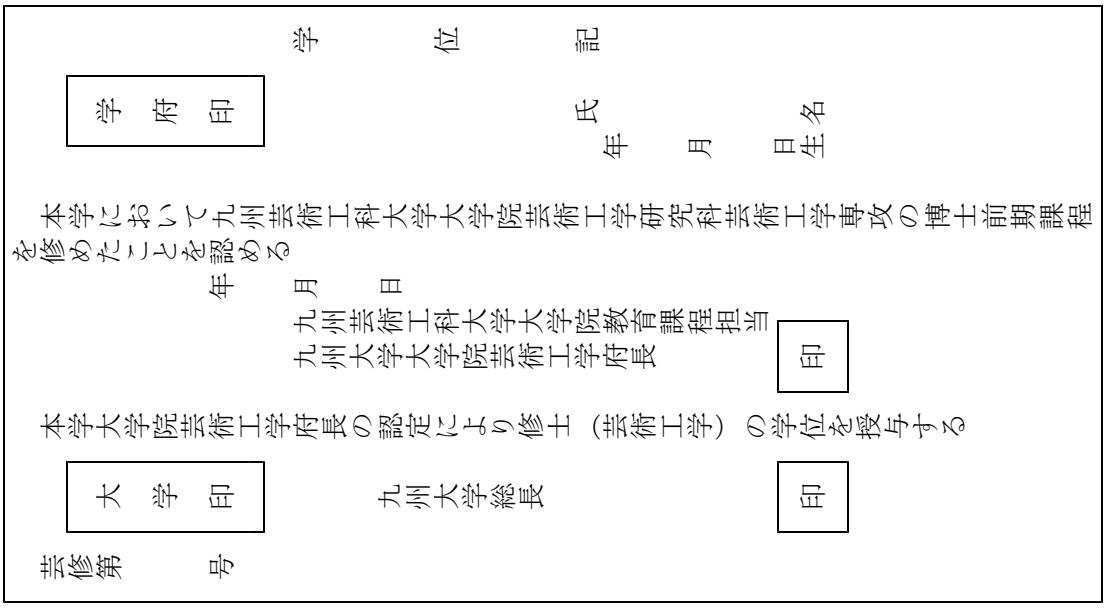
本学において九州芸術工科大学芸術工学部○○学科所定の課程を修めたことを認める

年　月　日

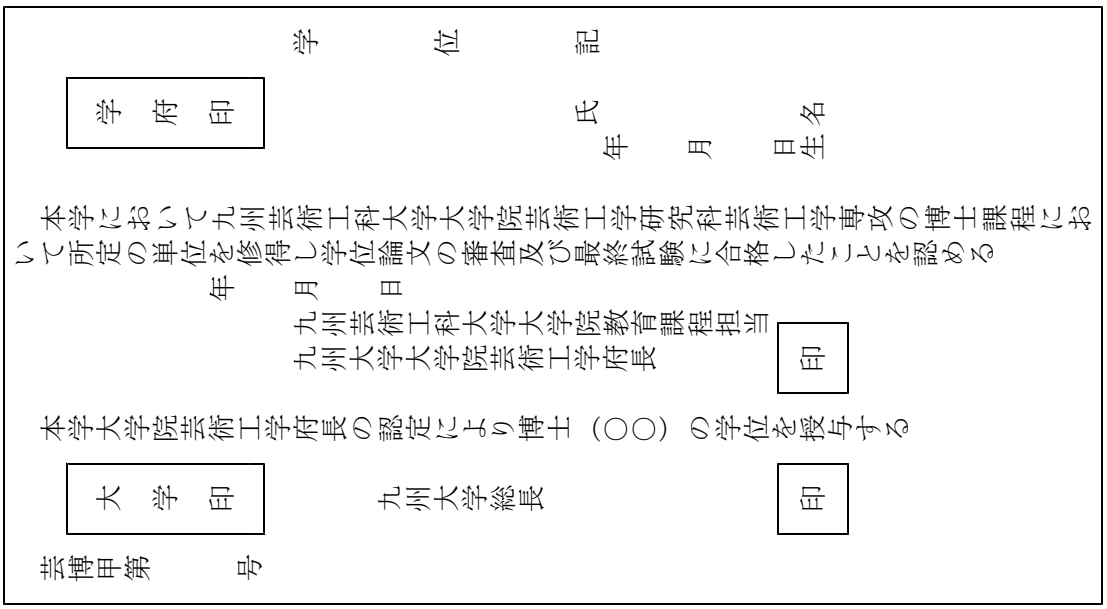
九州芸術工科大学教育課程担当
九州大学芸術工学部長　印



(2) 九州芸術工科大学大学院の博士前期課程を修めて修士課程を修了した者に授与する学位記の様式



(3) 九州芸術工科大学大学院の博士課程を修めて博士課程を修了した者に授与する学位記の様式



附　則（平成１６年度九大規則２０３号）

この規則は、平成１７年４月１日から施行する。

附　則（平成１７年度九大規則第５５号）

この規則は、平成１８年４月１日から施行する。

附　則（平成１８年度九大規則第１９号）

この規則は、平成１８年６月１日から施行する。

附　則（平成１８年度九大規則第１１８号）

この規則は、平成１９年４月１日から施行する。

附　則（平成２０年度九大規則第７４号）

この規則は、平成２１年４月１日から施行する。

附　則（平成２２年度九大規則第１１号）

１　この規則は、平成２２年６月１５日から施行し、平成２２年４月１日から適用する。

２　平成２２年３月３１日に九州大学大学院薬学府の修士課程に在学し、同年４月１日以降も引き続き在学する者に授与する学位の名称については、この規則による改正後の九州大学学位規則別表第２の規定にかかわらず、なお従前の例による。

附　則（平成２２年度九大規則第１５１号）

この規則は、平成２３年４月１日から施行する。

附　則（平成２３年度九大規則第１１３号）

この規則は、平成２４年４月１日から施行する。

附　則（平成２４年度九大規則第４号）

この規則は、平成２４年５月１日から施行し、平成２４年３月１４日から適用する。

附　則（平成２４年度九大規則第３５号）

この規則は、平成２４年１２月１日から施行する。

附　則（平成２４年度九大規則第９２号）

１　この規則は、平成２５年４月１日（以下「施行日」という。）から施行する。

２　この規則による改正後の九州大学学位規則（以下「新規則」という。）第２３条の規定は、施行日以後に博士の学位を授与した場合について適用し、同日前に博士の学位を授与した場合については、なお従前の例による。

３　新規則第２４条の規定は、施行日以後に博士の学位を授与された者について適用し、同日前に博士の学位を授与された者については、なお従前の例による。

４　新規則別記様式の規定は、施行日以後に授与する学位記について適用し、同日前に授与する学位記については、なお従前の例による。

附　則（平成２５年度九大規則第１１６号）

１　この規則は、平成２６年４月１日から施行する。

２　平成２６年３月３１日までに九州大学大学院比較社会文化学府に入学した者に授与する学位の名称については、この規則による改正後の九州大学学位規則別表第２の規定にかかわらず、なお従前の例による。

附　則（平成２６年度九大規則第１４１号）

この規則は、平成２７年４月１日から施行する。

附　則（平成２８年度九大規則第５４号）

この規則は、平成２８年１０月１日から施行する。

附　則（平成２８年度九大規則第８５号）

この規則は、平成２９年４月１日から施行する。

附　則（平成２９年度九大規則第　　号）

１　この規則は、平成　　年　　月　　日から施行する。

２　平成３０年３月３１日に九州大学に在学し２１世紀プログラムの課程を履修している者であって、同年４月１日以降も引き続き在学し同課程を履修する者に授与する学位の名称については、この規則による改正後の九州大学学位規則別表第１の規定にかかわらず、なお従前の例による。

別表第１（学士の学位）

学　　部	学　位　の　名　称
文学部	学士（文学）
教育学部	学士（教育学）
法学部	学士（法学）
経済学部	学士（経済学）
理学部	学士（理学）
医学部	学士（医学） 学士（生命医科学） 学士（看護学） 学士（保健学）
歯学部	学士（歯学）
薬学部	学士（創薬科学） 学士（薬学）
工学部	学士（工学）
芸術工学部	学士（芸術工学）
農学部	学士（農学）
共創学部	学士（学術）

別表第２（修士の学位及び博士の学位）

学　　府	学　位　の　名　称	
	修　　士	博　　士
人文科学府	修士（文学）	博士（文学）
地球社会統合科学府	修士（学術） 修士（理学）	博士（学術） 博士（理学）
人間環境学府（臨床実践心理学専攻を除く。）	修士（人間環境学） 修士（文学） 修士（教育学） 修士（心理学） 修士（工学）	博士（人間環境学） 博士（文学） 博士（教育学） 博士（心理学） 博士（工学）
法学府	修士（法学）	博士（法学）

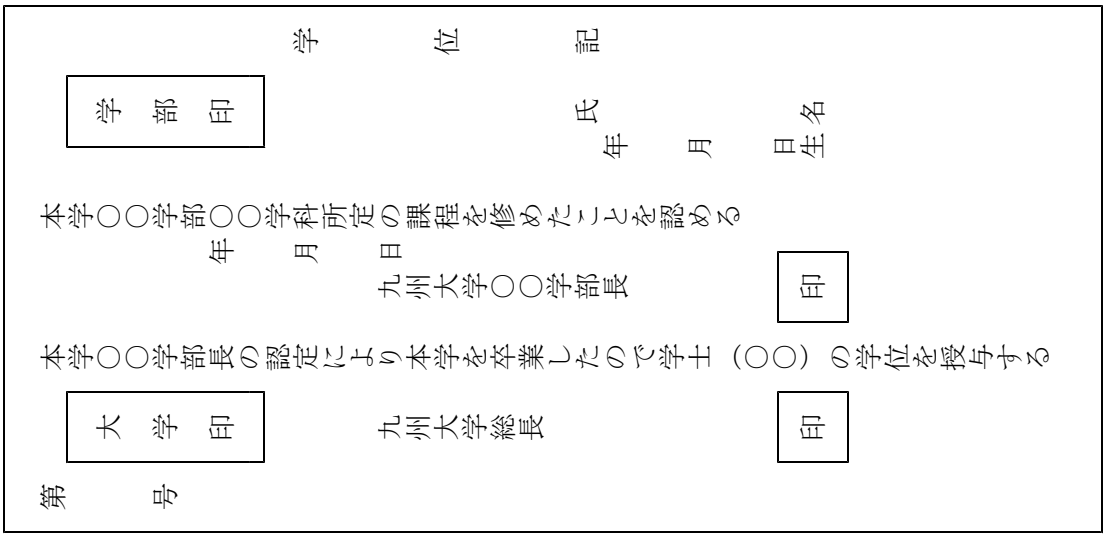
経済学府（産業マネジメント専攻を除く。）	修士（経済学）	博士（経済学）
理学府	修士（理学）	博士（理学）
数理学府	修士（数理学） 修士（技術数理学）	博士（数理学） 博士（機能数理学）
システム生命科学府	修士（システム生命科学） 修士（理学） 修士（工学） 修士（情報科学）	博士（システム生命科学） 博士（理学） 博士（工学） 博士（情報科学）
医学系学府（医療経営・管理学専攻を除く。）	修士（医科学） 修士（看護学） 修士（保健学）	博士（医学） 博士（看護学） 博士（保健学）
歯学府	――――――	博士（歯学） 博士（臨床歯学） 博士（学術）
薬学府	修士（創薬科学）	博士（創薬科学） 博士（臨床薬学）
工学府	修士（工学）	博士（工学）
芸術工学府	修士（芸術工学） 修士（デザインストラテジー）	博士（芸術工学） 博士（工学）
システム情報科学府	修士（情報科学） 修士（理学） 修士（工学） 修士（学術）	博士（情報科学） 博士（理学） 博士（工学） 博士（学術）
総合理工学府	修士（理学） 修士（工学） 修士（学術）	博士（理学） 博士（工学） 博士（学術）
生物資源環境科学府	修士（農学）	博士（農学）
統合新領域学府	修士（感性学） 修士（芸術工学） 修士（工学） 修士（オートモーティブサイエンス） 修士（ライブラリーサイエンス） 修士（学術）	博士（感性学） 博士（芸術工学） 博士（工学） 博士（オートモーティブサイエンス） 博士（ライブラリーサイエンス） 博士（学術）

別表第３（専門職学位）

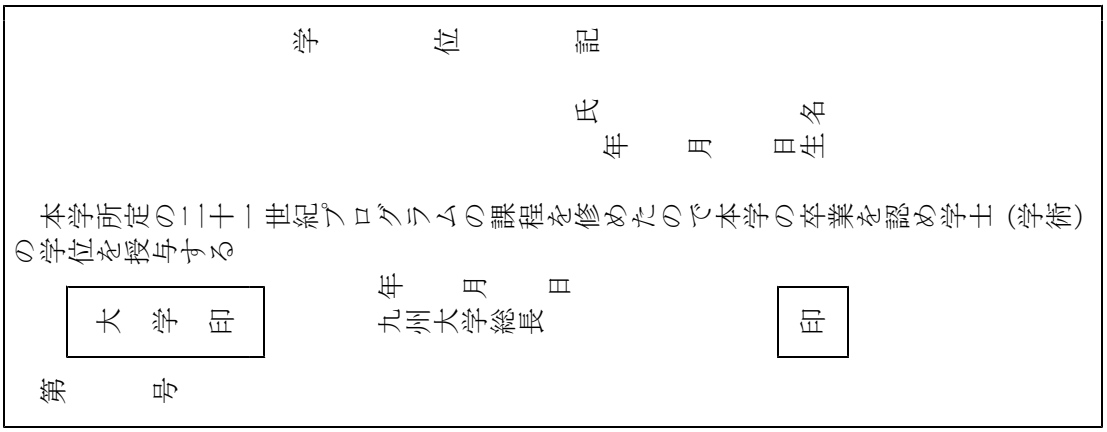
専　門　職　大　学　院	学　　位　　の　　名　　称
人間環境学府実践臨床心理学専攻	臨床心理修士（専門職）
経済学府産業マネジメント専攻	経営修士（専門職）
医学系学府医療経営・管理学専攻	医療経営・管理学修士(専門職)
法科大学院 （法務学府実務法学専攻）	法務博士（専門職）

別記様式

(1) 第３条により本学を卒業した者（２１世紀プログラムの課程を修めて本学を卒業した者を除く。）に授与する学位記の様式



(2) 第３条により２１世紀プログラムの課程を修めて本学を卒業した者に授与する学位記の様式



(3) 第４条第１項により修士課程（共同教育課程を除く。）を修了した者に授与する学位記の様式

学　　位　　記

氏　　名
年　　月　　日生

本学大学院○○学府○○専攻の修士課程を修了したので修士（○○）の学位を授与する

年　　月　　日

九　州　大　学　　印

△修第　　号

備考　△印の箇所は学府名の略号を記入する。

(4)第４条第１項により修士課程（共同教育課程）を修了した者に授与する学位記の様式

学　　位　　記

氏　　名
年　　月　　日生

九州大学大学院○○学府及び□□大学大学院◇◇研究科の◎◎専攻の修士課程を修了したので修士（○○）の学位を授与する

年　　月　　日

九　州　大　学　　印

□　□　大　学　　印

△修第　　号

備考１　△印の箇所は学府名の略号を記入する。
　　２　□印の箇所は共同教育課程を構成する大学（本学を除く。）、◇印の箇所は構成大学の共同教育課程を編成する研究科の名称を記入する。
　　３　◎印の箇所は共同教育課程おける専攻の名称を記入する。

(5) 第４条第２項により修士課程の修了に相当する要件を満たした者に授与する学位記の様式

学　　位　　記

氏　　名
年　　月　　日生

本学大学院○○学府○○専攻において修士課程の修了に相当する要件を満たしたので修士（○○）の学位を授与する

年　　月　　日

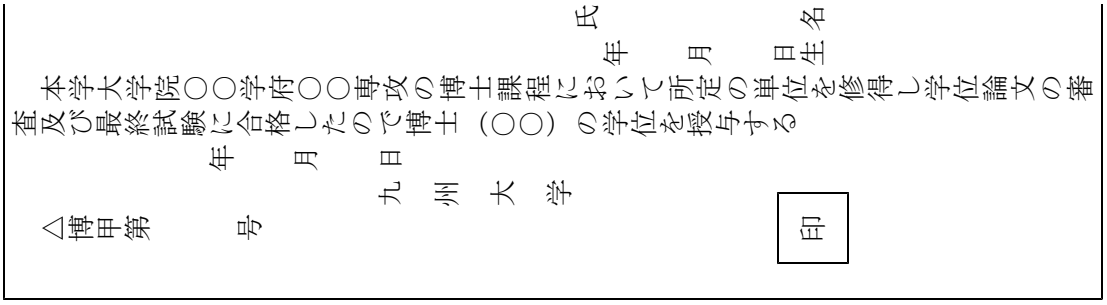
九　州　大　学　　印

△修第　　号

備考　△印の箇所は学府名の略号を記入する。

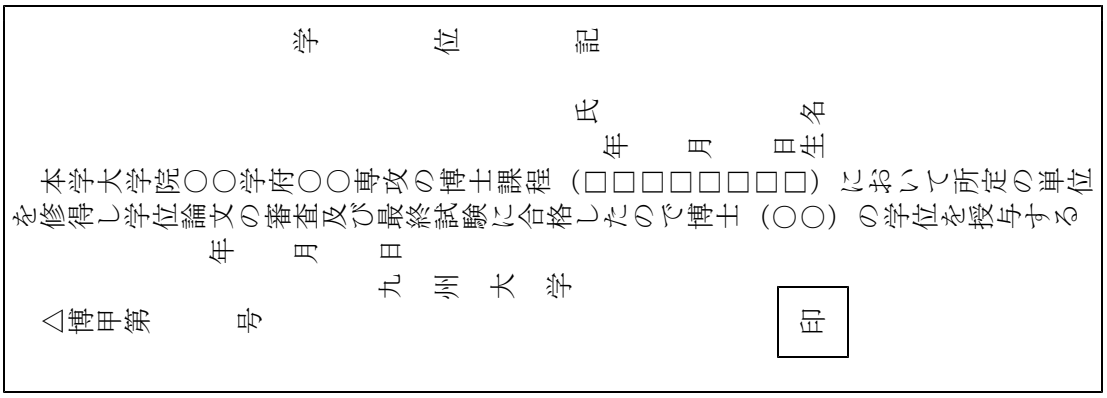
(6) 第５条により博士課程（博士課程教育リーディングプログラムを除く。）を修了した者に授与する学位記の様式

学　　位　　記



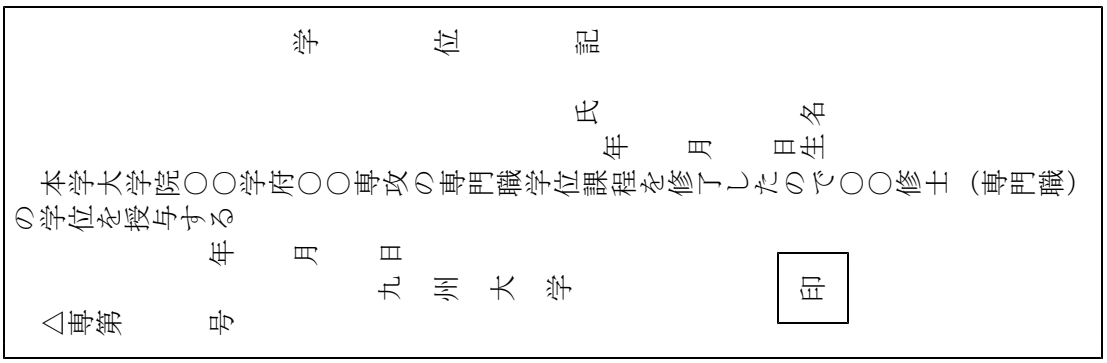
備考　△印の箇所は学府名の略号を記入する。

(7) 第５条により博士課程（博士課程教育リーディングプログラム）を修了した者に授与する学位記の様式



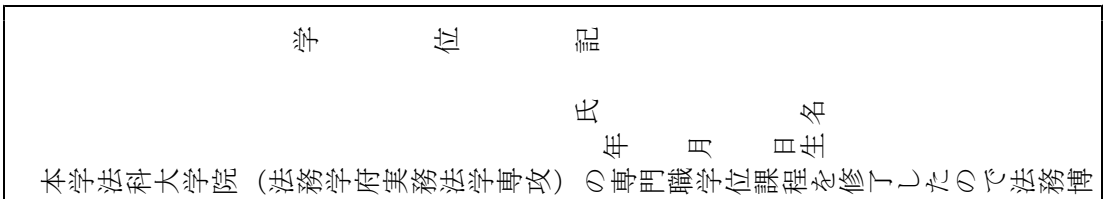
備考　△印の箇所は学府名の略号を記入し、□印の箇所は博士課程教育リーディングプログラムの名称を記入する。

(8) 第６条により専門職学位課程を修了した者（法科大学院（法務学府実務法学専攻）の専門職学位課程を修了した者を除く。）に授与する学位記の様式



備考　△印の箇所は学府名の略号を記入する。

(9) 第６条により法科大学院（法務学府実務法学専攻）の専門職学位課程を修了した者に授与する学位記の様式



士（専門職）の学位を授与する
年　月　日
九州大学　印
法専第　号

（10）第１６条により博士課程を修了した者と同等以上の学力を有することの確認をされた者に授与する学位記の様式

学位記

氏名
年　月　日生

本学に学位論文を提出し所定の審査及び試験に合格したので博士（○○）の学位を授与する

年　月　日
九州大学　印
△博乙第　号

備考　△印の箇所は学府名の略号を記入する。

（11）　学位申請関係書類の様式

ア　第８条第４項による学位論文審査願様式

年　月　日

九州大学総長殿

○○学府○○学専攻
○○年入学
氏名印

学位論文審査願

このたび博士の学位を受けたいので、九州大学学位規則第８条により、下記のとおり関係書類を添え、学位論文を提出いたしますから御審査ください。

記

1　主論文　１編　冊　２通
2　参考論文　編　冊　１通
3　論文目録
4　論文要旨
5　履歴書

イ　第１６条第３項による学位申請書様式

年　月　日

九州大学総長殿

本籍：
氏名：　　印

学位申請書

貴学学位規則第１６条により、博士の学位を受けたいので、下記のとおり関係書類を添え、学位論文を提出いたします。
なお所定の手数料を納入いたします。

記

1　主論文　　１編　　冊　２通
2　参考論文　　編　　冊　１通
3　論文目録
4　論文要旨
5　履歴書

ウ　添付書類の様式
①　論文目録様式

論　文　目　録　　区分 甲乙

氏　　名	

主論文１編〇冊

題　名

（印刷公表の方法及びその時期（未公開の場合は予定を記入））

参考論文　　〇編〇冊

題　名
1
2　（同上）
3

備考

1　論文題名が外国語の場合は、訳を付すること。

2　未公表の論文の場合は、原稿の枚数を記入すること。

3　参考論文が２以上ある場合は、その題名を列記すること。

② 履歴書様式

履　歴　書　　区分 甲乙

（ふりがな） 氏　　名 生　年　月　日	年　月　日生	男 女
本　　籍 （都道府県名）		都　道 府　県
現　住　所	都道府県　区市郡　町村　番地	

学　歴
年　月　日
年　月　日
職　歴
年　月　日
年　月　日
研究歴
年　月　日
年　月　日

上記のとおり相違ありません。
年　月　日
氏　　名　　印

備考

1　学歴は、新制大学卒業以後又は最終学歴を記載すること。

2　研究歴には研究した事項とその期間を明記すること。なお、学歴又は職歴に記載した期間中に研究歴に当たるものがある場合は、それについても記入すること。

九州大学学位規則の一部を改正する規則（案）

平成２９年度九大規則第　　号
制　　定：平成　　年　　月　　日

九州大学学部通則（平成１６年度九大規則第２号）の一部を次のように改正する。

（新）	（旧）
（略） （学位の名称） 第２６条　第２条の学位（法務博士（専門職）を除く。）を授与するに当たっては、専攻分野の名称を付記するものとし、学位の名称は、学士にあっては別表第１のとおりとし、修士の学位及び博士の学位にあっては別表第２のとおりとし、専門職学位にあっては、別表第３のとおりとする。 （略） 別表第１（別紙のとおり） 別表第２・３　（略）	（略） （学位の名称） 第２６条　（同左） （略） 別表第１（別紙のとおり） 別表第２・３　（略）

附　則

１　この規則は、平成　　年　　月　　日から施行する。

２　平成３０年３月３１日に九州大学に在学し２１世紀プログラムの課程を履修している者であって、同年４月１日以降も引き続き在学し同課程を履修する者に授与する学位の名称については、この規則による改正後の九州大学学位規則別表第１の規定にかかわらず、なお従前の例による。

新

別表第１（学士の学位）

学　　部	学位の名称
文学部	学士（文学）
教育学部	学士（教育学）
法学部	学士（法学）
経済学部	学士（経済学）
理学部	学士（理学）
医学部	学士（医学） 学士（生命医科学） 学士（看護学） 学士（保健学）
歯学部	学士（歯学）
薬学部	学士（創薬科学） 学士（薬学）
工学部	学士（工学）
芸術工学部	学士（芸術工学）
農学部	学士（農学）
共創学部	学士（学術）

旧

別表第１（学士の学位）

学　　部	学位の名称
文学部	学士（文学） 学士（学術）
教育学部	学士（教育学） 学士（学術）
法学部	学士（法学） 学士（学術）
経済学部	学士（経済学） 学士（学術）
理学部	学士（理学） 学士（学術）
医学部	学士（医学） 学士（生命医科学） 学士（看護学） 学士（保健学） 学士（学術）
歯学部	学士（歯学）
薬学部	学士（創薬科学） 学士（薬学） 学士（学術）
工学部	学士（工学） 学士（学術）
芸術工学部	学士（芸術工学） 学士（学術）
農学部	学士（農学） 学士（学術）

備考　各学部の専攻分野の名称中「学術」については、２１世紀プログラムの課程を修めて卒業を認定された者を対象とする。

九州大学共創学部規則（案）

平成２９年度九大規則第　　号
制　　定：平成　　年　　月　　日

第１章　総則

第１条　この規則は、九州大学学部通則（平成１６年度九大規則第２号。以下「通則」という。）により各学部規則において定めるように規定されている事項その他共創学部の教育に関し必要な事項を定めるものとする。

第２条　共創学部は、現代社会が直面する問題について、自ら設定した課題に応じて課題解決を構想するにあたって必要なことを学び､他者との協働による学びや留学等による経験を通じて、新たな知や価値を生み出す共創の専門性を身につけたグローバル人材を組織的に養成する。

第３条　学年を分けて、次の２学期とする。

前期　４月１日から９月３０日まで

後期　１０月１日から翌年３月３１日まで

２　前項に定める各学期の授業期間は、別に定める。

第４条　学生の入学に関し必要な事項は、別に定める。

２　学生の再入学、転学部、転入学又は編入学（以下「再入学等」という。）については、収容定員に余裕がある場合又は特に必要と認める場合に、共創学部教授会（以下「教授会」という。）の議を経て、許可することができる。

３　前項の規定により再入学等を許可された者の修業年限、単位修得の方法等については、教授会の議を経て、共創学部長（以下「学部長」という。）が決定する。

第５条　科目等履修生として、本学において一定の単位を修得した後に入学する者の修業年限の通算については、教授会の議を経て、学部長が決定する。

第６条　学生が、通則第２３条の規定に基づき、標準修業年限を超えて一定の期間にわたり計画的に教育課程を履修し卒業することを希望する旨を学部長に申し出たときは、教授会の議を経て学部長が定めるところにより、その計画的な履修を認めることができる。

第７条　共創学部における教育課程は、基幹教育科目及び専攻教育科目により編成するものとする。

２　基幹教育科目に関する授業科目、単位数及び最低修得単位数は、別表第１のとおりとする。

３　専攻教育科目に関する授業科目、単位数及び最低修得単位数は、別表第２のとおりとする。

４　前２項に規定するもののほか、臨時に開設する授業科目は、その都度教授会の議を経て、学部長が別に定める。

５　単位計算の基準は、講義及び演習については１５時間又は３０時間をもって１単位、実験及び実習については３０時間又は４５時間をもって１単位とする。ただし、これによりがたい場合は、教授会の議を経て、学部長が別に定める。

第８条　前条第３項の規定にかかわらず、他学部及び他大学の関連専門科目を、専攻教育科目の科目として履修することができる。

第９条　学生は､各学期の始めに履修しようとする授業科目を学部長に届け出なければならない。

第２章　単位修得及び卒業

第１０条　各授業科目の成績評価は、通則第１７条の３の規定に基づき行うものとする。

第１１条　学部長は、前条の規定により合格の評価を受けた授業科目について、所定の単位を認定する。

第１２条　共創学部の卒業の要件は、共創学部に４年以上在学し、次の各号に定めるところにより、１２４単位以上修得することとする。

(1)　基幹教育科目　４８単位以上

(2)　専攻教育科目７６単位以上

２　教授会は、前項の単位を修得した者について、卒業の審査を行う。

第３章　科目等履修生及び聴講生

第１３条　科目等履修生として入学を志願できる者は、九州大学科目等履修生等規則（平成１６年度九大規則第９１号）第２条第１項の規定に基づき、通則第８条第１項各号に定めるものとする。
第１４条　科目等履修生として入学を志願する者は、所定の願書に履修しようとする授業科目名を記載し、履歴書及び検定料を添えて、学部長に願い出なければならない。
２　学部長は、学生の授業に支障がないときは、前項の願い出があった者について選考の上、学年又は学期の始めに入学を許可することができる。
第１５条　科目等履修生の履修した授業科目については、試験により所定の単位を与える。
２　前項の単位の授与については、第１１条及び第１２条の規定を準用する。
第１６条　学部長は、科目等履修生の修得した単位について、所要の証明書を交付することができる。
第１７条　特定の授業科目を聴講しようとする者は、所定の願書に聴講しようとする授業科目名を記載し、履歴書及び検定料を添えて、学期の始めに学部長に願い出なければならない。
第１８条　聴講生として、聴講を志願できる者は、大学において２年以上の課程を修了した者又はこれと同等以上の学力があると認めた者とする。
第１９条　学部長は、学生の履修に妨げがない場合は、教授会の議を経て、学期又は学年ごとに聴講を許可することができる。
第２０条　聴講生に対しては、単位修得の認定を行わない。ただし、法令等に基づく資格を得るため等特に単位を必要とする者については、単位修得の認定を行うことができる。
２　学部長は、聴講生から請求があるときは、聴講証明書又は単位修得証明書を交付することができる。

第５章　雑則

第２１条　この規則その他の規則等に定めるもののほか、共創学部の校務について必要な事項は、教授会の議を経て学部長が別に定める。

附　則

この規則は、平成　　年　　月　　日から施行する。

別表第１（基幹教育科目に関する授業科目、単位数及び最低修得単位数）

区分				授業科目	単位数	最低修得単位数	合計最低修得単位数
基幹教育セミナー				基幹教育セミナー	1	1	1
課題協学科目				課題協学科目	2．5	2．5	2．5
言語文化科目	言語文化基礎科目	第１外国語（英語インテンシブコース）	英語	Intensive English: Global Issues RW 1	1	１０	１６
				Intensive English: Global Issues RW 2	1		
				Intensive English: Global Issues LS 1	1		
				Intensive English: Global Issues LS 2	1		
				Intensive English: Japanese Issues 1	1		
				Intensive English: Japanese Issues 2	1		
				Intensive English: Academic Issues 1	1		
				Intensive English: Academic Issues 2	1		
				Intensive English: Academic Issues 3	1		
				Intensive English: Academic Issues 4	1		
				学術英語ゼミ・リーディング・リスニング	2	2	
				学術英語ゼミ・ライティング・スピーキング	2		
				学術英語ゼミ・オーラル・コミュニケーション	2		
			日本語	Integrated Courses：Beginners A	1	１２	
				Integrated Courses：Beginners B	1		
				Integrated Courses：Elementary 1A	1		
				Integrated Courses：Elementary 1B	1		
				Integrated Courses：Elementary 2A	1		
				Integrated Courses：Elementary 2B	1		
				Integrated Courses：Pre-Intermediate A	1		
				Integrated Courses：Pre-Intermediate B	1		
				Integrated Courses：Intermediate 1A	1		
				Integrated Courses：Intermediate 1B	1		
				Integrated Courses：Intermediate 2A	1		
				Integrated Courses：Intermediate 2B	1		
				Integrated Courses：Pre-Advanced A	1		
				Integrated Courses：Pre-Advanced B	1		
				Integrated Courses：Advanced A	1		
				Integrated Courses：Advanced B	1		
				Kanji Courses：Elementary 1A	1		
				Kanji Courses：Elementary 1B	1		
				Kanji Courses：Elementary 2A	1		
				Kanji Courses：Elementary 2B	1		
				Kanji Courses：Pre-Intermediate A	1		
				Kanji Courses：Pre-Intermediate B	1		
				Kanji Courses：Intermediate 1A	1		
				Kanji Courses：Intermediate 1B	1		
				Kanji Courses：Intermediate 2A	1		
				Kanji Courses：Intermediate 2B	1		

				Kanji Courses：Pre-Advanced A	1		
				Kanji Courses：Pre-Advanced B	1		
				Kanji Courses：Advanced A	1		
				Kanji Courses：Advanced B	1		
				Speaking Courses：Elementary 2A	1		
				Speaking Courses：Elementary 2B	1		
				Speaking Courses：Pre-Intermediate A	1		
				Speaking Courses：Pre-Intermediate B	1		
				Speaking Courses：Intermediate 1A	1		
				Speaking Courses：Intermediate 1B	1		
				Speaking Courses：Intermediate 2A	1		
				Speaking Courses：Intermediate 2B	1		
				Speaking Courses：Pre-Advanced A	1		
				Speaking Courses：Pre-Advanced B	1		
				Speaking Courses：Advanced A	1		
				Speaking Courses：Advanced B	1		
				Writing Courses：Intermediate 1A	1		
				Writing Courses：Intermediate 1B	1		
				Writing Courses：Intermediate 2A	1		
				Writing Courses：Intermediate 2B	1		
				Writing Courses：Pre-Advanced A	1		
				Writing Courses：Pre-Advanced B	1		
				Writing Courses：Advanced A	1		
				Writing Courses：Advanced B	1		
		第２外国語		ドイツ語Ⅰ	2	4	
				ドイツ語Ⅱ	2		
				フランス語Ⅰ	2		
				フランス語Ⅱ	2		
				中国語Ⅰ	2		
				中国語Ⅱ	2		
				ロシア語Ⅰ	2		
				ロシア語Ⅱ	2		
				韓国語Ⅰ	2		
				韓国語Ⅱ	2		
				スペイン語Ⅰ	2		
				スペイン語Ⅱ	2		
	文系ディシプリン科目			哲学・思想入門	2	8	8
				先史学入門	2		
				歴史学入門	2		
				文学・言語学入門	2		
				芸術学入門	2		
				地理学入門	2		
				社会学入門	2		
				心理学入門	2		
				現代教育学入門	1		
				教育基礎学入門	1		
				法学入門	2		

	政治学入門	2		
	経済学入門	2		
	経済史入門	2		
	The Law and Politics of International Society	2		
理系ディシプリン科目	デザイン思考	1	3．5	8
	情報科学	1．5		
	プログラミング演習	1		
	社会と数理科学	1	4．5	
	微分積分学	1．5		
	微分積分学・同演習A	1．5		
	微分積分学・同演習B	1．5		
	微分積分学・同演習Ⅰ	1．5		
	微分積分学・同演習Ⅱ	1．5		
	線形代数	1．5		
	線形代数学・同演習A	1．5		
	線形代数学・同演習B	1．5		
	数学演習ＩA	1		
	数学演習ＩB	1		
	数学演習Ⅱ	1		
	数理統計学	1．5		
	身の回りの物理学A	1		
	身の回りの物理学B	1		
	物理学概論A	1．5		
	物理学概論B	1．5		
	物理学概論A演習	1		
	物理学概論B演習	1		
	基幹物理学ＩA	1．5		
	基幹物理学ＩB	1．5		
	基幹物理学ＩA演習	1		
	基幹物理学ＩB演習	1		
	物理学の進展	1．5		
	基幹物理学Ⅱ	1．5		
	電気電子工学入門	2		
	原子核物理学	2		
	身の回りの化学	1		
	基礎化学	1．5		
	無機物質化学	1．5		
	有機物質化学	1．5		
	基礎化学結合論	1．5		
	基礎化学熱力学	1．5		
	現代化学	1．5		
	基礎生化学	1．5		
	機器分析学	2		
	生命の科学A	1		
	生命の科学B	1		
	基礎生物学概要	1．5		
	細胞生物学	1．5		

	集団生物学 分子生物学 生態系の科学 地球と宇宙の科学 地球科学 最先端地球科学 宇宙科学概論 図形科学 空間表現実習Ⅰ 世界建築史 日本建築史 建築デザイン コンピュータープログラミング入門 自然科学総合実験（基礎） 自然科学総合実験（発展）	1．5 1．5 1．5 1 1 1 1．5 1．5 2 2 2 2 1 1 1		
サイバーセキュリティ科目	サイバーセキュリティ基礎論	1	1	1
健康・スポーツ科目	健康・スポーツ科学演習	1	1	1
総合科目	アカデミック・フロンティアⅠ アカデミック・フロンティアⅡ 女性学・男性学Ⅰ 女性学・男性学Ⅱ 日本事情 社会連携活動論：ボランティア 社会連携活動論：インターンシップ Law in Everyday Life B バリアフリー支援入門 ユニバーサルデザイン研究 アクセシビリティ入門 人と人をつなぐ技法 コミュニケーション入門 体験してわかる自然科学 健康疫学・内科学から見たキャンパスライフ 心理学・精神医学から見たキャンパスライフ アジア埋蔵文化財学Ａ アジア埋蔵文化財学Ｂ 韓国・朝鮮研究の最前線Ⅰ 韓国・朝鮮研究の最前線Ⅱ グローバル社会を生きるⅠ グローバル社会を生きるⅡ 社会参加のための日本語教育Ⅰ 社会参加のための日本語教育Ⅱ フィールドに学ぶＡ 現代企業分析 現代経済事情	1 1 1 1 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1		

	ことばの科学	1		
	水の科学	2		
	数理医学	1		
	医療倫理学Ⅰ	1		
	医療倫理学Ⅱ	1		
	科学の進歩と女性科学者Ⅰ	1		
	科学の進歩と女性科学者Ⅱ	1		
	糸島の水と土と緑Ⅰ	1		
	糸島の水と土と緑Ⅱ	1		
	命のあり方・尊さと食の連関	2		
	食肉加工の理論と実践 –食への理解を深める-	2		
	先進的植物生産システム概論Ⅰ	1		
	先進的植物生産システム概論Ⅱ	1		
	体験的農業生産学入門	1		
	農のための植物-環境系輸送現象論	1		
	サイバーセキュリティ演習	1		
	セキュリティエンジニアリング演習(サーバー構築編)	1		
	セキュリティエンジニアリング演習(ハードウェア設計編)	1		
	セキュリティエンジニアリング演習（IoTセキュリティ編)	1		
	分子の科学	2		
	Contemporary American Society:A Sociological Introduction	1		
	アイデア・ラボⅠ	2		
	アントレプレナーシップ入門	2		
	九州大学基幹教育科目履修規則(平成２５年度九大規則第１２０号)第３条第２項の規定により定める授業科目			
高年次基幹教育科目	共創発想法	2	5	5
	機械学習と人工知能	1		
	データマイニングと情報可視化	1		
	動的現象の科学	2		
	誘導現象の科学	2		
	科学の歴史 A	1		
	科学の歴史 B	1		
	科学の基礎（哲学的考察）	1		
	脳情報科学入門	1		
	認知心理学	1		
	Brain and Mind	2		
	現代社会Ⅰ	2		
	現代社会Ⅱ	2		
	現代社会Ⅲ	2		
	現代史Ⅰ	2		
	現代史Ⅱ	2		
	現代史Ⅲ	2		

	ＥＵ論基礎−制度と経済−	2		
	金融と経済	2		
	サイバー空間デザイン	2		
	芸術学概論	1		
	音楽・音響論	2		
	デザインと観察	2		
	環境問題と自然科学	2		
	環境調和型社会の構築	2		
	グリーンケミストリー	2		
	自然災害と防災	2		
	生態系の構造と機能Ⅰ	1		
	生態系の構造と機能Ⅱ	1		
	男女共同参画	2		
	ボランティア活動Ⅰ	1		
	ボランティア活動Ⅱ	1		
	インターンシップⅠ	1		
	インターンシップⅡ	1		
	漢方医薬学	1		
	チーム医療演習	1		
	バイオインフォマティックス	2		
	臨床イメージング	1		
	社会と健康	2		
	アクセシビリティマネジメント研究	2		
	地球の進化と環境	2		
	生物多様性と人間文化	1		
	遺伝子組換え生物の利用と制御	2		
	バイオテクノロジー詳論	2		
	平和と安全の構築学	1		
	文化と社会の理論	2		
	東アジアと日本−その歴史と現在−	2		
	法文化学入門	2		
	プレゼンテーション基礎	1		
	レトリック基礎	1		
	技術と倫理	1		
	医療における倫理	2		
	研究と倫理	1		
	社会と倫理	1		
	インフォームドコンセント	1		
	薬害	1		
	臨床倫理	1		
	研究企画・産学官連携特論Ⅰ	1		
	研究企画・産学官連携特論Ⅱ	1		
	リスクマネジメント	2		
	ビジネス統計学	1		
	社会統計学Ａ	1		
	社会統計学Ｂ	1		
	社会調査法ＩＡ	1		

	社会調査法ＩＢ 社会調査法ⅡＡ 社会調査法ⅡＢ 日本国憲法 九州大学基幹教育科目履修規則(平成２５年度九大規則第１２０号)第３条第２項の規定により定める授業科目	1 1 1 2		
上記のほか、備考３に定める授業科目			５．５	５．５

(備考)

１　第１外国語は、４月入学の学生は英語科目を、１０月入学の学生は日本語科目の中から履修しなければならない。

２　第２外国語は、第１外国語で履修する言語を除き、主となる母語以外の言語を履修しなければならない。

３　基幹教育科目のうち、最低修得単位数を超えて修得する授業科目及び他学部の専攻教育科目。ただし、１年次に１単位以上修得すること。

別表第２　(専攻教育科目に関する授業科目、単位数及び最低修得単位数)

区 分		授　業　科　目	単位数	最低修得単位数	合計最低修得単位数
共通基礎科目		共創デザイン思考発想法 フィールド調査法 科学論 データサイエンス基礎 複雑系科学入門 グローバル・ヒストリー グローバル・エシクス	1 1 1 1 2 1 1	8	8
構想科目	エリア横断	デザイン思考プログラミング演習 デザイン思考プロセス演習 ビッグデータ処理 実データ解析技法 物理学の歴史と哲学 地学と生物学の歴史と哲学 科学技術社会論 複雑系科学論 Thermo-Dynamical Properties 量子現象科学論 Python Programing for Analysis	1 1 1 1 1 1 1 2 2 2 2		１６
	エリア基礎	遺伝学と進化 Molecular & Cell Biology Brain & Information	1 1 1	1	
		社会哲学論 言語コミュニケーション論 社会共生論	1 1 1	1	
		地域研究基礎論 政治・経済基礎論 歴史基礎論	1 1 1	1	

		地球の理解 自然環境と社会 自然災害・資源 地球環境実習	1 1 1 1	1	
		レクチャーシリーズ	2	2	2
協働科目		共創基礎プロジェクト 1 共創基礎プロジェクト 2 共創プロジェクト 1 共創プロジェクト 2	2 2 2 2	8	8
経験科目		異文化対応 1 異文化対応 2	1 1	2	2
		海外活動A 1 海外活動A 2 海外活動B 1 海外活動B 2	1 1 2 2		
共創科目	エリア発展科目	進化生物学 発生生物学 Physiology and Behavior Stress and Nutrition Biochemistry Advanced Molecular Biology 病態生理 健康の科学 Cognitive science Bioethics 生命情報科学 システム神経科学 多文化共生の世界秩序 教育倫理学 人間社会研究法 言語とコミュニケーションA 言語とコミュニケーションB 議論と創造のコミュニケーションA 議論と創造のコミュニケーションB 異文化とコミュニケーション メディアとコミュニケーション 先史社会を知るA 先史社会を知るB 国際福祉論 生き方の人類学 国際政治学 比較地域研究 東アジア地域研究 地域生態論 開発経済学	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	２０	２０

		国際関係論 国家と政治 日本経済史 埋蔵文化財から見える世界 地域史 比較史 地球物質科学 大気海洋科学 地球の変動 社会の中の地球科学 地盤学と災害 生物多様性科学 保全遺伝学 環境保全・再生 流域環境学 環境地理学 環境都市政策 東アジアの経済地理学 環境ガバナンス	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 2 1 1 1 1 1 1 1 1		
	ディグリープロジェクト科目	ディグリープロジェクト１ ディグリープロジェクト２ ディグリープロジェクト３	2 5 2	9	9
上記のほか、基幹教育科目（言語文化科目（日本語に関する科目で、外国人留学生に限る。）、総合科目及び高年次基幹教育科目に限る。）又は専攻教育科目（構想科目及び共創科目に限る。）から選択する授業科目並びに他学部の専攻教育科目				１１	１１

設置の趣旨を記載した書類

九　州　大　学

目　　次

１．設置の趣旨及び必要性　・・・・・・・・　１

２．学部・学科等の特色　・・・・・・・・　９

３．学部・学科等の名称及び学位の名称　・・・・・・・・　１４

４．教育課程の編成の考え方及び特色　・・・・・・・・　１５

５．教員組織の編成の考え方及び特色　・・・・・・・・　３９

６．教育方法、履修指導方法及び卒業要件　・・・・・・・・　４１

７．施設、設備等の整備計画　・・・・・・・・　５１

８．入学者選抜の概要　・・・・・・・・　５３

９．海外留学等の具体的計画　・・・・・・・・　５８

１０．管理運営　・・・・・・・・　７０

１１．自己点検・評価　・・・・・・・・　７２

１２．情報の公表　・・・・・・・・　７４

１３．授業内容方法の改善を図るための組織的な取組　・・・・・・・・　７５

１４．社会的・職業的自立に関する指導等及び体制　・・・・・・・・　７６

１．設置の趣旨及び必要性

（１）目的

九州大学は、個別の学問だけでは解決することが困難な、複雑に錯綜した、人類にとっての持続可能な世界を構築するための課題に直面している現代のグローバル社会の状況を踏まえ、これまでの学部では養成することが困難な、新しい人材の育成を目指して「共創学部」を設置する。

学部名称の「共創」とは、一般的に「様々なステークホルダーと一緒になって課題・問題に向き合い、解決へのアイデアを出し合って新たな価値を生み出す（イノベーション）態度・志向性」を表す言葉として用いられているが、共創学部としての「共創」の理念は、『社会的課題を生み出した根源的原因を明らかにし、関連する学問分野の学知をどのように組み合わせて連携させれば解決への新しい道筋が開けるのかの方法論を探求（イノベーション）する』である。

共創学部は、上記の「共創」の理念を踏まえ、現代のグローバル社会が直面している問題に対して、自ら課題を設定してその解決に至るアプローチを「構想」し、異なる専門や知識をもつ多様な人々と「協働」し、これら構想と協働の学びや海外留学等を通じて得られる「経験」という共創のプロセスを繰り返すことを通じ、絶えず変化するグローバル社会において新たな知や価値を生み出す「共創」の専門性を身につけた人材を育成することを目的とする。

共創のプロセスとは、まず、自らの「経験」と新たなことを考える「構想」の関係性において、社会の「問題」に対する切り口として社会的課題を設定することから始まる。続いて、自ら考えた「構想」と他者と共に学び考える「協働」の関係性において、革新的な課題解決策を目指した努力がなされる。さらに、そうした努力の成果として得られた解決策を、他者との「協働」と「経験」の関係性において、問題解決のための社会的コミュニケーションへと展開する。

このような共創のプロセスを繰り返すことにより、より適切な課題が設定され、よりよき解決策が生み出され、より深いコミュニケーションを通じた社会への発信がなされるようになり、最終的に「絶えず変化するグローバル社会において新たな知や価値を生み出す」ことが可能になると考える。

本学部が教育上の目的とする「共創」の専門性とは、このような「構想」「協働」「経験」という共創のプロセスを繰り返すことを通じ、課題を解決するために新たな知や価値を求めて「課題に応じ自ら必要なことを学ぶ」態度や志向性を基盤に、多様な学知を組み合わせて課題解決のための知を創造し、それを社会に活用していく力、すなわち「共創的課題解決力」を育成するための方法論を意味する。

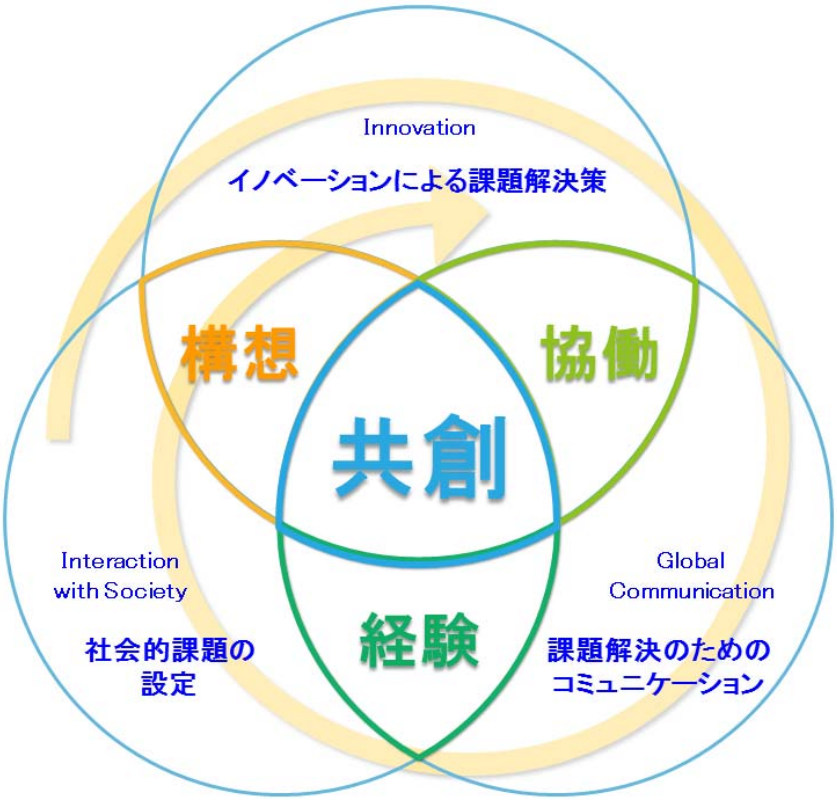


図 1

※図１は本学部の考える「共創」の概念を示したものである。共創のプロセスとは、まず、自らの「経験」と新たなことを考える「構想」の関係性において、社会の「問題」に対する切り口として社会的課題を設定することから始まる。続いて、自ら考えた「構想」と他者と共に学び考える「協働」の関係性において、革新的な課題解決策を目指した努力がなされる。さらに、そうした努力の成果として得られた解決策を、他者との「協働」と「経験」の関係性において、問題解決のための社会的コミュニケーションへと展開する。このプロセスを繰り返すことにより、より適切な課題が設定され、よりよき解決策が生み出され、より深いコミュニケーションを通じた社会への発信がなされるようになり、最終的に「絶えず変化するグローバル社会において新たな知や価値を生み出す」ことが可能となると考えられる。

（２）教育上の目的、養成する人材像

これまでの大学・学部の核を形成してきた専門的な学問は、問題領域ごとに対象を限定し、ディシプリンベースの方法論を精緻化することで多大な業績を挙げてきた。たしかにこのことは疑いえない事実である。しかしながら、かつてないほどグローバル化が進展し、人間の活動が地球環境に影響を与えるまでにいたった現代社会では、これまでのように個々の学問の営みだけでは解決することが困難な、複雑に錯綜した課題が数多く発生し、人類はその課題に立ち向かうことを余儀なくされている。

これらの課題の解決を目指して現代世界では、ローカルからグローバルにいたる様々なレベルにおいて、多様な人々、組織や機関の協力による取組がなされている。そして大学には、そのための新しい知の創造と、課題解決に貢献できる人材の養成が期待されるようになっている。そのため、世界各地の大学では、既存の学問の枠組みを超えた学際的な教育プログラムが以前にもまして実施されるようになっている。例

えば、リベラルアーツ教育を中心としてきたアメリカの大学とは異なり、専門教育を主体としてきたイギリスや中国の大学でも、幅広い学問を学ぶ一般教育の導入がされるようになっている。代表的な例としては 2012 年、キングス・カレッジ・ロンドンで３年制の BA in Liberal Arts が開設され、ユニバーシティ・カレッジ・ロンドンでは The Arts and Sciences (BASc) degree が開設された（３年制と１年の留学を加えた４年制)。また、アメリカでもリベラルアーツ教育をさらに学際的に発展させる試みが始まっており、例えばペンシルバニア大学では、2014 年、単一の専門領域で課題解決することはできないという発想から、具体的な課題解決のために多様な学問やアプローチから取り組む「統合研究プログラム」（Integrated Studies Program）が開設されている。

世界の大学がいまこのような新しい教育に挑戦するようになっている理由は、現代社会がこれまでにない課題に直面しているからに他ならない。いま大学に求められているのは、例えば、生物多様性をめぐる課題に対して、生物学者のみならず人文・社会科学・自然科学の多様な専門の研究者コミュニティや、国際機関から自治体、NPO から民間企業までが協力して解決策を模索しているように、既に得られた知識を相互に関連させ、社会の多様な取組をつなぎながら、課題解決のための新たな知や価値を創出する手法や技能をもった人材の育成である。

共創学部の専門性は、方法論（共創的課題解決力）である。共創学部の方法論と従来のディシプリンベースの方法論との違いを資料１にまとめる。従来の多くの学部では、それぞれのディシプリンベースの方法論（資料１の左のジグソーパズルの各ピース）を発展させ、より大きなピースを形成させることに主眼が置かれているが、共創学部で育む方法論は、各課題の解決に向けて、ディシプリンベースの様々な方法論（ジグソーパズルの各ピース）を有機的かつ最適に連携させる方法論である。ピースを有機的に、かつ最適に連結させることによって、複数の専門分野にまたがる課題の解決が可能となる。そのためには、各ピースの形状および、ピース間の関係性を考慮しながら、最適に組み合わせる必要がある。例えば「越境環境汚染」という課題を事例に説明する。資料２のように、この課題を解決する上で、関連する学問分野にブレイクダウンすると、（１）生化学、健康科学、（２）開発経済学、（３）国際関係論、（４）コミュニケーション学、（５）環境保全・再生学、（６）環境創成学、環境地理学等が課題の要因となり、これらの関係性を考慮しながら、有機的かつ最適に連携させることで課題の解決を図ることになる。

また、前述のとおり、それぞれの学問分野には独自の方法論があるが、それらを学修するためには、ディシプリンベースの知識・技能の修得が必須である。しかしながら、必ずしも、ディシプリンベースの知識・技能を一様に深く修得しなければならない訳ではなく、他者との協働において、不足しているピース（不足しているディシプリンベースの知識・技能及び方法論）の連結を図ることも可能である。

なお、上記を、地球環境問題を例にして考える（後述の資料４に記載している課題の「⑪地球温暖化の影響と適応」が参考例)。この課題を関連する学問分野の科目にブレイクダウンさせると、資料４⑪に記載する授業科目の構成になる。これらのエリアに関連する科目を修得した後に、課題の解決策に取り組む。よって学びの手順として

は以下のようになる。

（１）「エリア基礎科目」の、「Molecular & Cell Biology」、「言語コミュニケーション論」、「社会共生論」、「政治・経済基礎論」、「地球の理解」、「自然災害・資源」、「自然環境と社会」、「地球環境実習」においてディシプリンベースの基礎知識を修得することで、「地球温暖化の影響と適応」という課題を探る上で、課題の要因を理解する。

（２）課題解決策提案に向けての基本７つ道具となる「共通基礎科目（共創デザイン思考発想法、データサイエンス基礎、科学論、複雑系科学入門、フィールド調査法、グローバル・ヒストリー、グローバル・エシクス)」の手法を用いて、（１）で挙げた課題の要因の関係性を考慮して、課題のシステム解析（課題を、関係性を持った要因が集まったシステムとして捉えて解析する）を行う。

（３）エリアのより深い専門的知識（⑪の「エリア発展科目」、「エリア横断科目」及び関連する基幹教育科目）の学修を経て、課題解決策を提案する。

共創学部では、「既に得られた知識を相互に関連させ、社会の多様な取組をつなぎながら、課題解決のための新たな知や価値を創出する手法や技能をもった人材の育成」という社会的要請に応えるべく、多様な人々との協働を通じて持続可能な世界を構築するための課題の解決に取り組むことのできる、すなわち「共創的課題解決力」を有した人材の養成を教育上の目的としているが、このような人材に求められる能力や態度は、次の４つの力に整理することができる。

①「何を学んだから何をする」という専門性を先行させるのではなく、「何をしたいから何を学ぶ」という自らが必要とすることを学修する「能動的学習能力」

②現実の問題に対応するため適切に課題を設定し、既存の学知を組み合わせて解決方策を探究する「課題構想力」

③構想した課題解決方策について他者と議論し、他者の知見や能力をも組み合わせる形で協働し実現可能な解決方策を創造する「協働実践力」

④解決策の実行のために多くの人にその内容を説明し理解と協力を得ることのできる「国際コミュニケーション力」

近い将来において、これまで存在してきた多くの職業がなくなり、いまの子どもたちの多くが現在は存在していない職業につくことが予想されている。そのような激動の時代を前にして、本学部は、共創の専門性、すなわち共創的課題解決力を身につけた人材の養成を目的とする。共創の能力・態度は、どんなに変化が激しい時代になっても決して無用にはならない。このような力を身につけた本学部の卒業生は、多様な分野に活躍の場を見つけ、特にグローバル社会の課題の解決のために、実務、専門、研究の各領域において、次のような人材に成長していくことが期待される。

For Global Life

「国際的・地球的課題に対する解決策をコーディネートして、世界に効果的に情報発信できる実務家」

For Changing Society

「国際社会の課題を解決するために、新しい社会の仕組みや価値の創出をデザイン

する専門家」

For Future Science

「文理を超えた学際的知見を修得し、国内外大学院に進学する、諸科学の境界・学際的領域の研究者」

（３）学位授与の方針

Ⅰ）九州大学教育憲章

九州大学は、教育活動の基本理念を「教育憲章」に掲げ、九州大学が行う教育の目的を「日本の様々な分野において指導的な役割を果たし、アジアをはじめ広く全世界で活躍する人材を輩出し、日本及び世界の発展に貢献する」と定めている。また、九州大学の教育により、秀でた人間性、社会性、国際性、専門性を有する人材を育成するために、４つの原則（人間性の原則、社会性の原則、国際性の原則、専門性の原則）を設け、全学一体となって上記の教育目的及び原則の達成に取り組んでいる。

Ⅱ）本学部の学位授与の方針

本学部は、九州大学教育憲章に定める教育の目的と４つの原則（人間性の原則、社会性の原則、国際性の原則、専門性の原則）を踏まえ、

―「秀でた人間性」を育むために、課題解決のために自ら必要なことを学び続ける「能動的学習能力」

―「秀でた社会性」を身につけるために、課題解決に他者と協力して取り組むことのできる「協働実践力」

―「秀でた国際性」を涵養するために、課題解決のために外国語を用いてコミュニケートできる「国際コミュニケーション力」

―「秀でた専門性」を伸ばすために、課題の原因を探究し課題解決のアプローチを構想する「課題構想力」

これら４つの態度や能力を獲得することをとおして、現実の課題に対する解決策を創造する「共創的課題解決力」を養い育てることを教育の目標とする。本学部は、学部４年の教育を通じて学生がこれらの能力を身につけているかどうかを、以下の学位授与の方針に従って判定し、学位授与の有無を決定する。

○社会から学ぶ姿勢と社会に働きかける姿勢を持ち、絶えず変化するグローバル社会の問題に対応するため課題を適切に設定し、既存の学知を組み合わせて解決方策を構想することができる（能動的学習能力）

○人間、社会、地域、国家、自然、環境、地球などの現状と問題を幅広く理解し、課題に応じて自ら必要なことを学ぶという態度・志向性を有し、複数の学問を組み合わせて、課題の解決に取り組むことができる（課題構想力）

○他者との協働において､自分が果たすべき役割を的確に認識･実行することができ、他者の知見や能力をも組み合わせる形で実現可能な解決方策を探ることができる（協働実践力）

○国家や、社会、文化などの違いを尊重することができ、課題の解決方策の内容とそれを構想した経緯などを、優れた言語運用能力をもって、言葉や文章として他者に明確に伝えることができる（国際コミュニケーション力）

●上記の４つの能力や態度を獲得し、具体的な課題に対して課題解決を構想し、他者と協働して解決策を創造することができる（共創的課題解決力）

以上の５つの方針において述べられた能力や態度を身につけた者に対して学位を授与する。

（４）学部組織と学問分野の関係

（２）で述べた人材養成を可能とするために、本学部では「課題解決型教育」を基盤においた学部組織を編成する。既に述べたように、かつてないほどグローバル化が進展し、人間の活動が地球環境に影響を与えるまでにいたった現代社会では、個々の学問の営みだけでは解決することが困難な、複雑に錯綜した課題が数多く発生しており、大学にはそれらの課題を解決するための新しい知の創造と、課題解決に貢献できる人材の養成が期待されている。このような人材を養成するためには、これまでの学問の専門領域ごとの専門家を養成する大学教育とは異なった仕組みが求められる。なぜなら、現代の複雑に錯綜した課題の解決のためには、特定の専門分野の観点からだけで課題を捉えるのではなく、課題の全体像を把握しながら課題解決に取り組むことが求められているからである。現在、世界各地の大学で、幅広い学問を学ぶ教育プログラムの導入や、多様な学問やアプローチを統合する学際的な学部の開設などの動きがみられるのも、複雑な課題に取り組むことのできる人材の養成を目指してのことであるが、それらの新しい教育組織は、取り組む課題の設定の仕方に応じて多様な形態をとっている。

共創学部で「課題解決型教育」を行っていく上で、全体の共通テーマとして、“地球の持続可能性の諸課題の解決策を探る”を設定した。この地球の持続可能性の課題は、フューチャーアース(Future Earth)として定義され、世界の科学者・科学助成機関・国連機関が力を結集して新しい時代のオールラウンド型の科学を構築しようとする試みである。この課題は、個（要素、個人、組織、国家、地域など）とそれを取り巻く環境（個の集合体、社会、地球など）との関係性の問題と概念化できるが、まず、課題の根源的要因、および要因間の関係性を明らかにしなければならない。そこで、課題の根源的要因のスケール感の違いを考慮（小さいものから大きいものまで）して４つのエリアに大別して、課題に取り組ませるようにカリキュラムを設計した。

具体的には、人間を中心に、それを取り巻く他の生命体との関係を論じる「人間・生命」エリア、次に、個人である人とそれを取り巻く社会との関係を論じる「人と社会」エリア、次に、さらに広げて、「国家と地域」エリア、そして、生命体全てが住む地球とそれを取り巻く環境との関係性を論じる「地球・環境」エリアを設定した。最小の地球構成員である「人間・生命」から「社会」、「国家」、「地球」、「環境」へと広げるスケール感は、課題の根源的要因を探る上で最適なものであり、課題の多くはこのエリアのスケール感で捉えやすい。そして、各エリアには、そのエリアに関連する

ディシプリンベースの授業科目（エリア基礎科目、エリア発展科目）があり、その科目を通じて、専門知識・技能を修得する。また、４つのエリアに共通で、課題解決に向けての着想法、解析法の知識・技能を修得する科目（共通基礎科目、エリア横断科目）も設定する。４つのエリアのディシプリンベースのねらいを以下にまとめる。

○「人間・生命」エリア
　生命の発生・進化や、人間の思考・認知・判断の仕組みを修得する

○「人と社会」エリア
　コミュニケーションや社会共生のあり方を修得する

○「国家と地域」エリア
　国家や地域の歴史、特徴的な経済・社会現象、政治と経済の関係性を修得する

○「地球・環境」エリア
　地球が持つ資源や地球環境の変化による災害、生命が環境に与える影響を修得する

資料３は、４つのエリアおよび各エリアに共通する授業科目とその学問分野としての専門性をまとめたもので、共通基礎科目とエリア横断科目をまとめて、エリア共通というカテゴリーで整理した。

（２）で取り上げた生物多様性の問題が示すように、課題解決への取組は、専門領域を超えた多様な人々の協力によって営まれている。本学部は、このような持続可能な世界を構築するための課題解決のために多様な人々が協力しあう学問の存在構造や協力関係を、学部の内部に作り出し、異なる学問分野が協力しあいながら多角的な視点に立って課題解決に取り組むことを学ぶことのできる教育環境を構築する。そのために本学部は、持続可能な世界を構築するための課題をさまざまなスケール感から探究する多様な学問専門分野の教員を揃えるが、学部組織としては専門分野ごとに教育内容を分ける学科制は採用せず、一学部一学科とする。

学生は、エリア（資料３における４エリアおよびエリア共通）の履修のためのガイドとして、各エリア内やそれぞれのエリア間の関係性を考慮しながら、授業科目を履修する（専攻教育の履修指導については、設置の趣旨を記載した書類の、６．教育方法、履修指導方法及び卒業要件を参照)。各エリアに、異なる学問方法論の授業科目を配置することにより、異なる分野の学知を組み合わせながら課題解決を構想するトレーニングがしやすい環境が整えられ、学生は、多様な学知に習熟しながら、それらを課題解決のために活用する思考法を向上させることができる。

（５）九州大学における共創学部の位置づけ

上のエリアの説明で述べているように、これほど多様な学問分野の教員が協力して実施される学部教育は、これまでに例のない試みである。しかしながら、アクティブラーニングの手法を全国に先駆けて平成 13 年度より導入した 21 世紀プログラム（学部横断型プログラム）を運営してきた九州大学には、組織を超えて多数の教員が協力して実施する教育の経験と実績の蓄積がある。また、教育組織と研究組織を分ける学府・研究院制度によって、共創学部は全学的な支援と協力のもとで設置される。このような教育実績と支援体制があるために、本学部の学生がいかなる課題意識を持つこ

とになっても、共創学部がカバーする学問分野に加えて、九州大学全体の教育基盤でそれを受け止めることにより、適切な指導を与えることが可能となっている。多様な学知に習熟しながら課題解決に取り組むという本学部の教育は、九州大学であればこそ実現可能なのである。

共創学部は、21 世紀プログラムのアクティブ・ラーニング（能動的な学習）の方針は継承しつつも、まず、課題解決に向けての着想法、解析法の知識・技能を修得させ、その上で様々な社会的課題解決策の提案までのプロトコールについて協働学習（TBL; Team Based Learning）を通じ修得させるようにしている。それぞれの課題は、理系、文系と区別されるものではなく、それらを横断するものの見方、考え方を修得させるようにしている。資料４は、取り組む課題例（①～⑫）と、各課題において、課題の要因を探る上で、ディシプリンベースの授業科目（エリア基礎科目、エリア発展科目および、エリア共通（共通基礎科目＋エリア横断科目）とがどのように関連するのかについてまとめたものである。理系、文系とカテゴライズせず、エリア共通の科目（課題解決に向けての着想法、解析法の知識・技能を修得する科目）を用いて、ブレイクダウンしたディシプリンベースの学問分野の知識・技能をどのように連携させることで解決策の提案に至るのかを修得させる。そして、ディグリー・プロジェクト（卒業研究）では、学生自らが設定した課題に対して、課題解決策の提案に取り組むことになる。

他方、共創学部の設置により、九州大学には課題解決のための新しい学部教育の手法が新たに導入されることになる。本学部は九州大学において 12 番目に設置される学部であるが、この学部の教育手法を他の 11 学部へと展開していくことによって、九州大学全体の学部教育を活性化することも大学としての大きな教育上のねらいである。共創学部の創設は、学問と社会との関係が大きく変容する情勢の中で、将来の学部教育のモデルをつくるための九州大学の挑戦である。

２．学部・学科等の特色

（１）カリキュラムの特色

絶えず変化するグローバル社会において新たな知や価値を生み出すためには､｢課題に応じて自ら必要なことを学ぶ｣という態度･志向性を身につけることが重要であり、本学部はその発想に立ってカリキュラムを設計している。

まず､課題に応じて自ら必要なことを学ぶという態度･志向性を身につけるために、特定の専門性に囲い込むのではなく、多様な学問に触れて、文系・理系を横断するものの見方や考え方を身につけられるカリキュラム構造としている。また、異なる知識や得意分野を持つ他者との協働学習を必修とし、グローバル化時代に対応するための語学学習の充実と海外留学も必須化している。さらに、キャンパスにいる学生の多様性を高め、外国人留学生と日本人のクラス・シェアという特徴も持たせている。

これらの特色は､｢何を学んだから何ができる｣という学問分野の専門性が先行する学び方ではなく､｢何をしたいから何を学ぶ｣という課題が先行する学び方ができるようにするために設計されたものである。それは、与えられたカリキュラムを受動的に履修するのではなく、学生自らがカリキュラムをデザインし、履修するというアクティブ・ラーニング（能動的な学習）による教育を 15 年以上にわたって実践してきた 21 世紀プログラムで培ったノウハウを活用したものである。

<table>
<tr><td colspan="3">幅広い学問分野の知識や技能と、学問を課題解決に生かすアクティブな態度と思考法を獲得</td><td>課題解決の方法等を、複数の学問分野の知識や技能を組み合わせて構想</td></tr>
<tr><td colspan="3">何をしたいから何を学ぶ</td><td>課題の解決に取り組む</td></tr>
<tr><td>１年次</td><td>２年次</td><td>３年次</td><td>４年次</td></tr>
</table>

Ⅰ）文理融合型のカリキュラム

本学部の学生は、卒業研究として「自らが設定した課題に対して、課題解決策の提案」に取り組むため、個々の学問を深く学ぶための分野ごとのまとまりをもったカリキュラムではなく､｢持続可能な世界を構築するための課題の存在する領域｣を「人間・生命」､「人と社会」､「国家と地域」､「地球・環境」という４つのエリアに区分し、それぞれのエリアに文系・理系を問わず様々なディシプリンベースの授業科目を配置する構成としている。これにより、学生は課題の根源的要因が存在するエリアの授業科目を履修することで、課題の解決に必要となる複数の専門分野の考え方や理論、学問としての射程を学ぶ。そのため、文系の科目、理系の科目というような授業科目の設計ではなく、人文科学、社会科学、自然科学の既存学問分野を横断・融合する内容で授業科目を設計し、学部４年間を通じて、文系マインド・理系マインド、多様な方法論を身につける学び方ができるカリキュラムとしている。

Ⅱ）協働学習

課題を設定してその解決に至るアプローチを「構想」し、異なる専門や知識をもつ

多様な人々と「協働」し、これら構想と協働の学びと海外留学を通じて得られる「経験」という共創のプロセスを繰り返すという学びのサイクルを作るため、配布資料を題材としてグループ討論により解決すべき課題を発見し、必要な知識や情報源を学習者が個々に収集・修得して共有し合う協働学習（Team-Based Learning, TBL）による「共創基礎プロジェクト」「共創プロジェクト」を必修授業として取り入れる。

共通の課題について個々人の知識や得意とする分野を生かしつつ、他者と協働して課題の解決に向けた結論を得るプロセスを経ることで、実際の課題解決に必要な手法や技法、自らの知識の生かし方、自らと他者の意識の組み合わせ方や結論を得る上で必要な合意形成等を学ぶとともに、そのためにもっとも重要となる共創のための態度と志向性を涵養する。

Ⅲ）徹底した語学教育

国内外の多様な人々とともに持続可能な世界を構築するための課題の解決に取り組んでいくためには、議論を重ね意見を共有するコミュニケーションが必要となるが、それを可能とする基盤が優れた英語運用能力である。

このため、本学部では、英語の運用能力のスキルアップに重点を置き徹底した英語教育を行う。このために置かれる「英語インテンシブコース」は、習熟レベル・能力別のクラス編成を行い、週複数回開講や２コマ連続授業、初年次への集中的な配置など、科目間に連関性を持たせ、一定期間集中的に英語を学ぶことで、開講言語に関わらず必要な内容を学ぶことを可能とする英語力を身につける。

また、世界の時事問題（Global Issues）や日本の時事問題（Japanese Issues）に関する教材を用いることにより、現代の課題を認識し、常に最新の情報をグローバルな視野で入手する姿勢を身につけさせるほか、内容の要約や自分の考えを書く力、発表する力、学術的な英文を読み、学術英語の語彙や表現を身につけさせるとともに、ディスカッションやディベートを通じて、集団で意見を共有し、形成するプロセスを学ばせる。

なお、外国人留学生に対して行われる日本語教育についても、受講者のレベル別・技能別に編成された総合コース、漢字コース、会話コース、作文コースを用意し、学生はそれぞれの能力にあわせてコースを履修する。

Ⅳ）留学の必須化

絶えず変化するグローバル社会において多様な分野で活躍する人材を育成するため、海外大学への留学、または海外インターンシップ等（以下、留学等という）を義務付け、全ての学生が国内とは異なる文化や背景の中で学び活動する経験を積み、異なった環境的・歴史的・文化的背景や価値観を認識し、国際的な理解や知識を拡大しながら、言語能力（語学力）とコミュニケーション力の向上を図っていく。共創学部において、留学等によって、「経験科目」の単位として認定する活動は、共創学部の理念とする共創の趣旨に基づいて、①課題解決のために必要となる複数の専門分野の考え方や理論の修得と、②社会的課題とその解決に向けた社会の取組やその歴史の調査の２つとする。したがって、短期の語学留学は、本学部が義務とする留学等の範疇には含

めない。留学の目的、位置づけ、および留学の手続きを、留学前、留学中、留学後に分けてまとめたものを、資料７に記す。

学生個々のニーズに対応するため、「交換留学」、「海外インターンシップ等」、「短期留学・研修」等の複数のパターン（詳細は、９．海外留学等の具体的計画の（１）海外留学を参照）を想定し、海外大学との学生交流協定等の活用や、本学が実施する短期留学・研修プログラム、海外の教育機関等が実施する短期研修プログラムへの参加など、多様な留学プログラムを確保しつつ、留学の準備や報告を共通で行うことで、互いの経験を共有する。これにより、自らの留学経験のみならず、他の学生の留学経験からも学ぶこととなり、共創のために必要となる経験の学びが深まるように構築している。

なお、本学部に所属する外国人留学生については、日本の九州大学で学ぶことですでに留学を経験している状態にあり、経験科目で求める経験を積んでいること、またビザ等の渡航手続きを考慮して、海外大学への留学を義務付けることはしない。外国人留学生の「経験科目」としての単位の修得は、原則として、日本国内企業へのインターンシップを実施することにより対応する。

Ⅴ）留学生とのクラス・シェア

本学をはじめ多くの大学で外国人留学生の数は増加傾向にあるが、実際には、日本人と外国人留学生は別のトラックで学ぶ機会が多い。その中で共創学部では、Ⅲ）で触れた「日本人への英語教育の徹底と外国人留学生への集中的な日本語教育」により、日本人学生と外国人留学生が共に学ぶ環境を構築する。これは文部科学省の「スーパーグローバル大学創成支援」事業（タイプA）に、「戦略的改革で未来へ進化するトップグローバル研究・教育拠点創成（SHARE-Q：Strategic Hub Area for top-global Research and Education, Kyushu Univ.)」が採択され、大学全体で世界的研究・教育拠点（グローバル・ハブ・キャンパス）の形成を目指す構想の一環でもあり、大学全体の教育の国際化を加速させる役割を担うとともに、今後の大学における外国人留学生の受け入れに一石を投じるものである。

九州大学では、日本人学生と外国人留学生を一定割合で入居させ、日常的に交流できる環境を提供する学生寄宿舎としてドミトリー１、ドミトリー２、ドミトリー３及び伊都協奏館を設け、計１２０６室を有しているほか、学生寄宿舎全体で１５４４室を用意しており、外国人留学生を受け入れるのに十分な住環境を整えている。特に、ドミトリー３は、必ず日本人学生と外国人留学生のルームシェアを義務づけている。なお、本年度の学生寄宿舎の入居率は８５％程度となっており、共創学部に入学する外国人留学生については、伊都キャンパスの学生寄宿舎で十分受け入れ可能である。

また、九州大学では外国人留学生・研究者サポートセンターを設置して外国人留学生の支援を行っており、在留資格認定証明書の交付申請支援などの入国までの手続支援、空港から宿舎までのシャトルバス運行サービスなどの入国直後の支援及び留学生相談室による様々な内容の相談への対応などの滞在中の支援など、外国人留学生が安心して留学生活を送ることができる充実した支援体制を整えている。

さらに、伊都キャンパス学生寄宿舎では、個人の生活を尊重しつつ、人間関係を構

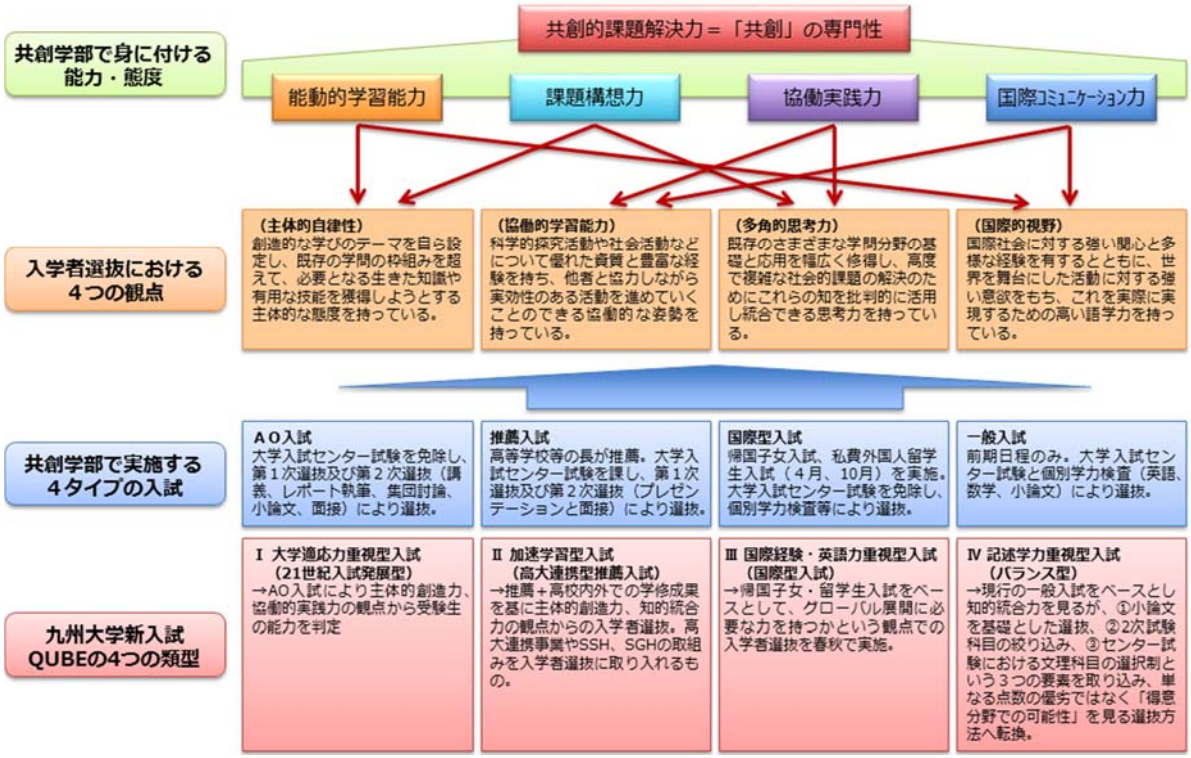
築し、多様な学生と交流できるよう配慮するため、人間関係の核となるよう、各学生寄宿舎に「ドミトリーリーダー」という学生寄宿舎での生活経験のある学生を配置しており、受け入れ時のサポートだけではなく、日常的な生活相談もできる体制を整えている。

（２）入試の特色

九州大学は、入学志願者の能力・意欲・適性等を多面的・総合的に評価する全学的な入試改革に向けて、「入学者選抜改革の実施に向けた提言」（平成 27 年 11 月）を取りまとめ、これまで蓄積してきた 21 世紀プログラムの AO 入試等の選抜方法のノウハウを基礎に、４類型の新入試（「大学適応力重視型入試」「加速学習型入試（高大連携型推薦入試)」「国際経験・英語力重視型入試（国際型入試)」「記述学力重視型入試（バランス型)」）の実施を打ち出している（「九州大学新入試 QUBE」)。

このような方針に基づいて、共創学部では「知識を問う入試から、能力を見極める入試への転換」を掲げて、「AO 入試」「推薦入試」「一般入試」「国際型入試」の４種類の選抜を実施する。これは、「知識・技能のみならず、思考力・判断力・表現力や主体性・多様性・協働性を持つ多様な学生を選抜し、これらの能力を更に発展させる（大学初年次教育である）基幹教育との接続をより円滑なものとする」ことを目的として行われるものであり、これまでの 21 世紀プログラムで実施してきた AO 入試の実績を背景としつつ、大学が掲げる４つの入試を先導的に実施するものである。このように、多種類の選抜試験を実施することによって、学部内の多様性を高め、個性の強い学生が協働して学ぶことにより、より高い教育効果の実現を目指している。

また、すべての選抜類型において「志望理由書」を提出させて受験生の資質を丁寧に判定する、九州大学では初となるセンター試験利用型の推薦入試を導入して新しい高大接続の道を開拓する、一般入試前期に「小論文」を導入してこれまでにない思考力・表現力をみる試験を実施する、英語能力試験（TOEFL 等）のスコアを大学入試センター試験「英語」の得点に換算して利用する等、アドミッション・ポリシーにそった受験生選抜のために数々の新しい試みを取り入れている。



「共創学部における入学者選抜」

（３）高等教育の機能分類に基づく特色

九州大学のこれまでの特色ある教育研究の取組を踏まえ、中央教育審議会から平成17年１月に出された答申「我が国の高等教育の将来像」の「３ 高等教育の多様な機能と個性・特色の明確化」の中で示されている７つの大学としての機能のうち、新たに設置する共創学部は「幅広い職業人養成」、「総合的教養教育」、「社会貢献機能」の役割を担う。

本学部では、「何を学んだから何ができる」という専門性が先行する学びではなく、「何をしたいから何を学ぶ」という課題解決を主軸とする学びにより、学問を課題解決に生かすよりアクティブな態度と思考法を身につけ、「能動的学習能力」、「課題構想力」、「協働実践力」、「国際コミュニケーション力」の４つの能力や態度を獲得し、「共創的課題解決力」を身につけた「総合的教養を備えた幅広い職業人」を養成することが可能となる。

また、本学部で育成する人材は、グローバル化する社会において、国家や社会、文化の境界を越えた人々と協働して、課題解決の共創に取り組むことのできるグローバル人材となるため、「社会貢献」の役割を担うことが期待される。

３．学部・学科等の名称及び学位の名称

（１）共創学部共創学科

これまでの大学・学部の核を形成してきた専門的な学問は、問題領域ごとに対象を限定し､ディシプリンベースの方法論を精緻化することで多大な業績を挙げてきたが、現代社会はこれら個別の学問だけでは解決することが困難な、複雑に錯綜した、社会的課題に直面している。これらの課題を解決するために、研究者コミュニティや、国際機関から自治体、NPO から民間企業までが協力して、既に得られた知識を相互に関連させ、社会の多様な取組をつなぎながら、解決策を模索している。

本学部は、このような社会的な課題に対する社会の取組や学問の存在構造を、学部の教育構造の中に取り入れる。その中で学ぶ学生は、現代社会が直面している問題に対して、課題を設定してその解決に至るアプローチを「構想」し、異なる専門や知識をもつ多様な人々と「協働」し、これら構想と協働の学びや海外留学を通じて得られる「経験」をもとに、課題解決策を生み出す「共創」の専門性を身につける。本学部は、このような「共創」の専門性を身につけた人材を育成することを目的として設置されるため､「共創学部」という名称を採用する。

また、本学部は共創的課題解決力を身につけるために、上記のように、社会で行われている課題解決の取組を学部内部に導入し、社会的課題を解決するために多様な学問が併存している構造を学部内部に作り出す。そのため、専門分野ごとに教育内容を分かつ学科制は採用せず、一学部一学科とするため､「共創学部共創学科」とする。

（２）学士（学術）

本学部の学生が最終的に学ぶ対象は「社会的課題の解決方策」であり、人文科学・社会科学･自然科学の既存学問分野を横断･融合する内容の授業科目を履修しながら、学部４年間をかけて、課題解決のために必要な複数の専門分野の考え方や理論に習熟していくという特徴をもつ学部であるため､学位に付記する専攻分野の名称を｢学術」とし、授与する学位の名称を「学士（学術)」とする。

（３）英語名称

学部：School of Interdisciplinary Science and Innovation

学科：Department of Interdisciplinary Science and Innovation

学位：Bachelor of Arts and Sciences

本学部の名称である｢共創学部」を英語に直訳することはできない｡そこで､｢共創」の趣旨である､｢多様な学知を組み合わせて、課題解決となる新しい知識や価値を生み出すこと」を訳して、英語名称とした。１（２）でも述べたように、近年、海外の大学でも学際教育を謳う学部や教育プログラムが設置されるようになってきており、カナダのマクマスター大学では 2016 年に School of Interdisciplinary Science という名称の学部が設置されている。School of Interdisciplinary Science and Innovation という名称の学部はないが、英語名称は､｢関連学問領域の融合・連携を基軸とする課題解決方策の創出（イノベーション)」に由来している。なお、この英語名称については，本学部の趣旨を理解している本学の外国人教員が名称の妥当性を検証しており、興味をかきたてられる名称であるとの回答を得ている。

４．教育課程の編成の考え方及び特色

（１）教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）

現代社会が直面している問題に対して、自ら課題を設定してその解決に至るアプローチを「構想」し、異なる専門や知識をもつ多様な人々と「協働」し、これら構想と協働の学びや海外留学を通じて得られる「経験」をもとに、グローバル社会において新たな知や価値を生み出す「共創」の専門性を身につけた人材を育成するため、本学部の教育課程編成・実施の方針を次のとおり定める。

◯アクティブ・ラーナーへの成長（能動的学習能力）

課題解決のために自律的に学び続けるアクティブ・ラーナーへの成長に必要となる＜学びの基幹＞と､幅広い視野と考え方の修得につながる教育を｢基幹教育科目」で提供する。

◯問題の現状とその根本的原因を探求し、将来あるべき姿を構想できる力の養成（課題構想力）

現代社会が直面している問題について、課題解決のための着想や多様な学問のアプローチを学ぶための教育と、自分で設定した課題に対して、解決のために必要となる様々な知識・技能を深めるための教育を「基幹教育科目」､「共通基礎科目」､「構想科目」､「共創科目」で提供する。

◯課題解決に他者と協働して取り組むことのできる能力や態度の獲得（協働実践力）

TBL を用いて、グループでさまざまな領域の複合した課題に取り組ませることにより、個々人の知識や得意とする分野を生かしつつ、他者と協働して課題の解決に向けた手法や技法を学ぶための教育を「基幹教育科目」､「協働科目」で提供する。

◯多様な文化を認識した上で外国語を通じてコミュニケートできる力の向上（国際コミュニケーション力）

様々な経験を通じて、異なる歴史的・文化的背景や価値観があることを認識し、言語能力（語学力）とコミュニケーション力の向上を図る教育を「基幹教育科目」､「協働科目」､「経験科目」で提供する。

「経験科目」では、海外大学等への一定期間の留学等を学生に義務付け、異なる文化の中で学び活動する機会とし、異なる歴史的・文化的背景や価値観の存在を実感させるとともに、国際理解・知識の拡大を図る。なお、外国人留学生に対しては、日本から海外に出る留学を義務付けず、原則として、日本国内企業等におけるインターンシップを経験科目の単位として認定する。

●上記の４つの力をもとに、自ら設定した課題に対して、新たな課題解決策を創造する能力の養成（共創的課題解決力＝「共創」の専門性）

自分で設定した課題に対して、これまでに得た知識を組み合わせて課題の解決策の創造に取り組むための教育を「共創科目」の「ディグリープロジェクト」で提供する。

共創的課題解決力は、各課題の解決に向けて、ディシプリンベースの様々な方法

論（資料１におけるジグソーパズルのピース）を他者との協働を通じて有機的かつ最適に連携させることにより課題解決に創造的に取り組む力である。

（２）カリキュラムの特色

絶えず変化するグローバル社会において新たな知や価値を生み出すためには、「課題に応じ自ら必要なことを学ぶ」という態度・志向性を身につけることが必要で、「何を学んだから何ができる」という学問分野の専門性が先行する学び方ではなく、「何をしたいから何を学ぶ」という課題が先行する学び方ができるカリキュラムの編成としている。このようなカリキュラムの編成にあたっては、与えられたカリキュラムを受動的に履修するのではなく、学生自らがカリキュラムをデザインし、履修するというアクティブ・ラーニング（能動的な学習）による教育を 15 年以上にわたって実践してきた 21 世紀プログラムで培ったノウハウを活用している。

<table>
<tr><td colspan="3">幅広い学問分野の知識や技能と、学問を課題解決に生かすアクティブな態度と思考法を獲得</td><td>課題解決の方策を、複数の学問分野の知識や技能を組み合わせて構想</td></tr>
<tr><td colspan="3">何をしたいから何を学ぶ</td><td>課題解決に取り組む</td></tr>
<tr><td>１年次</td><td>２年次</td><td>３年次</td><td>４年次</td></tr>
</table>

また、課題解決に必要となる複数の専門分野の考え方や理論、学問としての射程を学ぶために、文系の科目、理系の科目というような授業科目の設計ではなく、人文科学、社会科学、自然科学の既存学問分野を横断・融合する内容で授業科目を設計し、学部４年間を通じて、文系マインド・理系マインド、多様な方法論を身につける学び方ができるカリキュラムとしている。

本学部のカリキュラムは大きく、全学共通の基幹教育と学部独自の専攻教育からなっている。まず、全学共通の初年次教育である基幹教育は、新たな知や技能を創出し、未知な問題を解決していく上での幹となる「ものの見方・考え方・学び方」を学び、生涯にわたって自律的に学び続けるアクティブ・ラーナーの育成を目指し、初年次－学部－大学院－社会へと続く学びの成長を支持する幹を作る体系的なカリキュラムとして機能している。

２年次から本格的にはじまる学部専攻教育は、基幹教育で修得する協働学習や学問分野の基礎的な知識を基盤に、課題解決のために共通に必要な素養となる「共通基礎科目」、課題解決のための多様な学問のアプローチを学ぶ「構想科目」、高度な協働実践を行う「協働科目」、海外留学など異文化を経験する「経験科目」等からなる。アクティブ・ラーナーを育成する基幹教育と、様々な学知を課題解決へとつなげる技能や態度を養成する専攻教育が一体となって、本学部のカリキュラムを構成する。

以上の４年間のカリキュラムの学修を通じて学生は、課題の解決に向けてディシプリンベースの様々な方法論（資料１におけるジグソーパズルのピース）を他者との協働を通じて有機的かつ最適に連携させる共創の方法論を修得し、課題解決に創造的に取り組む共創的課題解決力を養う。

（３）カリキュラムを構成する科目

［基幹教育］

①「基幹教育科目」

ⅰ）基幹教育セミナー

ⅱ）課題協学科目

ⅲ）言語文化科目

ⅳ）文系ディシプリン科目

ⅴ）理系ディシプリン科目

ⅵ）サイバーセキュリティ科目

ⅶ）健康・スポーツ科目

ⅷ）総合科目

ⅸ）高年次基幹教育科目

ⅹ）その他

［専攻教育］

②共通基礎科目

③構想科目

ⅰ）エリア基礎科目

ⅱ）エリア横断科目

ⅲ）レクチャーシリーズ

④協働科目（共創基礎プロジェクト、共創プロジェクト）

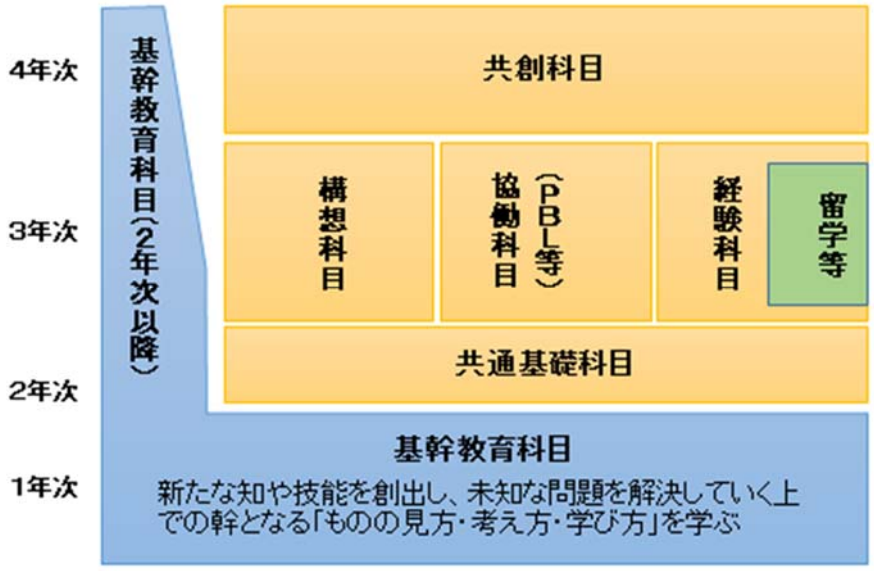
⑤経験科目（留学等）

⑥共創科目

ⅰ）エリア発展科目

ⅱ）ディグリープロジェクト１、２、３

【基幹教育科目と専攻教育科目の位置づけ】



基幹教育

①基幹教育科目

九州大学の学部学生の全てが履修する基幹教育科目は、基幹教育セミナー、課題協学科目、言語文化科目、文系ディシプリン科目、理系ディシプリン科目、サイバーセキュリティ科目、健康・スポーツ科目、総合科目及び高年次基幹教育科目で構成され、初年次に 36 単位以上を目安に修得し、2 年次以降も専攻教育と連動しながら計 48 単位を修得させる。

ⅰ）基幹教育セミナー

基幹教育セミナーは、異なる専門分野を目指す学生及び教員との対話や、それを踏まえた自己省察を通じて、生涯にわたる自立的な成長を支える＜学びの基幹＞を育むことを目標とする科目で、必修科目として「基幹教育セミナー」の 1 単位の修得を課す。

ⅱ）課題協学科目

課題協学科目は、現代社会が抱える様々な課題や問題の中から授業テーマを設定し、そのテーマに対する文系・理系にまたがる複数の学問的なアプローチを提示して、文系・理系学部混成のグループで議論しあう協働学習により、幅広い視野と考え方を修得させるとともに、思考力を高め、他者と協働しながら自律的に学習を進めることのできる姿勢を身につけることを目標とする科目で、必修科目として「課題協学」の 2．5 単位の修得を課す。

ⅲ）言語文化科目

言語文化科目は、外国語で目標の課題を達成することができる言語運用能力の習得を目標とする科目で、共創学部の学生に対しては、この科目の枠組みの中で、第 1 外国語の英語の運用能力のスキルアップに重点を置く徹底した英語教育を行い、必修科目として 12 単位の修得を課す。

このために置かれる「英語インテンシブコース」は、他学部の学生が学ぶ一般学術目的の英語ではなく、共創学部の学生のための特別な英語プログラムであり、習熟レベル・能力別のクラス編成を行い、週複数回開講や 2 コマ連続授業、初年次への集中的な配置など、科目間に連関性を持たせ、一定期間集中的に英語を学ぶことで、開講言語に関わらず必要な内容を学ぶことを可能とする英語力を身につける。

英語インテンシブコース （共創学部の学生）	一般学術目的の英語 （他学部の学生）
○習熟レベル・能力別でクラス編成 ○英語を読む・聴く・書く・話す能力の学習に加え、世界の時事問題（Global Issues）や日本の時事問題（Japanese	○特別なクラス編成は行わない ○英語を読む・聴く・書く・話す能力の基礎を学習

Issues）を教材にするなど、現代の課題を意識し、常に最新の情報をグローバルな視野で入手する姿勢を涵養 ○12 単位を修得	○７～８単位（平均修得単位数）

１年次の前半は、世界の時事問題（Global Issues）に関する英語のニュースを読み聞きし、内容の要約や自分の考えを書く力、自分で調べたことや考えたことを発表する力の育成と、学術的な英文を読み、学術英語の語彙や表現を身につけることを目標に、学術的な内容を書く力、発表する力を育成する。

１年次の後半は、日本の時事問題（Japanese Issues）に関する英語ニュースを読み聞きし、日本についての客観的な視座を得ることを目標に、その内容についての説明の追加、要約、自分の意見などを英文でまとめる力、発表する力を育成する。

世界や日本の時事問題を英語で学ぶことにより、現代の課題を認識し、常に最新の情報をグローバルな視野で入手する姿勢を身につけるとともに、ディスカッションやディベートを通じて、集団で意見を共有し、形成するプロセスを学ぶ。

「英語インテンシブコース」の習熟レベル・能力別のクラス編成は、入学後早い段階で実施する TOEFL-ITP のテスト結果を活用して行い、同一の教員が複数の授業を担当するように配置するなど、科目間に連関性を持たせる。

【英語インテンシブコース】

授業科目名	単位	配当年次
Intensive English: Global Issues RW 1	1	１年次 第１クォーター
Intensive English: Global Issues LS 1	1	
Intensive English: Academic Issues 1	1	
Intensive English: Global Issues RW 2	1	１年次 第２クォーター
Intensive English: Global Issues LS 2	1	
Intensive English: Academic Issues 2	1	
Intensive English: Academic Issues 3	1	１年次 第３クォーター
Intensive English: Japanese Issues 1	1	
Intensive English: Academic Issues 4	1	１年次 第４クォーター
Intensive English: Japanese Issues 2	1	
学術英語ゼミ	2	２年次

なお、留学生について行う日本語教育についても、留学生センターが開講するレベル別・技能別の日本語コースを受講させ、能力レベルに応じて、総合コース、漢字コース、会話コース、作文コースから選択履修させ、12 単位の修得を課す。レベル判定テスト（文法・読解・聴解・漢字・会話テスト）により、適合するクラスを決定する。

【日本語】

コース区分／レベル	総合コース：Integrated Courses	漢字コース：Kanji Courses	会話コース：Speaking Courses	作文コース：Writing Courses
入門：Beginners	○	○	－	－
初級 1：Elementary 1	○		－	－
初級 2：Elementary 2	○	○	○	－
中級入門：Pre-Intermediate	○	○	○	－
中級 1：Intermediate 1	○	○	○	○
中級 2：Intermediate 2	○	○	○	○
上級入門：Pre-Advanced	○	○	○	○
上級：Advanced	○	○	○	○

また、第１外国語の履修以外に、第２外国語として、初修外国語（日本語、ドイツ語、フランス語、中国語、ロシア語、韓国語、スペイン語）から４単位の修得を課す。（主となる母語以外の言語（第１外国語で履修する言語を除く。）を選択履修。）

なお､初修外国語について､外国語検定試験で一定以上の成績を有している場合は、成績を評価し、単位として認定する。

ⅳ）文系ディシプリン科目

文系ディシプリン科目は、文系の主要な学問分野のディシプリンの基礎を一通り体得できるように、豊かな教養に裏付けられた深い専門性を伸ばすために必要な文系の基礎的な科目で構成し、多様な文系的思考に触れることで学問的教養を獲得し、他の学問分野の方法・視点・ものの見方によって、自らの学びを相対化し視野を広げることを目標とする科目で、開講される科目の中から８単位以上の修得を課す。

【開講科目】

哲学・思想入門、先史学入門、歴史学入門、文学・言語学入門、芸術学入門、地理学入門、社会学入門、心理学入門、現代教育学入門、教育基礎学入門、法学入門、政治学入門、経済学入門、経済史入門、The Law and Politics of International Society

ⅴ）理系ディシプリン科目

理系ディシプリン科目は､「教養としての自然科学（教養系）[数学、物理学、化学、生物学、地球科学、感性・デザイン学、情報科学]」､「専門としての自然科学（専門基礎系）[数学、物理学、化学、生物学、地球科学、感性・デザイン学、情報科学、自然科学総合実験]」､「リメディアルからはじめる自然科学（リメディアル系）[物理学、化学､生物学]」という教養･専門基礎･リメディアルの３つを意識した科目で構成し、興味と問題意識を持ち、自ら考えることで、知っているだけではない本当に使える知

識あるいは知識を使える力を育てることを目標とする科目で、開講される科目の中から８単位以上の修得を課す。なお、「デザイン思考」、「情報科学」、「プログラミング演習」の３科目については、必修とする。

【開講科目】

区　　分	科　　目　　名
数学	社会と数理科学、微分積分学、微分積分学・同演習Ａ、微分積分学・同演習Ｂ、微分積分学・同演習Ⅰ、微分積分学・同演習Ⅱ、線形代数、線形代数学・同演習Ａ、線形代数学・同演習Ｂなど
物理学	身の回りの物理学Ａ、身の回りの物理学Ｂ、物理学概論Ａ、物理学概論Ｂ、物理学概論Ａ演習、物理学概論Ｂ演習、基幹物理学ＩＡ、基幹物理学ＩＢ、基幹物理学ＩＡ演習、基幹物理学ＩＢ演習、物理学の進展など
化学	身の回りの化学、基礎化学、無機物質化学、有機物質化学、基礎化学結合論、基礎化学熱力学など
生物学	生命の科学Ａ、生命の科学Ｂ、基礎生物学概要、細胞生物学、集団生物学など
地球科学	地球と宇宙の科学、地球科学など
感性・デザイン	デザイン思考、図形科学、空間表現実習Ⅰなど
情報科学	情報科学、プログラミング演習など
自然科学総合実験	自然科学総合実験（基礎、発展）

vi）サイバーセキュリティ科目

サイバーセキュリティ科目は、コンピュータをインターネットに接続している状態をはじめ、パソコンを持ち運んでいる時、あるいは銀行オンラインシステムの利用時などにおけるサイバーセキュリティに対する基礎的な知識を学び、学生が今後 IT 社会を生き抜くために必要となるサイバーセキュリティ力を向上させることを目的とする授業科目で、必修科目として「サイバーセキュリティ基礎論」の１単位の修得を課す。

vii）健康・スポーツ科目

健康・スポーツ科目は、主に身体運動やスポーツを媒介として、生活の基本となる健康・体力及びそれらを高めるための方法に関する正しい知識を学び、様々な社会的要求に応えるために必要とされる心理社会的能力、いわゆるライフスキルを習得・向上させることを目標とする授業科目で、必修科目として「健康・スポーツ科学演習」の１単位の修得を課す。

viii）総合科目

総合科目は、文系から理系、純粋から応用にわたる幅広いテーマと多種多様な授業形態（講義形式、演習形式、セミナー形式、集中講義形式、フィールド形式など）によって開講し、授業科目の履修を通じて得られる多様な知識の修得、知識に至る考え方の過程の経験や、他者との交流から得られる創造的・批判的な思考方法の涵養を目標とする科目で、自身が今後の学修に必要と考える科目を選択履修する。

ix）高年次基幹教育科目

高年次基幹教育科目は、２年次以上の学生を対象に、専攻教育の学修による知識の深化を背景として生まれてくる、より多様で幅広い教養への興味、専門性の一歩先にある有用な知識やスキルに対するニーズを満たす科目で構成し、専門性を契機として生まれるアクティブな学びの広がりと深まりを促すことを目標とする科目で、開講される科目の中から５単位以上の修得を課す。共創学部の学生に対しては、推奨科目として、「共創発想法」（２単位）、「機械学習と人工知能」（１単位）、「データマイニングと情報可視化」（１単位）、「科学の歴史 A」（１単位）、「動的現象の科学」（２単位）、「誘導現象の科学」（２単位）をあげ、これらの科目の受講を推奨している。

x）その他

上記のｉ～ixに定める単位数とは別に、言語文化科目、文系ディシプリン科目、理系ディシプリン科目、総合科目、高年次基幹教育科目から、自身が今後の学修に必要と考える科目を選択履修し、５．５単位以上の修得を課す。

専攻教育

本学部の専攻教育は、基幹教育で修得する学問分野の基礎的な知識をはじめ、豊かな教養へとつながる知識、技能を基盤としつつ、学部専攻教育を実施するカリキュラムで構成し、基幹教育と連動しながら計 76 単位を修得させる。

絶えず変化するグローバル社会において新たな知や価値を生み出すためには、「課題に応じ自ら必要なことを学ぶ」という態度・志向性を身につけることが必要で、「何を学んだから何ができる」という学問分野の専門性が先行する学び方ではなく、「何をしたいから何を学ぶ」という課題が先行する学びとするため、地球の持続可能性の問題を、「人間・生命」「人と社会」「国家と地域」「地球・環境」というスケール感の異なる４つの「エリア」に区分し、学生は各エリア内やそれぞれのエリア間の関係性を考慮しながら、「課題に応じ自ら必要なことを学ぶ」という考えのもと、エリア関連の授業科目を履修していく。

【各エリアの学問分野の専門性】

○「人間・生命」エリア

生命の発生・進化や、人間の思考・認知・判断の仕組みを修得する

○「人と社会」エリア

コミュニケーションや社会共生のあり方を修得する

○「国家と地域」エリア

国家や地域の歴史、特徴的な経済・社会現象、政治と経済の関係性を修得する

○「地球・環境」エリア

地球が持つ資源や地球環境の変化による災害、生命が環境に与える影響を修得する

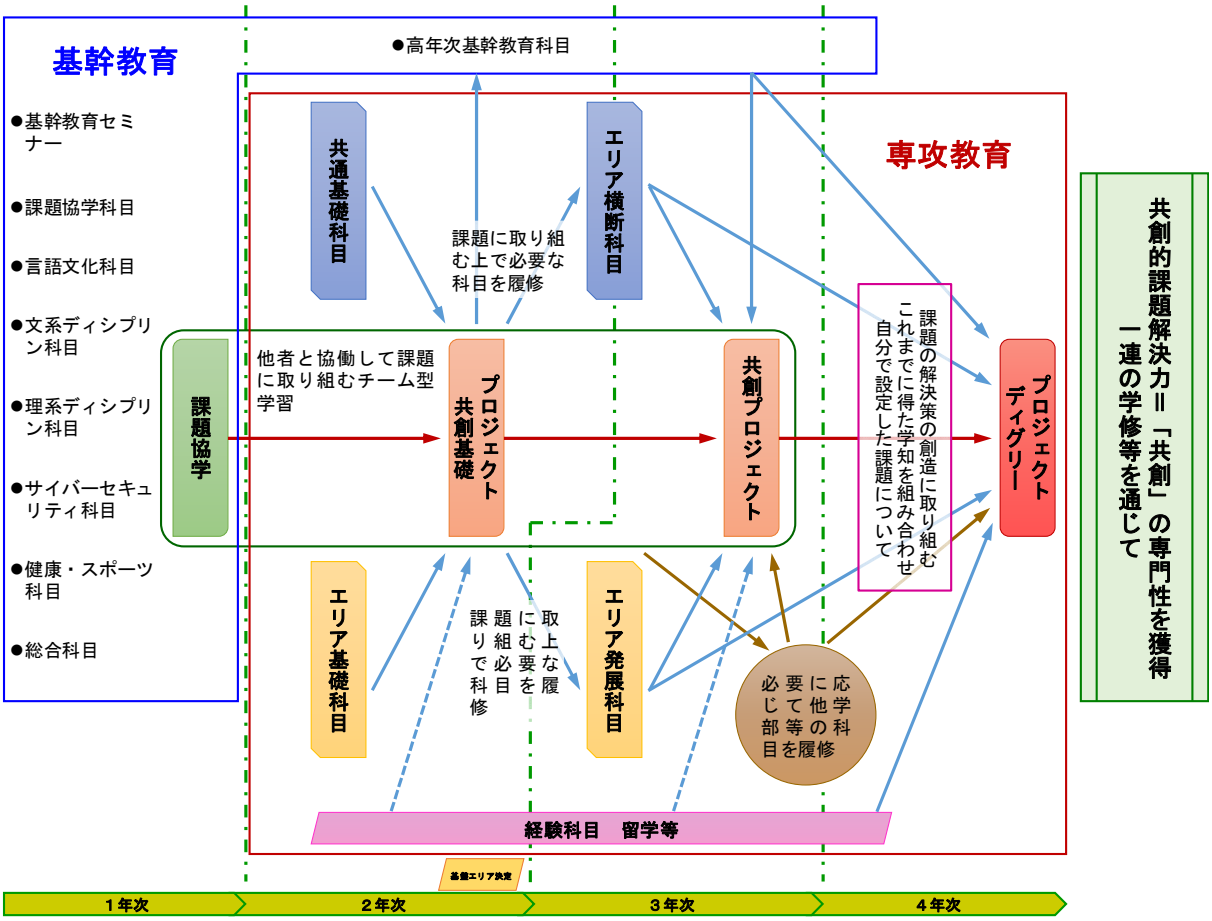
他者との協働による学びを専攻教育の中心軸に置き、２年次では、「共創」に取り組んでいくための共通の知識・技能の基礎を学ぶ「共通基礎科目」と、社会的課題が存在する領域として設定した「人間・生命」「人と社会」「国家と地域」「地球・環境」の４つのエリアに関する基礎的な知識・技能を学ぶ「エリア基礎科目」を履修し、得られた知識・技能を活用して、グループで協働科目「共創基礎プロジェクト」に取り組む。

この「共創基礎プロジェクト」での学びを通じて、２年次の後半から、課題に取り組んでいく上で自身が必要と考える知識・技能を「エリア横断科目」と「エリア発展科目」から学ぶ。２年次終了時に、４つのエリアから学生がより深い知識・技能を学ぶ上で基盤となるエリア（基盤エリア）を１つ選択する。この基盤エリアに属するエリア基礎科目をすべて履修しなければならない（「人間・生命」エリア、「人と社会」エリア、「国家と地域」エリアは、３科目（各１単位)、「地球・環境」エリアは、実習を含む４科目（各１単位))。３年次では、これまでに得られた知識・技能を活用して、グループで協働科目「共創プロジェクト」に取り組み、この「共創プロジェクト」での学びを通じて、さらに必要と考える知識・技能を、共創学部で開講する科目をはじめ、高年次基幹教育科目や、他学部等で開講される科目から学んでいく。

４年次は、異なる専門分野を背景にもつ、主指導教員と副指導教員の２名から必要な指導を受けつつ、自らが設定した課題について、課題解決の方策を複数の学問分野の知識・技能を組み合わせて構想し、ディグリープロジェクト（卒業研究）として課題解決に取り組んでいく。

なお、エリアとディグリープロジェクトは次のような関係で結ばれている。エリアとは「課題認識のアプローチの方向性・課題設定のための領域」であり、学生は自分が取り組みたい課題を見つけるために、エリアの区分を参考にしながら、授業科目を選択していく。このように、エリアに即した授業を選択することによって、学生は自分が取り組みたい課題を徐々に明確にしていく。そして、最終的にはディグリープロジェクトで自分が取り組む課題を自ら設定し、卒業研究に取り組むことになる。その際、学生は、各々の課題を研究するための複数の学問を、同じエリア内から選ぶこともできるし、別のエリアから選択することもできるようにする。同じエリアであっても、異なる方法論の選択が可能である。また、異なるエリアで課題認識のアプローチが異なっても、異なるアプローチを組み合わせることによって、それまでに気づかれなかった問題の究明がなされうる。例えば、「人と社会」エリアの主要なアプローチであるコミュニケーションだけでなく、「人間・生命」エリアの主要なアプローチである生体の機能を組み合わせて考えることは、より一層深いレベルで人間を解明することが可能となるだろう。本学部では、課題解決のために学ぶ複数の学問のうち、主として学ぶ学問をメインと呼び、それに組み合わせるために副次的に学ぶ学問をサブと名

付け、ディグリープロジェクトを通じて、メインとサブによる多角的な思考力を養うことを目指している。



②共通基礎科目

共通基礎科目は、現代社会が直面している問題に対して、自ら課題を設定してその解決に至るアプローチを「構想」し、異なる専門や知識を持つ多様な人々と「協働」していく上で必要となる共通の知識・技能の基礎を身につけるため、基礎的な科目として、「共創デザイン思考発想法」、「データサイエンス基礎」、「科学論」、「複雑系科学入門」、「フィールド調査法」、「グローバル・ヒストリー」、「グローバル・エシクス」を開講し、全ての科目を必修科目とし、８単位の修得を課す。

なお、共通基礎科目は、課題解決のための基本７つ道具として位置づけられるが、同時に構想科目・共創科目で学ぶ科目の導入としての位置づけも与えられている。「共創デザイン思考発想法」は「デザイン思考プログラミング演習」などへ、「データサイエンス基礎」は「ビッグデータ処理」などへ、「科学論」は「科学技術社会論」などへ、「複雑系科学入門」は「複雑系科学論」などへ、「フィールド調査法」は「生き方の人類学」や「国際関係論」などへ、「グローバル・ヒストリー」は「地域史」「比較史」などへ、「グローバル・エシクス」は「多文化共生の世界秩序」などへ、それぞれより高度な内容の科目へとつながる。

③構想科目

構想科目は、課題を解決するために求められる課題構想力を伸ばす、次の科目から構成される。

ⅰ）エリア基礎科目

課題解決のための着想や、多様な学問のアプローチを学ぶため、社会的課題が存在する領域として設定した４つのエリアに関する基礎的な知識・技能を修得する科目

ⅱ）エリア横断科目

共通基礎科目（「共創デザイン思考発想法」「データサイエンス基礎」「科学論」「複雑系科学入門」）で身につけた知識・技能の向上を図り、課題解決のために方法として活用できるようにする科目

ⅲ）レクチャーシリーズ

先端的な研究分野や企業等で活躍する講師陣による講演やワークショップからなる科目

「エリア基礎科目」と「エリア横断科目」の２つの科目区分で開講される選択必修科目の中から 16 単位の修得を課す。「レクチャーシリーズ」は、必修科目として２単位の修得を課す。

④協働科目（共創基礎プロジェクト、共創プロジェクト）

協働科目は、自ら課題を設定してその解決に至るアプローチを「構想」し、異なる

専門や知識をもつ多様な人々と「協働」し、これら構想と協働の学びと海外留学を通じて得られる「経験」というプロセスを繰り返すという学びのサイクルを作るための科目として、配布資料を題材としてグループ討論により解決すべき課題を発見し、必要な知識や情報源を学習者が個々に収集・修得して共有し合う TBL を取り入れる。

１年次の「課題協学科目」で培った、問題を発見し、解決を目指して学び続ける態度と技能の向上を図り、共通の課題について個々人の知識や得意とする分野を生かしつつ、他者と協働して課題の解決に向けた結論を得るプロセスを経ることで、実際の課題解決に必要な手法や技法、自らの知識の生かし方、自らと他者の意識の組み合わせ方や結論を得る上で必要な合意形成等を学ぶとともに、将来にわたり共創の理念を実現させるためにもっとも重要となる態度と志向性を涵養する。「共創基礎プロジェクト」と「共創プロジェクト」の２つの授業科目を開講し、必修科目として各４単位、計８単位の修得を課す。

「共創プロジェクト」は、「共通基礎科目」や「エリア基礎科目」などでの学修内容を活かし、課題の発見から課題解決に至るまでのアプローチの方法を、ＴＢＬ方式で学ぶ科目である。「共創プロジェクト」で取り上げる課題は、資料４にあるように、12の課題例やそれに関連するテーマであり、学生のディグリープロジェクトに直接結びつくものではないが、本科目を履修したのち、学生は、本科目で身につけた課題解決のためのプロトコールを活かし、学生自らが設定する課題に関して、当該課題の解決に必要であると考える科目を履修しながら、ディグリープロジェクトに取り組むこととなる。

【標準的な開講方法】

○105 名の学生を、１クラス 25～26 名に振り分け、クラスごとに５～６名でグループを編成。

○１つのシナリオで２コマ連続×週２回×４週に亘って行い、１クォーターで２つのシナリオにより履修。

	１コマ目	２コマ目	
第１週	［セッション１］ グループ討論を通して、テーマに関する配布資料から学習課題を抽出。	グループ作業 （情報収集）	振り返り
第２週	［セッション２］ 各自の調査結果をグループで共有した後、新たな配布資料から学習課題を抽出。	グループ作業 （情報収集）	振り返り
第３週	［セッション３］ 各自の調査結果をグループで共有した後、テーマ１に関する学習をグル	グループ作業 （発表準備）	振り返り

	ープ討論により整理。		
第４週	成果発表・討論 振り返りとピア評価	［総括］ 全クラス合同で担当教員との質疑応答を実施	

【到達目標】

○グループの一員としての責任を自覚し、学習活動に積極的に参加する。
○課題に対して、さまざまな視点からのアプローチを検討する。
○他者の意見や説明を論理的かつ建設的に吟味し評価する。
○信頼性の高い Web サイト等を活用して必要な情報を収集する。
○ホワイトボードを活用しながら調査結果を分かり易く説明する。
○学修成果を e ポートフォリオシステム（Mahara）に適切に記録する。
○メンバーの学修状況を客観的かつ建設的に評価して e-Learning システムを通じてフィードバックする。

【テーマ例】

科目等	共創基礎プロジェクト１	共創基礎プロジェクト２	共創プロジェクト１	共創プロジェクト２
	２年次第５Q（春学期）	２年次第６Q（夏学期）	３年次第９Q（春学期）	３年次第 11Q（秋学期）
テーマ１	少子高齢化と福祉政策	都市部における人口集中と過疎化	生物多様性の保全と持続可能な利用	越境環境問題
テーマ２	人工知能と社会	自然災害への対応と減災社会	水、エネルギー、食糧問題	気候変動の影響と適応

※　「共創基礎プロジェクト」と「共創プロジェクト」のテーマ設定と、シナリオ作成は、各エリアから選ばれた各４名（合計８名）の教員が行い、担当する教員の選定にあたっては、それぞれの専門分野が異なるように配慮する。

　また、取り扱われる課題は、異なる学問からアプローチすることができ、その課題に取り組むことで､幅広いもの見方や考え方を学ぶことのできる課題とする。担当する教員は､TBL の考え方に基づいて､知識を教授する教員としてではなく、協働学習のファシリテーターとしての役割を担う。

その他の取り組む課題例は、資料４を参照。

⑤経験科目

学んだことを実際に身につけるためには、具体的な経験が何よりも重要で、グローバルな問題や課題の解決に取り組むには、世界の人びとと実際に触れ合う経験と、課題解決のために実際に考えたことを人に伝える経験が不可欠であるため、経験科目としての科目化を図り、期間や経験に応じて単位を認定する制度を設ける。

海外大学等への一定期間の留学等を学生に義務付け、異なる文化の中で学び活動する経験を通じて、広く異なる歴史的・文化的背景や価値観の存在の認識と、国際理解・知識の拡大に加え、言語能力（語学力）とコミュニケーション力の向上を図る。

必修科目の「異文化対応１」で、異文化理解、留学と就職、日本人としてのアイデンティティ、危機管理など留学前に学ぶべき基礎的な知識等を修得させ、留学等を行った学生に対しては、留学等に関するレポートの提出と発表を義務付け、内容等を総合的に判断し、「異文化対応２」の単位として認定する。

留学に関する単位認定については、学生が留学先で自由に取得した単位を認定するものではない。低年次であればチューターと、高年次であれば修学ナビゲーター又は指導教員と、留学前に、共創学部の留学の目的を踏まえたものとなるよう、「学修計画書」の内容について綿密な指導を受けつつ、留学前に計画を立て、当該計画の内容に応じて「海外活動Ａ、Ｂ」のいずれか、又はその両方を履修させることとしている。また、単位認定にあたっては、当該学修計画に沿った学修が行われているかなどを判定した上で成績評価をし、単位認定することとしており、学修内容の質は十分に担保できる。

「海外活動Ａ１・Ａ２・Ｂ１・Ｂ２」は、経験科目である。経験科目は何を経験するかだけでなく、どれだけの量の経験をするかが重要である。そこでこの科目は、まずは経験の量という点から、１単位科目である「海外活動Ａ」と２単位科目である「海外活動 B」に分けている。資料７も示したように、共創学部での留学の位置づけは、異なる文化の中で活動する経験を積み、広く異なる歴史的・文化的背景や価値観の存在を認識し、①課題解決のために必要となる複数の専門分野の考え方や理論の修得、または、②社会的課題とその解決に向けた社会の取組やその歴史の調査を行うという２つの目的から、「課題解決を考えていく上で必要な知識・技能の獲得」を目的とする「１」と、「課題解決を考えていく上で必要な調査活動等」を目的とする「２」に分けている。

活動目的 / 活動例	課題解決のための知識・技能の獲得	課題解決のための調査活動等
①講義等（15 時間以上） ②インターンシップ等（30 時間以上） ③調査活動（30 時間以上）	海外活動Ａ１（１単位） ① ②（技能の取得が目的の場合）	海外活動Ａ２（１単位） ②（現場を調査することが目的の場合） ③

④講義等（30 時間以上） ⑤インターンシップ（60 時間以上） ⑥調査活動（60 時間以上）	海外活動 B１（２単位） ④ ⑤（技能の取得が目的の場合）	海外活動 B２（２単位） ⑤（現場を調査することが目的の場合） ⑥

なお、この他、海外の大学において取得した授業科目のうち、「エリア発展科目」と教育内容の同等性が認められる授業科目については、留学先大学の成績評価方法等（評語や単位の意味、ナンバリング体系）を確認できる資料を提出させ、成績評価基準に照らし合わせて妥当と判断できる場合に、期間や内容等に応じて３０単位を上限に単位として認定する。

⑥共創科目

共創科目は、基幹教育科目から専攻教育科目の学修を通じて獲得した知識や技能をもとに、学生自身が取り組むべき課題を自ら設定し、その解決策の探究のために必要となる知識や技能を向上させ、共創的課題解決力を涵養する科目であり、「エリア発展科目」と「ディグリープロジェクト１，２，３」からなる。

ⅰ）エリア発展科目

設定した課題に対して、必要な知識を深める授業科目。

ⅱ）ディグリープロジェクト１，２，３

学生自らが課題を設定し、これまでに学んだ知を組み合わせて、課題解決のための新しい知や価値の創出に取り組んでいく科目であるディグリープロジェクト（卒業研究）として、学生自身が設定した課題について、その課題の解決策を異なる２つの学問分野からアプローチさせるため、３年次の４クォーター目（冬学期）の「ディグリープロジェクト１」で、２つのゼミ（学生が卒業研究に取り組む上で必要と考える学問分野を専門とする教員が開講する講義・演習等）を受講し、４年次進級時に、卒業研究として取り組む解決すべき課題と、課題解決に取り組む上で必要と考える２つの分野（メイン、サブ）を設定し、卒業研究（課題）の指導を希望する主指導教員及び副指導教員と想定する教員から、設定した課題等についての審査を受ける。

４年次の１クォーター目（春学期）までは、課題解決に取り組む上で必要と考える２つの分野（メイン、サブ）の変更は可能とし、２クォーター目（夏学期）以降は、卒業研究に本格的に取り組み、設定した解決すべき課題に対する解決方法等を成果として卒業論文等にまとめる。

４年次の４クォーター目（冬学期）に実施する成果発表会で、卒業研究の内容について、英語で発表することを義務付ける。

事項等	３年次	４年次			
	第 12Q	第 13Q	第 14Q	第 15Q	第 16Q

	(冬学期)	(春学期)	(夏学期)	(秋学期)	(冬学期)
メインとする学問分野を専門とする教員(主指導教員)	○	○	主指導教員として 学生の卒業研究を指導		
サブとする学問分野を専門とする教員(副指導教員)	□	□	副指導教員として 学生の卒業研究を指導		

「エリア発展科目」で開講される選択必修科目の中からは20単位の修得を課し､「ディグリープロジェクト１」､「ディグリープロジェクト２」､「ディグリープロジェクト３」は必修科目として、それぞれ2単位、5単位、2単位、合計9単位の修得を課す。

共創学部は、現代のグローバル社会が直面している問題に対して、自ら課題を設定してその解決に至るアプローチを「構想」し、異なる専門や知識をもつ多様な人々と「協働」し、これら構想と協働の学びや海外留学等を通じて得られる「経験」という共創のプロセスを繰り返すことを通じ、絶えず変化するグローバル社会において新たな知や価値を生み出す｢共創｣の専門性を身につけた人材を育成することを目的とし、それを実現するための専攻教育の教育課程を設計している。専攻教育の教育課程と履修プロセスをまとめたものを、資料９に示す。この履修プロセスを確実に履行できるように、エリア共通（共通基礎科目とエリア横断科目を合わせたカテゴリー）と４つのエリアのエリア基礎科目、エリア発展科目、および協働科目の共創基礎プロジェクト１、同２、共創プロジェクト１、同２に対して以下に示す履修条件を設定した。

（１）　共創的課題解決力の基礎的な知識･技能を修得するエリア共通の共通基礎科目（７科目）は、必修とする。

（２）　高年次基幹教育科目（学部2年次以降で修得する基幹教育科目）のうち、「共創発想法」「機械学習と人工知能」「データマイニングと情報可視化」「科学の歴史A」「動的現象の科学」「誘導現象の科学」は、推奨科目に指定する。

（３）　エリアに対する学生の自主性を重んじるために、２年次終了時に、４つのエリアのうち､少なくとも１つのエリアを選択（このエリアを基盤エリアと定義）し、この基盤エリアの「エリア基礎科目」の全ての科目を必修とする（地球・環境エリアは、３科目（各１単位）に加えて､「地球環境実習」（１単位）を合わせて４単位、その他のエリアは、３科目（各１単位）の計３単位)。

（４）　上記（３）を含めて､「エリア基礎科目」((３）で選択した基盤エリア以外の３つのエリアの「エリア基礎科目」は最低１単位以上履修）および「エリア横断科目」(エリア共通の科目）の中から、１６単位以上を選択必修とする。

（５）　「エリア発展科目」については、エリアの領域を越えて、２０単位以上を選択必修とする。

（６）　全ての「協働科目」(共創基礎プロジェクト１、２（各２単位)、共創プロジェクト１、２（各２単位)）の計８単位は必修とする。

なお、共創学部の教育は、上記の教育課程の実施と履修指導とが相まって行われる

ことにより機能するものであることから、共創学部の履修指導も本学部の重要な要素である。専攻教育の教育課程の履修指導の方法については、次の（４）学生に対する履修指導等を参照。

取り組む１２の課題例について、各課題を解決するために最低限必要な科目については、資料４において課題ごとに整理されており、こうした科目を履修させることを想定している。

（４）学生に対する履修指導等

「何を学んだから何ができる」という学問分野の専門性が先行する学び方ではなく、「何をしたいから何を学ぶ」という課題が先行する学び方ができるカリキュラムであるため、学年進行上、適切な時期に適切な科目を選択履修することが重要である。また、留学の準備や生活上の課題にも的確な指導をする必要がある。

そこで、本学部の学務委員会のもと、学生の履修上の指導をはじめ、生活面や、留学に対する指導などを効果的に実施する体制を構築する。具体的には、学生問題に対するアドバイザー教員制と学部専任教員全員が関わるチューター制度の整備、複数指導教員制の導入、合同チュートリアルの実施、e-Learning システムの活用などを行う。共創学部における修学指導体制については、資料１０にまとめている。

①アドバイザー教員制

学務委員会のもと、「履修」、「生活」、「留学」ごとに各領域に精通したアドバイザー教員を配置する。学生のみならず学生指導を担当する教員の相談を受け付け、アドバイスを与える。また必要に応じて個々の教員との連絡や、学内のキャンパスライフ・健康支援センターなどとの連携を担当し、学生の抱える問題の解決を行う。

○履修指導

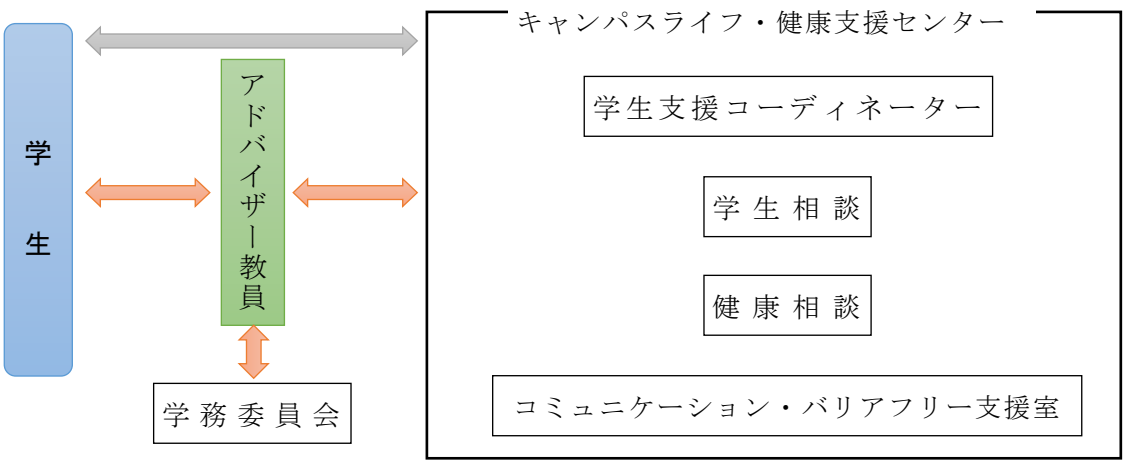
履修方法や進路など修学していく上での疑問や悩みなどの相談等に対応

○生活指導

学生生活をおくる上で、困ったことや分からないことなどの相談等に対応

○留学指導

留学先の選択や、留学に対する不安などの相談等に対応



②チューター・修学ナビゲーター・複数指導教員制

共創学部では、学生の到達目標が特定の専門性を身につける学部とは異なり、課題解決というコンセプトは同じでも、実際に学び研究する内容は学生ごとに異なる。それだけに、個々の学生の事情に対応した履修指導が重要となる。そのために、共創学部では次のような３段階の履修指導体制を構築する。

a）チューター教員による履修指導（入学時から２年次夏学期まで）

【チューターの業務】

チューターの業務は、高校から大学教育へ、及び基幹教育（初年次教育）から学部の専攻教育への円滑な移行を目的とする個別指導を行う。例えば、「資源外交を学びたい」という希望を学生がもっている場合、１年次の基幹教育では文系ディシプリン科目「政治学入門」を必ず受講するように指導したり、資源問題、エネルギー問題に関する、基本的な文献の案内をしたりする。教員が当該分野を専門としていない場合でも、代表的な課題とそれに取り組むために用意されている科目一覧表をみて、必要な科目のとり忘れがないように指導できる体制を整える。また、取り組みたい課題が明確でない学生に対しては、学生の問題関心をふまえて、どんな授業があるか、どんな教員がいるかを紹介しながら、学生の興味関心を広げつつ、課題発見へと指導する。さらに、学生を指導する過程で、学生の生活や学修において何らかの問題を把握した場合には、アドバイザー教員や学生相談室に連絡するなど、適切に対応する。２年次夏学期末、チューター指導期間が終了する際には、担当する５名の学生の研究課題や履修状況、今後履修すべき科目等について、引き継ぎ事項をまとめ、修学ナビゲーターに情報伝達を行う。

また１年次から２年次秋学期までの期間に開催される合同チュートリアルを、学務委員会やアドバイザー教員と共に企画・運営し、他の教員と連携しながら、合同チュートリアル後の学生からの相談などに対応する。

【チューターの選任】

チューターの選任は学務委員会が行う。本学部の入試で全受験生に提出を義務付けている志望理由書をもとに、適切なチューターを割り当てることとする。また、学びの進行とともに、学修内容の方向性が変化するなど、他の教員がチューターを担当した方がよいと判断される場合は、チューターの変更を認める。

【チューターの業務頻度】

チューターの指導期間は、入学時から２年次の夏学期終了時までとし、教員１人あたり５人の学生を担当する。

チューターによる指導の頻度は、各学期２回を目安とし、標準的には次のような時期に面談指導を行う。

１年次　（春）４月上旬　４月下旬　５月　（夏）６月　７月　（秋）１０月　１１月　（冬）１月　２月

２年次　（春）４月　（夏）６月　９月

b) 修学ナビゲーター（２年次秋学期から３年次秋学期まで）

【修学ナビゲーターの業務】

修学ナビゲーターの業務は、自分の担当するエリアを基盤エリア（２年次終了時に、４つのエリアのうちから選択したエリア）として選択した学生の授業履修状況の確認と、各授業科目の受講者数の把握であり、また必要な学びのための支援や問題が生じた場合の対応である。まず修学ナビゲーターは、自分の担当するエリアを基盤エリアとする学生の履修状況と、エリアの科目の履修状況を把握し、特定分野への偏りなどの問題が生じていないかどうかを確認する。学生が取り組みたいと考えている課題を研究するために必要な科目の履修が漏れている場合は履修指導を行い、特定授業に学生が偏っている場合は関係教員や学生と話し合い学生の履修科目の変更の指導を行う。また、学生から修学や進路について相談があった場合には適宜対応する。２年次末と３年次に学生の希望指導教員動向を調査し、学生の指導教員の選択が適切であるかを確認し、必要があれば教員の増強を検討する。

また２年次秋学期から３年次秋学期までの間に開催される合同チュートリアルを、学務委員会やアドバイザー教員と共に企画・運営し、他の教員と連携しながら、合同チュートリアル後の学生からの相談などに対応する。

【修学ナビゲーターの選任】

修学ナビゲーターはエリア（エリア共通を加えた５つ）からの推薦に基づいて学務委員会が行う。修学ナビゲーターとなる教員は、４つのエリアとエリア共通から２人ずつ選出される。合計 10 人の教員が２つのグループ（１グループ 5 名）をつくり、それぞれ１学年を持ち上がりで担当する。なお、修学ナビゲーター会議は、学務委員会所掌業務と関連するので、学務委員長が議長を務める。また、学務委員会委員と修学ナビゲーターの兼任を可とする。

【修学ナビゲーターの業務頻度】

修学ナビゲーターは、学務委員会委員長を議長とする修学ナビゲーター会議（２年次秋学期、冬学期、３年次春学期、夏学期、秋学期の合計５回）に出席し、自分の担当するエリアに関する履修状況の把握を行う。また、履修状況の把握の結果、対応すべき問題が明らかになった場合には、適宜適切に対応する。１学年 105 名の学生に対して 5 人の修学ナビゲーターが配置され、特定の領域への集中がないように指導されるので、4 つのエリアのナビゲーターが担当する学生は 20～30 名、教員数の少ないエリア共通のナビゲーターはそれよりも少ない学生を担当する見込みである。

c) ３年次冬学期以降：複数指導教員制（メインとサブ）

【ディグリープロジェクト１】

３年次秋学期終了後、ディグリープロジェクト１（３年次冬学期における２つの演習の組み合わせ）を履修する学生は、これまでの学習履歴、ディグリープロジェクトで取り組みたい課題は何か、２つの学問をどのように組み合わせて課題解決に取り組むのかについて記した「ディグリープロジェクト計画書１」を提出する。学

生は、研究課題に取り組むうえで有益だと考える、異なる方法論を専門とする教員２人を選ぶ（課題解決のために主として学ぶ分野をメイン、副として学ぶ分野をサブと呼び、それぞれの指導を担当する教員を主指導教員、副指導教員と呼ぶ)。

主指導教員と副指導教員は、学生が自分の問題意識に基づいてディグリープロジェクト２で行う研究の課題設定を行うことができるよう「視点の転換」に重点を置いた指導を行う。学生の卒業研究の課題研究方法などに関する研究計画の立案を指導し、また、実際に研究を実施するために必要となる手法や知識を教授する。なお、ディグリープロジェクト１を履修するためには、指導教員の担当する「エリア発展科目」の履修が条件であるが、履修していない場合、指導教員は課題を出し、研究に必要な学力を身につけるよう指導を行う。

３年次冬学期末に学生は、ディグリープロジェクト１の成果をもとに４年次で実施する研究計画をとりまとめた「ディグリープロジェクト計画書２」を提出する。教員は計画書を審査し、４年次のディグリープログロジェクト２の受け入れの可否を判定する。審査が否の場合、指導教員はあらためて課題を学生に提示し、再審査を行う。教員はそのために必要となる履修指導を行う。

【ディグリープロジェクト２】

ディグリープロジェクト２（４年次春学期～冬学期）で主指導教員と副指導教員は、演習や実習、実験などを通して、卒業研究を完成させるうえで不可欠な方法論的アプローチや実験手法、考え方などを修得させつつ、卒業研究を遂行できるよう指導する。また、これまで学んできた「構想」「協働」「経験」の力を、卒業研究に取り入れるべく、他の学生との協働や、課題によっては、社会との協働をも研究活動の中に組み入れた研究活動ができるよう指導する。

【ディグリープロジェクト３】

ディグリープロジェクト３は、ディグリープロジェクト１、２を通じて遂行した卒業研究の成果を取りまとめ、その成果を公開の審査会において英語で発表するものである。成果物としては学術論文だけではなく、制作物(映像作品や小説など)、政策提言、企業やNGOなどでの自らの実践活動に関するレポートなど、研究課題の解決に結びつく多様な様式を認める。主指導教員と副指導教員はディグリープロジェクト１、２の指導を踏まえ、成果物の作成を指導し、また英語による発表のための指導を行う。

③合同チュートリアル

入学時、進級時など、学生の履修において重要な節目になる時期に、学務委員やチューター担当教員による合同チュートリアルを実施する。なお合同チュートリアルの企画運営は、１年次から２年次秋学期までは学務委員会、アドバイザー教員、チューターが担当、２年次秋学期から３年次秋学期までは学務委員会、アドバイザー教員、修学ナビゲーターが、３年次冬学期以降は学務委員会、アドバイザー教員が担当する。

○１年次：入学時、新入生がスランプに陥りやすい入学後２ヶ月目、及び夏休み終了後の９月に合同チュートリアルを実施する。また２月の卒業研究発表会の時期に、他の学年と合同の全体チュートリアルを実施する。

４月：第１回合同チュートリアル（上級生の有志も参加する）
（主要な話題：本学部の目的、特色、大学の履修の仕方、生活上の注意等）
６月：第２回合同チュートリアル（上級生の希望者も参加可能）
（主要な話題：本学部の教員の研究紹介、留学、履修上の注意等）
９月：第３回合同チュートリアル（上級生の希望者も参加可能）
（主要な話題：本学部の教員の研究紹介、共通基礎科目の履修方法等）
２月：全体チュートリアル（１～３年生対象）
（主要な話題：卒業研究、進学や就職に向けた注意等）

○２年次：専攻教育が本格的にスタートするのにあわせ、共通基礎科目、エリア基礎科目、共創基礎プロジェクト、エリア横断科目の履修の仕方や学び方に重点をおいた合同チュートリアルを実施する。
４月：第１回合同チュートリアル
（主要な話題：共通基礎科目、エリア基礎科目、レクチャーシリーズの履修方法）
９月：第２回合同チュートリアル
（主要な話題：エリア横断科目の履修方法等）
２月：全体チュートリアル（１～３年生対象）
（主要な話題：卒業研究、進学や就職に向けた注意等）

○３年次：自分で行う課題研究の実施にむけてスムーズに準備ができるよう、エリア発展科目や共創プロジェクトの開始時期に合同チュートリアルを実施する。
６月：第１回合同チュートリアル
（主要な話題：共創プロジェクトを踏まえたエリア発展科目の履修について）
11月：第２回合同チュートリアル
（主要な話題：共創プロジェクトを踏まえたエリア発展科目の履修とディグリープロジェクト１に向けた準備について）
２月：全体チュートリアル（１～３年生対象）
（主要な話題：卒業研究、進学や就職に向けた注意等）

○４年次：ディグリープロジェクトの推進や就職活動、進学に向けた指導を行う。
４月：第１回合同チュートリアル
（主要な話題：卒業のための修了要件、ディグリープロジェクトの研究の進め方や評価の仕方、就職活動、進学準備等）
９月：第２回合同チュートリアル
（主要な話題：卒業研究の進捗状況報告、その他）

④e-Learning システムの履修指導への活用

学生に対するきめ細やかな指導を実現するために、九州大学基幹教育院ラーニングアナリティクスセンターと連携し、e ポートフォリオ、e ラーニングシステム、デジタル教科書配信システムによる支援体制を構築する。全学で導入している e-Learning システムの Moodle、e ポートフォリオシステムの Mahara、デジタル教科書配信システムの Booklooper の３つのシステムで構成する学習支援システム（Ｍ２Ｂ（みつば）システム）を利用し、e ポートフォリオシステムにチューター指導時の「学修計画書」

や留学時の「学修計画書」、授業提出物等を保存し、学生と指導する関係教員で共有できるようにするほか、e-Learning システムを通じた評価のフィードバックなど、学生に対する履修指導等に活用するとともに、教育改善の取組に活用する。これにより、学生の状況を正確に把握し、チューター交代時におけるミスコミュニケーション等の防止や、ディグリープロジェクトを指導する教員がチューター、修学ナビゲーターから引き継がれてきた学修計画書等の資料を e ポートフォリオで共有することで、複数指導教員による指導の効率化を図る。

○e-Learning システム：Moodle

学習をサポートする e-Learning システムで、講義ごとにコースを設定し、コースの中での出席管理、小テスト、教材配付、レポート受取、アンケートが可能。

○e ポートフォリオシステム：Mahara

日々の学修や教育において、その過程でのエビデンスを電子的に蓄積する e ポートフォリオシステムで、講義中に気付いたことを授業日誌に記入し、教育改善に活用できるほか、学生がラーニング・ポートフォリオとして、授業日誌を書き、講義内容の振り返り（リフレクション）をさせ、学修意欲の向上や、教員の教育改善に活用することが可能。

○デジタル教科書配信システム：Booklooper

講義で使用する教材（PDF/PPT）を電子化して配信するデジタル教科書配信システムで、講義前に準備していた資料の講義中での使用や、学生の予習・復習、知識を広げるツールとして利活用が可能で、学生の使用履歴を蓄積することでき、Moodle と連携して、蓄積データから全体の平均閲覧状況、予習達成率、マーカー箇所等をグラフで視覚的に把握することが可能。

⑤「チューター」及び「修学ナビゲーター」の具体的な業務量

まず、チューターと修学ナビゲーターの業務量の上限は次のように設定されている。（チューター変更希望が出された場合は、教員の内諾を条件にこれを超えることがある。）

【チューターのみを務める場合】

＊4 年間で 10 人の学生のチューター指導

ⅰ）第 1 期生担当（第 3 期生担当）：21 人

2018 年度　春・夏　チューター（1 年次生 5 人担当／1 教員）＊第 1 期生
　　秋・冬　チューター（1 年次生 5 人担当／1 教員）
2019 年度　春・夏　チューター（2 年次生 5 人担当／1 教員）
　　秋・冬　休み
2020 年度　春・夏　チューター（1 年次生 5 人担当／1 教員）＊第 3 期生
　　秋・冬　チューター（1 年次生 5 人担当／1 教員）
2021 年度　春・夏　チューター（2 年次生 5 人担当／1 教員）
　　秋・冬　休み

ⅱ）第 2 期生担当（第 4 期生担当）：21 人

2019 年度　春・夏　チューター（１年次生５人担当／１教員）＊第２期生
　　秋・冬　チューター（１年次生５人担当／１教員）
2020 年度　春・夏　チューター（２年次生５人担当／１教員）
　　秋・冬　休み
2021 年度　春・夏　チューター（１年次生５人担当／１教員）＊第４期生
　　秋・冬　チューター（１年次生５人担当／１教員）
2022 年度　春・夏　チューター（２年次生５人担当／１教員）
　　秋・冬　休み

【チューターと修学ナビゲーターを務める場合】
＊４年間で５人の学生のチューター指導と約 25 人の学生のナビゲート
ⅰ）第１期生担当：5 人
2018 年度　春・夏　チューター（１年次生５人担当／１教員）＊第１期生
　　秋・冬　チューター（１年次生５人担当／１教員）
2019 年度　春・夏　チューター（２年次生５人担当／１教員）
　　秋・冬　修学ナビゲーター（２年次生　当該エリア選択者およそ 25 人）
2020 年度　春・夏　修学ナビゲーター（３年次生　当該エリア選択者およそ 25 人）
　　秋　　修学ナビゲーター（３年次生　当該エリア選択者およそ 25 人）
2021 年度　休み
ⅱ）第２期生担当：5 人
2019 年度　春・夏　チューター（１年次生５人担当／１教員）＊第２期生
　　秋・冬　チューター（１年次生５人担当／１教員）
2020 年度　春・夏　チューター（２年次生５人担当／１教員）
　　秋・冬　修学ナビゲーター（２年次生　当該エリア選択者およそ 25 人）
2021 年度　春・夏　修学ナビゲーター（３年次生　当該エリア選択者およそ 25 人）
　　秋　　修学ナビゲーター（３年次生　当該エリア選択者およそ 25 人）
2022 年度　休み

チューターと修学ナビゲーターの要員数は、開設３年目に最大となる（3 年次生の修学ナビゲーター５名、２年次生のチューター21 名、１年次生のチューター21 名、合計 47 名（延べ人数））。現在、専任の教員数は 46 名であるため、必要があれば、開設初年度から教員を増員して対応したい。上では、チューターを兼ねる修学ナビゲーターのみを記載しているが、教員を増員することにより、チューターを兼ねることのない修学ナビゲーターも配置することは可能である。

以上が、履修指導に関する教員の業務である。これに、３年次冬学期からの卒業研究の指導業務が加わる。

研究指導業務は、学生数に対する教員の比率を考えると、教員一人あたり主指導として指導する学生が２～３名、副指導として指導する学生が同じく２～３名、合計５名前後である。（なお、副指導の指導は単位１単位分であり、主指導の学生のために使う時間の 4 分の１程度である。）学生の志望の偏りによりこの数字は変動するが、３年

次秋学期末までの修学ナビゲーターにより、各教員のもとで指導を受ける学生の数は、ディグリープロジェクトを遂行するために適正な人数に収まるよう指導される。また、必要があれば、卒業研究を指導する教員を増員して対応したい。

以上を合わせると、標準的な教員の学生指導に関わる業務量は４年間で 10 名のチューター指導と毎年４～５名程度の卒業研究指導の範囲に収まると考えられる。

⑥その他

本学部の教員は、伊都、春日、塩原の各キャンパスに分散しているが、定期的に学生と接触する必要のあるチューターは、伊都キャンパスに研究室のある教員が担当することを原則とする。修学ナビゲーターや各種委員会の業務等をバランスよく配分することで、３キャンパスに分かれている教員の業務量の均等化をはかり、特定のキャンパスの教員に過重な負担がかからないように配慮する。そのために、チューターと修学ナビゲーター、各種委員会のメンバーの選任は運営会議が教員の状況を把握した上で、適切な時期に行うこととする。

５．教員組織の編成の考え方及び特色

共創学部は、持続可能な世界を構築するための課題を解決するための学問の存在構造・協力関係を学部の内部に作り出すための授業カリキュラム設計を行っていることから、学問分野、専門分野ごとに教育内容を分かつ学科制を採用せず、一学部一学科とし、研究院、附置研究所、学内共同教育研究センター等に所属する教員から、本学部を担当する専任教員 46 名、授業科目担当教員 28 名として再配置することにより、共創学部の設置に必要な教員を確保した。専任教員 46 名の内訳は、教授 18 名、准教授 19 名、講師５名、助教４名であり、年齢構成については、本学部設置時の平成 30 年 4 月 1 日時点で、30～39 歳が 7 名、40～49 歳が 19 名、50～59 歳が 17 名、60～64 歳が３名となっており、教育研究水準の維持向上及び活性化にふさわしい構成となっている。

なお、専任教員及び授業科目担当教員には、世界考古学会議会長や、第 49 次日本南極地域観測隊副隊長としての経験を持つ教員をはじめ、外国人教員 11 名、海外大学等での研究教育歴を有する教員 27 名がいる。

九州大学は平成 12 年度から、大学院の教育研究組織である「研究科」を、大学院の教育組織としての「学府」と教員の所属する研究組織である「研究院」を別組織とする教員組織と教育組織の分離を行っており、この「学府・研究院」制度を最大限に活用して、教育組織であり学生の所属組織である「共創学部」に対し、教員組織の枠組みを超えて各研究院等から教員が参加する形を取っている。

本学部の教員組織の編成にあたっては、異なる分野の学知を組み合わせながら課題解決を構想する環境を整えることを基本に、専攻教育科目として異なる学問方法論の授業科目を配置した上で、カリキュラム上の根幹となる主要な授業科目－共通基礎科目、エリア基礎科目、協働科目（共創基礎プロジェクト及び共創プロジェクト）及び共創科目（ディグリープロジェクト）－については専任教員が担当する体制を整えるとともに、ディグリープロジェクト（卒業研究）では、学生自身が設定した課題解決に異なる２つの学問分野から取り組ませるため、専門分野の異なる教員による複数指導が可能となる体制を構築している。

なお、初年次から学ぶこととなる基幹教育については、平成 26 年以降、すべての研究院、附置研究所、学内共同教育研究センター、先導的学術研究センター等に所属する教員が、全学的に協力し一体となって実施する体制を既に構築している。

４つのエリアおよび、エリア共通のねらいは、資料３に記したように、

○人間・生命エリア：　生命の発生・進化や、人間の思考・認知・判断の仕組みを修得する

○人と社会エリア：　コミュニケーションや社会共生のあり方を修得する

○国家と地域エリア：　国家や地域の歴史、特徴的な経済・社会現象、政治と経済の関係性を修得する

○地球・環境エリア：　地球が持つ資源や地球環境の変化による災害、生命が環境に与える影響を修得する

○エリア共通（「共通基礎科目」、「エリア横断科目」で構成される分類）：　課題の設定の仕方を学び、課題解決のための着想法、解析法の知識・技能を修得する

であり、それを実現するための必要な授業科目（エリア基礎科目、エリア発展科目、共通基礎科目、エリア横断科目、関連基幹教育科目）を設定している。

エリア共通（赤で囲んだ四角）は、課題解決に向けての着想法、解析法の知識・技能を修得させる科目であり、これらの手法を用いて、課題解決への道筋を探る。資料４は、取り組む課題（ここでは、①～⑫の課題例）のそれぞれに対して、「エリア基礎科目」、「エリア発展科目」、エリア共通の科目がどのように関連するのかを結びつけたものである。これら２つの表から明らかなように、課題を知るディシプリンベースの授業科目及び課題解決に向けての着想法、解析法の知識・技能を修得させる授業科目（資料３の赤で囲んだ四角）が整備されており、担当する教員組織も整備されている。さらに、課題の解決策を提案するグループ討議の授業科目（協働科目の共創基礎プロジェクト１、２および共創プロジェクト１、２）および、それを担当する教員も整備されている。

６．教育方法、履修指導方法及び卒業要件

（１）本学部の教育方法の考え方

①教育方法の考え方と授業科目

共創的課題解決力の養成を目的とする本学部の教育方法は、次のような考え方に基づいて実施される。

１．設置の趣旨で述べたように、本学部は、学部全体が取り組む課題解決の共通テーマを、“地球の持続可能性の諸問題の解決策を探る”とする。この地球の持続可能性の問題は、個（要素、個人、組織、国家、地域など）とそれを取り巻く環境（個の集合体、社会、地球など）との関係性の問題と概念化できるが、問題の根源的要因を突き止め、その解決策を探るには、構成要因のスケールの違いを考慮して問題を捉え直す必要がある。そのために、持続可能な世界を構築するための課題の解決策を探る上で、それぞれの課題を引き起こす根源的な要因を、「人間・生命」「人と社会」「国家と地域」「地球・環境」というスケール感の異なる４つの「エリア」のディシプリンベースの様々な学問分野にブレイクダウンする。

このようにして、本学部の学生は、持続可能な世界を構築するための課題に焦点を絞りつつ、スケール感の違いやアプローチの方向性によって４つのエリアに分類された課題の探究に取り組む。実際の課題解決の取組は、専門領域を超えた協力によって営まれており、課題とそれに対する取組そのものを学生が学ぶことができるように、本学部は、課題の解決に実際に取り組んでいる社会の仕組み、学問の存在構造・協力関係を学部の教育環境の中に構築する。すなわち、多様な学問が併存している社会構造そのものを、多様な専門の研究者である教員を多数配置することにより、学部の内部に擬似的に作り出す。

学生はこのような環境の中で、一つの専門分野では解決が困難な持続可能な世界を構築するための課題に対して、複数の専門分野の考え方や理論を学びながら、解決を構想していくことができるようになり、さらに他者と協働しながら課題解決策を考えることで、分野の壁を超えたコミュニケーション、協働の手法や技能を身につけていく。そして、そこで考えた解決策を社会に発信していくことで、学問を人類の活動のために活用する技法に習熟していくのである。

以上に述べたように、本学部の教育方法において１つ目の柱となるのは、「エリア」である。例えば、資料１１で示すように、食品の安全性と持続的確保の問題に関心がある学生は、問題の根源的な要因をエリアのディシプリンベースの学問分野にブレイクダウンすると、健康科学、生物多様性科学、国際政治学、遺伝学、環境政策、国際関係論となり、これらに関連する授業科目は、４つのエリアに配置している。従来の学部の教育課程では、上記のディシプリンベースの学問分野の授業科目は、異なる学部や学科にそれぞれ配置されていることから、一般に別々なものとして扱われ、これらの知識・技能の連携を図ることは困難である。しかし、一学部一学科の共創学部では、４つのエリアの授業科目として配置するので、課題解決のために関連性が深いものであることを学生に提示し、専門的知識・技能を修得することができる（領土紛争と移民問題の事例については、資料１２参照）。課題解決のために多様な知識をつない

で多角的に考えるための、本学部における教育的手立ての一つとしてエリアのカテゴリーがある。

さらに、エリアと並んで、本学部の教育の方法の２つ目の柱となるのは、エリアを超えて共通に必要とされる課題解決のための考え方や技法の教育(エリア共通の科目)であり、それは「共通基礎科目」と「エリア横断科目」において提供される。これらの科目は、エリアに分類された課題のスケールの違いに関わらず、いずれにおいても課題を考えるために求められる技能や態度を教授するものである。

特に、課題解決のために共通して求められる基礎的な素養を学ぶための科目として全員必修の共通基礎科目は、次の７科目が設定されている。ここには、本学部が課題解決のために必要と考える技法や考え方が何であるかが示されている。

・共通基礎科目：「共創デザイン思考発想法」、「データサイエンス基礎」
「フィールド調査法」、「複雑系科学入門」、「科学論」
「グローバル・ヒストリー」、「グローバル・エシクス」

そして、3つ目の柱となるのが、「共創」のプロセスに即した授業科目の設定である。本文書の冒頭に述べたように、本学部の考える「共創」とは、自ら課題を設定してその解決に至るアプローチを「構想」し、異なる専門や知識をもつ多様な人々と「協働」し、これら構想と協働の学びと海外留学等を通じて得られる「経験」というプロセスを繰り返すことを通じ、絶えず変化するグローバル社会において新たな知や価値を生み出すことである。本学部の教育は、これら「構想」「協働」「経験」というプロセスを繰り返すことを通じ、共創の力である共創的課題解決力を身につけることを目指している。学生は、本学部のカリキュラムを通して、現代社会が直面している問題に対して、自らが課題を設定してその解決に至るアプローチを「構想」でき、異なる専門や知識をもつ多様な人々と「協働」し、これら構想と協働の学びや海外留学等を通じて得られる「経験」をもとに、グローバル社会において新たな知や価値を「共創」するプロセスを繰り返し経験する。それによって学生は「共創的課題解決力」を養っていくのである。

このような考え方に基づいて、本学部の授業科目は次のように区分されている。

・構想科目：課題解決のための着想や多様な学問のアプローチを学ぶ科目
・協働科目：個々人の知識や得意とする分野を生かしつつ、他者と協働して課題の解決に向けた手法や技法を学ぶ科目
・経験科目：海外留学やインターンシップなど、多様な経験を得られる科目
・共創科目：自分で設定した課題に対して必要な知識を深める科目と、得た知識を組み合わせ自ら解決策を創造するディグリープロジェクト

この中でも特に TBL を取り入れた「協働科目」と、必須である海外留学のための「経験科目」がこの学部の特色を示しているといえる。

②主要な授業科目の実施方法と配当年次

○１年次:全学共通の基幹教育を中心に履修し､多様な学問にふれることを通して、問題関心の裾野を広げ、後の成長のための土台を築く

本学部の学生に求められる能動的学習能力を養成する。特に、セミナー科目である「基幹教育セミナー」で自己表現力を養い、TBL 科目である「課題協学科目」を通じて、協働学習の基礎を身につける。また、日本人学生は、英語インテンシブコースで集中的な英語教育を受け、国際コミュニケーションの基礎となる英語の運用能力を高める。外国人留学生は、同じように日本語の集中訓練を受ける。また、講義科目として、本学部の必修科目として「異文化対応１」を履修し、必須とされている留学のための心構えや準備の仕方、異文化への対応法を学び、初年次の後期（秋・冬学期）には、学部専攻教育の「共通基礎科目」の「グローバル・ヒストリー」「グローバル・エシクス」を履修する。これにより国際的な視野でものを考える能力を高める。

○２年次：専攻教育科目を中心に履修し、課題解決を構想するために必要な基礎的な知識・技能を身につけ、課題を見つけるための学びを開始する（課題の設定については、最初は、取り組む課題として、いくつかの課題を与える（取り組む課題例は、資料４参照））。

次の図にあるように、必修科目である「共通基礎科目」の５科目、また関心のある分野に関する選択必修科目である「構想科目」の「エリア基礎科目」を履修することにより、課題解決を構想するための基礎的な知識を学ぶ。これらは基本的に講義形式で実施される。これら「構想」のための基礎的な知識を学びながら、学生は同時に、必修の TBL 科目である「共創基礎プロジェクト」を春学期・夏学期に履修する。ここでは、持続可能な世界を構築するための課題の実例を取り上げた「協働」による学習実践を通じて、他者と議論をする際の手法や態度、外国人留学生との英語によるコミュニケーション、課題を協働で探究するためのさまざまな技法が習得される。この「共創基礎プロジェクト」の学びを経た学生は、秋学期・冬学期において、自分はどのような課題を追求したいのか、自分に欠けている知識はどのようなものかを考えながら､「共通基礎科目」の発展である「エリア横断科目」と、さらに「構想科目」の「エリア基礎科目」の中から授業を選択し、課題解決のための「構想」のための知識を深化・拡張させていく。これらは、それぞれの専門分野における知識や考え方、技法を身につけさせるための授業であり、講義、セミナー、実習形式で行われる。基本的に１単位の小さな科目であるが､学生は､これら１単位科目を多数履修することにより、異なる知の組み合わせ方を学んでいく。

○３年次：専攻教育科目を中心に履修し、徐々に自分の取り組む課題を明確化し、自分で課題を選べるようになり、最終的には、自らが課題を設定し、ディグリープロジェクトに着手する

３年次における学修のセンターラインとして位置づけるのは、２年次と同様に「協働」の実践の場である「共創プロジェクト」である。２年次に、構想と協働さらに構想という形で学びの深化を経験した学生は、ここで再度「協働」の実践を体験する。TBL のテーマを工夫することで、協働的な学修をより一層深める場とする。また、２年次は春学期・夏学期に集中させていたのに対し、３年次では春学期と秋学期に実施

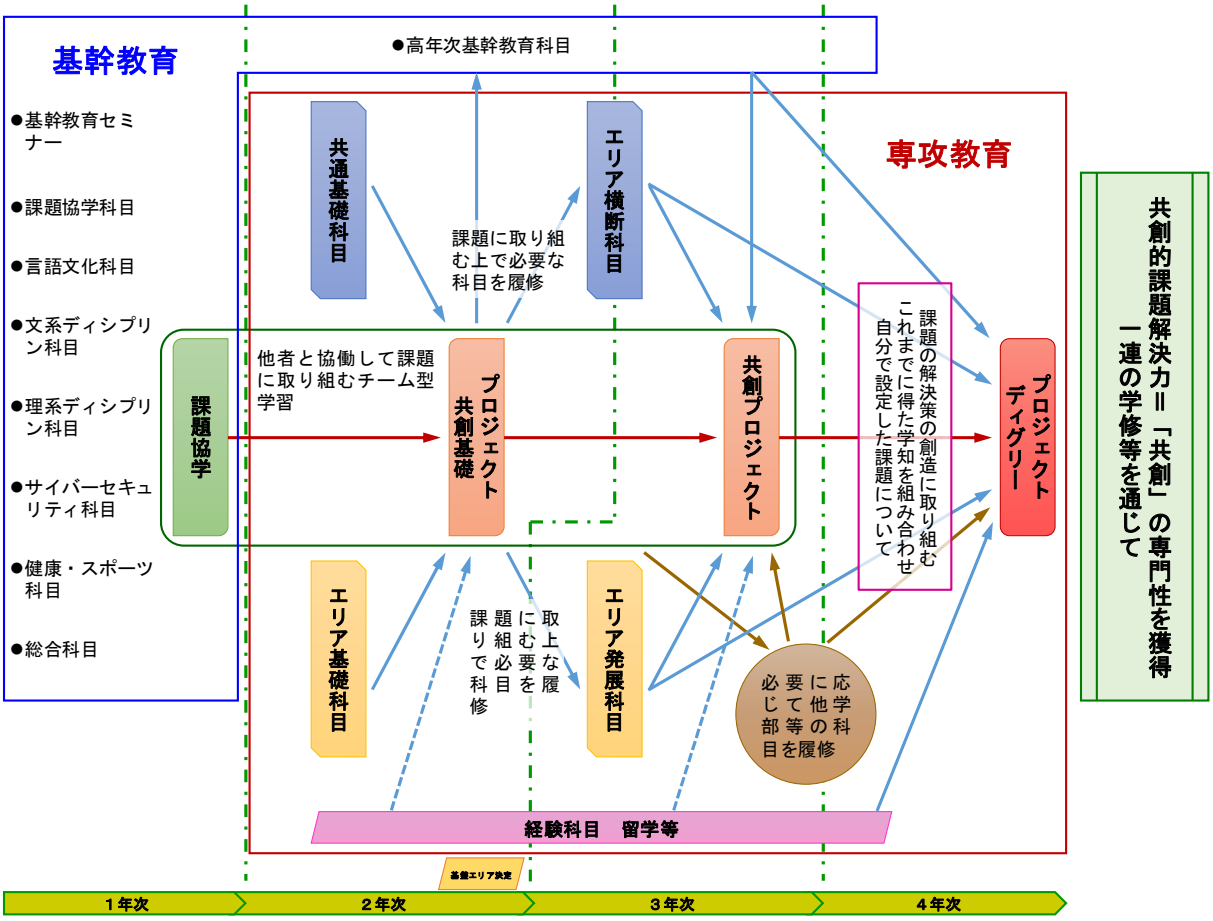
することにより、春に「協働」、夏に短期留学の「経験」、秋に「協働」、冬に「構想」という形で、共創のプロセスを更に深化・向上させる学び方が実現できる。冬学期には、ディグリープロジェクト１で自ら設定した課題の解決のために２つのゼミ（４年次に選択するメイン、サブの候補となるゼミ）を選択し、４年次で実施するディグリープロジェクト（１年間を通じた卒業研究）のための準備とする。

〇４年次：自分で課題を設定しこれまで学んだ知識や技法を総動員して、設定した課題に関する研究に取り組むことができる

３年次のディグリープロジェクト１を踏まえて、ディグリープロジェクト２を実施するための２つのゼミを選択する。なお、ゼミを選択する際に学生は、ディグリープロジェクトの研究構想が妥当かどうかについて、当該ゼミの担当教員による審査を受けなければならない。ディグリープロジェクト２のゼミは、一つの課題に対して複数の学問的アプローチで考えるという本学部の趣旨にそって、２つ選択する。そのうちの一つは４授業学期分の指導を受け、メインと呼ばれる。もう一つは１クォータ分の指導を受け、サブと呼ばれる。メインのゼミを担当する教員が主指導教員となり、サブのゼミを担当する教員が副指導教員となって、複数の教員で年間を通じたディグリープロジェクトの指導がなされる。完成した卒業研究の成果は成果発表会で、英語で発表しなければならない（この卒業研究の成果と発表をもってディグリープロジェクト３の単位を認定する。）。

〇１年次～４年次：留学という経験を通じて、共創のステップアップをする

１年次から４年次の間に学生は、海外留学やインターンシップを「経験」する。これにより、キャンパス内で行われる「構想」「協働」の学びに「経験」が加わり、スパイラル状（１頁の図を参照）に学びを向上させながら、「共創」の専門性を身につけていく。



（２）授業科目のナンバリング

学位プログラムとして体系化された教育課程であることを示し、個々の授業科目のカリキュラム上の位置付けや水準を明確にすることで、学生に対して、教育目的に沿った知識や能力が身についていくのかを明確にし、学修に対する意識と意欲の向上を図るため、開講学部（又は基幹教育）コード、学位プログラム（又は科目区分）コード、水準コード、科目分野コード、小分類コード、クラス区分コード、開講言語コードで構成する授業科目のナンバリングを行う。

ＡＢＣ－ＤＥＦ　１　２　３　４　Ｌ

開講学部（又は基幹教育）コード	学位ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ（又は科目区分）コード	水準コード	科目分野コード	小分類コード	クラス区分コード	開講言語コード
大分類			中分類	小分類		

◎開講学部等コード及び学位プログラム等コード

○基幹教育	
基幹教育セミナー	KED-KES

課題協学科目	KED-ICL
言語文化基礎科目	KED-LCB
文系ディシプリン科目	KED-HSS
理系ディシプリン科目（数学）	KED-SMA
理系ディシプリン科目（物理）	KED-SPH
理系ディシプリン科目（化学）	KED-SCH
理系ディシプリン科目（生物）	KED-SBI
理系ディシプリン科目（地球科学）	KED-SGS
理系ディシプリン科目（感性デザイン）	KED-SKD
理系ディシプリン科目（情報科学）	KED-SIS
理系ディシプリン科目（自然科学総合実験）	KED-SLE
サイバーセキュリティ科目	KED-CSC
健康スポーツ科目	KED-HSP
総合科目	KED-GES
高年次基幹教育科目（知の連携）	KED-ASC
高年次基幹教育科目（知の深化）	KED-ASD
○共創学部	
共創学部共創学科	ISI-ISI

◎水準コード

1000 番台：入門レベル	共通基礎科目
2000 番台：基礎レベル	構想科目「エリア基礎科目」、レクチャーシリーズ、協働科目「共創基礎プロジェクト１・２」、経験科目「異文化対応」
3000 番台：応用レベル	構想科目「エリア横断科目」、協働科目「共創プロジェクト１・２」、共創科目「エリア発展科目」
4000 番台：卒業研究レベル	共創科目「ディグリープロジェクト科目」

（３）専門分野の異なる教員による複数指導体制

ディグリープロジェクト（卒業研究）として、学生自身が設定した課題について、その課題の解決策を異なる２つの学問分野からアプローチさせるため、課題の解決策を考える上で必要とする異なる学問分野を専門とする教員２名から、設定した課題等についての審査を受けた後、審査を担当した２名の教員から適切な指導を受けながら卒業研究に取り組み、設定した解決すべき課題に対する解決方法等を成果として卒業論文等にまとめる。

（４）卒業要件

本学部の卒業要件は、基幹教育科目及び本学部の専攻教育として開講する科目の履修による 124 単位の修得であり、各区分で設ける必要単位数は次のとおりである。

○基幹教育科目（２年次以降を含む）　48 単位（科目区分ごとの最低修得単位数は次のとおり）

・基幹教育セミナー	１単位
・課題協学科目	２．５単位
・言語文化科目	16 単位（第１外国語：12 単位、第２外国語：４単位）
・文系ディシプリン科目	８単位
・理系ディシプリン科目	８単位
・サイバーセキュリティ科目	１単位
・健康・スポーツ科目	１単位
・高年次基幹教育科目	５単位
・その他	５．５単位（言語文化科目、文系ディシプリン科目、理系ディシプリン科目、総合科目、高年次基幹教育科目から修得）

○学部専攻教育科目　76 単位（科目区分ごとの最低修得単位数は次のとおり）

・共通基礎科目	８単位（全て必修科目）
・構想科目	18 単位（うち、エリア横断科目及びエリア基礎科目（各エリアのエリア基礎科目から最低１単位）から 16 単位を修得。） ※エリアに対する学生の自主性を重んじるために、２年次終了時に、４つのエリアのうち、少なくとも１つのエリアを選択（このエリアを基盤エリアと定義）し、この基盤エリアの「エリア基礎科目」の全ての科目を必修とする（地球・環境エリアは、３科目（各１単位）に加えて、「地球環境実習」（１単位）を合わせて４単位、その他のエリアは、３科目（各１単位）の計３単位)。
・協働科目	８単位
・経験科目	２単位
・共創科目	29 単位
・その他	11 単位（(1)基幹教育科目の総合科目、高年次基幹教育科目、(2)専攻教育科目の構想科目（エリア横断科目、エリア基礎科目）及び共創科目(エリア発展科目)、(3)日本語に関する科目（留学生のみ）から履修）

なお、より深く専門分野を学ぶために必要な知識・技能等の獲得を図るため、他学部等で開講されている授業科目については 10 単位を上限に、外国の大学又は短期大学において履修した授業科目については 30 単位を上限に履修することが可能とし、本学部における授業科目の履修により修得したものとして取り扱う。

（５）４学期制の導入

九州大学では、平成 29 年度から全学で４学期制を導入する。各学期の授業編成の自由度を高めることにより、学生等のモビリティを高め、より柔軟に留学等を可能とするため、また、授業編成上の順次性等を高める効果や教員の研究時間の確保なども勘案し、新たに授業期間を４つに区分し、多様な授業設定を可能とする枠組みとして導入するもので、共創学部においても必修科目の配置を考慮するなど、より柔軟に留学が可能となるようなカリキュラム編成を行う。

【半年ごとの学年暦の区分】

入学式、学位記授与式、学籍管理、授業料の取扱いについては、次の区分に従うものとする。

前期（first semester）　　４月１日から９月３０日まで

後期（second semester）　１０月１日から３月３１日まで

【授業期間区分及び授業回数】

１）８週間を単位とする授業期間については、次のとおり区分する。

授業期間の区分の呼称	授業期間
春学期 （spring quarter）	４月の６日目の平日から各曜日の授業が８回実施できる期間
夏学期 （summer quarter）	春学期終了日の翌日から各曜日の授業が８回実施できる期間および前期の予備日（１週間）
秋学期 （fall quarter）	秋季入学式の翌日から各曜日の授業が８回実施できる期間
冬学期 （winter quarter）	秋学期終了日の翌日から各曜日の授業が８回実施できる期間および後期の予備日（１週間）

２）授業回数等は、本学においては１時限（９０分）を２時間とした上で、１５時間の授業に対して１単位を与えることを基本とする。

（６）履修科目の年間登録上限（CAP 制）の設定

学生の十分な学修時間を確保し、単位の実質化を図るため、履修科目の年間登録上限（CAP 制）を設定する。半期 24 単位（年間 48 単位）を登録上限として設定し、実質的な学修時間を確保する。

（７）大学院への進学に係る受け入れ体制

基盤エリア（２年次終了時に、４つのエリアのうちから選択したエリア）の学問分野の大学院への進学を希望する場合、大学院入試における基礎科目に相当する科目は設定されている。

重ねて、九州大学では、既存の文・理の教育組織の枠を超え、要素還元論の体系化ではなく、逆のアプローチ、すなわち、細分化された専門的な個の知を統合することで全体（集団）の新しい知を生み出し、専門を超えた相互理解を前提とするような知の統合の仕組みをさぐる学際的大学院（学府）として、人間環境学府、地球社会統合科学府（比較社会文化学府を平成 26 年 4 月に改組)、システム生命科学府、統合新領域学府を設置している。

このように、すでに九州大学では、グローバル社会での個と社会の関係性を研究の主眼とする学際的大学院組織や、教育プログラム等を作り上げており、既存の文・理の教育組織の枠組みや、細分化された各専門アカデミア領域の垣根を越え、専門を超えた相互理解により知の統合を促し、知の共創を学ぶリベラル・アーツ型の教育を実施する基盤が形成されている。

共創学部の学生で大学院を進学希望する学生の多くは、このような国内外の学際的大学院を希望するであろう。少なくとも、九州大学の大学院進学を志望する場合は、上記のような学際大学院が主な受け皿となるが、学際でない単独の学問領域の大学院への進学を希望する場合においても、大学院入試の基礎科目相当のカリキュラムは設

定している。

また、九州大学は、学府・研究院制度を施行しており、教員は研究院に所属し、大学院生は学府に所属している。また、今回、共創学部の設置に伴い、授業等は全学出動体制で、殆どの研究院から教員が出動し、共創学部の教育に携わる。したがって、各座学授業、協働学習、ディグリープロジェクト（卒業研究）に取り組む期間に、大学院に進学するのに必要な、より深い専門的知識・技能およびその情報を、指導教員（メイン、サブの複数指導体制）を含め、修学ナビゲーターの教員より得ることができる。

７．施設、設備等の整備計画

（１）校地、運動場の整備計画

共創学部の教育・研究を支える校地は、九州大学の伊都キャンパスである。箱崎地区、六本松地区、原町地区の各キャンパスを統合移転し、整備を進めている伊都キャンパスは、「グローバル・ハブ・キャンパス」として位置付けており、世界最高水準の研究、イノベーション創出とグローバル人材の育成など、世界のトップ百大学への躍進を目指した教育研究の活発な取組が行われており、全学部学生が履修する「基幹教育」も行われる九州大学の中心的なキャンパスである。

伊都キャンパス内には、伊都図書館、学習・交流スペース（嚶鳴天空広場：Q-Commons)、学生寄宿舎（ドミトリー)、ゲストハウス、キャンパスライフ・健康支援センター（健康相談室、学生相談室)、外国人留学生・研究者サポートセンター、Self-Access Learning Center、食堂・売店（ビッグさんど)、カフェテリア、書店・売店（皎皎舎）等の福利厚生施設が充実しており、平成 30 年度には新中央図書館（国際化拠点図書館）も整備（平成 28 年度に一部開館）される計画であり、本学部が新設されても、既存学部と共用できるだけの十分な施設を備えている。

運動場については、伊都キャンパス内に設置されている多目的グラウンド、総合体育館、テニスコートを主に使用する。このほか伊都キャンパスには、陸上競技場、野球場、弓道場、アーチェリー場、テニスコート、課外活動施設が整備されている。

学生が休息するスペースは、学生集会場（亭亭舎)、課外活動施設（サークル棟)、食堂、カフェテリアの他、各建物には休憩スペースが整備されている。

伊都で教育を行っている教育組織 （平成 28 年度現在）	伊都で教育を行っている教育組織 （平成 30 年度予定）
基幹教育、理学部、工学部	基幹教育、文学部、教育学部、法学部、経済学部、理学部、工学部、農学部

（２）校舎等施設の整備計画

教室については、英語インテンシブコースや、共通基礎科目、構想科目などの学部専攻教育を開講するための中･小講義室､共創プロジェクトなどを実施する演習室を、伊都キャンパスの既存施設の中で､学生の動線に十分配慮しながら､確保･整備する。

教員の研究室についても、伊都キャンパスの既存施設の中で、教員団としてまとまりを形成できる位置に確保し、演習室を近接させて、教員と学生のコミュニケーションがスムーズに図られるよう整備する。

これらの施設・設備は、本学部の特色ある教育を展開できるよう、現在の比較社会文化・言語文化研究教育棟、センター１・２号館を中心として、次のような形で整備する。

①講義室・演習室

大講義室（200 名規模）1 室、中講義室（100 名規模）1 室、小講義室（50～60 名規模）8 室、小講義室（20～30 名規模）12 室、演習室（10～30 名規模）3 室

②アクティブ・ラーニング教室

グループで議論しあう協働学習を支える設備として、可動式の椅子や机、全面ホワイトボード等を利用可能なアクティブ・ラーニング教室（50 名規模・2 室）を整備する。

③実験・研究室

問題や課題の解決に向けた研究に取組むための活動スペースとして、実験・研究室を整備する。

（３）図書等の資料及び図書館の整備計画

Ⅰ）図書資料の整備計画

九州大学附属図書館の全蔵書は、図書約 430 万冊、学術雑誌約 92,500 冊、アクセス可能な電子ブック約 112,000 タイトル、アクセス可能な電子ジャーナル約 87,000 タイトルを所蔵し、各種データベースサービスを提供している。そのうち、平成 30 年度に整備が完了する予定の新中央図書館（国際化拠点図書館）には、現中央図書館で所蔵している図書約 815,000 冊、学術雑誌約 23,000 冊が収蔵される計画であり、データベースや電子ジャーナルは、学外からもアクセス可能となっている。長年にわたる計画的な図書資料の収集・整備により、共創学部の教育研究領域に関する図書・学術雑誌類は充実している状況にあり、現在も年間で図書が約 67,000 冊、学術雑誌約 12,000 冊を受け入れるなど、更なる充実を図っている。共創学部の設置後は、共創学部に毎年度予算措置される図書費を活用して、共創学部の教育研究領域に関する図書・学術雑誌類の充実を図る計画であり、開設年度から完成年度までに必要な図書資料は支障なく整備することができる。

Ⅱ）図書館の整備計画

共創学部の学生は、伊都図書館のほか、平成 30 年度に整備が完了する予定の新中央図書館（国際化拠点図書館）を利用することとなる。新中央図書館（国際化拠点図書館）は、①知の入口、②知の交流、③知の創造、④知の涵養の４つを基本コンセプトに、学修・教育・研究・国際・社会の５つの観点で整備する計画で、建物内の学修・教育・研究エリアには、「アクティブ・ラーニングスペース」をはじめ、「グループ学習室」や、「演習室」を、サービスエリアには、「ラウンジ」や、「休憩・リラックススペース」を整備する予定である。

８．入学者選抜の概要

（１）共創学部が求める学生

本学部は、グローバル社会において新たな知や価値を生み出す「共創」の専門性を身につけた人材の育成を実現するため、本学部の人材養成像に到達する可能性を持つ学生であるかどうかという観点から、学生選抜を実施する。

本学部が求める学生像は、共創学部の学位授与の方針に掲げられた「能動的学習能力」、「課題構想力」、「協働実践力」、「国際コミュニケーション力」、そしてこれら４つの態度や能力から構成される「共創的課題解決力」を潜在的に有し、学部教育を通じてそれらの能力や態度を大いに発展させることができると評価できる学生である（入学者受入れの方針）。

入学者選抜においては、このような学生へと成長する可能性を示す資質として特に以下の４つの能力や態度に注目し、学力のみならず、問題関心や共創学部への適性などを総合的に評価して選抜する。

①創造的な学びのテーマを自ら設定し、既存の学問の枠組みを超えて、必要となる生きた知識や有用な技能を獲得しようとする主体的な態度を持っている。（主体的自律性）

②科学的探究活動や社会活動などについて優れた資質と豊富な経験を持ち、他者と協力しながら実効性のある活動を進めていくことのできる協働的な姿勢を持っている。（協働的学習能力）

③既存のさまざまな学問分野の基礎と応用を幅広く修得し、高度で複雑な社会的課題の解決のためにこれらの知を批判的に活用し統合できる思考力を持っている。（多角的思考力）

④国際社会に対する強い関心と多様な経験を有するとともに、世界を舞台にした活動に対する強い意欲をもち、これを実際に実現するための高い語学力を持っている。（国際的視野）

（２）選抜方法

本学部は、入学志願者の能力・意欲・適性等を多面的・総合的に評価する九州大学の全学的な入試改革案「入学者選抜改革の実施に向けた提言」（平成 27 年 11 月）に掲げられた４類型の新入試（「大学適応力重視型入試」「加速学習型入試（高大連携型推薦入試）」「国際経験・英語力重視型入試（国際型入試）」「記述学力重視型入試（バランス型）」）（「九州大学新入試 QUBE」）に基づき、以下に述べる４つの入試を実施する。

なお、本学部の選抜方法における特徴は次のとおりである。

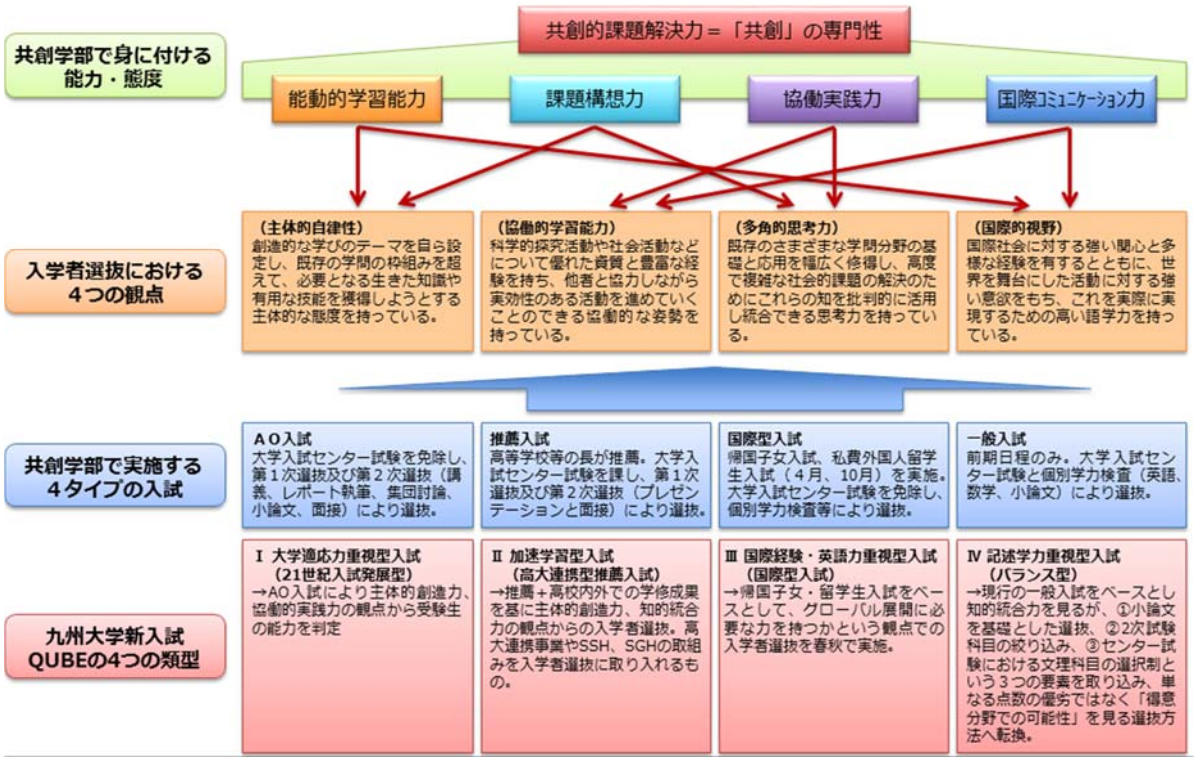
・すべての選抜類型において「志望理由書」を提出させて受験生の資質を丁寧に判定する

・21 世紀プログラムで実施してきた AO 入試のノウハウを生かした AO 入試を実施する

・九州大学では初となるセンター試験利用型の推薦入試を導入して新しい高大接続の道を開拓する

・一般入試前期に「小論文」を導入してこれまでにない思考力・表現力をみる試験を実施する

・希望者について、指定した英語能力試験（実用英語技能検定、TOEFL-iBT、IELTS、GTEC-CBT、TEAP（４技能））のスコアを大学入試センター試験「英語」の得点に換算して利用する（一般入試、推薦入試）



ｉ）AO 入試

AO 入試では、現代社会の課題に対して強い問題意識を持ち、大学入学後には、その課題を解決するために必要となる分野について積極的に学習や活動を進める考えがあり、そのために既存の学問の枠組みを超えて研究していこうとする意欲と、その意欲を実現するための基礎的な学力を有し、他者と討論しながら解決策に迫る協働的学習能力に優れている学生を選抜する。

募集人員は、20 名とする。

第１次選抜では、提出書類（調査書（又は調査書にかわる書類）、志望理由書、活動歴報告書（活動するために活用した「知識や技能」と、その活動を通して身につけたり、伸ばしたりすることのできた「能力や態度」を記述。添付資料として英語外部検定試験の成績の提出を認める。））を総合的に評価し、選抜する。第２次選抜では、実際に大学で行われる講義（人文社会系と自然科学系の二つの講義）を受講した上で、レポート執筆、集団討論、小論文の作成、面接を行い、提出書類の内容をあわせて総合的に評価し、選抜する。

ⅱ）推薦入試

推薦入試では、高等学校までの正課の学習に加えて、部活動や学校内外での社会活動や特別プログラム等において、高度な科学的探究活動や社会貢献活動などを行い、その成果を諸団体が企画･運営する研究会等で発表しているなど､自主的な研究活動、社会活動等のための高い資質と顕著な活動実績を有する学生について、学校長からの推薦を受けることができる。

募集人員は、10 名とする。

第１次選抜では、提出書類（推薦書、調査書（又は調査書にかわる書類)、志望理由書、活動歴報告書（活動するために活用した「知識や技能」と、その活動を通して身につけたり、伸ばしたりすることのできた「能力や態度」を記述。））を総合的に評価し、選抜する。第２次選抜では、高校までの活動と入学後の学習構想のプレゼンテーションと面接を行い、大学入試センター試験の「国語」「数学」「英語」の成績及び提出書類の内容をあわせて総合的に評価し、選抜する。指定した英語外部検定試験の成績表を提出した者については､所定の基準に従って､大学入試センター試験の「英語」の点数に換算し、大学入試センター試験の「英語」の得点と英語外部検定試験の換算値のうちの得点の高い方で評価する。

ⅲ）国際型入試

国際型入試では、現代の国際社会に対する強い関心と多様な経験を有し、世界を舞台にした活動に対する強い意欲を持ち、その意欲を実現するための高い語学力（特に英語で学び・考え・行動するための語学力）を備える学生を選抜する。全ての入試で志望理由書（４月入学の入試では日本語、10 月入学の入試では英語）の提出を求め、「国際的視野」を評価するとともに、各々の学力検査を通じて「多角的思考力」を判定し、面接を通じて「主体的自立性」と「協働的学習能力」を評価する。

募集人員は、10 名とする。

○帰国子女入試

大学入試センター試験を免除し、個別学力検査（一般入試の「数学Ⅰ、数学Ⅱ、数学 A、数学 B」と「外国語（英語)」)、面接及び提出書類を総合的に評価し、選抜する。

○私費外国人留学生入試（４月入学）

TOEFL、IELTS（アカデミック・モジュール）又はケンブリッジ英検（FCE、CAE または CPE）のいずれかの成績及び日本留学試験の教科・科目（「日本語・総合科目・数学１」又は「日本語・数学コース２・理科２科目」）の成績並びに本学において実施する日本語試験（読解、記述、聴解）の成績、面接及び提出書類を総合的に評価し、選抜する。

○私費外国人留学生入試（10 月入学）

SAT 等の統一試験の成績、面接及び提出書類を総合的に評価し、選抜する。第１次選抜では、提出書類を総合的に評価し、選抜する。第２次選抜では、面接を行い、提出書類の内容をあわせて総合的に評価し、選抜する。

ⅳ）一般入試（前期）

一般入試では、高等学校までの学習内容について幅広い基礎的知識と応用力を修得し、知識を活用しながら、問題の解に近づくことのできる発想力と、試験問題の解答を導きだすだけでなく、問題そのものの意味を問うことのできる、批判的な思考力を持つ学生を選抜する。

募集人員は、65 名とする。

大学入試センター試験及び個別学力検査を課す。

大学入試センター試験については、国語、数学、外国語、理科、地理歴史・公民の５教科とし、大学入試センター試験の配点は次表のとおりとする。

教科	科目名		配点
国語	国語		100
数学	数学Ⅰ・数学 A（必須）		100
	数学 II・数学 B、簿記・会計、情報関係基礎から１科目		
外国語	英語（英語リスニング含む）、ドイツ語、フランス語、中国語、韓国語から１科目		100
理科	物理基礎、化学基礎、生物基礎、地学基礎	から１～３科目	200
	物理、化学、生物、地学		
地理歴史・公民	世界史 B、日本史 B、地理 B、現代社会、倫理、政治・経済から１科目又は２科目		

［地歴公民・理科の受験科目は、次の４つのパターンから選択］

○地歴公民２、理科基礎２

○地歴公民２、理科１

○地歴公民１、理科基礎２、理科１（理科は同一名称を含む科目の組合せも可）

○地歴公民１、理科２

大学入試センター試験では、これらの得点を総合し、「多角的思考力」の基礎を評価する。

「英語」については、指定した英語外部検定試験の成績表の提出を認める。英語外部検定試験の成績は所定の基準にしたがって、大学入試センター試験の英語の点数に換算し、大学入試センター試験の英語の得点と外部英語検定試験の換算値のうちの得点の高い方で評価する。

個別学力検査については、英語、数学、小論文を課し、個別学力検査の配点は次表のとおりとする。

英語は、本学部が育成を目指す、課題解決のために世界の人びとと対話できる人材となるための基礎的な英語力を評価するものである。数学は、学部の共通科目であるデータサイエンスや数学・物理を履修し、理科系の諸科目を履修していくことができるための学力を問うている。そして小論文では、与えられた題材をもとに、課題解決のためにどのような思考ができるか、またその思考を的確に表現できるかどうかを問

うものである。これらの科目は、本学部が育成を目指す人材の基礎的な能力と、大学入学後に学部カリキュラムを履修するために必須となる能力を評価するために設定されている。

教科	科目	科目名	配点
英語	1	コミュニケーション英語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・英語表現Ⅰ・Ⅱ	400
数学	1	数Ⅰ・数 A（場合の数と確率・図形の性質・整数の性質）・数Ⅱ・数 B（数列・ベクトル）	300
小論文	1	小論文	300

９．海外留学等の具体的計画

（１）海外留学

グローバル社会において多様な分野で活躍する人材を育成するため、海外大学等への留学等を義務付け、全ての学生が異なる文化の中で学び活動する経験を積み、広く異なる歴史的・文化的背景や価値観の存在を認識し、国際理解・知識の拡大に加え、言語能力（語学力）とコミュニケーション力の向上を図っていく。

共創学部の教育の理念に即して海外留学を、①課題解決のために必要となる複数の専門分野の考え方や理論の獲得、または②社会的課題とその解決に向けた社会の取組やその歴史の調査として位置付け､その活動内容の評価に基づいて､単位認定を行う。

学生には、原則１回の留学を課し、卒業までに複数回留学することを推奨する。学生の留学のパターンとしては、下の表の上３つのパターンを想定している。

なお、短期の語学研修は本学部が義務とする留学とはみなされない。外国人留学生は、九州大学で学ぶことですでに留学を経験しているので、海外大学への留学を義務付けることはせず、日本国内におけるインターンシップ等を課す。

種　　類	目　　的　　等
交換留学	海外の大学機関と締結した大学間学生交流協定等に基づき、交換留学生として１年以内の期間で留学を行い、エリアの専門分野に関連する授業等を履修し、単位の取得を目的とする学修活動。 ○実施可能年次：２年次～４年次 ○選考時期：９月 ○実施期間：１学期から１年間
海外インターンシップ等	海外でのインターンシップやボランティア活動の機会への参加、又は海外の大学機関におけるエリアの専門分野に関連する技術修練・習得などを目的とする活動。 ○実施可能年次：１年次～４年次 ○実施期間：８日以上（移動日を除く）１年未満
短期留学・研修	一定の語学力の保持などを条件に学内募集・選考を行う短期留学・研修プログラム、又は参加を許可する海外の教育機関等が実施する短期研修プログラムの参加を通じ、エリアの専門分野に関連する知識・技能の修得や、異なる歴史的・文化的背景や価値観の存在の認識と、国際理解・知識の拡大を目的とする学修活動。 ○実施可能年次：１年次～４年次 ○実施期間：概ね１ヶ月以内（プログラムによる）
語学研修	学術英語の運用力の向上を主たる目的とするサマー・プログラムなどへの参加を通じ、語学力やコミュニケーション力の向上に寄与する英語の運用能力の向上を目的とした学修活動。 ○実施可能年次：１年次～４年次

	○実施期間：概ね１ヶ月以内（プログラムによる）

英語圏の大学（非英語圏の大学の英語プログラムを含む。）への留学を希望する場合の英語力の目安は、「TOEFL iBT 65 以上」、「IELTS 5.0 以上」、「TOEFL ITP 510 以上」を想定している。

【主な留学プログラム】

○海外インターンシップ

九州大学が大学会員として加入している一般社団法人日本国際学生技術研修協会（IAESTE Japan）が提供する海外インターンシップで、IAESTE 加盟国内にある企業または大学・研究所などの教育・研究機関で、研修期間は最短８週間から最長 52 週間である。

なお、研修期間が最長 52 週間とあるのは九州大学の規定である。共創学部としては、修業年限期間で修了できるように、「学修計画書」の作成の際に、インターンシップ期間が半年以内に収まるよう履修指導を行う。これまでの本学における海外インターンシップの実績を踏まえると、海外インターンシップの実施期間は２ヶ月から３ヶ月程度が標準であり、また本学が４学期制を導入し、科目の配置を行っていることを考えれば、修業年限期間で修了することは十分に可能である。

○短期留学・研修・語学留学のプログラム

種類	プログラム名	実施期間	留学・研修先
短期留学・研修	アジア太平洋カレッジ	・選考：5 月 ・実施：８月に２週間又は３週間、および２月に２週間	釜山大学校（韓国）、ハワイ州立大学マノア校（米国）、ソウル大学校（韓国）
	AsTW（ASEAN in Today's World）	・選考：11 月頃 ・実施：３月初旬に２週間	ASEAN 地域の大学
	アントレプレナーシップ・米 国セミナー	・選考：６月頃 ・実施：３月初旬に１週間	サンフランシスコ、シリコンバレーにある企業や大学
	VIA プログラム	・説明：４月 ・実施：７月下旬から８月下旬に約２週間	タイ、シリコンバレー、スタンフォード大学（米国）
	ドイツ･インターンシップ研修	・説明：４月以降 ・３月に１ヶ月	ドイツ･オデンヴァルト郡の中小企業
研 学	シリコンバレー英語研	８月下旬から９月下	サンノゼ州立大学（米国）

	修プログラム（SVEP）	旬に約５週間	
	ケンブリッジ大学英語・学術研修	８月中下旬から９月初中旬に約３週間	ケンブリッジ大学ペンブロークカレッジ（英国）
	モナシュ大学英語研修	２月下旬から３月下旬に約１ヶ月	モナシュ大学（豪州）
	CLP-C（中国語研修）	２月下旬から３～４週間	台湾師範大学（台湾）又は北京語言大学（中国）

【留学プログラムの説明】

アジア太平洋カレッジは、九州大学が米国のハワイ大学、韓国のソウル大学、釜山大学と共に主管として実施している「国際体験型」共同教育プログラムである。１年目は韓国のソウル大学、延世大学、釜山大学と、日本の九州大学、西南学院大学が共同で実施する「日韓共同教育プログラム・キャンパス日本・韓国」、２年目には、米国のハワイ大学が加わる「日韓米協働教育プログラム・キャンパスハワイ」からなる。現地でのフィールドワーク、企業でのプレゼンテーション、英語による特別講義とディスカッションからなり、本学部の理念とする課題解決のための海外経験の機会が提供されている。

上記の内容は、共創学部が求める留学の要件とする①を満たしていると考えられる。
当該プログラムを単位認定する場合の科目の例としては、経験科目である「海外活動Ａ１」などが考えられる。

AsTW は九州大学と ASEAN 加盟国の有力大学が共同で開催する､英語による ASEAN と東アジア、及びアジア言語文化を学ぶ短期留学プログラムである｡AsTW には ASEAN を中心とする海外の大学から多くの大学生が参加するプログラムで、授業はすべて英語で行われ、参加者同士のコミュニケーションも英語で行われる。課題解決のために国境を越えて協働で取り組むためのコミュニケーション能力を養うことができ、本学部の理念を実現するプログラムといえる。

上記の内容は、共創学部が求める留学の要件とする①を満たしていると考えられる。

当該プログラムを単位認定する場合の科目の例としては、経験科目である「海外活動Ａ１」などが考えられる。

アントレプレナーシップ・米国セミナーは、米国東海岸ボストンで、アメリカ及びアジアの学生たちとともにスタートアップ創業実践を行う国際水準のアントレプレナーシッププログラムである。トータル８日間におよぶ事前研修を経て、約 10 日間の本プログラムに臨む。米国の他、中国やベトナムなどアジア各国の学生も加わった多国籍チームを編成し、自分たちの問題意識にもとづいて課題の発見と解決に取り組む。課題解決を理念とする本学部の理念にかなったプログラムである。

上記の内容は、共創学部が求める留学の要件とする①を満たしていると考えられる。

当該プログラムを単位認定する場合の科目の例としては、経験科目である「海外活動Ａ１」などが考えられる。

VIA プログラムは、スタンフォード大学内 NPO 団体 VIA（Volunteers in Asia）が主催するプログラムである。プログラムは、グローバル・リーダーシップ、ソーシャル・イノベーションを主たる内容とするグローバルスキルの養成を目的としており、グローバルな課題解決を目

指す本学部の理念にかなうプログラムである。
上記の内容は、共創学部が求める留学の要件とする②を満たしていると考えられる。
当該プログラムを単位認定する場合の科目の例としては、経験科目である「海外活動Ａ２」などが考えられる。
ドイツ・インターンシップ研修は、１ヶ月におよぶ語学と現地のさまざまな機関や職場での研修である。本学部は英語の運用能力を伸ばし、世界の人びとと対話する人材の育成を目指しているが、英語だけが世界の全てでないことは言うまでもなく、英語力を伸ばすことを前提に第２外国語の修得をはかることを積極的に認めている。ドイツ語はヨーロッパでは最も使用人口の多い言語であり、多極化する世界に向き合っていくために学ぶべき言語と位置づけられる。本プログラムでは、１週間のドイツ語研修の後に、３週間におよぶ学校や福祉施設などでの研修があり、ドイツ社会の現状をとおして、世界の課題を発見するために有意義なプログラムである。
上記の内容は、共創学部が求める留学の要件とする①を満たしていると考えられる。
当該プログラムを単位認定する場合の科目の例としては、経験科目である「海外活動Ａ１」などが考えられる。

また、交換留学の例として、以下の２大学を例として挙げる。

【シドニー大学】
例えば、越境環境汚染をテーマに取り組もうとしている学生が、シドニー大学に交換留学を行う場合、これは共創学部が求める留学の要件とする①を満たしていると考えられる。
シドニー大学で開講されている科目を履修した場合は、経験科目である「海外活動Ａ１」及び「海外活動Ｂ１」で認定することになるが、エリア発展科目で該当する科目がある場合は、当該科目で認定する。
例えば、学生がシドニー大学で開講される「Mol Biology and Biochemistry-Proteins」を履修した場合は、当該科目がタンパク質の構造及び機能の理解に関する内容となっていることから、「Biochemistry」で、「Development Economics」を履修した場合は、当該科目が途上国で特に深刻な諸問題を分析、解釈する内容となっていることから、「開発経済学」で読み替えることができる。

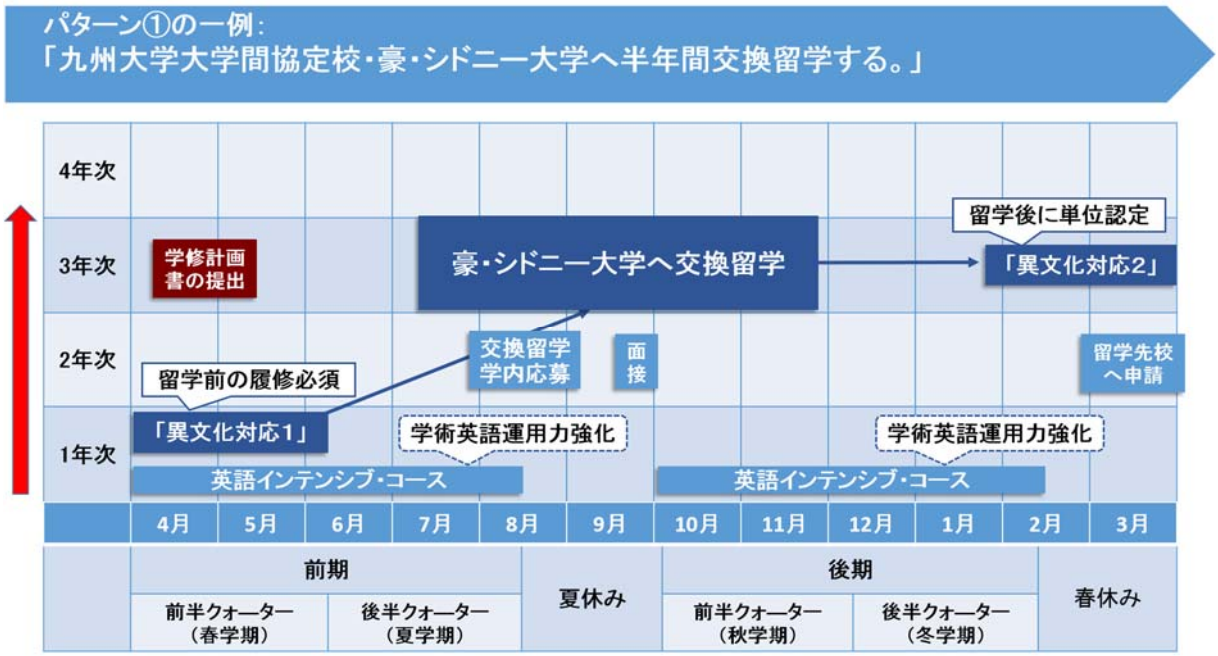
【リーズ大学】
例えば、地球温暖化の影響をテーマに取り組もうとしている学生が、リーズ大学に交換留学を行う場合、これは共創学部が求める留学の要件とする①を満たしていると考えられる。
リーズ大学で開講されている科目を履修した場合は、経験科目である「海外活動Ａ１」及び「海外活動Ｂ１」で認定することになるが、エリア発展科目で該当する科目がある場合は、当該科目で認定する。
例えば、学生がリーズ大学で開講される「Atmosphere and Ocean Dynamics」を履修した場合は、当該科目が大気と海洋循環に関する原理の紹介をしながらも、公害輸送など環境問題にも触れながら講義を行う内容であることから、「大気海洋科学」で、

「Sustainable Development: Concepts and Case Studies」を履修した場合は、当該科目が自然科学的側面と社会科学的側面から環境に関する現在の懸念事項についてアプローチしていることから、「社会の中の地球科学」で、「Environment and Ecology」を履修した場合は、当該科目が持続可能な資源の使用をテーマとし、生態学に関する講義等を行うことから、「環境保全・再生」で読み替えることができる。

【主たる留学パターン】

図１：交換留学の履修モデル

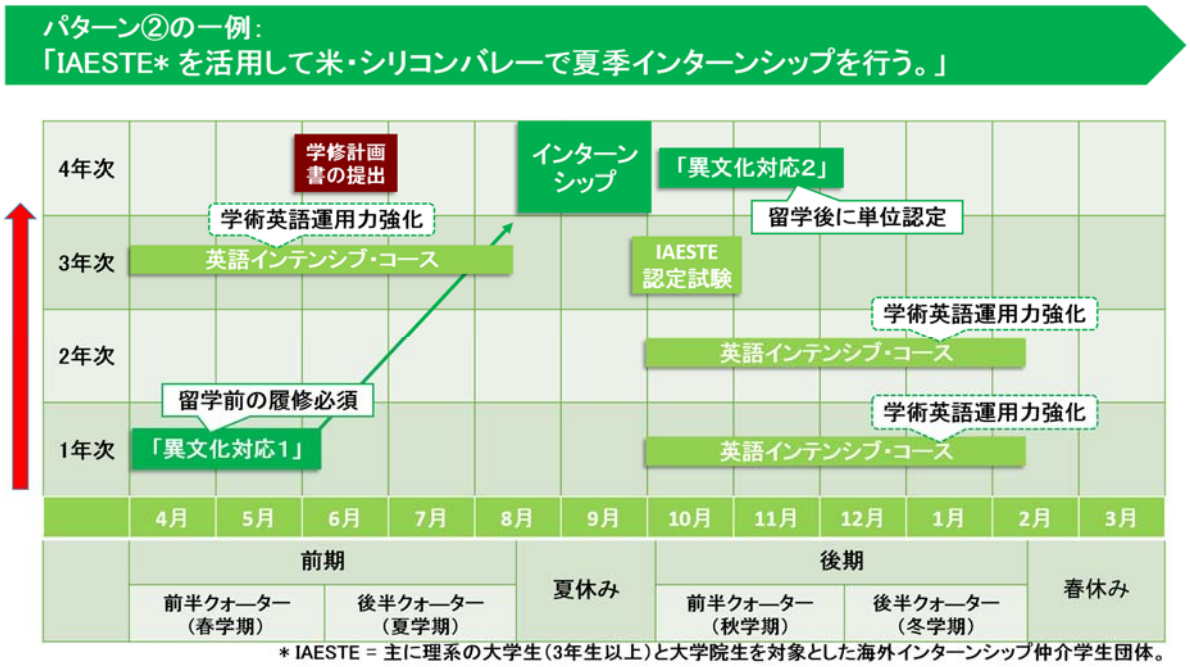
パターン①の一例「九州大学大学間協定校・オーストラリア・シドニー大学へ半年間交換留学する」



※九州大学が大学間交流協定（学生交流協定）を締結している大学数は現在、116 校であり、その学生受け入れ枠数は 513 人である。今後、さらに全学レベルでも部局レベルでも締結校を拡大していく予定である。（選考時期：９月）

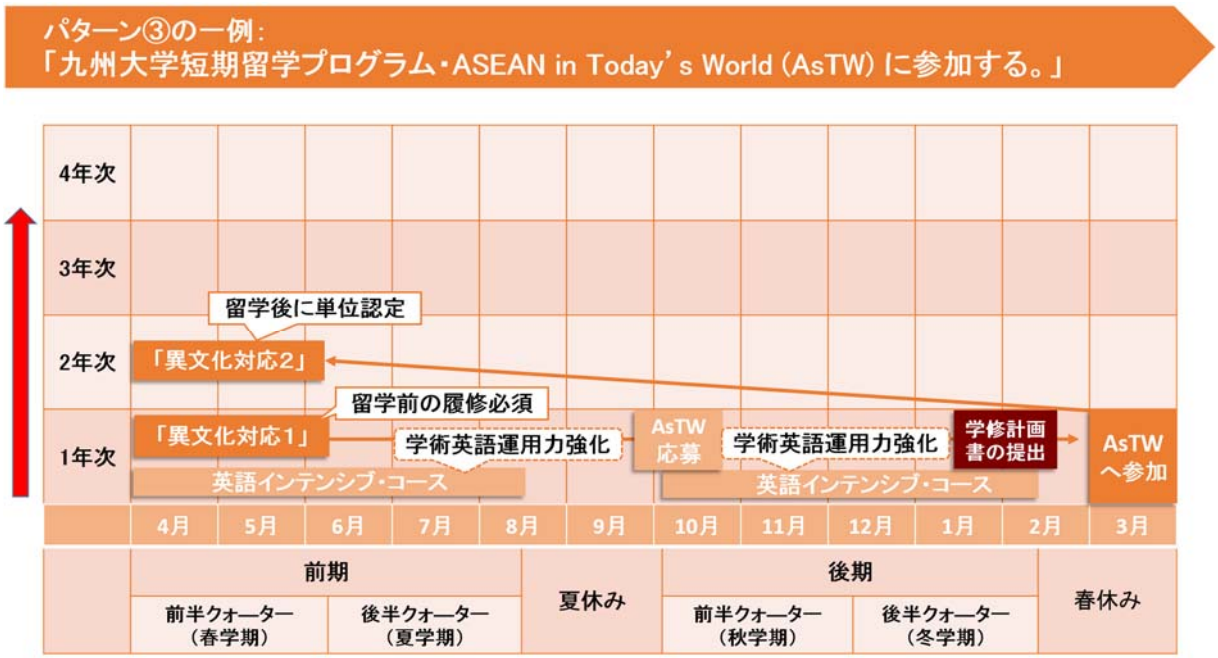
図２：海外インターンシップ等の履修モデル

パターン②の一例「IAESTE を活用して、米国・シリコンバレーで夏季インターンシップを行う」



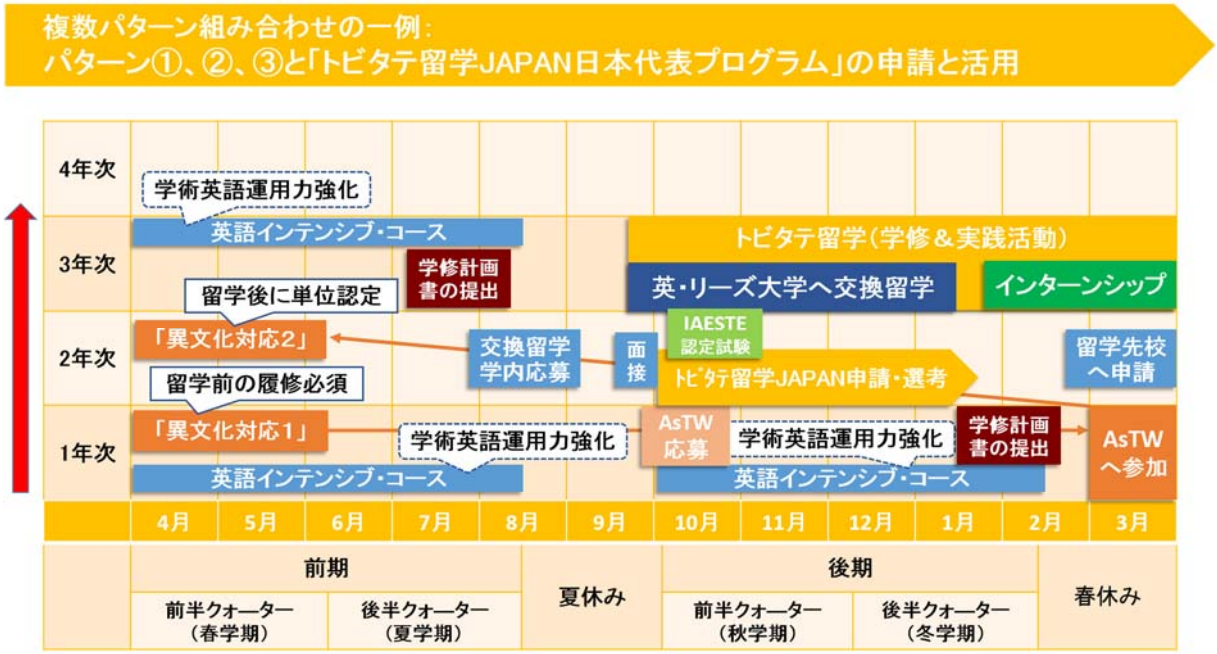
※イアエステ海外インターンシップは学部３年次以上が対象である。今後も精力的に海外インターンシップ先を開拓していく予定である。

図３：短期留学・研修の履修モデル
パターン③の一例「九州大学短期留学プログラム・ASEAN in Today's World に参加する」



※ ASEAN in Today's World は学部生が選考対象である。

図４：複数パターンの組み合わせの履修モデル
パターン①、②、③と「トビタテ留学 JAPAN 日本代表プログラム」の申請と活用



Ⅰ）留学前、留学後における指導等

【留学前】

留学前に経験科目「異文化対応１」を履修させ、異文化理解、留学と就職、日本人としてのアイデンティティ、危機管理など留学前に学ぶべき基礎的な知識等を修得させる。

また、留学を計画する学生に対しては、外部の危機管理機関と連携して実施する「海外渡航前危機管理セミナー」の受講を義務付け、「自分の身は自分で守る」という意識の醸成を図るとともに、「海外渡航危機管理ハンドブック」を配付し、留学先の情報収集をはじめ、留学中に気をつけること（危険情報と行動の基準、危機回避の行動三原則、事件・事故の対策等）について、周知する。

以上の留学に関する一般的・基礎的な指導をうけながら、学生は具体的な留学先での「学修計画書」を、教員（チューター、修学ナビゲーター、指導教員等）の指導のもとに作成し、学務委員会に提出する。学務委員会は、提出された「学修計画書」の内容を審査し、本学における留学等の位置づけに即しているかどうかを判定し、教授会で承認する。

なお、留学先の地域や文化については、学生自身が調べて計画等を立てて学ぶことに意義があるため、留学を計画する学生に対して指導を行う。

世界的規模での競争的協力関係の構築という本学の国際戦略に沿い、海外からの優秀な留学生の獲得と、海外における学術情報の発信・収集等を行うため、海外オフィスを複数設置しており、海外オフィスからのアドバイスを受けながら、留学の支援を行う。

◆海外オフィス

英国：ロンドンオフィス
ドイツ：ミュンヘンオフィス
米国：カリフォルニアオフィス・ワシントン D.C.オフィス
韓国：ソウルオフィス
中国：北京オフィス
台湾：台北オフィス
エジプト：カイロオフィス
ベトナム：ハノイオフィス
タイ：マヒドン大学内ブランチオフィス
インドネシア：ガジャマダ大学内ブランチオフィス

【留学後】

留学後には、留学体験を生かした積極的な学生同士の学びの場や、外国人留学生との交流を通じ異なる文化・考え方に触れる機会の提供を図る。

留学した学生に対しては、留学に関するレポートの提出と発表を義務付け、内容等を総合的に判断し、「異文化対応２」と、学修内容や学修期間に応じて「海外活動 A１」「海外活動 B１」「海外活動 A２」「海外活動 B２」の単位を認定する。海外の大学において取得した授業科目のうち、「エリア発展科目」と教育内容の同等性が認められる授業科目については、３０単位を上限に読み替えて単位認定する。以上の科目の単位取得のために、学生は教員（チューター、修学ナビゲーター、指導教員等）から必要な指導を受けることができる。

また、留学中に受けるカルチャーショックより、帰国後に経験する逆カルチャーショックに悩むことも想定されるため、心理面でのサポート体制を整備する。

Ⅱ）危機管理

留学前には、「海外渡航前危機管理セミナー」の受講を義務付け、「自分の身は自分で守る」という意識の醸成を図るとともに、留学先の国等に関する入念な事前調査をはじめ、留学前の事前指導（留学先の大学等の情報、ビザなど留学に際しての諸手続き、平常時・緊急時の連絡体制、危機が発生した場合の対処方法、海外旅行保険加入など）を徹底して行う。

留学中の学生とは、配置予定の留学コーディネーターを中心にメールやｅポートフォリオ、スカイプ等を活用して緊密な連絡を取り、修学面・生活面でのサポート行う体制を構築する。

また、交換留学や海外研修中の学生に不測の事態が発生する場合も想定し、外部の危機管理機関とも連携して、緊急時の対応が取れるよう学部長を中心とする危機管理体制を構築する。

Ⅲ）評価と単位認定

【留学前】

学生は１年次、留学準備のために、異文化理解や留学と就職、日本人としてのアイデンティティ、危機管理などを学ぶ「異文化対応１」（必修科目）を履修する。

また、留学先での学修内容に関して、教員（チューター、修学ナビゲーター、指導教員等）の指導を受け、留学の目的及び受講予定科目等を記載した「学修計画書」を作成し、学務委員会に提出する。学務委員会は、計画が「経験科目」の趣旨に沿っているものかどうか判定し、教授会で承認する。

【留学後】

留学先での学修内容を、学術的なレベルでのプレゼンテーション及びレポートとして完結する。自分の学修内容のプレゼンテーションと他の学生のプレゼンテーションの聴講、および討論に出席し、最終的にレポートを提出して評価を受け、合格すると「異文化対応２」（必修科目）の単位が認定される。

また、留学中の学修や活動について、共創学部の留学の目的を踏まえた綿密な指導を受け、「海外活動Ａ１」「海外活動Ｂ１」「海外活動Ａ２」「海外活動Ｂ２」のいずれか一つ又は複数の科目を履修する計画を立てる。留学後に、当該学修計画に沿った学修が行われているかなどを確認し成績評価をして、「海外活動 Ａ１」「海外活動 Ｂ１」「海外活動Ａ２」「海外活動Ｂ２」のいずれか一つ又は複数の単位を認定する。

この他、海外の大学において取得した授業科目のうち、「エリア発展科目」と教育内容の同等性が認められる授業科目については、３０単位を上限に読み替えて単位認定する。希望する学生は、次の資料を提出し、単位認定を申請する。

○留学先大学の成績評価方法等（評語や単位の意味、ナンバリング体系）を確認できる資料

○留学先大学発行の成績証明書、授業の内容、授業時間、回数等を確認できる資料（シラバス等）

○留学先大学の学年暦（授業の開始終了、試験・休暇期間）を確認できる資料

○教科書、ノート、レポート等、学修の成果を確認できる資料

なお、単位認定にあたっては、次の基準に従って単位を計算する。

○講義科目：15 時間の授業＝１単位（90 分×15 回＝1350 分＝２単位）

○演習科目：30 時間の授業＝１単位

○実験・実習・実技科目：45 時間の授業＝１単位

なお、海外インターンシップの単位認定にあたっては、学生からのレポート及び企業からのレポートを提出させ、「海外活動」の科目担当教員が面接を行った上で、「学修計画書」を踏まえ、当該インターンシップの内容が、単位を認定する留学の要件である「①課題解決のために必要となる複数の専門分野の考え方や理論の修得、②社会的課題とその解決に向けた社会の取組やその歴史の調査」であるかについて確認した上で、単位認定を行う。

【海外活動Ａ１・Ａ２・Ｂ１・Ｂ２の違いについて】

「海外活動Ａ１・Ａ２・Ｂ１・Ｂ２」は、経験科目である。経験科目は何を経験するかだけでなく、どれだけの量の経験をするかが重要である。そこでこの科目は、まずは経

験の量という点から、１単位科目である「海外活動Ａ」と２単位科目である「海外活動B」に分けている。そしてその次に経験の違いを、本学部の海外留学等の位置づけである「①課題解決のために必要となる複数の専門分野の考え方や理論の修得」の要件に対応する「課題解決を考えていく上で必要な知識・技能の獲得」を目的とする「１」と、「②社会的課題とその解決に向けた社会の取組やその歴史の調査」の要件に対応する「課題解決を考えていく上で必要な調査活動等」を目的とする「２」に分けている。

活動目的 活動例	課題解決のための知識・技能の獲得	課題解決のための調査活動等
①講義等（15 時間以上） ②インターンシップ等（30 時間以上） ③調査活動（30 時間以上）	海外活動Ａ１（１単位） ① ②（技能の取得が目的の場合）	海外活動Ａ２（１単位） ②（現場を調査することが目的の場合） ③
④講義等（30 時間以上） ⑤インターンシップ（60 時間以上） ⑥調査活動（60 時間以上）	海外活動Ｂ１（２単位） ④ ⑤（技能の取得が目的の場合）	海外活動Ｂ２（２単位） ⑤（現場を調査することが目的の場合） ⑥

Ⅳ）海外留学の経済的支援

海外留学の経済的支援として、次のような各種奨学金への指導を徹底して実施する。

（１）「官民協働海外留学支援制度～トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラム～」をはじめ、（独）日本学生支援機構による海外留学支援制度や企業等からの奨学金を含め、九州大学は、毎年度合計で５００名以上の学生が海外留学に関する奨学金を受給している（トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラムに対し、平成２８年度第６期の九州大学の学生の受給人数は２８名であり、全国１位の採用実績であった）。したがって、このような奨学金制度（プログラム）へ、留学予定時期に合わせて積極的に申請するように指導する。

（２）留学する学生に対する九州大学独自の支援制度として、九州大学基金による渡航費援助制度と九州大学全学協力事業基金による奨学金を設けている。九州大学基金による渡航費援助制度については、年間１０００万円程度の予算を確保しており、毎年度５０名程度の学生を支援する枠を設けている。九州大学全学協力事業基金による奨学金については、年間１２００万円程度の予算を確保しており、毎年度約２０名程度の学生が支援を受けている。さらに、平成２９年度から共創学部設置等による国際化の更なる推進を見据え、２０００万円程度に予算枠を拡大したところである。上記

の（１）の可能性がない場合は、この支援制度に応募するように指導する。

（２）インターンシップ

共創学部の外国人留学生は、日本の九州大学において学ぶことで、すでに留学を経験（外国人留学生から見れば日本という外国に留学）している状態にあり、経験科目が求める経験を積んでいること、またビザ等の渡航手続きを考慮して、日本から海外への留学を義務付けることはしない。外国人留学生の「経験科目」の単位修得のためには、原則として、日本国内企業へのインターンシップを実施することにより対応する。

インターンシップは、社会的自立や職業生活に必要な能力の育成と、主体的な職業選択や高い職業意識の育成が図られる重要な機会であり、自らの専門分野や、将来希望する職業に関連した職場で業務を体験することを通じ、大学で学んだ内容と社会との関連性を認識し、大学における学修と社会での経験を結びつけることで、学生の大学における学修の深化や新たな学習意欲の喚起につながる。日本国内での就職や、海外に拠点を持つ日本企業への就職を希望する外国人留学生も想定されることから、九州７県の自治体と九州経済連合会が連携して設立している「九州留学生就活サポート協議会」等と連携を図りながら、インターンシップの機会を積極的に提供する。

Ｉ）指導等

【活動前】

インターンシップを行う学生に対しては、「学生教育研究災害傷害保険」及び「学生教育研究傷害保険付帯賠償責任保険」の加入を義務付け、インターンシップ届出書を提出させ、インターンシップ前には、秘密保持、知的財産の取扱い等についての指導を行う。

また、外国人留学生向けに開講されている「就職活動講座」などの受講を義務付けるとともに、外国人留学生の日本での就職を支援する目的で学生支援センターに配置されているキャリアコーディネーター、就職相談員等の支援を受けながら修学指導を行う。

外国人留学生が国内でインターンシップを行うにあたっては、受け入れ側の企業より一定レベルの日本語能力が求められることが想定されることから、日本語に関する語学能力（日本語に関する授業科目の履修状況、成績状況など）が一定のレベル（日本語能力試験Ｎ１相当）にあることを、インターンシップに行くための要件とする。

以上のインターンシップのための一般的・基礎的な指導を受けたあと、外国人留学生はインターンシップ先での活動について教員（チューター、修学ナビゲーター、指導教員等）の指導のもとに「学修計画書」を作成し、学務委員会に提出する。学務委員会は、提出された「学修計画書」の内容を審査し、経験科目の趣旨に合致しているかどうかを判定し、教授会で承認する。

【活動後】

インターンシップ後には、その体験を生かした積極的な学生同士の学びの場や、外

国人留学生との交流を通じ異なる文化・考え方に触れる機会の提供を図る。

インターンシップをした学生に対しては、インターンシップに関するレポートの提出と発表を義務付け、内容等を総合的に判断し、「異文化対応２」と、活動内容や活動期間に応じて「海外活動Ａ１」「海外活動Ｂ１」「海外活動Ａ２」「海外活動Ｂ２」の単位を認定する。以上の科目の単位取得のために、学生は教員（チューター、修学ナビゲーター、指導教員等）から必要な指導を受けることができる。

Ⅱ）評価と単位認定

【活動前】

外国人留学生は１年次、日本（外国人留学生にとっては海外）で学ぶことを客観的に見つめ直し、自分の立ち位置を再確認するために、「異文化対応１」（必修科目）を履修する。

また、インターンシップ先での活動内容に関して、教員（チューター、修学ナビゲーター、指導教員等）の指導を受け、インターンシップの目的等を記載した「学修計画書」を作成し、学務委員会に提出する。学務委員会は、計画が「経験科目」の趣旨に沿っているものかどうか判定し、教授会で承認する。

【活動後】

インターンシップ先での学修内容を、学術的なレベルでのプレゼンテーション及びレポートとして完結する。自分の学修内容のプレゼンテーションと他の学生のプレゼンテーションの聴講､および討論に出席し､最終的にレポートを提出して評価を受け、合格すると「異文化対応２」（必修科目）の単位が認定される。

また、インターンシップにおける学修や活動について、経験科目の目的を踏まえた綿密な指導を受け､「海外活動Ａ１」「海外活動Ｂ１」「海外活動Ａ２」「海外活動Ｂ２」のいずれか一つ又は複数の科目を履修する計画を立てる。インターンシップ後に、当該学修計画に沿った活動が行われているかなどを確認し成績評価をして､「海外活動Ａ１」「海外活動Ｂ１」「海外活動Ａ２」「海外活動Ｂ２」のいずれか一つ又は複数の単位を認定する。

なお、単位認定にあたっては、同一企業あるいは同一プログラムにおいて継続して１週間以上の実習を行うことを単位認定の条件とし、企業が作成するインターンシップに関する報告書（企業名及び実習部署、実習テーマ又は課題、実習期間及び１日の実習時間、テーマ又は課題への取組に対する指導及び評価などを記載したもの）と、企業から与えられたテーマ又は課題への取組と対策についてのレポートを提出させ、内容等を総合的に判断し、単位として認定する。

１０．管理運営

（１）学部ガバナンス

九州大学は、大学全体で世界的研究・教育拠点（グローバル・ハブ・キャンパス）の形成を目標に、アクティブ・ラーナーを育成するために、基幹教育を基盤に、学部専攻教育から大学院教育に至るまでの体系性を持ったカリキュラムの構築や、教育研究の理念、社会的課題への対応と提言、諸活動の不断の自己点検評価、大学や部局のIR情報などに基づき、構成員、部局、大学本部が一体となって、対話に基づく調和のとれた自律的改革に取り組んでいる。

共創学部は、このような大学全体のグローバル・ハブ・キャンパスを形成していくためのドライビングフォースと位置付けており、学部設置時は総長が指名する学部長がイニシアチブを十分に発揮できる学部ガバナンスを実現し、九州大学のミッションを踏まえた学部としてのミッションを、迅速かつ効果的に学部運営に反映できる管理運営体制を構築する。

また、学部設置後の学部長は、教授会が候補者を推薦することができる仕組みを設けるが、大学運営上、重要な職であることから、役員会において、候補者から部局の運営方針等についてのヒアリングを行い、役員会の議を経て、総長が任命する。

（２）教授会及び運営会議

教授会の審議事項は、教学事項に精選し、人事、予算その他学部運営に関する事項は、学部長を中心に構成する学部運営会議が執り行う。教授会は、専任の教授、准教授、講師で構成し、８月を除き原則毎月１回定例で開催する。

学部運営会議は、議長となる学部長を中心に、副学部長等で構成し、必要に応じて総長が指名する副学長又は副理事を参画させるなど、大学本部と学部を連携させた運営体制を構築する。運営会議は、学部の教育活動全体を点検し、改善をはかる学部運営組織、責任体制の司令塔としての役割を担い、常設委員会等と連携して、次のような活動を実施し、学部の教育水準の向上に務める。

・本学部の理念に基づいた教育活動が実際に行われているかどうか、また学生がどのように学修しているかを把握するために、学生と教員との懇談会、学生インタビューやアンケートを定期的に実施し、学部の教育活動を把握する。把握した内容に基づいて、問題点がないかどうかを検証し、問題が認められる場合は適切に対処し、改善をはかる。

・本学部のすべての教職員が本学部の理念に基づいた教育指導を実施できるよう、特にチューター、修学ナビゲーター、指導教員、科目担当教員としての業務に関して、FD、SDを実施する。

・本学部の学生の出身高校に対する訪問調査や、卒業生の追跡調査を行い、高校や就職先の民間企業、自治体、団体等から、本学の学生・卒業生に関する聞き取り調査を定期的に実施し、必要に応じて本学部の理念、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーの見直しを検討する。

（３）副学部長及び常設委員会

学部長がイニシアチブを十分に発揮できる体制を構築し、学部ガバナンスを円滑に行うため、学部長を補佐・支援する学部長指名の副学部長を２名置く。副学部長は、危機管理の観点から、学部長の補佐の役割に加え、学部長に事故がある場合の職務の代理や学部長が欠けた場合に職務の代行ができる仕組みを設ける。また、学部長、副学部長が一体となった部局運営体制を構築するため、副学部長は、学部長の推薦に基づき、総長が任命する。

学部の恒常的な業務を円滑に処理するため、常設委員会として、学務委員会、入試委員会、評価委員会、広報委員会、情報公開・個人情報保護委員会を置く。

（４）教学マネジメント

本学部で養成する人材像を踏まえた、体系的な教育課程の編成、組織的な教育の実施、厳格な成績評価など教学マネジメント体制を実現するため、各専門エリア（人間・生命、人と社会、国家と地域、地球・環境）と、エリアを横断する専門領域のデータサイエンス､デザイン思考などを担当する代表教員によって､学務委員会を組織する。学務委員会には、２つの部会（教育部会、学生支援部会）を設け、学部のディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーと照らし合わせて、カリキュラム内容、学修方法、学修支援などについて常に点検し、必要に応じて改善を図る役割を担っていく。

（５）人事給与システム

九州大学では、魅力ある年俸制給与体系とメリハリある業績評価体制の一体的構築により、組織の活性化及び多様な人材を確保することを目的に、平成２６年１０月１日から教員の年俸制を導入し、今後も年俸制の導入促進に取り組むとともに、本学独自の取組である「大学改革活性化制度」を活用した多様な人事を促進し、教員の流動性の向上と教育研究の活性化を図る。

１１．自己点検・評価

（１）全学の自己点検・評価

全学的な自己点検・評価について、九州大学学則第２条において、「教育研究水準の向上を図り、本学の目的及び社会的使命を達成するため、本学における教育研究活動等の状況について自ら点検及び評価を行い、その結果を公表する」こと、及び「自己点検・評価及び第三者評価等多様な評価の結果を本学の目標・計画に反映させ、不断の改革に努める」ことを定め、学則第 33 条で大学評価に関する重要事項を審議する組織として、大学評価委員会を置くことを定めている。

大学評価委員会は、①本学の教育及び研究、組織及び運営並びに施設及び設備の評価、②国立大学法人評価、③認証評価、④教員の教育・研究等活動の評価、⑤各部局の評価活動の総括、⑥大学評価に係る報告書の作成及び公表、⑦大学評価情報システムの運用等に関することを任務とし、総長を委員長とし、理事、副学長、各部局の長、事務局長で構成している。

全教員を対象とする教員活動評価も実施しており、教員活動評価では、①教員自身の教育研究活動の把握と改善向上と、②部局の将来構想における諸施策への活用を目的に、全学での基本的枠組みを設定し、部局の特性に配慮した実施体制や実施方法を定め、部局ごとに実施している。

また、教育・研究活動の継続的な改善を行っていくためには、改善に役立つための評価活動の質の向上を進めると同時に、効率的・効果的な評価体制の構築も必要であるため、九州大学では、多様かつ大量の必要データを処理・管理する情報処理システムの開発・運用を行っている。①大学経営や将来計画に関する基礎資料を収集、②自己点検・評価及び第三者評価への基礎資料、③教員が教員活動評価のために毎年度提出する報告書への活用、④国際交流や社会貢献推進のための情報公開への活用、⑤学内外からの教育研究活動に関する調査への対応の５つを目的に掲げ運用している「大学評価情報システム」をはじめ、中期目標・計画の達成を念頭に置きながら、年度計画の自己点検・評価や根拠資料の収集・保管、さらには次年度計画の立案までの一連の業務をサポートする「中期目標・中期計画進捗管理システム」等を運用し、全学的な評価活動の質の向上と、効率的・効果的な評価体制の構築を図っている。

さらに、平成 28 年４月には、学内の様々なデータを一元的に収集、管理し、組織としての管理・運営機能の強化を図ることを目的に、これまで本学における点検・評価活動に対する支援や､学内外への情報の提供等の業務を担っていた大学評価情報室を、インスティテューショナル･リサーチ（IR）室として発展的に改組し、現状把握や改善事項への対応を迅速に行える体制の強化を図っている。

九州大学では、国立大学法人評価、大学機関別認証評価などの評価において、上記の組織体制のもと点検・評価を行うとともに、評価結果の分析を行い、課題や改善点を整理した上で学内に対応を促すなど、評価を適切に改善につなげる取組を推進している。

（２）共創学部の自己点検・評価

共創学部では、中期目標期間における全学的な方針である「自己点検・評価体制に関する基本方針」と、「年度計画の自己点検・評価に係る実施要領」に基づく本学部内の自己点検・評価を行う組織として、常設委員会の「評価委員会」を設置する。

評価委員会を中心に、大学の中期目標・中期計画を踏まえた上で、共創学部の教育研究の理念や目的に基づき、特色を生かした中期目標・中期計画を策定するとともに、学生の受入れに関する事項、教育内容及び方法に関する事項、学習成果に関する事項について、毎年度点検を行い、次年度の計画に反映させるといった改善を行う。

１２．情報の公表

（１）大学としての情報の公表

九州大学では、インターネット上に大学のホームページを開設し、大学としての基本方針である「教育憲章」や「学術憲章」をはじめ、中期目標・中期計画など今後の大学の取組に関する情報を発信するとともに、カリキュラム、カリキュラムマップ、シラバス、授業科目のナンバリング、定員、学生数、教員数や学内規則など、大学の基本情報を公開しており、具体的な公表項目の内容と、公開しているホームページのアドレスは以下のとおりである。

①大学の教育研究上の目的に関すること
②教育研究上の基本組織に関すること
③教員組織、教員の数並びに各教員が有する学位及び業績に関すること
④入学者に関する受入れ方針及び入学者の数、収容定員及び在学する学生の数、卒業又は修了した者の数並びに進学者数及び就職者数その他進学及び就職等の状況に関すること
⑤授業科目、授業の方法及び内容並びに年間の授業の計画に関すること
⑥学修の成果に係る評価及び卒業又は修了の認定に当たっての基準に関すること
⑦校地・校舎等の施設及び設備その他の学生の教育研究環境に関すること
⑧授業料、入学料その他の大学が徴収する費用に関すること
⑨大学が行う学生の修学、進路選択及び心身の健康等に係る支援に関すること

上記①～⑨　http://www.kyushu-u.ac.jp/ja/university/publication/education/

⑩その他

ａ．中期目標・中期計画、自己点検・評価報告書、認証評価の結果等
http://hyoka.ofc.kyushu-u.ac.jp/hyoka-home/index.html

ｂ．学内規則
http://www.kyushu-u.ac.jp/ja/university/information/rule/rulebook/

ｃ．学部・学府等の設置関係の書類
http://www.kyushu-u.ac.jp/ja/university/publication/establish/

１３．教育内容等の改善を図るための組織的な取組

（１）全学的な取組

九州大学では、教育関係事項に係る全学の中期目標及び中期計画の策定や、教育の質の保証に係る企画立案､支援等の業務を担う全学組織として｢教育改革企画支援室」を設置し、全学的な FD 活動を実施するとともに、各部局と連携して、各部局の FD 活動の支援を恒常的に行っている。

全学的な FD 活動では、全学的な教育課題等に関する内容を中心に、部局の FD 活動では、部局ごとの特性に応じた教育課題を取り上げて FD を実施しており、FD を企画する際には、教職員を対象としたアンケートや、学生を対象とした授業評価アンケートの結果を活用している。

全学的な FD 活動として､初任者教員研修や､教育改革研究会などを実施しており、これらの活動を通じて全学的な教育課題等に関する啓発や、課題の共有が図られ、カリキュラム、シラバス、教育手法、成績評価方法等の改善につながっている。

（２）共創学部の取組

共創学部では、全学的な FD 活動を踏まえ、学部内の FD に関する企画・実施を担う組織として、学務委員会教育部会の下に「FD 部会」を設置する。

FD 部会は、学務委員会と連携を図りつつ、学生や授業担当教員を対象とするアンケート調査等の分析結果に基づく､教育方法や､授業評価方法などの改善に向けた FD 活動を実施する。

また､本学部では､｢何を学んだから何ができる」という学問分野の専門性が先行する学び方ではなく､｢何をしたいから何を学ぶ」という課題が先行する学び方ができるカリキュラム設計としており、本学部の理念を共有し、養成する人材像を踏まえたカリキュラム編成、問題基盤型学習法を取り入れた授業設計とそれに基づくシラバス作成、ルーブリックによる成績評価、TBL の教育手法の共有などについて、教員と職員の共通理解の下で行うことが非常に重要となる。さらに、本学部が設定する課題は複数のエリアにまたがるものであることを踏まえると、課題やエリアの考え方についても共通理解が必要である。

よって、本学部の専任教員や、授業担当教員、TA となる大学院生に対して、具体的な教育方法等を学ぶ機会として、学部設置前から FD を実施し、学部設置後も恒常的に実施する。

１４．社会的・職業的自立に関する指導等及び体制

（１）教育課程内の取組について

本学部は、生涯にわたって自律的に学び続けるアクティブ・ラーナーの育成を目指すという基幹教育の教育理念を踏まえ、基幹教育で修得する学問分野の基礎的な知識をはじめ、豊かな教養へとつながる知識、技能を基盤とする形で構成し、学部が目的として掲げる人材の育成を、基幹教育と学部専攻教育が一体となって行うという考えの下、カリキュラムを編成し、現代社会が直面している問題に対して、自ら課題を設定してその解決に至るアプローチを「構想」し、異なる専門や知識をもつ多様な人々と「協働」し、これら構想と協働の学びや海外留学を通じて得られる「経験」をもとに、グローバル社会において新たな知や価値を生み出す「共創」の専門性を身につけた人材を育成することとしている。

①基幹教育科目（1000－3000 番台）

新たな知や技能を創出し、未知な問題を解決していく上での幹となる「ものの見方・考え方・学び方」を学ばせ、生涯にわたって自律的に学び続けるアクティブ・ラーナーとして必要な素養を身につける。

絶えず変化するグローバル社会において新たな知や価値を生み出すためには、「課題に応じ自ら必要なことを学ぶ」という態度・志向性を身につけることが必要で、「何を学んだから何ができる」という学問分野の専門性が先行する学び方ではなく、「何をしたいから何を学ぶ」という課題が先行する学びにより、学問を課題解決に生かすよりアクティブな態度と思考法を身につける。

②共通基礎科目（1000 番台）

現代社会が直面している問題に対して、自ら課題を設定してその解決に至るアプローチを「構想」し、異なる専門や知識を持つ多様な人々と「協働」していく上で必要となる共通の知識、技能の基礎を身につける。

③構想科目（2000－3000 番台）

課題解決のため着想や、多様な学問のアプローチを学ぶため、社会的課題が存在する領域として設定した４つのエリアに関する基礎的な知識､技能を修得する。

④協働科目（2000－3000 番台）

グループ討論により解決すべき課題を発見し、必要な知識や情報源を学習者が個々に収集・修得して共有し合う問題基盤型学習法を取り入れ、問題を発見し、解決を目指して学び続ける態度と技能の向上を図り、個々人の知識や得意とする分野を生かしつつ､他者と協働して課題の解決に向けた手法や技能を身につける。

⑤経験科目（1000－3000 番台）

海外大学等への一定期間の留学等を学生に義務付け、異なる文化の中で学び活動する経験を通じて、広く異なる歴史的・文化的背景や価値観の存在の認識と、国際理解・知識の拡大に加え、言語能力（語学力）とコミュニケーション力の向

上を図る。

⑥共創科目（3000－4000 番台）

基幹教育科目から専攻教育科目の学修を通じて、学生自身が取り組むべき課題を考え、自分で設定した課題に対して、必要な知識を深め、学んだ知を組み合わせて、設定した解決すべき課題に対する解決方法等を成果として卒業論文等にまとめる。

（２）教育課程外の取組について

九州大学では、学生が「学び」を主体とした学生生活を送るための修学・生活支援、進路・就職支援を全学的な立場から統括・支援する組織として学生支援センターを設置し、修学支援、進路・就職支援、正課外活動支援、経済支援を柱とした取組を実施し、教育と支援のシームレスな関係構築に取組んでいる。

具体的な就職支援としては、主体的に進路を選択する能力の育成や、就業意識の形成を目的に、学部の低年次から「キャリアガイダンス」と、「業界・企業研究セミナー」を実施しているほか、３年次には「就活キックオフ＆インターンシップガイダンス」、「インターンシップ対策講座」、自己分析講座、自己ＰＲ講座、面接マナー講座、集団面接対策講座、個別面接対策講座、グループディスカッション講座などの就職支援に関する講座で構成する「就活対策プログラム」などを、最終学年では、学内合同企業説明会や、学内個別企業説明会などを実施している。

日本での就職を希望する外国人留学生には、就職支援として「留学生のための就職活動講座」、「留学生向けビジネスマナー」、「留学生向けキャリア・就職ガイダンス・セミナー」、「留学生のための JOB FAIR」などを実施している。

また、就職後、あるいは大学院進学後に求められる実践的な英語能力を在学中に身につけさせることを目的に、６週間の TOEIC 対策プログラムを実施している。

なお、本学部は、教職課程は有しない。

（３）適切な体制の整備について

九州大学では、学生支援センターと学務部学生支援課とが連携し、全学的なキャリア形成支援・就職支援を行っており、就職支援を担当する専任職員を６名配置しているほか、豊富な経験と専門的な知識を持った「進路・就職アドバイザー」６名、外国人留学生を対象としたキャリア支援コーディネーター１名、就職相談員１名、支援スタッフ２名を配置している。そのほか就職情報室を３つのキャンパスに設置し、就職支援に関するイベントの情報提供をはじめ、就職活動に役立つ書籍の配架や、求人情報の提供などを行っている。

また、就職活動を行う学生を対象とする、「就活手帳」や、「九大生の就活体験記」を作成・配布するなどの支援も行っている。

資　料　目　次

資料１　　共創学部において育む「方法論」

資料２　　共創学部において育む「方法論」の例　～越境環境汚染問題～

資料３　　４つのエリア及びエリア共通の授業科目と学問分野としての専門性

資料４　　取り組む課題例と授業科目との関係

資料５　　取り組む課題例と課題に関連する学問エリア

資料６　　学府・研究院制度について

資料７　　共創学部における留学

資料８　　基幹教育の目的と目標

資料９　　専攻教育の教育課程と履修プロセス

資料１０　共創学部における修学指導体制

資料１１　共創学部での課題解決手法の例　～食品の安全性と持続的確保の問題を解決する～

資料１２　共創学部での課題解決手法の例　～領土紛争と移民問題を解決する～

資料１３　履修モデル①，②，③

資料１４　履修パターン①，②，③

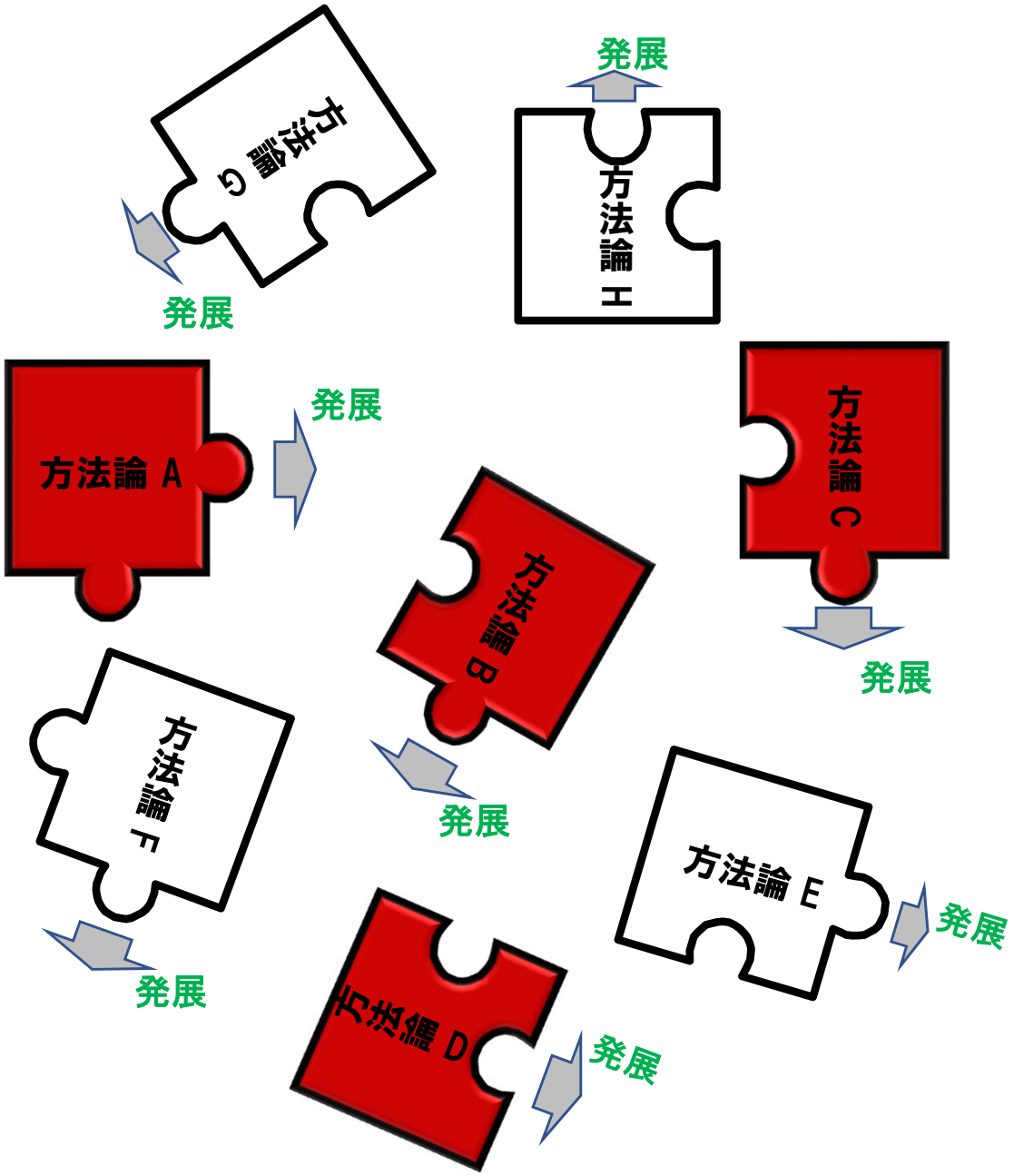
資料１５　国立大学法人九州大学教員の定年に関する規程

資料１６　大学間交流協定（学生交流協定）締結大学一覧

資料１７　海外渡航危機管理ハンドブック

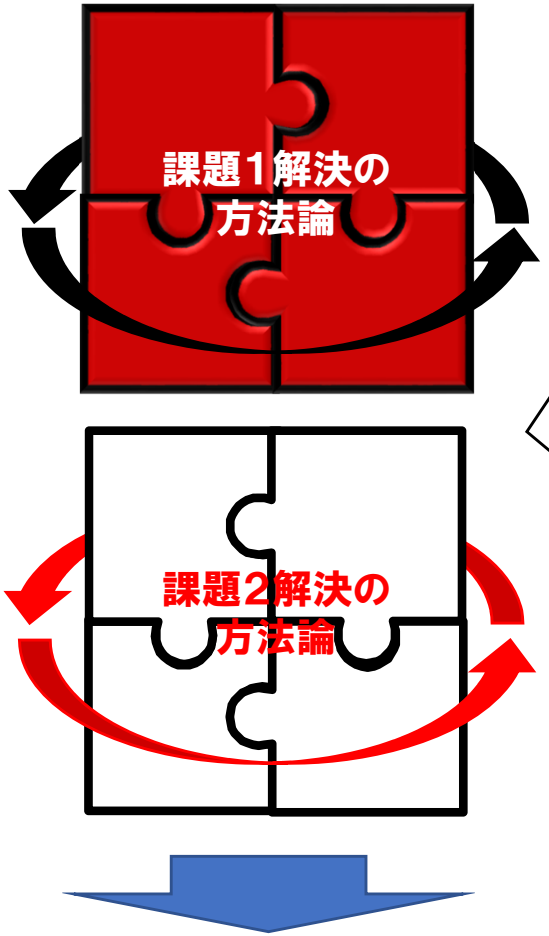
共創学部において育む「方法論」

＜ディシプリンベース（従来）の方法論＞



＜共創学部の方法論＞

各課題解決に向けてディシプリンベースの方法論を有機的かつ最適に連携させる方法論



・メイン、サブとするエリアで得る方法論

・他者との協働で得る方法論

上記を課題に応じて組み合わせる

複数の専門分野にまたがる社会的課題の解決が可能

資料1

共創学部において育む「方法論」の例　～越境環境汚染問題～

＜ディシプリンベース（従来）の方法論＞

発展

汚染物質による健康被害の
問題を理解するには・・・
↓
生化学、健康科学の方法論

＜共創学部における科目＞
・病態生理、健康の科学　など

持続可能な経済発展を
続けるには・・・
↓
開発経済学の方法論

＜共創学部における科目＞
・開発経済学　など

発展

発展

環境汚染のメカニズムを理解し、
環境地理的問題を理解するには・・・
↓
環境創成学、環境地理学の方法論

＜共創学部における科目＞
・地球の理解、環境地理学　など

発展

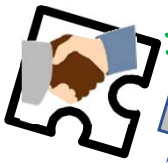
他国との交渉のため、その文化を
理解し、コミュニケーションを
円滑に行うには・・・
↓
コミュニケーション学の方法論

＜共創学部における科目＞
・異文化とコミュニケーション　など

発展

汚染された環境の再生を
行うためには・・・
↓
環境保全・再生学の方法論

＜共創学部における科目＞
・生物多様性科学、環境保全・再生　など



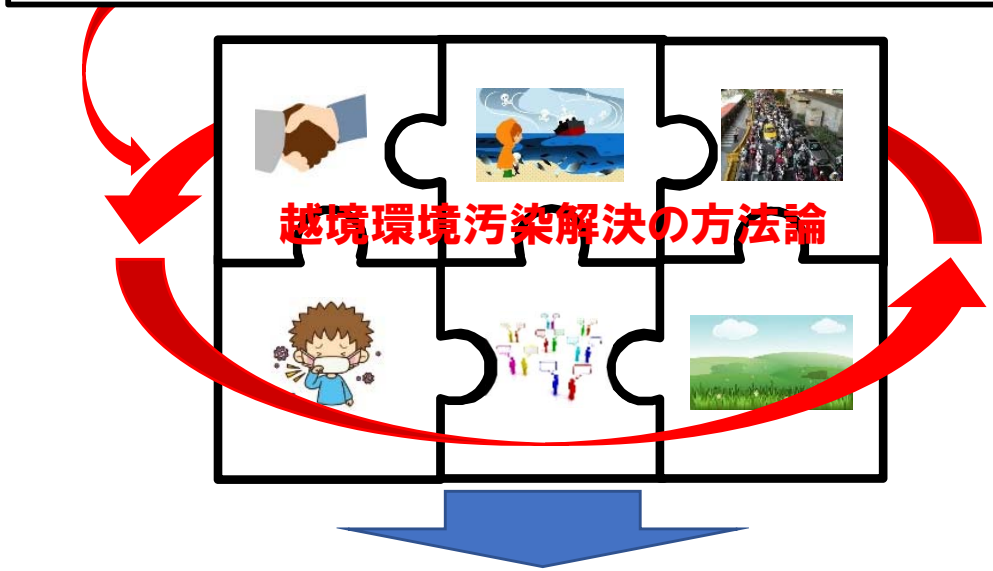
発展

越境汚染に関し、他国との
関係を構築するには・・・
↓
国際関係論の方法論

＜共創学部における科目＞
・国際関係論、国家と政治　など

＜共創学部の方法論＞

共創発想法、ビックデータ処理、実データ解析技法、複雑系科学論、
データマイニングと情報可視化、数理統計学、社会調査法　などの手法を
用いて各ピースを有機的、かつ最適に連携させる



越境環境汚染を解決する

資料2

資料３

	区分	科目区分（低年次）構想 共通基礎科目	科目区分（高年次）共創 エリア横断科目	専門性	関連する基幹教育科目
エリア共通（＊） （ねらい） 課題の設定の仕方を学び、課題解決のための着想法、解析法の知識・技能を修得する **(＊)**共通基礎科目とエリア横断科目を合わせたカテゴリー	デザイン思考	**共創デザイン思考発想法**	デザイン思考プログラミング演習 デザイン思考プロセス演習	課題解決のためのデザイン思考法	**共創発想法** **デザイン思考**
	データサイエンス	**データサイエンス基礎**	ビッグデータ処理 実データ解析技法	課題解決のためのデータ解析法	**機械学習と人工知能** **データマイニングと情報可視化** **サイバーセキュリティ基礎論** **情報科学** **プログラミング演習**
	科学論	**科学論**	物理学の歴史と哲学 地学と生物の歴史と哲学 科学技術社会論	課題解決のための科学技術論	科学の基礎（哲学的考察） **科学の歴史A** 科学の歴史B
	物理・数学	**複雑系科学入門**	複雑系科学論 Thermo-Dynamical Properties 量子現象科学論 Python Programming for Analysis	課題解決のための複雑系解析法	**動的現象の科学** **誘導現象の科学** 数理統計学 社会と数理科学
	フィールド調査	**フィールド調査法**	（各エリアの関連科目）	課題解決のためのフィールド調査法	社会調査法ＩA 社会調査法ＩB フィールドに学ぶ
	グローバル・ヒストリー	**グローバルヒストリー**		課題設定のためのグローバルな視野	The Law and Politics of International Society
	グローバル・エシクス	**グローバルエシクス**			

赤字の科目は、必修科目
紫字の科目は、推奨科目

	区分	エリア基礎科目	エリア発展科目	専門性	関連する基幹教育科目
人間・生命エリア （ねらい） 生命の発生・進化や、人間の思考・認知・判断の仕組みを修得する	遺伝・進化	遺伝学と進化	進化生物学 発生生物学 Physiology and Behavior Stress and Nutrition	人間・生命の遺伝・発生・進化・行動の仕組み	基礎生物学概要 生態系の構造と機能 集団生物学 生物多様性と人間文化 生態系の科学 生態系の構造と機能I
	分子生物学・細胞生物学	Molecular & Cell Biology	Biochemistry Advanced Molecular Biology 病態生理 健康の科学	生命現象の分子レベル・細胞レベルの理解	バイオテクノロジー詳論 遺伝子組換え生物の利用と制御 生命の科学A 生態系の構造と機能II
	脳・情報	Brain & Information	Cognitive science Bioehics 生命情報科学 システム神経科学	人の脳の情報処理・認知の仕組み	脳情報科学入門 認知心理学 Brain and Mind 医療倫理学I、II
人と社会エリア （ねらい） コミュニケーションや社会共生のあり方を修得する	社会哲学	社会哲学論	多文化共生の世界秩序 教育倫理論 人間社会研究法	社会と教育の仕組みとその研究方法	哲学・思想入門 社会学入門 現代教育学入門
	言語コミュニケーション	言語コミュニケーション論	言語とコミュニケーションA,B 議論と創造のコミュニケーションA,B 異文化とコミュニケーション メディアとコミュニケーション	言語とコミュニケーションの仕組みの理解	コミュニケーション入門 ことばの科学 文学・言語学入門 芸術学入門 人と人をつなぐ技法
	社会共生	社会共生論	先史社会を知るA,B 国際福祉論 生き方の人類学 国際政治学	先史社会から現代までの社会共生の歴史とあり方	先史学入門 歴史学入門 政治学入門 社会学入門 現代社会I～III
国家と地域エリア （ねらい） 国家や地域の歴史、特徴的な経済・社会現象、政治と経済の関係性を修得する	地域研究	地域研究基礎論	比較地域研究 東アジア地域研究 地域生態論	地域研究と生態学による地域の理解	東アジアと日本 韓国・朝鮮研究の最前線I、II EU論基礎
	政治経済	政治・経済基礎論	開発経済学 国際関係論 国家と政治 日本経済史	地域の政治・経済的な仕組みの理解	経済学入門 経済史入門 法学入門 政治学入門
	歴史	歴史基礎論	埋蔵文化財から見える世界 地域史 比較史	地域レベルの歴史とその見方	アジア埋蔵文化学A、B 歴史学入門 現代史I～III
地球・環境エリア （ねらい） 地球が持つ資源や、地球環境の変化による災害、生命が環境に与える影響を修得する	地球	地球の理解	地球物質科学 大気海洋科学 地球の変動 社会の中の地球科学	地球の構成と大規模地球環境変動	地球科学 地球の進化と環境 最先端地球科学
	自然災害・資源	自然災害・資源	地盤学と災害 環境ガバナンス	自然災害と人間活動	自然災害と防災 リスクマネジメント
	環境	自然環境と社会	生物多様性科学 保全遺伝学 環境保全・再生 流域環境学 環境地理学 環境都市政策 東アジアの経済地理学	自然と社会の関係と動態、生物多様性、環境保全	グリーンケミストリー 地理学入門 環境問題と自然科学 環境調和型社会の構築
	実習	地球環境実習			自然科学総合実験（基礎、発展）

取り組む課題例	関連するカリキュラム（実習科目は除く）		
	エリア基礎科目	エリア発展科目	エリア横断科目、関連基幹教育科目
①人工知能と社会	Brain & Information 言語コミュニケーション論 社会共生論 社会哲学論	Cognitive science 生命情報科学 メディアとコミュニケーション 国際福祉論 人間社会研究法	機械学習と人工知能 共創発想法 複雑系科学論 データマイニングと情報可視化 実データ解析技法
②社会・学校生活と心理的ストレス	遺伝学と進化 Molecular & Cell Biology Brain & Information 社会哲学論	Stress and Nutrition 病態生理 システム神経科学 教育倫理学 人間社会研究法	共創発想法 数理統計学 社会と数理科学 社会調査法
③生物多様性の維持	遺伝学と進化 自然環境と社会 地球の理解 自然災害・資源 地球環境実習	進化生物学 比較地域研究 生物多様性科学 保全遺伝学 環境地理学	ビッグデータ処理 複雑系科学論 共創発想法 データマイニングと情報可視化 動的現象の科学
④少子高齢化と福祉政策	遺伝学と進化 社会哲学論 言語コミュニケーション論 社会共生論 政治・経済基礎論	発生生物学 人間社会研究法 異文化とコミュニケーション 国際福祉論 国家と政治 環境都市政策	共創発想法 実データ解析技法 社会調査法IA、IB 地学と生物の歴史と哲学 数理統計学
⑤自然災害への対応と減災社会	社会哲学論 社会共生論 政治・経済基礎論 自然災害・資源 自然環境と社会 地球の理解 地球環境実習	メディアとコミュニケーション 国際福祉論 国家と政治 地盤学と災害 環境ガバナンス 環境保全・再生 環境地理学 地球の変動 社会の中の地球科学	ビックデータ処理 複雑系科学論 実データ解析技法 共創発想法 社会調査法IA、IB 科学技術社会論 地学と生物の歴史と哲学
⑥越境環境汚染	Molecular & Cell Biology 言語コミュニケーション論 地域研究基礎論 政治・経済基礎論 歴史基礎論 地球の理解 自然環境と社会	病態生理 健康の科学 Biochemistry 異文化とコミュニケーション 国際政治学 生き方の人類学 東アジア地域研究 開発経済学 国際関係論 比較地域研究 国家と政治 生物多様性科学 環境保全・再生 環境地理学	共創発想法 デザイン思考プログラミング演習 ビックデータ処理 実データ解析技法 複雑系科学論 データマイニングと情報可視化 科学の歴史A 数理統計学 社会調査法IA、IB
⑦持続的開発と生態系の破壊	遺伝学と進化 地域研究基礎論 政治・経済基礎論 歴史基礎論 自然災害・資源 自然環境と社会	進化生物学 東アジア地域研究 地域生態論 開発経済学 国際関係論 日本経済史 生物多様性科学 環境地理学 環境ガバナンス	デザイン思考プログラミング演習 共創発想法 実データ解析技法 科学技術社会論 複雑系科学論 地学と生物の歴史と哲学 社会調査法IA、IB
⑧食品の安全性と持続的確保	遺伝学と進化 Molecular & Cell Biology Brain & Information 社会共生論 政治・経済基礎論 自然環境と社会	Stress and Nutrition Advanced Molecular Biology 健康の科学 生命情報科学 国際政治学 国際関係論 環境ガバナンス 生物多様性科学 保全遺伝学	共創発想法 デザイン思考プログラミング演習 ビックデータ処理 実データ解析技法 複雑系科学論 データマイニングと情報可視化 科学技術社会論
⑨感染症の伝播と健康維持	遺伝学と進化 Molecular & Cell Biology Brain & Information 社会共生論 地域研究基礎論	病態生理 健康の科学 Stress and Nutrition 生き方の人類学 地域生態論 比較地域研究 生物多様性科学 環境地理学	デザイン思考プログラミング演習 ビックデータ処理 実データ解析技法 複雑系科学論 データマイニングと情報可視化 科学技術社会論 動的現象の科学
⑩領土紛争と移民問題	Brain & Information 社会哲学論 言語コミュニケーション論 社会共生論 地域研究基礎論 歴史基礎論 自然環境と社会	Bioethics Cognitive science 多文化共生の世界秩序 教育倫理論 人間社会研究法 議論と創造のコミュニケーション 異文化とコミュニケーション 国際政治学 比較地域研究 国際関係論 埋蔵文化財から見える世界 地域史 環境ガバナンス 環境都市政策 東アジアの経済地理学	共創発想法 社会調査法IA、IB 複雑系科学論 科学技術社会論 科学の歴史A ビッグデータ処理 データマイニングと情報可視化 実データ解析技法
⑪地球温暖化の影響と適応	Molecular & Cell Biology 言語コミュニケーション論 社会共生論 政治・経済基礎論 地球の理解 自然災害・資源 自然環境と社会 地球環境実習	健康の科学 異文化とコミュニケーション 国際政治学 開発経済学 国際関係論 大気海洋科学 地球の変動 社会の中の地球科学 地盤学と災害 環境ガバナンス 生物多様性科学 環境保全・再生 環境地理学	共創発想法 社会調査法 複雑系科学論 科学技術社会論 ビッグデータ処理 データマイニングと情報可視化 実データ解析技法 デザイン思考プログラミング演習 社会と数理科学 動的現象の科学
⑫都市部における人口集中と過疎化	Molecular & Cell Biology Brain & Information 社会哲学論 地域研究基礎論 政治・経済基礎論 歴史基礎論 自然災害・資源 自然環境と社会	Physiology and Behavior Stress and Nutrition システム神経科学 人間社会研究法 多文化共生の世界秩序 地域生態論 国家と政治 日本経済史 地域史 比較地域研究 環境ガバナンス 環境地理学 環境都市政策 流域環境学	共創発想法 数理統計学 ビッグデータ処理 実データ解析技法 複雑系科学論 デザイン思考プログラミング演習 社会調査法IA、IB データマイニングと情報可視化 社会と数理科学

人間・生命エリア
人と社会エリア
国家と地域エリア
地球・環境エリア
エリア共通（共通基礎科目以外）

資料４

課題に関連する学問エリア	課題番号
人間・生命 ＋ 人と社会	① ②
人間・生命 ＋ 地球・環境	③
人間・生命 ＋ 人と社会 ＋ 国家と地域	④ ⑨
人間・生命 ＋ 国家と地域 ＋ 地球・環境	⑦
人と社会 ＋ 国家と地域 ＋ 地球・環境	⑤
人間・生命 ＋ 人と社会 ＋ 国家と地域 ＋ 地球・環境	⑥ ⑧ ⑩ ⑪ ⑫

資料５

資料６

学府・研究院制度について

九州大学では、平成 12 年 4 月の「全学大学院重点化」（大学院に、より重点をおいて、教育研究組織を構成すること）の完了とともに、全国でも初めての**「学府・研究院」**制度を設けました。これは、大学院の教育研究組織である「研究科」を、大学院の教育組織としての「学府」（Graduate School）と教員の所属する研究組織である「研究院」（Faculty）とに分離して、相互の柔軟な連携を図るものです。（図１）

大学院重点化に伴って、教員の所属は従来の学部から大学院に移り、さらに大学院を教育組織と研究組織に分離することにより、学府・学部教育への研究院の枠を超えた教員の多様な参加が可能となりました。（図２）また、教育・研究双方の組織をそれぞれの必要性から独自に再編することが可能となりました。

図1

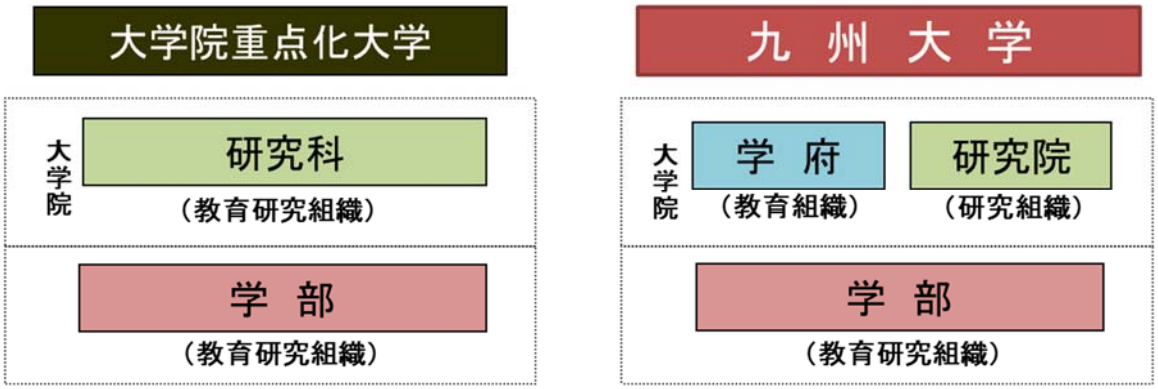
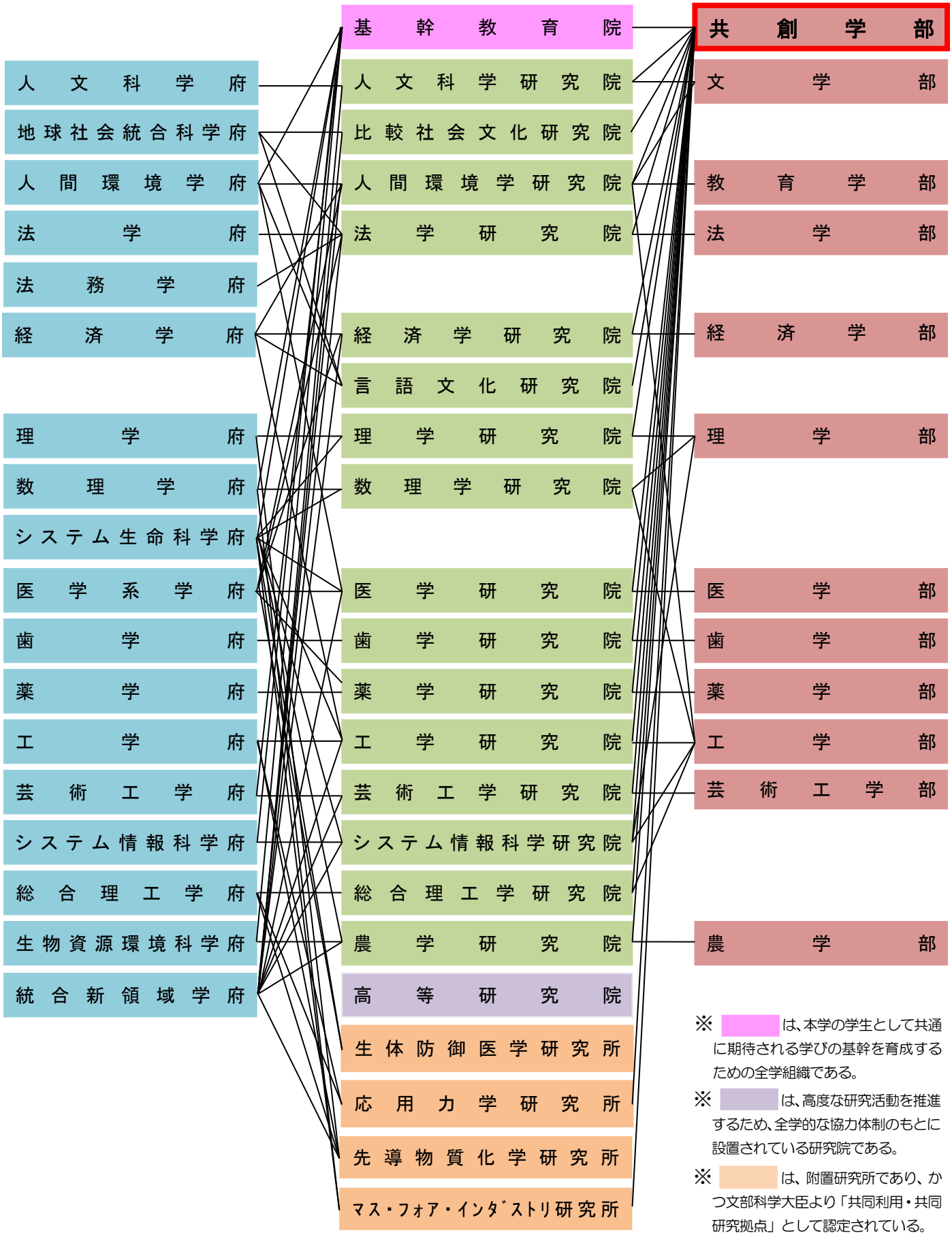


図2

学府・研究院・学部の構成（平成30年4月1日予定）



※ ［　　］は、本学の学生として共通に期待される学びの基幹を育成するための全学組織である。

※ ［　　］は、高度な研究活動を推進するため、全学的な協力体制のもとに設置されている研究院である。

※ ［　　］は、附置研究所であり、かつ文部科学大臣より「共同利用・共同研究拠点」として認定されている。

共創学部における留学

【留学の位置づけ】
異なる文化の中で活動する経験を積み、広く異なる歴史的・文化的背景や価値観の存在を認識し、
①課題解決のために必要となる複数の専門分野の考え方や理論の修得、または、
②社会的課題とその解決に向けた社会の取組やその歴史の調査　　を行う

想定パターン

- 交換留学
- 海外インターンシップ等
- 短期留学･研修

「留学」の対象

- 語学研修

「留学」の対象外

留　学　前　→　事前学習　→　**留　　学**　→　事後学習　→　**留　学　後**

【経験科目】
異文化対応１　(1単位)　必修

異文化間コミュニケーション、多文化教育、グローバリゼーション、留学と就職といった様々な角度から留学を捉え、その意義を考えるとともに、日本人論や海外から見た日本なども紹介することで、自分の国を見つめなおし、多様な文化や価値観を客観的に考える視点を養う。

学生
↑ 相談
留学の目的・受講予定科目等の学修計画
↓ 指導
アドバイザー教員
チューター(1年次～2年次夏学期)
修学ﾅﾋﾞｹﾞｰﾀｰ(2年次秋学期～3年次秋学期)
指導教員(3年次冬学期～4年次)
↕ 対応等 / 報告等
修学ﾅﾋﾞｹﾞｰﾀｰ会議
学務委員会　等

- **交換留学**
  海外の大学機関と締結した大学間学生交流協定等に基づき、交換留学生として１年以内の期間で留学を行い、専門エリアに関連する授業等を履修し、単位の取得を目的とする学修活動。
  ○実施可能年次：２年次～４年次
  ○実施期間：１学期から１年間

- **海外インターンシップ等**
  海外でのインターンシップやボランティア活動の機会への参加、又は海外の大学機関における専門エリアに関連する技術修練・習得などを目的とする活動。
  ○実施可能年次：１年次～４年次
  ○実施期間：８日以上（移動日を除く）１年未満

- **短期留学･研修**
  一定の語学力の保持などを条件に学内募集・選考を行う短期留学・研修プログラム、又は参加を許可する海外の教育機関等が実施する短期研修プログラムの参加を通じ、専門エリアに関連する知識・技能の修得や、異なる歴史的・文化的背景や価値観の存在の認識と、国際理解・知識の拡大を目的とする学修活動。
  ○実施可能年次：１年次～４年次
  ○実施期間：概ね１ヶ月以内（プログラムによる）

留学生は、国内インターンシップ等で対応

留学先等での活動内容に応じて単位認定

- **語学研修**
  学術英語の運用力の向上を主たる目的とするサマー・プログラムなどへの参加を通じ、語学力やコミュニケーション力の向上に寄与する英語の運用能力の向上を目的とした学修活動。
  ○実施可能年次：１年次～４年次
  ○実施期間：概ね１ヶ月以内（プログラムによる）

【経験科目】
異文化対応２　(1単位)　必修

経験科目として体験する海外留学（海外活動A・B）や、インターンシップ等での学修内容を、学術的なレベルでのプレゼンテーション及びレポート体トとして完結する。学生のプレゼンテーションを通した相互の験内容共有化と情報交換を行うとともに、異文化対応に関する議論を深め、異文化理解に関する姿勢を獲得することを目的とする。

【経験科目】
海外活動Ａ１　(1単位)
海外活動Ｂ１　(2単位)　選択

課題解決を考えていく上で必要な**知識・技能の獲得を目的**とする活動で、事前学修、留学後の事後学修を含め、その活動全体に要した期間や内容等に応じて、１単位又は２単位を認定。

【経験科目】
海外活動Ａ２　(1単位)
海外活動Ｂ２　(2単位)　選択

課題解決を考えていく上で必要な**調査活動等を目的**とする活動で、事前学修、留学後の事後学修を含め、その活動全体に要した期間や内容等に応じて、１単位又は２単位を認定。

【共創科目】
エリア発展科目　等　選択

事前学修・事後学修を含め、エリア発展科目等で開講する授業科目に相当する内容と認められる場合に、当該授業科目を履修したものとして単位を認定。

学修内容に応じて、基幹教育科目「言語文化科目」の語学の科目として単位を認定。

資料7

基幹教育の目的と目標

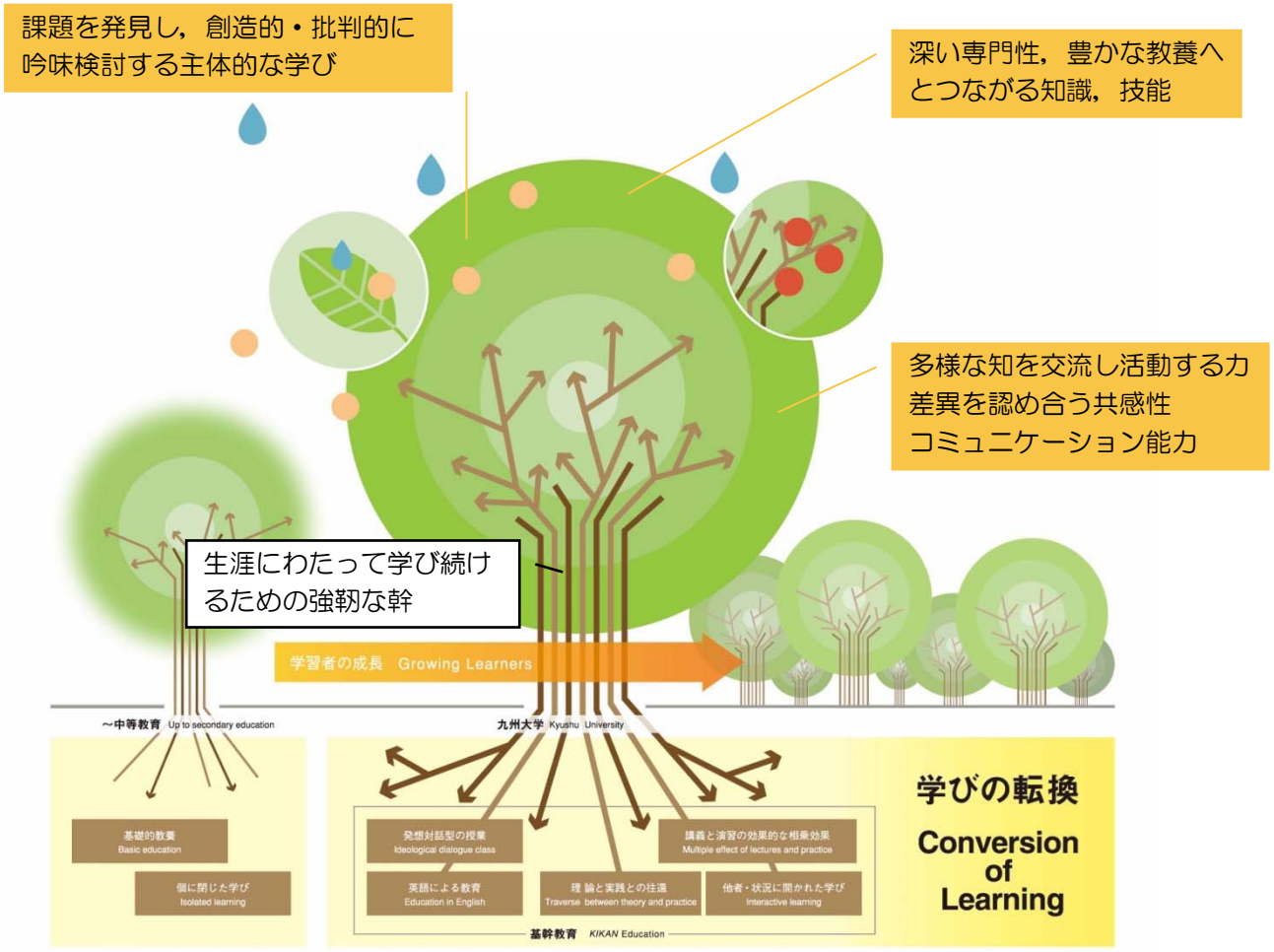
１　基幹教育の目的と目標

（目的）

九州大学の教育は，日本の様々な分野において指導的な役割を果たし，アジアをはじめ広く全世界で活躍する人材を輩出し，日本及び世界の発展に貢献することを目的としています。このために，基幹教育は，専攻教育と協働して，生涯にわたって学び続けることを幹に持つ，行動力を備えた人材である**アクティブ・ラーナー**へと成長していく力を培うことを目的としています。

（目標）

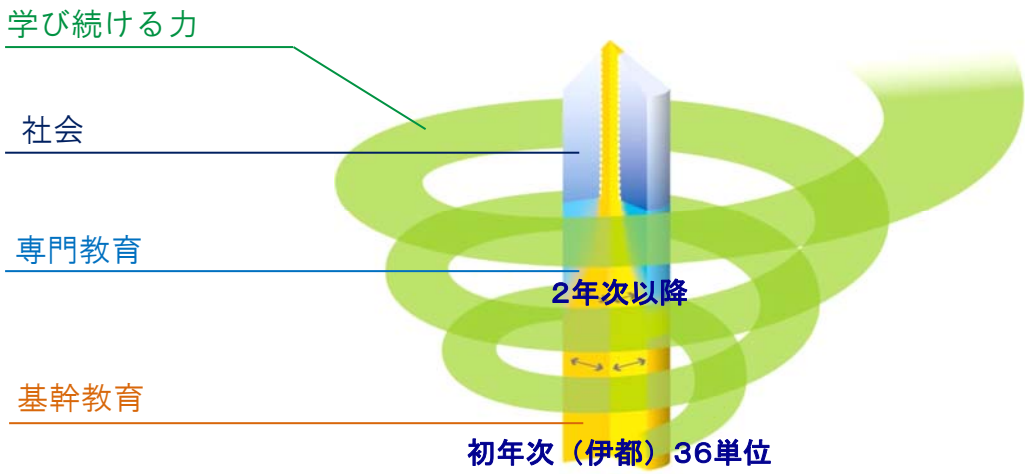
１．進展するグローバル社会で求められる，深い専門性や豊かな教養へとつながる知識，技能を身につけよう。
２．新たな知や技能を創出し未知な問題を解決する力である「ものの見方・考え方・学び方」を身につけよう。
既存の知識から解答を探すのではなく，自発的に問題を提起し，創造的・批判的に吟味検討することができる主体的な学び方を身につけよう。
３．ものの見方・考え方・価値観の異なる人と多様な知を交流し活動する能力，差異を認め合う共感性，そして問題解決へと導くコミュニケーション能力を磨こう。
他者との対話，共に学ぶ協働，そして自らを振り返る内省のサイクルを通じての力を高めよう。
４．生涯にわたって学び続ける強靭な幹を育もう。



２　基幹教育科目の構成と各科目区分の目的・目標の解説

基幹教育科目は，基幹教育セミナー，課題協学科目，言語文化科目，文系ディシプリン科目，理系ディシプリン科目，サイバーセキュリティ科目，健康・スポーツ科目，総合科目および高年次基幹教育科目からなっています。

初年次の履修（３６単位）に加え，２年次以降も専攻教育と連動しながら履修します。



【基幹教育セミナー】

科学技術が急速に進歩しグローバル化が進展する現代では，一人ひとりが変化や多様性と“しなやか”に付き合い、柔軟に適応していくことが求められます。このことを可能にするのは，私たちの生涯にわたる自律的な成長を支える＜学びの基幹＞です。すなわち，社会の諸課題や自己について多様な観点からの知識・情報を受けとめて批判的に考察しつつ，自ら問題を発見し，絶えず主体的に学び続ける態度です。本授業は，異なる専門分野を目指す学生および教員との対話や，それを踏まえた自己省察を通じて，一人ひとりが＜学びの基幹＞を育むことを目的としています。

学修目標として，①一人ひとりが自らの大学における学びについて，関連する知見を広く吸収しつつ，自らに問いかけ他者に伝え，また他者からの反応を受け止める体験を通じて，大学における学びへの意欲を高めること，②こうした仲間との対話や自己省察から新たな気づきや疑問を発見する過程を通じて，創造的・批判的に問題に取り組み学んでいく態度を培うこと，③対話や省察を通じて得た自らの学びが持つ可能性や意義、今後の展望等についてプレゼンテーションができるようになること，④このような学びのプロセスにおいて自分がどのように成長したいのか，自分の言葉で表現できるようになることを目指します。

【課題協学科目】

この科目では，現代社会が抱える様々な課題や問題の中から授業テーマを設定し，そのテーマに対する文系・理系にまたがる複数の学問的なアプローチを提示します。みなさんが幅広い視野と考え方を修得するとともに，文系・理系学部混成のグループで議論し合う協働学習により，思考能力を高め，他者と協力しながら自主的に学習を進めることのできる姿勢を身に付けることを目標としています。

【言語文化科目】

言語文化科目は，外国語で目標の課題を達成することができる言語運用能力の習得を目指します。また，外国語の背景にある異文化に対する理解を深めながら，母語や自国の文化を相対化する力を養います。英語科目においてはより高度な運用能力を習得できるよう，リーディング，リスニング，ライティング，スピーキングの学習に加え，英語によるプレゼンテーションやディベートへとステップアップできる授業を設けています。また，ドイツ語，フランス語，中国語，ロシア語，韓国語，スペイン語などの初修外国語の授業では，初めて習う言語そのものの学習だけでなく，その言語の発想法や背景における文化を理解することで，思考の幅広さを涵養することを目標にしています。

【ディシプリンとは】

「ディシプリン“discipline”」のdiscipleは「弟子」「門人」という意味であり，学問の世界でのディシプリンとは職人が弟子に技術を伝えるように学術研究をするための訓練のことをいいます。それぞれの学問分野においてその学問を学ぶ上での基礎知識はもちろん，問題を解決していく方法やものの見方，表現の技法などがディシプリンに含まれます。すなわち，大学で特定の専門を身につけるというのはその学問を研究していくための訓練を積むことでもあります。基幹教育でのディシプリン科目はそれぞれの専門の分野を学ぶときに核となるディシプリンを磨くと共に他の学問領域のディシプリンを学び，幅広い世界観を持つことも狙いとしています。

【文系ディシプリン科目】

文系ディシプリン科目は，文系の多くの学問分野のディシプリンを一通り体得できるように設計しています。いろいろな学部のディシプリンを知り，多様な文系的思考に触れることで獲得した学問的教養は，すべての学生にとってアクティブ・ラーナーとなるための骨太の基幹を作るとともに，他の学問分野の方法・視点・ものの見方によって，自らの学びを相対化することにつながります。また，文系学生にとっては専門基礎科目として，豊かな教養に裏づけられた深い専門性を獲得するためのスタートアップになります。

現在，文系ディシプリン科目には以下の科目を設けています。

《哲学・思想入門，社会思想史，先史学入門，歴史学入門，文学・言語学入門，芸術学入門，文化人類学入門，地理学入門，社会学入門，心理学入門，現代教育学入門，教育基礎学入門，法学入門，政治学入門，経済学入門，経済史入門，The Law and Politics of International Society》

【理系ディシプリン科目】

理系ディシプリン科目では，興味と問題意識を持ち，自ら考えることで，知っているだけではない本当に使える知識あるいは知識を使える力を育てることを目標としています。教養・専門基礎・リメディアルの３つを意識した科目を設けています。

（１）教養としての自然科学（教養系）

《数学，物理学，化学，生物学，地球科学，感性・デザイン学，情報科学》

それぞれの科目が持つ学問領域の基礎的な素養を修得し，自らの生活や取り巻く環境との関わりを考えられるように授業内容を構成しています。理系専攻教育への積み上げのための基礎としてではなく，色々な自然科学科目を受講し，それらを自らつなげることで自然科学の素養を築いてもらうことを狙いとしています。

（２）専門基礎としての自然科学（専門基礎系）

《数学，物理学，化学，生物学，地球科学，感性・デザイン学，情報科学，自然科学総合実験》

理系分野の専攻教育に連続的につながるものとして，着実な積み上げにより系統的に学習できるように授業を構成しています。学際性を意識して自然科学の基礎を幅広く学習することで，専門分野をより深く考えたり高めたりすることも期待します。また，自然現象を研究し理解するためには，実験的手法は欠かせないものです。そこで，全理系学部・学科に共通した内容の自然科学総合実験を提供しています。そこでは，物理学・地球科学・化学・生物科学の各分野にわたり，それぞれのテーマに沿った観察・実験を行い，結果をレポートとしてまとめることを通して実験的手法を学びます。

（3）リメディアルからはじめる自然科学（リメディアル系）

《物理学，化学，生物学》

物理，生物，化学について高校で授業を受けなかったことや受験科目として選択していなかったことで生じる基礎的知識が不充分な部分や十分に整理されていない部分を補足して，専門分野へつなげられるようにするための科目を設けています。理系専攻教育へのスムーズな発展を狙いとしています。

【サイバーセキュリティ科目】

インターネットや ICT 技術の普及によって，サイバーセキュリティに対する重要性が日に日に高まっています。また，考慮すべき領域は，コンピュータをインターネットに接続している空間だけに留まらず，パソコンを持ち運んでいる時，あるいは銀行オンラインシステムを利用している時などを含めた，サイバー空間全体に広がっています。このような状況で我が国ではサイバーセキュリティ基本法が施行され，大学におけるセキュリティの教育に加え，国民個人のセキュリティへの対応能力の向上が求められています。本講義では，学年，理系・文系を問わず，今後 ICT 国際社会で生き抜くためのサイバーセキュリティ力を向上させることを目的として，セキュリティに関する基礎的な技術から法律，倫理まで幅広く学びます。

【健康・スポーツ科目】

健康・スポーツ科目では，心身ともに健やかな人材の育成を目的とします。そのために，主に身体運動やスポーツを媒介として，生活の基本となる健康・体力およびそれらを高めるための方法に関する正しい知識を獲得すること，ならびに様々な社会的要求に応えるために必要とされる心理社会的能力，いわゆるライフスキルを習得・向上させることを目標とします。各科目は，年次進行に伴って，これらの知識やスキルが段階的に向上していくように配置されています。これらの科目の履修により，自律的な健康行動に結びつくような運動スキルあるいはライフスキルの更なる向上を図ること，また，健康・運動・スポーツ科学にかかる理解を一層深めることができます。

【総合科目】

総合科目は，文系から理系，純粋から応用にわたる幅広いテーマと多種多様な授業形態（講義形式，演習形式，セミナー形式，集中講義形式，フィールド形式など）をもつ授業科目からなります。主体的に課題を発見し探求して新たな知を深化・創造していく場であり，そして異分野の人との交流による知の創造・進展の場です。九州大学の教員が自主的に開講する授業に加え，QREC や各研究機関，他大学と連携して行われる授業もあります。授業を通じて得られる多様な知識の修得，知識に至る考え方の過程の経験や他者との交流から得られる創造的・批判的な思考の方法の涵養を目標としています。

【高年次基幹教育科目】

高年次基幹教育科目はすべての２年生以上を対象に各キャンパスで開講されます。それらは，専攻教育の学修による知識の深化を背景として生まれてくる，より多様で幅広い教養への興味，専門性の一歩先にある有用な知識やスキルに対するニーズを満たす科目からなります。専門性を契機として生まれるアクティブな学びの広がりと深まりを促すことを目標としています。

卒業論文研究；課題を自ら設定し、
解決策の探求、共創的課題解決力を涵養

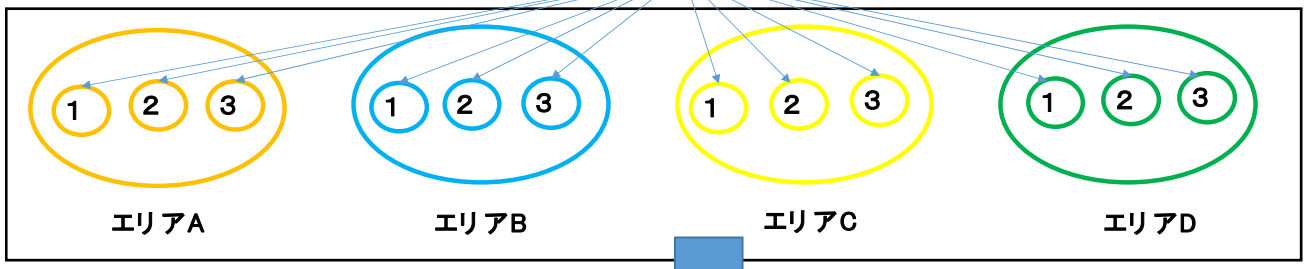
エリア発展科目
ディグリープロジェクト１，２，３

（日本人）交換留学、短期留学・研修
（外国人留学生）日本国内のインターンシップ

異文化対応１，２
海外活動A,B

重要かつ未解決の社会的課題の設定

課題に関連する学問分野へブレイクダウン



ブレイクダウンした学問分野の要素間の関係性（相互作用）を考慮し、問題を生じた根源的原因を探求

課題解決策提案に向けての関連学問分野の連携法・組み合わせのグループ討議（team-based learning）

重要かつ未解決の社会的課題解決策の提案

エリア基礎科目

共通基礎科目
エリア横断科目

共創基礎プロジェクト
１、２

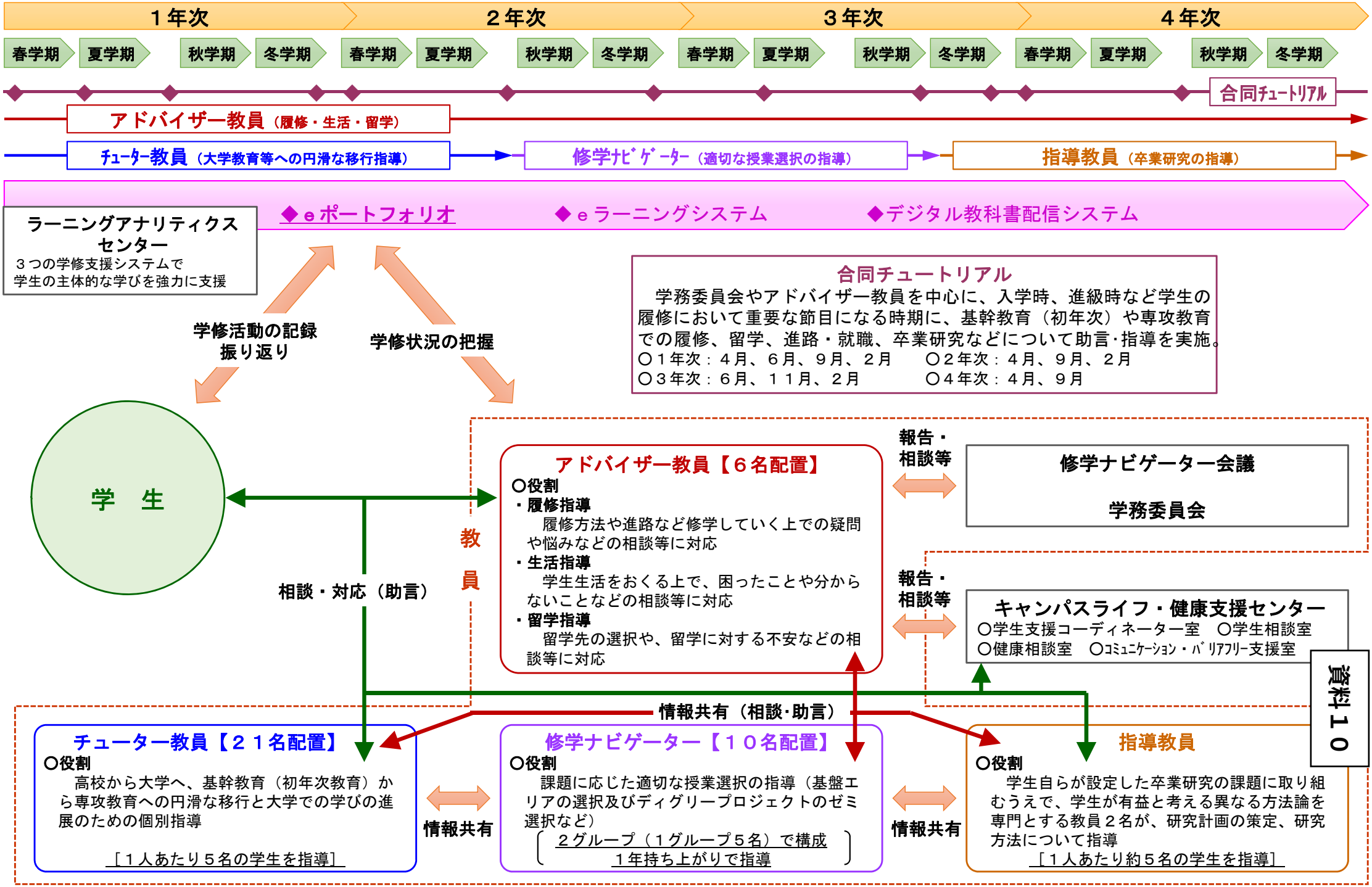
共創プロジェクト
１、２

構想

協働

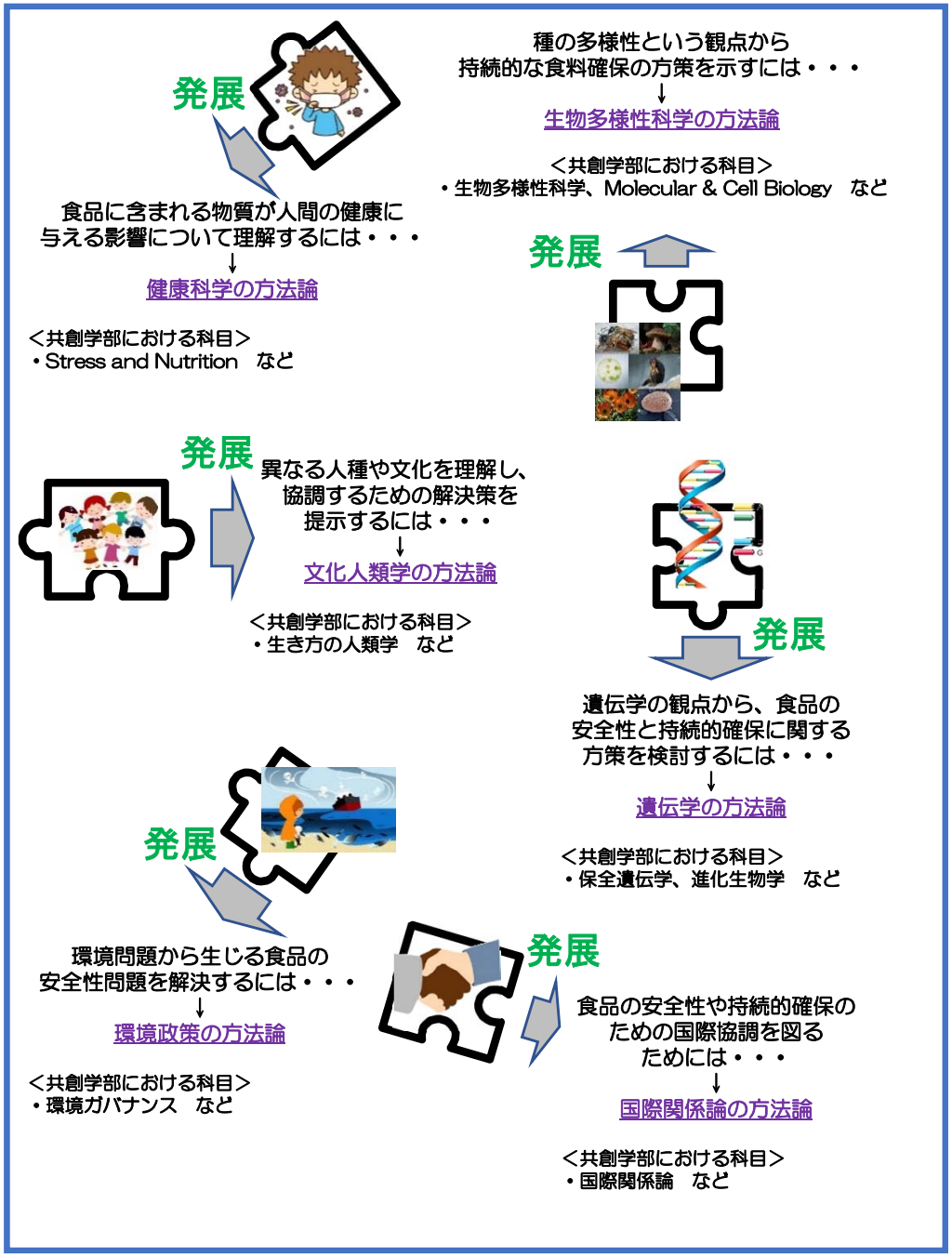
資料9

共創学部における修学指導体制

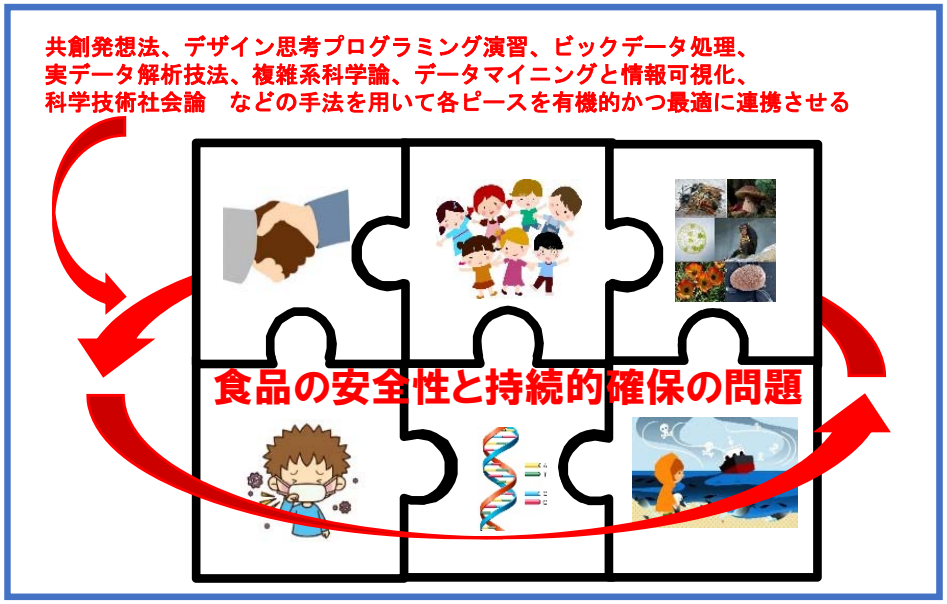


食品の安全性と持続的確保の問題を解決する

課題の要因をエリアのディシプリンベースの学問分野にブレイクダウン



エリア共通の方法論、解析法等を適用
（各ピースを有機かつ最適に連携）



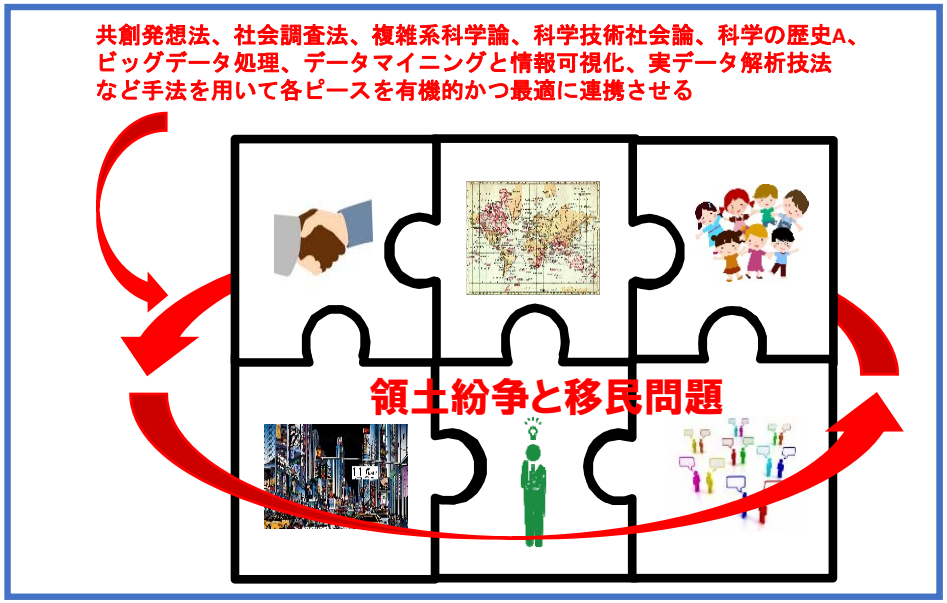
課題解決策の提案

資料１１

領土紛争と移民問題を解決する

課題の要因をエリアのディシプリンベースの学問分野にブレイクダウン

エリア共通の方法論、解析法等を適用
（各ピースを有機かつ最適に連携）



課題解決策の提案

資料１２

履修モデル①

For Global Life

『国際的・地球的課題に対する解決策をコーディネートして、世界に効果的に情報発信できる実務家』

共通基礎科目 [2]
グローバル・ヒストリー [1]
グローバル・エシクス [1]

基幹教育
ものの見方・考え方 学び方を学ぶ

基幹教育セミナー [1]
基幹教育セミナー [1]

文系ディシプリン科目 [8]
政治学入門 [2] 地理学入門 [2]
経済学入門 [2] 社会学入門 [2]

理系ディシプリン科目 [8]
デザイン思考 [1]
情報科学 [1.5]
プログラミング演習 [1]
社会と数理科学 [1]
身の回りの化学 [1]
最先端地球科学 [1.5]
自然科学総合実験（基礎）[1]

サイバーセキュリティ科目 [1]
サイバーセキュリティ基礎論 [1]

健康・スポーツ科目 [1]
健康・スポーツ科学演習 [1]

総合科目 [1]
人と人をつなぐ技法 [1]

言語文化科目 [14]
◆第１外国語 [10]
【英語ｲﾝﾃﾝｼﾌﾞｺｰｽ】
Global Issues RW 1･2 [2]
Global Issues LS 1･2 [2]
Japanese Issues 1･2 [2]
Academic Issues 1 ～ 4 [4]
◆第２外国語 [4]
中国語 I･II [4]

課題協学科目 [2・5]

経験科目 [1]
異文化対応 1 [1]

理系ディシプリン科目 [1.5]
現代化学 [1.5]

総合科目 [3]
日本事情 [2]
アカデミック・フロンティア I [1]

高年次基幹科目 [5]
共創発想法 [2]
機械学習と人工知能 [1]
データマイニングと情報可視化 [1]
科学の歴史 A [1]

共通基礎科目 [6]
共創デザイン思考発想法 [1]
フィールド調査法 [1]
科学論 [1]
データサイエンス基礎 [1]
複雑系科学入門 [2]

エリア横断科目 [6]
デザイン思考プロセス演習 [1]
ビッグデータ処理 [1]
実データ解析技法 [1]
科学技術社会論 [1]
複雑系科学論 [2]

高年次基幹科目 [4]
現代社会 I [2]
現代社会 II [2]

レクチャーシリーズ [2]
レクチャーシリーズ [2]

高年次基幹科目 [2]
社会統計学 A [1]
社会統計学 B [1]

政治学（メイン）
地球科学（サブ）
の２つの分野からアプローチ

課題審査
ディグリー・プロジェクト課題例
「資源外交」

共創基礎プロジェクト1 [2]
共創基礎プロジェクト2 [2]
共創プロジェクト1 [2]
共創プロジェクト2 [2]
ディグリー・プロジェクト1 [2]
ディグリー・プロジェクト2 [5]
ディグリー・プロジェクト3 [2]

他者と協働して課題に取り組むチーム型学習

自ら設定した課題に取り組む上で必要な科目を履修

【卒業研究審査：英語で発表】

より高度な専門性を身につけ、これまでに得た学知を組み合わせて、課題の解決策の創造に取り組む

エリア基礎科目 [10]
Brain & Information [1]
言語コミュニケーション論 [1]
社会共生論 [1]
地域研究基礎論 [1]
政治・経済基礎論 [1]
歴史基礎論 [1]
地球の理解 [1]
自然環境と社会 [1]
自然災害・資源 [1]
地球環境実習 [1]

言語文化科目 [2]
◆第１外国語 [2]
【英語ｲﾝﾃﾝｼﾌﾞｺｰｽ】
学術英語ゼミ・オーラル・コミュニケーション [2]

エリア発展科目 [20]
Stress and Nutrition [1]
Biochemistry [1]
Cognitive science [1]
多文化共生の世界秩序 [1]
人間社会研究法 [1]
異文化とコミュニケーション [1]
生き方の人類学 [1]
国際政治学 [1]
比較地域研究 [1]
国際関係論 [1]
東アジア地域研究 [1]
開発経済学 [1]
国家と政治 [1]
比較史 [1]
地球の変動 [1]
社会の中の地球科学 [1]
環境保全・再生 [1]
環境地理学 [1]
地球物質科学 [1]
環境ガバナンス [1]

海外留学
バンドン工科大学 等

経験科目 [2]
異文化対応2 [1]
海外活動 A 1 [1]

エリア発展科目 [4]
議論と創造のコミュニケーション A [1]
議論と創造のコミュニケーション B [1]
メディアとコミュニケーション [1]
大気海洋科学 [1]

チューター
開講授業・教員の紹介、興味関心の拡大、課題発見の指導など

修学ナビゲーター
興味関心の把握、授業選択の指導など　取組み状況の把握、授業選択の指導など

複数指導教員制（メイン・サブ）
課題設定の指導、卒業研究の指導

1年次：39.5単位
2年次：37.5単位
3年次：34単位
4年次：13単位

卒業後の進路イメージ「企業の総合研究所（シンクタンク）、外資系企業等」

資料１３

履修モデル②

For Changing Society
『国際社会の課題を解決するための新しい社会の仕組みや、価値の創出をデザインする専門家』

共通基礎科目 [2]
グローバル・ヒストリー [1]
グローバル・エシクス [1]

基幹教育
ものの見方・考え方
学び方を学ぶ

基幹教育セミナー [1]
基幹教育セミナー [1]

文系ディシプリン科目 [8]
社会思想史 [2] 政治学入門 [2]
社会学入門 [2] 経済学入門 [2]

理系ディシプリン科目 [8]
デザイン思考 [1]
情報科学 [1.5]
プログラミング演習 [1]
社会と数理科学 [1]
生命の科学A [1]
基礎生物学概要 [1.5]
地球と宇宙の科学 [1]

サイバーセキュリティ科目 [1]
サイバーセキュリティ基礎論 [1]

健康・スポーツ科目 [1]
健康・スポーツ科学演習 [1]

総合科目 [1]
人と人をつなぐ技法 [1]

言語文化科目 [14]
◆第 1 外国語 [10]
【英語インテンシブコース】
Global Issues RW 1･2 [2]
Global Issues LS 1･2 [2]
Japanese Issues 1･2 [2]
Academic Issues 1 ～ 4 [4]
◆第 2 外国語 [4]
中国語 I･II [4]

課題協学科目 [2・5]

経験科目 [1]
異文化対応 1 [1]

理系ディシプリン科目 [1.5]
生態系の科学 [1.5]
総合科目 [3]
日本事情 [2]
グローバル社会を生きる I [1]

高年次基幹科目 [5]
共創発想法 [2]
機械学習と人工知能 [1]
データマイニングと情報可視化 [1]
科学の歴史 A [1]

共通基礎科目 [6]
共創デザイン思考発想法 [1]
フィールド調査法 [1]
科学論 [1]
データサイエンス基礎 [1]
複雑系科学入門 [2]

エリア横断科目 [6]
デザイン思考プロセス演習 [1]
ビッグデータ処理 [1]
実データ解析技法 [1]
科学技術社会論 [1]
複雑系科学論 [2]

高年次基幹科目 [4]
現代社会 I [2]
社会と健康 [2]

レクチャーシリーズ [2]
レクチャーシリーズ [2]

高年次基幹科目 [2]
社会統計学 A [1]
社会統計学 B [1]

社会学 (メジャー)
健康医学 (マイナー)
の２つの分野からアプローチ

課題審査
ディグリー・プロジェクト課題例
「貧困問題」

共創基礎プロジェクト1 [2]
共創基礎プロジェクト2 [2]
共創プロジェクト1 [2]
共創プロジェクト2 [2]
ディグリー・プロジェクト1 [2]
ディグリー・プロジェクト2 [5]
ディグリー・プロジェクト3 [2]

他者と協働して課題に
取り組むチーム型学習

自ら設定した課題に
取り組む上で
必要な科目を履修

【卒業研究審査：英語で発表】

エリア基礎科目 [10]
Molecular & Cell Biology [1]
Brain & Information [1]
社会哲学論 [1]
言語コミュニケーション論 [1]
社会共生論 [1]
地域研究基礎論 [1]
政治・経済基礎論 [1]
歴史基礎論 [1]
地球の理解 [1]
自然環境と社会 [1]

言語文化科目 [2]
◆第 1 外国語 [2]
【英語インテンシブコース】
学術英語ゼミ・オーラル・コミュニケーション [2]

エリア発展科目 [20]
Physiology and Behavior [1]
Stress and Nutrition [1]
病態生理 [1]
生命情報科学 [1]
多文化共生の世界秩序 [1]
人間社会研究法 [1]
メディアとコミュニケーション [1]
国際福祉論 [1]
生き方の人類学 [1]
国際政治学 [1]
比較地域研究 [1]
東アジア地域研究 [1]
開発経済学 [1]
国際関係論 [1]
日本経済史 [1]
地域史 [1]
比較史 [1]
生物多様性科学 [1]
環境都市政策 [1]
環境ガバナンス [1]

海外留学
フィリピン大学 等

経験科目 [2]
異文化対応2 [1]
海外活動 A 1 [1]

より高度な専門性を身につけ、これまでに得た学知を組み合わせて、課題の解決策の創造に取り組む

エリア発展科目 [4]
Bioethics [1]
異文化とコミュニケーション [1]
環境保全・再生 [1]
保全遺伝学 [1]

第1チューター（指定チューター）
開講授業・教員の紹介、興味関心の拡大、課題発見の指導など

第2チューター（指導教員候補）
興味関心の把握、授業選択の指導など

第3チューター（指導教員候補）
取組み状況の把握、授業選択の指導など

複数指導教員制（メジャー・マイナー）
課題設定の指導、卒業研究の指導

1年次：39.5単位
2年次：37.5単位
3年次：34単位
4年次：13単位

卒業後の進路イメージ「ソーシャルイノベーター等」

履修モデル③

For Future Science

『文理を超えた学際的知見を修得し、国内外大学院に進学し、諸科学の境界・学際的領域の研究者』

共通基礎科目 [2]
グローバル・ヒストリー [1]
グローバル・エシクス [1]

基幹教育

ものの見方・考え方
学び方を学ぶ

基幹教育セミナー [1]
基幹教育セミナー [1]

文系ディシプリン科目 [8]
地理学入門 [2] 社会学入門 [2]
心理学入門 [2] 経済学入門 [2]

理系ディシプリン科目 [8]
デザイン思考 [1]
情報科学 [1.5]
プログラミング演習 [1]
社会と数理科学 [1]
身の回りの物理学 A [1]
基礎化学 [1.5]
地球と宇宙の科学 [1]

サイバーセキュリティ科目 [1]
サイバーセキュリティ基礎論 [1]

健康・スポーツ科目 [1]
健康・スポーツ科学演習 [1]

総合科目 [1]
人と人をつなぐ技法 [1]

言語文化科目 [14]
◆第 1 外国語 [10]
【英語インテンシブコース】
Global Issues RW 1･2 [2]
Global Issues LS 1･2 [2]
Japanese Issues 1･2 [2]
Academic Issues 1 ～ 4 [4]
◆第 2 外国語 [4]
中国語 I･II [4]

課題協学科目 [2・5]

経験科目 [1]
異文化対応 1 [1]

理系ディシプリン科目 [1.5]
生態系の科学 [1.5]

総合科目 [3]
日本事情 [2]
グローバル社会を生きる I [1]

高年次基幹科目 [5]
共創発想法 [2]
機械学習と人工知能 [1]
データマイニングと情報可視化 [1]
環境問題と自然科学 [1]

共通基礎科目 [6]
共創デザイン思考発想法 [1]
フィールド調査法 [1]
科学論 [1]
データサイエンス基礎 [1]
複雑系科学入門 [2]

エリア横断科目 [6]
デザイン思考プロセス演習 [1]
ビッグデータ処理 [1]
実データ解析技法 [1]
科学技術社会論 [1]
複雑系科学論 [2]

高年次基幹科目 [4]
科学の歴史 A [1]
環境調和型社会の構築 [1]
地球の進化と環境 [2]

レクチャーシリーズ [2]
レクチャーシリーズ [2]

高年次基幹科目 [2]
社会統計学 A [1]
社会統計学 B [1]

環境学 (メジャー)
国際関係論 (マイナー)
の２つの分野からアプローチ

課題審査
ディグリー・プロジェクト課題例
「フューチャーアース」

共創基礎プロジェクト1 [2]
共創基礎プロジェクト2 [2]
共創プロジェクト1 [2]
共創プロジェクト2 [2]
ディグリー・プロジェクト1 [2]
ディグリー・プロジェクト2 [5]
ディグリー・プロジェクト3 [2]

他者と協働して課題に
取り組むチーム型学習

自ら設定した課題に
取り組む上で
必要な科目を履修

【卒業研究審査：英語で発表】

エリア基礎科目 [10]
Genetics & Evolution [1]
Brain & Information [1]
言語コミュニケーション論 [1]
社会共生論 [1]
地域研究基礎論 [1]
政治・経済基礎論 [1]
歴史基礎論 [1]
地球の理解 [1]
自然環境と社会 [1]
地球環境実習 [1]

言語文化科目 [2]
◆第 1 外国語 [2]
【英語インテンシブコース】
学術英語ゼミ・オーラル・コミュニケーション [2]

エリア発展科目 [20]
多文化共生の世界秩序 [1]
人間社会研究法 [1]
異文化とコミュニケーション [1]
先史社会を知る A [1]
比較地域研究 [1]
東アジア地域研究 [1]
地域生態論 [1]
国際関係論 [1]
地域史 [1]
比較史 [1]
開発経済学 [1]
地球物質科学 [1]
大気海洋科学 [1]
地球の変動 [1]
社会の中の地球科学 [1]
生物多様性科学 [1]
環境保全・再生 [1]
流域環境学 [1]
環境都市政策 [1]
環境ガバナンス [1]

海外留学
ロンドン大学 等

経験科目 [2]
異文化対応2 [1]
海外活動 A 1 [1]

より高度な専門性を身につけ、これまでに得た学知を組み合わせて、課題の解決策の創造に取り組む

エリア発展科目 [4]
地盤学と災害 [2]
環境地理学 [1]
保全遺伝学 [1]

第1チューター（指定チューター）
開講授業・教員の紹介、興味関心の拡大、課題発見の指導など

第2チューター（指導教員候補）
興味関心の把握、授業選択の指導など

第3チューター（指導教員候補）
取組み状況の把握、授業選択の指導など

複数指導教員制（メジャー・マイナー）
課題設定の指導、卒業研究の指導

1年次：39.5単位
2年次：37.5単位
3年次：34単位
4年次：13単位

卒業後の進路イメージ「学際的領域の研究者」

履修パターン①　『地球環境汚染課題に取り組み、環境資源外交に関するディグリー・プロジェクトに着手したい』

共通基礎科目 [2]
グローバル・ヒストリー [1]
グローバル・エシクス [1]

基幹教育　ものの見方・考え方 学び方を学ぶ

基幹教育セミナー [1]
基幹教育セミナー [1]

文系ディシプリン科目 [8]
政治学入門 [2] 地理学入門 [2]
経済学入門 [2] 社会学入門 [2]

理系ディシプリン科目 [8]
デザイン思考 [1]
情報科学 [1.5]
プログラミング演習 [1]
社会と数理科学 [1]
身の回りの化学 [1]
最先端地球科学 [1.5]
自然科学総合実験（基礎）[1]

サイバーセキュリティ科目 [1]
サイバーセキュリティ基礎論 [1]

健康・スポーツ科目 [1]
健康・スポーツ科学演習 [1]

総合科目 [1]
人と人をつなぐ技法 [1]

言語文化科目 [14]
◆第 1 外国語 [10]
【英語ｲﾝﾃﾝｼﾌﾞｺｰｽ】
Global Issues RW 1･2 [2]
Global Issues LS 1･2 [2]
Japanese Issues 1･2 [2]
Academic Issues 1 ～ 4 [4]
◆第 2 外国語 [4]
中国語 I･II [4]

課題協学科目 [2・5]

経験科目 [1]
異文化対応 1 [1]

理系ディシプリン科目 [1.5]
現代化学 [1.5]

総合科目 [3]
日本事情 [2]
アカデミック・フロンティア I [1]

高年次基幹科目 [5]
共創発想法 [2]
機械学習と人工知能 [1]
データマイニングと情報可視化 [1]
科学の歴史 A [1]

共通基礎科目 [6]
共創デザイン思考発想法 [1]
フィールド調査法 [1]
科学論 [1]
データサイエンス基礎 [1]
複雑系科学入門 [2]

エリア横断科目 [6]
デザイン思考プログラミング演習 [1]
ビッグデータ処理 [1]
実データ解析技法 [1]
科学技術社会論 [1]
複雑系科学論 [2]

共創基礎プロジェクト1 [2]

共創基礎プロジェクト2 [2]

エリア基礎科目 [10]
Molecular & Cell Biology [1]
言語コミュニケーション論 [1]
社会共生論 [1]
地域研究基礎論 [1]
政治・経済基礎論 [1]
歴史基礎論 [1]
地球の理解 [1]
自然環境と社会 [1]
自然災害・資源 [1]
地球環境実習 [1]

言語文化科目 [2]
◆第 1 外国語 [2]
【英語ｲﾝﾃﾝｼﾌﾞｺｰｽ】
学術英語ゼミ・オーラル・コミュニケーション [2]

他者と協働して課題に取り組むチーム型学習

高年次基幹科目 [4]
環境問題と自然科学 [2]
環境調和型社会の構築 [2]

レクチャーシリーズ [2]
レクチャーシリーズ [2]

共創プロジェクト1 [2]

越境環境汚染等 地球環境汚染に関する課題に取り組む上で必要な科目を履修

エリア発展科目 [20]

健康の科学 [1]	東アジア地域研究 [1]
Biochemistry [1]	開発経済学 [1]
病態生理 [1]	国家と政治 [1]
多文化共生の世界秩序 [1]	生物多様性科学 [1]
人間社会研究法 [1]	地球の変動 [1]
異文化とコミュニケーション [1]	社会の中の地球科学 [1]
生き方の人類学 [1]	環境保全・再生 [1]
国際政治学 [1]	環境地理学 [1]
比較地域研究 [1]	地球物質科学 [1]
国際関係論 [1]	環境ガバナンス [1]

海外留学
xxxx 大学 等

経験科目 [2]
異文化対応2 [1]
海外活動 A 1 [1]

共創プロジェクト2 [2]

ディグリー・プロジェクト1 [2]

課題審査
ディグリー・プロジェクト課題例
「環境資源外交」

高年次基幹科目 [2]
社会統計学 A [1]
社会統計学 B [1]

地球科学（メイン）
国際政治学（サブ）
の２つの分野からアプローチ

ディグリー・プロジェクト2 [5]

より高度な専門性を身につけ、これまでに得た学知を組み合わせて、課題の解決策の創造に取り組む

ディグリー・プロジェクト3 [2]

【卒業研究審査：英語で発表】

エリア発展科目 [4]
議論と創造のコミュニケーション A [1]
議論と創造のコミュニケーション B [1]
メディアとコミュニケーション [1]
大気海洋科学 [1]

チューター
開講授業・教員の紹介、興味関心の拡大、課題発見の指導など

修学ナビゲーター
興味関心の把握、授業選択の指導、留学先や受講科目の指導、進路指導など

複数指導教員制（メイン・サブ）
課題設定の指導、卒業研究の指導

1年次：39.5単位　2年次：37.5単位　3年次：34単位　4年次：13単位

卒業後の進路イメージ「環境系企業、外資系企業、公務員（環境コンサル）等」

資料１４

履修パターン②

『食の安全・持続的確保の課題に取り組み、人口増加・飢餓に関するディグリー・プロジェクトに着手したい』

共通基礎科目 [2]
グローバル・ヒストリー [1]
グローバル・エシクス [1]

基幹教育　ものの見方・考え方 学び方を学ぶ
基幹教育セミナー [1]
基幹教育セミナー [1]

文系ディシプリン科目 [8]
政治学入門 [2] 地理学入門 [2]
経済学入門 [2] 社会学入門 [2]

理系ディシプリン科目 [8]
デザイン思考 [1]
情報科学 [1.5]
プログラミング演習 [1]
社会と数理科学 [1]
基礎生化学 [1]
最先端地球科学 [1.5]
自然科学総合実験（基礎）[1]

サイバーセキュリティ科目 [1]
サイバーセキュリティ基礎論 [1]

健康・スポーツ科目 [1]
健康・スポーツ科学演習 [1]

総合科目 [1]
命のあり方・尊さと食の連関 [1]

言語文化科目 [14]
◆第 1 外国語 [10]
【英語ｲﾝﾃﾝｼﾌﾞｺｰｽ】
Global Issues RW 1･2 [2]
Global Issues LS 1･2 [2]
Japanese Issues 1･2 [2]
Academic Issues 1 ～ 4 [4]
◆第 2 外国語 [4]
中国語 I･II [4]

課題協学科目 [2・5]

経験科目 [1]
異文化対応 1 [1]

理系ディシプリン科目 [1.5]
現代化学 [1.5]

総合科目 [3]
日本事情 [2]
アカデミック・フロンティア I [1]

高年次基幹科目 [5]
共創発想法 [2]
機械学習と人工知能 [1]
データマイニングと情報可視化 [1]
科学の歴史 A [1]

共通基礎科目 [6]
共創デザイン思考発想法 [1]
フィールド調査法 [1]
科学論 [1]
データサイエンス基礎 [1]
複雑系科学入門 [2]

エリア横断科目 [6]
デザイン思考プログラミング演習 [1]
ビッグデータ処理 [1]
実データ解析技法 [1]
科学技術社会論 [1]
複雑系科学論 [2]

高年次基幹科目 [4]
遺伝子組換え生物の利用と制御 [2]
バイオインフォマティクス [2]

レクチャーシリーズ [2]
レクチャーシリーズ [2]

高年次基幹科目 [2]
社会統計学 A [1]
社会統計学 B [1]

開発経済学（メイン）
国際福祉（サブ）
の２つの分野からアプローチ

課題審査
ディグリー・プロジェクト課題例
「人口増加・飢餓」

共創基礎プロジェクト1 [2]
共創基礎プロジェクト2 [2]
共創プロジェクト1 [2]
共創プロジェクト2 [2]
ディグリー・プロジェクト1 [2]
ディグリー・プロジェクト2 [5]
ディグリー・プロジェクト3 [2]

他者と協働して課題に取り組むチーム型学習

食の安全性・持続的確保等に関する課題に取り組む上で必要な科目を履修

【卒業研究審査：英語で発表】

より高度な専門性を身につけ、これまでに得た学知を組み合わせて、課題の解決策の創造に取り組む

エリア基礎科目 [10]
Molecular & Cell Biology [1]
遺伝学と進化 [1]
Brain & Information [1]
社会共生論 [1]
地域研究基礎論 [1]
社会哲学論 [1]
地球の理解 [1]
自然環境と社会 [1]
歴史基礎論 [1]
政治経済基礎論 [1]

エリア発展科目 [20]
健康の科学 [1]
Biochemistry [1]
病態生理 [1]
Advanced Molecular Biology [1]
生命情報科学 [1]
人間社会研究法 [1]
生き方の人類学 [1]
国際政治学 [1]
比較地域研究 [1]
国際関係論 [1]
Stress and Nutrition [1]
開発経済学 [1]
多文化共生の世界秩序 [1]
生物多様性科学 [1]
Bioethics [1]
社会の中の地球科学 [1]
環境保全・再生 [1]
環境地理学 [1]
保全遺伝学 [1]
環境ガバナンス [1]

言語文化科目 [2]
◆第 1 外国語 [2]
【英語ｲﾝﾃﾝｼﾌﾞｺｰｽ】
学術英語ゼミ・オーラル・コミュニケーション [2]

海外留学
xxxx 大学 等

経験科目 [2]
異文化対応2 [1]
海外活動 A 1 [1]

エリア発展科目 [4]
議論と創造のコミュニケーション A [1]
議論と創造のコミュニケーション B [1]
異文化とコミュニケーション [1]
国際福祉論 [1]

チューター
開講授業・教員の紹介、興味関心の拡大、課題発見の指導など

修学ナビゲーター
興味関心の把握、授業選択の指導、留学先や受講科目の指導、進路指導など

複数指導教員制（メイン・サブ）
課題設定の指導、卒業研究の指導

1年次：39.5単位
2年次：37.5単位
3年次：34単位
4年次：13単位

卒業後の進路イメージ「国際協力 NPO、商社（食品系）、公務員（政策）等」

履修パターン③

『領土紛争と移民問題に取り組み、国際協調に関するディグリー・プロジェクトに着手したい』

共通基礎科目 [2]
グローバル・ヒストリー [1]
グローバル・エシクス [1]

基幹教育
ものの見方・考え方
学び方を学ぶ

基幹教育セミナー [1]
基幹教育セミナー [1]
文系ディシプリン科目 [8]
政治学入門 [2] 地理学入門 [2]
経済学入門 [2]
The Law and Politics of International Society[2]
理系ディシプリン科目 [8]
デザイン思考 [1]
情報科学 [1.5]
プログラミング演習 [1]
社会と数理科学 [1]
数理統計学 [1]
最先端地球科学 [1.5]
自然科学総合実験（基礎）[1]
サイバーセキュリティ科目 [1]
サイバーセキュリティ基礎論 [1]
健康・スポーツ科目 [1]
健康・スポーツ科学演習 [1]
総合科目 [1]
グローバル社会を生きる [1]
言語文化科目 [14]
◆第 1 外国語 [10]
【英語インテンシブコース】
Global Issues RW 1･2 [2]
Global Issues LS 1･2 [2]
Japanese Issues 1･2 [2]
Academic Issues 1 ～ 4 [4]
◆第 2 外国語 [4]
中国語 I･II [4]

課題協学科目 [2・5]

経験科目 [1]
異文化対応 1 [1]

理系ディシプリン科目 [1.5]
生態系の科学 [1.5]
総合科目 [3]
日本事情 [2]
アカデミック・フロンティア I [1]

高年次基幹科目 [5]
共創発想法 [2]
機械学習と人工知能 [1]
データマイニングと情報可視化 [1]
科学の歴史 A [1]

共通基礎科目 [6]
共創デザイン思考発想法 [1]
フィールド調査法 [1]
科学論 [1]
データサイエンス基礎 [1]
複雑系科学入門 [2]

エリア横断科目 [6]
デザイン思考プログラミング演習 [1]
ビッグデータ処理 [1]
実データ解析技法 [1]
科学技術社会論 [1]
複雑系科学論 [2]

高年次基幹科目 [4]
文化と社会の理論 [2]
脳情報科学入門 [1]
社会と倫理 [1]

レクチャーシリーズ [2]
レクチャーシリーズ [2]

高年次基幹科目 [2]
現代社会 I [2]

社会共生（メイン）
認知科学（サブ）
の２つの分野からアプローチ

課題審査
ディグリー・プロジェクト課題例
「国際協調」

共創基礎プロジェクト1 [2]
共創基礎プロジェクト2 [2]
共創プロジェクト1 [2]
共創プロジェクト2 [2]
ディグリー・プロジェクト1 [2]
ディグリー・プロジェクト2 [5]
ディグリー・プロジェクト3 [2]
【卒業研究審査：英語で発表】

他者と協働して課題に取り組むチーム型学習

領土紛争と移民問題等に関する課題に取り組む上で必要な科目を履修

エリア基礎科目 [10]
Brain & Information [1]
社会哲学論 [1]
言語コミュニケーション論 [1]
社会共生論 [1]
地域研究基礎論 [1]
歴史基礎論 [1]
地球の理解 [1]
自然環境と社会 [1]
自然災害・資源 [1]
政治経済基礎論 [1]

言語文化科目 [2]
◆第 1 外国語 [2]
【英語インテンシブコース】
学術英語ゼミ・オーラル・コミュニケーション [2]

エリア発展科目 [20]
Bioethics [1]
Cognitive science [1]
多文化共生の世界秩序 [1]
教育倫理論 [1]
人間社会研究法 [1]
国際政治学 [1]
比較地域研究 [1]
国際政治学 [1]
国際関係論 [1]
埋蔵文化財から見える世界 [1]
地域史 [1]
開発経済学 [1]
環境ガバナンス [1]
環境都市政策 [1]
東アジアの経済地理学 [1]
社会の中の地球科学 [1]
環境保全・再生 [1]
環境地理学 [1]
生き方の人類学 [1]
言語とコミュニケーション A[1]

海外留学
xxxx 大学 等

経験科目 [2]
異文化対応2 [1]
海外活動 A 1 [1]

より高度な専門性を身につけ、これまでに得た学知を組み合わせて、課題の解決策の創造に取り組む

エリア発展科目 [4]
議論と創造のコミュニケーション A [1]
議論と創造のコミュニケーション B [1]
異文化とコミュニケーション [1]
国際福祉論 [1]

チューター
開講授業・教員の紹介、興味関心の拡大、課題発見の指導など

修学ナビゲーター
興味関心の把握、授業選択の指導、留学先や受講科目の指導、進路指導など

複数指導教員制（メイン・サブ）
課題設定の指導、卒業研究の指導

1年次：39.5単位
2年次：37.5単位
3年次：34単位
4年次：13単位

卒業後の進路イメージ「国際協力機関、商社（国際開発）、企業（海外事業関連）等」

資料１５

国立大学法人九州大学教員の定年に関する規程

平成１６年度九大就規第１２号
施　　行：平成１６年　４月　１日
最終改正：平成２７年　３月３０日
（平成２６年度九大就規第１３号）

第１条　この規程は、国立大学法人九州大学就業通則（平成１６年度九大就規第１号）第１５条第１項の規定に基づき、国立大学法人九州大学に勤務する教員の定年について定めるものとする。

第２条　教員の定年は、６５歳とする。

２　定年による退職の日は、定年に達した日以後における最初の３月３１日とする。

第３条　前条第１項の規定にかかわらず、次の各号のいずれかに該当する者の定年は、７０歳とする。

(1)　文化勲章又はノーベル賞を授与された者

(2)　総長が前号に掲げる賞に相当すると認める賞を授与された者

附　則

１　この規程は、平成１６年４月１日から施行する。

２　第２条第１項の規定にかかわらず、生年月日が次表の左欄に掲げる年月日に該当する教員の定年は、同表右欄に掲げる年齢とする。

生年月日	定年年齢
昭和１６年４月２日～昭和２２年４月１日	６３歳
昭和２２年４月２日～昭和２４年４月１日	６４歳

附　則（平成２６年度九大就規第１３号）

この規程は、平成２７年４月１日から施行する。

資料１６

大学間交流協定（学生交流協定）締結大学一覧

No.	地域	国／地域	大学	枠数	No.	地域	国／地域	大学	枠数	No.	地域	国／地域	大学	枠数
1	アジア	インド	インド工科大学マドラス校	5	40	アジア	中国	華南理工大学	3	79	ヨーロッパ	フランス	グルノーブル大学（ジョゼフ・フーリエ大学、ピエール・メンデス大学、スタンダール大学、サヴォワ大学、グルノーブル理工大学、グルノーブル政治学院）	5
2		インドネシア	ガジャマダ大学	5	41		中国	吉林大学	5	80		フランス	ストラスブール大学（旧ストラスブールコンソーシアム：ルイ・パスツール大学、マルク・ブロック大学、ロバート・シューマン大学）	2
3		インドネシア	バンドン工科大学	5	42		中国	香港大学	5	81		フランス	ポリテクニーク・ド・ボルドー	5
4		韓国	江原大学校	5	43		中国	香港中文大学	5	82		フランス	ボルドー第一大学	5
5		韓国	韓国科学技術院	10	44		中国	上海交通大学	5	83		フランス	ボルドー第二大学	5
6		韓国	慶尚大学校	5	45		中国	新疆師範大学	2	84		フランス	ボルドー第三大学	5
7		韓国	高麗大学校	5	46		中国	清華大学	2	85		フランス	ボルドー第四大学	2
8		韓国	済州大学校	5	47		中国	中国科学技術大学	3	86		フランス	ボルドー大学（ボルドー第一、第二、第四からの受入れ）	3
9		韓国	全南大学校	5	48		中国	中国農業大学	5	87		フランス	ボルドー建築景観学院	5
10		韓国	ソウル大学校	5	49		中国	復旦大学	5	88		フランス	ボルドー国立農業技術大学校	5
11		韓国	中央大学校	5	50		中国	北京大学	5	89		フランス	国立東洋言語文化大学（INALCO）	2
12		韓国	東亜大学校	5	51		中国	浙江大学	5	90		ベルギー	レウヴェン・カトリック大学	5
13		韓国	成均館大学校	5	52		フィリピン	アテネオ デ マニラ大学	5	91		ロシア	サハリン国立総合大学	5
14		韓国	東国大学校	5	53		フィリピン	フィリピン大学	5	92		ロシア	サンクトペテルブルグ国立大学	3
15		韓国	浦項工科大学校	5	54		マレーシア	マラヤ大学	5	93	北米	アメリカ合衆国	アリゾナ州立大学	5
16		韓国	延世大学校	2	55		ミャンマー	ヤンゴン大学	5	94		アメリカ合衆国	イェール大学	※
17		韓国	釜山大学校	8	56		モンゴル	モンゴル科学技術大学	5	95		アメリカ合衆国	イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校	5
18		韓国	慶北大学校	5	57	アフリカ	エジプト	アレキサンドリア大学	5	96		アメリカ合衆国	ウィスコンシン大学マディソン校工学部	3
19		韓国	慶熙大学校	5	58		エジプト	カイロ大学	5	97		アメリカ合衆国	北アリゾナ大学	5
20		韓国	西江大学校	2	59	ヨーロッパ	アイスランド	アイスランド大学	5	98		アメリカ合衆国	グローブシティ大学	4
21		韓国	忠南大学校	3	60		英国	シェフィールド大学	2	99		アメリカ合衆国	ケンヨン大学	2
22		韓国	梨花女子大学校	2	61		英国	ニューカッスル大学	3	100		アメリカ合衆国	サンノゼ州立大学	5
23		シンガポール	シンガポール大学	5	62		英国	バーミンガム大学	2	101		アメリカ合衆国	ジョージア大学	5
24		シンガポール	シンガポールマネジメント大学	5	63		英国	ブリストル大学	2	102		アメリカ合衆国	デューク大学	4
25		タイ	タマサート大学	4	64		英国	リーズ大学	5	103		アメリカ合衆国	プリンストン大学	※
26		タイ	チュラロンコン大学	5	65		英国	ロンドン大学アジア・アフリカ学院	3	104		アメリカ合衆国	ベレア大学	5
27		タイ	マヒドン大学	5	66		オランダ	ライデン大学	5	105		アメリカ合衆国	ミシガン大学	10
28		台湾	国立台湾大学	5	67		スウェーデン	ウプサラ大学	5	106		アメリカ合衆国	ライス大学	5
29		台湾	淡江大学	5	68		スウェーデン	スウェーデン王立工科大学	5	107		アメリカ合衆国	ワシントン大学	6
30		台湾	国立清華大学	5	69		スウェーデン	ストックホルム大学	5	108		カナダ	クイーンズ大学	2
31		中国	同済大学	5	70		ドイツ	ハイデルベルク大学	2	109	中南米	チリ	チリカトリック大学	5
32		中国	西安交通大学	5	71		ドイツ	ホーエンハイム大学	5	110		ブラジル	サンパウロ大学	5
33		中国	中国人民大学	2	72		ドイツ	ミュンヘン工科大学	5	111		ブラジル	リオデジャネイロ連邦大学	5
34		中国	東北師範大学	5	73		ドイツ	ルートヴィヒ・マクシミリアン大学	5	112		メキシコ	メキシコ国立自治大学	5
35		中国	南京大学	5	74		フランス	エクス-マルセイユ大学（旧エクス-マルセイユ第一大学＝プロヴァンス大学）	3	113	オセアニア	オーストラリア	オーストラリア国立大学	5
36		中国	華中科技大学	5	75		フランス	エコール ノーマル スーペリウール ド カシャン	5	114		オーストラリア	クィーンズランド大学	2
37		中国	武漢大学	5	76		フランス	エコール スーペリウール デレクトリシテ	5	115		オーストラリア	シドニー工科大学	5
38		中国	北京航空航天大学	5	77		フランス	エコール ナショナル スーペリウール ド テクニック アヴァンセ	5	116		オーストラリア	シドニー大学	3
39		中国	南開大学	5	78		フランス	エコール ポリテクニック	5	計 116大学				

※受入のみ。協定上の枠数なし。

資料１７

海外渡航危機管理ハンドブック

九州大学

Study Abroad
Crisis Management
Handbook

Contents

Ⅰ はじめに

1 留学先の情報収集 …… 1
外務省の渡航に関する情報 …… 1
日本大使館・総領事館の情報 …… 2
留学先での連絡先等を登録しておく …… 2
（1）留学先の治安情勢 …… 3
（2）査証（ビザ）とパスポートの残存有効期間 …… 3
（3）健康・医療 …… 3
（4）海外旅行保険への加入 …… 5

Ⅱ 留学中に気をつけること

1 危険情報と行動の基準 …… 8
2 危機回避の行動三原則 …… 10
3 事件・事故について …… 11
（1）海外における事件・事故等 …… 11
（2）想定される事件・事故と対策 …… 12
（3）法律・慣習 …… 14
（4）疾病 …… 14
（5）カルチャーショック、ストレス …… 15
緊急連絡先 …… 16
リンク集 …… 17

I はじめに

広い意味で、個人では対処できない状況に陥ることを「危機」と言います。

例えば、学業上の失敗（授業が消化不良、単位が修得できない、レポートがうまく書けない等）による落胆と将来の不安感、あるいは病気・怪我などの緊急事態、重大な病気（HIV、ガン）、重い心理的落込みや鬱病、金銭上の災難、暴行、盗難、妊娠、友人の死、犯罪の加害者になる、あるいは日本での家族の異変など様々です。

また、日本は、世界有数の安全・安心、衛生面の問題も少ない国です。その生活に慣れた日本人が海外に留学する際には、予想もしない事態に直面し、巻き込まれる可能性もあります。

自分の身は自分で守るのが原則ですが、海外で問題が生じた時、必要な時に援助を受けることは恥ずかしいことではありません。海外の大学や地域にも留学生に対して援助してくれる専門家やスタッフがいるので、援助を求めることが大切です。また、そうすることで、少しでも悩みを和らげ、問題に立ち向かう積極的姿勢を取り戻すこともできます。

まずは、日本とは異なる海外事情を把握し、留学が有意義なものとなるように、十分な情報収集をした上で、準備をしましょう。

1 留学先の情報収集

留学先の治安状況や犯罪の傾向や手口、法律や習慣を事前に熟知しておくことで、多くの事件・事故を防ぐことができます。留学前には、外務省の海外安全ホームページの情報等を参照し、留学先の治安状況や安全対策等について情報を収集しておきましょう。

外務省の渡航に関する情報

日本人が安全で快適に海外渡航・滞在するための情報は、外務省の「海外安全ホームページ」や「携帯版・海外安全ホームページ」、【外務省海外旅行登録「たびレジ」】への登録などを通じて入手することができます。また、「外務省領事サービスセンター」では、海外安全に関する電話でのお問い合せや窓口相談にも随時応じていますので、利用してください。

日本大使館・総領事館の情報

世界各国・地域に配置されている日本大使館・総領事館がホームページ上で発信している安全情報をはじめ、世界各国の政府やマスコミからインターネットを通じて発信されている情報の中には、その国の安全に関する有益な情報がたくさん含まれています。これらの情報を上手に活用し、安全対策に役立ててください。（海外の日本大使館・総領事館のホームページは、外務省ホームページ http://www.mofa.go.jp/mofaj/からアクセスできます。）

日本語対応でない海外のパソコンでも、非日本語環境パソコンからの閲覧用サイト（http://www.anzen.mofa.go.jp/img_toko/index.html）から、日本語の渡航情報を見ることができます。

留学先での連絡先等を登録しておく

旅券法第16条により、外国に住所又は居所を定めて３ヵ月以上滞在する日本人は、その住所又は居所を管轄する日本の大使館又は総領事館（在外公館）に「在留届」を提出するよう義務付けられています。この届け出は、実際に現地に着いた後に行うものですので、住所等が決まったら「在留届電子届出システム（ORRnet）」のサイトから在留届を提出してください。

なお、海外滞在が３ヵ月未満の場合も「在留届」を提出すれば、緊急事態が発生した場合には、日本国大使館や総領事館からメールによる通報や迅速な援護が受けられます。

また、３ヵ月未満の渡航又は外国での住所･居所を定めず３ヵ月以上渡航する場合は「たびレジ」に登録することができます。

海外での思わぬトラブルを未然に防ぐため、届出又は登録をしてください。

（1）留学先の治安情勢

海外には、治安情勢が極度に悪化しているという理由で、渡航には適さない国や地域がたくさんあります。これらの国や地域へ留学を計画する際は、特に慎重な検討が必要です。治安が悪化していたり、災害、騒乱、その他の緊急事態が発生したり、その危険性が高まっているような場合には、その国（あるいは地域）に対して、外務省が「危険情報」や「スポット情報」等の渡航情報を発出しています。これらの情報を参考に、「危険な場所には近づかない」という心構えにもとづき、安全な留学計画を立てることが重要です。

（2）査証（ビザ）とパスポートの残存有効期間

目的・滞在期間に適合した査証を取得することが必要です。（ただし、観光目的の短期滞在など一定の目的･期間に限って査証の取得を免除している国もあります。）また､国によっては､入国の際（あるいは査証取得の際）､所持しているパスポートに一定の残存有効期間がない場合､入国あるいは査証の発給が拒否されることもあります。これらの情報は国によってはしばしば変更されることがあるため、各自、事前にチェックしてください。

（3）健康・医療

海外から帰国した後にコレラや赤痢などを発症した日本人旅行者の例が新聞で報道されることがあります。その多くは、現地で流行している状況ではなかったり周囲に症状が出ている人がいなかったにもかかわらず、感染したものです。日本との衛生環境や食べ物の違い、滞在中の疲労などにより感染しやすくなることもあり、現地の人が大丈夫だから自分も大丈夫という考えは通用しません。特に注意すべき感染症が流行していないかや、予防接種が必要かという情報はもとより、現地で体調を維持していくためには特にどのような注意が必要かという観点でも情報を集め、事前に必要な対策を講じることが大切です。

また、急な傷病に素早く対応するためには、現地の医療機関に関する情報を収集しておきましょう。

①健康診断・歯科検診

特に長期の留学を予定している場合は、出発前に必ず健康診断を受けましょう。また、歯科治療は、一般的に海外旅行（留学）保険の対象外であり、海外での治療は高額な費用がかかります。留学前に治療をすませておきましょう。

②持病

留学に差し支えない持病がある時は、診断書（英文）、処方薬説明書（英文）を留学先へ持参しましょう。通院・治療中の学生は、留学が健康面で問題がないか担当の医師に確認の上、留学先大学で補助等が必要な場合には、予め本学の留学担当者に報告してください。

また、留学先でも継続して治療が行えるように、留学先の医療機関の情報を予め収集しておきましょう。

③常備薬

海外では、一般の薬局で売っている薬でも日本で手に入るものとは違う場合があります。日本で自分がよく使う薬があれば持参するようにしましょう。（例：酔い止め、抗アレルギー薬、痛み止め、胃腸薬） 但し、国によっては、薬の成分が認められていない場合がありますので、予め調べておくとよいでしょう。

④予防接種

海外でかかる感染症として頻度が高いのは、飲食物から感染する下痢症やA 型肝炎です（表１）。また、感冒や結核のように患者の飛沫で感染する病気も見られます。さらに開発途上国では、蚊に媒介されるマラリアやデング熱、性行為で感染するB型肝炎や梅毒、動物からかかる狂犬病などにも注意が必要です。

（厚生労働科学研究費補助金・新興再興感染症研究事業　海外渡航者に対する予防接種のあり方に関する研究班作成「海外旅行者の予防接種Q&A」から）

〔表1〕海外でかかりやすい感染症

感染経路	生活上の注意	感染症	主な流行地域	主な症状	予防接種の有無
飲食物から感染	・ミネラルウォーターを飲む ・加熱した料理を食べる	旅行者下痢症	開発途上国	下痢、嘔吐	
		A型肝炎	開発途上国	発熱、黄疸、全身倦怠感	○
		ポリオ	南アジア、アフリカ	発熱、手足の麻痺	○
		腸チフス	開発途上国（とくに南アジア）	発熱、腹痛	○※
患者の飛沫などで感染	・手洗いやうがい ・人ごみを避ける	インフルエンザ	全世界	発熱、咽頭痛	○
		結核	開発途上国	咳・たん、体重減少	○
		流行性髄膜炎	西アフリカなど	発熱、意識障害、頭痛	○※
蚊に媒介	・皮膚を露出しない ・昆虫忌避剤を塗る ・殺虫剤を散布する	マラリア	開発途上国（熱帯・亜熱帯）	発熱、悪寒	
		デング熱	東南アジア、中南米	発熱、発疹	
		日本脳炎	アジア	発熱、意識障害	○
		黄熱	熱帯アフリカ、南米	発熱、黄疸	○
性行為で感染	・行きずりの性行為を控える ・医療行為にも注意	B型肝炎	アジア、アフリカ、南米	発熱、黄疸、全身倦怠感	○
		梅毒	開発途上国	性器潰瘍、発疹	
		HIV感染症	全世界（とくに開発途上国）	発熱、リンパ節腫脹	
動物から感染	・動物に近寄らない	狂犬病	全世界（とくに開発途上国）	恐水発作、けいれん	○
傷口から感染	・傷口を消毒する	破傷風	全世界	口が開かない、けいれん	○

※腸チフス、流行性髄膜炎には予防接種がありますが、日本では認可されていません。

〔表2〕地域別に推奨される予防接種（○：推奨する）

	短期滞在者※		長期滞在者（短期旅行者でも通常の観光ルート以外に立ち入る場合を含む）						
地域名＼ワクチン名	A型肝炎	黄熱	A型肝炎	B型肝炎	破傷風	狂犬病	黄熱	日本脳炎	ポリオ
東アジア（中国、韓国など）	○		○	○	○	○		○	
東南アジア（タイ、ベトナムなど）	○		○	○	○	○		○	
南アジア（インドなど）	○		○	○	○	○		○	○
中近東（サウジアラビアなど）	○		○	○	○	○			○
アフリカ（ケニアなど）	○	○（赤道周辺）	○	○	○	○	○（赤道周辺）		○
東ヨーロッパ（ロシアなど）	○		○	○	○	○			
西ヨーロッパ（イギリス、フランスなど）					○				
北アメリカ（アメリカ合衆国、カナダなど）					○				
中央アメリカ（メキシコなど）	○		○	○	○	○			
南アメリカ（ブラジルなど）	○	○（赤道周辺）	○	○	○	○	○（赤道周辺）		
南太平洋（グアム、サモアなど）	○		○	○	○	△（島による）			
オセアニア（オーストラリアなど）					○				

※短期滞在者：滞在期間が1ヶ月未満で都市部やリゾートなどに滞在する者

（4）海外旅行保険への加入

留学中に、何らかの事件・事故に巻き込まれたり、慣れない環境で思いがけない病気にかかった場合、海外での医療費は基本、全額自費で負担することになります。海外で入院・手術などが必要となった場合には、数10万～数100万円の医療費が請求されることもあり、医療施設や水準が十分でない国では、国外への緊急移送が必要となることもあります。

海外旅行保険には必ず加入し、家族にも補償等の内容を伝えておくことが必要です。

海外旅行保険に加入していると、事故や病気の際の医療費や移送費などが補償されるほか、補償内容によっては、貴重品の盗難や遺失時の対価、保険会社によっては、家族の渡航費負担や通訳の手配サービス、緊急キャッシングサービスなども盛り込んでいます。

なお、クレジットカードには、海外旅行保険特約のついたものもありますが、補償の限度額やサービスの範囲はカードにより異なりますので、保険内容をしっかり確認し、可能な限り充実した保険に加入することをお勧めします。

また、派遣先によっては、ビザ取得の際に保険加入が条件となっている国や受入大学が指定する保険に入ることを義務づけることがありますので、保険加入前に各自確認をするようにしてください。

※参考：世界の救急医療事情（例）盲腸手術入院時の都市別総費用

都市名	盲腸手術の治療費・総費用(腹膜炎を併発していない手術を想定)入院費・薬剤費を含む	救急車の料金（公）：公営の場合
東京	¥400,000	(公)無料
ホノルル	¥3,041,000	(公) ¥121,600/約5km
ロサンゼルス	¥2,432,800	(公) ¥152,100＋走行加算¥2,400/マイル
バンクーバー	¥1,369,900	(公) ¥55,900
ロンドン	¥1,721,800	(公)無料
パリ	¥890,800	(公) ¥22,300
ゴールドコースト	¥949,600	(公) ¥39,200＋走行加算¥160/km
北京	¥295,200 ～¥984,000	(公) ¥790＋走行加算¥100/km
ソウル	¥557,500 ～¥669,000	(公)無料
シンガポール	¥1,379,600	(公)無料
バンコク	¥693,800	(公)利用頻度は低い
マニラ	¥28,700 ～¥861,000	(公)利用頻度は低い
クアラルンプール	¥103,600	(公)無料

★海外は自由診療となるため、治療費は受診する医療機関や治療内容等によって大きく異なります。
一覧は目安としてください。(2014年12月24日のレート(1US $＝¥121.64)で計算。)

（資料提供：ジェイアイ傷害火災保険株式会社）

学研災付帯海外留学保険（略称：付帯海学）

本学で実施する留学のうち、次のプログラムについては、**「学研災付帯海外留学保険（略称：付帯海学）」**への加入を義務づけています。

- **大学間交流協定校への交換留学（CSP）**
- **RENKEI**
- **トビタテ！留学JAPAN**
- **グローバル人材育成推進事業海外プログラム**

▼上記プログラムにおける付帯海学の保険パターンは以下のとおりです。

傷害死亡	留学先でのケガによって死亡した場合に支払われる。	300万円
疾病死亡	留学先での病気によって死亡した場合に支払われる。	300万円
傷害後遺障害	留学先でのケガが原因で後遺障害が生じてしまった場合に支払われる。	300万円
治療・救援者費用	留学先でのケガや病気の治療費用、また、そのために日本から家族等がかけつけた場合の交通費等が支払われる。(救援費用は、3日以上の入院が条件)	無制限
携行品損害	携行品が盗難などの事故にあって損害を受けた場合に支払われる。	10万円
賠償責任	他人にケガ等をさせてしまった、物を壊してしまった場合に支払われる。	1億円

「特定非営利活動法人海外留学生安全対策協議会（JCSOS）

JCSOSは、大学が企画実施する海外研修・留学を安全対策面及び法的側面からサポート、多角的な支援をするNPO法人です。

本学は、このJCSOSの会員となっており、危機管理、安全対策専門会社、保険会社、海外の関連機関、内外の交流団体等と連携し、会員校へ様々な情報やサポートシステムの提供を受け、危機管理体制の構築および有事の際に備えています。

JCSOSは、本学を含む会員へ渡航中の緊急事故発生やトラブル等に備えて、危機管理システム（J-BASIC・J-TAS）を提供しています。

JCSOS危機管理システム（J-BASIC、J-TAS）

J-BASIC	緊急事故発生時に組織向け対応支援及び対応費用補償等を行い海外プログラムをサポートします。
J-TAS	J-BASICのサポート内容に加えて学生及び保護者等からの24時間対応のトラブル相談窓口を設置（危機管理サポート＋海外健康相談サポート）。トラブル発生時の迅速な処置を図ります。重大な事故発生時には大学と連携して事故対応にあたります。（参考：http://www.jcsos.org/j-tas.html）

本学で実施する一部のプログラムでは、参加にあたって、JCSOS危機管理システムへの加入を指定していることがあるので、各プログラム担当者に確認してください。（なお、危機管理システムの加入費用は学生負担となります。）

Ⅱ 留学中に気をつけること

海外には、治安情勢が極度に悪化していると言う理由で、渡航には適さない国や地域が多くある一方、治安は比較的安定していて「危険情報」が発出されていない国・地域でも、事件・事故に巻き込まれるケースもあります。事前に各々の情報を把握し、その対応について確認しておきましょう。

1 危険情報と行動の基準

留学中の治安の悪化、災害、騒乱、その他の緊急事態の発生時には、外務省の海外安全情報に基づき、以下の対応を取ってください。（外務省　海外安全ホームページ「渡航情報」の名称変更等についてから）

危険情報カテゴリーの説明

レベル1	**十分注意してください。**	その国・地域への渡航、滞在に当たって危険を避けるため特別な注意が必要です。
レベル2	**不要不急の渡航は止めてください。**	その国・地域への不要不急の渡航は止めてください。渡航する場合には特別な注意を払うとともに、十分な安全対策をとってください。
レベル3	**渡航は止めてください。（渡航中止勧告）**	その国・地域への渡航は、どのような目的であれ止めてください。（場合によっては、現地に滞在している日本人に対して退避の可能性や準備を促すメッセージを含むことがあります。）
レベル4	**退避してください。渡航は止めてください。（退避勧告）**	その国・地域に滞在している方は滞在地から、安全な国・地域へ退避してください。この状況では、当然のことながら、どのような目的であれ新たな渡航は止めてください。

感染症危険情報発出の目安

レベル1	十分注意してください。	特定の感染症に対し、国際保健規則（IHR）第49条に規定する緊急委員会が開催され、同委員会の結果から、渡航に危険が伴うと認められる場合等。
レベル2	不要不急の渡航は止めてください。	特定の感染症に対し、IHR第49条に規定する緊急委員会において、同第12条に規定する「国際的に懸念される公衆の保健上の緊急事態（PHEIC）」が発出される場合等。
レベル3	渡航は止めてください。 （渡航中止勧告）	特定の感染症に対し、IHR第49条に規定する緊急委員会において、同第12条に規定する「国際的に懸念される公衆の保健上の緊急事態（PHEIC）」が発出され、同条第18条による勧告等においてWHOが感染拡大防止のために貿易・渡航制限を認める場合等。
レベル4	退避してください。 渡航は止めてください。 （退避勧告）	特定の感染症に対し、IHR第49条に規定する緊急委員会において、同第12条に規定する「国際的に懸念される公衆の保健上の緊急事態（PHEIC）」が発出され、同条第18条による勧告等においてWHOが感染拡大防止のために貿易・渡航制限を認める場合で、現地の医療体制の脆弱性が明白である場合等。

感染症特有の注意事項例

４段階のカテゴリーごとの表現に収まらない感染症特有の注意事項が状況に応じて追加で付記される代表的な例です。

「出国できなくなる恐れがありますので、（早期の）退避を検討してください。」

・商業便が運行停止となるなど、出国できなくなる恐れがある場合等。

「現地で十分な医療が受けられなくなる恐れがありますので、(早期の) 退避を検討してください。」

・現地の医療体制が脆弱で、当該感染症及びその他の疾病について十分な医療が受けられない恐れがある場合等。

「現地の安全な場所に留まり、感染対策を徹底してください。」

・ＷＨＯの感染拡大封じ込め措置によって封鎖された国・地域の邦人に対し、同措置への協力を呼びかける場合等。

2 危機回避の行動三原則

3 事件・事故について

各国・地域で発生する事件・事故等について、外務省の海外安全ホームページで、渡航先の情報を事前にチェックする等、正確な情報を収集し、適切な判断ができるように、万全な安全対策をして備えましょう。

（1）海外における事件・事故等

近年、海外において日本人がテロを始めとする凶悪な事件、不測の事故に巻き込まれる危険性が高まっています。日本の在外公館及び財団法人交流協会が2013年に支援した海外における日本人の援護人数は、10年前（2003年）の17,426人から19,746人へと増加しています。一人ひとりが危機管理意識を持って留学先の危険の傾向と対策を把握して行動することが必要です。

2014年以降の主な事件・事故等は以下のとおりです。

・**テロについては、**2015年１月、シリアにおいて「イラクとレバントのイスラム国（ISIL）」によって拘束されていた２人の日本人の映像が、インターネット上に公開され、その後殺害されたとみられる事件が発生。
・中東、アフリカ、南西アジアを中心に、ISIL、アルカイダ、タリバーンなどのイスラム過激派武装組織による治安当局などの政府施設を狙った襲撃や、公共交通機関、宗教施設、市場など人が多く集まる場所における一般市民を狙った無差別テロ、人質拘束・殺害などが相次いで発生。
・欧米諸国においても、イスラム過激思想に影響を受けたと見られる個人によるテロが発生
・12月、シドニー（オーストラリア）の中心部で複数の人質を取った立てこもり事件が発生。
・**犯罪被害については、**日本人が犠牲となる殺害事件が、フィリピン、タイ、米国等で発生。
・**日本人の人的被害があった事故としては、**２月、インドネシア・バリ島沖におけるスキューバダイビング中に行方不明となった事故が発生。
・３月、ニューヨーク（米国）における爆発によるビルの倒壊が発生。
・８月、11月、米国カリフォルニア州における交通事故が発生。
・９月、ブラジルにおける観光中のモーターボートに漁船が衝突する事故が発生。
・**大規模自然災害については、**10月、ネパール・ヒマラヤ山脈のアンナプルナ山域及びダウラギリ山域において、サイクロンの影響による吹雪・雪崩が発生。
・**政情不安などに起因した情勢悪化としては、**タイにおいては2013年秋から2014年５月まで反政府デモが継続して行われ、発砲事件等で死傷者が散発的に発生。
・ウクライナでは、３月のロシアによるクリミア自治共和国の「併合」などをめぐり、ウクライナ政府と武装勢力との対立が激化し、特に東部のドネツク州、ルハンスク州での不安定な情勢が続いた。
・香港においては、９月から政治制度改革をめぐり、学生・民主派団体による「セントラル占

拠」運動により座り込みなどの抗議活動が行われ、これを排除しようとする警官隊との間で衝突が発生。

・**感染症については、**西アフリカのギニア、リベリア、シエラレオネでエボラ出血熱が流行。
・中国等において鳥インフルエンザA（H7N9）のヒト感染例が発生
・中東地域において中東呼吸器症候群（MERS）コロナウィルスの感染例が発生
・デング熱やマラリアなど蚊が媒介する感染症などが引き続き世界各地で流行。
・中国、インド、東南アジアなどを中心とした新興国では、大気汚染による健康被害に対する懸念が高まっている。

（平成27年版　外交青書から抜粋）

（2）想定される事件・事故と対策

①交通事故

国・地域によって、交通ルール・環境は様々です。被害者、加害者にならないように各々に対する備えが必要です。

・車の運転、自転車乗車中は、交通ルールを遵守しましょう。
・公共の交通機関に乗車中も事故に巻き込まれる可能性があります。
・信号や標識が少ない、道路状況がよくない等の交通環境の通行は注意しましょう。

②盗難・強盗

・公共の場所における荷物の置き引きに注意しましょう。
・人混みで不自然に押されたり、触られたりしたときは、すぐに所持品を確認しましょう。
・ひったくりの被害に遭わないように、手荷物を車道側に持つのは避けましょう。
・滞在先の金銭の管理は慎重にしましょう。
・強盗に遭ったときは、被害を大きくしないためにも抵抗するのはやめましょう。

③その他

性的嫌がらせを受けたり、性犯罪に巻き込まれる可能性もあります。
軽率な行動は慎むとともに、相手に誤解の余地を与えない行動を心がけましょう。
必要な場合は、現地のカウンセラーに相談しましょう。

・単独行動や夜間の外出は控えましょう。
・親しげに声をかけてくる人は安易に信用せず、警戒心を忘れずに、少しでも不審に思ったときははっきりと断りましょう。（日本語で話しかけ、日本での滞在経験や日本人の知り合いの名前に言及するなどして旅行者を安心させてだますような巧妙な手口も発生しており、注意が必要です。）
・知らない人に勧められた飲食物には気をつけましょう。
・過度な飲酒は控えましょう。
・未成年者との交際は犯罪と見なされることがありますので注意しましょう。

・過度な肌の露出は避けましょう。
・タクシーを利用する場合は、正規のタクシーを利用し、白タク等の営業許可を受けていないタクシーへの乗車は控えましょう。

対応

犯罪被害に遭った場合は、まず、留学先大学と九州大学の担当者に連絡し、適切な指示を受けてください。必要に応じて、在外日本公館や関係機関等に届けを出し、再発防止と被害防止対策に役立てましょう。

また、海外旅行（留学）保険等でもサポートや補償を受けられる場合がありますので、サービス内容等を予め確認しておきましょう。

事例１ パスポートをなくした！

【対応】 ①事前にパスポートのコピーを取っておく。
②警察で紛失の届け出を提出し、届出証明書を発行してもらう。
③以下の書類を揃え最寄りの在外日本公館にて紛失の届け出及び再発行の申請を行う。
※詳細は申請先の在外日本公館に確認してください。
・「紛失一般旅券等届出書」１通
・警察署／消防署による紛失届出の証明書等
・写真（4.5㎝×3.5㎝）１葉
・本人確認／国籍確認のできる書類（戸籍抄本等）

事例２ クレジットカードをなくした！

【対応】 ①第三者にカードを利用されないよう、カード会社に無効手続きの連絡を行なう。
※必要に応じてカードの再発行を依頼する。
②警察で紛失の届け出を提出し、届出証明書を発行してもらう。

事例３ 犯罪被害にあった／事件に巻き込まれた

【対応】 ①警察へ被害を届け出て、被害届の受理書を発行してもらう。
②在外日本公館に連絡する。
③海外旅行（留学）保険の請求手続きを行なう。
※被害にクレジットカードが関係している場合にはカード会社にも連絡する。

（3）法律・慣習

現地の法律を守り、慣習を尊重する気持ちで、慎重な言動に努めましょう。

・宗教

社会全般にわたり宗教が大きな役割を占めている国では、法律に宗教に関する規定を含んでいるものもあり、宗教を侮辱したり、儀式を妨害するような行為は罰せられることがあります。宗教施設を訪れる際の服装等についても注意しましょう。

・飲酒

公共の場での飲酒が禁じられていたり、飲酒年齢も日本とは異なることがあります。

・薬物使用・所持

自分の意志とは関係なく麻薬取引に巻き込まれることがあります。興味本位でよくわからない薬物を購入したり、預かったりして犯罪に巻き込まれない注意が必要です。国によっては、死刑・無期刑といった厳しい罰則を科せられることもあります。

・写真・ビデオ撮影

国防上の理由から、多くの場合、国境施設、軍事施設、空港、港湾等の施設の写真撮影は禁止されています。この他､公共施設や美術館においても撮影許可が必要な場合があります。カメラを没収されたり、警察に拘留されるケースもあるので注意しましょう。

・差別・偏見

日本人やアジア系の居住者が少ないところでは、差別や偏見に遭遇することもあります。世界は、多様な価値観や考え方、文化的背景を持った人々で構成されており、各々違ったアイデンティティを持っています。それらを尊重するとともに、自らのプライドも大切にしましょう。

・政治活動

政治問題等に巻き込まれなように注意し、政治的グループやその活動に勧誘されても参加しないようにしましょう。

（4）疾病

海外では、慣れない気候、時差、食習慣等により体調を崩すことがあります。また、日本にはないような、感染症や風土病が発生すること、言葉や習慣への不適合が原因で精神的なストレスを抱えることもあります。体調を崩さないためにも、生水・生ものに注意し、十分な睡眠と休養を取りましょう。また、現地で信頼のおける医療機関の所在地、連絡先を調べておきましょう。

（5）カルチャーショック、ストレス

カルチャーショックとは、異文化に見たり触れたりした際、習慣・考え方・異文化の実像について、母国文化の常識と大幅に掛け離れていたり、自身が学校教育などで習得したその異文化に関する知識・情報と乖離しているため、心理的にショックを受けたり戸惑うことです。

また、留学中は思わぬことがストレスの原因になることもあります。

これらは一時的なもので、異文化の適応過程では誰もが経験するものです。期間や程度は人によって異なりますが、もしその兆候を感じたら、次のようなことをやってみましょう。

・柔軟な対応を心がけ、価値観の多様性を理解し、物事を客観的に受け止める努力をする。
・エクササイズをしたり、日本人と日本語で話す等、ストレス発散方法を見つける。
・現地のアドバイザー、留学生相談室に相談する。

! 緊急連絡先

海外留学中の緊急事態は、関係者に迅速な連絡を取ることで、危機を回避あるいは最小限で食い止める可能性が高まります。

留学前に「緊急連絡リスト」を作成し、留学中は持参の上、万が一の緊急事態に備えましょう。

・九州大学関係者（指導教員、研究室、所属部局学生系係、留学生課など）及び家族へ速やかに安否情報や置かれている状況を報告する。

・留学先大学や地域において援助してくれる部署の所在地と電話番号を知っておく。

　留学先大学の留学生サポートセンター、カウンセリング・ルーム、警察・病院の緊急連絡先、地域ボランティアの連絡先等。

・留学先大学を離れる時には、事前に関係部署や関係者に連絡しておく。

・旅行する際は、留学先や本学の関係部署、家族に連絡し、旅行スケジュールも知らせておく。

・本学の関係者や家族とは常に連絡を取り、問題があれば早めに相談する。

・体調が悪いときは、早めに病院に行く。可能な場合は友人やクラスメートに付き添ってもらう。

滞在先の日本国大使館・領事館	
現地の警察	
現地の救急車	
現地の消防	
クレジットカード会社	
保険会社	
旅行会社	
航空会社	
外務省緊急連絡先	
九州大学　所属部局学生系係	
九州大学　留学生課	
留学先大学の連絡先	

リンク集

情報源	掲載事項	URL
安全情報		
外務省：海外安全HP	各地域の危険情報のほか、各国・地域に応じた安全対策の方法、海外における重要な情報を掲載	http://www.anzen.mofa.go.jp
外務省：海外安全　虎の巻	海外安全の基礎知識パンフレット	http://www.anzen.mofa.go.jp/pamph/pamph_01.html
海外邦人安全協会HP	テロ・紛争等の緊急事態への対応、危機管理情報を掲載	http://www.josa.or.jp/
日本在外企業協会HP	各国政府等からの海外安全情報を掲載	http://www.joea.or.jp/safetyinfo
感染症・健康情報		
厚生労働省検疫所HP	海外で流行している感染症等の情報を掲載	http://www.forth.go.jp/
国立感染症研究所：感染症疫学センター	感染症に関する最新の情報を掲載	http://www.nih.go.jp/niid/ja/
外務省：世界の医療事情	世界の地域別医療情報、感染症情報、医療機関の情報を掲載	http://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/medi/
生活情報		
国際協力機構（JICA）：国別生活情報	海外生活に有用な情報を掲載	http://www.jica.go.jp/seikatsu/
その他		
外務省：在外公館リスト	各国の日本大使館・総領事館の連絡先を掲載	http://www.mofa.go.jp/mofaj/annai/zaigai/list/index.html

【参考文献】・外務省「海外安全　虎の巻2015」
・東北大学「東北大学生のためのセーフティ・ハンドブック」
・名古屋大学国際部「海外安全ハンドブック」
・長崎大学「学生の国際交流に関する危機管理対応マニュアル（学生用）」

Study Abroad Crisis Management Handbook

九州大学学務部留学生課

学生の確保の見通し等を記載した書類

１．学生の確保の見通し及び申請者としての取り組み状況

（１）学生の確保の見通し

共創学部に設置する学科は１学科（共創学科）とし、その入学定員は 105 名とする。この入学定員を長期的かつ安定的に確保することができることを示すために、本学の一般入試の状況を踏まえ、高等学校及び中等教育学校（以下「高等学校等」という。）の生徒及び進路指導担当教員に対してアンケート調査を実施し（調査期間：H29.1~H29.2）、その結果に将来的な人口変動を加味して、データの分析を行った。

① 定員充足の根拠となる客観的なデータの概要

平成 28 年度九州大学入学者選抜試験における志願者数上位 50 校（福岡県：21 校、九州（福岡県を除く）：19 校、九州外：10 校）に在籍する 2 年生を対象にアンケート調査【資料１】を実施した。質問紙のみなし回収率は 76.2%（11,652 枚／15,300 枚、ただし送付時の都合で１枚＝生徒１人に必ずしも対応していないので、便宜的な割合である）で、回答があった高等学校等の割合は 82%（41 校／50 校）であった。

アンケート調査の結果、大学等への進学を希望すると回答した者 10,657 人のうち、本学部に「入学したい」と回答した者は 432 人（4.1%）おり、「進学先の一つとして考えたい／興味がある」と回答した 4,985 人（46.8%）と合わせると、半数以上の 5,417 人（50.8%）が本学部への入学に関心を示した。【表１】

表 1　高校生の入学意向

水準	度数	割合
1.入学したい	432	4.1%
2.進学先の１つとして考えたい／興味がある	4,985	46.8%
3.入学したいとは思わない	5,240	49.2%
合計	10,657	100.0%

また、生徒への調査と同時に、対象高等学校等の進路指導担当教員に対してもアンケート調査【資料１】を実施し、回収率は 58%（87 枚／150 枚、依頼時の都合上各校 3 枚を配布）、回答があった高等学校等の割合は 76%（38 校／50 校）であった。

アンケート調査の結果、本学部への進学を生徒に「積極的に勧めたい」という回答は 25.0%あり、「候補として検討を勧めたい」等も含めると、95.2%が進路として本学部への進学を勧めることに前向きであった。【表２】

表 2　進路指導教員の意向

水準	度数	割合
1.積極的に勧めたい	21	25.0%
2.候補として検討を勧めたい	50	59.5%
3.どちらかといえば勧めたい	9	10.7%
4.勧めない	4	4.8%
合計	84	100.0%

② 定員充足の見込み

上記①のとおり、高等学校等側からは有望な進学先として評価されていると言える。仮に、「入学したい」と回答した生徒の 10%、「進学先の一つとして考えたい／興味がある」と回答した生徒の 3%が実際に本学部に出願すると仮定した場合、これらの生徒だけで 432×10%＋4985×3%＝43.2+149.55＝192.75 人の出願が見込まれる。本学の平成 28 年度入学者選抜試験において、調査対象高等学校等からの志願者数は全体の 54.4%を占めた。この比率で割り戻せば、調査対象以外の高等学校等も含む全体では 192.75÷0.544≒354.3 人の出願が予測される。この場合、入学定員 105 人に対し、354.3÷105≒3.37 倍の志願倍率が見込まれる。

また、国立社会保障・人口問題研究所『日本の地域別将来推計人口（平成 25 年 3 月推計）』【表３】によると、九州・沖縄各県の 15~19 歳人口の合計は、平成 27 年の 704,578 人から、平成 37 年には 638,175 人へと減少（9.4%減）すると予測されている。同程度の志願者数の減少があった場合でも志願倍率は 3.05 倍程度になると考えられる。

以上から、「入学したい」と回答した者の 10%しか実際に出願しない等の厳しい仮定を置き、長期的な人口減少を考慮したとしても、本学部の選抜試験を行ううえで十分に定員を充足できると考えられる。

表 3　15～19 歳人口の推計（九州・沖縄各県抜粋）

	2015（H27）年	2020（H32）年	2025（H37）年
福岡県	244,823	230,352	226,260
佐賀県	42,372	39,416	36,427
長崎県	65,985	59,434	54,660
熊本県	85,644	80,705	77,773
大分県	53,473	50,015	47,956
宮崎県	53,125	49,396	47,524
鹿児島県	77,730	73,709	70,243
沖縄県	81,426	78,803	77,332
合計	704,578	661,830	638,175
2015（H27）年との増減率		93.9%	90.6%

③ 学生納付金の設定の考え方

学生納付金の額は、「国立大学等の授業料その他の費用に関する省令」に則り、本学が定める「国立大学法人九州大学における授業料その他の費用に関する規程」に基づき設定する。

（２）学生の確保に向けた具体的な取組状況

本学部では、高校生やその保護者、進路指導担当教員を含む高等学校等教員などに対して、本学部の趣旨や特色、育成する人材像等の理解を促すため、上記アンケート調査の分析結果をうまく活用しながら、積極的かつ効果的に広報活動を行っていく。

具体的には、本学部ウェブサイトでの情報公開をはじめ、新聞や受験関連サイト等での広告、時宜に応じたパンフレットの作成・配布、本学が主催または参加する進学説明会やオープンキャンパス等における説明・模擬授業の実施等を予定している。

また、アンケート調査の分析結果から見える対象者毎の特長、例えば、生徒への調査からは、「英語教育」（43.7%）や「海外留学」（36.1%）に関心が集中する傾向が見られたので、それらについて詳細に説明するとともに、それ以外の特色についても理解を促し、本学部の特色を偏りなく把握できるよう留意する。進路指導担当教員への調査からは、「学問分野混合・融合教育」（56.3%）や「他者と協力して課題解決に取り組む学修等」（43.7%）等への期待が見られたが、生徒の関心が高い「英語教育」（29.9%）や「海外留学」（20.7%）への関心が低い傾向にあるため、丁寧に説明を行っていくとともに、それ以外の特色についても理解を促し、適切な進路指導の一助となるように留意する。【資料２】

さらに、後述する企業等への調査において、多くの企業等が本学部の趣旨に賛同し、卒業生の採用に強い興味を持っていること等についてもアピールしていく。

２．人材需要の動向等社会の要請

（１）人材の養成に関する目的その他の教育研究上の目的（概要）

本学部は、現代社会が直面している、個別の学問だけでは解決することが困難な問題に対して、自ら課題を設定してその解決に至るアプローチを「構想」し、異なる専門や知識をもつ多様な人々と「協働」し、これら構想と協働の学びや海外留学を通じて得られる「経験」をもとに、グローバル社会において新たな知や価値を生み出す「共創」の専門性を身につけた人材、すなわち、「課題に応じ自ら必要なことを学ぶ」態度や志向性を基盤に、多様な学知を組み合わせて課題解決のための知を創造し、それを社会に活用していく「共創的課題解決力」を身につけた人材を育成する。

（２）上記（１）が社会的、地域的な人材需要の動向等を踏まえたものであることの客観的な根拠

本学の平成 27 年度（2016 年春）卒業生の就職実績上位 100 企業・自治体等と、九州経済連合会の会員企業（単純な重複や、本社と九州支社と言った重複もあり得る）の採用担当者を対象にアンケート調査【資料１】を実施し（調査期間：H29.1~H29.2）、回答率は 36.2%（372／1024 企業・自治体等、ただし重複のため 368 企業・自治体等と社名未記入 1）であった。

アンケート調査の結果、31.2%の企業等が本学部の卒業生を「積極的に採用したい」と回答した。「採用したい」（21.4%）「採用を検討する」（41.4%）を合わせると、94%の企業等が、本学部が輩出する人材の採用に興味を抱いている。【表４】

なお、「採用は考えない」と回答した企業等（6%）の理由の大半は、企業側の事情（現在新卒採用を考えていない、業種・職種の特殊性のため等）によるものであった。

表 4　企業・自治体等の採用意向

水準	度数	割合
1.積極的に採用したい	114	31.2%
2.採用したい	78	21.4%
3.採用を検討する	151	41.4%
4.採用は考えない	22	6.0%
合計	365	100.0%

また、表５にみられるとおり、本学部が育成する人材は幅広い業種の企業等から求められていることがわかる。

表 5 業種別の採用／非採用割合

業種	採用したい等	採用は考えない	該当企業数
農業、林業	100.0	0.0	8
建設業	90.7	9.3	54
製造業	93.6	6.4	78
電気・ガス・熱供給・水道業	91.7	8.3	12
情報通信業	100.0	0.0	19
運輸業、郵便業	94.1	5.9	17
卸売業、小売業	100.0	0.0	45
金融業、保険業	100.0	0.0	29
不動産業、物品賃貸業	94.1	5.9	17
学術研究、専門、技術サービス業	87.5	12.5	8
宿泊業、飲食サービス業	100.0	0.0	6
教育、学修支援業	100.0	0.0	1
医療、福祉	75.0	25.0	8
複合サービス業	100.0	0.0	4
サービス業	91.7	8.3	12
公務	100.0	0.0	7
その他	84.4	15.6	32
合計	93.8%	6.2	357

企業等が本学部のどの点に興味を示しているかについては、「異なる視点や知見の融合を図り、他者と協働して新たな物事を創造（共創）できる人材の育成」（72.0%）、「文化や価値観の違いなど問題の背景を理解し、解決手段を導き出せる人材の育成」（52.0%）、「社会的課題を発見し、他者と協力して課題解決に取り組む学修」（69.0%）が特に高く期待されていることが分かった。【資料２】

次に、本学部卒業生の就職について、平成 27 年度卒業生の実績を踏まえて推考する。

アンケートの回答があった企業等のうち、平成 27 年度卒業生の採用実績のある企業等が 77 あり、そのうち「積極的に採用したい」を選択した企業等が 22、「採用したい」を選択した企業等が 20、「採用を検討する」を選択した企業等が 31 であった。これらのうち、採用意向が強い順に 3 割、2 割、1 割の企業等が本学部卒業生を採用するとの厳しい仮定を置くと、22×0.3＋20×0.2＋31×0.1＝13.7 企業等が本学部卒業生を採用することとなる。これを、平成 27 年度卒業生の採用実績のある企業等数（560）のアンケートにおける捕捉率（77÷560≒13.8%）で割り戻すと、13.7÷13.8≒99.3 企業等となる。本学部卒業後の進路としては、大学院への進学と企業等への就職が考えられるが、平成 27 年度卒業生の実績（進学者 51.3%、就職者 40.6%）【表６】を踏まえ、本学部卒業生の半数が大学院へ進学し、半数が就職を希望すると仮定した場合、約 1.89 倍の求人倍率（99.3 企業等÷就職希望者 52.5 人）が見込まれる。

このように厳しい仮定を置いた場合でも、本学部卒業生の就職先は十分確保できると考えられる。

表 6 平成 27 年度学部卒業生の進路状況

（平成28年5月1日現在）

卒業者数	大学院（修士・博士前期課程）進学者数	就職者数	その他
2,666	1,368 （51.3%）	1,082 （40.6%）	216 （8.1%）

※（ ）内は卒業者に占める割合
※「その他」は司法試験等国家試験準備、専門学校生、研究生等を含む。

自由記述では幅広い様々な業種・地域・規模の企業等から、本学部の趣旨について共感や期待が寄せられた。以下はいずれも、全体的な傾向を踏まえて典型的と考えられる記述の一部である。

「当社は新しい金融ビジネスに挑戦していますが将来の担い手となるべくポテンシャルを有する広い視野と自主性を持った前向きな学生を採用したいと思っていますので共創学部に大いに期待いたします。」（「積極的に採用したい」証券会社）

「まさに高等教育を受けた、文系・理系両方の考え方や方法論を身に付け、課題解決のできるグローバルな人材は待望の社会人・企業人となると思います。」（「積極的に採用したい」建設業）

「多様な価値観を持ち合せ積極的に社会の問題・課題に取り組む又は、発信する。チャレンジ精神にあふれる人材を期待し私達も積極的に採用させて頂きたいと存じます。」（「積極的に採用したい」小売業）

「グローバル化した社会に於いては、多様な知識を有した自立した人間の育成が必要。共創学部では、諸外国との交流も含め自分の意見をしっかり発信できる人材を育成していただきたい。同時に問題発掘型の人材、責任感の強い人材の育成を望んでいます。期待しています。」（「採用したい」（テレビ局））

「共創学部の構想に強く共感いたします。複雑化する社会課題を解決するために新しいフレキシブルな発想法が求められるこれからの時代に合致した構想だと思います。社会解決課題に留まらずソーシャルグッドを「創造」する人材育成に期待します。カリキュラム内に、行政や企業という実際に社会課題に向き合ってるプレイヤーとの交流・協働を含ませるのはいかがでしょう。弊社も（中略）微力ながらできるだけのご協力をさせて頂きたいと思います。」（「採用したい」広告業）

「幅広い学問分野を学び、分野を横断した発想で主体的に課題を設定し、他者とコミュニケーションを取りながら、解決に取り組む人材を育成されようとする貴学のチャレンジに期待しています。」（「採用したい」製造業）

以上のことから、本学部が育成する人材は、幅広い業種の、多くの企業等が求めている人材であり、社会的・地域的な人材需要の動向に十分即したものであると言える。また、卒業生の就職先も十分に確保できると考えられる。

資料１

九州大学共創学部に関するアンケート

（対象：２０１６年度現在、高校２年生の皆様）

九州大学では、自ら課題を発見し、他者と協働して課題解決やイノベーションの創出に取り組むことのできるグローバル人材を育成するため、2018 年４月に「共創学部」の設置を構想しています。本アンケート調査を通して、2018 年に大学進学時期を迎える現・高校２年生の皆様のご意見を伺い、設置構想の参考とさせていただきたいと考えています。以下のアンケートにご協力をお願いいたします。 ※構想内容の詳細は別紙リーフレットをご参照ください。

問１　性別（あてはまるもの１つに○）

１．男　　２．女

問２　所属クラス（コース）（あてはまるもの１つに○）

１．文系　２．理系　３．その他（　　）

問３　進路希望（あてはまるもの１つに○）

１．大学進学　２．短期大学進学　３．専門学校等進学　４．就職

５．その他（　　）

----------以下は問３「進路希望」で１～３を選択した方のみ記入ください----------

問４　進学を希望する地域（あてはまるもの１つに○）

１．福岡　２．九州・沖縄（福岡を除く）　３．国内（１，２以外）　４．海外

５．どこでも良い

問５　大学・学部を選ぶ基準として特に重視している点（あてはまるもの３つまで○）

１．自分の興味や可能性が広げられる　２．勉強したい学問分野がある

３．文理融合のカリキュラム　４．興味・関心をもった分野を自分で自由に選択できる

５．教員の魅力　６．卒業後の進路状況　７．海外留学制度の充実度　８．伝統・実績

９．入試科目　１０．立地・環境　１１．授業料

１２．学生サポート体制（学修・就職・経済的支援等）

１３．その他（　　）

問６　以下の共創学部の特色のうち、特に期待するもの（あてはまるもの３つまで○）

１．人文社会科学、自然科学及び生命科学の全ての学問分野の混合・融合教育

２．社会的課題を発見し、他者と協力して課題解決に取り組む学修

３．グループワークや少人数による学生の主体的学修を重視した教育

４．語学力やコミュニケーション能力が身につく英語教育

５．海外留学を組み込んだ教育

６．外国人留学生と共に学べる教育環境

７．文化や価値観の違いなど問題の背景を理解し、解決手段を導き出せる人材の育成

８．異なる観点や知見の融合を図り、他者と協働して新たな物事を創造（共創）できる人材の育成

裏面へ続く

問７　共創学部が設置された場合、入学したいと思いますか。（あてはまるもの１つに○）

１．入学したい　２．進学先の１つとして考えたい／興味がある　３．入学したいとは思わない

ご協力ありがとうございました

九州大学共創学部に関するアンケート

（対象：高校２年生の進路指導を担当されている先生）

九州大学では、自ら課題を発見し、他者と協働して課題解決やイノベーションの創出に取り組むことのできるグローバル人材を育成するため、2018 年４月に「共創学部」の設置を構想しています。本アンケート調査を通して、2018 年に大学進学時期を迎える現・高校２年生の進路指導を担当されている先生のご意見を賜り、設置構想の参考とさせていただきたいと考えております。以下のアンケートへのご協力をお願い申し上げます。 ※構想内容の詳細は別紙リーフレットをご参照ください。

問１ 共創学部の特色として特に期待するものをお選びください。（あてはまるもの３つまで○）

１．人文社会科学、自然科学及び生命科学の全ての学問分野の混合・融合教育
２．社会的課題を発見し、他者と協力して課題解決に取り組む学修
３．グループワークや少人数による学生の主体的学修を重視した教育
４．語学力やコミュニケーション能力が身につく英語教育
５．海外留学を組み込んだ教育
６．外国人留学生と共に学べる教育環境
７．文化や価値観の違いなど問題の背景を理解し、解決手段を導き出せる人材の育成
８．異なる観点や知見の融合を図り、他者と協働して新たな物事を創造（共創）できる人材の育成

問２ 共創学部が設置された場合、生徒に進学を勧めたいと思いますか。（あてはまるもの１つに○）

１．積極的に勧めたい　２．候補として検討を勧めたい　３．どちらかといえば勧めたい
４．勧めない（理由：　　）

問３ 共創学部について、ご要望、期待等がございましたら記入ください。（自由記述）

ご協力ありがとうございました

九州大学共創学部に関するアンケート

（対象：採用ご担当者様）

九州大学では、自ら課題を発見し、他者と協働して課題解決やイノベーションの創出に取り組むことのできるグローバル人材を育成するため、2018年4月に「共創学部」の設置を構想しています。本アンケート調査を通して、将来卒業生の採用をご検討いただく皆様のご意見を賜り、設置構想の参考とさせていただきたいと考えております。以下のアンケートへのご協力をお願い申し上げます。　※構想内容の詳細は別紙リーフレットをご参照ください。

問1　貴社（機関）名　＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

問2　本社（機関）所在地　＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

問3　貴社（機関）の主たる業種をお選びください。（あてはまるもの1つに○）

1．農業、林業　2．漁業　3．鉱業、採石業、砂利採取業　4．建設業　5．製造業
6．電気・ガス・熱供給・水道業　7．情報通信業　8．運輸業、郵便業　9．卸売業、小売業
10．金融業、保険業　11．不動産業、物品賃貸業　12．学術研究、専門、技術サービス業
13．宿泊業、飲食サービス業　14．生活関連サービス業、娯楽業　15．教育、学修支援業
16．医療、福祉　17．複合サービス事業　18．サービス業　19．公務
20．その他（　　）

問4　共創学部の特色として特に期待するものをお選びください。（あてはまるもの3つまで○）

1．人文社会科学、自然科学及び生命科学の全ての学問分野の混合・融合教育
2．社会的課題を発見し、他者と協力して課題解決に取り組む学修
3．グループワークや少人数による学生の主体的学修を重視した教育
4．語学力やコミュニケーション能力が身につく英語教育
5．海外留学を組み込んだ教育
6．外国人留学生と共に学べる教育環境
7．文化や価値観の違いなど問題の背景を理解し、解決手段を導き出せる人材の育成
8．異なる観点や知見の融合を図り、他者と協働して新たな物事を創造（共創）できる人材の育成

問5　共創学部が設置された場合、本学部卒業生の採用についてどのようにお考えですか。
（あてはまるもの1つに○）

1．積極的に採用したい　2．採用したい　3．採用を検討する
4．採用は考えない（理由：　　）

問6　共創学部について、ご要望、期待等がございましたら記入ください。（自由記述）

ご協力ありがとうございました

入学者選抜

入学定員	選抜方法			センター試験の利用	選抜予定時期
105人	一般入試（前期）　65人			○	前期日程：2月下旬
	特別入試（推薦）　10人			○	1次：1月下旬 2次：2月初旬
	特別入試（ＡＯ）　20人			―	1次：10月初旬～中旬 2次：11月初旬
	国際型入試　10人	特別入試（帰国子女）	若干名	―	2月下旬
		特別入試 （私費外国人4月入学）	若干名	―	2月下旬
		特別入試 （私費外国人10月入学）	若干名	―	1次：2月中旬 2次：3月初旬

※入学者選抜の詳細については、平成29年3月以降に公表予定。

【お問い合わせ】

九州大学学務部学務企画課
電話:092-802-5814　FAX:092-802-5990
Mail:gakikaku@jimu.kyushu-u.ac.jp

2018年4月、「共創学部」を設置

現在（いま）を、未来を、共に創る

九州大学は、記者会見を開き、2018年4月に12番目の学部として国際社会で活躍するグローバル人材を育成する学生定員105名の共創学部を設置する予定であると発表しました。記者会見で久保千春総長は、「新学部は、本学が実施している21世紀プログラムの成果と基幹教育の教養教育の重要性を踏まえています。ぜひ自らイノベーションを起こす意欲ある学生の応募を期待しています」と、また丸野俊一理事・副学長は、「異なる社会的背景を持つ他者と共に、新しい社会や価値を創る人材を育てます」と話しました。

1967年6月の歯学部設置以来、約50年ぶりに新たな学部を設置し、複雑・多様化するグローバル社会において、多様な人々との協働から異なる観点や学問的な知見の融合を図り、共に構想し、連携して新たな物事を創造する「共創」により新たなイノベーションの創出を担う人材の育成に取り組みます。

記者会見の様子

（新学部の設置については構想中であり、内容は今後変更する場合があります。）

共創学部

2018.4 START

School of Interdisciplinary Science and Innovation

九州大学は2018年4月に、入学定員105人の「共創学部」の設置を構想しています。
この学部を卒業すると、「学士（学術）」の学位が授与される予定です。

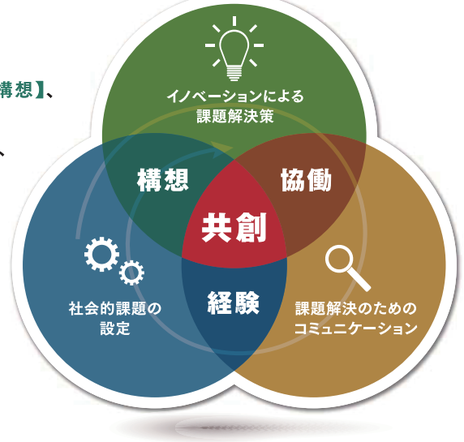
構想概要

九州大学では、2001年度より「21世紀プログラム」において、自分の「やりたいこと・学びたいこと」の実現に向けて自ら学びを創り上げ、問題発見・課題設定とその解決能力に優れた「専門性の高いゼネラリスト」の育成に取り組んできました。また、2014年度には、「ものの見方・考え方・学び方」を学ぶ「基幹教育」を開始し、学び続けることを幹に持つ、未知な問題や状況にも果敢に挑戦するスピリットと行動力を備えた「アクティブ・ラーナー」の育成に取り組んでいます。

21世紀プログラムで培ったノウハウと、基幹教育での「アクティブ・ラーナー」育成の実績を踏まえ、2018年4月に文理融合の「共創学部」を新設し、課題解決型人材の育成に取り組みます。

コンセプト

社会的課題の設定から課題解決策を考え【構想】、課題解決に向け他者と取り組み【協働】、構想から協働までの一連の【経験】を通じて、【共創】を目指します。



育成する人材

急速な社会変化から生じた複雑・多様な課題・問題は、単なる知識の蓄積や技術の改良だけでは立ち向かうことが困難であり、言語や文化、宗教、価値観、経済などの社会的背景を理解したうえで、自らの問題意識に基づき、分野横断的な発想をもって解決手段を見つけることができる人材が求められています。

共創学部では、人文科学、社会科学、自然科学の既存の学問分野を横断しながら文系・理系両方の考え方や方法論を身に付け、国家・地域間の紛争問題や環境・気候変動など、地球規模の課題・問題をテーマとする学修を通じて、「自ら課題を発見し、他者と協働して課題解決やイノベーションの創出に取り組むことのできるグローバル人材」を育成し、将来、研究者や専門家、企業人として、国内外で活躍できる人材を社会に送り出します。

（新学部の設置については構想中であり、内容は今後変更する場合があります。）

幅広い学問分野－4つの領域（エリア）等

様々な課題に対応する4つの領域（エリア）を設け、異なる学問分野を専門とする教員が指導します。
学生が自ら興味・関心をもった領域に関連する授業科目を自由に選択できる柔軟なカリキュラムを編成しています。

01 人間・生命エリア

生命の発生・進化や、人間の思考・認知・判断の仕組みなどを、生物学、認知科学、脳科学等を通して学びます。

02 人と社会エリア

意思疎通における言語の仕組みや、先史社会、多文化共生、社会における生活実践としての福祉、宗教観などを、社会学、文化人類学、コミュニケーション学等を通して学びます。

03 国家と地域エリア

国家や地域の歴史、特徴的な経済・社会現象、政治や経済面での関係性などを、政治学、経済学、史学等を通して学びます。

04 地球・環境エリア

地球がもつ資源や、地球環境の変化による災害、生命が環境に与える影響などを、地球惑星科学、社会・安全システム科学、基礎生物学等を通して学びます。

エリア横断

4つの領域（エリア）による学びの共通の基礎となり、さらには構想を発展させる役割を担う横断的な科目、例えばクリエイティブなアプローチを活用した思考法である「デザイン思考」や、新たな価値を引き出すためのデータ処理・分析などの「データサイエンス」、さらには地球的視野を学ぶ「グローバルヒストリー」等を履修することにより、課題・問題の解決に必要な知識・能力を身につけます。

学びの特色

❶文理を融合したカリキュラム

人文科学、社会科学、自然科学の既存の学問分野を横断しながら、文系マインド・理系マインドや多様な方法論を身につけさせ、実践的な課題に基づいた学修を行います。

❷協働学習（PBL／TBL※型学習）

グループでテーマについて議論しあう協働学習を取り入れ、他者と協働で学ぶことにより広い視野と柔軟な思考力、物事を色々な角度から捉える複眼的な洞察力を涵養します。

※PBL:Problem-Based Learning、TBL:Team-Based Learning

❸習熟レベルに応じた英語教育

習熟レベルに応じた英語教育を初年次から実施し、世界や日本の時事問題を英語で学ぶことにより、現代の課題を意識し、常に最新の情報をグローバルな視野で入手する姿勢を涵養します。

❹海外大学等への留学

大学間交流協定校をはじめ、海外大学等へ一定期間の留学を課し、国際体験を通じた国際理解・知識の拡大と、語学力やコミュニケーション力の向上を図ります。

❺Class Share

日本人学生と留学生が共に学ぶ教育環境（Class Share）を構築し、学生と教職員がアクティブに交流することにより、相乗的・協働効果を生み出すグローバル・ハブ・キャンパスの形成を図ります。

入学者選抜

知識・技能のみならず、思考力・判断力・表現力や、主体性・多様性・協働性を持つ多様な学生を選抜するため、4つのタイプの入学者選抜を実施します。

※入学者選抜の詳細については、平成29年3月以降に公表予定。

- 大学適応力を評価（AO入試）
- 主体的な活動実績などを評価（推薦入試）
- 国際経験国際コミュニケーション（国際型入試）
- 多角的な思考力を問う（一般入試）

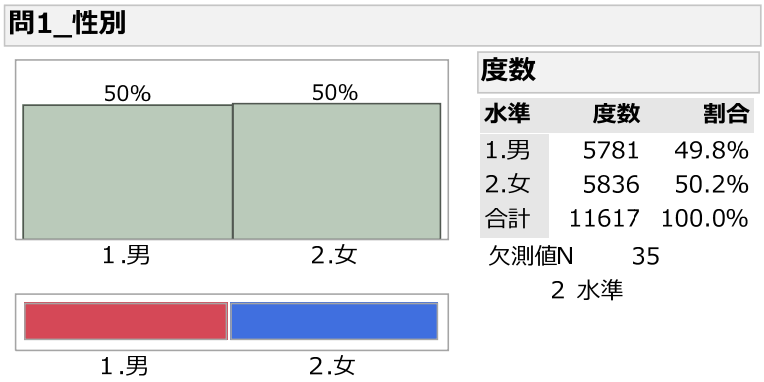
資料２

1.　平成 28（2016）年度現在の高校 2 年生アンケート

【調査概要】

平成 28 年度九州大学入学者選抜試験における志願者数上位 50 校（福岡県：21 校、九州（福岡県を除く）：19 校、九州外：10 校）に在籍する 2 年生を対象にアンケート調査を実施した。質問紙のみなし回収率は 76.2%（11,652 枚／15,300 枚、ただし送付時の都合で 1 枚＝生徒 1 人に必ずしも対応していないので、便宜的な割合である）で、回答があった高等学校等の割合は 82%（41 校／50 校）であった。

問１　性別



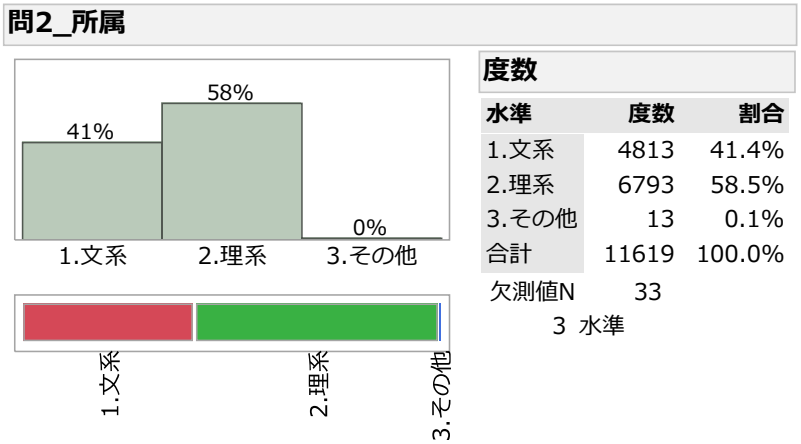
度数

水準	度数	割合
1.男	5781	49.8%
2.女	5836	50.2%
合計	11617	100.0%

欠測値N　35

2 水準

問２　所属クラス（コース）



度数

水準	度数	割合
1.文系	4813	41.4%
2.理系	6793	58.5%
3.その他	13	0.1%
合計	11619	100.0%

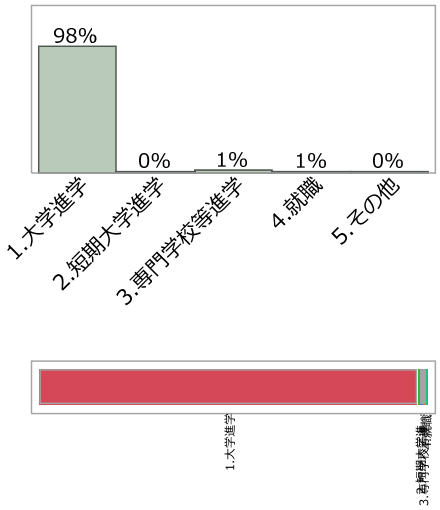
欠測値N　33

3 水準

「3.その他」の回答のうち、具体的な記述が、3 年次文転（1 人）、ＳＧ文系（1 人）、英語科（4 人）、文系ＳＧＨ（1 人）は「1.文系」に、また理化（1 人）、理系ＳＧコース（1 人）、理数コース（26 人）、理数科（9 人）は「2.理系」に含まれるようデータを修正した。

問３　進路希望

問3_進路希望



度数

水準	度数	割合
1.大学進学	11366	98.0%
2.短期大学進学	38	0.3%
3.専門学校等進学	102	0.9%
4.就職	60	0.5%
5.その他	29	0.3%
合計	11595	100.0%

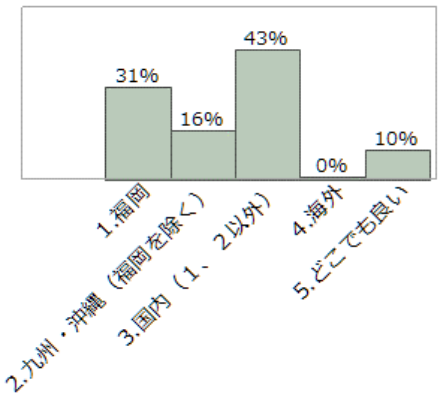
欠測値N　57

5 水準

問４以降は、問３「進路希望」で「1．大学進学」「2．短期大学進学」「3．専門学校等進学」を選択した者（11,506 人）のみが回答した。

問４　進学を希望する地域

問4_進学を希望する地域

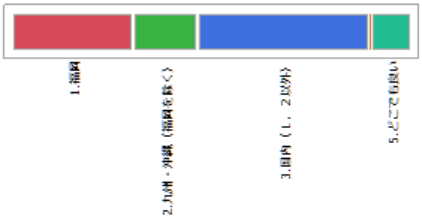


度数

水準	度数	割合
1.福岡	3508	30.6%
2.九州・沖縄（福岡を除く）	1827	16.0%
3.国内（1、2以外）	4948	43.2%
4.海外	54	0.5%
5.どこでも良い	1116	9.7%
合計	11453	100.0%

欠測値N　53

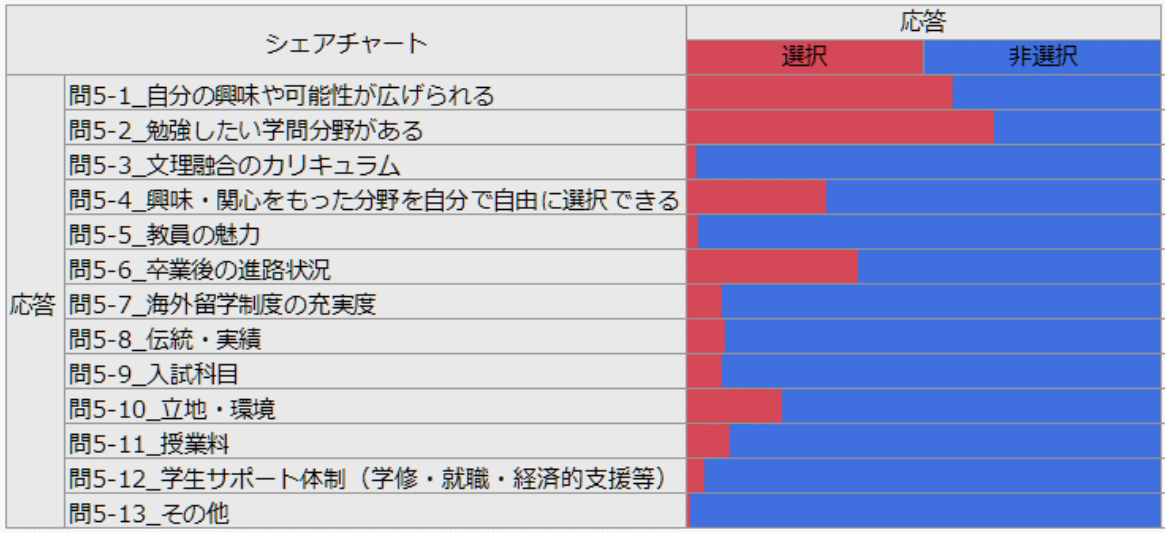
5 水準



問５　大学・学部を選ぶ基準として特に重視している点（3 つまで選択可）

4 つ以上の選択肢を選択した者 68 人を除外した。

高校生の進路選択基準



度数		応答		
シェア		選択	非選択	応答の合計数
応答	問5-1_自分の興味や可能性が広げられる	6429	5009	11438
		56.2%	43.8%	
	問5-2_勉強したい学問分野がある	7404	4034	11438
		64.7%	35.3%	
	問5-3_文理融合のカリキュラム	234	11204	11438
		2.0%	98.0%	
	問5-4_興味・関心をもった分野を自分で自由に選択できる	3382	8056	11438
		29.6%	70.4%	
	問5-5_教員の魅力	283	11155	11438
		2.5%	97.5%	
	問5-6_卒業後の進路状況	4121	7317	11438
		36.0%	64.0%	
	問5-7_海外留学制度の充実度	856	10582	11438
		7.5%	92.5%	
	問5-8_伝統・実績	921	10517	11438
		8.1%	91.9%	
	問5-9_入試科目	859	10579	11438
		7.5%	92.5%	
	問5-10_立地・環境	2305	9133	11438
		20.2%	79.8%	
	問5-11_授業料	1045	10393	11438
		9.1%	90.9%	
	問5-12_学生サポート体制（学修・就職・経済的支援等）	450	10988	11438
		3.9%	96.1%	
	問5-13_その他	104	11334	11438
		0.9%	99.1%	

問６　特に期待する共創学部の特色（3 つまで選択可）

4 つ以上の選択肢を選択した者 20 人を除外した。

高校生が期待する共創学部の特色

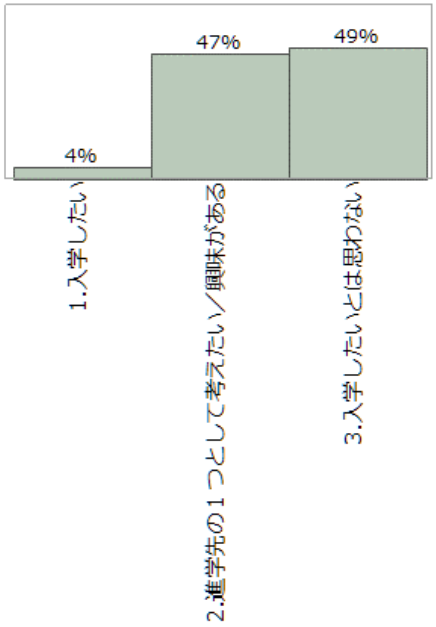
シェアチャート		応答
		選択 / 非選択
応答	問6-1_人文社会科学、自然科学及び生命科学の全ての学問分野の混合・融合教育	
	問6-2_社会的課題を発見し、他者と協力して課題解決に取り組む学修	
	問6-3_グループワークや少人数による学生の主体的学修を重視した教育	
	問6-4_語学力やコミュニケーション能力が身につく英語教育	
	問6-5_海外留学を組み込んだ教育	
	問6-6_外国人留学生と共に学べる教育環境	
	問6-7_文化や価値観の違いなど問題の背景を理解し、解決手段を導き出せる人材の育成	
	問6-8_異なる観点や知見の融合を図り、他者と協働して新たな物事を創造（共創）できる人材の育成	

	度数	応答		
	シェア	選択	非選択	応答の合計数
応答	問6-1_人文社会科学、自然科学及び生命科学の全ての学問分野の混合・融合教育	3595	7891	11486
		31.3%	68.7%	
	問6-2_社会的課題を発見し、他者と協力して課題解決に取り組む学修	2602	8884	11486
		22.7%	77.3%	
	問6-3_グループワークや少人数による学生の主体的学修を重視した教育	2321	9165	11486
		20.2%	79.8%	
	問6-4_語学力やコミュニケーション能力が身につく英語教育	5024	6462	11486
		43.7%	56.3%	
	問6-5_海外留学を組み込んだ教育	4151	7335	11486
		36.1%	63.9%	
	問6-6_外国人留学生と共に学べる教育環境	2714	8772	11486
		23.6%	76.4%	
	問6-7_文化や価値観の違いなど問題の背景を理解し、解決手段を導き出せる人材の育成	2528	8958	11486
		22.0%	78.0%	
	問6-8_異なる観点や知見の融合を図り、他者と協働して新たな物事を創造（共創）できる人材の育成	2834	8652	11486
		24.7%	75.3%	

問７　入学意向

「入学したい」と回答したのは 432 人（4.1%）であった。また、「進学先の一つとして考えたい／興味がある」の 4,985 人（46.8%）も合わせると、半数以上の 5,417 人（50. 8%）が共創学部への入学に関心を示した。

問7_共創学部が設置された場合、入学したいと思いますか

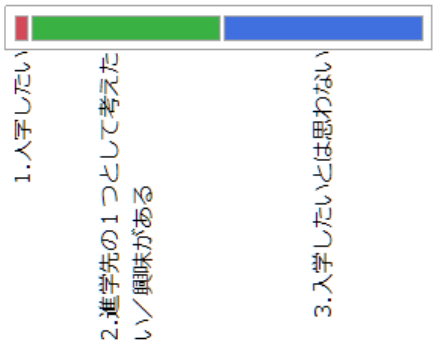


度数

水準	度数	割合
1.入学したい	432	4.1%
2.進学先の１つとして考えたい／興味がある	4985	46.8%
3.入学したいとは思わない	5240	49.2%
合計	10657	100.0%

欠測値N　849

3 水準



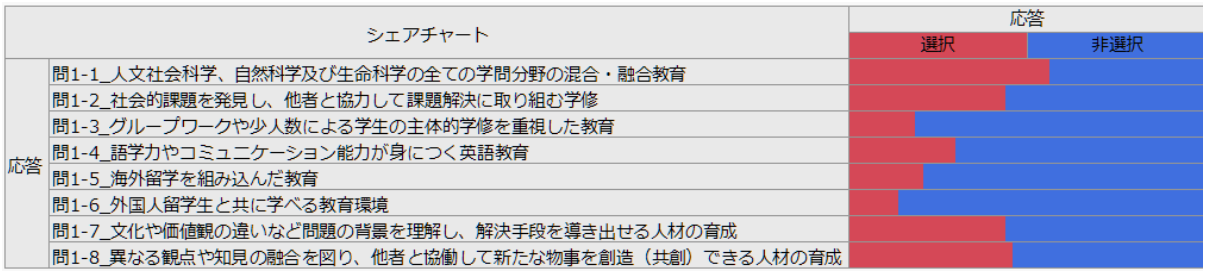
2. 進路指導担当教員（高校２年生を担当）アンケート

【調査概要】

平成 28 年度九州大学入学者選抜試験における志願者数上位 50 校（福岡県：21 校、九州（福岡県を除く）：19 校、九州外：10 校）の進路指導担当教員を対象にアンケート調査を実施した。回収率は 58%（87 枚／150 枚、依頼時の都合上各校 3 枚を配布）、回答があった高等学校等の割合は 76%（38 校／50 校）であった。

問１　特に期待する共創学部の特色（3 つまで選択可）

進路指導担当教員が期待する共創学部の特色

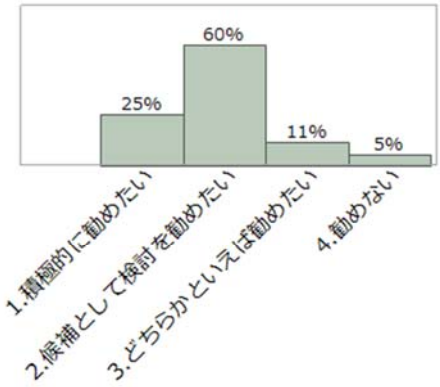


		度数	応答	
		シェア	選択	非選択	応答の合計数
応答	問1-1_人文社会科学、自然科学及び生命科学の全ての学問分野の混合・融合教育		49	38	87
			56.3%	43.7%	
	問1-2_社会的課題を発見し、他者と協力して課題解決に取り組む学修		38	49	87
			43.7%	56.3%	
	問1-3_グループワークや少人数による学生の主体的学修を重視した教育		16	71	87
			18.4%	81.6%	
	問1-4_語学力やコミュニケーション能力が身につく英語教育		26	61	87
			29.9%	70.1%	
	問1-5_海外留学を組み込んだ教育		18	69	87
			20.7%	79.3%	
	問1-6_外国人留学生と共に学べる教育環境		12	75	87
			13.8%	86.2%	
	問1-7_文化や価値観の違いなど問題の背景を理解し、解決手段を導き出せる人材の育成		38	49	87
			43.7%	56.3%	
	問1-8_異なる観点や知見の融合を図り、他者と協働して新たな物事を創造（共創）できる人材の育成		40	47	87
			46.0%	54.0%	

問２　生徒に進学を勧めたいと思うか

進路指導担当教員の 25.0%が共創学部への進学を「積極的に勧めたい」と回答した。また、「候補として検討を勧めたい」（59.5%）と、「どちらかといえば勧めたい」（10.7%）も含めると、95.2%が進路として本学部への進学を勧めることに前向きであった。

問２_共創学部進学を生徒に勧めたいか

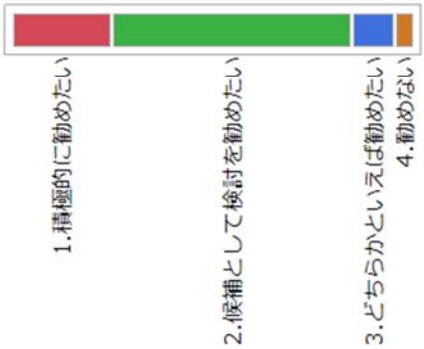


度数

水準	度数	割合
1.積極的に勧めたい	21	25.0%
2.候補として検討を勧めたい	50	59.5%
3.どちらかといえば勧めたい	9	10.7%
4.勧めない	4	4.8%
合計	84	100.0%

欠測値N　3

４水準



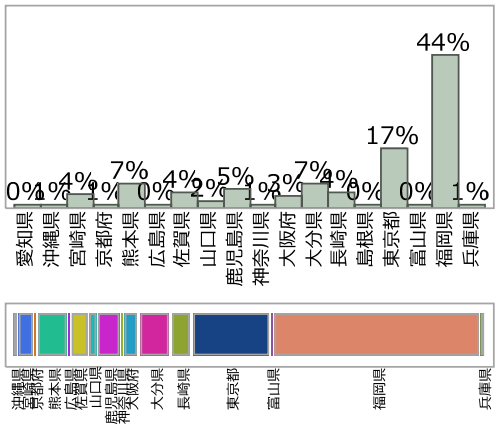
3. 企業採用担当者アンケート

【調査概要】

平成 27 年度（2016 年春）卒業生の就職実績上位 100 企業・自治体等と、九州経済連合会の会員企業（単純な重複や、本社と九州支社と言った重複もあり得る）の採用担当者を対象にアンケート調査を実施した。回答率は 36.2%（372／1024 企業・自治体等、ただし重複のため 368 企業・自治体等と社名未記入 1）であった。

問２　本社（機関）所在地

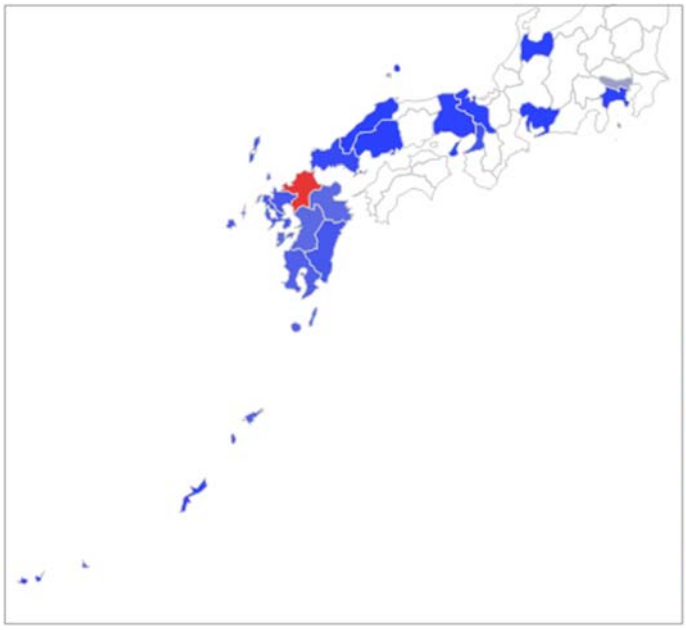
問２_本社（機関）所在地



度数

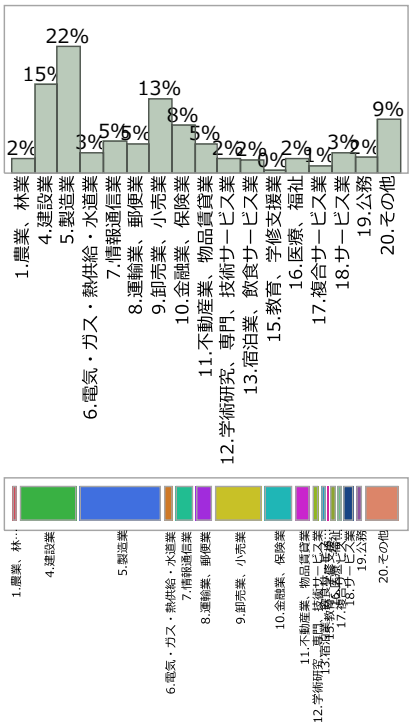
水準	度数	割合
愛知県	1	0.3%
沖縄県	2	0.5%
宮崎県	14	3.8%
京都府	2	0.5%
熊本県	25	6.8%
広島県	1	0.3%
佐賀県	15	4.1%
山口県	6	1.6%
鹿児島県	19	5.1%
神奈川県	2	0.5%
大阪府	12	3.2%
大分県	25	6.8%
長崎県	16	4.3%
島根県	1	0.3%
東京都	62	16.8%
富山県	1	0.3%
福岡県	164	44.3%
兵庫県	2	0.5%
合計	370	100.0%
欠測値N	2	

18 水準



問３　主たる業種

問3_主たる業種



度数

水準	度数	割合
1.農業、林業	8	2.2%
4.建設業	55	15.1%
5.製造業	79	21.7%
6.電気・ガス・熱供給・水道業	12	3.3%
7.情報通信業	19	5.2%
8.運輸業、郵便業	17	4.7%
9.卸売業、小売業	46	12.6%
10.金融業、保険業	29	8.0%
11.不動産業、物品賃貸業	17	4.7%
12.学術研究、専門、技術サービス業	8	2.2%
13.宿泊業、飲食サービス業	7	1.9%
15.教育、学修支援業	1	0.3%
16.医療、福祉	8	2.2%
17.複合サービス業	4	1.1%
18.サービス業	12	3.3%
19.公務	9	2.5%
20.その他	33	9.1%
合計	364	100.0%

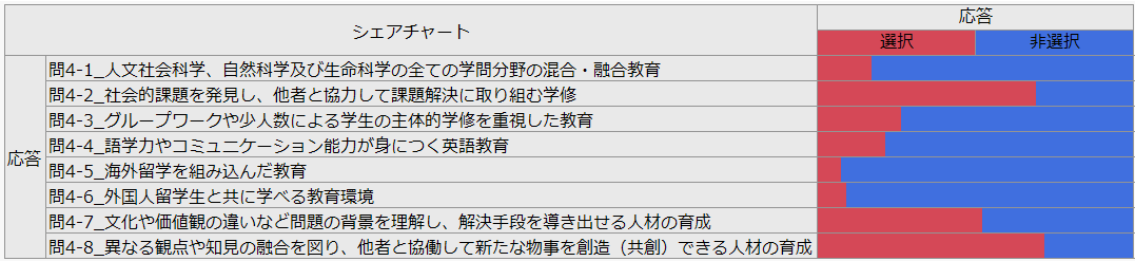
欠測値N　　8

17 水準

問４　特に期待する共創学部の特色（3 つまで選択可）

4 つ以上の選択肢を選択した 1 企業を除外した。

企業等が期待する共創学部の特色



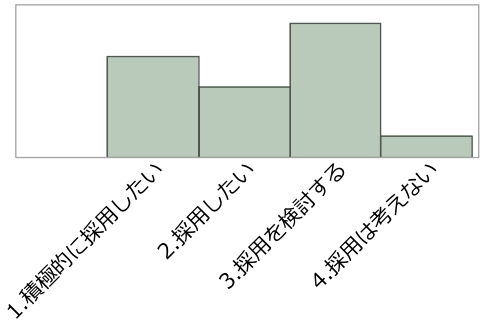
		度数	応答		
		シェア	選択	非選択	応答の合計数
応答	問4-1_人文社会科学、自然科学及び生命科学の全ての学問分野の混合・融合教育		64	307	371
			17.3%	82.7%	
	問4-2_社会的課題を発見し、他者と協力して課題解決に取り組む学修		256	115	371
			69.0%	31.0%	
	問4-3_グループワークや少人数による学生の主体的学修を重視した教育		98	273	371
			26.4%	73.6%	
	問4-4_語学力やコミュニケーション能力が身につく英語教育		80	291	371
			21.6%	78.4%	
	問4-5_海外留学を組み込んだ教育		28	343	371
			7.5%	92.5%	
	問4-6_外国人留学生と共に学べる教育環境		34	337	371
			9.2%	90.8%	
	問4-7_文化や価値観の違いなど問題の背景を理解し、解決手段を導き出せる人材の育成		193	178	371
			52.0%	48.0%	
	問4-8_異なる観点や知見の融合を図り、他者と協働して新たな物事を創造（共創）できる人材の育成		267	104	371
			72.0%	28.0%	

問５　卒業生の採用意向

31.2%の企業等が共創学部の卒業生を「積極的に採用したい」と回答した。「採用したい」（21.4%）「採用を検討する」（41.4%）を合わせると、94%の企業等が、本学部が輩出する人材の採用に興味を抱いている。

「採用は考えない」と回答した企業等（6%）の理由の大半は、企業側の事情（現在新卒採用を考えていない、業種・職種の特殊性のため等）によるものであった。

問５_本学部卒業生の採用についてどのようにお考えですか

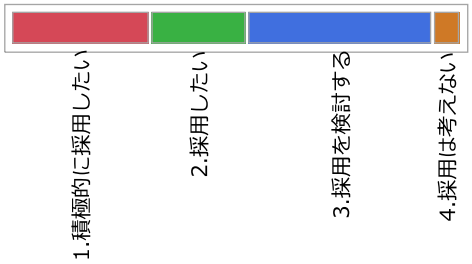


度数

水準	度数	割合
1.積極的に採用したい	114	31.2%
2.採用したい	78	21.4%
3.採用を検討する	151	41.4%
4.採用は考えない	22	6.0%
合計	365	100.0%

欠測値N　7

4 水準



自由記述欄（典型的な記述）

○「積極的に採用したい」グループの典型的な記述

「問 4 の内容を自ら積極的に活用して会社に貢献しようという気持ちを持つ、前向き、主体的に活動しようとする学生の育成に期待します。」

「(中略) まさに高等教育を受けた、文系・理系両方の考え方や方法論を身に付け、課題解決のできるグローバルな人材は待望の社会人・企業人となると思います。どのようなプログラムが組まれるのか分かりませんが、よりバランスの取れた有能な人材の育成を多いに期待致します。」

「多様な価値観を持ち合せ積極的に社会の問題・課題に取り組む又は、発信する。チャレンジ精神にあふれる人材を期待し私達も積極的に採用させて頂きたいと存じます。」

「共創学部の新設により、さらに高度なレベルの人材育成が実現することとなり、九州大学が九州と海外の架け橋となる優秀な人材を輩出することを期待しております。」

「劇的に社会が複雑化、多様化する中で、個人も企業も適応能力が求められています。その様なな か、学部間を横断し自ら課題を発見し、他者と協働して課題解決やイノベーションの創出できる人材の育成を目指しておられる『共創学部』に大いに期待しております。当行の採用においても、複眼的視野と柔軟な発想を持った人材を求めている所です。」

「当社は新しい金融ビジネスに挑戦していますが将来の担い手となるべくポテンシャルを有する広い視野と自主性を持った前向きな学生を採用したいと思っていますので共創学部に大いに期待いたします。」

○「採用したい」グループの典型的な記述

「幅広い学問分野を学び、分野を横断した発想で主体的に課題を設定し、他者とコミュニケーションを取りながら、解決に取り組む人材を育成されようとする貴学のチャレンジに期待しています。」

「グローバル化した社会に於いては、多様な知識を有した自立した人間の育成が必要。共創学部では、諸外国との交流も含め自分の意見をしっかり発信できる人材を育成していただきたい。同時に問題発掘型の人材　責任感の強い人材の育成を望んでいます。期待しています。」

「事業のグローバル化や多様化が進む中で、企業は常に変化し続けることを求められています。おそらくほとんどの企業では、自らイノベーションを創出し続けることのできる人材確保したいというニーズがあると思いますので、今後の企業のチャレンジに寄与できる人材を育てていただくことを期待しています。」

「共創学部の構想に強く共感いたします。複雑化する社会課題を解決するために新しいフレキシブルな発想法が求められるこれからの時代に合致した構想だと思います。社会解決課題に留まらずソーシャルグッドを『創造』する人材育成に期待します。カリキュラム内に、行政や企業という実際に社会課題に向き合ってるプレイヤーとの交流・協働を含ませるのはいかがでしょう。弊社も（中略）微力ながらできるだけのご協力をさせて頂きたいと思います」

○「採用を検討する」グループの典型的な記述

「地域(特に中小都市や農山村)と、それを支える中小企業や産業(特に林業農学）と、九州大学をつなぐ存在となって欲しい。その為には教員は学生も積極的に現場で出てくる…そんな学部になってほしい」

「・将来的に組織のリーダーとなることを意識することをカリキュラムに組み入れて欲しい。・専門分野、卒論、ゼミなど従来のカリキュラムを組み入れて欲しい　特に文理融合となると、自分の専門が何かあいまいになることが危惧されるため、卒論やゼミを経験することで、軸となる専門分野をもっていただきたい。」

「患者として、アジアを中心に外国人の方が多く来院するようになっています。本格的な受入には語学スキルはもちろん、文化・価値観の理解など現在いる人材のみでは高いハードルがあります。そういう点で力になって頂ける人材が育つことを期待しております。」

「他文化、価値観の相違、異なる観点や知見の融合等（問 4 部分）に代表される他者との協働・解決・創出は大変素晴らしいと思いますが、その根底にある『自己の同一性の確立』と言った部分の強化、具体的に言えば、日本文化、日本人としての誇り、を強める内容教育も同時に行って頂く事を期待申し上げたい。」

「弊社では（中略）地域に密着した活動を実施しております。今後も地域に根ざした人材を集めたいと思いますのでよろしくお願いします。」

「・起業して間もないが、卒業生が出るころには、受け入れられる企業にしたい。・カリキュラムの中に地域企業や諸団体への経営参加（コンサルタント等の専門家指導）などの実施体験が

あると、想像力を伴った人材育成に繋がるのではと思うがいかがだろうか。」

「福岡の地域性や都市として成長し続けてはいるものの高齢化が増加している特殊性を理解し、弊社のような都市インフラを運営する会社が社会から求められているものや、その解決につながる知見を備えた人材を育成していただきたい。」

「卒業生の人材能力が計りにくい学部であるように感じます。国家資格の取得、留学等をさせる他のユニークなカリキュラムの設定により、採用側へのアピールになるのではと思います。」

○「採用は考えていない」グループの典型的な記述

「現状、純粋な理系(工学系)のみの採用枠しかないため。技術職以外の新卒採用が発生した際は文理両方に強みを持つのが生きると感じます。」

「中規模の外航海運会社として、外国人対応も多くグローバル人材が育ってゆくことは歓迎なのですが海上技術者中心の陣容のため、なかなか採用の機会がございません。」

「新卒者の採用計画は、現在ありません」

「採用は東京本部での判断となります」

別記様式第３号（その１）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

教　　員　　名　　簿

学　　長　　の　　氏　　名　　等						
調書番号	役職名	フリガナ 氏名 ＜就任(予定)年月＞	年齢	保有学位等	月額基本給（千円）	現　職 （就任年月）
－	学長	ｸﾎﾞ　ﾁﾊﾙ 久保　千春 ＜平成２６年１０月＞		医学博士		九州大学学長 （平26.10）

別記様式第３号（その２の１）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

調書番号	専任等区分	職位	フリガナ 氏名 ＜就任(予定)年月＞	開設時の年齢 (H30.4.1)	保有学位等	開設時の月額基本給（千円）	担当授業科目の名称	配当年次	担当単位数	年間開講数	現職 （就任年月）	申請に係る大学等の職務に従事する週当たり平均日数
1	専任	教授	ｵｵﾅｲ　ﾔｽﾋﾄ 小山内　康人 ＜平成30年4月＞		理学博士		地球の理解　※ 地球環境実習　※ 地球物質科学　※ 共創基礎プロジェクト１ 共創基礎プロジェクト２ 共創プロジェクト１ 共創プロジェクト２ ディグリープロジェクト１ ディグリープロジェクト２ ディグリープロジェクト３	2後③・④ 2前②・後③ 3前① 2前① 2前② 3前① 3後③ 3後④ 4通 4後④	1 1 1 2 2 2 2 2 5 2	2 2 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学比較社会文化研究院教授 （H16.4）	5日
2	専任	教授	ｲﾉｳｴ　ﾅﾗﾋｺ 井上　奈良彦 ＜平成30年4月＞		Ph.D.（言語学）		Intensive English: Academic Issues 1 Intensive English: Academic Issues 2 Intensive English: Academic Issues 3 Intensive English: Academic Issues 4 学術英語ゼミ・オーラル・コミュニケーション 言語コミュニケーション論 議論と創造のコミュニケーションＡ 議論と創造のコミュニケーションＢ 共創基礎プロジェクト１ 共創基礎プロジェクト２ 共創プロジェクト１ 共創プロジェクト２ ディグリープロジェクト１ ディグリープロジェクト２ ディグリープロジェクト３	1前① 1前② 1後③ 1後④ 2前①～② 2前①・② 3前① 3前② 2前① 2前② 3前① 3後③ 3後④ 4通 4後④	1 1 1 1 2 1 1 1 2 2 2 2 2 5 2	1 1 1 1 1 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学言語文化研究院教授 （H7.4）	5日
3	専任	教授	ｿｴｼﾞﾏ　ﾕｳｼﾞ 副島　雄児 ＜平成30年4月＞		理学博士		基幹教育セミナー 物理学概論Ｂ 誘導現象の科学 量子現象科学論 レクチャーシリーズ 異文化対応 2 共創基礎プロジェクト１ 共創基礎プロジェクト２ 共創プロジェクト１ 共創プロジェクト２ ディグリープロジェクト１ ディグリープロジェクト２ ディグリープロジェクト３ 海外活動Ａ１ 海外活動Ａ２ 海外活動Ｂ１ 海外活動Ｂ２	1前② 1後③～④ 3前② 2後④ 2・3通 1･2･3･4通 2前① 2前② 3前① 3後③ 3後④ 4通 4後④ 1･2･3･4通 1･2･3･4通 1･2･3･4通 1･2･3･4通	1 1.5 2 2 1 1 2 2 2 2 2 5 2 1 1 2 2	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学基幹教育院教授 （S62.12）	5日
4	専任	教授	ﾄﾞﾗﾓﾝﾄﾞ ﾀﾞｸﾞﾗｽ ﾛﾊﾞｰﾄ Drummond Douglas Robert ＜平成30年4月＞		博士（生物科学）		Molecular & Cell Biology　※ Biochemistry Advanced Molecular Biology 共創基礎プロジェクト１ 共創基礎プロジェクト２ 共創プロジェクト１ 共創プロジェクト２ ディグリープロジェクト１ ディグリープロジェクト２ ディグリープロジェクト３	2前②・後④ 3前② 3後③ 2前① 2前② 3前① 3後③ 3後④ 4通 4後④	1 1 1 2 2 2 2 2 5 2	2 1 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学農学研究院教授 （H28.2）	5日
5	専任	教授	ﾐｷ　ﾖｳｲﾁﾛｳ 三木　洋一郎 ＜平成30年4月＞		理学博士		基幹教育セミナー 共創基礎プロジェクト１ 共創基礎プロジェクト２ 共創プロジェクト１ 共創プロジェクト２ ディグリープロジェクト１ ディグリープロジェクト２ ディグリープロジェクト３	1前② 2前① 2前② 3前① 3後③ 3後④ 4通 4後④	1 2 2 2 2 2 5 2	1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学歯学研究院教授 （H25.1）	5日
6	専任	教授	ｵｵﾉ　ﾏｻｵ 大野　正夫 ＜平成30年4月＞		博士（理学）		地球の理解　※ 地球環境実習　※ 地球の変動　※ 共創基礎プロジェクト１ 共創基礎プロジェクト２ 共創プロジェクト１ 共創プロジェクト２ ディグリープロジェクト１ ディグリープロジェクト２ ディグリープロジェクト３	2後③・④ 2前②・後③ 3後③ 2前① 2前② 3前① 3後③ 3後④ 4通 4後④	1 1 1 2 2 2 2 2 5 2	2 2 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学比較社会文化研究院教授 （H12.1）	5日
7	専任	教授	ｲﾉｳｴ　ｼｹﾞｷ 井上　滋樹 ＜平成30年4月＞		博士（芸術工学）		共創発想法 共創デザイン思考発想法 メディアとコミュニケーション 共創基礎プロジェクト１ 共創基礎プロジェクト２ 共創プロジェクト１ 共創プロジェクト２ ディグリープロジェクト１ ディグリープロジェクト２ ディグリープロジェクト３	2後③ 2前①・② 3前① 2前① 2前② 3前① 3後③ 3後④ 4通 4後④	2 1 1 2 2 2 2 2 5 2	1 2 1 1 1 1 1 1 1 1	㐂博報堂 （S62.4）	5日
8	専任	教授	ｲﾗﾐﾁ　ｹｲｼﾞ 伊良皆　啓治 ＜平成30年4月＞		工学博士		Brain & Information　※ 生命情報科学 共創基礎プロジェクト１ 共創基礎プロジェクト２ 共創プロジェクト１ 共創プロジェクト２ ディグリープロジェクト１ ディグリープロジェクト２ ディグリープロジェクト３	2前①・② 3前② 2前① 2前② 3前① 3後③ 3後④ 4通 4後④	1 1 2 2 2 2 2 5 2	2 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学システム情報科学研究院教授 （H17.4）	5日

別記様式第３号（その２の１）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

調書番号	専任等区分	職位	フリガナ 氏名 ＜就任(予定)年月＞	開設時の年齢 (H30.4.1)	保有学位等	開設時の月額基本給（千円）	担当授業科目の名称	配当年次	担当単位数	年間開講数	現職 （就任年月）	申請に係る大学等の職務に従事する週当たり平均日数
9	専任	教授	ﾐｿﾞｸﾞﾁ　ｺｳｼﾞ 溝口　孝司 ＜平成30年4月＞		哲学博士		先史学入門 社会共生論　※ 先史社会を知るＡ 共創基礎プロジェクト１ 共創基礎プロジェクト２ 共創プロジェクト１ 共創プロジェクト２ ディグリープロジェクト１ ディグリープロジェクト２ ディグリープロジェクト３	1前①～②・後③～④ 2前②・後④ 3前② 2前① 2前② 3前① 3後③ 3後④ 4通 4後④	2 1 1 2 2 2 2 2 5 2	2 2 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学比較社会文化研究院教授 (H6.4)	5日
10	専任	教授	ｶﾝ　ﾋﾛﾉﾌﾞ 菅　浩伸 ＜平成30年4月＞		博士（学術）		地理学入門 自然環境と社会　※ 地球環境実習　※ 環境地理学　※ 共創基礎プロジェクト１ 共創基礎プロジェクト２ 共創プロジェクト１ 共創プロジェクト２ ディグリープロジェクト１ ディグリープロジェクト２ ディグリープロジェクト３	1後③～④ 2前①・後③ 2前②・後③ 3前② 2前① 2前② 3前① 3後③ 3後④ 4通 4後④	2 1 1 1 2 2 2 2 2 5 2	1 2 2 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学比較社会文化研究院教授 (H26.4)	5日
11	専任	教授	ｶｸ　ｼｭﾝｶｲ 郭　俊海 ＜平成30年4月＞		Ph.D.（文学）		Kanji Courses：Elementary 2A Kanji Courses：Elementary 2B Writing Courses：Intermediate 1A Writing Courses：Intermediate 1B Writing Courses：Intermediate 2A Writing Courses：Intermediate 2B Writing Courses：Pre-Advanced A Writing Courses：Pre-Advanced B Writing Courses：Advanced A Writing Courses：Advanced B 共創基礎プロジェクト１ 共創基礎プロジェクト２ 共創プロジェクト１ 共創プロジェクト２ ディグリープロジェクト１ ディグリープロジェクト２ ディグリープロジェクト３	1・2前①・後③ 1・2前②・後④ 1・2前①・後③ 1・2前②・後④ 1・2前①・後③ 1・2前②・後④ 1・2前①・後③ 1・2前②・後④ 1・2前①・後③ 1・2前②・後④ 2前① 2前② 3前① 3後③ 3後④ 4通 4後④	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 2 2 2 2 2 5 2	2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 1 1 1 1 1 1 1	留学生センター教授 (H18.4)	5日
12	専任	教授	ｱﾗｵ　ｸﾆｵ 荒谷　邦雄 ＜平成30年4月＞		博士（理学）		生物多様性と人間文化 フィールド調査法　※ 自然環境と社会　※ 地球環境実習　※ 地域生態論 生物多様性科学 共創基礎プロジェクト１ 共創基礎プロジェクト２ 共創プロジェクト１ 共創プロジェクト２ ディグリープロジェクト１ ディグリープロジェクト２ ディグリープロジェクト３	2前①・② 2前①・② 2前①・後③ 2 前②・後③ 3前② 3前① 2前① 2前② 3前① 3後③ 3後④ 4通 4後④	1 1 1 1 1 1 2 2 2 2 2 5 2	2 2 2 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学比較社会文化研究院教授 (H12.10)	5日
13	専任	教授	ｶﾌﾞﾗｷﾞ　ﾏｻﾋｺ 鏑木　政彦 ＜平成30年4月＞		博士（法学）		グローバル・エシクス 社会哲学論 多文化共生の世界秩序 国家と政治 共創基礎プロジェクト１ 共創基礎プロジェクト２ 共創プロジェクト１ 共創プロジェクト２ ディグリープロジェクト１ ディグリープロジェクト２ ディグリープロジェクト３	1後③・④ 2前②・後④ 3前① 3前② 2前① 2前② 3前① 3後③ 3後④ 4通 4後④	1 1 1 1 2 2 2 2 2 5 2	2 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学比較社会文化研究院教授 (H12.10)	5日
14	専任	教授	ｺﾉﾐ　ｼﾝｲﾁ 木實　新一 ＜平成30年4月＞		博士（工学）		基幹教育セミナー 情報科学 データサイエンス基礎 ビッグデータ処理 共創基礎プロジェクト１ 共創基礎プロジェクト２ 共創プロジェクト１ 共創プロジェクト２ ディグリープロジェクト１ ディグリープロジェクト２ ディグリープロジェクト３	1前② 1後③～④ 2前①・② 2後④・3前② 2前① 2前② 3前① 3後③ 3後④ 4通 4後④	1 1.5 1 1 2 2 2 2 2 5 2	1 1 2 2 1 1 1 1 1 1 1	東京大学空間情報科学研究センター特任准教授 (H28.4)	5日
15	専任	教授	ﾊｻﾞﾘｶ　ﾍﾏﾝﾀ Hazarika Hemanta ＜平成30年4月＞		博士（工学）		自然災害・資源 地盤学と災害 地球環境実習　※ 共創基礎プロジェクト１ 共創基礎プロジェクト２ 共創プロジェクト１ 共創プロジェクト２ ディグリープロジェクト１ ディグリープロジェクト２ ディグリープロジェクト３	2前①・後④ 3前② 2前②・後③ 2前① 2前② 3前① 3後③ 3後④ 4通 4後④	1 2 1 2 2 2 2 2 5 2	2 1 2 1 1 1 1 1 1 1	工学研究院教授 (H22.3)	5日
16	専任	教授	ﾛｰﾚﾝｽ　ﾖﾊﾝ Lauwereyns Johan ＜平成30年4月＞		Ph.D.(心理学)		基幹教育セミナー Brain and Mind Brain & Information　※ Cognitive science Bioethics 共創基礎プロジェクト１ 共創基礎プロジェクト２ 共創プロジェクト１ 共創プロジェクト２ ディグリープロジェクト１ ディグリープロジェクト２ ディグリープロジェクト３	1前② 2後③ 2前①・② 3後③ 3前① 2前① 2前② 3前① 3後③ 3後④ 4通 4後④	1 2 1 1 1 2 2 2 2 2 5 2	1 1 2 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学基幹教育院教授 (H22.1)	5日

別記様式第３号（その２の１）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

調書番号	専任等区分	職位	フリガナ 氏名 ＜就任(予定)年月＞	開設時の年齢 (H30.4.1)	保有学位等	開設時の月額基本給（千円）	担当授業科目の名称	配当年次	担当単位数	年間開講数	現職 （就任年月）	申請に係る大学等の職務に従事する週当たり平均日数
17	専任	教授	ﾅｶﾞｼﾏ　ﾋﾛｷ 永島　広紀 ＜平成30年4月＞		博士（文学）		韓国・朝鮮研究の最前線Ⅰ 韓国・朝鮮研究の最前線Ⅱ 現代史Ⅰ 歴史基礎論　※ 東アジア地域研究 共創基礎プロジェクト１ 共創基礎プロジェクト２ 共創プロジェクト１ 共創プロジェクト２ ディグリープロジェクト１ ディグリープロジェクト２ ディグリープロジェクト３	1後③ 1後④ 2前①～② 2前①・後③ 3前① 2前① 2前② 3前① 3後③ 3後④ 4通 4後④	1 1 2 1 1 2 2 2 2 2 5 2	1 1 1 2 1 1 1 1 1 1 1 1	韓国研究センター教授 （H28.4）	5日
18	専任	教授	ｲﾅﾊﾞ　ﾐｴｷ 稲葉　美由紀 ＜平成30年4月＞		Ph.D.（社会福祉学）		Intensive English: Global Issues LS 1 Intensive English: Global Issues LS 2 Intensive English: Japanese Issues 1 Intensive English: Japanese Issues 2 社会共生論　※ 国際福祉論 共創基礎プロジェクト１ 共創基礎プロジェクト２ 共創プロジェクト１ 共創プロジェクト２ ディグリープロジェクト１ ディグリープロジェクト２ ディグリープロジェクト３	1前① 1前② 1後③ 1後④ 2前②・後④ 3後③ 2前① 2前② 3前① 3後③ 3後④ 4通 4後④	1 1 1 1 1 1 2 2 2 2 2 5 2	1 1 1 1 2 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学言語文化研究院准教授 （H16.10）	5日
19	専任	准教授	ﾀｼﾏ　ﾋﾛｼ 田島　博士 ＜平成30年4月＞		博士（工学）		動的現象の科学 Thermo-Dynamical Properties 共創基礎プロジェクト１ 共創基礎プロジェクト２ 共創プロジェクト１ 共創プロジェクト２ ディグリープロジェクト１ ディグリープロジェクト２ ディグリープロジェクト３	3前① 2後③ 2前① 2前② 3前① 3後③ 3後④ 4通 4後④	2 2 2 2 2 2 2 5 2	1 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学総合理工学研究院准教授 （H11.10）	5日
20	専任	准教授	ｻｶｸﾞﾁ　ﾋﾃﾞﾂｸﾞ 坂口　英継 ＜平成30年4月＞		理学博士		複雑系科学入門 複雑系科学論 共創基礎プロジェクト１ 共創基礎プロジェクト２ 共創プロジェクト１ 共創プロジェクト２ ディグリープロジェクト１ ディグリープロジェクト２ ディグリープロジェクト３	2前①～② 2後③～④ 2前① 2前② 3前① 3後③ 3後④ 4通 4後④	2 2 2 2 2 2 2 5 2	1 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学総合理工学研究院准教授 （S63.5）	5日
21	専任	准教授	ｸﾜﾊﾗ　ﾖｼﾋﾛ 桑原　義博 ＜平成30年4月＞		博士（理学）		地球の進化と環境 地球の理解　※ 地球環境実習　※ 地球の変動　※ 共創基礎プロジェクト１ 共創基礎プロジェクト２ 共創プロジェクト１ 共創プロジェクト２ ディグリープロジェクト１ ディグリープロジェクト２ ディグリープロジェクト３	2後③～④ 2後③・④ 2前②・後③ 3後③ 2前① 2前② 3前① 3後③ 3後④ 4通 4後④	2 1 1 1 2 2 2 2 2 5 2	1 2 2 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学比較社会文化研究院准教授 （H7.10）	5日
22	専任	准教授	ﾏﾙﾔﾏ　ｵｻﾑ 丸山　修 ＜平成30年4月＞		博士（理学）		機械学習と人工知能 共創基礎プロジェクト１ 共創基礎プロジェクト２ 共創プロジェクト１ 共創プロジェクト２ ディグリープロジェクト１ ディグリープロジェクト２ ディグリープロジェクト３	2後③ 2前① 2前② 3前① 3後③ 3後④ 4通 4後④	1 2 2 2 2 2 5 2	1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学マス・フォア・インダストリ研究所 （H12.5）	5日
23	専任	准教授	ﾎｰﾙ･ｱﾝﾄﾞﾘｭｰ　ﾘｰﾄﾞ Hall, Andrew Reed ＜平成30年4月＞		博士（史学）		歴史基礎論　※ 地域史 共創基礎プロジェクト１ 共創基礎プロジェクト２ 共創プロジェクト１ 共創プロジェクト２ ディグリープロジェクト１ ディグリープロジェクト２ ディグリープロジェクト３	2前①・後③ 3前② 2前① 2前② 3前① 3後③ 3後④ 4通 4後④	1 1 2 2 2 2 2 5 2	2 1 1 1 1 1 1 1 1	比較社会文化研究院准教授 （H22.3）	5日
24	専任	教授	ｵｵｶﾞ　ﾁﾊﾙ 大神　智春 ＜平成30年4月＞		修士（比較社会文化）		Kanji Courses : Pre-Intermediate A Kanji Courses : Pre-Intermediate B Kanji Courses : Intermediate 1 A Kanji Courses : Intermediate 1 B Kanji Courses : Intermediate 2 A Kanji Courses : Intermediate 2 B Kanji Courses : Pre-Advanced A Kanji Courses : Pre-Advanced B Kanji Courses : Advanced A Kanji Courses : Advanced B 異文化対応 1 共創基礎プロジェクト１ 共創基礎プロジェクト２ 共創プロジェクト１ 共創プロジェクト２ ディグリープロジェクト１ ディグリープロジェクト２ ディグリープロジェクト３	1・2前①・後③ 1・2前②・後④ 1・2前①・後③ 1・2前②・後④ 1・2前①・後③ 1・2前②・後④ 1・2前①・後③ 1・2前②・後④ 1・2前①・後③ 1・2前②・後④ 1前② 2前① 2前② 3前① 3後③ 3後④ 4通 4後④	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 2 2 2 2 2 5 2	2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 1 1 1 1 1 1 1 1	留学生センター准教授 （H16.11）	5日

別記様式第３号（その２の１）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

調書番号	専任等区分	職位	フリガナ 氏名 ＜就任(予定)年月＞	開設時の年齢 (H30.4.1)	保有学位等	開設時の月額基本給（千円）	担当授業科目の名称	配当年次	担当単位数	年間開講数	現職 （就任年月）	申請に係る大学等の職務に従事する週当たり平均日数
25	専任	准教授	ﾅｶﾞﾀﾆ　ﾁﾖｺ 長谷　千代子 ＜平成30年4月＞		博士（文学）		フィールド調査法　※ 社会共生論　※ 生き方の人類学 共創基礎プロジェクト１ 共創基礎プロジェクト２ 共創プロジェクト１ 共創プロジェクト２ ディグリープロジェクト１ ディグリープロジェクト２ ディグリープロジェクト３	2前①・② 2前②・後④ 3前① 2前① 2前② 3前① 3後③ 3後④ 4通 4後④	1 1 1 2 2 2 2 2 5 2	2 2 1 1 1 1 1 1 1 1	比較社会文化研究院准教授 （H22.4）	5日
26	専任	准教授	スルチョードリ・ ビシュワジット ＜平成30年4月＞		博士（学術）		基幹教育セミナー Molecular & Cell Biology　※ Physiology and Behavior Stress and Nutrition 共創基礎プロジェクト１ 共創基礎プロジェクト２ 共創プロジェクト１ 共創プロジェクト２ ディグリープロジェクト１ ディグリープロジェクト２ ディグリープロジェクト３	1前② 2前②・後④ 3後③ 3前① 2前① 2前② 3前① 3後③ 3後④ 4通 4後④	1 1 1 1 2 2 2 2 2 5 2	1 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学基幹教育院准教授 （H22.4）	5日
27	専任	准教授	ﾓﾘﾀ　ｸﾆﾋｻ 森田　邦久 ＜平成30年4月＞		博士（理学） 博士（文学）		基幹教育セミナー 課題協学 科学の歴史 A 科学の歴史 B 科学の基礎（哲学的考察） 科学論 物理学の歴史と哲学 地学と生物学の歴史と哲学 共創基礎プロジェクト１ 共創基礎プロジェクト２ 共創プロジェクト１ 共創プロジェクト２ ディグリープロジェクト１ ディグリープロジェクト２ ディグリープロジェクト３	1前② 1後③～④ 2前① 2前② 2後③ 2前①・② 2後④・3前② 2後③・3前② 2前① 2前② 3前① 3後③ 3後④ 4通 4後④	1 2.5 1 1 1 1 1 1 2 2 2 2 2 5 2	1 1 1 1 1 2 2 2 1 1 1 1 1 1 1	九州大学基幹教育院准教授 （H25.7）	5日
28	専任	准教授	ｵﾆﾏﾙ　ﾀｹｼ 鬼丸　武士 ＜平成30年4月＞		博士（地域研究）		政治学入門 地域研究基礎論 比較地域研究 国家と政治 共創基礎プロジェクト１ 共創基礎プロジェクト２ 共創プロジェクト１ 共創プロジェクト２ ディグリープロジェクト１ ディグリープロジェクト２ ディグリープロジェクト３	1前①～② 2前①・後③ 3後③ 3前② 2前① 2前② 3前① 3後③ 3後④ 4通 4後④	2 1 1 1 2 2 2 2 2 5 2	1 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学比較社会文化研究院准教授 （H26.4）	5日
29	専任	准教授	ﾅｶﾑﾗ（ｵｵｶﾜ）ﾏｺ 中村（大川）真子 ＜平成30年4月＞		博士（医学）		遺伝学と進化 発生生物学 共創基礎プロジェクト１ 共創基礎プロジェクト２ 共創プロジェクト１ 共創プロジェクト２ ディグリープロジェクト１ ディグリープロジェクト２ ディグリープロジェクト３	2前①・後③ 3前② 2前① 2前② 3前① 3後③ 3後④ 4通 4後④	1 1 2 2 2 2 2 5 2	2 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学農学研究院准教授 （H19.4）	5日
30	専任	准教授	ﾀｼﾞﾘ　ﾖｼﾉﾘ 田尻　義了 ＜平成30年4月＞		博士（比較社会文化）		アジア埋蔵文化財学Ａ アジア埋蔵文化財学Ｂ フィールドに学ぶＡ フィールド調査法　※ 歴史基礎論　※ 埋蔵文化財から見える世界 共創基礎プロジェクト１ 共創基礎プロジェクト２ 共創プロジェクト１ 共創プロジェクト２ ディグリープロジェクト１ ディグリープロジェクト２ ディグリープロジェクト３	1前① 1前② 1後③ 2前①・② 2前①・後③ 3前① 2前① 2前② 3前① 3後③ 3後④ 4通 4後④	1 1 1 1 1 1 2 2 2 2 2 5 2	1 1 1 2 2 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学比較社会文化研究院准教授 （H25.5）	5日
31	専任	准教授	ｾﾝﾀﾞ　ﾘｮｳｺ 仙田　量子 ＜平成30年4月＞		博士（理学）		社会の中の地球科学　※ 地球環境実習　※ 地球の理解　※ 共創基礎プロジェクト１ 共創基礎プロジェクト２ 共創プロジェクト１ 共創プロジェクト２ ディグリープロジェクト１ ディグリープロジェクト２ ディグリープロジェクト３	3前① 2前②・後③ 2後③・④ 2前① 2前② 3前① 3後③ 3後④ 4通 4後④	1 1 1 2 2 2 2 2 5 2	1 2 2 1 1 1 1 1 1 1	独立行政法人海洋研究開発機構 （H17.12）	5日
32	専任	准教授	ﾏｽｵ（ﾃｼﾏ）ﾁｻｺ 益尾（手島）知佐子 ＜平成30年4月＞		博士（学術）		現代社会Ⅱ 政治・経済基礎論　※ 国際関係論 共創基礎プロジェクト１ 共創基礎プロジェクト２ 共創プロジェクト１ 共創プロジェクト２ ディグリープロジェクト１ ディグリープロジェクト２ ディグリープロジェクト３	2後③～④ 2前②・後④ 3前① 2前① 2前② 3前① 3後③ 3後④ 4通 4後④	2 1 1 2 2 2 2 2 5 2	1 2 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学比較社会文化研究院准教授 （H20.10）	5日
33	専任	准教授	ﾊﾟｽﾄﾛ　ｸﾚｲｸﾞ　ｱﾝﾄﾆｵ Pastro Craig Antonio ＜平成30年4月＞		Ph.D.（数学）		基幹教育セミナー Python Programing for Analysis 共創基礎プロジェクト１ 共創基礎プロジェクト２ 共創プロジェクト１ 共創プロジェクト２ ディグリープロジェクト１ ディグリープロジェクト２ ディグリープロジェクト３	1前② 2後③～④ 2前① 2前② 3前① 3後③ 3後④ 4通 4後④	1 2 2 2 2 2 2 5 2	1 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学基幹教育院准教授 （H22.2）	5日
34	専任	准教授	ｲﾅｶﾞｷ（ｴﾊﾞﾀ）ｼｵ 稲垣（江端）紫緒 ＜平成30年4月＞		博士（学術）		データマイニングと情報可視化 共創基礎プロジェクト１ 共創基礎プロジェクト２ 共創プロジェクト１ 共創プロジェクト２ ディグリープロジェクト１ ディグリープロジェクト２ ディグリープロジェクト３	2後④ 2前① 2前② 3前① 3後③ 3後④ 4通 4後④	1 2 2 2 2 2 5 2	1 1 1 1 1 1 1 1	理学研究院准教授 （H27.4）	5日

別記様式第３号（その２の１）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

調書番号	専任等区分	職位	フリガナ 氏名 ＜就任(予定)年月＞	開設時の年齢 (H30.4.1)	保有学位等	開設時の月額基本給（千円）	担当授業科目の名称	配当年次	担当単位数	年間開講数	現職 （就任年月）	申請に係る大学等の職務に従事する週当たり平均日数
35	専任	准教授	ｵｵｶﾞ ﾄｵﾙ 大賀　哲 ＜平成30年4月＞		Ph.D.（思想と言説分析）		社会共生論　※ 国際政治学 環境ガバナンス　※ 共創基礎プロジェクト１ 共創基礎プロジェクト２ 共創プロジェクト１ 共創プロジェクト２ ディグリープロジェクト１ ディグリープロジェクト２ ディグリープロジェクト３	2前②・後④ 3前①～② 3前② 2前① 2前② 3前① 3後③ 3後④ 4通 4後④	1 2 1 2 2 2 2 2 5 2	2 1 1 1 1 1 1 1 1 1	法学研究院准教授 (H20.2)	5日
36	専任	准教授	ﾔﾏｵ ﾀﾞｲ 山尾　大 ＜平成30年4月＞		博士（地域研究）		フィールド調査法　※ 地域研究基礎論 比較地域研究 共創基礎プロジェクト１ 共創基礎プロジェクト２ 共創プロジェクト１ 共創プロジェクト２ ディグリープロジェクト１ ディグリープロジェクト２ ディグリープロジェクト３	2前①・② 2前①・後③ 3後③ 2前① 2前② 3前① 3後③ 3後④ 4通 4後④	1 1 1 2 2 2 2 2 5 2	2 2 1 1 1 1 1 1 1 1	比較社会文化研究院准教授 (H22.10)	5日
37	専任	准教授	ｳﾁﾀﾞ ｻﾄﾙ 内田　論 ＜平成30年4月＞		博士（学術）		Intensive English: Academic Issues 1 Intensive English: Academic Issues 2 Intensive English: Academic Issues 3 Intensive English: Academic Issues 4 言語コミュニケーション論 言語とコミュニケーションＢ 共創基礎プロジェクト１ 共創基礎プロジェクト２ 共創プロジェクト１ 共創プロジェクト２ ディグリープロジェクト１ ディグリープロジェクト２ ディグリープロジェクト３	1前① 1前② 1後③ 1後④ 2前①・② 3前② 2前① 2前② 3前① 3後③ 3後④ 4通 4後④	1 1 1 1 1 1 2 2 2 2 2 5 2	1 1 1 1 2 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学言語文化研究院准教授 (H26.4)	5日
38	専任	講師	ﾌﾅﾊｼ（ｲｼｶﾜ） ｷｮｳｺ 舟橋（石川）京子 ＜平成30年4月＞		博士（比較社会文化）		フィールド調査法　※ 社会共生論　※ 先史社会を知るＢ 共創基礎プロジェクト１ 共創基礎プロジェクト２ 共創プロジェクト１ 共創プロジェクト２ ディグリープロジェクト１ ディグリープロジェクト２ ディグリープロジェクト３	2前①・② 2前②・後④ 3後③ 2前① 2前② 3前① 3後③ 3後④ 4通 4後④	1 1 1 2 2 2 2 2 5 2	2 2 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学比較社会文化研究院講師 (H23.5)	5日
39	専任	講師	ﾅｶﾉ ﾉﾌﾞﾋｺ 中野　伸彦 ＜平成30年4月＞		博士（理学）		フィールド調査法　※ 地球の理解　※ 地球環境実習　※ 地球物質科学　※ 共創基礎プロジェクト１ 共創基礎プロジェクト２ 共創プロジェクト１ 共創プロジェクト２ ディグリープロジェクト１ ディグリープロジェクト２ ディグリープロジェクト３	2前①・② 2後③・④ 2前②・後③ 3前① 2前① 2前② 3前① 3後③ 3後④ 4通 4後④	1 1 1 1 2 2 2 2 2 5 2	2 2 2 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学比較社会文化研究院講師 (H19.1)	5日
40	専任	講師	ｾﾋﾞﾘｱ ｱﾝﾄﾝ ﾙｲｽ ｶﾋﾞｽﾄﾗﾉ SEVILLA Anton Luis Capistrano ＜平成30年4月＞		博士（学術）		基幹教育セミナー 社会と倫理 グローバル・エシクス 社会哲学論 教育倫理学 共創基礎プロジェクト１ 共創基礎プロジェクト２ 共創プロジェクト１ 共創プロジェクト２ ディグリープロジェクト１ ディグリープロジェクト２ ディグリープロジェクト３	1前② 2後④ 1後③・④ 2前②・後④ 3前② 2前① 2前② 3前① 3後③ 3後④ 4通 4後④	1 1 1 1 1 2 2 2 2 2 5 2	1 1 2 2 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学基幹教育院講師 (H27.3)	5日
41	専任	講師	ﾒﾝﾃﾞｽ ｹﾞｰﾗ ｶﾙﾛｽ ｱﾙﾍﾞﾙﾄ MENDEZ GUERRA Carlos Alberto ＜平成30年4月＞		博士（国際開発学）		基幹教育セミナー 政治・経済基礎論　※ 開発経済学 共創基礎プロジェクト１ 共創基礎プロジェクト２ 共創プロジェクト１ 共創プロジェクト２ ディグリープロジェクト１ ディグリープロジェクト２ ディグリープロジェクト３	1前② 2前②・後④ 3後③ 2前① 2前② 3前① 3後③ 3後④ 4通 4後④	1 1 1 2 2 2 2 2 5 2	1 2 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学基幹教育院講師 (H27.10)	5日
42	専任	講師	ﾌｼﾞｵｶ ﾕｳｲﾁﾛｳ 藤岡　悠一郎 ＜平成30年4月＞		博士（地域研究）		フィールド調査法　※ 自然環境と社会　※ 地球環境実習　※ 環境地理学　※ 共創基礎プロジェクト１ 共創基礎プロジェクト２ 共創プロジェクト１ 共創プロジェクト２ ディグリープロジェクト１ ディグリープロジェクト２ ディグリープロジェクト３	2前①・② 2前①・後③ 2前②・後③ 3前② 2前① 2前② 3前① 3後③ 3後④ 4通 4後④	1 1 1 1 2 2 2 2 2 5 2	2 2 2 1 1 1 1 1 1 1 1	東北大学学際科学フロンティア研究所　助教 (H27.4)	5日
43	専任	助教	ﾘ ｷﾞｮｳｴﾝ 李　暁燕 ＜平成30年4月＞		博士（知識科学）		言語コミュニケーション論 議論と創造のコミュニケーションＡ 議論と創造のコミュニケーションＢ 共創基礎プロジェクト１ 共創基礎プロジェクト２ 共創プロジェクト１ 共創プロジェクト２ ディグリープロジェクト１ ディグリープロジェクト２ ディグリープロジェクト３	2前①・② 3前① 3前② 2前① 2前② 3前① 3後③ 3後④ 4通 4後④	1 1 1 2 2 2 2 2 5 2	2 1 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学比較社会文化研究院助教 (H25.10)	5日
44	専任	助教	ｱﾀﾞﾁ ﾀﾂﾛｳ 足立　達朗 ＜平成30年4月＞		博士（理学）		社会の中の地球科学　※ 共創基礎プロジェクト１ 共創基礎プロジェクト２ 共創プロジェクト１ 共創プロジェクト２ ディグリープロジェクト１ ディグリープロジェクト２ ディグリープロジェクト３	3前① 2前① 2前② 3前① 3後③ 3後④ 4通 4後④	1 2 2 2 2 2 5 2	1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学比較社会文化研究院助教 (H25.5)	5日

別記様式第３号（その２の１）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

調書番号	専任等区分	職位	フリガナ 氏名 ＜就任(予定)年月＞	開設時の年齢 (H30.4.1)	保有学位等	開設時の月額基本給（千円）	担当授業科目の名称	配当年次	担当単位数	年間開講数	現職 （就任年月）	申請に係る大学等の職務に従事する週当たり平均日数
45	専任	助教	ﾏﾂｵ　ｶｽﾞﾉﾘ 松尾　和典 ＜平成30年4月＞		博士（農学）		生物多様性科学 共創基礎プロジェクト１ 共創基礎プロジェクト２ 共創プロジェクト１ 共創プロジェクト２ ディグリープロジェクト１ ディグリープロジェクト２ ディグリープロジェクト３	3前① 2前① 2前② 3前① 3後③ 3後④ 4通 4後④	1 2 2 2 2 2 5 2	1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学比較社会文化研究院助教 (H28.1)	5日
46	専任	助教	ﾀｵ　ｼｭｳｲﾁﾛｳ 田尾　周一郎 ＜平成30年4月＞		博士（理学）		基幹教育セミナー 共創基礎プロジェクト１ 共創基礎プロジェクト２ 共創プロジェクト１ 共創プロジェクト２ ディグリープロジェクト１ ディグリープロジェクト２ ディグリープロジェクト３	1前② 2前① 2前② 3前① 3後③ 3後④ 4通 4後④	1 2 2 2 2 2 5 2	1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学基幹教育院助教 (H18.5)	5日
47	兼担	教授	ｽﾐ　ﾄｼｵ 角　俊雄 ＜平成30年4月＞		博士（理学）		基幹教育セミナー 課題協学 社会と数理科学 微分積分学	1前② 1後③～④ 1前②・後③ 1後③～④	1 2.5 1 1.5	1 1 2 1	九州大学基幹教育院教授 (H15.10)	
48	兼担	教授	ﾊﾗﾀﾞ　ｺｳｼﾞ 原田　恒司 ＜平成30年4月＞		理学博士		基幹教育セミナー 身の回りの物理学Ａ 基幹物理学ＩＢ 体験してわかる自然科学 レトリック基礎	1前② 1前①・後④ 1後③～④ 1後③・④ 2前①	1 1 1.5 1 1	1 2 1 2 1	九州大学基幹教育院教授 (H3.10)	
49	兼担	教授	ﾌﾙﾔ　ｹﾝｼﾞ 古屋　謙治 ＜平成30年4月＞		理学博士		基幹教育セミナー 課題協学 基礎化学結合論	1前② 1後③～④ 1後③～④	1 2.5 1.5	1 1 1	九州大学基幹教育院教授 (H4.4)	
50	兼担	教授	ｻﾄｳ　ﾖｼｶｽﾞ 佐藤　喜一 ＜平成30年4月＞		博士（教育情報学）		基幹教育セミナー 社会統計学Ａ 社会統計学Ｂ	1前② 3後③ 3後④	1 1 1	1 1 1	九州大学基幹教育院教授 (H29.1)	
51	兼担	教授	ｵｵﾊｼ　ﾋﾛｼ 大橋　浩 ＜平成30年4月＞		博士（文学）		基幹教育セミナー コミュニケーション入門	1前② 1前①	1 1	1 1	九州大学基幹教育院教授 (H26.4)	
52	兼担	教授	ﾀｷｳｴ　ﾀｶﾉﾘ 瀧上　隆智 ＜平成30年4月＞		博士（理学）		基幹教育セミナー 基礎化学 基礎化学熱力学	1前② 1前①～② 1後③～④	1 1.5 1.5	1 1 1	九州大学基幹教育院教授 (H6.10)	
53	兼担	教授	ﾀﾆｸﾞﾁ　ｾﾂｵ 谷口　説男 ＜平成30年4月＞		理学博士		ビジネス統計学	2前②	1	1	九州大学基幹教育院教授 (S61.4)	
54	兼担	教授	ﾁﾝ　ｺｳｻｲ 陳　光斉 ＜平成30年4月＞		博士（理学）		基幹教育セミナー リスクマネジメント	1前② 2後③～④	1 2	1 1	九州大学基幹教育院教授 (H12.4)	
55	兼担	教授	ﾀﾑﾗ　ｼｹﾞﾋｺ 田村　茂彦 ＜平成30年4月＞		博士（理学）		基幹教育セミナー 生命の科学Ａ プレゼンテーション基礎	1前② 1後④ 2前②	1 1 1	1 1 1	九州大学基幹教育院教授 (H8.2)	
56	兼担	教授	ﾀﾅｶ　ﾏﾘ 田中　真理 ＜平成30年4月＞		博士（教育心理学）		基幹教育セミナー 課題協学 バリアフリー支援入門 ユニバーサルデザイン研究 アクセシビリティ入門 アクセシビリティマネジメント研究	1前② 1後③～④ 1前①～② 1前①～② 1後③～④ 2前①～②	1 2.5 1 1 1 2	1 1 1 1 1 1	九州大学基幹教育院教授 (H26.4)	
57	兼担	教授	ﾌｸﾀﾞ　ﾁﾂﾞﾙ 福田　千鶴 ＜平成30年4月＞		博士（文学）		基幹教育セミナー 課題協学 歴史学入門	1前② 1後③～④ 1前①～②	1 2.5 2	1 1 1	九州大学基幹教育院教授 (H26.4)	
58	兼担	教授	ﾉｸﾞﾁ　ﾀｶｱｷ 野口　高明 ＜平成30年4月＞		理学博士		基幹教育セミナー 課題協学 地球と宇宙の科学	1前② 1後③～④ 1前①～②・後③～④	1 2.5 1	1 1 2	九州大学基幹教育院教授 (H26.4)	
59	兼担	教授	ﾉｾ　ﾀｹﾙ 野瀬　健 ＜平成30年4月＞		博士（理学）		基幹教育セミナー 課題協学 無機物質化学	1前② 1後③～④ 1後③～④	1 2.5 1.5	1 1 1	九州大学基幹教育院教授 (H9.10)	
60	兼担	教授	ｼｽﾞﾅｶﾞ　ﾀｹｼ 静永　健 ＜平成30年4月＞		博士（文学）		文学・言語学入門	1前①～②	2	1	九州大学人文科学研究院教授 (H12.4)	
61	兼担	教授	ﾐｽﾐ　ｶｽﾞｵ 三隅　一百 ＜平成30年4月＞		博士（社会学）		社会学入門 男女共同参画 文化と社会の理論 人間社会研究法	1前①～②・後③～④ 2後③～④ 2前①～② 3後③	2 2 2 1	2 1 1 1	九州大学比較社会文化研究院教授 (S63.4)	
62	兼担	教授	ﾔﾏﾝﾀ　ｼﾞｭﾝ 山下　潤 ＜平成30年4月＞		博士（社会科学）		生物多様性と人間文化 環境都市政策	2前①・前② 3後③	1 1	2 1	九州大学比較社会文化研究院教授 (H12.4)	
63	兼担	教授	ﾏﾂｲ　ﾔｽﾋﾛ 松井　康浩 ＜平成30年4月＞		博士（法学）		国際関係論 国家と政治	3前① 3前②	1 1	1 1	九州大学比較社会文化研究院教授 (H19.4)	

別記様式第３号（その２の１）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

調書番号	専任等区分	職位	フリガナ 氏名 ＜就任(予定)年月＞	開設時の年齢 (H30.4.1)	保有学位等	開設時の月額基本給 （千円）	担当授業科目の名称	配当年次	担当単位数	年間開講数	現職 （就任年月）	申請に係る大学等の職務に従事する週当たり平均日数
64	兼担	教授	ﾏﾂﾅｶﾞ ﾉﾘｺ 松永　典子 ＜平成30年4月＞		博士（比較社会文化）		社会参加のための日本語教育Ⅰ 社会参加のための日本語教育Ⅱ 異文化とコミュニケーション	1前① 1後③ 3後③	1 1 1	1 1 1	九州大学比較社会文化研究院教授 (H17.4)	
65	兼担	教授	ﾅｶﾉ ﾋﾄｼ 中野　等 ＜平成30年4月＞		博士（文学）		比較史	3後③	1	1	九州大学比較社会文化研究院教授 (H9.10)	
66	兼担	教授	ﾔﾏｸﾞﾁ ﾋﾛﾕｷ 山口　裕幸 ＜平成30年4月＞		博士（教育心理学）		人間社会研究法	3後③	1	1	九州大学人間環境学研究院教授 (H9.10)	
67	兼担	教授	ﾎﾘ ﾖｼｷ 堀　賀貴 ＜平成30年4月＞		博士（工学）		世界建築史	2前①	2	1	九州大学人間環境学研究院教授 (H15.10)	
68	兼担	教授	ﾉﾉﾑﾗ ﾄｼｺ 野々村　淑子 ＜平成30年4月＞		博士（教育学）		女性学・男性学Ⅰ 女性学・男性学Ⅱ	1前① 1前②	1 1	1 1	九州大学人間環境学研究院教授 (H9.10)	
69	兼担	教授	ｸﾏﾉ ﾅｵｷ 熊野　直樹 ＜平成30年4月＞		法学博士		現代史Ⅲ	2前①～②	2	1	九州大学法学研究院教授 (H6.4)	
70	兼担	教授	ｴｸﾞﾁ ｱﾂﾋﾄ 江口　厚仁 ＜平成30年4月＞		修士（法学）		現代社会Ⅲ 法文化学入門	2前①～② 2前①～②	2 2	1 1	九州大学法学研究院教授 (H2.4)	
71	兼担	教授	ﾐﾅﾐﾉ ｼｹﾞﾙ 南野　森 ＜平成30年4月＞		Ｄ，Ｅ，Ａ，（修士）		法学入門 日本国憲法	1前①～② 3前①～②・後③～④	2 2	1 2	九州大学法学研究院教授 (H14.4)	
72	兼担	教授	ｲﾜﾀ ｹﾝｼﾞ 岩田　健治 ＜平成30年4月＞		博士（経済学）		ＥＵ論基礎-制度と経済-	2前①～②	2	1	九州大学経済学研究院教授 (H11.4)	
73	兼担	教授	ｵｵﾂﾎﾞ ﾐﾉﾙ 大坪　稔 ＜平成30年4月＞		博士（経済学）		現代企業分析	1後③・④	1	2	九州大学経済学研究院教授 (H25.9)	
74	兼担	教授	ｳﾁﾀﾞ ｺｳﾅﾘ 内田　交謹 ＜平成30年4月＞		博士（経済学）		金融と経済	2後③～④	2	1	九州大学経済学研究院教授 (H20.4)	
75	兼担	教授	ﾖｳ ｿｳﾒｲ 葉　聰明 ＜平成30年4月＞		博士（経営学）		現代経済事情	1後③・④	1	2	国際教養大学国際教養学部教授 (H17.4)	
76	兼担	教授	ﾔﾏﾑﾗ ﾋﾛﾐ 山村　ひろみ ＜平成30年4月＞		文学修士		スペイン語Ⅰ スペイン語Ⅱ	1前①～② 1後③～④	2 2	1 1	九州大学言語文化研究院教授 (H6.4)	
77	兼担	教授	ｵｵﾂ ﾀｶﾋﾛ 大津　隆広 ＜平成30年4月＞		文学修士		言語とコミュニケーションＡ	3前①	1	1	九州大学言語文化研究院教授 (H5.4)	
78	兼担	教授	ﾀﾅｶ ﾄｼﾔ 田中　俊也 ＜平成30年4月＞		博士（哲学）		Intensive English: Academic Issues 1 Intensive English: Academic Issues 2 Intensive English: Academic Issues 3 Intensive English: Academic Issues 4	1前① 1前② 1後③ 1後④	1 1 1 1	1 1 1 1	九州大学言語文化研究院教授 (H3.4)	
79	兼担	教授	ｽｽﾞｷ ﾕｳﾌﾞﾝ 鈴木　右文 ＜平成30年4月＞		文学修士		Intensive English: Academic Issues 1 Intensive English: Academic Issues 2 Intensive English: Academic Issues 3 Intensive English: Academic Issues 4 学術英語ゼミ・ライティング・スピーキング	1前① 1前② 1後③ 1後④ 2前①～②	1 1 1 1 2	1 1 1 1 1	九州大学言語文化研究院教授 (H4.4)	
80	兼担	教授	ｱﾝﾅｶ ﾏｻﾋｺ 安中　雅彦 ＜平成30年4月＞		博士（理学）		環境問題と自然科学	2後③～④	2	1	九州大学理学研究院教授 (H15.4)	
81	兼担	教授	ｲｼﾊﾗ ﾀｹｼ 石原　健 ＜平成30年4月＞		博士（理学）		細胞生物学	1前①～②	1.5	1	九州大学理学研究院教授 (H16.4)	
82	兼担	教授	ｶﾜﾑﾗ ﾘｭｳｲﾁ 川村　隆一 ＜平成30年4月＞		理学博士		最先端地球科学	2前①～②	1	1	九州大学理学研究院教授 (H24.4)	
83	兼担	教授	ﾅﾗｵｶ ﾋﾛｼ 奈良岡　浩 ＜平成30年4月＞		博士（理学）		地球科学	1後③	1	1	九州大学理学研究院教授 (H20.2)	

別記様式第３号（その２の１）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

調書番号	専任等区分	職位	フリガナ 氏名 ＜就任(予定)年月＞	開設時の年齢 (H30.4.1)	保有学位等	開設時の月額基本給（千円）	担当授業科目の名称	配当年次	担当単位数	年間開講数	現職 （就任年月）	申請に係る大学等の職務に従事する週当たり平均日数
84	兼担	教授	ｷﾑﾗ ﾔｽﾕｷ 木村　康之 ＜平成30年4月＞		博士（工学）		物理学の進展	2前①～②	1.5	1	九州大学理学研究院教授 (H16.4)	
85	兼担	教授	ﾋﾛｵｶ ﾄｼﾋｺ 廣岡　俊彦 ＜平成30年4月＞		理学博士		基幹物理学ＩＡ	1前①～②	1.5	1	九州大学理学研究院教授 (H5.4)	
86	兼担	教授	ﾂｼﾞｲ ﾏｻﾄ 辻井　正人 ＜平成30年4月＞		博士（理学）		線形代数学・同演習Ａ 線形代数学・同演習Ｂ	1前①～② 1後③～④	1.5 1.5	1 1	九州大学数理学研究院教授 (H19.2)	
87	兼担	教授	ﾋﾛｼﾏ ﾌﾐｵ 廣島　文生 ＜平成30年4月＞		博士（理学）		数学演習ＩＡ 微分積分学・同演習Ⅰ 微分積分学・同演習Ⅱ	1前①～② 1前①～② 1後③～④	1 1.5 1.5	1 1 1	九州大学数理学研究院教授 (H17.4)	
88	兼担	教授	ﾃﾂﾞｶ　ｼｭｳ 手塚　集 ＜平成30年4月＞		工学博士		数理統計学	1前①～②	1.5	1	九州大学マス・フォア・インダストリ研究所 (H17.4)	
89	兼担	教授	ﾐｳﾗ ﾀｶｼ 三浦　岳 ＜平成30年4月＞		博士（医学）		数理医学	1後③	1	1	九州大学医学研究院教授 (H25.2)	
90	兼担	教授	ｽﾐﾓﾄ ﾋﾃﾞｷ 住本　英樹 ＜平成30年4月＞		博士（医学）		健康の科学	3前②	1	1	九州大学医学研究院教授 (S60.5)	
91	兼担	教授	ﾓﾛﾊｼ ｹﾝｲﾁﾛｳ 諸橋　憲一郎 ＜平成30年4月＞		理学博士		バイオインフォマティックス	3後③～④	2	1	九州大学医学研究院教授 (H19.4)	
92	兼担	教授	ﾆｲﾛ ﾋﾛｱｷ 新納　宏昭 ＜平成30年4月＞		博士（医学）		臨床倫理	3後③～④	1	1	九州大学医学研究院教授 (H20.3)	
93	兼担	教授	ｱﾘﾑﾗ ﾋﾃﾞﾀｶ 有村　秀孝 ＜平成30年4月＞		博士（工学）		コンピュータープログラミング入門	2後③	1	1	九州大学医学研究院教授 (H16.4)	
94	兼担	教授	ﾊﾏｾ ｹﾝｼﾞ 濵瀬　健司 ＜平成30年4月＞		博士（薬学）		機器分析学	2後④	2	1	九州大学薬学研究院教授 (H20.4)	
95	兼担	教授	ｸﾊﾞ ﾀｶﾋﾛ 久場　隆広 ＜平成30年4月＞		博士（工学）		環境調和型社会の構築	2前①～②	2	1	九州大学工学研究院教授 (H8.4)	
96	兼担	教授	ｶﾐﾔ ﾉﾘﾈ 神谷　典穂 ＜平成30年4月＞		博士（工学）		グリーンケミストリー	2後③～④	2	1	九州大学工学研究院教授 (H14.10)	
97	兼担	教授	ﾋﾗｲ ﾔｽﾕｷ 平井　康之 ＜平成30年4月＞		Master of Philosophy（イギリス）		デザイン思考	1前①・②	1	2	九州大学芸術工学研究院教授 (H15.10)	
98	兼担	教授	ｵｶﾑﾗ ｺｳｼﾞ 岡村　耕二 ＜平成30年4月＞		博士（工学）		サイバーセキュリティ基礎論 サイバーセキュリティ演習 セキュリティエンジニアリング演習（サーバー構築編） セキュリティエンジニアリング演習（ハードウェア設計編） セキュリティエンジニアリング演習（IoTセキュリティ編）	1前①・② 1前②・後③・④ 1前② 1後③ 1後④	1 1 1 1 1	2 3 1 1 1	九州大学システム情報科学研究院教授 (H10.3)	
99	兼担	教授	ｼﾄﾞｳｼﾞ ｶｽﾞﾉﾘ 志堂寺　和則 ＜平成30年4月＞		博士（文学）		プログラミング演習	1後③～④	1	1	九州大学システム情報科学研究院教授 (H8.4)	
100	兼担	教授	ｳﾁﾀﾞ ｾｲｲﾁ 内田　誠一 ＜平成30年4月＞		博士（工学）		実データ解析技法	2後③・3前①	1	2	九州大学システム情報科学研究院教授 (H11.4)	
101	兼担	教授	ｶｸﾀ ﾖｼﾐﾂ 角田　佳充 ＜平成30年4月＞		博士（理学）		基礎生化学	2前①～②	1.5	1	九州大学農学研究院教授 (H13.11)	
102	兼担	教授	ﾐﾔﾓﾄ ﾀｶﾋｻ 宮本　敬久 ＜平成30年4月＞		農学博士		バイオテクノロジー詳論	2後③～④	2	1	九州大学農学研究院教授 (S61.4)	
103	兼担	教授	ﾀｹｶﾞﾜ ｶｵﾙ 竹川　薫 ＜平成30年4月＞		農学博士		遺伝子組換え生物の利用と制御	2後③～④	2	1	九州大学農学研究院教授 (H20.4)	

別記様式第３号（その２の１）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

調書番号	専任等区分	職位	フリガナ 氏名 ＜就任(予定)年月＞	開設時の年齢 (H30.4.1)	保有学位等	開設時の月額基本給（千円）	担当授業科目の名称	配当年次	担当単位数	年間開講数	現職 （就任年月）	申請に係る大学等の職務に従事する週当たり平均日数
104	兼担	教授	ｲｲﾀﾞ ﾋﾛｼ 飯田　弘 ＜平成30年4月＞		医学博士		分子生物学	2前①～②	1.5	1	九州大学農学研究院教授 (S56.4)	
105	兼担	教授	ﾀｶｽ ｹｲｼﾞ 高須　啓志 ＜平成30年4月＞		農学博士		生態系の科学	2前①～②	1.5	1	九州大学農学研究院教授 (H13.6)	
106	兼担	教授	ｵｶｻﾞｷ ﾄﾓﾐ 岡崎　智巳 ＜平成30年4月＞		学士(第二文学部文芸専攻)		Integrated Courses：Beginners A Integrated Courses：Beginners B Integrated Courses：Elementary 1 A Integrated Courses：Elementary 1 B Speaking Courses：Intermediate 2 A Speaking Courses：Intermediate 2 B Speaking Courses：Pre-Advanced A Speaking Courses：Pre-Advanced B Speaking Courses：Advanced A Speaking Courses：Advanced B	1・2前①・後③ 1・2前②・後④ 1・2前①・後③ 1・2前②・後④ 1・2前①・後③ 1・2前②・後④ 1・2前①・後③ 1・2前②・後④ 1・2前①・後③ 1・2前②・後④	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	2 2 2 2 2 2 2 2 2 2	九州大学留学生センター教授 (H6.9)	
107	兼担	教授	ﾀｶﾏﾂ ｻﾄｼ 高松　里 ＜平成30年4月＞		博士後期課程(教育心理学)単位修得退学		日本事情	1前①～②	2	1	九州大学留学生センター教授 (H1.10)	
108	兼担	教授	ﾋｺﾞ ﾏｻﾃﾙ 肥後　裕輝 ＜平成30年4月＞		博士（社会学）		Contemporary American Society:A Sociological Introduction	1後④	1	1	九州大学留学生センター教授 (H26.8)	
109	兼担	教授	ﾖｼﾀﾞ ｻﾄｼ 吉田　敏 ＜平成30年4月＞		博士（農学）		先進的植物生産システム概論Ⅰ 先進的植物生産システム概論Ⅱ	1後③ 1後④	1 1	1 1	九州大学生物環境利用推進センター教授 (S61.4)	
110	兼担	教授	ﾌﾙｶﾜ ｶﾂﾋｺ 古川　勝彦 ＜平成30年4月＞		博士（理学）		研究企画・産学官連携特論Ⅰ 研究企画・産学官連携特論Ⅱ	2前① 2前②	1 1	1 1	九州大学学術研究・産学官連携本部教授 (H6.8)	
111	兼担	教授	ﾀﾊﾞﾀ ﾖｼﾕｷ 田畑　義之 ＜平成30年4月＞		修士修了(ゲルマン系言語選考(ドイツ語学)		ドイツ語Ⅰ ドイツ語Ⅱ	1前①～② 1後③～④	2 2	1 1	九州大学情報基盤研究開発センター教授 (S63.4)	
112	兼担	教授	ﾔﾌﾞｳﾁ ﾋﾃﾞﾀｹ 藪内　英剛 ＜平成30年4月＞		博士（医学）		臨床イメージング	2前①	1	1	九州大学医学部保健学科教授 (H16.3)	
113	兼担	准教授	ﾔｽﾅｶﾞ ｶｽﾞﾋﾛ 安永　和央 ＜平成30年4月＞		博士（心理学）		基幹教育セミナー 社会調査法ⅠA 社会調査法ⅠB	1前② 2前① 2前②	1 1 1	1 1 1	九州大学基幹教育院准教授 (H28.3)	
114	兼担	准教授	ﾔｽﾀﾞ ｱｷﾄ 安田　章人 ＜平成30年4月＞		博士（地域研究）		基幹教育セミナー 社会調査法ⅡA 社会調査法ⅡB	1前② 2後③ 2後④	1 1 1	1 1 1	九州大学基幹教育院准教授 (H25.4)	
115	兼担	准教授	ｵｶﾓﾄ ﾂﾖｼ 岡本　剛 ＜平成30年4月＞		博士（工学）		基幹教育セミナー 課題協学 脳情報科学入門 システム神経科学	1前② 1後③～④ 3前① 3後③	1 2.5 1 1	1 1 1 1	九州大学基幹教育院准教授 (H18.2)	
116	兼担	准教授	ｶｼﾞﾜﾗ ｹﾝｽｹ 梶原　健佑 ＜平成30年4月＞		修士（法学）		基幹教育セミナー 日本国憲法	1前② 3前①～②・後③～④	1 2	1 2	九州大学基幹教育院准教授 (H26.4)	
117	兼担	准教授	ｻｲﾄｳ ｼﾝｺﾞ 斎藤　新悟 ＜平成30年4月＞		博士（数学）		基幹教育セミナー 課題協学	1前② 1後③～④	1 2.5	1 1	九州大学基幹教育院准教授 (H25.4)	
118	兼担	准教授	ﾔﾏｶﾞﾀ ｼﾝｼﾞ 山形　伸二 ＜平成30年4月＞		博士（学術）		基幹教育セミナー	1前②	1	1	九州大学基幹教育院准教授 (H25.9)	
119	兼担	准教授	ﾔﾏﾀﾞ ﾏｻﾉﾘ 山田　政寛 ＜平成30年4月＞		博士（学術）		基幹教育セミナー 課題協学 現代教育学入門 教育基礎学入門	1前② 1後③～④ 1前① 1前②	1 2.5 1 1	1 1 1 1	九州大学基幹教育院准教授 (H25.1)	
120	兼担	准教授	ﾔﾏﾀﾞ ﾀｸﾏ 山田　琢磨 ＜平成30年4月＞		博士（理学）		基幹教育セミナー 課題協学 物理学概論Ｂ演習	1前② 1後③～④ 1後③～④	1 2.5 1	1 1 1	九州大学基幹教育院准教授 (H25.5)	
121	兼担	准教授	ﾔﾏﾀﾞ ﾕｳｷ 山田　祐樹 ＜平成30年4月＞		博士（心理学）		基幹教育セミナー 課題協学 心理学入門 認知心理学	1前② 1後③～④ 1前①～②・③～④ 2後④	1 2.5 2 1	1 1 2 1	九州大学基幹教育院准教授 (H25.10)	
122	兼担	准教授	ﾔﾏﾓﾄ ﾉﾘｺ 山本　紀子 ＜平成30年4月＞		博士(医学)		基幹教育セミナー 健康疫学・内科学からみたキャンパスライフ	1前② 1後③	1 1	1 1	九州大学基幹教育院准教授 (H25.4)	

別記様式第３号（その２の１）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

調書番号	専任等区分	職位	フリガナ 氏名 ＜就任(予定)年月＞	開設時の年齢 (H30.4.1)	保有学位等	開設時の月額基本給（千円）	担当授業科目の名称	配当年次	担当単位数	年間開講数	現職 （就任年月）	申請に係る大学等の職務に従事する週当たり平均日数
123	兼担	准教授	ｺｼﾞﾏ ｹﾝﾀﾛｳ 小島　健太郎 ＜平成30年4月＞		博士（理学）		基幹教育セミナー 課題協学	1前② 1後③～④	1 2.5	1 1	九州大学基幹教育院准教授 (H20.6)	
124	兼担	准教授	ｺﾐﾅﾄ ﾀｸｵ 小湊　卓夫 ＜平成30年4月＞		修士(経済学)		基幹教育セミナー 社会連携活動論：ボランティア 社会連携活動論：インターンシップ 人と人をつなぐ技法 ボランティア活動Ⅰ ボランティア活動Ⅱ インターンシップⅠ インターンシップⅡ	1前② 1前① 1前② 1後③～④ 2通 2通 2通 2通	1 1 1 1 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学基幹教育院准教授 (H17.4)	
125	兼担	准教授	ﾏﾂｼﾀ ﾄﾓｺ 松下　智子 ＜平成30年4月＞		博士（心理学）		基幹教育セミナー 心理学・精神医学から見たキャンパスライフ	1前② 1後③	1 1	1 1	九州大学基幹教育院准教授 (H23.10)	
126	兼担	准教授	ｱｵﾉ ｼﾞｭﾝｺ 青野　純子 ＜平成30年4月＞		博士（美術史）		基幹教育セミナー 課題協学 芸術学入門 芸術学概論	1前② 1後③～④ 1前①～②・後③～④ 3前①～②	1 2.5 2 1	1 1 2 1	九州大学基幹教育院准教授 (H25.9)	
127	兼担	准教授	ﾊﾔｶﾜ ﾄｼﾕｷ 早川　敏之 ＜平成30年4月＞		博士（理学）		基幹教育セミナー アカデミック・フロンティアⅠ アカデミック・フロンティアⅡ	1前② 1前① 1前②	1 1 1	1 1 1	九州大学基幹教育院准教授 (H25.7)	
128	兼担	准教授	ｵｵｺｳﾁ ﾕﾀｶ 大河内　豊 ＜平成30年4月＞		博士（理学）		基幹教育セミナー 課題協学 物理学概論Ａ演習 基幹物理学Ⅱ	1前② 1後③～④ 1前①～② 2前①～②	1 2.5 1 1.5	1 1 1 1	九州大学基幹教育院准教授 (H25.7)	
129	兼担	准教授	ｳﾁﾀﾞ ﾀﾂﾔ 内田　竜也 ＜平成30年4月＞		博士（理学）		基幹教育セミナー 課題協学 有機物質化学	1前② 1後③～④ 1後③～④	1 2.5 1.5	1 1 1	九州大学基幹教育院准教授 (H16.4)	
130	兼担	准教授	ｲｲｼﾞﾏ ﾕｳｼﾞ 飯嶋　裕治 ＜平成30年4月＞		博士（学術）		基幹教育セミナー 課題協学 技術と倫理 研究と倫理	1前② 1後③～④ 2後③ 3前①	1 2.5 1 1	1 1 1 1	九州大学基幹教育院准教授 (H25.10)	
131	兼担	准教授	ﾀｹﾀﾞ ﾕｶ 武田　友加 ＜平成30年4月＞		博士（経済学）		基幹教育セミナー 課題協学 経済学入門 開発経済学	1前② 1後③～④ 1前①～②・後③～④ 3後③	1 2.5 2 1	1 1 2 1	九州大学基幹教育院准教授 (H26.4)	
132	兼担	准教授	ﾌｸﾓﾘ ﾋﾃﾞｱｷ 福盛　英明 ＜平成30年4月＞		修士（教育心理学）		基幹教育セミナー	1前②	1	1	九州大学基幹教育院准教授 (H10.4)	
133	兼担	准教授	ﾐﾅﾐｻﾞﾜ ﾖｼﾋｺ 南澤　良彦 ＜平成30年4月＞		博士（文学）		哲学・思想入門	1前①～②	2	1	九州大学人文科学研究院准教授 (H13.4)	
134	兼担	准教授	ｵｰｶﾞｽﾃｨﾝ ﾏｼｭｰ Augustine Matthew ＜平成30年4月＞		博士（歴史学）		グローバル・ヒストリー 比較史 現代史Ⅱ	1後③・④ 3後③ 2後③～④	1 1 2	2 1 1	九州大学比較社会文化研究院准教授 (H22.10)	
135	兼担	准教授	ｱﾍﾞ ﾔｽﾋｻ 阿部　康久 ＜平成30年4月＞		博士（地理学）		平和と安全の構築学 東アジアの経済地理学	2前① 3前①	1 1	1 1	九州大学比較社会文化研究院准教授 (H19.10)	
136	兼担	准教授	ｲﾄｳ ｺｳｼﾞ 伊藤　幸司 ＜平成30年4月＞		博士（文学）		東アジアと日本-その歴史と現在- 地域史	2前①～② 3前②	2 1	1 1	九州大学比較社会文化研究院准教授 (H26.4)	
137	兼担	准教授	ｾ ﾃﾙﾋｻ 施　光恒 ＜平成30年4月＞		博士（法学）		多文化共生の世界秩序 国家と政治	3前① 3前②	1 1	1 1	九州大学比較社会文化研究院准教授 (H15.10)	
138	兼担	准教授	ｽｷﾞﾔﾏ ｱｶｼ 杉山　あかし ＜平成30年4月＞		社会学修士		現代社会Ⅰ	2前①～②	2	1	九州大学比較社会文化研究院准教授 (H4.4)	
139	兼担	准教授	ｱｲｻﾞﾜ ﾉﾌﾞﾋﾛ 相澤　伸広 ＜平成30年4月＞		博士（地域研究）		グローバル社会を生きるⅠ グローバル社会を生きるⅡ	1後④ 1後④	1 1	1 1	九州大学比較社会文化研究院准教授 (H26.4)	
140	兼担	准教授	ｸｽﾐ ｼﾞｭﾝｺ 楠見　淳子 ＜平成30年4月＞		博士（理学）		保全遺伝学	3前②	1	1	九州大学比較社会文化研究院准教授 (H22.10)	
141	兼担	准教授	ﾅﾐｶﾞﾀ ﾂﾖｼ 波潟　剛 ＜平成30年4月＞		博士（文学）		東アジア地域研究	3前①	1	1	九州大学比較社会文化研究院准教授 (H18.4)	

別記様式第３号（その２の１）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

調書番号	専任等区分	職位	フリガナ 氏名 ＜就任(予定)年月＞	開設時の年齢 (H30.4.1)	保有学位等	開設時の月額基本給（千円）	担当授業科目の名称	配当年次	担当単位数	年間開講数	現職 （就任年月）	申請に係る大学等の職務に従事する週当たり平均日数
142	兼担	准教授	ｽｷﾞﾔﾏ ﾖｼｵ 杉山　佳生 ＜平成30年4月＞		博士（体育科学）		健康・スポーツ科学演習	1前①～②	1	1	九州大学人間環境学研究院准教授 (H15.4)	
143	兼担	准教授	ｽｴﾋﾛ ｶｵﾙ 末廣　香織 ＜平成30年4月＞		建築学修士		建築デザイン	2後③～④	2	1	九州大学人間環境学研究院准教授 (H17.4)	
144	兼担	准教授	ﾌｪﾆｯｸ ﾏｰｸ ﾄﾞﾙﾄﾝ FENWICK MARK DALTON ＜平成30年4月＞		Doctor of Philosophy （イギリス）		The Law and Politics of Interational	1後③～④	2	1	九州大学法学研究院准教授 (H11.4)	
145	兼担	准教授	ﾊﾝ ｻﾝﾋｰ 韓　相熙 ＜平成30年4月＞		法学博士 (中国)		Law in Everyday Life B	1後④	1	1	九州大学法学研究院准教授 (H20.4)	
146	兼担	准教授	ﾀﾅｶ ﾏｻｸﾆ 田中　晶国 ＜平成30年4月＞		博士（法学）		日本国憲法	3前①～②・後③～④	2	2	九州大学法学研究院准教授 (H28.4)	
147	兼担	准教授	ｷﾀｻﾞﾜ ﾐﾂﾙ 北澤　満 ＜平成30年4月＞		博士（経済学）		日本経済史	3後③	1	1	九州大学経済学研究院准教授 (H17.4)	
148	兼担	准教授	ﾊｽﾞｳｪﾙ ｸﾘｽﾄﾌｧｰ ｶﾞﾚｽ Ｃｈｒｉｓｔｏｐｈｅｒ Ｇａｒｅｔｈ　Ｈａｓｗｅｌｌ ＜平成30年4月＞		博士（英語学・言語学）**イギリス**		Intensive English: Global Issues LS 1 Intensive English: Global Issues LS 2 Intensive English: Japanese Issues 1 Intensive English: Japanese Issues 2 学術英語ゼミ・リーディング・リスニング	1前① 1前② 1後③ 1後④ 2前①～②	1 1 1 1 2	1 1 1 1 1	九州大学言語文化研究院准教授 (H27.4)	
149	兼担	准教授	ﾃﾞｶﾏｽ ｶﾞﾌﾞﾘｴﾙ ＤＥＣＡＭＯＵＳ　ＧＡＢＲＩＥＬＬＥ ＜平成30年4月＞		Ph.D (in Visual Cultures) イギリス		Intensive English: Global Issues LS 1 Intensive English: Global Issues LS 2 Intensive English: Japanese Issues 1 Intensive English: Japanese Issues 2 学術英語ゼミ・オーラル・コミュニケーション	1前① 1前② 1後③ 1後④ 2前①～②	1 1 1 1 2	1 1 1 1 1	九州大学言語文化研究院准教授 (H26.4)	
150	兼担	准教授	ﾚｲｶｰ ｽﾃｨｰﾌﾞﾝ ＬＡＫＥＲ　Ｓｔｅｐｈｅｎ ＜平成30年4月＞		博士（言語学）**オランダ**		Intensive English: Global Issues RW 1 Intensive English: Global Issues RW 2 Intensive English: Japanese Issues 1 Intensive English: Japanese Issues 2 学術英語ゼミ・ライティング・スピーキング	1前① 1前② 1後③ 1後④ 2前①～②	1 1 1 1 2	1 1 1 1 1	九州大学言語文化研究院准教授 (H26.4)	
151	兼担	准教授	ｵﾄﾞﾘｲﾔｰ ｼｮｰﾝ ﾘﾁｬｰﾄﾞ Ｏ’ＤＷＹＥＲ　ＳＨＡＵＮ　ＲＩＣＨＡＲＤ ＜平成30年4月＞		Doctor of Philosophy　ｵｰｽﾄﾗﾘｱ		Intensive English: Global Issues RW 1 Intensive English: Global Issues RW 2 Intensive English: Japanese Issues 1 Intensive English: Japanese Issues 2	1前① 1前② 1後③ 1後④	1 1 1 1	1 1 1 1	九州大学言語文化研究院准教授 (H28.4)	
	兼任	講師	ｵﾄﾞﾘｲﾔｰ ｼｮｰﾝ ﾘﾁｬｰﾄﾞ Ｏ’ＤＷＹＥＲ　ＳＨＡＵＮ　ＲＩＣＨＡＲＤ ＜平成31年4月＞		Doctor of Philosophy　ｵｰｽﾄﾗﾘｱ		Intensive English: Global Issues RW 1 Intensive English: Global Issues RW 2 Intensive English: Japanese Issues 1 Intensive English: Japanese Issues 2	1前① 1前② 1後③ 1後④	1 1 1 1	1 1 1 1	九州大学言語文化研究院准教授 (H28.4)	
152	兼担	准教授	ｻﾄｳ ﾏｻﾉﾘ 佐藤　正則 ＜平成30年4月＞		博士（学術）		ロシア語Ⅰ ロシア語Ⅱ	1前①～② 1後③～④	2 2	1 1	九州大学言語文化研究院准教授 (H14.4)	
153	兼担	准教授	ｻﾄｳ ﾉﾘｺ 佐藤　典子 ＜平成30年4月＞		博士（文学）		フランス語Ⅰ フランス語Ⅱ	1前①～② 1後③～④	2 2	1 1	九州大学言語文化研究院准教授 (H23.10)	
154	兼担	准教授	ﾆｼﾔﾏ ﾀｹｼ 西山　猛 ＜平成30年4月＞		博士（文学）		中国語Ⅰ 中国語Ⅱ	1前①～② 1後③～④	2 2	1 1	九州大学言語文化研究院准教授 (H7.4)	
155	兼担	准教授	ﾅｶｻﾞﾄﾐ ｻﾄｼ 中里見　敬 ＜平成30年4月＞		博士（文学）		中国語Ⅰ 中国語Ⅱ	1前①～② 1後③～④	2 2	1 1	九州大学言語文化研究院准教授 (H11.10)	
156	兼担	准教授	ﾂｼﾞﾉ ﾕｳｷ 辻野　裕紀 ＜平成30年4月＞		博士（文学）		韓国語Ⅰ 韓国語Ⅱ ことばの科学	1前①～② 1後③～④ 1前①	2 2 1	1 1 1	九州大学言語文化研究院准教授 (H24.4)	
157	兼担	准教授	ｲ ｻﾝﾓｸ 李　相穆 ＜平成30年4月＞		博士（国際文化）		韓国語Ⅰ 韓国語Ⅱ	1前①～② 1後③～④	2 2	1 1	九州大学言語文化研究院准教授 (H22.4)	
158	兼担	准教授	ｳﾂﾉﾐﾔ ｻﾄｼ 宇都宮　聡 ＜平成30年4月＞		博士（理学）		現代化学	2前①～②	1.5	1	九州大学理学研究院准教授 (H19.4)	
159	兼担	准教授	ｻﾀｹ ｱｷｺ 佐竹　暁子 ＜平成30年4月＞		博士（理学）		生命の科学Ｂ	1前②	1	1	九州大学理学研究院准教授 (H27.4)	
160	兼担	准教授	ﾃﾗﾆｼ ﾀｶｼ 寺西　高 ＜平成30年4月＞		博士（理学）		物理学概論Ａ	1前①～②	1.5	1	九州大学理学研究院准教授 (H16.4)	

別記様式第３号（その２の１）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

調書番号	専任等区分	職位	フリガナ 氏名 ＜就任(予定)年月＞	開設時の年齢 (H30.4.1)	保有学位等	開設時の月額基本給（千円）	担当授業科目の名称	配当年次	担当単位数	年間開講数	現職 （就任年月）	申請に係る大学等の職務に従事する週当たり平均日数
161	兼担	准教授	ﾏﾂｼﾏ ｱﾔﾐ 松島　綾美 ＜平成30年4月＞		博士（理学）		身の回りの化学	1前①～②	1	1	九州大学理学研究院准教授 (H17.2)	
162	兼担	准教授	ﾐｽﾞﾉ ﾀﾞｲｽｹ 水野　大介 ＜平成30年4月＞		博士（工学）		身の回りの物理学Ｂ	1前①・後④	1	2	九州大学理学研究院准教授 (H23.4)	
163	兼担	准教授	ｲｼﾊﾞｼ ｼﾞｭﾝｲﾁﾛｳ 石橋　純一郎 ＜平成30年4月＞		理学博士		水の科学	1後③	2	1	九州大学理学研究院准教授 (H10.11)	
164	兼担	准教授	ｺﾝﾉ ﾀｸﾔ 今野　拓也 ＜平成30年4月＞		数理科学博士		線形代数	1前①～②	1.5	1	九州大学数理学研究院准教授 (H7.7)	
165	兼担	准教授	ｳｴﾀﾞ ﾖｼﾐﾁ 植田　好道 ＜平成30年4月＞		博士（数理学）		微分積分学・同演習Ａ 微分積分学・同演習Ｂ 数学演習ＩＢ	1前①～② 1後③～④ 1後③～④	1.5 1.5 1	1 1 1	九州大学数理学研究院准教授 (H14.4)	
166	兼担	准教授	ﾏｽﾀﾞ ﾄｼﾋｺ 増田　俊彦 ＜平成30年4月＞		博士（数理科学）		微分積分学・同演習Ⅱ	1後③～④	1.5	1	九州大学数理学研究院准教授 (H16.4)	
167	兼担	准教授	ﾋｶﾐ ｶｽﾞﾋﾛ 樋上　和弘 ＜平成30年4月＞		博士（理学）		数学演習Ⅱ	2前①～②	1	1	九州大学数理学研究院准教授 (H23.4)	
168	兼担	准教授	ｶｲﾇﾏ ﾓﾁﾌﾞﾛｳ 貝沼　茂三郎 ＜平成30年4月＞		博士（医学）		漢方医薬学	3前①～②	1	1	九州大学医学研究院准教授 (H19.4)	
169	兼担	准教授	ﾀｶﾊｼ ｱｷﾋｺ 高橋　昭彦 ＜平成30年4月＞		工学博士		電気電子工学入門	2前①～②	2	1	九州大学医学研究院准教授 (H7.4)	
170	兼担	准教授	ﾉｳﾄﾐ ｱｷﾋﾛ 納冨　昭弘 ＜平成30年4月＞		博士（工学）		原子核物理学	2後③～④	2	1	九州大学医学研究院准教授 (H23.3)	
171	兼担	准教授	ｲｼｲ ﾕｳｼﾞ 石井　祐次 ＜平成30年4月＞		博士（薬学）		社会と健康	3前①～②	2	1	九州大学薬学研究院准教授 (H20.4)	
172	兼担	准教授	ｼﾏｿﾞｴ ﾀｶｵ 島添　隆雄 ＜平成30年4月＞		薬学博士		医療における倫理 チーム医療演習 薬害	2前①～② 3後③～④ 3後③～④	2 1 1	1 1 1	九州大学薬学研究院准教授 (H7.4)	
173	兼担	准教授	ﾉﾀﾞ ﾏﾐ 野田　百美 ＜平成30年4月＞		医学博士		病態生理	3前①	1	1	九州大学薬学研究院准教授 (H20.4)	
174	兼担	准教授	ﾔｽﾀﾞ ｶｽﾞﾋﾛ 安田　和弘 ＜平成30年4月＞		博士（工学）		基幹物理学ＩＡ演習	1前①～②	1	1	九州大学工学研究院准教授 (H5.4)	
175	兼担	准教授	ｵｷﾍﾞ ﾅｵｺ 沖部　奈緒子 ＜平成30年4月＞		Doctor of Philosophy in Enviornmental Microbiology（英国）		基礎生物学概要	1前①～②	1.5	1	九州大学工学研究院准教授 (H23.1)	
176	兼担	准教授	ｶﾔﾏ ｷﾖﾉﾌﾞ 笠間　清伸 ＜平成30年4月＞		博士（工学）		自然災害と防災	2後③～④	2	1	九州大学工学研究院准教授 (H11.4)	
177	兼担	准教授	ｾｲﾉ ｻﾄｺ 清野　聡子 ＜平成30年4月＞		博士（工学）		環境保全・再生 環境ガバナンス　※	3後③ 3前②	1 1	1 1	九州大学工学研究院准教授 (H22.2)	
178	兼担	准教授	ｷﾑﾗ ﾊｼﾞﾒ 木村　元 ＜平成30年4月＞		博士（工学）		空間表現実習Ⅰ	1前①～②	2	1	九州大学工学研究院准教授 (H16.4)	
179	兼担	准教授	ｳｴｵｶ ﾘｮｳｺ 上岡　玲子 ＜平成30年4月＞		博士（工学）		デザイン思考プログラミング演習 デザイン思考プロセス演習	2後③・3前① 2後③・3前①	1 1	2 2	芸術工学研究院准教授 （H24.4.1）	
180	兼担	准教授	ｳｼｼﾞﾏ ﾀｹﾄｼ 牛尼　剛聡 ＜平成30年4月＞		博士（工学）		サイバー空間デザイン	2前①～②	2	1	九州大学芸術工学研究院准教授 (H15.10)	

別記様式第３号（その２の１）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

調書番号	専任等区分	職位	フリガナ 氏名 ＜就任(予定)年月＞	開設時の年齢 (H30.4.1)	保有学位等	開設時の月額基本給（千円）	担当授業科目の名称	配当年次	担当単位数	年間開講数	現職 （就任年月）	申請に係る大学等の職務に従事する週当たり平均日数
181	兼担	准教授	ｼﾞﾖｳ ｶｽﾞﾋﾛ 城　一裕 ＜平成30年4月＞		博士（芸術工学）		音楽・音響論	2後③～④	2	1	九州大学芸術工学研究院准教授 (H28.3)	
182	兼担	准教授	ﾀｹﾉｳﾁ ｶｽﾞｷ 竹之内　和樹 ＜平成30年4月＞		工学博士		図形科学	1前①～②	1.5	1	九州大学芸術工学研究院准教授 (H15.10)	
183	兼担	准教授	ｵｶﾞﾀ ﾖｼﾄ 尾方　義人 ＜平成30年4月＞		博士（工学）		デザインと観察	2前①～②	2	1	九州大学芸術工学研究院准教授 (H20.4)	
184	兼担	准教授	ﾎｰﾙ ﾏｲｹﾙ ＨＡＬＬ　ＭＩＣＨＡＥＬ ＜平成30年4月＞		博士（芸術工学）		Intensive English: Global Issues RW 1 Intensive English: Global Issues RW 2 Intensive English: Japanese Issues 1 Intensive English: Japanese Issues 2	1前① 1前② 1後③ 1後④	1 1 1 1	1 1 1 1	九州大学芸術工学研究院准教授 (H18.4.1)	
185	兼担	准教授	ｲｹﾀﾞ ﾀﾞｲｽｹ 池田　大輔 ＜平成30年4月＞		博士（理学）		プログラミング演習	1後③～④	1	1	九州大学システム情報科学研究院准教授 (H9.4)	
186	兼担	准教授	ﾔｽﾀｹ ﾀﾞｲｽｹ 安武　大輔 ＜平成30年4月＞		博士（農学）		農のための植物-環境系輸送現象論	1後③	1	1	九州大学農学研究院准教授 (H27.4)	
187	兼担	准教授	ｵｷﾞﾉ ﾕｷｺ 荻野　由紀子 ＜平成30年4月＞		博士（水産学）		進化生物学	3前①	1	1	九州大学農学研究院准教授 (H28.4)	
188	兼担	准教授	ｶｻﾊﾗ ﾀﾏｵ 笠原　玉青 ＜平成30年4月＞		博士（自然地理学）		流域環境学	3前①	1	1	九州大学農学研究院准教授 (H23.9)	
189	兼担	准教授	ﾊﾗﾀﾞ ﾏｻﾖｼ 原田　昌佳 ＜平成30年4月＞		博士（農学）		糸島の水と土と緑Ⅰ 糸島の水と土と緑Ⅱ	1前① 1前②	1 1	1 1	九州大学農学研究院准教授 (H17.12)	
190	兼担	准教授	ｶﾐﾀﾆ ｻﾄｼ 紙谷　聡志 ＜平成30年4月＞		博士（農学）		集団生物学	1前①～②	1.5	1	九州大学農学研究院准教授 (H7.5)	
191	兼担	准教授	ｳｴﾉ ﾀｶﾄｼ 上野　高敏 ＜平成30年4月＞		農学博士		生態系の構造と機能Ⅰ 生態系の構造と機能Ⅱ	2後③ 2後④	1 1	1 1	九州大学農学研究院准教授 (H8.11)	
192	兼担	准教授	ﾀﾂﾐ ﾘｭｳｲﾁ 辰巳　隆一 ＜平成30年4月＞		博士（農学）		食肉加工の理論と実践 -食への理解を深める-	1後③～④	2	1	九州大学農学研究院准教授 (H13.10)	
193	兼担	准教授	ｵｻﾞｷ ﾕｷｵ 尾崎　行生 ＜平成30年4月＞		博士（農学）		体験的農業生産学入門	1後③～④	1	1	九州大学農学研究院准教授 (H5.4)	
194	兼担	准教授	ｷﾀﾞ ｼﾝｲﾁﾛｳ 木田　新一郎 ＜平成30年4月＞		Doctor of Philosophy(Physical Oceanography)		大気海洋科学	3前②	1	1	九州大学応用力学研究所准教授 (H28.4)	
195	兼担	准教授	ﾐﾔﾜｷ ｼﾞﾝ 宮脇　仁 ＜平成30年4月＞		博士（理学）		分子の科学	1後③～④	2	1	九州大学先導物質化学研究所准教授 (H20.2)	
196	兼担	准教授	ｻｲﾄｳ ﾉﾌﾞﾋﾛ 斉藤　信浩 ＜平成30年4月＞		博士（文学）		Integrated Courses : Intermediate 1A Integrated Courses : Intermediate 1B Integrated Courses : Intermediate 2A Integrated Courses : Intermediate 2B Integrated Courses : Pre-Advanced A Integrated Courses : Pre-Advanced B Integrated Courses : AdvancedA Integrated Courses : Advanced B Kanji Courses : Elementary 1A Kanji Courses : Elementary 1B	1・2前①・後③ 1・2前②・後④ 1・2前①・後③ 1・2前②・後④ 1・2前①・後③ 1・2前②・後④ 1・2前①・後③ 1・2前②・後④ 1・2前①・後③ 1・2前②・後④	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	2 2 2 2 2 2 2 2 2 2	九州大学留学生センター准教授 (H23.4)	
197	兼担	准教授	ﾐﾔﾁ ﾋﾃﾞﾄｼ 宮地　英敏 ＜平成30年4月＞		博士（経済学）		経済史入門	1前①～②・後③～④	2	2	九州大学記録資料館（経済）准教授 (H18.4)	
198	兼担	准教授	ｲｶﾞﾗｼ ｼﾝｺﾞ 五十嵐　伸吾 ＜平成30年4月＞		修士(経営学)		アイデア・ラボⅠ アントレプレナーシップ入門	1前① 1前①・後③	2 2	1 2	九州大学ﾛﾊﾞｰﾄ・ﾌｧﾝ/ｱﾝﾄﾚﾌﾟﾚﾅｰｼｯﾌﾟｾﾝﾀｰ准教授 (H17.3)	
199	兼担	准教授	ｺﾊﾞﾔｼ ﾄｼﾔ 小林　俊哉 ＜平成30年4月＞		修士（学術）		科学技術社会論	2後④・3前②	1	2	九州大学科学技術イノベーション政策教育研究センター准教授 (H24.4)	

別記様式第３号（その２の１）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

調書番号	専任等区分	職位	フリガナ 氏名 ＜就任(予定)年月＞	開設時の年齢 (H30.4.1)	保有学位等	開設時の月額基本給（千円）	担当授業科目の名称	配当年次	担当単位数	年間開講数	現職 （就任年月）	申請に係る大学等の職務に従事する週当たり平均日数
200	兼担	准教授	ﾋｬｸﾑﾗ ｷﾐﾋｺ 百村　帝彦 ＜平成30年4月＞		博士（農学）		地域生態論	3前②	1	2	九州大学熱帯農学研究センター准教授 (H23.4)	
201	兼担	講師	ﾀｶﾔﾅｷﾞ ｼｹﾞﾐ 高柳　茂美 ＜平成30年4月＞		文学修士		基幹教育セミナー 健康・スポーツ科学演習	1前② 1前①～②	1 1	1 1	九州大学基幹教育院講師 (H1.4)	
202	兼担	講師	ﾌﾅｳｸ ﾌﾐｶ 舩津　文香 ＜平成30年4月＞		博士（心理学）		基幹教育セミナー	1前②	1	1	九州大学基幹教育院講師 (H28.4)	
203	兼担	講師	ﾀｷﾀ ﾏｻﾋﾛ 田北　雅裕 ＜平成30年4月＞		修士（芸術工学）		メディアとコミュニケーション	3前①	1	1	九州大学人間環境学研究院講師 (H21.4)	
204	兼担	講師	ﾖｼｶﾜ ｱｷﾏｻ 吉川　顕正 ＜平成30年4月＞		博士（理学）		基幹物理学ＩＢ演習 宇宙科学概論	1後③～④ 2前①～②	1 1.5	1 1	九州大学理学研究院講師 (H8.5)	
205	兼担	講師	ﾏﾙﾔﾏ ﾏｻﾐ 丸山　マサ美 ＜平成30年4月＞		博士（医学）		医療倫理学Ⅰ 医療倫理学Ⅱ	1後③ 1後④	1 1	1 1	九州大学医学研究院講師 (H9.4)	
206	兼担	講師	ｷｸｶﾜ ﾏｺﾄ 菊川　誠 ＜平成30年4月＞		Master of Medical Education		インフォームドコンセント	3前①～②	1	1	九州大学医学研究院講師 (H22.12)	
207	兼担	講師	ﾜｷｻｶ ﾏｻｺ 脇坂　真彩子 ＜平成30年4月＞		博士（文学）		Integrated Courses：Elementary 2A Integrated Courses：Elementary 2B Integrated Courses：Pre-Intermediate A Integrated Courses：Pre-Intermediate B Spreaking Courses：Elementary 2A Spreaking Courses：Elementary 2B Speaking Courses：Pre-Intermediate A Speaking Courses：Pre-Intermediate B Speaking Courses：Intermediate 1A Speaking Courses：Intermediate 1B	1・2前①・後③ 1・2前②・後④ 1・2前①・後③ 1・2前②・後④ 1・2前①・後③ 1・2前②・後④ 1・2前①・後③ 1・2前②・後④ 1・2前①・後③ 1・2前②・後④	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	2 2 2 2 2 2 2 2 2 2	九州大学留学生センター講師 (H26.9)	
208	兼担	助教	ｲﾏｲ ﾖｳｽｹ 今井　洋輔 ＜平成30年4月＞		博士（理学）		基幹教育セミナー	1前②	1	1	九州大学基幹教育院助教 (H26.4)	
209	兼担	助教	ｻｺﾞｳ ﾉﾘﾁｶ 佐合　紀親 ＜平成30年4月＞		博士（理学）		基幹教育セミナー 自然科学総合実験　（基礎） 自然科学総合実験　（発展）	1前② 1前①～② 1前①～②	1 1 1	1 1 1	九州大学基幹教育院助教 (H24.4)	
210	兼担	助教	ｵﾀﾞ ｼﾝｼﾞ 小田　真二 ＜平成30年4月＞		博士（心理学）		基幹教育セミナー	1前②	1	1	九州大学基幹教育院助教 (H26.1)	
211	兼担	助教	ﾏﾂﾊﾞﾔｼ ｹｲ 松林　圭 ＜平成30年4月＞		博士（理学）		基幹教育セミナー	1前②	1	1	九州大学基幹教育院助教 (H27.10)	
212	兼担	助教	ｽﾔﾏ ｹｲﾀﾛｳ 巣山　慶太郎 ＜平成30年4月＞		博士（理学）		基幹教育セミナー	1前②	1	1	九州大学基幹教育院助教 (H25.4)	
213	兼担	助教	ｵｵｲ ﾀｴｺ 大井　妙子 ＜平成30年4月＞		博士（心理学）		基幹教育セミナー	1前②	1	1	九州大学基幹教育院助教 (H28.4)	
214	兼担	助教	ｵｵｸﾎﾞ ﾌﾐﾔ 大久保　文哉 ＜平成30年4月＞		博士（理学）		基幹教育セミナー 情報科学	1前② 1後③～④	1 1.5	1 1	九州大学基幹教育院助教 (H26.4)	
215	兼担	助教	ﾅｶｻﾞﾄ ｹﾝｲﾁﾛｳ 中里　健一郎 ＜平成30年4月＞		博士（理学）		基幹教育セミナー	1前②	1	1	九州大学基幹教育院助教 (H27.10)	
216	兼担	助教	ｷｼﾞﾏ ﾀｶｼ 木島　孝之 ＜平成30年4月＞		博士（工学）		日本建築史	2前②	2	1	九州大学人間環境学研究院助教 (H10.4)	
217	兼担	助教	ｸﾗﾀｶ ｹﾝｻｸ 倉方　健作 ＜平成30年4月＞		博士（文学）		フランス語Ⅰ フランス語Ⅱ	1前①～② 1後③～④	2 2	1 1	九州大学言語文化研究院助教 (H27.4)	
218	兼担	助教	ﾜﾀﾅﾍﾞ ｽﾐｺ 渡邊　壽美子 ＜平成30年4月＞		博士（医学）		科学の進歩と女性科学者Ⅰ 科学の進歩と女性科学者Ⅱ	1後③ 1後④	1 1	1 1	九州大学医学研究院助教 (H17.4)	

別記様式第３号（その２の１）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

調書番号	専任等区分	職位	フリガナ 氏名 ＜就任(予定)年月＞	開設時の年齢 (H30.4.1)	保有学位等	開設時の月額基本給 （千円）	担当授業科目の名称	配当年次	担当単位数	年間開講数	現職 （就任年月）	申請に係る大学等の職務に従事する週当たり平均日数
219	兼担	助教	ｲﾅﾑﾗ　ﾄｸｼｭｳ 稲村　徳州 ＜平成30年4月＞		修士（デザイン学・工学）		デザイン思考プロセス演習	2後③・3前①	1	2	芸術工学研究院助教 （H28.6.1）	
220	兼担	助教	ﾅｶﾉ　ﾕﾀｶ 中野　豊 ＜平成30年4月＞		修士（農学）		命のあり方・尊さと食の連関	1前①～②	2	1	九州大学農学研究院助教 (H4.4)	
221	兼任	講師	ﾍﾟｲﾝﾀｰ ｱﾝﾄﾞﾘｭｰ ＰＡＩＮＴＥＲ　ＡＮＤＲＥＷ　ＡＬＬＥＮ ＜平成30年4月＞		博士（人類学）アメリカ合衆国		Intensive English: Global Issues RW 1 Intensive English: Global Issues RW 2 Intensive English: Global Issues LS 1 Intensive English: Global Issues LS 2	1前① 1前② 1前① 1前②	1 1 1 1	1 1 1 1	九州大学言語文化研究院准教授 (H25.4)	

別記様式第３号（その３）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

専任教員の年齢構成・学位保有状況

職　位	学　位	29 歳 以 下	30 ～ 39 歳	40 ～ 49 歳	50 ～ 59 歳	60 ～ 64 歳	65 ～ 69 歳	70 歳 以 上	合　計	備　考
教　授	博　士	人	人	人	12 人	6 人	人	人	18 人	
	修　士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	学　士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	短期大学士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	その他	人	人	人	人	人	人	人	人	
准教授	博　士	人	1 人	9 人	6 人	2 人	人	人	18 人	
	修　士	人	人	人	1 人	人	人	人	1 人	
	学　士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	短期大学士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	その他	人	人	人	人	人	人	人	人	
講　師	博　士	人	2 人	3 人	人	人	人	人	5 人	
	修　士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	学　士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	短期大学士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	その他	人	人	人	人	人	人	人	人	
助　教	博　士	人	1 人	3 人	人	人	人	人	4 人	
	修　士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	学　士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	短期大学士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	その他	人	人	人	人	人	人	人	人	
合　計	博　士	人	4 人	15 人	18 人	8 人	人	人	45 人	
	修　士	人	人	人	1 人	人	人	人	1 人	
	学　士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	短期大学士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	その他	人	人	人	人	人	人	人	人	